

Kornai János
A GONDOLKODÁS
EREJÉVEL
Rendbagyó önéletrajz



コルナイ・ ヤーバンジュ自伝

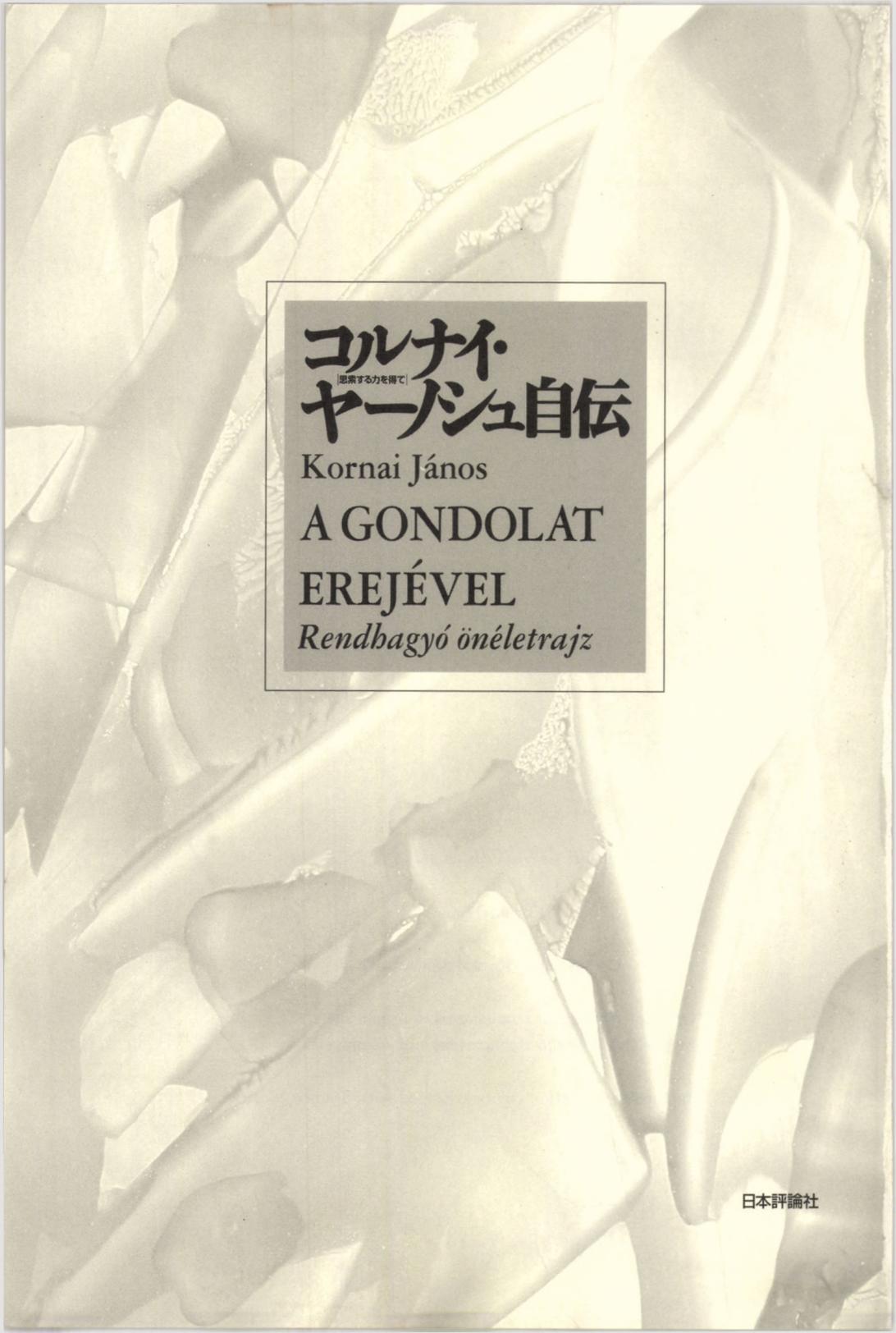
「思索する力を得て」

Kornai János [著] / Morita Tsuneo
盛田常夫 [訳]

日本評論社

●表紙カバーの写真●

「シャーマンと若者」。メキシコで発見されたB.C.15世紀の塑像。
プリンストン大学美術館所蔵。



コルナイ
思索する力を得て
ヤーバシュ自伝

Kornai János

A GONDOLAT

EREJÉVEL

Rendbogyó önéletrajz

A GONDOLAT EREJÉVEL: Rendhagyó önéletrajz

by

Kornai János

Copyright © Kornai János 2005

Original Hungarian language edition published
by the Osiris Kiadó Publications Ltd., Budapest.

Japanese translation rights arranged with Tsuneo Morita

著者前書き

自伝を書き上げて、何度も自問した。いったい、何の為に書くのだろうか。何が記憶を呼び起こそうとしているのか。誰にこの書き物を読ませようとしているのか。

人付き合いが良いほうではないし、どちらかと言えば内に籠もる方で、自分の人生についてほとんど語ったことはない。知人の記者が体制転換の真っ只中に、私の辿って来た道について長時間のインタビューをしたいと提案してきた。時が経てば誰もそんなことに興味をもたなくなるから、と説得した。それから一五年の歳月が経過した。それでも遅くないことを祈りたい。事あるたびに、妻は自伝を書くように勧めた。ほとんど毎年この課題を聞いて過ごしてきた。ようやく、書き始めようという気持ちになった。二〇〇三年の半ばからすべての力と時間をこのために集中してきた。だから、後回しできない仕事以外は、すべて先延ばしにしてきた。

妻がこれほど私の自伝にこだわること自体が、十分に大きなインセンティブになった。この書物を捧げる読者がいるとすれ

ば、そしてまた書物の内容に満足してもらいたい読者がいるとすれば、それは妻のジュジャである。

私の子供や孫、他の家族の仲間、友人、新旧の同僚たち、教え子、そして私の論文や書物の読者など、これまで私の人生と関わりのある人々が、私の自伝に興味を抱いてくれるものと期待している。この仲間の輪はけっして小さくない。私の講義を聴いたり書物を読んだりしたことのある人々が本書を一冊手にすれば、出版社も満足することだろう。

個人的な関係や仕事を通して私と関わってきた人々は、私についての印象を持つていよう。そのそれぞれの主観的なイメージに加えて、もうひとつ（これも同じく主観的な）私が描いた自分自身のイメージを加えていただきたい。私の書物に寄せられた批評は数百に上る。本書では、自分の評価にもとづいて、それらの批評に応えたい。それぞれの著作が出来上がった時に、私自身が自分の著作をどう見ていたか、そして回顧録を書いている今、それをどう評価しているかを述べてみたい。これまで

各種の批評に一切、返答してこなかった。批判的見解に出会っても、論争に持ち込むことは稀だった。しかし、今回は、一度だけ例外として、自分自身の作品に対して、回顧録の枠内で「批評」を加えてみたい。

自伝は時間経過に沿って進んでいくが、もちろん出来事の順序は時間的厳密さを保っていない。日記ではないのだから。それぞれの章はひとつのテーマにまとめてあり、人生の始まりの出来事であったり、仕事であったり、人生の一場面であったりする。章のタイトルには、関係する歳月を記した。章を辿って行けば分かるように、それぞれの対象歳月は順に進むようになっていくが、テーマによっては重なり合うところもある。

本書を手にする読者の中には、私の著作を読んだことがない、あるいは私と出会ったことはないが、しかし私が生きた時代がどのようなものであったかに関心のある人もいるだろう。前もって断っておけば、私はこれらの人々を落胆させたくない。ラーコシ時代、一九五六年ハンガリー革命あるいはカーダール体制を知りたい人は、それらに関する豊富な文献に当たることが必要だ。本書はこれらの歴史問題を紐解こうとするものではない。だから、それらの研究のためにどんな資料に当たるべきかという情報を、私が読者に与えることはできない。私はこれらの時代を生きてきたが、その主役を演じたわけではない。これらの時代について私が披露できる、また披露したいことは、私

自身の人生に関連して生じた事柄だけである。語り伝えることができるのは、私の人生の諸事件が展開した社会的歴史的場面である。

東欧、共産主義体制とその崩壊、東欧知識人の迷路与彷徨、経済学研究の道程、その他の包括的なテーマに関心がある人々にとつて、本書の巻末付録が「補足的」な価値を持つだろう。

これから研究の道に進もうとしている人々には、さまざまな証言が不可欠な資料になるだろう。それらは時代を生き抜いてきた人々の人生と経験についての率直な告白なのだから。すでに多くの人が証言してきた。私も本書によって、その証人の列に加わりたい。実際問題として、学問的な厳密性で仕上げた初期の作品も、私自身の証言だと考えている。すでに消滅した時代の情報でもあるからだ。書き上げた当時は、もちろん可能な限り、客観的であることに努めた。しかし、本書では主観的な評価でこれを補足したい。「不足」や『社会主義システム』の二つの著書では、個人的な判断や断言することが憚られた見解が抜け落ちている。本書ではその落ちこぼれたものを拾い上げたい。自伝という書物は、倫理・政治・学問に関連する普遍的な諸問題について、個人的なドクトリンの披露を可能にする。テーマが限定された学問的研究では、このような一般的な見解や信念を含めることはできないからだ。

本書のタイトルをどうすべきか、何度も考えた。初めは、

「理解する……」としたかった。何よりもまず、自分自身を理解しようとしたからだ。何時、何を考え、何故、何が思考と行動に影響を与え、何から自分が変わってきたのかを説明したい。私の見解に同意した人と同意しなかった人、私の側に立った人と私と対峙した人、それぞれを理解したい。

ハンガリー語のみならず、他の言語でも、「理解」という言葉には、ある種の倫理的な同意、あるいは最低限の免罪の響きがある。いろいろな音声でこの言葉を発してみると、「理解し（分かり）ました」という言葉が持つ免罪的響きを感じるだろう。しかし、これは私の意図するところではない。免罪も自信過剰も、私の立場からはほど遠い。これまで研究成果を発表する際には、研究対象を理解することに努めた。本書でもその姿勢は変わらない。人を動かしたり、諸対立の明示的原因や暗示的原因を引き起こしたりするような諸行動の動因、思考の陥穽、深く隠れた諸力を解き明かすことは非常に難しい。自分の過去を検討する課題も簡単ではなかったが、他人のそれを分析することはもっと難しかった。

最終的に、別のタイトルを選んだ。それが「思索の力を得て」だ。この言葉が私の回顧録の重要なメッセージのひとつを、もつともうまく要約していると思う。私はこれまで、権力を望んだことも、富を望んだこともない。事件の成り行きに何がしかの力を発揮できたことがあれば、それは高い地位から部

下に命令できたからでも、またお金を払って協力関係を買収できたからでもない。私が誰かに何らかの影響を与えたことがあるとしたら、それは言葉で発せられたか、印刷された私の思索によって獲得されたものだ。

本書の草稿を読んだ一人は疑問を呈した。「議論や説得や思想が影響を与えると考えるのはナイーヴすぎる。歴史的事件の真の動因は、利害関心だ」。社会変動を観察する専門家や分析家がそうであるように、私も幻想を抱いていない。だから、種々の因果的効果を適切に扱うことに気を配った。いつの時代でも、権力と富の所有者は、可能な代替策を選択する行動人間である。多くの要因が彼らを動かしているだろう。その要因の中で、価値観や理想、思想が占める位置は小さいとは思われない。さらに、権力も富も持たない多数の人々が何を考え、何を信じているかも、事象の展開に影響を及ぼすだろう。もし思想に何の力もないとすれば、私の生涯の仕事は意味を失ってしまう。

もちろん、この力は限界にぶつかる。だからこそ、まさにここに回顧録の主要なテーマがあるのだ。何時どのようにして思考が崩れ去り、そして再びどのようにして再生されるのか、他人の思考が私にどのような影響を与えるのか、どうして私の思考・分析・提案が他の人のそれと対立するのか。思想は常に検証に晒されている。本書のすべての章はその検証の繰り返しで

あり、その成功と失敗の報告でもある。

サブタイトルとして、本書を「型破りの自伝」と名付けた。本書は二つの特徴において、通常のメモワールと異なっているからである。人生の諸事件を語る時に、時として立ち止まり、それぞれのエピソードに纏わる私の思考を表現している。このような場合、事件を語ることに第一義的な意味があるのではなく、その状況や問題を分析することに意味がある。このような議論の仕方は、社会科学、倫理学、研究・創造過程、心理学などのテーマにかかわる諸問題と結び付いており、いわば「ミニ・エッセイ集」のようなものだ。だから、本書をメモワールとエッセイ集が合体したものとみなすことができよう。

ほとんどの回顧録は著者の私生活を扱っている。もちろん、私の自伝も、個人的で主観的な視点からの報告であるが、基本的には知的生活の自伝を書いたつもりである。その意味するところは幅広く解釈されて良い。人生の政治的・公的・その他の社会的特質や、知的生活習慣に関係する友人やその他の人間関係を含んでいる。親戚や家族の事件についても、いろいろな箇所でも触れている。この部分では多くの幸福や不幸を扱っているが、現実生活で占めていたウエイトに比例するほど多くの紙幅をとっていない。本書で公開された写真は、言葉で表現されなかった人生部分を垣間見る役割をもっているだろう。本書は、狭義の意味での私的問題をほとんど扱っていない。その意味で

も、「型破り」と言えると思う。本書の末尾になって、私がどこに境界線を引こうとしたかが明らかになるだろう。

本書の「作品」と「スタイル」について、付言しておかなければならない。五〇年にわたる時間の分析を行ったわけだが、私が理解したことを論じることで、追跡可能で普遍化できる思考に仕上げることに努めた。俄作家になるつもりはない。私の叙述から、素晴らしい背景描写、生き生きとした会話、知人の外形描写、何か緊張が走った瞬間の場を感じさせる手法などを期待してはならない。中途半端な作家がそれをやれば、読者には悪い読後感しか残らないだろう。それなら、慣れた手法で、慣れた用語とスタイルでやった方が良いと判断した。作家は、意図的に、問題を未解決のままにしておくか、不透明にしておく。思考を「漂わせる」のだ。それは良い。しかし、学問研究ではこうは行かない。メモワールを書く時でも、私は研究者であり続けている。スタイル、構成、概念化では、不明瞭さを避けることに努めている。

これまでの叙述では、読者対象を決めるのは簡単だった。読者が分かっていたら、何を説明し、何を前提できるかは明瞭だった。しかし、今回は勝手が違った。経済学者や他の専門研究者、年配者と若者、ハンガリー人と外国人、「東の人々」と「西の人々」が、本書を手にするものと期待している。だから、誰もが私の記述を理解できるように努めた。まだ私の著作を読

んだことのない人には、この自伝は私の書物や論文の「触り」を与えることになろう。他方、すでに読者である人々には、記憶を新たにする手助けになろう。私の叙述が細部に冗長だと感じられる読者には、前もってお詫びし、理解を願う次第である。この点について、さらに説明が必要な読者もいると思う。

自明なことであるが、本書の叙述の源泉は自分自身の記憶である。これ以外に依拠しないように努めた。もちろん、記憶テストをしようと考えたわけではなく、記憶を新たにしようとする。とはいえ、自らの思想や思考だけでなく、実際に起きた諸事件や公開された情報も取り上げた。この事実関係については、可能な限り、慎重に取り扱ったつもりだが、それでもなお、正確な情報が残っているかもしれない。それらについては、最初の改訂版で訂正させていただきたい。

多種類の資料が利用できた。既述したように、本書ではもちろん重要だと考える研究^{*}に立ち戻っている。いったん印刷されてしまった作品を、何度も読み返すことはしない。今回はこれを順に再読し、それらに寄せられた批評と反響を読み返した。

* どのような研究を重視しているかは、目次から読み取ることができ。研究の詳細を扱っている章では、サブタイトルとして、対象とした書物の書名を使っている。

私は日記を付けたことがない。けれども、研究を職業にするようになってからは、研究過程で多くのメモを作成し、種々の書類を整理している。これらの書類は一瞥できるように数百のファイルに、カテゴリーに分けて保管されている。私宛に送られた手紙や、私が書いた手紙のコピーもかなりの部分を占めている。今少し、この多岐にわたる書類に目を配ってみたい。

私自身の収集文書庫を補足するのは、公文書館の資料だ。同僚と一緒に検索したのだが、非常に興味深い資料に出会った。とくに気持ちが高ぶったのは、当時の秘密警察の資料を閲覧した時だった。ハンガリーの新しい法律によって、国民は自分に関係する資料を手にすることができるようになった。諜報部員の報告、政治的な訴追のために準備された警察の捜査資料、国家保安局係官のメモを読むことは、憂鬱でもありショッキングでもあった。本書では私に係わる政治警察と諜報機関の文書を公開した。

読者を威嚇するつもりは毛頭ない。本書が私の記憶だけでなく、数多くの文書の調査にも依存していることを、読者に予め断っておきたいのだ。本書で扱っている資料調査はたんにそれを周知することが目的でなく、記憶の加工という意味を持っている。いわば長期の精神的彷徨に焦点を当てたもので、光と影、興奮と落胆の諸事件が継起する報告書である。読者が本書を読

み進めるにしたがい、私が生きた時代や私の仕事、そして私の人生をより良く理解されることを期待している。

本書の読解を助ける付録と注について説明しておく。巻末には参考文献が付されている。これは本書で触れた出版物をリスト化したもので、本書に関連する包括的なビブリオグラフィではない。ハンガリー語で出版されたものは、ハンガリー語のビブリオ・データになっている。版を重ねた書物の場合は、最新のものも掲示したが、括弧で初版の出版年を記した。

本書には二種類の注釈を付した。ひとつは本文中に付した注で、もうひとつは巻末にまとめた補注である。本文注にはアステリスクを、補注には通し番号を付した。

二種類の注釈を付すのは一般的ではないが、読者の便宜を考えてこのようにした。本書は文学作品でも、学問的な著作でもなく、いわばその「中間作品」である。その性格から、このような注の取り扱いをおこなった。

本文注に置かれた文言は、本文に組み込まれてしかるべきものだが、それぞれが本文の思考の流れから外れた事柄になるので、このような処理を行っている。したがって、そこには視覚的な事例やデータ、エピソード、アネクドットやジョークなどが披露されている。本文を読まれる読者は、是非、この注釈も読んでいただきたい。

巻末の補注はいわば研究者が「注釈の仕掛け」と名付けている情報を含んでいる。これまで強調してきたように、本書は幅広い資料収集に基づけられている。それが公文書である場合には、公文書の識別パラメータが付されている。

文献注のうち、出版されているものは、参考文献のところにビブリオ・データが掲載されている。本文からどの文献に関連するものが明瞭な場合には、その文献に関する情報を簡単に見つけることができるだろう。しかし、もし本文だけからの文献に関係するのか自明でない場合には、補注が助けになる。補注から関連文献の参照頁が分かるようになってい

る。読者の多くは情報源について、一々詮索しないだろうと思う。だから、読みやすいように、情報源に関する補注を巻末に置いた。もちろん、これを参照するまでもなく、本書を読み進めることができる。

他方、本書で扱った諸問題の研究者がそれぞれの問題をさらに追跡したい場合には、必要なすべての情報を補注から得ることがができる。

本書の叙述を助けてくれた同僚たちに感謝したい。サポー・カタリンは細心の注意を払って、仕事の組織化や文書化を掌握し、何版かにわたる草稿を管理してくれた。歴史家のモルナール・ヤーノシュと経済学博士課程大学院生のイヴァーン・ガイ

ボルは、データと文書の収集、文献と情報の確認、草稿の整理を担当してくれた。

本書の構想や一部の読解を通してコメントしてくれた友人たち、公文書の収集を手伝ってくれた人々、書籍や論文の入手に骨を折ってくれた方々、問題の明瞭化を助けてくれた専門家、さまざまな形で本書の完成を手伝ってくれた人たちに感謝したい。これらの人々を以下に列挙して、感謝の意を表する。

Csankovski Kata, Karen Eggleston, Erdős Hédi, Fazekas Ica, Jerry Green, Gyurgyák János, Karinhz Márton, Kende Péter, Kenedi János, Kovács Mária, Laki Mihály, Lőcsei Pál, Majtényi László, Brian McLean, Négyes Judit, Parti Julia, Richard Quandt, Rainer M. János, Révész Sándor, Gérard Roland, Henry Rosovsky, Sarnyai Éva, Schöner Ágnes, Simonovits András, Susan Suleiman, Sz. Kovács Éva, Varga László.

ここには明示しなかったが、ひとつひとつの質問に答えたり、ひとつひとつの情報を確かめたりして、本書の叙述を助けてくれた人々にも感謝したい。

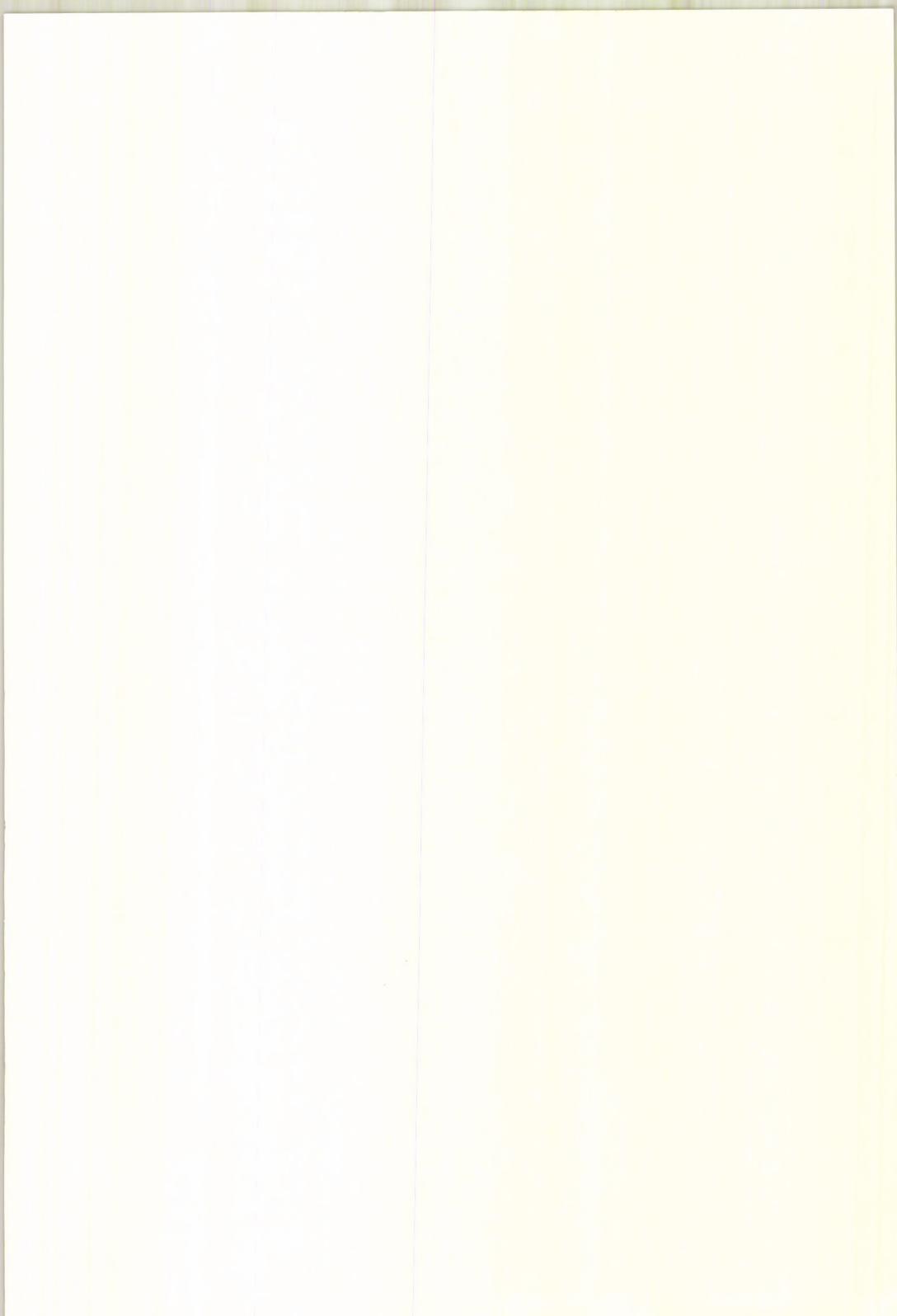
本書にかかわる研究費用は、OTKA (ハンガリー科学研究基金)の補助を利用した(研究番号: T046976)。ハンガリー科学アカデミー付属経済研究所は、OTKA補助金の管理業務を引き受けてくれた。

過去一五年の仕事に対して、また本書の叙述に対して、コレギウム・ブダペストは素晴らしい研究環境と支援を伴った仕事を提供してくれた。

これまで多くの編集者と一緒に仕事をしてきたが、ガール・ルツアのように理解力があり、建設的にかつ注意深い編集者と出会ったのは初めてである。キュルネイ・アニコーは本書の装丁を担当してくれた。彼らとともに、本書の出版に助力してくれた Osiris 出版社の皆さんに、感謝したい。

二〇〇五年二月一〇日 ブダペスト

コルナイ・ヤーノシュ



目次

著者前書き iii

凡例 xviii

第1章 家族、青年時代（一九二八年―一九四四年） 1

父のこと 1 家族のこと 4 ドイツ帝国学校 8

精神の彷徨 9 一九四四年…父の運命 12 一九四四年…私の逃亡 14

第2章 共産主義者になる（一九四五年―一九四七年） 22

共産党への親近度 22 一九四四年トラウマへの反動 24

精神的変革、共産主義者の政治思想の受容 28 カリスマ的な人々 34

共同体への帰属 35 偶然の効果と能力 36

第3章 「自由な人民」編集局時代（一九四七年―一九五五年） 39

急速な昇進 39 ヴォランティア精神 42 編集局の日々 45

実経済から学んだもの 47 知的荒廃 51 倫理的釈明 53

第4章 覚醒の始まり（一九五三年―一九五五年） 55

「新時代」 55 監獄から戻った友人たち 57 啓発的な会話と読書 59

初めての「命令拒否」 62 ナジ・イムレの著書 63

「自由な人民」編集局の反乱 65 「自由な人民」時代の終焉 66

第5章 研究生活の始まり（一九五五年―一九五六年一〇月二三日） 70

——「経済管理の過度集権化」をめぐる

先行事情 70 精神的衝動 72 マルクス政治経済学との決別 77

研究生活の開始 81 論文の主要な命題 85 著書への反応 91

政治的背景 93

第6章 革命とその帰結（一九五六年一〇月二三日―一九五九年） 98

ナジ・イムレの新プログラム 98 「マジヤールの自由」 102

虐げられた日々 105 『経済管理の過度集権化』への批判 106 102

研究所からの追放 110 監獄の影を背負った自由 114 友情と連帯 121

第7章 私の大学（一九五七年―一九五九年） 124

自己研鑽 124 ランゲ・ハイエク論争 126 軽工業の研究 128

「二線を画す」 130 袋小路 132 人生の決断 133

第8章 経済学への数学的手法の適用（一九五七年―一九六八年） 136

——「二水準計画化」をめぐる

リブターク・タマーシユとの出会い 136 利潤分配の数学的検証 138

繊維工業の計画化 141 二水準計画化 144 中央計画化の理想モデル 146

	国民経済計画化の出発的原理	148	コンピューターション	151
	意味有りや?	154	数学者との協働	159
第9章	西側への旅行(一九六三年)	162		
	先行した出来事	162	英国ケンブリッジ	163
	課報部員の報告から	167	旅行と外国出版のメモワール	172
	謀略の失敗	176		
第10章	価格に挑む(一九六七年―一九七〇年)	181		
	——「反均衡」をめぐる			
	出版にいたる経緯	181	著書執筆の動機	183
	一般理論から期待されるもの、期待されないもの	187	類似性への思索	185
	非價格的シグナル	192	均衡、買い手市場、売り手市場	193
	政治的視点から解釈した一般均衡理論	195	科学における改革、革命	196
	最初の反応、長期の影響	197	書いて良かった?	200
	主観的なコメント	202		
第11章	研究所、大学、アカデミー(一九六七年)	204		
	経済科学分野の公的な第一人者	204	何もなかったかのように	205
	信頼と忍耐	207	挫折した研究所改革	212
	禁じられた教育活動——それでも教育した	215		
	アカデミー会員になった事情	217	アカデミー会員の特権	220

第12章 模索と準備（一九七一年―一九七六年） 223

——「強いられた成長」と「非価格シグナルによる制御」をめぐって

強いられた成長か、調和的成長か 224 英国ケンブリッジへの招聘 225

腰までギブス——ケインズとハーシユマン 226 プリンストンでの講義

スタンフォードとワシントン 231 自律的制御 233 きしむ適応機械

新しい住居の完成 239 市場化改革——カルカッタ毛沢東主義者の見解 241 237 228

第13章 全体像の完成（一九七六年―一九八〇年） 243

——「不足」をめぐって

刺激的な環境 243 著書のメッセージ 246 自己検閲 249 校閲 251

最初の反応 253 「不均衡」学派との討論 254

「ソ連正統派経済学者」との討論 256 体制腐食化への貢献 257

出版の政治的・倫理的ディレンマ再論 259

第14章 突破（一九七九年） 263

——「予算制約のソフト化」をめぐって

概念の意味と意義 263 先行事情 265 経験による証明 268

現象の数学モデル化 269 最初の総括論文のこと 271

そして、出来事の教訓 273

第15章 友情溢れる批評と距離を置く批判（一九六八年―一九八九年） 278

——「ハンガリーの改革プロセス…展望・希望・現実」をめぐって

半ば実現し、半ば消滅した希望 278 ナイーヴな改革者から批判的分析家へ

	「何を為すべきかを言う代わりに」	285
	所有権の重要性	290
	ランゲ・モデルとハンガリー改革の現実	292
	回り道・もうひとつのハンガリーの現実	293
	今から回顧してみれば	294
第16章	ハーヴァード（一九八四年・二〇〇二年）	297
	プリンストン高等研究所	297
	ハーヴァード大学教授招聘事情	301
	ケンブリッジへの引越	305
	講義の喜びと難しさ	308
	多様性と寛容	311
	倫理的厳格さ	312
第17章	ハンガリーの内と外（一九八五年）	315
	ハンガリーに繋げるもの	315
	日常生活の比較・ケンブリッジとブダペスト	318
	世界文化のひとつの中心	321
	友人たち	322
	ヨーロッパと世界の経済学者の共同体	327
	中国への旅行	329
	どこが我が家	332
第18章	統合（一九八八年・一九九三年）	336
	——「社会主義システム」をめぐる	336
	著書執筆の経緯	336
	総括を意図する	339
	実証分析と諸価値	342
	一般理論	343
	遅すぎた？ それとも、早すぎた？	345
	東と西からの評価	347
	そして、右と左からの批判	347
	ある不快なエピソード	349
第19章	運命の転換（一九八九年・一九九二年）	351
	——「感情的ピラ」をめぐる	351
	予測の限界	351
	決断	353
	『感情的ピラ』出版の経緯	355

最初の反応	357	スイミュレーションはもう沢山だった	359
民間セクターの健全な発展のために	361	公的資金に対する責任	364
安定化のための手術	365	収支バランス	367
学問と政治の境界領域（一九九〇年）	371		
——模索、苦悩と希望、医療改革をめぐる			
ハンガリーのマクロ経済政策に対する見解	372	医療改革について	376
「質問に来るか、君の意見を聞くか？」	379	実際の効果	383
金融政策決定への参加	385	他国の体制転換	387
ただ持続あるのみ（一九九〇年）	390		
——体制転換が意味するもの、意味しないもの			
体制転換の解釈	390	期待と失望、悲観主義と楽観主義	392
コレギウム・ブダペスト	398	人生のインターメゾ・七〇歳の誕生日	400
ハーヴァード大学・講義と別離	402	我が家のオフィス	407
「何をしている？」	409		
訳者後書き	411		
補注	卷末 35		
参考文献	卷末 19		
付録	写真集 卷末 13		

事項索引 卷末 7
人名索引 卷末 1

目
次

凡例

- 1 ハンガリー人名は、原書の通り、姓名の順で氏名を表記した。
- 2 本文・本文注および補注のハンガリー語資料（論文、著書、公文書）の掲示では、ハンガリー語による表記をそのまま採用しているが、巻末参考文献リストは読者の便宜を考慮して、英語版用に改訂されたものを採用した。
- 3 外来語（英語）のカタカナ表記では、慣用表記ではなく、発音に近い表記を採用している。たとえば、ジレンマはディレンマ、シミュレーションはスイミュレーション、インタビュはインタヴューのように。日本語でも明瞭に区別される「ス」と「シ」、あるいは「ズ」と「ジ」などの音が、慣用表記では識別されることなく、すべて「シ」や「ジ」で表される。慣用表記を採用しないことに違和感を抱かれるかもしれないが、慣用表記は発音に無頓着だった時代の「なまくら表記」の名残であり、日本国外では通用しない発声を表記している。日本人の英語発音を理解不能にしている原因の一つである。本書では英単語の表記は発音に近い表記を行うという方針を可能な限り貫いているが、すでに和製英語になってしまったものについてはその限りではない。

第一章 家族、青年時代（一九二八年―一九四四年）

私はマルセル・ブルーストでもエステル・ハーズイ・ピーテルでもないから、幼年時代の世界や雰囲気をうまく描くことはできないが、ケーキを焼く臭いや両親の声は良く覚えている。しかし、これを作家のように、言葉にして読者に伝えることはできない。

だから、私の作品スタイルを保持し、私の周辺の世界の叙述や分析に努めたい。それに加えて、自分自身にもう一つだけ課したことがある。「七七歳になった頭脳を通して、自分自身を理解し、分析しよう」と。どのようにして、何故に、そのような自分が出来上がり、今の自分が存在するのか。ここでは子供時代、青年時代や家族のことを記しながら、自分自身と時代の双方を理解する二重の課題に就いてみたい。

父のこと

父はコルンハウザー・パール (Dr. Kornhauser Pál) と言った。一九四五年に私の決断でコルナイ (Kornai) と名字変更するまで、私はこの姓を名乗っていた。

祖父コルンハウザー・カーロイは鍵職人で、当時、ハンガリー領に属していたトレンチーン (現スロヴァキア領) に居を構えていた。トレンチーン橋が祖父の仕事場で製作されたことを、父はいつも誇りにしていた。大人になってこの話をする度に、皆、一九世紀のユダヤ人が酒場や商売を営むのではなく、鍵職人だったことに驚いていた。祖父母が他界した時、父はまだ幼かった。兄が面倒を見ることになったが、ほとんど自力でピアリスタの高等学校に通い、弁護士になった。父のいわば *self-made man* とも言える生き様は、私の模範ともなった。ト

レンチーンの中の多くの人々がそうであったように、父もまた三つの母語を話していた。ハンガリー語、ドイツ語、スロヴァキア語である。若くして野心的なキャリアを積むためには、能力があり、かつ勤勉でなければならなかった。ドイツ語の知識と関心は、ハンガリーで営業しているドイツ企業の法律問題へ向かっていた。これらの企業から法律業務の委任を受け、その後、ブダペストのドイツ大使館の法律顧問になった。実際のところこれは名誉職のようなもので、ドイツ国家の職員になったわけではなかった。法律顧問のタイトルが意味するところは、ドイツ企業がハンガリーで契約を締結する、あるいは民事訴訟にあった場合に、大使館が父を紹介するという程度のものであった。父は他の委任業務、たとえば離婚や刑事訴訟、あるいはハンガリー企業の仕事を一切受けず、ドイツ企業のハンガリーにおける経済問題に特化するという姿勢を貫いた。

ブダペストの住居と事務所は、今は閣僚会議の建物になっているアカデミア通りであった。最近になってそこを訪ねる機会があった。今は友人の経済学者が仕事場として使っている部屋が、父の仕事場だった。父の事務所はハンガリー語とドイツ語の法律書でいっぱいだった。父も母も、法律書以外の書籍を集めたことはなかった。文学書は初め姉が、後になって私が家に運ぶようになった。多くの知識人家庭の出身者が家に漂う文学的雰囲気などを語るが、私の家はそうではなかった。

父や姉の会話から分かったのだが、父は若い時分に多くの書物を読み、オペラに足繁く通い、とくにワーグナーには心酔していた。当時、もう少し私が年長であったなら、注意深く観察もできたのだが、今となっては父の趣向の痕跡も残っていない。父の精神的営みは、仕事に集中されていた。

ドイツ大使館の話に戻るが、父が亡くなってかなり過ぎた頃に、父がカールドア（訳注…以後英語表記のカールドアを使う）・ミクローシュという弁護士から法律顧問の仕事を受け継いだという話を母から聞いた。どこかで聞いたことのある名前だった。あの大経済学者で、英国の大蔵大臣顧問になったカールドア卿がこの弁護士の子孫だということが分かった。一度、カールドア卿のケンブリッジ宅を訪問する機会があつて、至極当然に互いの父の話題になった。当時すでに老齢に達していたカールドア卿からは、かつての家族の苛立ちと羨望がほとばしった。老カールドアの仕事を奪った若きコルンハウザーに対して、半世紀前のカールドア邸では激しい怒りが向けられていたようだ。

長兄バンディと姉リリーが幼い頃は、父も良く子供の面倒を見ていた。リリーから父と一緒に散歩やゲームをしたこと、会話の思い出を良く聞かされた。もう一人の兄トミーと私が生まれた時は、いわば第二の子育ての時代で、この頃には子供に接するエネルギーや忍耐を失っていたようだ。実際、私の記憶には、父と過ごした時間や会話の思い出がひとつも残っていない。

この自伝の中で、幾度も、人生の模範はなかったと記しているが、その最初の始まりがここにある。多くの子供がそうであるように、私も父が自分の模範であると考えたし、今でもそう思っているが、知的関心について言えば、私には先生も偉人もいない。賢くて知識のある人ではあったが、考え方や知識、経験を私に伝えることはしなかった。

私は一九二八年一月二日に生を受けた。父は四七歳だった。父が次兄と私に接する機会が少なかったのは、時代の変化の所為でもあった。彼の行動を変えさせたのも大きな環境の変化は、専門の仕事に起こった転機だった。私が五歳に満たない時に、ヒットラーが権力に就いた。他の生活分野と同様に、外国公館の当該地域との関係でも、ヒットラー体制への転換、いわゆる「画一化」(Gleichschaltung) が突然に起きたわけではなかった。しかし、数年の内に、全体主義体制のすべての細胞に、ナチ権力が宿ってしまった。いつからだったから覚えていないが、父は「ドイツ大使館法律顧問」という名称を使わなくなった。この名称が無くなることは、たんに大使館が父をドイツ企業に推薦しないことを意味する。それでも最初のうちはまだ関係は保持されていたが、次第に顧客が減っていった。もちろん、父が亡くなるまで、父との業務関係を維持してくれたドイツ人実業家もいた。

顧客が減れば、所得も減る。父は経済状態について我々に話

したことはなかったが、後から考えると、蓄えた資産で家族を養っていた。我々子供たちはこうした問題を感じることなく過ごした。大きくて高価な市内の住居に住まい、夏になれば薔薇が丘の別荘に引っ越して過ごした。幼少の頃には、我々の傍にはドイツ語を話す子守がいて、家政婦や庭師が家族の面倒を見ていた。父は生命保険の一部を取り崩したり、貴金属や貴重品を売ったりして、所得の減少分を補っていた*。

* 最近になって、生命保険のことを詳細に記した父のメモを入手した。母の面倒を一番気に掛けていたようだ。事前にどんなに細心の注意を払っても、必ず失敗することがある。第一次世界大戦前に結んだ保険契約は、物凄いインフレで無に帰した。これを教訓として、父は一九三〇年代初めに、価額の安定化のためある期日の「金ドル価値」に固定された大きな生命保険契約を、世界でも有数のドイツの保険会社と結んだ。これで一〇〇%確実な保険契約を結んだと考えたのだろう。このベルリンの保険会社のハンガリー支店が、一九四〇年代に共産主義体制によって国有化されるなど、誰が予知できただろうか。価格安定化原理にもとづき「1金ドル11フォリント」の価値で計算した僅かな保険金が母に支払われた。

父は事細かに保険金の遺産分配を指示していた。私も父と似て、同僚や家族に事細かな指示を与える習性がある。関係者の一部はこれに感謝するが、余計なお世話だと拒否する人もいる。この面で父と似ているのはどうだろうか。そのような素振りを見て

(その記憶はないが)、それを模範として模倣したのだろうか。それとも、このような行動様式にも遺伝子プログラムが働いているのだろうか。

専門の仕事から排除されることは、脂の乗りきった時期を迎えていた父にとって、拷問に近いものだったが、これより辛いことは仕事と所得面で生じた変化、それも恐怖を伴う運命的な歴史であった。ユダヤ人狩りのニュースに始まり、アンシュールス (Archluss)、つまりオーストリア併合(父の兄弟の一人はウィーンに居た)、チェコ・モルダヴィア占領、ハンガリーのユダヤ人法が相次ぎ、戦争が始まった。

父はある原則を厳しく守っていた。それはどの政党にも属さず、どの政治的運動にも加わらないということであった。一九一九年のハンガリー革命の悪夢を引きずっていた。にもかかわらず、その思考は、当時、保守的とみなされていたものからは距離をとっていた。父の口からは反左翼的な言辞を聞いたことはなかった。むしろ、*Vizsg* という自由主義の新聞を購読していたし、他の新聞を読むときも、自由主義的なものを選んでいった。話の端々から辿ってみると、自由主義的な思想をもっていたと思う。ただ、政治からは遠ざかっていたという気持ちがあったために、歴史の動きも、最初のうちは、遠い雷鳴としか聞こえていなかった。それが突然に、落雷のように、父と家族

の生活に襲いかかった。

ユダヤ人であることを否定したことはなかったが、それをこっとさら強調することもなかった。社会生活の中にユダヤ人は多かつたし、ユダヤ人でない友人もいた。神を信じてはいたが、信心深くはなく、スイナゴークに通うこともなく、ユダヤの宗教的な戒律を守ることもなかった。寄付は常にユダヤ共同体の孤児院と決まっていた。多分、孤児として育った記憶がそうさせたのだろうか。キリスト教が普及して、同化が進むという考え方には与しなかった。

第一次世界大戦で大佐にまで昇進し、勲章を受けたことが自慢の種だった。何の躊躇ためらいもなく、ハンガリー人と言える人だった。兄のバンデイが兵役を務め、伍長で退役した時には、父は自分と兄に軍服を新調し、記念写真を撮った。大佐と伍長の軍服を身につけた父と息子が誇らしげに写っている。その一、二年後に、父はハンガリーの憲兵によってアウシュヴィッツ行きの貨車に送り込まれ、兄はハンガリー軍の命令によって、ドナ河の労働キャンプに狩り出され、寒さと病で他界した。

家族のこと

父は所得が少なくなつた時期でも、子供たちには寛容だった。物心ついて写真に興味を持つようになると、すぐに一番良い写

真機を買ってくれ、現像や焼き付けに道具が必要になると、すぐにそれも買い揃えてくれた。本の購入が趣味になると、事ある毎に、お金を渡してくれた。とはいえ、家族の温もりの中心はやはり母であった。婚姻前の母の名前は、シャッツ・アランカ (Schatz Aranka) で、ムニョーというニックネームで呼ばれていた。

幼少時代には優しい子守たちがいた。今でも思い浮かべることができ、最後の子守だった素敵なりースルには夢中になった。日課の子守がまだこの *Fraulein* (娘さん) のものだった頃、母は事ある毎に、「優しくね」という表現を何度も使っていた。学校を出ていたわけでも、教養があったわけでもないが、自然な聡明さに溢れていた。繊細で細やかな美しさは自然で、持つて生まれたエレガンスがあった。「大人になった時の自信と野心のほとんどは、幼年時代に母からだれほどの愛情を受けたかにかかっている」と明言したのは、フロイトだったであろうか。私は途方もないほど大きい愛情を受けた。四人の子供の内、悪阻で一番苦しめたのが私だったというのが、母が繰り返し話す事柄のひとつだった。痛みを和らげるために、医者には「今に見てごらん、この子が一番可愛くなるから」と慰めたと、子供の私に何度も聞かせたものだ。四人の子供の中で、私が一番愛しいことを隠そうとしなかった。小さな成功でも心から喜び、褒め称え、勇気づけてくれた。一度として、叱りつけ

られた記憶がない。勉強のことをけっして詮索しなかった。学校で失敗があったり、難しくて不平を言ったりした時も、けっして助言することなく、「直に分かるよ。怖がらずに、やればいいよ」と任せるだけだった。このような母の褒め言葉や無条件の信頼ほど、強い自信を生み出すものはないと思う。

我々の家族には体罰という観念は存在しなかった。次兄が「ませた」年頃になったある日、家事手伝いの若い女性と取っ組み合いを始めたことがあった。今風のセクハラとは違うのだが、両親の許容範囲を越えたものだった。その夜、父は部屋にやってきて、蹴り上げた。兄のトミーをではなく、ベッドの端を。同時に、激しい言葉を発して、怒りを表現した。子供時代に経験した「体罰」らしきものは、これだけだった。一九四四年に至るまで、家庭の中で人への虐待を眼にしたことはなかったし、身体的な攻撃を見たり経験したりすることはなかったし、罵り合いを聞いたこともなかった。だから、大声、罵り、身体的な辱め、喧嘩、虐待は、私にとって縁遠いものだった。

一九一四年に生まれた長兄のバンディの生活は、愉快で安定したものだった。大学の学業が終わる頃、友人の一人が英国へ移住することになった。兄も一緒に行きたかったのだが、父が許さなかった。父がどう説得したのか分からなかったが、後に姉から聞いたところでは、ハンガリー人なのだから、ここで生活しろということだった。また、長兄は家族と一緒にいるもの

だとも論じたという。兄は反抗心がある方ではなかった、父の禁止を受け容れた。既述したように、ロシア戦線で短い生涯を終えた。かなり歳が違っていたので長兄との関係は密ではなかったが、若くして死を迎えた悲しみから、優しくユーモアのある人柄を忘れることはできない。

兄弟の中で、感性的知的影響を一番受けたのは、一九一九年生まれで九歳年長の姉リリーだった。一緒に詩歌を詠い、カーンテイの小説を手渡してくれた。ピアノでドゥビュッスイやシューマンを聴かせてくれた。落ち着きのない、痩せて気難しい年頃の私を、友人たちの集まりへ連れていったり、人生の大問題を話し聞かせたりして、「真面目に」扱ってくれた美しく賢い姉は、私の中に自信を植え付けてくれた。

次兄のトミーとの関係はまったく別だった。一九二五年に生まれ、三歳しか違っていなかったから、一緒に学校へ通い、同じ子守がついていた。ふつうの男兄弟と同じように、一緒に遊んだ。時には仲良く、時には仲違いをして喧嘩したりした。トミーが女の子に興味をもつようになってから、二人の仲は完全に途切れてしまった。一緒に友人の集まりに行くことはなかったし、共通の友人も共通の知的会話もなかった。大人になっても、この関係がそのまま続いた。リリーとは他界するまで、親密な関係が続き、それが共通の知的価値を共有する基礎になった。リリーがベッドに繋がれ、苦しい日々を送っていた時も、

生き生きと政治的な考えを議論したり、文学的な話を交わしたりすることができた。^{*}これに対して、トミーとの関係は、最後まで表面的で「他愛もない」レベルにとどまった。脳細胞に組み込まれた共通する遺伝子や、ほとんど同じ家庭と学校の環境で育ったことが、二人の兄弟を相互に鍛え合わせるという条件を失わせたのだと思う。私とトミーに固有のものが相互に異なる分だけ、二人の関係だけでなく、まったく異なる二人の性格や運命の形成に大きく影響したと思う。

^{*} 婚姻後のリリーの名前はガールドニイ・アンドルネーで、会社で経理を担当し、部長として退職を迎えた。厳格な規律と姿勢を保った女性だった。自らのことは語らず、常に他人の苦悩を聞く役割に徹していた。長い入院生活の中でも、長女のユーディットや孫のジョーフィアなどに接する自信に満ちた信頼関係は、印象深いものがあつた。リリーは二〇〇二年に死去した。

次兄トミーはコルナイ・タマーシユといい、工業芸術大学を卒業し、イラストレーターを目指した。一九四五年に労働キャンプから戻り、専門を変えて、以後、宣伝分野で仕事をすることになった。国营の宣伝会社に勤めた後、OTP（国家貯蓄銀行）に移った。Toto-Lottoの最初の宣伝が、彼のアイディアによって実現したと自慢するのが常だった。トミーは一九九六年に他界した。

コロンハウザー家の二人の親と四人の子供たちは仲良く暮ら

していたが、日常生活では家族生活を共にすることが少なかつた。父と母はしっかりと結ばれていたが、子供たちは親からも兄弟相互からも自立した生活を送っていた。

事務所が住居に移転してから、母は夕方になるとドレスアップして、顧客の待合室に座るようになった。もう仕事が終わる時間だよと示したかったのだ。父は仕事を止めざるをえず、二人で街に出かけた。子供抜きで、ほとんど毎日、夫婦で外食していた。我が家では家族一緒にの食事というものがなかった。それぞれめいめいに昼食や夕食をとった。お腹が空いた時に。家族一緒にの食事は本当に稀で、あるとすれば、夏の間だけ、休暇の別荘と決まっていた。

私自身のことに戻るが、両親も兄弟も、私がどう時間を使うべきか、何時どれほど勉強して、誰と何して遊ぶか、何を讀み、どんな観劇をするかについて、一切、口を挟むことがなかった。とはいっても、夏だけは、一緒に野外劇場へ出かけたり、薔薇が丘から八月二〇日の火花を一緒に見たりしたが、これはいわゆる例外的な行事だった。

一三歳か一四歳の頃、今日から定期的に音楽会に行こうと決めた。それから、ピアノを習おうと思った。父はピアノの先生を見つけてきたが、それがふつうの先生ではない。シャーンドル・フリジェシュという指揮者で、当時は定職をもたなかったが、後に著名な音楽教育者として知られ、交響楽団の設立者に

なった人だった。ドイツの占領で、私の回り道が終わりになるまで、ピアノを教えてくれた。また、ギムナジウムの勉強が半ばになった頃に、やはり学校の授業以外に、英語を勉強したいと思った。両親はいつも支弁してくれたが、私がしたいことは自分の考えにもとづいて自分で決めた。

この種の教育的効果を判定したり、評価したりするのは難しい。はつきりしていることは、私の中に孤独や自己責任という感覚が形成された。他方、大小を問わず、自分の人生は自分の頭で、自立的に形成する以外にないという知識、いや感覚が刻印された。両親は利己的に育てようとしたのではない。家族の皆は他人に対して謙虚になることに努めていたし、互いを傷つけあったり苛めあったりすることなどしなかった。必要かつ可能であれば助け合っていたが、確かに家族的「共同体」というものはなかった。今現在、私自身を自覚的な個人主義者だと考えているが、それは個人の主権を尊重することが、もつとも重要な倫理的規範のひとつだと考えるからである。思うに、自分の人生、成功、失敗は、何よりもまず、個人の責任である。他人を助けることも義務だと感じるが、私は「共同体」的存在ではないし、それとは反対に、何かの共同体に組み込まれることをもつとも忌み嫌っている。多くの回り道をして辿り着いた現在、意識的に宣言していること、そしてそれを理解するためには哲学的作品を讀み、長い人生経験の助けを借りようとしている

ことには、皆、幼年時代や青年時代の出来事、さらには家庭生活様式によって、私の精神の奥深くに刻印されたものが土台ベースになっていくことは間違いないだろう。

ドイツ帝国学校

ブダペストのドイツ帝国学校 (Reichsdeutsche Schule) へ通い始めた。幸いにも、両親はドイツ語をパーフェクトに操っていたし、ドイツ人の *Freiheim* にバイリンガルで子守をしてもらって育ったから、言葉の問題はなかった。ハンガリー語、ハンガリー文学史、ハンガリー史以外の科目は、すべてドイツ語だった。

学齢期になる前の一九三三年に入学を許可された。ちょうどナチが権力に就いた年に学業を始めた。両親がユダヤ人なのにどうして入学が許可されたのかと、しばしば問われたものだ。

この点は既述したことから分かるように、父はドイツ人と密接な関係を保っていた。ほとんどドイツ的文化の中で教育され、ハンガリー法のほかに、ドイツ法を修得していた。ドイツ人が顧客で、仕事で使う言葉のほとんどがドイツ語だった。

ユダヤ人の集まりの喧騒から、ヒットラーやその追隨者について知ることはできた。しかし、父はドイツや世界の人々がそうだったように、ヒットラーの権力は一時的な現象に過ぎない

と考えていた。文明の頂点を極めたドイツ精神が、この馬鹿騒ぎにどこまで耐え得るのだろうか。ドイツが一線を越えて、憎悪の道を歩み、その末路にガス室があるなどと、思いもよらなかったのだ。

ドイツ帝国学校へ入学したのは、両親がドイツ語の修得を考へてのことだった。学校の評判も良かった。ハンガリーに住むドイツ人外交官やビジネスマンだけでなく、他の外国人も子弟を通わせていた。同級生の中には、ハンガリー人のほかに、オーストリア人、ドイツ人、アメリカ人、トルコ人の子供もいた。この学校からは著名な人物が輩出された。新聞記者で一九五六年の殉教者ギメシユ・ミクローシユ、俳優ダルクヴァシユ・イヴァーン、オリンピックの金メダリスト泳者セーケイ・エーヴァ、作家カリンティ・フェレンツ、ゲルマン研究教授ハラス・エリユードなど。

優れた知識と経験をもつ忍耐強い教師たちが、我々を鍛えてくれた。私がこの学校で過ごした八年間、学校の授業で反ユダヤ主義の言辞を、一言たりとも聞くことはなかった。ヒットラーやその権力を称えたような言辞を思い出すことができない。ベルリンからの指令で学校を離れなければならなかった時も、ユダヤ教の教師が仲立ちになって、一九四一年秋から始まる新年度から、子供を別の学校に通わせるようにと、筋を通して両親に伝えられた。一二年の終業を一年だけ残した児童には、私

塾生として学業を終え、高校卒業試験が受けられるように配慮された。ドイツ本国の生活に耐え切れなくなった人々が国外へ逃れ、自由主義的原理を望む教師がハンガリーの学校に逃れてきたのではないかと思う。この学校はドイツ・ナチの大海に浮かぶ孤島のようなもので、近くのハンガリー人の学校ですら、もうヒットラーに親近感を抱くような方向に向かっていた時期だった。

このドイツ学校の教師たちには、今でも感謝と尊敬の念を抱いている。良く練られたカリキュラム、配慮の行き届いた児童への対処、優れた教材など、そのすべてを今でも活用させてもらっている。もつとも、偉大な教師に出会ったというわけではない。知的かつ道義的な影響力を与えたような、優れた教師から教えを受けたということではない。

ドイツ帝国学校での最大の収穫は、生涯の友を得たことだ。ケンデ・ピーテルは小学一年からの同級生で、後に新聞記者となり、一九五六年に亡命した当時の精神的指導者の一人で、政治家者である。八年間、一緒に学校に通い、後に青年運動と新聞編集で仕事場を同じくした。多くの取組みや闘いに一緒に加わった。三〇年以上もパリの亡命生活で離れ離れになっていても、今日に至るまで友情が変わることなく、深まってすらい。私のように、七〇年間に友情を続けられることを誇れる人は少ないだろう。

精神の彷徨

多様な国籍の子供を集め、コスモポリタンので、当時としては珍しい男女共学の学校から、アッティラ通りにある保守的なヴェルビューツイ男子ギムナジウム校に移った。この学校の児童の社会層は、クリステイナ街区や王宮街区の上流階層であった。すでに戦端が開かれていた。前の学校では、教師が政治と戦争について意見を表明することは控えられていた。しかし、新しい学校では、担任教師が大声でドイツ軍を称え、スターリングラードの戦いでドイツ軍の勝利を何度も予想する始末だった。彼はラテン語、ハンガリー文学、ハンガリー史の三科目を教えていたが、クラスメートの前で、ユダヤ人は彼の担当科目で「優」をもらえないと宣言した。実際、その通りだった。クラスの中にユダヤ人児童は二名で、学業は優れていたが、ヘゲドゥーシユ先生はどんな科目にも、「可」しか与えなかった。これほどあからさまな差別を受けたのは、これが初めてだった。もうひとつの経験は教師の恣意的な偏見ではなく、当時の法律に関係するものだ。戦争準備として、中等学校の児童には、軍事教練があった。軍事教練に参加する者は、「レヴェンテ」（ハンガリー青年軍事組織員）と呼ばれていた。ドイツ学校に通っていた時は、全員が一緒に軍事訓練を受けた。ところが、

ハンガリーの学校に移ると、ユダヤ人と非ユダヤ人の二つのグループに分けられて訓練を受けることになった。もちろん、我々だけにとくに厳しかったというわけではない。右向け右、左向け左、回れ右などの「知識」を学ばなければならなかった。ただ屈辱に感じたのは、「ユダヤ人レヴェンテ」という区別であり、排除と隔離という事実だった。

私が加わったクラスはすでに五年間を一緒に過ごしたクラスだったが、新参の私を温かく迎えてくれた。一緒に音楽会や学生演劇を鑑賞したり、書物について議論したりした友人たちもいた。しかし、深い友情が芽生えることはなく、ドイツ学校で結ばれた友人との付き合いが続いた。前の学校でもそうだったが、この学校でも偉大な先生に出会うことはなかった。機知に富んだ「ギャグ」を発する教師がいて、確かに面白かったのだが、精神的な面で影響を受けた教師はいなかった。

教科の知識を除けば、学校で聴講した歴史や哲学、人間精神についての授業は、右から左へと耳を通り過ぎるばかりだった。自分の趣向や思考は自分で鍛え、自分で開発した。精神的な飢えを満たすために、書物を読み漁った。書籍を買うことに夢中になり、収集した書物が増えていった*。近くに開館した図書館で日刊紙 *Die Zeit* の閲覧登録をし、そこから読み物を家に持ち帰るのが日課になった。何を読むべきかを選択するのが難しかった。案内役のひとつが、セルプ・アンタルのハンガリー・世

界文学史だった。クラスの担任はこの著作を「くだらない物」と軽蔑し、ほとんど読むことを禁止するかのようだったが、私にとつてこの著作は道案内としてかけがえのないものだった。

バビツチの『ヨーロッパ文学史』は、セルプ・アンタルを補足するものだった。これらの案内書が優れた書として判定したものを、貪るように読んだ。今から考えても、驚くほどの時間を読書に使った。毎朝、早朝に起きて、一・二時間で学校の勉強を済ませ、学校が終わってから、午後から夜まで、友人たちと会い、話し合ったり、読書したりして時間を過ごした。ある週は『戦争と平和』、次の週は『カラマーゾフの兄弟』、バルザック、フローベル、モーリツ・ジグモンド、アラニー・ヤールシユ、ヨーゼフ・アツティラ、コストラニーニ、トート・アルパードの翻訳詩など、読書のリストを続けることができる。

* 迫害にあった歲月、これらの書籍は家族の友人が守ってくれた。地下室から出た後、急いで愛読した書物を家に持ち帰り、手許に置いた。ブダペストの攻防は一九四四年クリスマスから一九四五年二月まで続き、爆撃や略奪が続いた。それから数週間経って、ソ連兵士が我が家から突然移動した時には、一冊だけを残してすべての書籍がなくなっていた。その一冊は、愛読していたトーマス・マンの『トニオ・クレゲル』だった。

日刊紙のウィークエンド付録に掲載される精神科学や芸術に
関する論文を読み漁り、これを基準に何を読書として選択すべ
きかを判断しようとした。それは結局のところ、当時の思想的
潮流に行き着くことになり、オルテガ、ホイジンガ、シュペン
グラーなどの著作を手にすることになった。たとえば、ドウラ
ントの哲学史のような、精神生活や思想のそれぞれの分野を概
観する著作に出会ったことも嬉しかった。もちろん、一四歳一
一六歳の頭脳には内容の半分も理解できなかったに違いない。
両親も、兄弟も、宗教も、教師も、私の世界観の形成に寄与し
ていない。すべての新しい思想を受け容れた。世界的な要請に
対して与えられた代替的な回答や倫理をめぐって、右往左往し
た。ドストエフスキーの影響を受けて、キリスト者にならなけ
ればならないと考えた日があったかと思えば、次の日にはアナ
トール・フランスを紐解いて諧謔的な世界観に印象付けられ、
ヴォルテールのカンディードに勢いを得るといふ具合だった。
この時期の私には、大人になつたら何になろうというような
思い込みは何もなかった。甥のジョルフィ・パールはもう幼稚
園の頃から救急士になると決め、実際にそうだったのだが、私
にはそのような職業観念がまったくなかった。後年、私の研究
生活に見られた特徴が、すでにこの時期に見られると言って良
いのかもしれない。事が整っていれば、それで満足だった。た
だ、何かを始めたら、それを最後まで「完成」させるといふ強

い意欲があった。写真を撮っている時は、それに全力を傾し
た。書籍を収集し始めた時には、素晴らしいと思つた書物をす
べて買い揃えるように努めた。切手収集に没頭した時には、ア
ルバムがいつぱいになるようにした。事が半分しか進まず、物
事が整わないときには、そのカオスが私を悩ませた。

この性格や努力は知的な関心に向かつたものではなかつた。
この一四歳一六歳の精神的な発達から将来を投影してみる
と（今になって考えてみるに）、多分、文学的評論を書くか、
美学問題に頭を悩ますような、「哲学的」な職業生活を描くこ
とができる。後年に社会問題に向かうような兆候は何もなかつ
た。まして、二一―一五年後に、経済学研究の道に入ること
など想像すらできないことであつた。

当時、知識が蓄積されれば、世界をより良く理解できるだろ
うと考えた。事実、今のコンピュータ用語で言えば、日々、新
しい見解が古い見解を上書きした。常にオープンマインドで真
理を求め、より強い精神的なインパクトを期待した。そして、
一九四五年を迎えた。少々、話を急ぎすぎたが、ギムナジウム
の上級生になつたばかりで、まだ私には一九四四年のトラウマ
が待っていた。

一九四四年…父の運命

一九四四年三月一九日は普段の日曜日と同じように始まった。友人とヴィイグドーへ音楽会を聴きに行く準備をしていた。ところが、音楽会が中止になった。ドイツ軍がハンガリーに進駐したのだ。

それから一、二週間して、父は召集状を受け取った。ユダヤ人を労働キャンプに狩り出すものと良く似ていた。四八時間以内に、キャンプの装備と二日間の食物を持参して、指定の場所に出頭しなければならなかった。当時、父は六〇歳を越えており、通常の労働キャンプ召集の年齢上限は六〇歳だったから、規則に沿った召集状ではなかった。

悪い予感が両親を襲った。電話で得られた情報から、著名なユダヤ人知識人や実業家も召集されているのが分かった。両親は話し合いの場に、子供を引き入れなかった。母の話から推し量ると、選択肢を話し合ったようだ。

父は、両親とも自殺を図るという考えに辿り着いた。しかし、これは放棄された。危険な時期に、家族をそのまま残して去るわけにはいかないからだ。母は父に、身を隠すことができないかと尋ねた。リスクを負ってくれる友人たちがいたし、その中にはドイツ人もいて、逃亡を助けてくれるからだ。しかし、父

は二つの理由でこれを排した。ひとつは、リスクが大き過ぎることだ。もし見つかれば、自分だけでなく、家族も容赦されないだろう。二つは、召集は国家命令であり、それに従わなければならない。ここには、父の世界観が反映されていた。彼はあくまで法律家だった。並みの弁護士ではなかった。厳格な順法者だった。もちろん、父は自己の経験や調査において、倫理と法律が対立し合うケースに遭遇していた。だから、何度も考え抜いたと思う。独裁者が指令した法令、基本的人権を踏みにじる法律が幅を利かせている。にもかかわらず、自らの前に運命的なディレンマが立ちはだかったその時に、潔白で汚れを嫌う倫理を尊ぶ人物を選んだのは、もっとも単純な公式だった。国家指令は国家指令、命令は命令。それを実行するのみ。

知られているように、ドイツ軍進駐の最初の週に、ユダヤ人エリートを代表する一〇〇—二〇〇名が人質として集められた。リュック・スライード通りのユダヤ教師教習所⁽¹⁾に隔離された。その環境は比較的良く、ハンガリー警察官が監視の役にあたっていた。数週間後、身内のものが彼らを訪問することが許された。この時、すでに二人の兄は労働キャンプに召集され、長兄のバンディはロシア戦線に、次兄のトミーはユーゴスラヴィアのボールにいたから、我々と一緒ではなかった。母と姉、そして私が、ユダヤ教師教習所の中庭で会った。父の表情は穏やかで、話し振りも落ち着いていた。記憶に間違いがなければ

ば、快活でもあった。感情的な言葉を使うことなく、母に実務的な指示をおこなった。家計のこと、友人や親戚の集まりのこと、子供たちのこと、それから父の専決事項であった金銭的なことや生活管理のことを指示した。これらのことが突然に母の頭に流れ込んできた。父はいろいろな情報を一度にたくさん伝えようとしたのだ。後になって、手紙も送ってきた。そこには、住居に関して処理すべきこと、弁護士資料のファイルの移動場所などが指示されていた。^{*} 面会した折も、それから手紙にも、別れの言葉はなかった。ただ、家族への愛情を込めた表現が付されていた。

^{*} 書き物やメモのファイルを整理して収納する習慣は、多分、父を模範として、父から受け継いだものだろう。

これ以後、永遠に父を見ることも、手紙を受け取ることもなかった。

まだリュック・スライード通りに父がいた時に、救出作戦が行われた。父と親しくしていたドイツ人実業家が小さな代表団を結成して、ドイツ大使のエドムンド・ヴィーセンマイヤーのところへ出かけた。ドイツのハンガリー進駐と同時に、ハンガリーに送り込まれた無慈悲で知られるナチの地方行政長官(Gauleiter)だった。ハンガリー当局が父の帰宅許可を与える

ように働きかけて欲しいと請願したのだ。コルンハウザー・パール弁護士は長年にわたって、ハンガリーにおけるドイツの利益を代表した人物である、と。後に代表団の一人が事の顛末を母に話した。ヴィーゼンマイヤーは怒りだし、即座に事務所から退去しなければ、お前たちもコルンハウザーのもとに送り込むぞと威嚇したという。

父のその後の消息については、不確かな情報しかない。多分、集団全部をまずホルティ・リゲット(現、スイゲットセントミクローシュ)に連れて行ったと思われる。その厳しい環境の中で、抑留生活が続けられた。そして、ある日突然、抑留が打ち切られ、すべての者がアウシュヴィッツへ向かう貨車に詰め込まれ、殺戮キャンプに送り込まれた。

ホロコーストは六〇〇万人の死という犠牲を伴った悲劇である。すべての死には、殺された個人の固有の生活史が存在している。父の場合もハンガリー当局が協力してドイツの恐怖支配が犯した殺人であるが、若き日よりドイツ文化の中で生活し、法律家としてドイツの商工業の繁栄を助け、ドイツ・ハンガリー関係の透明性と適法性に努力してきたにもかかわらず、悲劇に遭遇したのが父である。もちろん、ヒットラーを支持しなかったし、ナチの権力に協力したことはなかった。ただ、ユダヤ人だというだけで、命を失うことになった。

父の悲劇のもうひとつの特徴は、既述した法律家としての特

性にある。彼は「合法性」の犠牲であり、適法性を擁護する姿勢が国家権力との対峙を嫌った。法と国家権力のもつとも残虐で非人間的な濫用の犠牲者だった。

一九四四年…私の逃亡

父が存命していたら、私の対処法について口を挟んだことだろう。どちらの意思が強かったらうか。父の意思が強かったらうか。既述したように、父は決定的な時点で長兄バンディの移住を禁じた。それとも、いつも人生の小さな問題で、自分の意思を貫いてきた、私の意思の方が強かったらうか。

父はもういなかったし、母は私の決断に口を挟むこともなかったし、またできなかつたから、一六歳の判断能力で、自分で決めるほかに方法がなかった。問われているのは、どんな書物を読むべきか、どんな言語を学ぶべきかという問題ではない。

一九四四年は生死を決める決断の年になった。

この頃には迫害の情報は流れていた。ただ、迫害された者がガス室で抹殺するとは思ひもしなかつた。長兄や次兄のように、労働キャンプに連れていくものだと考えていた。そのバンディとトミーから手紙も受け取っていた。そこから、厳しい運命のもと、飢えと寒さ、野蛮な暴力が振るわれていることは分かったが、戦争を生き残る希望がなくはないと思えた。

後で嘘と判明したが、戦時工場で働くユダヤ人は迫害を免れるという情報が広がった。だから、友人二人と、ビーチ通りにあるナジバートニー・ウィーライキ煉瓦工場の補助労働者になるために自ら出頭した*。それまで手仕事をした経験がなく、スポーツでも常に運動神経の鈍さを曝してきた者が、突然、難しい仕事、それも重労働の肉体労働に従事することになった。まだ生の水気を含んだ煉瓦を、熟練労働者が機械から下ろし、それをトロツコに積み上げていく。我々新参の補助労働者は、そのトロツコを屋根付きの集積所まで押して行き、そこで軍隊的な仕方て煉瓦を下ろすのである。

* 代替的な選択肢がある場合に、選択を決断しなければならない。当時は、意識的な生活原理にもとづいて行動するというより、いわば状況に強いられて選択決定を学び始めた。この経験から、自分の運命を決める際には、受身的でありたくないという行動様式が形成され始めた。というより、常に、人生の方向を自分の手で掴もうとしたという表現が良いかもしれない。後になって、これが私の意識的な生き方になった。もちろん、それぞれの決断が常に良い結果をもたらしたわけではない。この煉瓦工場の場合など、すぐに不要な決断だったことが証明された。

しばらくの間、胸に黄色の星を付けて工場に通い、夕方になれば家に帰った。ところが、ある時から、外出禁止令で、移動

が制限されるようになった。労働時間が終わっても、家に帰ることができなくなった。工場に移る以外に方法がなく、やむなく鳥の巣の下で、夜の寝所をしつらえることになった*。

* 私が煉瓦工場で生活している間に、母と姉はアカデミー通りの住まいを去らなければならなくなった。ユダヤ人は「星の宿」に移住させられた。母たちは、ポジョニ通りの「ユダヤ人宿」に住む、両親の昔からの友人が受け容れた。

この経験したことの悪い生活様式は悪い記憶になっていない。逆に、農業や建設業の仕事で、夏のキャンプに行ったような感覚だった。それは一九四〇年代の終わりに、若者が経験したようなものだった。恐怖に駆られてのものではあったが、「自発的」に申し出たものだった。だから、エネルギーいっぱい、陽気に慣れない環境に順応しようとした。やがて煉瓦労働者と仕事仲間になったが、彼らはけっして我々を罵倒することがなかった。我々の服に付いている星のことを指さしたり、ユダヤ人について陰口したりすることもなかった。下手な仕事をやった時には、新米労働者に教えるのと同じように、手本を見せてくれた。家に呼んで、飲食させてくれた労働者もいた。この眼で生活振りを確かめることができた。清潔で整頓された小さな住まいだったが、私や友人の生活に比べて、はるかに貧しいも

のだった。その家事使用人たちとも仲良くなった。良く喋り、足繁く通い、家族とも知り合いになった。これはいわば雇主の家族と使用人との「家長的」関係のようなものだった。この初めての出会いは、労働運動という「労働者階級」という階層とはかなり異なるものだった。突然、違った世界に踏み込んだ。いわばこれまでの心地よい密封された生活から、肉体労働、廃れた機械で動く工場、貧困家庭という世界へ。苦しい生活環境にめげず、大声を立てることなく淡々と生活している心から尊敬できる人々の中に入り込んだのである。

やがて、ナジバートニー・ウーイラキ煉瓦工場が大量迫害の中継所になった。この場所は、迫害を逃れて生き延びた人が、事件を語る現場になった。多くの人がこの工場労働者から助けを受けたことを語っている。迫害を組織した憲兵や矢十字党員と、現場の労働者との間で激しい衝突があった。労働者が殉教的な精神で助けようとしたのだと思うが、残念ながらそれを証す資料が手許にない。

一九四四年の夏になって、ブダペストのユダヤ人への圧迫が緩まった。地方のユダヤ人の迫害が一段落し、ブダペストには及ばないという情報が流れた。サポー・イシュトヴァーンという人道的な医師が、危険を覚悟で、私に偽の証明書を書いてくれ、煉瓦工場から出られるようにしてくれた。

秋が近づき、学校が始まる。ギムナジウムの最終学年、つま

り卒業国家試験の前年の学年が始まった。私は、黄色の星を付けたまま教室に入らないと決めた。だから、金輪際、反ユダヤ主義の言動を君たちから聞きたくないという手紙を書き、クラス全員に送った。前の学校で共に通った非ユダヤ人の友人たちと分け合った共同生活意識を、この学校のクラスで感じる事ができなかつた。それが気持ちを重ねた。訪ねて来ることも、電話して来ることもなかつた。戦後、偶然に会った連中にはそのことを咎めたが、何か悪いことでもしたかという表情で私を見つめたのを覚えている。もちろん、彼らも私がどうしているかを気遣っていたに違いない。しかし、我々が通った学校や育った家庭は、共感、共存、連帯を表現する仕方を教育してこなかつたのだ。

夏から初秋にかけて、何もしないまま時が過ぎた。姉が「星の宿」から家に戻ってきた。ある取引をしたのだ。表向きは、憲兵隊長が借家人になった。取引とはこうだ。もし我々が抹殺され、彼らが生き残れば、借家権だけでなく、所有権も彼らのものになる。他方、我々が嵐を生き延びれば、我々が家に戻り、彼らは別のところへ移る。この後者が実現することになるのだが、一九四四年夏にはまだ将来のことは知る由もなかつた。母が台所に立っている間、我々三人、つまりリリー姉さん、妊娠六ヶ月の身重の憲兵隊長夫人、それに一六歳の私が、お互いに冗談を言い合って、大笑いしたものだ。こんな時にびつたり

表現がある。「あたかも悪い予感を感じているかのよう」。

一〇月一日、ホルティ総督はソ連との休戦条約締結を宣言した。すぐに矢十字党の連中が街頭を闊歩し始め、ペスト側では一〇週間にわたってテロが横行しだし、手当たり次第の殺人が始まり、気違いじみた大量殺人になっていった。ブダ側からドイツ軍と矢十字党が追い出されるまで、さらに一ヶ月もこれが続いた。

矢十字党が権力を掌握して数日後、一八歳から六〇歳までのユダヤ人で、徴兵年齢以下の若者および徴兵年齢以上の者に、労働キャンプ義務を課するという命令が発せられた。私も召集を受け、同年代の青年や年配者からなる労働キャンプ団に組み込まれた。競馬場から出発して、最初の夜の宿泊地はフェリヘジ空港の新しいウィングとして建築中の建物だった。めいめいがリュックに頭を乗せた。夜明けになって、数メートル先の年配者が身動きせず横たわっていた。行軍や興奮に耐えきれなかつたのだろう。私が初めて直に眼にした死体だった。

この後、ヴェチーシユの馬小屋が宿になった。藁の上に、百人ほどが並んで寝た。もうここには、あの煉瓦工場のキャンプのような陽気さも雰囲気もなかつた。年配者たちは苦勞が多かつた。夜ごと、用を足すのに、暗闇の中をよるけながら、たくさん横たわった体を踏み越える必要があつた。夜明けには、慣れ親しんだ温水ではなく、冷水で体を洗っていた。配られた食

料品は本当に僅かだった。塹壕を掘る時には、飢え死にしないように、人参を探した。キャンプ団の連中は相互に距離をとっていた。友人関係を取り結ぶには時間が短すぎた。私も誰と何を話してよいか見当もつかなかった。

ここでも人の温かみに出会った。ある日のことだが、我々を監視する憲兵の命令で塹壕を掘った際に、ある家の庭を壊す必要がでた。庭の所有者は被った損害で、我々を怒鳴ると思った。まったく反対だった。突然、可愛い少女が現れ、ひと鍋の豆スープを飢えた集団に差し出したのだ。その少女の名前は、マールタだった。数年経って、この少女と偶然に出会った。私が新聞記者時代に、その事務所のタイピストがこのマールタだった。戦時の記憶を辿っていくと、彼女と両親が我々の面倒を見た天使で、私とその恵みを受けた一人だったのだ。ひと鍋の豆スープは、まさに恵みの一滴だった。ユダヤ人殺害に加わったハンガリー人を容赦なく指弾する人がすべてのハンガリー人を同列に置こうとする時に、私は他の事例とともに、この出来事を語ることにしている。

ソ連の砲弾が近くで炸裂するようになり、すぐにヴェチーシユを離れて、ブダペストに向かうという命令が出た。一九四四年一月のお盆の日に、十数名の若者と百名か百五十名の年配者の集団が、行進を始めた。ブダペストの境界まで、キャンプの憲兵が付き添った。ヴェチーシユのキャンプでも、行進中も、

憲兵は厳しく目を見張らせていたが、我々を虐げて喜んだり、死に至るような虐待を行ったりしたことはなかった。厳しかったが、耐えうるようなテンポで命令を下していた。

あれから何度となく、ウーレイ通りの兵舎の前を通ったものだ。この兵舎で我々の集団はキャンプの憲兵から、腕章を巻いた緑のYシャツを着た矢十字党の党員に引き渡された。その途端に、新しい命令が大声で発せられた。「駆け足!」。我々若い者は、ヴェチーシユからブダペストの行軍の後でも、まだ走る余力はあったが、年配者の多くは遅れだした。立ち止まった者に対しては、矢十字の青年党員が銃を放って追い立てた。ウーレイ通りからホルティ・ミクローシュ橋(現、ペトウーフィ橋)まで追い立て、止まった者には制裁が加えられた。私の列の前と後を問わず、容赦ない暴力が加えられた。辱めを受け虐待されて死に直面した人間の叫びをけつして忘れることができない。多分五名、いやそれ以上の年配者が殴り殺された。橋に辿り着いた時に、二人が列から飛び出し、ドナウ河に飛び込んだ。矢十字党員は後ろから銃を放ったが、命中したのか、それとも生き逃れたのか、分からない。

疲労困憊し、精神的にもくたくたになって、アルベルトフアルヴァに到着し、そこで夜を過ごした。本当にお盆の日だった。ヴェチーシユからアルベルトフアルヴァまで二〇キロメートル以上ある。体力がある者でも、きついはずだ。明け方になって、

決意が固まってきた。「逃亡するしかない」。

幸運なチャンスが巡ってきた。当時、ブダペストではスウェーデン人外交官、ラウル・ヴァーレンベルグの大規模な救出作戦が始まっていた。いろいろな手段が使われた。スウェーデンの旅券を手に入れた人もいた。これはスウェーデン人が所有する本当の旅券とは完全に同じものではなかった。本物の旅券にはドイツ語で、*Schutzpass*（保護旅券）と表記されていた。

これは所有者がスウェーデン人であることを証明するものだった。これ以外の人には、法的に軽い意味しかもたないいわゆる *Schutzbrief*（保護状）が渡された。この証明書から読み取れるのは、本状の所有者はブダペストのスウェーデン大使館の保護下にあるということだけである。前者の旅券に関しては矢十字党政府も尊重せざるを得なかったが、後者の書状は国際法的な意味や効力を持つものではなかった。

私のポケットには後者の書状があった。旅券と同じで外見は立派だが、内容のない証明書だ。家族の友人で、リリーに夢中だったヴァールマン・エルヌーが、私のためにこれを取得してくれたのだった。早朝、スウェーデンの旅券を持つ者は並ぶようにという矢十字幹部の命令が下った。一瞬の判断が必要になった。もしスウェーデン人の列に加わり、旅券が違うと分かっていたら、即座に頭を撃ち抜かれるだろう。しかし、そのリスクを負って、自分を「スウェーデン人」とみなす決断をした。

幸運にも、矢十字の青年党員は *Schutzpass* と *Schutzbrief* の微妙な差異を識別することなく、私をスウェーデン人の集団に残した。我々をトラックに乗せ、ペストへ移動させた。残った者は、推測するに、さらに西方に向かって移動させられたようだ。後になって、生存者の一人と偶然に出会い、実際にそうだったことが分かった。オーストリア国境に着いた時には、ほんの数名だけが残り、他は虐待と強行行進と飢えて死んでいったという。

アルベルト・ファルヴァから移動したスウェーデン・グループは、別のスウェーデン・グループと合流し、ペストの労働組合本部の建物に移された。ここでも床で寝た。もう我々を虐待する者がいないというだけで、解放された安堵感があった。人間的な若い兵士が監視役で、ユダヤ系ハンガリー人だが予備役兵士から「スウェーデン人」司令官になった者が全体を管理していた。ここでの生活が我慢できるものだとしても、この甘やかされた状態を矢十字党の連中が見逃すはずがないと考えた。ここからも脱出したい。後に分かったが、この決断は正しかった。少し経って、この集団も西方への移動を命じられたからだ。

このスウェーデン・ハウスからは比較的容易に脱出できた。家族の友人の一人が、こここの「スウェーデン人管理」の役を担っていた。その彼が監視役の兵士と打ち合わせて、私がドアから出る時には、よそ見をする手筈が調えられた。

こうやって、兵士の拘束から解き放たれて、再びペストの街を自由に歩くことができたのだ。本当に自由だろうか。確かに、黄色の星を付けていないが、あの偽の証明書もなかった。矢十字党や彼らと一緒に行動している警察・兵士・市民が怪しめば、虐待し、拷問しだすだろう。だから、身を隠さなければならなかった。

最初、家族の昔の家政婦だったルイザおばさんが隠れ家を提供してくれた。おじさんはメシユテル通りにあるアパートの管理人で、ひとつの部屋と一緒に寝た。彼らが仕事に出る日中は、私を一人にさせないように、近所の人たちに面倒を見るように頼んでいた。ある日は電車の運転手さんの家が、またある日は売春婦が面倒を見るというように。皆、ユダヤ人や逃亡兵を匿うことのリスクを引き受けたのだ。街のポスターで警告されているように、匿った者は「叩きのめされる」のだが、それでもそのリスクを引き受けたのだ。だから、この事例もハンガリー人がナチに協力したという一般化が間違いだということを証明している。矢十字のサディスト無頼漢がハンガリー人を代表しているのと見るのは、正しくない。自らの意思で大きなリスクを冒しながら、人として我々に助けの手を差し延べたハンガリー人たちがいた。

毎日、宿を探すような逃亡は、長続きしない。その時、また幸運が巡ってきた。あのヴァーレンベルグの「旅券」を手に入

れてくれた同じ友人が、イエズス会と話をつけてくれた。イエズス会の司祭はユダヤ人の小さなグループを引き受けることになり、その中に姉の夫と私が入った。同じ友人はまた、手際よく教会のコネを辿って、母と姉をカトリックの修道院で受け容れてもらうように手配した。新しい潜伏所に行く前に、もう一度、彼女たちに会いたかった。もしかして、これが最後にならないとも限らないからである。星のリボンも偽の「旅券」もなしで、花束を手に、修道院へ急いだ。母も姉も嬉しく迎えてくれ、お別れをした。

今のライク・コレギウムがある建物がイエズス会の修道院で、我々を温かく受け容れてくれた。多くの逃亡者が修道院の司祭だったライル・ヤコブ^{*}から庇護を受けた。若者は私一人で、話し相手がいなかった。義兄とは親戚関係にあったが、知的にも精神的にも合う間柄ではなかった。再び共同体に入ったのだが、実際問題として、孤独だった。

* 一九四四年にライル・ヤコブはイエズス会ハンガリー管区の代表者だった。修道院にどれだけの人が避難したのか正確なデータはないが、一〇〇名とも一五〇名とも言われている。ライル司祭は、一九九二年に、ヤド・ヴァシエム (Yad Vashem) から「世界真理」の称号を得た。迫害されたユダヤ人を助けた人に贈られる称号である。

名前を忘れてしまったが、一人の修道僧が私に話しかけてきてくれた。信仰、神、キリスト教、ユダヤ教、哲学などを話し合った。もし誰かが我々の姿を見たとなれば、イエズス会修道僧と瘦身の汚れた衣服の青年が、雷鳴が響く修道院の庭を、あちこち散策しながら白熱した会話に没頭している不思議な姿を見たことだろう。

この頃になると、ソ連軍がブダペストを包囲し、市の境界辺りで市街戦が始まった。我々は教会の権威で、矢十字連中が入り込んで来るのを防げるだろうと信じていた。ところが、ある日の午前、矢十字が搜索を始めたとき修道僧が伝えに来た。急いで階段を駆け上がった。銃を手にして叫んでいる二人を垣間見た。それが兵士だったか、それとも矢十字だったかは分からない。義兄と一緒に屋上に駆け上がり、煙突掃除夫が仕事をする場所で、瓦の上に腹這いになった。建物の搜索に恐怖を感じているのか、それとも市街に投下される爆弾に恐怖を感じているのか、説明できなかつた。落下する爆弾は空恐ろしく、それが頭の近くで爆発するのだ。加えて、薄い屋根板から落ちないかと不安だった。状況は危機的だったが、屋根から見える炎上する街の光景は、美しい地獄絵のようだった。もちろん、この光景のこちら側には、ユダヤ人銀行家の紳士と読書好きな高校生がイエズス会の屋根の上に腹這いになっている姿があつた。矢十字の搜索を免れたが、修道僧たちは地下室に移動するよ

うに勧めた。記憶に間違いなければ、そこに二週間居た。混雑していたが、文明的な環境にはあつた。修道院は我々に食事を提供してくれたが、それはブダペストの一般平均以上の内容だった。地下室生活が終わりに近づいた頃、ある事件に遭遇した。総攻撃が始まる前に、アパートの地下に掘られた防空壕のネットワークが出来上がっていた。技術的に可能な場所では、ドアを通して、行き来できるようになっていた。ある朝、隣の地下室に続くドアが開き、ドイツ兵の一隊が入り込んできた。何をしようというのだ。搜索か。我々を始末するのか。いや、そうではなかつた。この時にはもう、どんな小さなことでも、彼らにとって大問題だった。逃亡しようとしていたのだ。疲れきつた連中が、地下室から地下室へと逃げ場を探していた。

それから二、三日経つて、敗残ドイツ兵が地下室から立ち去り、ロシア人が来た。その時に繰り広げられた光景を、けつして忘れることはできない。我々逃亡者が滞在していた地下室に通じる内階段がある。その真下に我々が居た。突然、その階段の上に三人が現れた。ライル司祭、監督僧、イエズス会修道僧だった。傍に、コザツクの軍服を着た、直立不動のソ連士官がいた。この種の軍服はオペレッタ映画で見たことがあるだけだった。胸に大きな弾倉ベルトを掛けていた。傍にもう一人、カルパチア・スイナゴークのカントール（聖歌隊指揮者）が立っていた。ロシア語とウクライナ語を操り、イエズス会の聖職者

たちとソ連士官との間を通訳していることが分かった。互いの友情を確かめ合う言葉が聞こえた。これで、虐殺、逃亡、都市攻撃が終わったのだ。

この後、変なことに出くわした。解放を喜び合っている輪の中に、数名のロシア兵が階段を降りてきた。そして、「時計を寄越せ (Darabai yacha)」と叫んで、皆から時計をとったのだ。どうしてこんなことをするのか、いったいこの出来事が何を意味するのか、理解することができなかった。このことはすぐに忘れてしまったが。

もう一、二日ほど待って、それから全員が修道院にお礼を述べ、三々五々、家路についた。

内環状通りを歩き、ほどなくドハーニイ通りのスイナゴークの前に来た。道端に投げ捨てられ、凍った裸の死体の山に、気分が悪くなった。山のように積み上げられたユダヤ人の死体は、スイナゴーク近くのゲットで亡くなった人々であった。

急いで、ポジヨニイ通りの姉の家に向かった。ドアの向こうに、母も姉もいた。ブダペストの総攻撃を、我々三名は生き長らえたのだ。

これで私の人生の一章が終わる。一七歳の誕生日を迎えてほどこなかった。法的にはまだ大人の仲間入りはできないが、一九四四年という年は、責任を完全にとりきれない少年時代に終止符を打つものだった。

第2章 共産主義者になる（一九四五年―一九四七年）

一九七五年はスウェーデンに滞在していた。ニューヨークの会議に出かける必要があるが、ストックホルムのアメリカ大使館でビザを取得しなければならなかった。当時のアメリカの法律では、「これまでの生涯で、共産党員だったことがあるかどうか」について答える必要があった。申請書を持って大使館に出かけた。「イエス」の回答があるのを見て、担当官は「強制的に入党させられたのですよね」と助け船を出した。「そんなことはない。進んで入党した。当時はそれが私の確信だったから」と答えた。

共産党への親近度

もちろん、大使館の担当者への回答は、幾分か問題を単純化したものだった。入党は書面で宣言された重要な形式的セレモニーだ。共産党の外部シンパとして始まり、共産党と完全に融

合するに至るプロセスにおける通過儀礼である。通常はこのプロセスは時間を要するが、それぞれの個人と状況に応じて、個別に進行していく。共産党がすでに権力に就いている国と、合法的な野党あるいは非合法的な勢力として権力闘争をおこなっている国とは、当然のことながらこのプロセスは異なっている。ここでは政府を構成している共産党^{*}のケースだけを扱う。ハンガリーでは矢十字党権力の崩壊の後、共産党が参加する連立政府が形成された。その中で、共産党は強い権力的地位を占めた（本章が対象とする期間以降、すべての権力は共産党に集中された）。

* ハンガリーでは共産党は何度もその名称を変更した。ハンガリー共産党（一九四七―一九四八年）、ハンガリー勤労者党（一九四八―一九五六年）、ハンガリー社会主義労働者党（一九五六―一九八九年）。本書では、最後まで、「共産党」という名称を使っ

ている。

共産党へ同化するプロセスには、相互に区別される五つのプロセスがあり、それぞれが共産党への接近の度合いとタイプを示している。

第一段階は、共産党シンパである。党の理念に惹かれ、党の活動を支援し、選挙で党に投票する。いわば「旅の連れ」のようなもので、党員の義務を（未だ）負わないケースである。

第二段階は、党員である。ここでは、どんな党員かを問わない。熱心な党員もいれば、ほとんど顔を出さない党員もいる。シンパ的水準にいる者もいれば、党員としての義務や規律を意識的に守っている者もいる。それから、党の理念に違和感を抱いていても、党に入ることによる特権を狙っている者もいる。

第三段階は、活動的で共産主義者と確信している党員である。常に党の集会に出席し、党の仕事を引き受ける。共産主義者として確信をもっている者である。

第四段階は、真の共産主義者である。これは訓練を受けたマルクス・レーニン主義者でなければならない。しかし、これだけでは十分でない。度々引用されるスターリンの言葉を考えれば良い。レーニンの葬儀で、スターリンはこう述べている。

「我々共産主義者は特別に鍛えられた人間なのだ。ふつうの素材から創られた存在ではない⁽⁴⁾」、と。まさに、真の共産主義者、

真のボルシェヴィキは、非共産主義者と知的面のみならず、行動と人格においても異なるのだ。共産主義者は「党的」に行動しなければならぬ。すべての個人・家族・友人・同僚の利害を、党の利害に従属させなければならない。仮に同意できなくとも、規律をもって党の指令に従わなければならない。もし党がそれを望めば、どんな犠牲をも払う用意がなければならない。

第三段階と第四段階に、明瞭な境界はない。強い確信をもつ党員は、真の共産主義者になりたいと思うものだ。これが人間の理想像になる。これはきわめて「弁証法的」な理想像だ。内なる葛藤が真の共産主義者を悩ませる。はたして、マルクス主義者としての訓練が十分だろうか、十分に規律を守っているだろうか、犠牲を払う準備ができているだろうか、と。自己批判の意識が高まるほど、同志は純粹で確信的な真の共産主義者だとみなしてくれる。

第五段階は、党の先兵、党官僚である。ここにはパート・タイム的に党の仕事をする者だけでなく、「フルタイム」で党の仕事に従事する者が含まれる。党書記や党機構で働く者や、工場長やAVH（国家保安局）の役人がそうである場合もある。党が選び、そのポストに就かせたり、ポストから降ろしたりできる場合は、そうである。これは仕事の内容に係わらない。党の指示に従い、党の利益のために行動しなければならないからである。

もちろん、このような五段階の区分は、抽象的なモデルでしかなく、厳密に時間的な継起に従うものではない。これらの段階は相互に重なり合うのがふつうだろう。

最初の段階、あるいは途中の段階で終わってしまう人もいるだろう。私は最後の段階まで歩んできた。これから私自身の出来事を語るのだが、そのプロセスは多くの人と同じような特徴をもっていると思う。だから、私自身の経験は、十分な典型になり得るだろう。

一九四五年春、私はギムナジウムの学生で、キシュクンハラスのカルビン教会ギムナジウムで国家卒業試験に備えていた。ここでは食料品が簡単に入手できるというので、友人の誘いに乗って、ここに引越してきた。試験が終わってから、ブダペストに戻った。一九四五年夏、共産党の指導下にあつた青年組織 M A D I S Z (Magyar Demokratikus Ifjúsági Szövetség ハンガリー民主青年同盟) のブダペスト第五区の組織を訪ねた。一九四五年の六・八ヶ月で、私は共産党と縁のない青年から、共産党のシンパに変わった(第一段階)。

夏の終わりに M A D I S Z に入り、活発に活動し始めた。そこから、共産党への共感が強まり、党に入りたいという気持ちが強くなった。

晩秋には、M A D I S Z のブダペスト中央本部の執行役員になった。その時に共産党に入党した。私の場合、第二段階と第

三段階が最初から重なっていた。党員になった時には、もうすでに共産党が指導する運動の活動家になっていたのだから。ある面では、この時すでに、第五段階の役割も果たしていたとも言える。

こうして、M A D I S Z のブダペスト本部が真の共産主義者になる最初の活動の場になった。しばらくして、全国本部に昇進した。私の青年運動の経歴では、これが一番高いポストだった。ここまで到達して自分を真の共産主義者だとみなしたし、周りもそう見ていた。明らかに、第四・五段階に到達していた。

このプロセスには、多くの要因が働いている。以下では、経過時間に沿ってではなく、転身プロセスの種々のダイメンジョンにしたがって叙述する。

一九四四年トラウマへの反動

ユダヤ人と共産党指導者の役割を結び付ける人種主義者の説明は、重大な誤りだと考える。「ユダヤ人の血には共産主義が流れている」というようなプリミティブな言明は、陳腐な雑言である。確かに、マルクスはユダヤ人だったが、エンゲルス、レーニン、スターリンはそうでなかった。ハンガリーのクン・ペーラやラーコシ・マーチャーシュはユダヤ人だったが、ドイ

ツのウルブリヒト、ポーランドのビエルト、中国の毛沢東はそうではない。逆に、人種主義者がユダヤ人政治家として列挙している者の多くは、共産主義ではなく、社会民主主義、自由主義、保守の政党や運動で指導的役割を果たしている。

もちろん、「一九四四年のトラウマ」によつて、ハンガリーのユダヤ人知識人、青年、年配者の多くが、共産党になびいたことは疑いのない事実である。

ハンガリーにおけるユダヤ人の迫害は一九四四年に始まったわけではない。ホルティ体制こそがその直接の契機であり、その反ユダヤ法が反ユダヤ主義を祭り上げ、国境変更の野望からヒットラーと同盟関係を結んだことの帰結である。したがつて、旧体制下で迫害されて非合法を強いられながら、ホルティ体制と対峙していた共産党を支持するのは、ユダヤ人の自然な感情であった。

解放に続く数ヶ月の間、多くの人がハンガリーの抵抗運動について語った。共産主義者は、彼らこそがその闘いの中で、もっとも活動的で自己犠牲的であったと声高に叫んだ。実際には、ハンガリーの武装抵抗はほとんど無力で、狭いサークルに留まったものだった。この小さなグループの中で、共産主義者と非共産主義者の割合がどうだったかは調べていない。ひとつ確かなことは、共産党に接近する中で個人的に出会った党员の中に、ファシズムに対して武装して闘った人たちがいたことだ（その

ことは証明できる）。彼らに尊敬と畏怖の念を抱いた。私はただ自分の事だけを考え、闘わなかったことに良心の呵責を感じた。若かったということは理由にならなかつた。ブダペスト五区のMADISZには、私より若い二人のメンパー、「ホモク」と呼ばれたヴァールナイ・フェレンツとパップ・ガビがいたが、彼らは抵抗運動の英雄として崇められていたからだ。

ホルティ体制との対峙や武装抵抗という過去の栄光だけが、若いユダヤ人を共産党に引きつけたのではない。いったい、将来はどうなるのだろうかという不安もまた、共産党への求心力になつた。悲劇が繰り返されまいだろうか。この問いかけへの「正しい」回答をここで探そうというのではない。ハンガリーの民主主義、ハンガリーと民主的な西欧との関係を論じようというでもない。一七歳の私（そして、私と同じトラウマを受けた若者）の未熟な思考を再現してみたいのだ。共産党がどのような未来社会を約束したのかに関係なく、またソ連に存在していた体制がどのようなものであつたかということには関係なく、共産党の政治的存在、その政府機能と権力がファシズム再来を防ぐもつとも信頼できる保証であることが、共産党を支援する十分な理由になつたのである。

こうした思考（遺伝子が持つ親近性ではなく）が、ユダヤ人の間で、共産党への吸引力になつた。

当時も、そしてそれ以後も、誰も共産党との関係をソ連邦の

評価と切り離すことはできなかった。ソ連邦を熱烈に崇める人はハンガリー共産党にも親近感を抱いていたし、ソ連邦を嫌っていた人は国内の共産党をも嫌っていた。

一九四五年一月、二月、ソ連軍がドイツ軍とハンガリーの矢十字党を粉砕した時には、心の底から解放されたと感じた。

夥しい犠牲を見て死を感じていたから、ソ連兵士に救世主を見た。他方、赤軍兵士がギャングまがいの行動を起こし、司令官がそれを容認しているのを知って、嬉しさが半減した。前章で既述した時計事件は、解放の瞬間には、どうでも良い些細なことにように感じた。ところが、我々の住宅に何度も押し入られてからは、笑い事ではなくなった。ロシア兵の一団が押し入り、拳銃で威嚇して我々を防空壕に閉じこめ、その間に物色して去って行く。何度も押し入りに来る「常連」もいた（我々は彼を「ブンケル・イジイ（Вункер и Изий）」と呼んでいた。というのは、いつも拳銃で我々を地下防空壕に追いやる時に、こう叫んでいたからだ）。

親しい友人は、母親が強姦されると沈んでいた。

ブダペストでは、「Majestikni pador（小さな仕事）」（訳注：文法的には *Majestikani padora* だが、ハンガリー語は性による格変化がなく、人々は格変化に無頓着に使用していた）と言って、何度も塹壕掘りに駆り出され、田舎に滞在していた時は、馬の世話に駆り出された。すでに当時、これらの臨時労働に駆り出された市民が、

軍事捕虜としてソ連に連行されたと聞かされた。

これらのことは私の中に、心理学で言う「認知的不協和の低減」を引き起こした。これらの忌まわしい出来事を、私は長い間、「意識の奥に仕舞い込んでいた」。もしそれを表に出せば、ソ連への信頼が崩れ出すからである。あるいは、この受け容れ難く許し難い行動に対して、何らかの言い訳や免罪の理由を探そうとしていたのかも知れない。ソ連に対する信頼感は日増しに強くなり、やがて無条件の盲目的信条になって行った。

私の中に生じた変化が別の要因に転化していくことを述べる前に、ユダヤ人問題に一言触れておく必要がある。共産党に接近する中で、ユダヤ人というアイデンティティが、少なくとも私の精神の意識的階層においてほぼ完全に消滅した。一人の同級生がイスラエルに移住する準備をしていると話してくれたことがある。そのことにほとんど関心がなかった。また、ユダヤ人虐殺への復讐という考え方も、私には縁遠い話だった。共産党の指導部にユダヤ人がいるということも、私にとってどうでも良いことで、そのことで彼らに親近感を抱いたことはない。

他方、反ユダヤ主義に冒されたハンガリー社会では、この事実が多くの人々に不満を醸成するのではないかということに、考えが及ばなかった。

* もちろん、イスラエルだけでなく、他の国へ移住することも

きた。ハンガリーに残るべきか、それとも移住すべきか。このデ
イレンマは生涯を通して、何度も問われた問題だった。これにつ
いては、本書の別の章で詳しく記述している。

ドイツ的でユダヤ人出身を臭わせるコルンハウザーという姓
を、ハンガリー風に変えるのは自然なことだと感じた。誰かが
忠告してくれた訳ではない。私が自分で決めた。前章で既述し
たように、コルナイ姓を選んだのである。共同体から排除され
た反動で、ハンガリー社会に「融け込もう」と努力したことの
帰結である。

ハンガリーの法制度や日常生活の変化は、ユダヤ人アイデン
ティティの希薄化を容易にした。もはや、公的文書に宗教を記
す必要がなくなった。「キリスト教改宗コース」を宣伝するこ
ともなくなった。ユダヤ人に対する人種の宗教的差別やゲット
ーへの追放を法的に規定した条文・条項が廃止され、情報の差
別化も消滅していった。^{*}二年間で、ハンガリー社会には物凄い
速度で、再自由化が進行した。

^{*} ユダヤ人住宅を占拠した人々や没収されたユダヤ人財産の分け
前に預かった人々は、帰還者を快く思わなかっただろう。一九四
五年に至るまでは反ユダヤ主義だった人々は、一九四五年以後も
ユダヤ人に対する憎悪が消えてなくなることはなかったし、最初
の数年はまだボグロム（ユダヤ人迫害）も続いていた。しかし、

それらのほとんどは表に出ることはなく、私自身も肌で感じるこ
とはなかった。

ユダヤ人としての存在を再び意識し出すのは、「あからさま
な」反ユダヤ主義が唱えられたり出版されたりするようになった
時である。これについては本書でも、歴史的順序に従って扱
っている。

前に述べたように、ユダヤ人として被ったトラウマが共産党
へ向かわせた。そして共産党への接近は、ユダヤ人アイデンテ
ィティを眠らせた（冬眠させた^{*}）。この二つのことに矛盾はな
いし、精神的にもこの二つのプロセスは融合していると思う。
共産主義の環境に近づき、それへの同化が強まれば強まるほど、
ユダヤ人として生まれたことに特別な意味を感じなくなってい
ったのである。

^{*} これは私だけのことでなかった。数十年経って、両親がユダ
ヤ人だった当時の「党の申し子」たちと会う機会があった。私と
同じ頃に入党した連中だ。彼らが言うには、両親は自らをハンガ
リー共産主義者とみなし、ユダヤ人としての意識を一切持ってい
なかった。もちろん、ナチの法律に従えば、ユダヤ人とみなされ
ることは分かっていたが。同時に、ユダヤ人出身という表現が氣
に障った様子だった。羞恥というのではなく、問題提起が適切で
ないということだった。

虐待、辱め、排除という記憶は、私を含めたユダヤ人に、我々を同等に受け容れ、人種や宗教で差別することのない共同体への同化を促した。共産主義の世界観は最初からユダヤ人への偏見を助長するものを内包しているが、我々の仲間には人種差別主義者はいなかった。共産主義者の間では、私の出自や両親・祖母の出自を問う者は誰もいなかった。仲間の輪に受け容れてくれた。排斥の忌まわしいトラウマを持つ者にとって、この受容体験は魅力的で安堵させるものだった。

精神的変革、共産主義者の政治思想の受容

一九四四年のトラウマ効果について叙述したことは、いわば「感覚的」衝撃の連鎖であって、厳密な論理的思考ではない。もちろん、これには「知的」過程が付随している。自分自身の精神的な変革を分析してみると、このプロセスはユダヤ人という存在とも、一九四四年のトラウマとも関係がない。ここでは、新しい思考が古い思考と競争を始め、後者を駆逐したのだ。これから思想的変遷を詳しく叙述するが、前もってとくに強調しておけば、共産主義思想の受容が思想的変革の最大の動力だった、という印象を読者に与えることは私の本意ではない。共産主義の文献とレクチャーで、躊躇^{たぐ}う知性が党の中に居場所を見つけないという単純な図式は、私には当て嵌まらない。

一九四四年までの時期を扱ったところで、私は自らの世界観が開放的で可塑的であると述べた。書物を貪り読み、何か大きな思想力に出会うと、簡単にその影響を受けた。新たな思想がこれを放逐するまでは。

一九四五年初めは、数週間で一年の教材を習得する必要があったので、読書の時間がなかった。その代わり、新聞に良く眼を通し、ニュースに注意した。戦争の諸事件やソ連軍の存在がソ連邦へ関心を向かせることになった。後に専門研究対象となる「共産主義体制の機能」について、ほとんど何の知識もなかった。ソ連軍兵士の強さは実感できた。彼の無類なドイツ軍を我が国から追い出すのを目の当たりにしたのだから。ソ連邦は新しい世界を創り出し、その世界は私が生きてきた世界とは違うものだということが、私には明瞭だった。だから、この世界が古い世界にとって変わると信じ始めた。同時に、ソ連の兵士は市民を威嚇し、しばしば許し難い無法を働くことも眼にしていた。

私の中に、この二つの事柄、つまり未来への確信と現在の事件の辻褄を合わせる必要が出てきた。この時初めて、私の中で、書くことが生存条件になってきた。そして、実際に長い文章を書いた。今、自分で名付ければエッセイのようなもので、「雪下の種子」というタイトルだった。残念なことに、この文書を無くしてしまっただが、その文言を鮮明に覚えている。シュペン

グララーの「文化的循環」に関する歴史理論を、当時の世界に適用したものだ。シュペングララーによれば、人間は進歩するのではなく、円環上を動くだけだと言う。文化は生まれ、栄え、衰退し、滅びる。このドイツの歴史家は、まさに西欧の文化にこれが当てはまるといふ。これを扱った著名な書が、『西欧の黄昏』（邦訳名『西洋の没落』）である。ひとつひとつの文化は溢れる新しいエネルギーをもって出発し、素朴で粗野な力が蝕く。それが次第に文明となり、洗練された退廃と力の衰退がそれに付随する。まさに現代の西欧文化がこれを証明しているとシュペングララーは主張する。

私のエッセイはこう展開している。ソ連邦はひとつの文化圏を生み出した。まだ、それは素朴な力で興隆する粗野で洗練されていらない文明状態にある。残念なことだが、その野蛮性は文化の若さと新鮮さの印でもあるが、苦痛をもたらすものである。

エッセイの第二の部分は、アディ・エンドレの素晴らしい詩、「雪下の種子」に依拠したものである。この詩全体を引用し、エッセイのタイトルにした。一九四四年の激動を経た私には、この詩の一行一行が胸に響いた。「僕を苦しめ、僕を引き裂く……血から、苦痛から、炎から／拾い集める……」。

もう一行も、シュペングララーの理念とも美しく調和する。「……新しい人間の新しい世界へ、顔を上げよう」。

エッセイの多くの箇所では思考が揺らぎ、バランスの喪失がアディの詩の利用を迫った。一九一五年のアディは、同時代人とともに、古い価値を乗り越えて新しい世界へ進むのだと実感したのである。詩の題名はそのことを示している。他方、未熟な若者の私は、いったい何を乗り越えようとしたのだろうか。過去の価値から、不可避的な野蛮から出発する新しい体制へ向かうというのだろうか。

これが人生で最初のエッセイだった。そして、長い間、自分の思考を体現したものとしては、最後のエッセイだった。そこには、若い知的な態度が現れている。論理は明瞭でなく、その展開の裏付けもないが、独創性は見られる。このような検討を開始して、共產主義への信奉が長期にわたって思考の自立性を抑圧していたと分かったことは、ショッキングなことであった。

一九四六年初め、MADISZのブダペスト本部に勤務していた時に、数ヶ月前に書き上げたこのエッセイを、ブダペスト書記次長のチェンデシュ・カーロイに見せた。後に、彼は検察副長官になり、その仕事振りで恐れられた人物である。当時はまだ、恐怖を感じさせるような人物ではなかった。それとは反対に、静かな語り口で、物分かりが良さそうに見えた。私のエッセイを読み、彼の言葉をそのまま使えば、自分より教養のあるジュルフィ・コレグウムの友人にも見せたと言った。その言葉から、私の文章が強い印象を与えたことが分かった。それか

ら、このような大きなテーマを扱った書き物を、いままで手にしたことがないとも言った。特殊な論理を使っているが、私が新しい体制に立とうとしていることを嬉しいとも言った。にもかかわらず、私の思考は混乱しており、「マルクス、レーニン、スターリンの著作を、もっと丁寧に学習する必要がある」と断定したのである。

忠告を受けるまでもなく、すでにかなり根を詰めて読み始めていた。多分、ソ連の文献で最初に読んだのは、スターリンの『弁証法的唯物論と史的唯物論』だったと思う（後で分かったが、これはもともとソ連共産党教科書の一章として出版されたものだった）。私は、スターリンがマルクス主義を皮相かつ乱暴に単純化し、多くの点でマルクス主義を歪めたと考えているし、現在マルクス主義者を標榜する人もそのように考えているよう。ただ、ここでマルクス主義哲学の一般評価に踏み込んだり、スターリンの論文を分析したりするつもりはない。ここではただ、軍服を着たスターリンの写真が表紙になっている白表紙本を初めて読んだ時に、どのような影響を受けたのかを述べてみたい。

スターリンが大国の最高指導者であり、同時に世界戦争の勝利者で哲学者であること自体が、畏怖の念を抱かせた。他方、私の頭脳は整理されておらず、さまざまな哲学や世界観、潮流が入り込み、混乱の極みにあった。これに対して、この小冊子

には軍隊的な規律が支配している。すべての命題はそれぞれ正しいように思えた。それより重要なことは、すべてが一度に解決されている点だった。著名な哲学者が複雑な思考を使って解決しようとしたり、逆により複雑にしたりしている重要な問題に対して、スターリンは簡潔な文言で一度に解決してしまうのである。あたかも繊細な批評家が粗野な単純化と断定するものがあったとしたら、まさにそれが私にとって魅力的なものだった。そう、単純で、分かりやすく、明快な読み物。

もし作品を良く理解している教師の批判哲学セミナーで、この著作を手にしていれば違っていただろう。どこが皮相的で、どこに矛盾があり、どこで思考や分類が間違っているかを教えてくれただろう。しかし、誰と議論することもなかったし、他の意見と量り合う機会もなかった。

少年になって文学の中で何を読むべきか、何が一番良くて何が一番重要かを自分で選択したように、今度は政治文献を選択することになった。マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンが著したマルクス主義の古典の中で、一番優れている一番重要なものは何か。これらの著者には膨大な著作があるので、その中から重要なものを選択しなければならぬ。種々の「選集」がこの助けになった。書物から獲得された知識に関して言えば、かなりのテンポで程度が上った。一、二年の間に、「古典の重要な著作をすべて読み、「鍛えられたマルクス主義者」に

なった。どの問題が、どの著作で、どのように解決されているかを正確に言うことができた。

もつとも苦勞した学習は、マルクス『資本論』の読解である。この時、友人のケンデ・ピーテルと同じ職場で仕事をしていて、彼はMADISZの機関紙 *Ungarnak* の編集者で、ブダペスト本部に事務所があった。私は教育問題担当者として、彼と同じ部屋で仕事をしていて、事務所の外でも、度々、一緒にお喋りをした。一度、半分冗談で、「民主的傭兵小説」を一緒に書くことになった。P・ホワード（本名レイトウ・イエヌー）のスタイルでまとめ、悪役の植民地主義者に対して、原住民の立場に立つ物語だ。馬鹿笑いしながら、最初の数頁を書き上げたが、もつと有用なことに時間を使うべきだということになった。そこで、小説を書く代わりに、『資本論』を読むことになった。

ドイツ語で、綿密に読んだ。それぞれが自分用の梗概を用意し、一言一句、マルクスをどう理解したかを確かめた。言語的な問題はなかったが、文章は難しかった。我々のどちらも経済学を勉強したことがなかった。リカードやアダム・スミスを知っておれば、少しは容易だったはずである。マルクスは彼らに多くを負っているから、どこがどう違うのかを理解できたはずである。こういう事前の準備がなかったので、マルクスの読解は本当に骨の折れるものだった。

手書きの梗概は今も手許に残っている。ピーテルとは何週間もかけて第一巻だけを読んだ（第二巻、第三巻は一人で勉強した）。彼のダムヤニツチ通りの家と私のアカデミア通りの家を交互に使って勉強した。一心不乱に一頁ごとに読み進め、すべての文言に自分のメモを付けた。ピーテルも私も、この著作に敬意をもって取り組んだ。信仰深い人が聖書を扱うように、つまりすべての言葉を真剣に受け止め、ひたむきに読むように。先のスターリンの著作で批判的な評価を下さなかったように、ここでもマルクス批判を行うつもりはない。それは多くの人がやっている。本書ではマルクス主義について自分の見解を述べる箇所もあるが、ここでは『資本論』が当時の私にどのような影響を与えたのか記したい。

とにかく魅力的だった。思考プロセスは抽象的で、そのスタイルはドイツ的な難解さを持つが、その推論は明解かつ論理的だった。前提と概念体系と議論の手法を受け容れれば、すべてのことが適切な場所に収まった。基本的思考から剃刀の刃のような鋭い論理で最初の結論を導くが、それらの結論は再び出発点になって、新しい結論が導かれる可能性が生まれる。彼のチエンデシュ・カロイの言葉を借りれば、「マルクスは混乱しておらず、水晶のように透明に見える」。(マルクスの諸前提のどこに問題があり、論理的に見える思考のどこで揺らいでいるかを知るには、多くの時間と多くの著作の読解や理解が必要だ

った)。一四一―一六歳の思春期に何百冊もの書物から明解さを探し求めてきた青年にとって、この千頁にもわたる著作は突然に与えられた眩しいほどの陽の光だった。

論理と明解さはもつとも大きな影響を与えた。また、暗い陰鬱な叙述ではなく、感情が込められていることも、『資本論』の魅力だった。児童労働者を虐げ、プロレタリアートを搾取することに、怒りがほとばしっていた。

と同時に、マルクスは論理的分析を感情に従属させることはしなかった。資本主義がもたらす問題を、資本家の悪意に帰するという手法をとっていない。後年、私が社会主義批判に取り組み、不足や成長強制のような種々の問題を提示する際に、関係する人間の間違いによって生じるのではなく、「システム」に内在しているものと分析している。まさにこの分析視角こそ、私が『資本論』の読解から修得したものであり、現在に至るまで、私の思考に影響していると考えている。

『資本論』を読み進む中で、私は経済学者になろうと決心した。その前まで、このような決心は思いもよらなかった。むしろ、文学、歴史、哲学を志そうと考えていた。ピーテルとの共同読書会が終わりになる頃、この職業選択の意思には疑問の余地はなかった。ただ、どうやったら実現できるのか、それを知らなかった。

マルクスの著作には、知的な傲慢さが溢れていた。リカード

やスミスは丁寧に扱われており、彼らとの見解の違いを示す時も紳士的である。ところが、同時代人や論敵に対しては軽蔑を込めて語り、馬鹿で信用のできない者のように扱っている。

「こんなことも知らない……」とか、「こんなことも分かっている……」と。同様な傲慢や不寛容は、マルクスのほかの著作にも、またエンゲルス、レーニン、スターリンの著作にも見られる。言うのが憚られるが、実は乱暴な表現が私を惑わせたことはなく、逆に強いインパクトを持ったことを告白しておくべきだろう。これが論敵をやっつける方法だ。と。

マルクスは私に物凄い影響を与えたが、ルカーチ・ジョルジュからも大きな影響を受けた。今、私が語っている時期に、文化に関する研究資料が手に入った。⁽⁶⁾ 私にとって、「偉大な現実主義者について」に関するルカーチの思考は、一九四四年以前の文学書の読書とマルクスの新鮮な視角をうまく橋渡ししてくれる著作だった。トルストイやドストエフスキーが信心深いキリスト教者だったのか、さらにドストエフスキーはツァーリズムの確信的擁護者だったのか。バルザックは復古主義者だったのか。トーマス・マンは骨の髄までブルジョアだったのか。そんなことはどうでも良いことなだと、ルカーチは安堵させてくれた。彼らが哲学や政治についてどんなことを語っているかと、気にする必要はないのだと言う。肝心なのは、作家として、現実を写し出している偉大な現実主義者だということだ。ルカ

ーチは私にとつていわば免疫を注入してくれたようなもので、偉大な作家の哲学的あるいは政治的思考の有害な影響から防御し、引き続き彼らの作品を楽しめるお墨付きを与えてくれた。

私にとつて、ルカーチは絶対的権威だった。トーマス・マンがルカーチを評価していたことも、この権威を裏付けた。⁽⁷⁾これもまた、古い世界と新しい世界を架ける橋になった。トーマス・マンを読むことは、心躍る文学読書だった。もし彼、トーマス・マンが高く評価する人物がいれば、それは大人物に違いなかった。^{*}だからこそ、ルカーチがソ連邦に対して、何の留保も示さなかったことを許すことができない。彼は実際にそこに住んでいたのだから、自らの眼でソ連の体制を観察できたはずだ。フレイムアップ、無実の人々の迫害やテロを知っていたはずだ。その後にはハンガリーに戻ってきた。少なくとも、何か変だと感じなかったことはないだろう。もちろん、言い憚るほどの恐怖だったことは理解できる。しかし、権威によつて罪を覆い隠すより、それを聞いた方が良かった。ルカーチが何の疑問も発しなかったことで、私のような経験のないナイーブで信じやすい若い知識人は、留保なしでソ連を美化した神話を信じてしまうことになった。

* ルカーチの作品を手にとった時に初めて、トーマス・マンがルカーチを高く評価している事実を知った。このルカーチを評価し

たトーマス・マンの実際の文章を読むのは、それからかなり後に
なつてからである。

マルクス・レーニン主義の学習が進むと、「世界を理解する鍵を手に入れた」という意識が生まれてくる。どんな問題が生じようと、問題を確実に解決できる知識手段を保有している、と。マルクス主義の座標軸に位置づけられない現象や、マルクス主義の定理を否定するような現象などあり得るはずがないという意識になった。まさに、これが知的傲慢を生み出し、傲慢な批判スタイルよりもっと有害な態度を醸成する。しかし、秩序と明解さを求める若い精神には、これこそがマルクス・レーニン主義のもっとも重要な魅力だった。

農村研究の作品から知った農村の悲惨や他の文学作品の体験によつて、貧困と悲惨な運命に対して、少年時代から共感を抱くようになった。一九四四年の出来事は、この読書から得た共感を強めることになった。僅か数週間だったとはいえ、労働者がどのように生活しているかを、あの煉瓦工場で自分の両眼で見ることができた。その後、マルクス主義を我が物にし始めて、自然な感情移入も「場に収まった」。政治経済学は労働者や農村がどのようにして搾取されるかを説明した。この新たに獲得した知識は、その時に初めて知った貧しい人々との直接的な関係を維持するという方向ではなく、マルクス主義理論にも

とづく社会変革に全力で参加する道を選ばせた。そうすることで、一度にすべての貧困が消滅すると思えたからである。

カリスマ的な人々

文字情報だけが共産党へ接近させたのではない。演説や何人かのカリスマ的な共産党政治家もまたこれを促した。

レーヴァイ・ヨーゼフと個人的に知り合うのは後になるが、この時期には彼の演説や講演を良く聞いた。彼の話は党の機関紙の巻頭論文と完全に一致するものだった。私にとって、彼こそもっとも高い水準の共産党知識人を体現する人物だった。

レーヴァイは人々を鼓舞激励できる演者だった。もっとも、私が感銘を受けたのは、演説にしろ論文にしろ、むしろその明晰な論理性だった。明言するだけではない。説得的に理論を展開する（と当時の私には感じられた）。明瞭な構成によって文句が組み立てられているのである。優れた論客で、論敵の主張に對峙し、それを粉砕する。明解に、間違いない概念化で、非常に繊細に自己を表現するのである。

今日、親近感のある見解を持つ政治家の演説を聞くと、救いようのない語り口や能のないスタイルで、文法的な間違いを平気で犯し、飽きるような口調で演説している。こういうのを見る度に、レーヴァイの爪の垢でも煎じてやりたいと思う。

もちろん、現在では、もっとも重要な問題で、レーヴァイが我々を間違った道に引き込み、有害で罪深いアイディアで、我々の思考を汚染したのは分かっている。ただ、それができたのは、演説や論文から発せられる情熱的な説得があったからであり、その信条が鋼鉄のような論理、鋭い推論、類稀な演説能力と文章力を伴っていたからである。

もう一人、私に大きな影響を与えたカリスマ的な個人が、ローシュ・エルヴィンである。もちろん、公的舞台における役割と能力ではレーヴァイの足許にも及ばないが、ここで取り上げるのは、ちょうどこの時期に、彼の傍で働いていたからである。私がMADISZブダペスト本部の一部局の責任者になった時に、彼はブダペスト本部書記長だった。私の仕事を指示管理する上司だった。私はまた、彼が組織した党のセミナーにも参加した。一九五六年の後、ローシュは警察署長代理の地位に就き、警察の一部署を掌握し、無慈悲な訴追を行った人物である。もしかしたら、国家保安局とはかなり以前からコンタクトがあったのかもしれない。だとしたら、一九五六年以後の野蛮な抑圧の首謀者の一人だったことが理解できる。今はそこまで話を進めないで、若きローシュについて語ろう。彼とは、ロージャ通りのMADISZブダペスト本部で、毎日顔を合わせた、話したりする関係にあった。

洗練されたレーヴァイとは比べ物にならず、彼自身も繊細で

あろうと努力することなどなかった。ただ、他人に対する影響
力があり、私も影響を受けたが、その力は内部から吹き出るよ
うな炎、確信の火達磨というべきものだった。洗練された話し
方ができず、アクセントや語彙の使い方もおかしかった。にも
かかわらず、言葉の端から信じられないほどの緊張が湧き出し
てくる。当該問題を他の人が別様に考えることは絶対できな
いと思わせるほど、自分の判断に自信をもっていた。この確信が
放射効果を持っていた。それはまさにカーダール時代の党官僚
に欠けていた資質であり、今の政治家の多くに欠けているもの
である。

「特別な人間」、つまり真の共産主義者になるために必要な思
考を、ホローシユ・エルヴィンが我々に焼き付けたと言つてよ
い。「偽の共産主義者や他の人間から共産主義を区別する唯一
の判断基準がある。それはソ連邦に対する無条件の忠誠だ」と
いう考え方を初めてこの耳で聞いたのは、ホローシユ・エルヴ
インからだ。プロレタリア独裁を実現する、あるいは階級のない
社会を創造するというマルクス主義の意図ではなく、ソ連邦
に対する無条件の忠誠を示すことが、共産主義者だと言うので
ある。まさに、この思想こそ、ソ連支配に対する反乱者を訴追
するホローシユに繋がっている。

ホローシユから初めて聞いたもうひとつの言葉がある。「職
業革命家」である。我々MADISZの常勤勤務者（党組織や

大衆運動組織の機構で働く者）は、たんなる運動員でも組織の
職員でもなく、職業的革命家なのだ。職業的政治家はいるが、
彼らは我々と関係がない。なぜなら、我々だけが職業的革命家
だから。こうして我々は、十月大革命の指導者、ナチと闘った
英雄、ソ連軍の将校、植民地の解放闘争の指導者と、一緒の仲
間になれるのだという。こうした命名は運動組織のふつうの日
常的な仕事に、特別な箔付けを与えた。たんなる箔付けだけで
なく、優越感と自己確信を我々に注入したのである。職業的で
ない革命家やふつうの党員とは違って、我々がやっていること
は価値が高く、より高い仕事なのだ。党が前衛なら、我々は
前衛の前衛ということになる。

共同体への帰属

一九四五年春に戻るが、当時、キシユクンハラスで勉強して
いたことは記した。しばしばブダペストの家に戻っていた。一
九四五年五月一日、ブダペストに戻っている間のことだが、ア
ンドラーシユ通りを散策していた。偶然に、デモの隊列に近づ
いた。生涯で最初に見た街頭デモだった（それまで映画でナチ
の街頭行進を見たことはあったが）。高揚した人々が、プラカ
ードを掲げ、赤旗や国旗を掲げて行進していた。彼らの中に入
って、一緒に行進できたらいいなと感じたのを覚えている。

高校卒業試験を終えてから、ブダペストに戻った。夏だったが、若い友人の一人がセント・イシュトヴァーン通り二番地へ行こうと誘った。戦前に矢十字党の建物だったところにMADISZの事務所があり、娯楽行事を開催していた。そこに参加した。誰かが講演したが、悪くはなかった。会の雰囲気も良く、家族的な感じがした。それから、何度もこの会に参加した。陽気で快活な輪の中で、楽しく過ごした。こうして、次第に、組織の仕事に係わるようになり、私の大衆運動の生活が始まった。遠足、ダンスの夕べ、青年の集いに足繁く参加し、秋の第一回国議員選挙には、ポスター張りの仕事にも加わった。このブダペスト五区のMADISZで、初めてひとつの共同体に帰属していると感覚を得たが、こうした感覚は私の生涯でこれが最初で最後だった。

これ以後、私は小さな共同体ではなく、大きな共同体、つまり「党」に参加することに魅力を感じるようになった。これはもう、共産党への接近度の第四段階で、たんなる確信的で活動的な黨員という水準を越えて、真の共産主義者になるといふことだった。

この段階で重要な役割を果たしたのが、私の周りにいる模範的な共産主義者から学ぶことであり、その模範を意識的あるいは無意識的に模倣することであった。ひとつだけ、この事例を紹介したい。MADISZ全国本部での直属の上司は、ヘゲド

ウーシユ・アンドラーシュだった。この後、彼は一直線にキャリアを上り、ゲルー・エルヌーの秘書から農業大臣になり、最後に首相になった。首相として、ハンガリー人民共和国を代表して、ワルシャワ条約機構条約に署名し、一九五六年の革命勃発時にはソ連軍を呼び込んだ。後にスターリン主義と決別し、覚醒した精神を体现する社会学者として、名声を獲得した人物である。ホローシユ・エルヴィンのようなカリスマ的要素はなく、当時はまだ、高い地位に上る人物に見えなかった。にもかかわらず、多くの諸点で彼の中に共産主義者のひとつの模範像を見た。少なくとも日常的な行動は、少なくともその当時は、私のそれと近かったからかもしれない。ホローシユのようにほとぼしるような情熱が感じられず、客観的で専門家的な印象があった。ボルシェヴィキ的堅固さや、党の無謬性に対する確固たる確信があった。疲れを知らないほど働いていた。ホローシユが言葉や指示で私に影響を与えたとすれば、ヘゲドゥーシユはいわば行動で影響を与えた。彼のような模範なら、私にも到達可能だと思わせた。

偶然の効果と能力

後年の時期には、自らの人生戦略を達成するために長期目標のようなものを立てたが、この時期にはそのような意識はなか

った。本章の初めに、共産党への接近の五段階を描いたが、私自身、この段階を最後まで上り詰めようなどと考えたこともなかった。共産党に縁遠い存在からシンパになった時も、次に来るものが何なのか分からなかった。年齢に比して多くの書物を読んでいたので、思考能力には何の問題もなかったが、素朴さや無責任さが同居していた。ほとんど盲目的に、険しい階段を上っていくようなものだった。今、ハンガリーの週刊誌HVGの最終頁に、「私の履歴書」のようなインタビュー欄がある。そこで、「当時、共産党に入党したのは、キャリアを積むために不可欠だった」と冷笑的に述べているのを読む毎に、怒りがこみ上げてくる。もちろん、良心の呵責にさいなまれることもあるが、私の入党はこのようなキャリア主義が為せるものではなかった。

出来事の多くには偶然もまた作用している。もし友人がブダペスト五区のMADISZではなく、同じ五区の社会民主党青年運動を紹介し、そこにも心地よい仲間がいて、楽しく過ごせたとしたらどうなっていただろう。その運動に加わっていたのだろうか。それは誰にも分からない。

MADISZでの最初の仕事はメンバー登録だった。書類は散乱していて、まったく整理されていなかった。この仕事を通して、私には登録組織化や情報整理・分類・管理の能力があると思った。この能力をこの事務所で初めて有効に利用でき、そ

の能力を「組織幹部」が見抜いた。すぐに次の大きな課題を得ることになり、私は組織の「情宣部員」になった。種々の情宣行事や会合を組織するのが、私の仕事になった。これもうまく行った。

ここでもまた、ある偶然が働いた。のちに哲学者としてハンガリー科学アカデミー会員になったルカーチ・ヨージェフという人がいて、この当時、MADISZのブダペスト本部で私が地区の組織でやっていると良く似た仕事を担当していた。彼は組織専従の仕事を離れて、大学の学業に専念したいと後継者を探していた。そこで私が呼ばれ、会うことになった。何時間も通りを歩きながら、ルカーチが新しい課題を矢継ぎ早に説明したのを覚えている。連絡を取り合う人の名前や広めなければならぬ情報で、頭がいっぱいになった。それらの名前もやるべき仕事も、すべて、初めて聞くものばかりだった。課題についてのいたが、引き受けることにした。この話が来る前まで、専従者として、運動の組織者になることなど考えもしなかった。その可能性が開かれた時に興味深そうだったので、この提案を受け容れた。この成り行きを上から見ると、この指名は上部組織の指導部が主導したもので、ルカーチが地区組織を見渡し、地区の書記や指導部の意見を聞いて指名したのである。同じ成り行きを下から、つまり私の眼から見ると、偶然の出来事になる。経済心理学の理論では、戦略的行動をとらずに、与えられた機

会、つまり「オポチューニティ」に依存してこれをただ辿る行動様式を分類しているが、この時期の私の行動様式にもこのモデルが当てはまる。

既述したように、一九四五年秋に、MADISZブダペスト本部の「専従」になった。これはこの時点から労働原本（証書）がこの組織にあることを意味する。朝から晩まで、青年運動で働くことになった。給与をもらったが、物凄いインフレで目減りするばかりだった。引き続き母と姉と同居して暮らしていたが、少なくとも、もう母からお金をもらう必要がなくなっていた。私がすべての時間とエネルギーを使っていることに言いいたこともあったようだが、けっして口出ししなかった。私自身が決めたことを、完全に尊重する姿勢を示してくれた。ただ、私の名前を呼ぶ代わりに、しばしばMADISZと呼びかけることで、皮肉っているようだった。

* この頃、母は宝石を売り撃いで生活していた。いろいろな事業に手を出したが、皆、失敗に終わった。義理の息子の勧めで、赤字で不振に喘いでいたカフェ「ニューヨーク」を端金で買い取ったが、やはり損が大きく出るので、しばらくして手放した。まだカフェが母のものだった頃、時間を見つけてはホイップクリーム入りのココアやクグロフ・ケーキを食べるのが楽しみだった。広いフロアに母と座り、その周りをロッツ・カーロイ作のフレスコ画と彼の有名な曲がりの入った円柱が我々を囲んでいた。母は、

飢えたMADISZに、午後のおやつを食べさせることに気を配っていた。

組織での昇進は直線的で早かった。それは私が共産党の必要としている指導層カテゴリーに属しており、このカテゴリーに属する若者の供給源が狭かったことから説明できる。

ひとつは、ブルジョアの背景からそれなりの資質（読書歴、言語知識、育ち）を持つていたことである。組織化能力、人的関係の構築能力でも、資質を見せることができた。いまひとつは、共産党への忠誠心があったことである。この点について、他人が見ても何の曇りもなかった。ブルジョア的環境から来たばかりの新米だから、歴戦の闘士とは違って、共産党の模範的行動様式を我が物にしようとして一生懸命なのが明々白々だった。古くからの黨員で、非合法時代を過ごした黨員は、党指導部との関係がぎくしゃくしていた。それに対して、我々のような生きの良い新米は、この面より信頼できて扱いやすかった。

当時、指導部はこれと同じ評価を下していたとは思わないが、善意を持って評価していたと思う。だからこそ、昇進を後押ししたのだと考えている。

第3章 「自由な人民」編集局時代（一九四七年―一九五五年）

一九四七年夏に、共産党中央機関紙「自由な人民」(*Sabada Nya*)編集局から、採用の知らせがあった。すでに、友人のケンデ・ピーテルがそこで働いていた。彼が編集局の上司の一人だったヴァーシャルヘイ・ミクローシュに、私のことを話したのだ。この誘いを光栄なものとして、躊躇することなく受け容れた。

一九四七年六月、*Sabada Nya*紙編集局で仕事を始め、八年后、規律違反で解雇された一九五五年夏に、この仕事を終えた。最初の六年間は、脇目もふらずに、与えられた仕事に没頭した。私の堅固な世界観の基礎が、一九五三―一九五四年にひび割れし始めた。幻滅が始まる時期は次の章で扱い、本章では最初の六年間を扱う。

急速な昇進

編集局の配属先は国内政治部で、デスクはギメシユ・ミクローシュだった。物静かで共産主義の信念に満ちたこの人物が、一九五六年革命の英雄の一人として殉教死するなど、この時に誰が考えることができただろうか。入社してほどなく、国内政治部の会議があった。何かの落ち度で、部下を叱責する必要があった。ギメシユは詰問するのに適役でないと、「腐らせることなく、しかし必要ならきつい調子で叱責するように」と、ヴァーシャルヘイ・ミクローシュに詰問役を指示したことがあった。

入社して二、三日で最初の仕事を与えられた。ちょうど新しい車が入り、編集局もそれを使いこなすことが必要だった。空で走らせる訳にはいかないと、編集部長の一人だったベトル

ン・オスカーが最初の指示を出した。ちょうど、ピーテルとパールの「名前の日」で、秋の収穫が始まっていた。「カネ（黄金）が鳴（実）る……」というタイトルでレポートを書け。指示はそれだけだった。それまで、レポートというものを書いたことがなく、収穫を直に見るのも初めてだった。とにかく出発し、何カ所かで車を止め、記事を書いた。こうやって、人生最初の記者報告が、翌日の *Sabud Vep* に掲載された。

これを手始めに、レポート、インタヴュー、情報など、かなり頻繁に私の記事が掲載された。半年も経たない一九四七年一月には、私の署名記事が掲載されるようになった。その時のテーマは、「過去数ヶ月の投資動向の評価」であった。

経済学的素養は何もなかったが、経済問題が面白いことが分かって、この分野に特化したいと思うようになった。他の同僚も、国内政治部に属しながら、経済問題を扱っていた。

こうやって二年ほど過ぎて、私は経済部デスクに任命され、友人のケンデ・ピーテルは外国政治部デスクに任命された。二人ともまだ二一歳で、党歴も三、四年しかなかった。編集局の指導部を構成していたホルヴァート・マールトン、ベトレン・オスカー、ヴァールシャーニイ・ミクローシュ、ロシヨンツィ・ゲルザがこの任命計画を編集局長のレーヴァイに告げたところ、レーヴァイは苛立って、「何を考えているんだ。編集局は幼稚園じゃないぞ」と声を上げたという。しかし、最終的に

は同意した。

レーヴァイは首をかしげながらもこの任命案を受け容れたが、それには理由があった。ちょうどその頃、『資本論』のハンガリー語訳が出たが、ドイツ語原本を読んだ数少ない一人が私だと知ったからである。それで、ハンガリー語訳の書評を書く仕事も与えてくれた。

一九四九年には党幹部の教育機関であるカロリナ通りの党学校へ派遣された。また、共産党の経済政策決定最高機関である国家経済委員会の会合に、*Sabud Vep* を代表する正式なオブザーバーとして同席するようになった。委員長がゲルー・エルヌーで、書記はフリツシュ・イシュトヴァーンだった。すべての重要な経済政策は、政治局の決定に付される前に、この経済委員会を経由するのが習わしだった。このような最高決定委員会に参加する機会を得たことは、たいへんな名譽であった。二度にわたって政府の表彰を受け、私の仕事は評価されていた。

Sabud Vep の特派員として、党と政府の代表団に随行した。

一九五二年には東ドイツへの公式訪問に同行した。もちろん、随行員選定にドイツ語の通訳能力が勘案されたことは間違いない。それよりもっと重要なことは、私の随行を決定した人々が、私に全幅の信頼を置いていたという事実である。というのは、政府専用列車で、ラーコシ・マーチャーシュやゲルー・エルヌーと一緒に旅行する者は、完全に信頼の置ける者でなければな

らなかつたからだ。

ここで、ひとつ重要な問題に答えなければならぬ。この時期、私のキャリアは急上昇したのだが、それは何に因るものだろうか。このことについて、当時の上司たちと話したことはなかつたが、今、その原因を探してみたい。私自身の資質や能力がどう作用したかは後に扱うとして、ここでは上司たちが保持していたと思われる判断基準を再構成してみたい。社会主義体制に関する「現在の一般的知識」にもとづき、それを私のケースに当てはめることで。

共産主義体制には昇進と格下げを決める二つの基準がある。ひとつは共産党に対する忠誠心であり、もうひとつは能力である。もちろん、他の要因も作用するが、この二つがもつとも重要だ。与えられた仕事を忠実にこなすのは最低限のことで、それだけでは昇進の対象にはならない。もし忠誠心がこの最低限のレベルを超えていけば、それが能力を補充することになる。逆に、能力がきわめて高ければ、忠誠心の低さを支えることもなる。もちろん、この二つの基準ともに高い評価を得れば、速い昇進が可能になる。

経済学専攻の読者には、この二つの基準は、忠誠心と能力に関する二つの変数をもつ意思決定者の無差別曲線で説明できる。相互に並行に描かれる曲線では、より高い位置がより高い評価を現している。たとえば、大臣の無差別曲線は課長のそれより

上に位置し、編集局長の無差別曲線は記者のそれより上に位置するという具合に。無差別曲線の形状は、国により時代により異なっている。以前の革命時代には忠誠心のウェイトがより高く、後のテクノクラート時代には能力のウェイトが相対的に高くなるだろう。種々の分野にはそれぞれ異なる無差別曲線があり、大学やアカデミーの世界のそれは、政治警察のそれとはまったく異なっているだろう。すべての領域に共通するのは、選別基準の二重性である。

レーヴァイが「幼稚園……」と叫んだ時も、それ以後も、この二つの基準において、私の評価は高かつた。私の能力に関して言えば、幸運なことに、もともと (von Haus aus) 保持していた市民的教養と語学知識が、私の中で、新たに獲得されたマルクス主義の素養と統一されていた。だから、間違ったないハンガリー語で素早く概念化することができた。人との関係を作り上げることができる、レポート対象をうまく伝えることができる、重要な人物とのインタヴューを取り付けることができ、重要な人物とのインタヴューを取り付けることができる等々の能力が、顕在化したのである。後に、担当デスクに就いた時には、指導者としての能力があることも証明できた。

これらすべてに忠誠心が伴っていた。私のことを知っている上司であれば、ブルジョア出身であるにもかかわらず、共産主義理念を完全に我が物にしていたことに、一点の疑いも持たなかつただろう。担当デスクへの任命が議論されていた時に、後

に *Hodami Uisag* 紙の編集長になったネメシユ・ジオルジュが同僚だった。私より一五歳年長で、優れた記者生活の過去を持ち、教養ある優れた書き手だった。経済学士号も持っていた。どうして彼でなく、私を任命したのだろうか。その点について、何の説明も噂もなかったが、当時の状況を分析してみると、私の方をより信頼していたのだと思う。当時の指導部にとって、若さと経験のなさは、欠点ではなく利点だった。多分、若くて経験のない私の方が、扱いやすいと考えたのかもしれない。私は何の疑いも持たないどころか、躊躇することなく、共産党の仕事に懸命に尽くそうと考えていたからだ。

ヴォランティア精神

ここまで、私の上司たちが私をどう見ていたかについて叙述した。今度は、私自身がこの時代を「内側から」どう生きてきたかを述べたい。可能な限り当時の心情に近づぐために、現在の思考から逆投影するのを避けたい。したがって、当時の私がどう考え、どう感じていたかを回想してみたい。

私の行動、言葉、思考のもっとも重要な動因となつてたものは、「信条と確信」である。マルクス・レーニン主義イデオロギーへの信頼は全幅であり、そのすべての言葉が真理であることに何の疑いも抱いていなかった。党への信頼も全幅であり、

党の中に真の理念、純粹な倫理、人類の利益への献身がすべて体现されているという思考を我が物にしていた。スターリンやラーコシに対して私が抱いていた尊敬の念が、「個人崇拜」とみなされるなど、思いもしないことだった。彼らの論文・講演の論理や推論は説得的であると感じたし、だからこそ彼らに対する信頼も強まった。

共産主義体制の官僚機構を束ねる力のひとつは、「恐怖」である。しかし、この時期、私はまったく恐怖を感じたことがなかったと断言できる。逮捕され、判決を受けた人々が有罪であることに、何の疑いも持つていなかった。後に、現実には驚き、友人とラーコシ時代のテロを語り合った時に、内部にいて何も感じていなかったという私の報告を、友人達は信じられないという表情で聞いていた。信じられないかもしれないが、それが真実だ。無関心や硬直性がそうさせたのではなく、盲目性、したがって現実の非情さを伝える情報から自分を隔離した孤立性が、そうさせたと思う。

一度だけ、アンドラーシイ通り六〇番地にある国家保安局本部を訪問したことがある。保安局は私の担当に入っていないかったが、例外的に、ある経済訴訟に関連して、そこに働く官吏から情報を得る必要があった。建物に入り、その官吏と話し、そこを立ち去った。交通省や地区の党委員会を訪問するのと同じ感覚だった。この建物の中で拷問が行われ、無実の人々が嘘の

告白を強要されていることなど、考えもしなかった。私自身もここに入れられる可能性があるなどと、一瞬たりとも考えることができなかった。ライク・ラースロー等の逮捕が発表され、彼らに対する罪状が報告された時には、党学校に通っていた。その報告を疑うことなく受け容れた。その罪状が虚偽であるなど、考えもしなかった。そして、私の周辺に稲光が飛び交った。この数年にわたって逮捕され、虚偽の罪状で告発された人々の中には、私の知人が何人も含まれていた。私自身には何の疚しいこともないから、自分にこのような災禍が襲ってくることはない⁽⁸⁾と確信していたが、後になってみれば、それは偶然の幸運が守ってくれた結果に過ぎなかった。多くの人がそうであったように、理由なく誰もが逮捕された。現在、警察の秘密文書^{*}をいくつか手にすることができているが、*Szabad Nép* 紙編集局にいたある諜報部員が嘘の罪状で私を告発していることを知った。

* 一九五六年以前の国家保安局の文書類はすでに廃棄されたと思われる。少なくとも、私が入手できる範囲にはない。そこには、別の告発文書が含まれているかもしれない。

後になって、現実の状況が分かり、恐れおののき、この時期を思い返した時に、何度もあるアナロジ⁽⁹⁾が頭に浮かんだ。要するに、夢遊病者だったのだ。自信に満ちて、何段にもなる高

い階段を天辺まで上り詰め、そこから落ちることなど考えもしなかった。^{*}

* 自分の盲目性―聾啞性を夢遊病者のメタファーで描くのは、私が最初に考えたものと思っていた。最近、エルデーイ（現ルーマニア領）の共産主義知識人ガール・エルヌー（二〇〇三年、九六―九七頁）が、その自伝の中で、自らの精神状態を同じメタファーを使って説明しているのを知った。「すべての自立的、個人的対応の放棄、完全な無批判主義。多分、当時の意識状態や行動は、『ヘイデオロギー的夢遊病』と類似している」。

多くの共産主義指導者を動かしていたのは、「権力欲」である。私が自己批判的な自伝を書いていることを、やがて読者はお分かりになると思うが、良心にもとづく厳しい検討の上で、私には権力への欲望など一片もなかったと言える。権力欲は私にとつて異質なもので、それは当時も現在も変わらない。上司に諂⁽¹⁰⁾ったことなどないし、彼らのご機嫌をとつて昇進しようなど考えたこともなかった。

他方、編集局の仲間とともに生活し、その中で、*Szabad Nép* 的な傲慢さがなかったと言えば嘘になる。我々が「党の声」であり、他紙の記者よりはるかに価値のある重要な言葉を発していると感じていた。しかし、同僚、知人、あるいは見知

らぬ人を問わず、私の作法や声は謙虚なままだったし、その意味で傲慢とは無縁だった。ただ、外見よりもっと奥に精神的階層があり、ここでは傲慢が支配していた。マルクス・レーニン主義の知識と *Szabad Nép* の地位をもってすれば、我々が誤ることなどありえないと信じていた*。

* 以後も、度々、この種の「神童 (Wunderkind)」現象に出会った。たとえば一九九〇年代のハンガリーの政治活動における若いタイタンたちや、東欧諸国に出稼ぎに行った西側の若い顧問たちに、自己過信的な知的傲慢を見た。私が歳をとったから言うのではなく、私の青年時代の事後的評価からこう言うのだ。人生経験がなければ、若者は簡単に一面的な情熱の影響を受け、自己過信に陥りやすい。

我々が保有していた「特権」が自分の行動を左右したとは思わない。確かに、平均的市民に比べて、良好な特権を得ていた。編集部から住居を提供してもらったが、二一歳の若さで家を出て独立した住居を得たのは、当時の慣習でも早い方だった。まだ独身だったので、ワンルームの独立アパートを得て、政府遺失物保管倉庫で選んだ家具類を取り付けた。一九五二年に *Szabad Nép* 紙編集局の同僚だったラキ・トレイズと結婚した時には、最初の子供を身ごもっていたこともあって、薔薇が

丘にある三部屋付きのアパートを得た。家具は自分の蓄えから調達した。たいへん粗末なものだった。家具のほとんどは安物で、既製品で質の悪い「大量生産品」だった。

Szabad Nép 紙編集局の給与は他紙のそれに比べて高かったが、その差は大きくなかった。編集部の指導的地位に就いてからは、党本部職員のための保養所が使えた。九年間に合計で四度外国に出たが、すべて数日の出張だった。このうち、社会主義国へ三度、編集局の駆け出し時代に一度ウィーンにかけた。とくにこのウィーン旅行はよく覚えていいる。ウィーンの名所をほとんど見学することなく、日当を節約して、良心の痛みを感じながら母に絹の靴下をお土産に買った。Palmer's 社の店で買ったと記憶しているが、グリーンの服を着た娘さんが快く応対してくれた。共産党の記者がこんな所で党のお金を使うのは相応しくないという感情に囚われたのを覚えていいる。お土産を買ってなお手許に残った日当を、編集局に返却した。後にカードル時代に日当を誤魔化していた職員などは、この子供じみたピューリタンのな行動を笑っていたことだろう。

編集局、出版局、印刷局の職員は、食堂が使えた。食料が不足している時も、ここでの給食サービスは続いていたし、内容も十分なものだったが、けっして贅沢なものではなかった。政府と党の専用であるクートヴルジ病院を使えたことも、特権のうちに入る。当時のジョークに、「三つのK」という特権が

ある。Kékestető, Kútvyölygyi, KerepesiのKである。保養所のあるキーケシ山頂、病院のあるクートヴェルジ通り、そして政府と党の墓地があるケレベシ通りである。

「労働に応じた分配」のマルクスの原理にしたがって評価すれば、支払われた給与は正当なものであった。給与面で特権があったとは思わない。幼少年時代は豊かに過ごしたが、それに比べれば（あるいは西側の記者の生活水準に比べれば）、*Szabad*の時代の生活は貧しいものだった。特権と言えるものがあるとしたら、平等主義で押し下げられた貧しい社会平均から比べれば、かなり高かったということ位だ。

私の生活様式を特徴づけていたのは物的な特権よりも、禁欲主義である。時々、オペラ、音楽会、演劇、友人の会合へ出かけることはあったが、ほとんどの時間は自己犠牲的な仕事に費やした。

編集局での生活以外に、私生活はなかったと言ってよい。最初の子供、ガーボルが一九五二年に生まれた時は夜勤だった。子供の誕生程度の口実で、夜勤を代わってもらう訳にはいかなかった。何度も病院に電話し、明け方に息子と対面した。

MADISZ時代でも *Szabad Nép* 時代でも、私と同じ年代の同僚たちと、繰り返し議論した問題があった。「専従の仕事」中心の生活スタイルを止めて、普通の大学で勉学を始めるべきではないか。この問題を突き詰めて考えたことはなかった。躊

躇することなく引き受けた仕事だからだ。党が決めた場所に居ることが、何事にも優先して、重要なことだった。

それから数十年を経て、アメリカの大学教授になった時に、自分の学生たちを羨んだ。彼らが苦勞なく勉学を続け、将来に備えながら、他方で生活を楽しんでいる歳月を、我々は自らの決断によるものとはいえ、禁欲的な自己犠牲で喪失してしまっ

た。ここまで記した自己の内的精神状態や強制力については、『社会主義システム』(The Socialist System)の「社会主義を支える諸力と官僚機構の動機」に関する章(第三章)で、同じ要因にもとづいて分析した。何にどれほどの力が作用するかは個人によって異なるが、信条と確信、権力欲、恐怖、物的関心の要素が基本的な要因として存在する。私の場合は、信条と確信がもつとも支配的な動機となっていた。私のケースが統計的平均を代表するとは言わないが、逆にきわめて特殊で稀な事例と断定するのも間違いだらう。編集局の多くの同僚の動機も、同じように特徴づけられると思うからである。

編集局の日々

本章が対象にしている六年間に、ハンガリーでは時代を画する変化が生じていた。編集局で仕事を始めた時には、まだ連立

政府が機能しており、他の政党も新聞を発行していた。しかし、共産党はライバル政党を次から次に壊滅させ、占領ソ連軍の鼓舞と支援を得て、完全な権力独占状態を創ってしまった。全体主義体制機構を構築したのである。こうして、*Szabad Nép* 紙にはライバルがいなくなり、これが政治的な「広報」紙になり、党の主要な情宣道具になった。すべての党組織や政府機関に届けられ、これを読むことがすべての党員と党・政府組織職員の義務となった。

「前書き」で記したように、本書ではハンガリーの政治や社会の歴史を描くことはしない。個人的な自伝を超えるものではない。したがって、*Szabad Nép* の役割を分析することも出来ない。これから先の数頁の記述も、非常に狭い限定されたテーマを扱っている。いわばスチル写真に圧縮するように、編集局の生活（その中における私の生活）の特徴的な性格や出来事を描いてみたい。

Szabad Nép はけっして党の声を通訳するだけの空箱ではなかった。ほとんど毎朝、編集局長のデスクの電話が鳴っていた。ラーコシ・マーチャーシュからの電話で、その日の記事を批判し、指令を与えるのだ。ゲルーやレーヴァイも同じようなことをした。ある日、ベトレン・オスカールが党の会議から戻ってきて、担当デスクに要点を説明し、党指導部から与えられた課題を伝えた。私は党本部の国家経済部長のフリッツシュ・イシュ

トヴァーンから、定期的に指示を受けた。ある意味で、二重の指揮下で働いていた。直接の上司である編集局長と、党中央関係部局長の二つの指示である。他のデスクも同じように、二重の指揮下にあった。

このような指揮下にあったのだが、指示が詳細にわたることにはきわめて稀だった。編集局長にはもちろんだが、担当デスクにもかなりの自由度があった。今になって驚くほど、当時の私は仕事の自由度を持っていた。二一歳そこの若者が、何を書き、同僚記者と何をレポートするかを自分で決めることができた。

編集局には拘束労働時間というものがあった。仕事の始まりと終わりを決めていたのは、仕事の内容である。必要であれば、週末も働いた。規律と自己犠牲は当然のことで、誰が命令したのでもない。怠惰が原因で誰かを叱責しなければならなかったことを、ひとつとして覚えていない。この点で私の眼が曇っていたのかもしれないが、同僚同士の諍いや怠惰を経験した記憶がないのだ。編集局は戦争の最前線にいる同志のような性格をもつ共同体だった。

編集局では生涯の友情を獲得することができた。ケンデ・ピーテルとは以前から友人だったが、編集局時代を通して友情が深まった。リュウチエイ・パールとは一時だけ同部屋だったが、彼は後に一九五六年の優れた戦士になった。非常に短い間に友

情関係が発展し、私の政治的・精神的な成長に非常に大きな役割を果たした。これについては、次章で触れることにする。ドゥチ (Fonyi Gézané Majláth Auguststa という、か細い痩せた婦人で、皆は Duci と呼んでいた) は *Szabad Nép* 紙編集局のアルヒーフを構築した室長で、彼女とも深い友情で結ばれていた。書物でいっぱいになった私のアパートはさながら巡礼地のごとく、*Szabad Nép* 時代だけでなく、一九五六年以後も、多くの友人が集まって静かに議論する場になった。

* 革命後、ドゥチの書棚には二枚の写真が飾ってあった。シャルコズイ・ジョルジュとギメシユ・ミクローシユである。ドゥチは二つのグループを橋渡しできる唯一の人物だった。多くの友人関係を結ぶことのできる人で、*Szabad Nép* 紙編集局からナジ・イムレのグループに集まった人々や、新旧の *Világs* 紙の編集者・同僚、種々の人民作家グループの人々とも友人関係を取り結んだ。ドゥチはシャルコズイ・ジョルジュ夫人で *Világs* 紙の編集者のマールタと密な友情関係を維持し、彼女の編集と出版を助けた。一九八八年に没した。

この時期を通して、私の中に、部下の同僚とは「仕事」の関係だけでなく、友人関係も結ぼうという意識が形成された（これ以後もその意識は残り続けている）。

職場でどのような人間関係が出来上がるかは、上司の人格に

よって決まることが多い。ベトレン・オスカーは党軍隊のような非情なほどの厳格さを感じさせ、皮肉と冷徹を伴う賢さがあった。これに対して、ヴァーシャルヘイからは、知性、肩の力を抜いた余裕、ユーモア、楽しい風刺が湧き出ていた。ギメシユ・ミクローシユとの会話は精神的な楽しみで、多面的で深い教養と鋭い分析能力が内面から放射しているようだった。

実経済から学んだもの

経済大学に通うことはなかった。社会主義経済がどのように機能しているかを、大学教員の講義から学ぶことはなかった。私にとって、*Szabad Nép* で獲得した生の経験が、このシステムの機能について勉強する最初のコースになった。

後に、私が著作で「古典的社会主義システム」と命名した経済が、どのように機能しているかについて、いろいろな形で学ぶことになった。国家経済委員会に同席した時には、手に届くほどの近さで、集権化された経済管理が何を意味しているのかをこの眼で見ることができた。たとえば、分権的市場経済では何百万の相互に自立した市場参加者の意思が、無名的プロセスの中で同時に形成されていくのに対し、ここでは经济管理の全権を党から委託されたゲルー・エルヌーが決定している。決定に先立つ準備を行うのは、党中央と政府の機構である。選択

肢が用意されることもあるが、最終的にはこの会議で彼が決定を下す。冷たく、人間的感性を見せることのない、冷徹で鋭利な知性で思考する人物のように見えた。経済学を習得したようには見えなかったが、特別な記憶能力があった。それぞれのアイデアを議論する時など、対象となつてゐる問題に関連したすべてのデータ、情報、種々の見解をすべて空で引用できた。

こうした能力は他の経済指導者に大きなインパクトを与え、優れた経済専門家として尊敬を集める力になつてゐた。当時の私の知識では、ゲルールの意思決定がどれほど専門知識に裏付けられたものか判断できなかつたが、言葉から放射される説得力と重厚さは私にも大きな影響を与えた。

大臣や副大臣、省庁の官僚機構の高いポストの指導者たちと会つて話す機会は多かつた。これらの話し合いは、概ね、率直かつ専門的なもので、経済管理で何が起つてゐるかを教えてくれた。このほか、しばしば工場を訪れて、工場長や工場の党書記、技術指導者や労働者と会合を持つた。同僚たちの出来事に即した詳細な報告は、これらの直接的経験を補充するものになつた。会話の相手がどれほど率直だつたのか疑わしい場合には、それに注意すべきシグナルを私の許に送つてくれた。

この自伝の準備のために、当時の記事を再度読み返して見ると、当時、何が私を一番悩ませていた問題だつたのかが、眼前に描かれてきた。以下では、当該問題に関する私の記事のタイ

トル、あるいは文言を括弧で引用する。これらの引用は、私が感じていた問題を一瞥するのに都合が良い。ただ、そのどれも、私の分析は間違つており、提案した処方箋も間違つていた。

たとえば、集権化システムは課題遂行における規律が貫徹される場合にのみ、作動することができると認識してゐる。計画規律、労働規律、賃金規律がほとんど守られていないことがショックングだつた。記事全体がこれを扱つてゐるのだが、解決策を別のところに求めてゐた。経済実績とインセンティブの関係を理解してゐなかつた。規律性の重要さを説明する、指令の遵守を促進する、規律違反には罰則を設けることで解決されると信じてゐた。

労働者が繰り返して労働ノルマを緩め、賃金を誤魔化すのを知つたが、工場の指導者がそれを手助けしてゐることに当惑した。この賃金規律の弛緩と規律違反を容認してゐる企業経営者・労働者を、雷鳴のごとく叱責する記事を書いた。「社会主義の賃金・労働規律の強化に、大きな注意を払わなければならない。……すべての賃金弛緩と裏付けのない超過勤務で嵩上げした成果に対処して初めて、競争が計画達成を助けることができる」。この問題の背後に、国家所有に避けることのできない問題があることを理解してゐなかつた。所有者、被用者、雇い主が利害の対立を協議で解決していくのではなく、労働者の賃金引上げの試みを、賃金割当によつて阻止しようとしたのである。

工場では無駄が多く、生産性が低いことを示す多数の事例が知られていた。私は多くの記事の中で、節約の重要性を説明することで、問題が解決できると考えた。「節約——労働競争のひとつの中心課題」(私の署名記事タイトルのひとつ)⁽¹⁰⁾。これは企業指導者に、生産量の増加に努めるだけでなく、製品の品質やコストの削減にも努めるべきだと論そうとしたものだが、その一方で物的倫理的インセンティブが生産量の増加だけを一面的に促すように、企業経営者を縛っていた。

私は、企業経営者が自らの仕事を十分に遂行していない、うまく組織していない、十分な情熱をもっていない、さらに間違いを指摘する労働者の声に耳を貸さないことに、問題の根源があると考えていた。この批判は、中央の経済管理局や省庁あるいは地区の党組織に流布された。当時の語法を使って引用すれば、「大衆迎合に流される」で、官僚たちが十分に厳しく対応せずに迎合していることを指摘したのだが、彼らに間違った解決策を提示した。「規律違反を容認することは、敵の利益になるだけだ。労働規律の強化と労働時間の完全利用のために、原則的かつ系統的に闘うことは、不人気な課題だろうか。このような闘う指導者が不人気なのは、遅れた労働者に対してだけだ⁽¹¹⁾」。また別のストライキ問題では、他の理由が見つからないために、怠惰にその原因を見つけたと信じていた。この説明は間違っていただけでなく、罪深いもので、「サボタージユ参

加者」への過酷な抑圧を支持する結果になった。

これらの問題が「システムに固有」のものであり、システムに内在するものであるなど、一瞬たりとも考えたことはなかった。それどころか、多くの問題や間違いを感じていたにもかかわらず、社会主義が資本主義体制より優位にあるという確信は揺らぐことはなかった。もし困難があるとすれば、それは一時的なものだと考えていた。スターリンから受け売りしたゲルムの言葉を、そのまま真に受けていた。「これらの成長の諸困難は、そのうち成長に転化する」。国家所有は私的所有より高い生産性を保証しなければならぬ、中央計画の効率性は市場アーキーのそれより高くなければならぬ。かくして、私は思考において、規範的アプローチと実証的アプローチ、社会主義システムに対する要請と現実を区別することなく、それらを一緒くたにしていた。

労働を搾取されている資本主義企業の労働者と違い、社会主義企業の労働者にとって「工場は自分の物」であるから、情熱を持って労働するだろうという点を非常に重視していた。この労働に対する新しい関係が、労働競争、成果を伸ばす自発的な提案、平均をはるかに超えるスタハノフの実績を生み出す。これが社会主義体制の優越性を説明するもつとも重要なものだと信じていた。それゆえ、あたかも強迫観念のように、労働競争の種々の形態を取り上げていた。「社会主義の勝利のために、

資本主義の生産性を凌駕することが必要だ。……したがって、広範圏にわたって新しい技術、新しい機械を導入し、さらなる競争とスタハノフ運動によって、より高い生産性を目指して闘わなければならない」。

濃密な仕事のために、文字通り、朝から晩まで編集局の事務所に缶詰状態だった。一般市民の日常生活を送っていなかったが、それを同僚や部下に強制しなかった。当時は編集の仕事で知り合った人々とも会うことはなかった。優れたマルクス主義者は、消費費ではなく、生産に眼を向けなければならない。私自身の体験では何も感じなかったが、食料供給の不足やそれから発生する不満が存在するシグナルは受け取っていた。このシグナルは非常に抑制されたもので、遠くの小声の囁きを聞く耳を持つていなかった。私の周辺でも、この問題については、私と率直に話し合うのを控える人々がいた。

定期的に訪ねていた母と姉は、食料供給に問題があることをそれとなく私に伝えていた。しかし、それらは私の耳を素通りしていった。後になって、どうしてもつきりと率直に話してくれなかったのかと、リリーに尋ねたことがある。「それを話すのが怖かった」と答えた。私が彼らに何か悪いことをすると恐れていたからではなく、厄介な事だという様子が見えたので、それ以上苛立たせたくなかったからだという。迷惑をかけるからという彼らの言葉をそのまま信じなかった。家族の相

互愛は強かったが、我々の間に目に見えない壁が立っていたようだ。

こうして、非常に多くの観察や経験が、私の頭の中に蓄積されていった。他の人と同じように、アイディアの整理や因果関係を確定する精神的加工は、一定の「公理群」に依拠している。公理群を作るのは純粹な推論だけとは限らない。非常に多くの部分は、「メタ合理的要因」なのだ。たとえば、信条、偏見、好み、欲望、倫理的判断がそれである。これらのメタ合理的要因は、いわば入口の扉のような役割を果たす。ある思考や印象の流入に対して、どの扉を開け、どの扉を閉めたままにしておくかを決定する。当時の私の場合、この扉が間違つて作動していた。信条を揺さぶるような経験や思考の前にある扉を閉め切っていたのだ。認知的不協和理論で知られている防衛的低減メカニズムが機能したのだ。深い確信と矛盾する情報の抑圧、すなわち元の世界地図を保持し、それによって内部の精神的平和を維持するための自己確信なのである。

もしメタ合理的要因の部分的な影響によつて公理群が変化すれば、その「同じ」蓄積された経験材料はまとめて別様に整理され、観察現象間に新たな因果関係が描かれるようになる。私の場合にもこの再整理が生じたが、その詳細は以下の章で扱う。これは紙の上に鉄粉を乗せて、裏から磁石を当てるようなものだ。磁石の影響で鉄粉がある模様を描く。その後で、磁石を別

のポイントに移動させる。そうすると、鉄粉はすぐに別の模様を描き、新しい整頓状況に置かれる。

別のアナロジで考えて見よう。不思議で巧妙な画を描いたオランダの芸術家、M・C・エッシャーをご存じだろう。良く知られた画の中に、黒い鷺鳥が空中を画の左から右へ飛んでいるのがある。この同じ画を別の視点で見ると、突然、黒ではなく白い鳥が、左から右ではなく、右から左に飛んでいるように見える。

Sabbat Nip 時代に蓄積した経験を新しい別の視点で見るとうになるまで、まだ数年が必要だった

知的荒廃

この時期には、少年時代に貧欲に習得した読み物をほとんど活用できなかった。いくつかの記事に、コシュート、セーチェーニイ、ペトウフィーからの引用を挿入したことはあるが、それ以外の読み物はまったく使わなかった。過去の読書が何か仕事に役立ったとしたら、それはただ教養ある人間として出発したということだけだった。私の担当部局に「属していた」何人かの作家がいて、そのうちのウルキーニイ・イシュイトヴァーシとカリンティ・フェレンツは外部の常連の書き手だった。彼らとは良く理解し合えた。私を機関の上司と見るのではなく、

センスの良く文化的な話ができる友人として付き合ってくれた。彼ら二人は党の現状に不満をぶつけることがあり、ウルキーニイの方がカリンティよりきつい言い方をしていた。もつとも、彼らの批判が経済記者として私が見たものより、作家的な鋭さや予見性を持つていたとは言いがたい。私と同じように、政治的な盲目性で歪んでいた。

同時代人のハンガリーやソ連の文献以外の書物を、手にすることは稀だった。編集局の仕事でその時間もなかった。他方、マルクス・レーニン主義の文献については、以前より丁寧かつ方法的に読みこなすようになっていた。記憶も良く働いた。他の誰もが考えつかないような引用を記事の中で使うことができた。

今から顧みると、当時の経済学的知識のなさはひどいものだった。ハンガリー語訳『資本論』の書評で同時代の「ブルジョア」理論を論じたが、この議論はすべて第二次資料に依拠していた。批判した理論のどれひとつも読んでいなかったからである。他の連中もそうやっていた。批判する前にその原著作を読むという知的態度の基本的要件について、誰も教えてくれなかった。自分から身につけることもできたかもしれないが、そうならなかった。次の出来事も、専門的要件の水準の低さが為したものである。『資本論』の書評を書き、党学校で優秀な成績を取っていたので、『資本論』の翻訳者でマルクス経済大学の

創設評議員だったナジ・タマーシユが、政治経済学を教授しようとして私を誘ってくれた。しかし、その誘いを断った。準備できていないと感じたからではなく、*Sabud Nep* の仕事に全力を尽くしたいと思ったからである。

半世紀を経て、当時の私の記事を再読してみると、内容的に重大な誤りがあるだけでなく、精神的な水準の低さに驚く（それが内容と分けて評価できるとしたら）。

記事のスタイルは平易で、当時の他の新聞で頻繁に見られたハンガリー語的でない概念化は見当たらない。他方、成果に対しては敏感で、素晴らしい実績を称えるようなプリミティヴな情熱を見せている。自分の眼に間違いと映ったものに対しては、要求するような調子で、間違いの除去を勧めている。

私のすべての記事は、一瞥可能な構成になっている。初めがあり、終わりがある。このような構成法は私の思考に固有な特徴のようだ。議論について見れば、きわめて平板である。間違いの追求においても、もつと器用に洗練された形で議論できていれば良かったが、当時の記事や論文にはそれが無い。

署名論文であれ状況分析レポートであれ、データを伝えるものを良く書いた。数字でいっぱいになっているものもある。はっきり言えることは、意図的に特定の目的のために、自分が見つけたデータを改変したことは一度もない。ただ、ほとんどの場合、資料源泉を確認しなかったし、使いたいデータを他に入

手できるデータと比較することもなかった。恣意的に切り取ったデータを使ったり、比較可能性の基本要件を犯しながら、ハンガリーのデータを先進資本主義国のそれと比較したりした。包括的データを部分データや成長の瞬間的狀況のデータと対比させたりもした。誰もそのことを教えてくれなかったし、データを正しく扱うための必須の規則などに注意を向けてくれる人もいなかった。プロバガンダ的主張の正しさの証明にこれほど熱中していなければ、このようなことは自然に分かつてきたはずであった。

とにかく、速くたくさんの記事や論文を書いた。そのことは上滑りの内容から分かる。そのことを知るのに、もちろん五〇年の時間は必要ない。数年後に新聞記者の仕事を断ち、学問研究を始めた時に、ひとつひとつの問題を明瞭化させるために、数週間から数ヶ月を費やした。以前の仕事のスタイルを省みて、恐れおののいた。新聞記者時代の自分を見下し始めた。慌てて混乱したまま情報提供する即席記事の世界を見下し始めたのである。もちろん、このような極端な一般化もまた誤りであることは分かっている。良心的に仕事を行う記者、記事で使ったデータを丁寧に検証する記者、高い知的水準で仕事をする記者はいる。ただ、私はこの仕事に嫌気が差して、こんなに長期にわたって新聞記者だったことを、自分にすらい聞かせたくもなかった。

自分の書き物を時系列にそって最後まで読み終えた時、何の進歩も感じられなかった。逆に、平板さと精神的怠惰を感じるだけであった。一九五三年に二五歳になっていた。光り輝く歳だ。この世代には、すでに大学の学業を終えて、独創的な作品を世に問い始めた知識人がたくさんいる。それに対して、私はどうだ。編集局のトレッドミル（足踏車）のベルトに空疎な書き物を生産し、まともなハンガリー語で概念化できない同僚や省庁・企業の官僚たちの論文を、読めるハンガリー語に翻訳していた。一七歳のフレッシュな頭脳で「雪下の種子」のエッセイを著した頃に比べ、精神状態は荒廃していた。

倫理的釈明

本書は私自身に対する公開自己判決を意図するものではない。あくまで、私の生涯に起きた出来事を話し、それがどのように、何故に生じたのかを語ることを目的にしている。もちろん、読者は自らの価値体系によって、私に判決を下すことも自由である。私もまた良心にしたがって、私の中で判決を下す。私の記事によって被害を受けた方々に、お詫びしたい。率直な謝罪よりも、行動で示すことが重要だと思う。

多くの人は倫理的な釈明を、足し算のように考えている。プラスの行動とマイナスの行動がある。それらを足し合わせると、

計算結果が出る。プラスであれば、結果に安心する。

実際問題として、償いと改悛の背後には、このような加法的視角が隠されている。「罪を犯したが、善行でそれを帳消しにできる」と考える人がいる。私の印象では、生涯の友人、ギメシュ・ミクローシュはこのように考えていた。負い目がなくなるまで、抑圧された革命のために非合法で闘い続ける。必要なら、死をも厭わない。ただ、これまでの政治的行為によって犯した重大な過ちを、消してなくしたい。^{*}

^{*} もちろん、ギメシュがこのように考えていたかどうか、議論の余地がある。

言葉だけでなく、行動で悔悟と善行を示した人々を尊敬する。しかし、私はこのように考えない。ある人生の時期に犯した過ちを、別の時期の成果で相殺できるとは思わない。過ちは償いきれない。苦しみを味わった人は、もうこの世にいないかもしれない。とすれば、後年の善行による償いを受け取る人がいない。もし生きていて、彼あるいは彼の後継者が後年の善行を認できたとしても、以前に被った被害を元通りにすることはできない。

大人になった人生の最初の時期に、私は誤った道を歩んだことを認識しただけでない。重大な決意をもって、新しい道に入

った。過去数十年にわたる私の仕事が多くの人々の利益になったと、確信してもいる。しかし、これは「悔悟」のために行ったことではない。*Sabud Nep* 時代に行ったことには別の請求勘定を作るし、その請求書は残ったままになっている。

第4章 覚醒の始まり（一九五三年―一九五五年）

一九五三年三月五日にスターリンが死去した。これによって、共産主義世界はひとつの歴史時代を終え、新しい時代を迎えた。かなりのタイムラグをともなつて、政治・社会環境に大きな変動が生じた。それらの変化は私の世界観、思考、行動様式を変へることになつた。

「新時代」

ソ連邦に生じた人的政治的転換は、数ヶ月経つて、ハンガリーでもその影響を感じられるようになった。ハンガリー共産党の幹部がモスクワに呼ばれ、危機的な政治経済状況を厳しく叱責された。「スターリン同志のもつとも優れたハンガリーの弟子」と呼ばれることに喜びを感じ、スターリンの指令を実行することで東欧共産党指導者の代表者になりたかつたラーコシ・マーチャーシュを、モスクワの新指導部は嫉妬にも似た感情を

込めて格下げした。個人的権力を剝奪したので。党書記長の地位と権能は維持できたが、首相の地位をナジ・イムレに譲つた。ナジは一九四五年の政府で農業大臣を務め、彼の指導の下に大地所有者から農民への農地分配をおこなつた。「農業大臣」という後光を持つ古い共産主義者で、ラーコシやゲルととみに一時モスクワに亡命していたが、いくつかの問題で党主流のラーコシ派と対立していた。処刑されたライク・ラースローや監獄に入れられたカードール・ヤーノシュのような運命を辿らなかつたが、ラーコシの仲間に属さず、国を操る狭い派閥のメンバーでもなかつた。風格があり、味のあるハンガリー語を話し、人々に共感を寄せる思考をする点で、他の指導者と違つていた。

ハンガリー共産党の六月の中央指導者会議で、モスクワから持ち帰つた指令が伝えられ、重要な決定が下された。それに続き、新しいナジ・イムレ内閣が成立し、首相の国会演説が行わ

れた。「六月決定」、「ナジ・イムレ演説」、「政府プログラム」、「新時代」は、この新時代の同義語として使用され、ハンガリー共産党の一九五三年以後のポスト・スターリン主義プログラムを意味するものであった。可能な限り当時の用語法で、このプログラムの主要な特徴をまとめてみよう。

——一九五三年以前の政治において重大な過ちが犯された。党の理念ではなく、その実現の仕方の問題があった。その過ちを排除しなければならないが、基本的な体制は維持しなければならない。

——党の経済政策においても大きな誤りがあった。生活水準上昇の課題に、十分な配慮を欠いていた。

——五カ年計画指標の引き上げは現実的でなかった。社会主義工業化において、過度な推進が見られた。

——農業政策においても歪曲が見られた。今後も集団的農業の創出を正しい目標とするが、自発性の原則を守らなければならない。

——「社会主義の法則性」が破られる重大な誤りがあった（これは党の特殊用語で、虚偽にもとづく告発、拷問、大量拘束、労働キャンプ、その他の野蛮な行為を指す）。今後、このようなことを行つてはならない。

——共産党は大衆から離反した。人民戦線を構築して、党の指導の下にすべてのハンガリー人民をまとめ上げなければなら

ない。

「新時代」プログラムは、後に「改革共産主義」と名付けられた思考方法のかかりのものを含んでいる。以後の数ヶ月間でさらにプログラムが拡張されたが、後年の改革共産主義にみられる二つの重要な要素が、この時にはまだ欠如していた。そのひとつが、「市場社会主義」である。これは官僚的中央計画化の部分的あるいは全体的な解消と、市場的調整による補完を意味する（これについては、本書でさらに詳しく記述する）。もうひとつは、「民主主義」である。これは私が意図的に概念化したものである。当時の用法では矛盾する願望を表現している。一方では、国民が公的問題に意見を述べることを認め、「工場民主主義」や「党内民主主義」を貫徹させる。他方では、共産党の権力独占を維持する。この改革共産主義理念がより大きな意味をもつようになるのはもつと後のことで、たとえば一九六八年プラハの春の「人間の顔をした社会主義」理念が、そのひとつである。

ここで、再び、一九五三—一九五四年の私の思考状態に戻ることにする。

他の共産主義者と同じように、スターリンの死は大きな損失だと感じた。それから歴史的転換が生じることを予期できなかった。葬儀での弔辞にあったように、後継者はスターリンの政治路線を継承するものだと考えていた。

ハンガリー共産党中央指導部の六月決定やナジ・イムレの演説を読んでも、それが後にラディカルな変動を導くものだという手が見つけられることができなかった。六月プログラムには親近感をもった。しかし、もし解放された情熱をもってこの時期を過ごしたと言ったら、当時の私を美化することになろう。私は六月以前の時代の犠牲者ではなかったから、息吹の時がやってきたと感じることはなかった。党はこう決定した。したがって、私もまた静かに規律をもって、これを受け止めた。ソ連共産党の歴史でも、以前の政策とはかなり異なる「新時代」があったから、党の方針に根本的な変化が生じたこと自体に驚きはしなかった。だから、そういうものとして受け止めた。ラーコシの独壇場だった指導的役割に代わって、二人の指導者が立つたことについても、とくに重要性を感じなかった。これらのことも、当時の私の政治的ナイヴさと未熟さを示している。

監獄から戻った友人たち

「新時代」になって最初の記事類には、以前のものと比べて変化が見られない。あるとすれば、その論調から情熱が薄れ、抑制されたスタイルで、より客観的になったこと位である。

夢遊病から揺り動かされる事件が、私を覚醒させてくれた。
一九五四年の夏の終わりに、パラトン湖のある保養所で、ハラ

ステイ・シャーンドルと会った。長期の監獄生活から解き放たれてそれほど時間が経っていなかった。シャニイ小父さんはホルテイ時代からの共産主義者で、一九四五年からは共産党の第二新聞 *Sabadság* 紙の編集者になった。以前に何度か会ったことがあり、親近感を抱いていた。一九五六年の殉教者として悲劇的な死を遂げたロシオンツイ・ゲーザの義父である。私が入社した時に、ロシオンツイ・ゲーザは *Sabud Nép* 紙の幹部の一人だった。私との付き合いは表面的で、古い尊敬できる党员という知識しかなかった。ハラストイは一九五〇年に、ロシオンツイは一九五一年に拘束された。後で分かったことだが、ラーコシ一派がカーダール・ヤーノシュを首謀者に仕立てた事件で、彼らも公開裁判にかける予定だった。しかし、この公開裁判は実現せず、「新時代」になっても囚われの身から解放されず、監獄に留め置きされていた。

彼らが自由な身でないことは知っていたが、どんな運命にあったのかまったく何も知らなかった。彼らの拘束を聞いた頃は、とくに動揺を感じることもなく、その事実を受け止めた。党が古い党员について決めたことなら、それなりの仕方であつて、本当に罪人かどうかを明らかにするのだろうと考えていた。彼らが無実なのではないかという疑問は、私の中に湧き上がらなかつた。何の疑いもなしに、党の決定を信頼した。

それから数年経ち、パラトン湖の保養所の庭で、シャニイ小

父さんと眼と眼を合わせて話し合った。落ち着いた口調で、彼が受けた屈辱的な仕打ちを語ってくれた。虚偽の事件の告白を迫ったのだ。言葉で説得できないと分かるや、拷問を始めたという。

こういう告発を準備する時には、一人一人の被疑者に「担当官」がつく。国家保安局の職員がその役割を指名され、尋問を指揮する。シャニイ小父さんの「担当官」はM・Mだった。私はたまたまそのM・Mを一九四五年から知っていた。彼もブダペスト五区のMADISZのメンバーだったからだ。M・M自身が老ハラストイ・シャンドルを殴ったのではなく、何時どのような力で殴るかの指示を与えたという。一九四五年にM・

Mと知り合った時には、私と同じように、情熱的で自己献身的な共産主義青年運動の活動家だった。それから会うことはなかったが、彼はけっしてサディスト的な性格の持ち主でなかったと確信している。残虐を好んでハラストイ・シャンドルを殴ったのではなく、彼の現場ではこれがふつうの手順だったのだろう。誰かを党の敵とみなせば、あらゆる手段を使って、場合によっては拷問によってでも、真実を引き出さなければならぬ。下級の捜査員の上司が、嫌疑の裏付けをもって、スパイや破壊行為があったと言っているのだから、真実は明らかだ。陰謀が事実で、容疑通りの役割を認めるまで、被疑者を拷問する。

* 本章および別の章で記したイニシャル表示は、実際の氏名のイニシャルを表すものではない。実際の氏名を公表する問題については、後に触れる。

このドラマの当事者からすべてを聞いて、恐れおののいた。もう一方の当事者を知っていることが、このドラマの悲劇性を増幅した。それも何の悪意もなく、尊敬できる気高い意思をもって人生を歩み始めた人間なのだ。明らかに、当事者の個人的性格によるものではなく、体制に付随する運命的な問題がこのような悲劇をもたらすと知ったことは、とくにシヨッキングだった。

シャニイ小父さんとの出会いによって、その瞬間まで保持していた共産主義者の確信の倫理的基礎が崩れ始めた。ハラストイ・シャンドルを有罪と断定した時に、党は嘘をついた。そして、私はその嘘を信じた。この事件が嘘なら、他の事件もそうだろう。嘘が周りに満ち満ちていたのに、馬鹿なことに、私は何の疑問を感じることもなくそれを信じてしまった。それだけでない。好むと好まざるとにかかわらず、私も嘘を流布する役割を担ってしまった。

ハラストイ・シャンドルも私も、ペンで生きる人間だった。別の経歴を辿ることもできたが、今日までペンで生き続けてきた。ペン先から出るものが本当に真実だろうか。そのことは

我々にとって、特別に重要なことだ。率直と欺瞞、真実と虚偽、シャニイ小父さんとのお話を終えて、私の思考がこれらのことをめぐって転回しだした。

いかなる目的とはいえ、二〇世紀になって人を拷問するなど、耐えきれないと感じた。罪人を虐待するのも容認しがたいが、無実の人を虐待するのは以ての外だ。人類の進歩を導く使命をもつ党が、こんなことをするのか。

前章で既述したように、一九四七年から経済問題を扱い、あれこれの否定的現象を観察してきた。にもかかわらず、マルクス経済理論、計画化理論、あるいはハンガリーの経済政策に何か間違いがあるのではないかと考えるまで、経済分析を進めることができなかった。私の世界観は、倫理的土台の崩壊によって揺さぶられた。私がこれまで信じてきたもの、考えてきたものが、すべて修正されなければならないと感じた。倫理的土台が虚偽であれば、この受容できない倫理的原理にもとづいて構築された精神的構築物も、再検討なしに受け止めることはできない。

当時の私の頭脳にあった多層の思考材料が粉々に砕けたというのではない。精神的構築物を構成していた要素を繰り返し思考し直すために、あらゆる理論を突き詰めて再検討しなければならなかったのだ。これはかなりの時間を必要とした。この日から、何の躊躇もなく受け容れていた共産党の宣言や呼びかけ

の文言の末尾に、以前に記した感嘆符に替えて疑問符を付すようになった。

啓発的な会話と読書

幸運なことに、思考の再検討を助けてくれる人々がいた。まず初めに、リューチェイ・パールが六月決定とナジ・イムレの政策について私に話し始めてくれた。彼はこの会話を切り出すことで、リスクを引き受けた。というのは、その内容が共産党の内部規則からすれば「反党的」だったからである。私を信頼できる友人と確信した上でのことだった。彼の議論によって、私の思考に影響を与えることができると確信していたのだろう。最後まで、多くの政治問題について親密な会話が続いた。当時、リューチェイは *Szabot Nép* の理論担当デスクだった。その前には農業デスクを担当し、ナジ・イムレの専門分野である農業問題に精通しており、暴力的な協同組合化、農民への強要、富農の追放等の諸事件を良く知っていた。

リューチェイが教えてくれた拘束や拘留に関するデータは衝撃的だった。私が覚えている数字がひとつある。スターリンが死去した当時、ハンガリーの人口は一千万人弱だったが、判決をうけた者、告発前の拘束状態にある者、判決なしに拘留されている者の政治犯の総数が、四万人を超えるというのだ。ハラ

ステイ・シャーンドルの個人的な事件と同様に、このデータは私に大きな影響を与え、思考を急進化させることになった。それまでは、五年計画の引き上げが非現実的で、そのために生活水準が落ちたと理解していた。当時まだ、私は経済的困難が計画化の失敗で、体制の失敗だと考えていなかった。ところが、政治的抑圧の規模を知って、別のところに基本的な問題があることに目覚めた。

* 一九五三年六月、ソ連共産党政治局はハンガリーの指導者を呼び寄せた。この会合で、ラーコシの首相解任とナジの首班指名を決めた。ラーコシはこの会議の報告の中で、拘留・拘束数がおおよそ四五、〇〇〇人という数字を上げた (Barth, 1969, 42, p.)。私が推測するところでは、モスクワの会議で秘密情報にされていた数字が、ハンガリー共産党本部からリークされ、リユーチエイにまで届いたのだろう。

実際にどれほどの数だったのかを確定することができなかった。というのは、一九五三年一月に内務副大臣ピロシユ・ラスロと最高検事ツァコー・カールマーンが党指導部に伝えている別のデータがある (Reiner 1969, 42-23, p.)。このデータはリークされていない。それによれば、何らかの形で捜査・拘束の対象となっている関係者は、七四八、〇〇〇人とされている。ここには、拘束・拘留から解かれた人々、訴訟や捜査が終了して強制転居地から帰還を許された人々などすべてが含まれている。それにしても、これは実に全人口の七・五%である。

リユーチエイとの会話によって、思考の覚醒が生じていたので、ギメシユ・ミクロシユから知的な修正を受ける準備ができていた。彼はベルリン蜂起のニュースが届いた日のことを思い起こさせた。確かに、それについて一言二言、言葉を交わした。その時はとくに重要性のある事件だと思わなかったのだが、彼は違っていた。それから数ヶ月経って、彼はこの歴史的重要性を私に説明し始めた。一九二一年のクロンシュタットの蜂起鎮圧以後、社会主義権力に対して人民が立ち上がったことはなかった。ベルリンの人々はそれをやろうとしたのだ。確かにソ連軍の戦車がすぐに鎮圧したが、労働者が権力に立ち向かった事実を認識する必要がある、と説明してくれた (ギメシユが将来を見据えていたと言うつもりはないが、ベルリンで始まったことの続きがあり得ると予想していたと思う)。

同じ頃、レーヴァイとギメシユとの会話で飛び出た文言を、ギメシユが教えてくれたのだが、それを忘れることができない。二人の会話は、ソ連さらに中・東欧の歴史の中で、「人民」は常に共産党とともにあるとは限らない、という話になった。そのような場合でも、共産党の権力を創出し、保持し、維持し続けなければならない。もし必要なら、「野蛮な手段を使ってで」 (mit barbarischen Mitteln) と、レーヴァイはドイツ語で言ったという。この共産主義者のメシア主義と赤裸々なマキアヴェリズムの堅固な信仰は、私の記憶にいつまでも残った。

この信仰の二つの要素から逃れたいと感じた。つまり、人々の意思に反してメシア的救済制度を押し付けなければならぬことや、そのメシア的目標を達成するためにあらゆる手段の行使を容認することからの決別である。

ギメシユは *Sabard Netz* の特派員として、ジュネーヴに長く滞在したことがある。その経済、豊かな体験、直に見た社会主義に対する資本主義の経済的優位性が大きな影響を与えたと、私に話してくれた。

前章で、メタ合理的要素が思考の扉になっていて、思考の流入を閉じたり、あるいは逆に流入の道を開いたりするという話をした。長期の精神的閉鎖状態から、今度は一度にあらゆるものを読み始めた。もつと正確に言えば、スターリンの政策を批判している作品を貪り読むことになった。

当時の私は、半分あるいは四分の三ほどの共産主義者だった。こういう状態の場合、「外部から」敵対的に共産党を批判しているような、すべての問題で一八〇度敵対している作品は、大きな影響を与えない。より大きな影響を与えるのは、「内部」から発せられた批判である。スターリンに関するアイザック・ドイッチャーの大著をドイツ語で読んだ。すぐに別のスターリン像が見えてきた。それから、ドイツ語で読んだ作品のタイトルも著者も思い出せないのだが、反スターリン主義の新たな光でソ連共産党史を見る視角を与えた著作もあった。

精神的な興奮を伴って、ユーゴスラヴィアの著者たちのもの、とくにカルデリのものを読んだ。¹³ これらの著作は、スターリンとテイトーとが敵対するようになり、ユーゴスラヴィア共産党を国際共産主義共同体から排除した後に、出版されたものである。この国際状況の中で、ユーゴスラヴィア共産党指導者たちには、スターリンが指導するものとは異なる道を歩む必要がでてきた。当然のことながら、新しい道を探す努力はスターリニズムに対する厳しい批判を伴うものだった。社会主義経済のスターリン主義的形態が「官僚的集権化」を伴い、分権的な社会主義管理はこれよりはるかに健全で効率的なものだという概念化は、ユーゴスラヴィアの著者の作品で初めて出会った。これらの著者は市場社会主義に関するランゲの研究や、¹⁴ それに続いて一九三〇年代に展開された西側での論争にまったく触れていないが、自らの発案と自らのマルクス主義言語で、集団所有と市場的調整の結合思想を展開したものである。ユーゴスラヴィアのアプローチでは、分権化は二種類のプロセスを含んでいる。古い集権化された計画指令的経済管理から市場的調整への転換と「自主管理」の導入である。後者は、地域の管理機関や工場労働者によって選出された組織が、自立性を得ることを意味している。ユーゴスラヴィアの著者たちの批判はソ連モデルの機械的適用に対するもので、集権化にかかわる固有の否定的現象に向けられたものだった。ユーゴスラヴィアのイデオロギー的

革新である「自主管理」は、当時の私には、工場民主主義を要請するハンガリーの「新時代」要件にうまく適合する理念だと思えた。

共産党イデオロギーからの離反は、多くの党員でいろいろな度合いで進行していた。最初の段階は、スターリン体制の暴力テロへの対峙である。しかし、この段階ではまだ、「プロレタリア独裁」（共産党の権力独占）を含む、マルクス・レーニン主義のすべての基本定理は保持されている。これに従えば、スターリンは「重大な誤り」を犯し、真のレーニンの道から外れたということになる。これについては、後にまた触れることにする。この段階に続いて、いろいろな理解が生まれて来る。たとえば、ソ連邦や他の共産主義国に存在している「現実」は、スターリンだけでなく、レーニンやマルクスの基本的思想が体现されたものだと考える党員もいた。私は共産主義イデオロギーからの非幻想化の道を最後まで辿った。本章が対象とする歳月では、私はまだ非幻想化と覚醒の第一段階に留まっていたが、集権化と市場のテーマに関する諸問題では、この段階を超え始めていた。

初めての「命令拒否」

私の世界観と思考に生じた継続的な変化は、やがて行動様式

にも影響を及ぼすことになった。これまで、私は恐怖から共産党の指令を実行してきたのではなく、私自身の確信に従って実行してきた。その確信が揺らぎ始めた時に、私の規律も緩み始めた。

それまで、党の経済政策方針を伝える *Sabhad Nép* の記事に対して、常にフリッツシュ・イシュトヴァーンを通して私に指示が伝えられていた。フリッツシュが党中央を解任されてから、ゲルが直接に私に党の指示を伝えるようになった。一九五三―一九五四年の冬のことである。電力供給問題が深刻さを増した。数週間にわたって、工場だけでなく、家庭の電力供給も、予告なしに切られることが頻発した。*Sabhad Nép* はしばらく沈黙を保っていたが、何か主張すべきだということになった。これに関して、問題の主要な原因や排他的原因として「客観的な状況」を指摘するのが機関紙の使命だと考えるゲルと、何度も電話で話した。このエネルギー供給問題をめぐって、私の中に、苦痛のようなダイレンマが湧き上がってきた。「嘘についてはならない。真実を語らなければ。率直でなければ」。このとき初めて、それまであれほどまでに尊敬していたゲル・エルヌーに対して、反対意見を述べた。「エネルギー生産と増加する需要との釣合いを正しく計画しなかったことに、電力供給の問題があることを否定するような記事は書けない」と明言した。さらに、電力経営の合理的体制を構築せずに、大規模な地域で

電力供給を切ることで対応しているとも主張した。最終的に、私の署名論文はこれらの明々白々の真実を述べることになった。⁽¹⁵⁾

後で分かったのだが、ゲルは共産主義者の司令官の一人としてスペイン内戦に加わった経歴があり、その残虐さを知って戦慄した。彼の命令で、反フランコで闘った左翼の英雄的戦士を処刑したという。前もってこのことを知っていれば、彼を恐れたに違いない。しかし、エネルギー問題でゲルと議論している間、恐れるものがあるかどうかすら意識しなかった。また、「不足」の科学的な説明が可能かどうかすら、頭に浮かぶことはなかった。これはかなり後になって、思考し始める問題になった(ただ、この深刻な不足現象が最初の「命令拒否」の原因になったことは、今から振り返ってみて興味深い)。実際のところ、この問題で私の頭を占めていたことは、虚偽か真実かの選択だけであった。

ナジ・イムレの著書

友人リユーチエイの説明やそれに続く多くの情報によって、党文書で繰り返し唱えられる「党の統一」が空疎なものであることが明瞭になった。事実、党内では二つのグループ、つまりラーコシ・マーチャーシュとナジ・イムレの追隨者との間で抗争が続いていた。もちろん、個人的な要素が働いている。集団

指導の空文句は至る所で唱えられるが、実際のところ、古典的
社会主義体制は最高指導者の独裁体制である。少数の取り巻き
が集団を構成し、この支配集団が最重要の決定をくだす。この
集団内部には分業があり、相互に監視し合っている。しかし、
必ず最高指導者が一人いて、その手に権力が集中される。だか
ら、誰がハンガリーの党の最高指導者なのか、ラーコシなのか
ナジなのか問題になる。

この党内抗争は、当時のハンガリーでは、たんに二人の人間
の指導権をめぐる闘いではなく、二つの政治的プログラムの闘
いでもあった。ラーコシは高々小さな修正でスターリンの路線
の継続を望んでいたのに対し、ナジは「六月プログラム」、「新
時代」の独自の改革共産主義実現を目指していた。しばらくの
間、二つの勢力は拮抗しているように見えた。そして重要なこ
とだが、双方のグループにモスクワの諜報員と支持者がいた。

Sabud Nap 紙編集局指導部にも、断固としてナジに付き、

彼の路線を支持する同僚たちがいた。名前を列挙すると、フェ
ヒール・ライオシユ、フェケテ・シャーンドル、ギメシユ・ミ
クローシユ、ケンデ・ピートル、私、リユーチエイ・パール、
メーライ・テイボール、ノヴォバーツキー・シャーンドルが、
もっとも活動的なグループを形成していた。ただ、頻繁に会合
をもち、相互に同志的熱情で結ばれていたこれらのグループの
メンバーが、一九五六年以後に、それぞれまったく違う道を歩

むことなど、誰が想像しただろうか。ギメシユ・ミクローシユは壮絶な死を迎え、フエケテ・シャーンドル、リユーチエイ・パール、ノヴォバーツキー・シャーンドルはカーダールの監獄で数年を過ごし、ケンデ・ピーテルとメーライ・テイボールはパリで亡命指導者になった。もつとも意外で予想だにしないのは、ナジ・イムレにもつとも近かったフエヒール・ライオシュが、一九五六年一月四日以降、突然にカーダール・ヤーノシユに与し、最後までカーダール率いる政治局メンバーを務めたことだ。

一九五四年夏の私の行動に戻るが、当時、私の中には「新時代」の政策を積極的に支えたいという決意が強まった。その時まで、もっぱら経済問題に関する記事を書いていたが、そこからこのテーマを意識的に超えるようになった。

一九五四年一〇月六日の *Szabad Nép* に、ナジ・イムレが上梓して間もない二巻本について、長い書評を書いた。⁽¹⁶⁾ この書物は一〇年間の演説と論文を編集したものだ。私の書評は、ナジの思考が典型的なスターリン主義的政治プロパガンダと違うことに、注意を喚起するものだった。その中で強調した文言を引用してみよう。「……共産主義者は農村で命令するのを止めなければならない。……傲慢と命令が一緒になって、真剣かつ目的意識的で持続的な党の仕事がおろそかにされ、空文句にとって代わられる。……横柄な態度で外見を繕う、不必要な大

騒ぎ、際限のない拍手の強要、軍隊的指示、無内容な文言など、人々の自発性を抹殺するような内輪の(ヘドリル)を止めなければならぬ」。⁽¹⁷⁾

ナジ・イムレの農業問題に対する視角は、ソ連党史で見るとブハーリンの立場に近い。「資本主義の危険を誇張すること」を正しくないとみなし、「中小農民の生産力の発展について、広範な党員だけでなく指導機関にも、懸念、反対、さらには恐怖すら感じられる」⁽¹⁸⁾と分析している。

ナジ・イムレのこの選集からその実像が浮かび上がってくる。マルクス・レーニン主義の世界観を捨てた訳ではないが、ラーコシ型の変質に比べて、謙虚で庶民に近い、農民にとって受け入れ可能な代替案を提案した共産主義政治家であると言える。私の書評はこうした実像を読者に伝えようとしたものだった。

この書評からほどない一九五四年一〇月初旬、共産党の中央幹部会が開催され、ナジ・イムレ派の見解が容認された。我々 *Szabad Nép* 紙編集局の幹部は多くの「内部情報」を入手していた。この勝負は一時的な力関係を反映しているだけで、ナジ・イムレとその誠実な支持者が安定的に政権を維持するほど、堅固な権力基盤を築いているものではないことは分かっていた。だから、機関紙が断固として「新時代」の側に付いていることを明瞭にすることが重要だと考えた。

この問題に関連して、私は二つの記事を書いた。最初の記事

のタイトルは、「中央幹部会の指針にそつて、さらに六月の道¹⁹⁾を」というものである。このタイトルそのものが、当時の私の政治的進歩がどこまで進んでいたかを示している。こうすることで、ナジ・イムレの思想を普及し、共産党内部の変化を促し、改革派の指導によつて社会主義システムの修正が継続されることを願つたのである。また、党内闘争に関しては、明瞭にナジの側に立ち、それを記事の中で示した。

「自由な人民」編集局の反乱⁽²⁰⁾

それから少し経つて、リユーチェイ・パールは、記事だけで「新時代」側に立つのではなく、もつと前へ進むべきだと考えた。印刷される記事は編集局長のベトレン・オスカルや次長のコモル・イムレの手を経る。彼らはラーコシの側に立つているから、記事の内容に手を入れてしまふ。編集局の臨時総会を開いて、もつとオープンに、もつと勇氣をもつて、より鮮明に我々の見解を表明しようということになつた。なぜなら、党の情宣活動に占める中央機関紙の役割を考えれば、そこで働く記者たちの声が口から口へ広がり、広範な人々に届くだろうと考へたのである。

リユーチェイはまさに臨時総会を実現する魂だつた。私は彼の傍で、組織者の一人として動いた。前もつて、討議に付す文

書を配つた。会議は二日にわたつた。フェヒール・ライオシユは、*Szabad Nép* が国の抱えている問題を率直に伝えることが、もつとも重要な行動であると主張した。そして、ゲルー・エルヌーの最新の演説を公然と批判した。リユーチェイはまず「合法性」（野蛮な抑圧に対する）に関する挑発的な話を始め、倫理的な再生の必要を強調した。ノヴォパーツキー・シャーンドルは、この数年に犯された法に反する問題について、「真に責任のある者が、何時になつたら責任をとるのか」という問題を提起した。メーライ・ティボールは虚偽と真実の問題を中心に取り上げ、「清算の嵐」を要求した。⁽²¹⁾そして、その嵐が二年後に上陸した。ケンデはゲルーとフリツシユを、私はファルカシュを批判した。当時、彼らが *Szabad Nép* を指揮下に置いていた。私は、「*Szabad Nép* の誤りは、何よりもまず、党の指導に責任がある」と主張した。編集局の同僚が、次々に意見を述べ、^{*}党の指導、編集会議のスターリン主義メンバーを批判し、六月政府プログラム⁽²²⁾の系統的な実行、スターリン主義者復権の阻止を要求した。

* 臨時総会で意見表明をおこなつた同僚のうち、本文の中で明示できなかった人々の氏名は以下の通りである。アルマーシ・イシュトヴァーン、バラージュユ・エミル、ガレー・ティボール、ゴンドシュ・エルヌー、ジェネシュ・ヤーノシユネー、ヤーサイ・イ

ロナ、コロナイ・ジュジャ、コヴァーチ・エルジーベツト、クワ
 エシ・エンドレ、マチヨール・ガーボル、ナジ・シャンドル、
 パーストル・マリア、スイルヴァースイ・ラオシユ、タカー
 チ・カールマン、タルドシユ・テイポール、ヴェトゥー・ヨー
 ジェフ。

今、当時の意見表明を読み返してみると、批判は道半ばに留
 まっている。被害をもたらした政治家やその間違った決定を批
 判するのは正しい。しかし、そのような人物を指導的地位に就
 け、無制限の権力を与え、間違った決定を生み出した「体制」
 についての批判はない。とはいえ、このときに意見表明をおこ
 なった人々の勇気は、現代の読者の尊敬に値しよう。彼らが厳
 しく批判した党の指導者は皆、当時はまだ政治局と政府の主要
 なポストに就いていた（あるいは、間もなく権力的ポストに戻
 ってきた）。我々の行動が彼らの不興を買い、その気になれば
 彼らが報復措置をとるだろうということも分かっていた。

臨時総会で意見表明した記者たちが掲げた倫理基準は、今日
 でも遵守されて然るべきだろう。「虚偽と歪曲を正し、新聞の
 使命は率直さであり、真実を掴むものでなければならない」。

「自由な人民」時代の終焉

Szabad Nép 紙編集局の反乱のニュースは、すぐに広がった。
 総会の議事録が作成され、増刷りして配布された（コピー機も
 eメールもインターネットもない時代だから、簡単ではなかつ
 た）。我々の動きがひとつのモデルとなって、他の重要な組織
 でも同様な会議が開かれた。

ほどなく共産党内部の力関係が変化し、ラーコシ一派が優勢
 になった。

一九五四年一月二四日、政治局は *Szabad Nép* 紙編集局指
 導者を査問し、事件の責任を激しく追及した。⁽²³⁾ 以後の政治局会
 議でも、*Szabad Nép* 紙編集局の事件が討議された。一二月一
 日の政治局会議では、総会で意見表明した人々を厳しく弾劾す
 ることになった。⁽²⁴⁾ ファルカシユ・イシュトヴァーンは、「（臨時
 総会は）許され難い方法で党指導部を批判した。……会場を反
 マルクス主義的雰囲気支配していた。*Szabad Nép* 紙編集局
 は分派活動を行った。それが、ラジオにも、*Szabad Újság* 紙
 編集局にも、スイクラ出版社、ブダペストやデブレツェンの大
 学……作家たちにも波及した」と断定した。⁽²⁵⁾ ラーコシは討議を
 総括し、苛立った様子でこう述べた。「*Szabad Nép* の同志た
 ちは、いったい何を期待しているのだ。……何よりも、新聞と

ラジオをしっかりと掌握することが必要だ。必要なら、組織的な措置もとる。……すべての機関紙誌に対して、党の過去の清算的批判や各種批判の無批判な利用を止めるように、即座に指令する⁽²⁶⁾」。

秩序回復のために、二名の政治的監視役が編集局に送り込まれ、続いて、党の各種指導者が常駐し、記者たちを「説得」し始めた。彼らが要求したのは、「編集局の党員は意見表明の撤回を公的に宣言すること」だった。もちろん、それは成功しなかった。反乱者が説得に応じないことに、ラーコシ一派は怒り心頭に発した。

この時期、このような状況の中で、デスクとして経済部を管轄する責任から逃れたいと考えるようになった。ちょうど、「編集委員会書記」のポストが空席になっていたので、その仕事を引き受けることにした。書記の仕事は紙面構成の技術的な管理業務で、名目的には高いポストであったが、記事を書いたり、同僚に記事の指示を与えたりする仕事からは完全に離れるものだった。

この間、党の中央機関では「組織的措置」の準備が始まっていた。一九五四年一月には、編集局から追放する氏名リストが作成された⁽²⁷⁾。しかし、それが実行されるのは、党内における力関係の転換が終わってからである。一九五五年三月初め、党の中央指導会議が開催され、数ヶ月前とは矛盾する決議を採択

⁽²⁸⁾した。ナジ・イムレを「右翼的変質者」と批判し、党からの除名を決め、他方で一九五三年六月の党決定を空疎なスローガンと決めつけたのである。事実、六月決定は骨抜きにされ、古い政治路線へ戻されていた。もっとも、この時期にはラーコシの権威は崩れており、以前の絶対的な力を回復することはできなかったが、ラーコシとナジの力関係は明らかにラーコシ派に傾いていた。

すでに、一九五四年一月には、臨時総会時に編集局の党書記だったケンデ・ピーテルを、組織規律違反で編集局から追放していた。彼とほぼ同時期に、若い二人の有能な青年、クヴェシュ・エンドレとスイルヴァーシ・ライオシュも解雇された。暴露的レポートが怒りを買ったのか、それとも臨時総会での鋭い批判が気に入らなかったのか、解雇の理由は分からなかった。

一九五五年四月二八日の政治局会議⁽²⁹⁾に、ラーコシは私を含む *Szabad Nép* の多数の反乱幹部を追放する決議を提出した。ここで付け加えておけば、この追放は「ポスト・スターリン主義」的方法で行われた。以前であれば、これより小さなことでも拷問や拘束が行われただろうし、幸運な場合には建設業の補助労働者として職を得ることが可能だっただろう。我々のケースでは、すべての者が新しい職場を与えられた。フェヒール・ライオシュは国营農場長に任命されたし、他の同僚も別の領域で記者の仕事を与えられた。もちろん、機関紙編集局のポスト

に比べれば、はるかに重要性の低いメディアで、格下げされたポストに就いた。学問研究分野へ配置されたのは私一人だった。

* 政治局が決定した編集局からの追放者氏名は以下の通りである。

フエヒール・ライオシユ、コルナイ・ヤーノシユ、ラキ・テリイ
ーズ、レーナルト・ガール、メーライ・テイボール、ノヴォ
バーツキー・シャーンドル、パトゥコー・イムレ。ラキは臨時総
会で発言しなかったが、私の妻だということで同罪にされた。リ
ューチェイ・パールはこの時期、レーニン研究所の聴講生となっ
ていて、形式上、編集部からの追放を免れた。

この配置転換が決定される前に、我々は屈辱的な手続きを経なければならなかった。明らかに、どこに配置されるかは、どのように自己批判を行ったかに依存していた。モスクワの亡命生活から戻ってきた古い共産党指導者には、これはルーティン的な手続きだった。躊躇や良心の呵責を感じることなく、要求されれば何回でも、自己批判をおこなう必要がある。私にとつて、この手続きは初めて経験する屈辱的な体験になった。強いられたものとはいえ、嘘の言葉を並べなければならなかった。犠牲者だったとはいえ、倫理的な敗北感に打ちひしがれた。五〇年の実りある研究生活を経て、「もしそれが研究への道を歩むための代価だとしたら、あの言葉を吐いた価値があった」と、

自分をなだめることができようか。このようなディレンマの状況下で、何らかの「費用対効果」の計算が成り立つものなのだろうか。

「六月プログラム」の敗北、ナジ・イムレの失脚、我々に対する報復は、予期せぬことではなかった。「新時代」の側に付くことを明確にした時点で、敗北のリスクを背負った。既述したように、これより悪い結末、もっと野蛮な拷問のリスクをも覚悟していた。スターリンの死からまだ二年しか経っていないのだから。スターリン時代の野蛮さのうち、何が残っているかが消滅したのか、誰にも分からなかった。驚きはしなかったとはいえ、この締付けはやはり苦痛な出来事であった。

もし私の反応を一言で総括しなければならないとしたら、この党の懲罰は嫌悪感を引き起こしたと言える。深い失望、痛恨、恐怖。これがこの時期の私の精神状態を特徴づけている。以前の盲信は一度に霧散してしまった。何が起きたのかを、覚醒した眼で見つめることができた。胃を掻きむしるような虚偽、口汚い中傷、偽善的な議論、諜報員の事実と虚偽の操作、威嚇と詰問、敵の精神的拷問。これらは皆、党内の派閥闘争の「正常な」手段なのだ。明確に練り上げられた政策を採択しながら、また同じ政策を捨て去る中央指導部を最高機関として持つような党とは、いったい何なのか。この汚れた物から遠ざかりたい気持ちに駆られた。共産党内に留まり、これらの不埒者と闘う

者が必要だと考えたが、私はこれ以上この役を負いたくなかった。

一九五三―一九五五年の覚醒期は、自信が深く傷ついたプロセスでもあった。これほど屈辱的に騙すなら、私には自らの政治的判断能力を身につける権利がないではないか。無能者のように鼻であしらうというのなら、私の思考や批判精神をどこに持っていけというのだ。「もう金輪際、留保や疑いなしに他人を信じない」という気持ちだが、次第に私の中に形成されてきた。どんな思想的・政治的な主張であろうとも、まず初めに「本当にそうだろうか」と考えるのが、私の反応になった。何かの提案やプログラムを支持する場合でも、この議論は正しいだろうか、何か隠された欺きの意図はないだろうか、と。

長い間、自ら進んで盲従の道を歩んできたが、これからはもう絶対に党の兵士にはならないと決めた。

九年の時間を経て、*Sabhad Nip* 紙編集局を離れた。後でも記すが、それ以後、一九五六年一〇月に一晩だけここに戻ってきたことはあるが、この一度を除き、以後数十年間、ブラハ・ルイザ広場にある本部の入口をくぐったことはなかった。数年前には、極右の紙誌の編集局が多数、ここに雑居していた。今は空の廃墟になっている。もうすぐ取り壊されるというので、このメモワールの準備のために、何枚か写真をとった。

第5章 研究生生活の始まり（一九五五年—一九五六年一月二三日）

——「経済管理の過度集権化」をめぐる

一九五五年六月、私はハンガリー科学アカデミー付属経済研究所で仕事を始めた。ここから私の新しい人生が始まり、学問研究を職業とすることになった。

この新しい道の出発はけっして平時の転職とは言えなかった。さまざまな特殊な諸事件の中で、学問の世界への第一歩を踏むことになった。目に見える政治世界だけでなく、表面下では緊張と混乱が渦巻いていた。そして、それが一九五六年の一〇月革命の勃発を導いた。

先行事情

ハンガリーでは一九五〇年代初めに、ソ連の学位制度が導入された。専門研究における第一段階の学位は、医学博士候補とか経済学博士候補のような「博士候補」(candidate)である。アメリカや西欧で使われるPhDがほぼこれに対応する。どち

らの制度でも、ほぼ同じ年齢で、単行本程度の独立した業績にもとづいて授与される。^{*}

* 研究内容を捨象（数学や物理の場合は、問題なく捨象可能）すれば、この二つの制度の本質的な差異は、論文提出に先立つ修得要件にかかわっている。アメリカのPhD候補は少なくとも二年間は、非常に密度の高い水準の訓練を受ける。数多くのコースや試験を受け、多くの教授とコンタクトをとる必要がある。これに対して、「博士候補」準備生は大学での学業修得以外に、特別な訓練を受けることはない。いくつかの試験を受けるだけで、その準備は個人的に行う。もちろん、公開討論にかけられる論文を提出することは当然のことである。

もうひとつの重要な違いを指摘しておかなければならない。西側のPhD学位は大学が与えるのに対し、博士候補の学位およびそれに続く学位は、ソ連のシステムに従って、科学アカデミーないしアカデミーに関係する機関（たとえば、ハンガリーでは学位認定委員会）が判定する。

一九五三年八月に「博士候補」準備生の申請を行い、その年の一二月に採用通知を受け取った。申請の一般的要件は大学の学位である。西側の大学でPhDプログラムに申請する時に、学士号が必要となるのと同じである。私には大学の学位がなかった。一九四五年にブダペスト大学の人文学部に登録し、主として哲学と歴史のコースを専攻する学生だった。当時はまだ一時期、授業に出席しない「在外学生」という制度があり、期末に教授から署名評価をもらうが、試験は延期扱いされていた。これを二年続けたが、*Szabad Nép*の仕事にエネルギーを集中することになって、大学卒業を諦めた。私が「博士候補」準備生に申請した時には、特殊なケースとして、学位要件が外された。誰かが私のために動いた訳ではない。多分、当時の仕事上の地位を勘案して、採用を決めたと思われる。最終的に、一九五六年にPhDに相応する博士候補学位を取得するが、私にはそれに先行するはずの大学学位はなかった。

「博士候補」準備生の担当教授はナジ・タマーシユだった。カール・マルクス経済大学の学長に次ぐポストにあったが、専門的知見と指導力では第一人者であった。『資本論』のハンガリー語の翻訳者で、大学の政治経済学科長でもあった。訓練された（マルクス主義経済学だけでなく）経済学者だった。常に明晰かつ正確に思考し、概念化していたので、授業や議論の総括を聞くのが楽しかった。いわば創造的な学者というのではな

く、後世に残る作品を著していないが、他の経済学者共々、彼から受けた助力や信任を感謝している。

私が扱うテーマについて、ナジ・タマーシユは完全な自由を与えてくれた。私の関心は計画化や経済管理の諸問題にあったが、当時はまだ何をどう研究すべきか皆目見当がつかなかった。博士候補の要件である試験は難なくクリアできた。私はいわば「博士候補通信準備生」のようなもので、職を持ちながら、自由時間に勉強する学生だった。もちろん、すべての時間を勉強と論文作成に割くことのできる「奨学金」博士候補準備生もいた。彼らは研究機関や大学に籍を置きながら、日常的な研究を博士候補号の取得に結び付けていた。実は、一九五二—一九五三年辺りに二度ほど、*Szabad Nép*の上司に、研究者になりたいので編集局から外してくれないかと頼んだことがある。しかし、即座に、「君は党と*Szabad Nép*に必要な」と拒否され、それを厳粛に受け止めた。

どうして人生の道の転換を望んだのだろう。当時はまだ、魑魅魍魎が跋扈する場所から逃れたいという政治的動機はなかった。そうではなくて、トレッドミルに乗ったような新聞の仕事、表面的な記事の執筆や混乱に嫌気が差し始めていたからだ。研究者の道がどんなものか知っていた訳ではないが、それに憧れた。だから、私の担当ではなかったが、科学評議会の設立や科学アカデミーの行事などを取材するために、これらの催し物

に足繁く通った。アカデミーの舞台裏で、どんな統制 (gleichschaltung) が行われているかも知らずに。とにかく、学問の世界に憧れたというだけのことで、取材に向かい出した。

転身を拒否されてから一、二年経った頃に、Sabud Nep をめぐる風が起こった。その頃にギメシユ・ミクローシュが私に言ったことがある。「君は政治に向いていない。やりたいなら、研究者の道を行んだ方が良い」と。彼がアドヴァイスしてくれた場所も覚えてる。ある気まずい会合の後、パーテルノスター (循環エレヴェータ) の前に二人で立っていた時だった。

自分から編集局を辞めることはできなかったし、職を変えることもできなかった。他の同僚と一緒に私が編集局から追放された時に、転職の道が開かれた。そのチャンスにしがみついた。科学アカデミー経済研究所が設立されて間もない時期で、所長にフリツシュ・イシュトヴァーンが就任していた。以前に党本部の国家経済部長として私に指示を与えていた人物だ。個人的にも良く知っていたから、彼の研究所に採用してくれと頼んだ。研究所でのキャリアは、はるかに低いポストから始まった。編集局での高いポストから研究所の一番低いポスト、「補助研究者」のタイトルをもらった。資金も編集局時代の四〇%^{*}だった。以前は広い大きな部屋を使っていたが、ここでは狭い三人部屋だった。

* 給与を補うために、書籍や雑誌の紹介記事を書いた。いろいろな編集者に掛け合せて、私の紹介記事を掲載するように頼んだ。いつも無署名か、ペンネームで掲載された。

部屋の同僚は皆、賢くて、親しみのある連中だった。エルドウーシュ・ピーテルとホツホ・ロベルトだ。皆で部屋にいる時は、ほとんど自分の仕事に集中できなかった。というのも、この時期、血湧き踊るような歳月の中で、彼らは議論する方を好んでいたからだ。

精神的衝動

同部屋の友人だけでなく、研究所の他の同僚たちとも興味尽きない、思考を刺激する会話が続いた。一九五六年初めに、研究所はナードル通り七番地に引っ越した。今はアカデミーの事務所になっているイブル・ミクローシュ設計になる新古典主義の美しい建物だ。その二階がナジ・タマーシユの率いる部門で、私はそこに属していた。リシュカ・テイボールとの「対外貿易の効率性」をテーマにした共同論文³⁰⁾で、若くして名を知られたマーリアーシユ・アントルもここにいた。私の隣の部屋にはチェンデシユ・ペーラが、さらに奥まった所にまだ駆け出しの農業経済学者ヴァーギ・フェレンツがいた。後にペーラは国家計画

庁の副長官になり、フェリは大学の農業経済学科長になった。さらに、生きるか死ぬかの運命を経て、研究所に辿り着いたナジ・アンドラーシユもいた。彼は青年運動で高いポストにあり、政治経済学を教えていたが、ライク事件にかかわって建設業の補助労働者に下放させられ、新時代になって研究に戻ることができた。ホッホ・ロベルト、アウシュ・シャンドル、モルナール・フェレンツ、ブローディ・アンドラーシユなど、さらに名前を連ねることができているが、彼らがハンガリー経済学界の次世代の発展を担っていた。

研究所の若手の研究室が並んでいる廊下は、「雑草長屋 (gyepes)」と呼ばれていた。正確に言えば、ここで働く若い研究者の一団を指していた。^{*}しかし、その構成はさまざま、異質な集団だった。農村出身者もいれば都市出身者もいた。ある者は早くから研究者の道を歩み出し、ある者は転身して研究者の道へ入った。にもかかわらず、多くの面で互いに共通するものがあつた。すべての者はスターリン・ラーコシ型の共産主義に失望し、人間的で効率的な社会主義を望んでいたし、以前の政治経済学の冷たく空虚な図式に飽きて、「現実」を研究したいと願っていた。誰一人として、今様に西側で言う訓練された経済学者ではなかった。相互に経済学を学んだというより、互いの経験を率直に述べ合い、純粹な意図と相互尊重による政治討議によって、互いを刺激し合った。冗談を言い合い、ふざ

け合つた。こんな愉快な仲間の輪は、その後の人生でも、滅多にお目にかかれなぬものだった。

^{*} 戦前のハンガリーの農村で、一番貧しい人々が住む地区のことを「雑草長屋 (gyepes)」と呼んでいた。ヴェレシユ・ピーテルは、「雑草長屋のお昼」と題して、こう記している。「雑草長屋は村の外れにある。その手前のアルカリ土壌は、驚鳥・豚・牛の糞で覆われている。もちろん、それは乾燥するまでのことで、雑草長屋はそれを燃料に使うのだ」(Varg 1997 [1939], 32. p.)。この引用は、Peters György (1998, 198-205. p.) の研究からとつた。Peters はナードル通りの「雑草長屋」のメンバーの伝記や集団生活のことを興味深い資料に依拠して美しく描いている。

この時期の私の経済学的思考形成にもっとも強い影響を与えた人物が二人いる。その二人とも、研究所の同僚ではなかった。以前から面識があつたが、当時の中央統計局長ピーテル・ジヨルジュと会うことになつた。ケンデ・ピーテルが仲立ちをしてくれ、最初のうちは三人で会つていたが、次第に二人だけで会うのがふつうの形になつた。何度か彼が我が家を訪問したが、大概は私が彼の大きくてエレガントな家を訪ねた。夫人のピーテル・エンミ(愛称ピツケル)は著名な児童心理・教育学者で、いつもコーヒーを持つてきて、我々と二言三言だけ会話し、後は我々の邪魔をしないように奥へ下つた。

ピーテルは私より二五歳年長だった。古い共産党員で、ラーコシ・マーチャーシュとヴァシユ・ゾルターンに次いで、もつとも長い一〇年の歳月をホルティ体制の監獄で過ごしたことで知られていた。一時期統計副局長だったヘゲドゥシユ・アンドラーシユはピーテルのことを「偉大なボルシェヴィキ大貴族」(Bolshevik grand-seigneur)⁽³¹⁾と名付けたが、これは蓋し言い得て妙だった。灰色のくすんだ宦官僚の中で、彼だけは豊かな個性、繊細さ、寛大さ、ユーモアに満ちて際立っていた。

一、二度会っただけで、彼に対する私の信頼感を察知し、私を経済学的思考へと導いてくれた。市場は、そして市場だけが需要と供給を効率的に調和させる、優れたメカニズムだ。これに対して、計画は非常に乱暴で硬直的なメカニズムだ。市場が機能するためには、価格を固定から解放する必要がある。

需要、供給、自由価格、市場、効率性の概念は、西側の経済学専攻学生が学ぶミクロ経済学の最初の講義で出てくるものだ。ピーテルが展開した思考は、西側世界ではトリヴィアルなことだが、私にとつては革命的に新しいものだった。

ピーテル・ジョルジュがまだ監獄にいた時に、当時、ブダペスト大学でもつとも良く知られた経済学教授ヘラー・ファルカシユの教科書⁽³²⁾を手にした。ピーテルは大学で数学専攻だったが、ヘラーの教科書からいわば聴講生として「ブルジョア(非マルクス)経済学」の基礎を学んだのである。それ以後、この分野

で訓練を続けることはなかったが、若い時代の精神的な営みが人生を通して大きな影響を与えた。

ヘラーから理論的に学んだことは、個人的な経験によって裏付けられた。ピーテルは定期的なジュネーブで開かれる国連のヨーロッパ統計委員会に出席していた。スイスで経験した安定した豊かな経済国のことを何度も語ってくれた。それに対して、わが国や他の社会主義国の貧しさと物資の不足はどうだろう。(ギメシユ・ミクロシユに次いで、スイスのシヨッキンゲン体験を語ってくれたのが、ピーテル・ジョルジュだった)。ピーテルの眼には、チューリッヒの駅前通りのエレガントさ、商品選択の多様さ、売り手の礼儀ある態度、それらが皆、市場の効率性を証明する手に取って見られる証拠だった。

ピーテルは今日の言葉でいう「体制転換」を考えていた訳ではない。共産主義者として留まりながら、中央の指令経済を放棄し、それに代えて市場に調整を任せることができると確信していた。

このアイデアを、最初は、信頼できる会話だけに留めていたようだ。その後、一九五四―一九五五年に二本の論文を著し、その批判に対して、改革構想を弁護している⁽³³⁾。前もって信頼できる同僚と外部の友人に論文の概念構成を話していたが、その中に私も入っていた。私はコメントやパラグラフ構成の意見を付して、論文に貢献しようとした。とくに、第二論文の

最終草稿にながしかの貢献ができたと思う。他の研究者もアイディアを出したと思うが、基本的な思考は疑いなく、彼のものである*。

* ピーテル・ジョルジュの素晴らしい思考体系は、ランゲ型の「市場社会主義」と共通するところがある。ピーテルはその第一章でカルデリや他のユーゴスラヴィアの著者を指摘しているが、ランゲの研究を知らなかったと思う。ここには、独習者によって「再発見」されるといふ(科学の)典型的な事例を見ることができさる。

ピーテル・ジョルジュの言葉と著作で表現された市場に対する神話的とも言える敬意は、マルクス主義政治経済学とは異質なものである。マルクスの思想的支柱のひとつが、「市場はアナキーを生み出す」という考えである。ここから、経済進歩に従い人類は市場のアナキーから解放されて、秩序を生み出すことが必要だと考える。ピーテル・ジョルジュが(ヘラー・フアルカシユの教科書とともに)市場の力を教えてくれ、マルクス主義からの決別を後押ししてくれた。

ピーテル・ジョルジュとは、知的関係を越えた親密な友情関係で結ばれていた。彼の知恵が、すべて私の力になった⁽³⁴⁾。

ピーテルの批判的言動、異端的経済学思想は、保守派の眼に

刺さった棘のようなものだった。一九六九年、でっち上げた理由で彼に対する捜査が行われ、自宅ではなく、病院で軟禁状態に置かれた。心臓に刺さったナイフが命を奪った。多分、自殺したと思う。予期される屈辱に耐えることができなかつたのだと思うが、殺人の疑いも排除できない*。

* 偉大な改革派経済学者ピーテル・ジョルジュを偲ぶ一九九四年の会議で、ニリ・シャンドルがピーテル・ジョルジュに対する捜査について講演をおこなった(1994, ch. 10)。それによれば、死亡に伴う現場検証において、重大な過ちが犯されたという。死体を動かし、検視調査には詳細な記述が欠けているなど、多くの問題がある。したがって、事後的に死因を特定することができなかった。

一九五五―一九五六年に戻る。経済学的思考の再形成において、もつとも親しい友人ケンデ・ピーテルとの対話が、非常に重要な役割を担った。第2章で既述したように、ピーテルとともに『資本論』を丁寧に読んだ時に、我々は共にマルクス主義の帝国に足を踏み入れた。そしてこの物語は、再び共に、この帝国から脱出する(当時の禁じられた境界を越える)ことで完結する。本当に多くのことを語り合った。そして、ピーテルの提案で、マルクス主義について考えていることを記しておく

うということになった。ピーテルは「マルクス主義経済原理に
 対する批判的注釈」と題する七二頁の草稿⁽³⁵⁾を書いた。運良く、
 亡命に際して、ピーテルはこのコピーの一部を持ち出した。現
 在の視点で読んで、素晴らしい作品だ。思考の新鮮さや、鋭
 い批判精神が溢れている。

私もおよそ一〇〇頁の草稿を書いた。二つの理由で。ひとつ
 は、ケンデ・ピーテルの思考に対する私の見解を示すために
 (もちろん、秘匿する必要があったので、彼の名前を出すこと
 なく、Wと表示して)。いくつかの諸点で議論を展開したが、
 そのことより重要な点は、マルクス主義政治経済学に対する見
 解で一致したところをさらに敷衍したことである。もうひとつ
 は、公開される社会主義経済に関する博士候補論文で公に書け
 ない部分を、この秘匿文書に記すことだった。何よりも自分自
 身に対して、またもつとも近い思考を共有する友人に対して、
 論文の理論的背景を明瞭にしておきたかった。

悲しいことに、数部作成した手稿を無くしてしまった。その
 唯一の痕跡が残っているものがある。何とも皮肉な運命だが、
 政治警察の書庫でそれを見つけることができる。一九五八年に
 拘束されたフェケテ・シャーンドルは、尋問の過程で、私に関
 する所見を一点にわたって、自筆の自白書に記している。そ
 の第二点でケンデとの共同著作のことを記し、「マルクス『資
 本論』の基本原理を放棄した」著作と指摘している。この引用

でフェケテは手稿の特質を特徴づけ、さらに「この手稿を高く
 評価していたギメシユ・ミクローシユから知らされ、その後、
 コルナイが私にその手稿を見せてくれた。手稿は、『資本論』
 の出発点である価値論が誤りであることを証明しようとするも
 のだった⁽³⁶⁾」と、自白を続けている。

* フェケテは自白書の第五点において、一九五七年春に私に見せ
 た *Hungaricus* と題する手稿について記している。その自白はこ
 う続いている。「(この著作では)へマルクスを放棄する若きタイ
 タンたち」と注釈することで、彼らに反対する方向を明確にして
 いた。我が家で行われた会話で、へマルクスの剰余価値論と史的
 唯物論はケプラーの天体法則のように普遍的科学の一部を構成す
 る」という *Hungaricus* の表現を、コルナイは受け容れなかった。
 以前にも増して断固とした表現で、マルクス政治経済学はその最
 初の出発点からして間違いであると告白した。二〇〇四年にこ
 れを読み、特別な感情に襲われた。いったい、監獄の中で、どう
 してマルクスの剰余価値論批判が警察の話題になったのか。ここ
 で引用したフェケテの自白について、次章で再び取り上げる。

マルクス主義との決別がここまで到達した段階になってもな
 お、それに代わる対抗理論が何であるのか、分からなかった。
 我々の場合、ひとつの理論の放棄が別の理論への移行というプ
 ロセスをとらなかった。ミュンヒハウゼン男爵(「ホラ吹き男爵

の冒険)のように、マルクス主義思考の泥沼から間一髪で自分たちを引き上げたようなものだった。一九五五年のケンデ・ピーテルの手稿には、マルクスの思想内容の批判に、まだマルクスの用語(価値対使用価値のように)を使っているのが分かる。とにかく、何故マルクスの政治経済学を放棄するのか、真の科学的経済理論に何を期待するのかを確かめる試みだった。

マルクス政治経済学との決別

繰り返し叙述したように、ケンデ・ピーテルと交わした言葉や書面での対話は私の思考形成に大きな影響を与えた。我々二人の経済的政治的視角は、ほとんど並行的に再形成された。ここでまた、一人称的な叙述に戻ってみたい。長期にわたった感性的で知的な再構成が、研究者として出発した一九五五―一九五六年の時点でどのような状況にあったかを再生するのは、簡単ではない。後になって自分が理解した感性や思考を、時間的に前に持ってくる間違いを犯すかもしれないからである。自分の出来事ですらこれほど難しいのであれば、ケンデのような身近な友人の場合であっても、他者のことを正確に記すのはほとんど不可能に近い。

マルクスの原理に対する批判は数多く存在する。しかし、科学的客観性をもつ深い分析でマルクス批判を展開したものは数

少ないとはいえず、それなりの数に上っている。^{*} それらの批判に私が付け加えることができるものは多くない。以下の議論では、僅かな文言でマルクス主義を否定するようなことを意図していない。私の注釈は教訓的なもので、批判を含むというより、失望のプロセスを時間的な経緯にそって記すものである。マルクス主義からの決別を説明する論理的構造はどのようなものだったのだろうか。それを私のケースで考えてみたい。

* たとえば、この頃、オーストリアの大経済学者ベーム・バヴェルクのマルクス批判(1936, [1966])を読んだ。『資本論』の第一巻と第三巻との矛盾を説得的に展開した著作である。

第4章で既述したように、私の理念の変化は合理的な思考から始まったのではなく、メタ合理的次元で始まった。私を虚偽と屈辱へ導いた忌まわしい体験が、共産主義者としての信念を揺るがした。世界観の倫理的基礎が崩れたのである。

地質学的な類推を使えば、もしこれが最深层で生じた出来事だとしたら、マルクス主義の認識論的基礎は、この上層に置かれた合理の層にあると言える。マルクス主義は、自らを科学的社会主義と命名している。社会主義の種々の非科学的潮流をナイーブでユートピア的なものと決めつけ、自らを区別する。自ら主張するところによれば、マルクス主義だけが社会の研究と

知識の科学的手法を提供しているという。

まさにこの故に、つまりこの主張は正しくないと確信したことが、マルクス主義と決別させた。科学理論や科学方法論の議論を始めると、非常に不安定な足場に依拠しなければならぬことは良く分かっている。このテーマを扱っている哲学者の間で、何をもってある命題を「科学的」と規定するかについて意見の一致は存在しないし、ある命題がどのような場合に真とみなされるかについても意見の一致はない。だから、本書のような精神的自伝が、このような問題の決着を目的とすることはあり得ない。ただ、自らの体験を綴るのみである。

一九五五年まで、私の眼には、マルクスの思想的体系は閉じた明瞭な論理的構造をもつ推論で、閉じた論理的体系であるのみならず、真の体系でもあった。失望し疑念の眼でこの論理的確信を修正し始めた時に、思い切って違う基準を適用してみようと決断した。それは、現実と理論の対比である。ちようどその時に遭遇した苦い体験が、この基準の適用を後押しした。「価値論」と現実の価格はどのように比較できるのだろうか。「窮乏化理論」と生活水準の歴史的現実動向はどのように比較できるだろうか。「資本主義の危機理論」と現実の景気循環はどのように比較できるだろうか。「階級」あるいは「階級闘争」の理論と現実の社会的階層あるいは社会的諸対立はどのように比較できるだろうか。これらの現実との比較テストで、マルク

ス主義のドグマのひとつひとつが崩壊することだけが問題なのではない。もっと大きな問題は、マルクス、いや主としてマルクスの後継者たちが科学の基本的基準を適用することに鈍感であり、理論と現実の矛盾に切り結ぶ知的感性を欠いていたことだ。

もちろん、社会科学の潮流で、マルクス主義だけがこのような原罪を犯したという訳ではないが、一九五五―五六年当時の私は、科学性の基本的要件の達成、理論と現実との比較の実行をマルクス主義に求めたのである。

この面では、実験的自然科学に比べて、社会科学ははるかに難しい状況にある。自然科学の場合、統計的な厳密性を基準に、ひとつひとつの理論的主張を証明することができる。実証的な証明の可能性がきわめて限られているとすれば、社会現象の研究者はできる限りの良心をもって、利用可能な手段を使い、理論を現実と対峙させることが最低限の要件になる。もし現実が本質的な点で理論と乖離していることが分かれば、理論を修正しなければならないし、それが出来なければ、現実によって否定された理論を放棄せざるを得ない。

前に使った地質学のメタファーを用いれば、間違った科学理論と方法論の層に、多くの虚偽の理論命題が堆積している。理論の創造者が現実との対峙を求めないから、誤った理論層が重なり合って堆積していく。太古に消滅した動物類が化石化した

ように、硬直化し陳腐化したドクトリンが、形を変えることなく、そのまま保持されるのである。マルクスの信奉者は、あれこれのドグマの虚偽性を認識すると、それを出来の悪い後継者「俗流家」の所為にしてしまう。マルクスは我々を含めた信奉者を間違った思考のアルゴリズムに慣れさせてしまうのが、事の真相である。

地質学の類推を続けてみよう。^{*}マルクス主義政治経済学者は価値論をマルクス主義経済学の中心的思考だとみなしている。この階層を以下で簡単に扱ってみたい。

* メタファーを使いながら、自家撞着に陥つたような感じがしている。マルクス主義を批判しながら、マルクス主義者が好んで使う公式、つまり「深い」本質と「表面」との対峙という関係を使っている。もっとも、マルクス主義から距離をとっている心理学者が精神と思考の深部と表面に近い層というメタファーを使っているから、許されると思う。

もうひとつ。後に繰り返して紹介するように、マルクスやマルクスの後継者の名が冠せられたものの多くを、引き続き有効かつ解明的なもののみなしている。しかし、すべての偏見に囚われなideいたい。だから、マルクス主義者が好んで類推を用いるような状況では、私は同じ類推を使いたくない。

この時期になって、社会主義経済では資源の配分がうまく機

能していないことを理解し始めた。この経済における価格の機能を説明することは不可能だった。事実、マルクスは社会主義システムで何をすべきかについて、前もって正確に記述できると約束していない。ならば、少なくとも、資本主義ではどうなっているかについて、その記述から知る必要がある。こういう問いを投げかけることで、「マルクスはこの問題に答えていない」ことが明瞭になる。彼の著作では、「競争」が価格を決定するという指摘に繰り返し出会う。しかし、どのようにしてか。この点に関して、「資本論」第一巻は空中を彷徨っている。すべての価値の唯一の創造者は労働であるという主要な命題は、検証可能でもなければ、否定もできない（したがって、科学的でない）命題の代表的なものである。さらに、第三巻では剰余価値が資本に比例した平均利潤に「転形する」が、第一巻の主要定理から厳密な演繹によって第三巻の思考体系を導くことができない。ただ、そこでは検証可能な命題に遭遇するが、現実の検証に耐えられない。ここは利潤を説明する理論を目指したもののだが、実際の資本主義で利潤を決める要因を十分に説明できないでいる。約言すれば、マルクスの価値論は適用不可能という結論に到達したのだ。

これまで議論した階層には、多数のマルクス主義経済学の定理が積み重なっている。その例証のために、ひとつだけ取り上げてみる。それは「労働者階級の窮乏化」に関する命題である。

この命題をそれに先行する定理から演繹的に導くことはできない。マルクスの価値論を受け容れ、それから平均利潤と生産価格の理論を、さらに『資本論』で展開される補助定理をすべて受け容れたとしても、肉体労働者の生活水準は相対的（住民の他の階層との比較）にも絶対的（長期の趨勢）にも、悪化することも、変化しないことも、向上することもあり得る。他方、実証的な検証についてみれば、歴史は長期の趨勢に関するマルクス主義の窮乏化ドクトリンをはっきりと否定している。統計的にも明瞭に検証されるように、資本主義制度の枠組みで機能している世界の諸国では、ここ一、二世紀の間に、勤労者の消費が上昇し、生活環境は改善されている。

マルクス主義を信奉した知識人の多くは、ラディカルに思想を切り捨てることができない。悲痛な後退戦を強いられるからだ。あたかも敗走部隊がひとつずつ橋頭堡を明け渡しながら後退していくのに似ている。可能な場合には、ひとつひとつの理論的定理や研究手法を保持できる。私について言えば、思考の再構築に別の戦略を使った。一九五五年末にマルクス主義を諦めた。まず初めに、自分に対して、今日からマルクス主義者ではないと宣言した。すべての手法や命題を放棄した訳ではない（これについては後の章で扱う）。しかし、「主義」というマルクスの思想体系を放棄したのだ。信頼できる友人たちには、「マルクス主義をゼロに清算した」と、その精神状態を伝えた。^{*}

その思想学派的忠実な信奉者であることから派生するすべてのものを拒否する。「ゼロ」から出発して、体験した事件から生じた知的懐疑と不信感と闘いながら、あれこれのマルクス主義の定理あるいは思考方法がまだ使用可能と判断できれば、それはたして受容できるのかどうかを、再確認しなければならなかった。

^{*} 私はマルクス主義の理論とイデオロギーからラディカルに決別した。しかし、社会主義体制の改革可能性については、しばらくの間、期待を持っていた。後の章で、いかにして一歩一歩、「ナイヴな改革者」から遠ざかって行ったかが叙述される。

この決別戦略は私の中ではうまく行ったと思った。新しい思想の受容に対して完全に開かれた状態になった。新しい見方を一々、マルクスのドグマと対比させる必要がなかった。それはすでに掃き清めてあった。この戦略は同じ時期にマルクス主義者になった他の同時代人と比べてはるかに大きなアドヴァンテージを与えてくれた。彼らは思考の翼を引つ張る綱から自由になるために、さらに多くの歳月を要したからである。一九六〇年代と一九七〇年代のブダペストの哲学者、経済学者、歴史学者は、まだ「マルクス・ルネサンス」の実験を試み、思想の断片から断片を辿りながら思案していた。何を廃棄し、何を保持

しようかと。私ははるか昔に、繰り返し思考を引き戻す、悩ましい段階を超えていたのである。

* 良く知られた哲学者であるヴァイダ・ミハイは、ある手記の中で、このプロセスを報告している (Pogonyi, 2003, 14, p.)。「七〇年代半ばに、ルカーチ主義の友人たちにこう宣言したのを覚えている。(僕はもうマルクス主義者じゃないと思う)と。マルクス主義の名でまるで馬鹿なことが行われてきたからではない。私の周りに起こっていることに、マルクス主義が説明を与えられないからだ」。

研究生生活の開始

私の年齢に関して言えば、研究生生活を始めるのが遅かったとは思わない。二七歳で論文準備に入ったが、これはほぼアメリカの大学院生が論文を書く典型的な年齢に匹敵する。

PhDを準備するアメリカの大学院生が論文を書き始める頃には、教授たちがどのように研究の仕事をやっているかを良く知っている。アシスタントとして教員を補助する場合には、研究室の内部を直に見ることができる。やがて正式に指名されるアドヴァイザーが、道案内をやってくれる。このようにして、教員から弟子へ研究手法が引き継がれ、その弟子が教員になり、

新たな弟子との連鎖関係が続く。その昔、ギルドの親方と自由を得た助手が徒弟を教えたように。私の場合には、研究所でマイスターからその研究の技を習得する機会がなかった。公式に指定された論文指導者ナジ・タマーシユは、「一般理論部門」長で私の上司だった。私の手稿に対して、多くの有益なコメントをしてくれた。技術的な面で優れており、政治的な制約の中で、「どこまで書けるか」を良く見てくれた。しかし、彼自身は研究活動を行っておらず、研究上の業績があった訳ではなかったので、引き継ぐものがなかった。

数ヶ月の間、独立したテーマがなく、公的に指示された課題は、エルドゥーシユ・ピーテルの傍で、彼の研究助手として働くことであった。散策にお供したり、たくさんお喋りしたりした。後の彼の仕事からも分かるように、彼は抽象的理論に魅せられていて、実証研究の経験はなかった。管理や計画の問題で、企業の管理者の意見を知らなかった。しかし、インタヴューのマネーについて言えば、度々、傲慢な態度が出るので、相手の率直な意見を引き出すことができなかった。賢く機知に富んだ人物で、人を刺す様な皮肉を楽しんでいた。可哀想にも、彼の批判の標的になった人物もいた。何にでも不満を抱いていたが、スターリンの政治的レジームやマルクス主義理論の凍結状態も気に入らなかった。Sabud Népから解雇されてきた敵なら何も恐れるものはないと感じていたらしく、私にはオープンであ

った。ただ、このオープンな会話は、ほとんど一方通行だった。すべての批判にもかかわらず、最終的には共産党とマルクス主義理論の忠実な信奉者であった。だから、私はマルクス主義や共産主義理念を放棄する過程にあることを表明するのを躊躇^{ためら}った。彼の批判が盛り上がるのを、相槌を打ちながら聞くことで満足していた。我々の間に、友情的関係が形成されるだけで十分だった。

数ヶ月経って、私が自立した仕事をしたいと希望した時には、彼もナジ・タマーシユも反対しなかった。その時にはもう、軽工業で経済管理がどう機能しているのかを調べることに決めていた。中央計画化とは現実にとのよなものなのか。この目的のために軽工業を選んだ。重工業ではデータの取得が難しいと考えたからだ。軍事的関連の生産があるために、多くのデータが秘匿されていると考えた。さらに、生産と消費の関係にも関心があるから、住民が購入するような生産物を作っている経済分野の方が、研究しやすいだろうと思った。

研究を始めた時には、とくに積極的な仮説はなかった。逆に、本質的な否定的仮説が質問項目を規定した。公的な教科書や党のプロバガンダが主張するように、計画庁が計画を立案し、現実の経済過程がこの計画指針を踏襲するという具合にはなっていないだろうという仮説である。

研究方法は何の躊躇いもなく決めた。そのポイントは、経済

管理と計画化プロセスの参加者に、丁寧に質問することであった。管理を担っている人々の頭脳と行動に何が起こっているかは、彼らだけが知っているだろうと直感的に感じた。上級、中級、下級の管理者それぞれをインタヴューした。ほとんどの場合、対面での会話で、たまにグループの討議もあった。長時間の議論でも、一度にはすべてのテーマを議題にすることができなかったから、多くの部門では何度も同じグループに集まってもらった。

私がインタヴューした人々は、例外なく快く応じてくれた。現状の問題を批判する勇氣も見せてくれた。自ら進んで問題を話してくれたのはどうしてだろうと、その時も何度となく自問してみた。もちろん、とくにハンガリー人が不平・不満を述べる性癖があることもあるだろう。しかし、もつと重要な動機は、彼ら自身が自ら話したことに関心を持っていたからだろう。私も事前に用意したアンケートに従って、個別に質問を詰めていった訳ではない。ただ、現実を知りたくて、飢えるように彼らに耳を傾けたことに好感を持ったのだと思う。彼らと一緒になつて官僚機構の馬鹿さ加減に驚き、無駄や消費者嗜好の無視、上司の無能さを怒った。こうして、私と相手（インタヴューイ）との間に、人間的な関係が形成された。数年後に経済研究所から追放され、軽工業に配置替えされた時に、彼らの中でリスタを負って私に助けの手を差し伸べようとした人は少なくな

かった。

今まだそこまで時間を進めることなく、一九五五・五六年に用いた研究方法をもう少し記述したい。個人的な面談で論文の実証的な材料を得ようという考えはどこから来たのだろうか。記憶を辿ると、*Sabab Nef* 時代に「分析レポート」と題する記事類を自分の物にしていた。ふつうの短い特派員記事ではなく、紙面一面を使うレポートの類の記事があった。同僚数名とひとつの工場を選び、何日かをそこで過ごし、工場の仕事について考えていることを、管理者から労働者にいたるまで質問するのだ。もちろん、一研究者としてインタヴューするのと、当時のように共産党の記者としてインタヴューするのでは、相手との関係も違っていた。とにかく、新聞記者としてこのインタヴューの手法を習得したし、そこに隠されている可能性を実感することもできた。

ハンガリーの農村研究の伝統も、大きなインスピレーションを与えてくれた。それらの何点かを読んだ時の興奮も忘れられない。^{*}人の話を聞くことがどれほど大切で実際的な知識材料になるのか、その時に分かったような気がした。

^{*} この時期に、サボー・ゾルターンの『タルドの状況 (A *helyzet*)』(1986 [1936])とコヴァチ・イムレの『静かな革命 (Néma forradalom)』(1989 [1937])を読んだ。農民の生活を

教えてくれた以上に、この二人の作家・社会学者の手法が参考になった。人々との対話、アンケートによるデータ収集、直接体験を補足する統計データの簡潔なサーヴェイがそれである。この著作に出会うまで、現代社会学がどのような手法を使って研究しているのか知らなかった。

もちろん、人の言葉がそれだけで実証的な知識材料になる訳ではない。彼らから聞き取ったことを、規則や指令の文言、数字的なデータ、工業統計によって補足することに努めた。以前から、発せられた指令と実行との間に大きな乖離があることは分かっていた。どれほど乖離するかは、発言した主がヒエラルキーの「上」にいるか「下」にいるかで違ってくる。だから、この研究、つまり真実の暴露が痛快なのだ。^{*}

^{*} この手法の有効性は現在も変わらない。ポスト共産主義的転換が行われている東欧・旧ソ連・中国で、何が生じているのかを理解するために、直接的な観察やインタヴューにもとづく個別的な作業だけでなく、この手法を広範に利用すれば、より深い理解が得られるだろう。

データをどのように加工すべきかについて、誰も教えてくれなかった。現在では、PhD論文だけでなく、それ以下の学士号取得論文でも計量的手法の適用は当然のことだが、その知識

はなかつた。当時の無知に赤面する。だが、そのようなマイスターとしての準備なしでも、多くの重要な連関を認識し得たことは自慢して良いと思う。もしかしたら、五〇年を経た今、誤解を恐れず、もつと思いつたことが言えるかもしれない。本書の残りの部分でも、経済学的手法の訓練が不足していたことを何度も記述している。職業的な大学教授の言葉として意外に思われるかもしれないが、敢えて言えば、無知であることのメリットもある。なぜなら、それ故に、「教授」に教を乞い教授の足跡を辿ることもなかつたので、オリジナルになろうとしたし、またオリジナルになれた。なぜなら、経済学研究の現代的手法を理解せず、形式的で技術的な要件を装備せず、回帰の当て嵌まりを心配することなく、さらには雑誌や出版社のレフ

フランスに要求される恐ろしいほどの技術的要件を知らなかつたし、それだから無視することもできた。何物にも囚われることなく、ただ「我が国の生産を担っているメカニズムはどのように機能しているのか」を理解したいという思いだけが、私を動かした。

歴史家のピーテリ・ジョルジュは、フリッツシュの経済研究所で使われている手法（その中には私の手法も含まれている）を、「ナイーヴな実証主義」と特徴づけている。「ナイーヴ」というのは適切な形容詞だと思う。私の仕事は、まさにナイーヴな画家や直感的芸術家のような「ナイーヴさ」で特徴づけることが

できる。プリミティヴで、壊れることがない。マイスターのような繊細さを知らず、粗々しいが、だからこそ「真つ盛り」な勢いがあり、フリッツシュで素直なのである。

「実証主義」というのは真実の半分しか伝えていない。先にマルクス主義理論の体系を叙述した。そこでは、当時の精神的状態の中で、「具体的労働と抽象的労働」、「価値の総計が価格の総計に等しい」という定理や同種の空虚な「理論」を無に帰して、一八〇度の転換を行つて実証に向かつた。

私の仕事は現実の図解を行うという単純なアプローチに留まっていない。この点では、農村を研究した作家より、一步先を行っている。厳密な思考の構造の中で経験的な資料を整理することに努めた。諸現象がどのような規則性を見せているかという検証を行った。いわば因果関係の分析を行おうとしたのである。そこからうまく加工された理論に辿り着けなかつたのは事実である（諸連関の正確な理解にはまだほど遠かつた）。しかし、本書の読者であれば、私が必死に、部分的な観察から一般的な結論を引き出そうと努力していたことを感じ取られるに違いない。

私の仕事のスタイルは、自らの思考体系を何とかしなければという切羽詰まった努力を反映するものでもあつた。自分のノートを眺みながら一日中考え続けていた訳ではない。こういう時には、「仕事の散歩」に出かけることにしていた。森や通り

をぶらぶらしながら、集めた資料や準備した書き物を頭の中で咀嚼そしやくしていた。ポケットには常にメモ用紙とペンを忍ばせ、立ち止まっては思考を書き留めていた。^{*}

^{*} かなり後の話だが、このような私の散策を怪しんで付いて来た人がいた。不可解そうに私を見つめながら、「あんたは自動車泥棒のために仕事をしているのかね。車のナンバーを控えているのかね」と怒鳴った。

この時からもう、論文を準備する段階になると、研究室ではなく、家かどこか集中できる場所で仕事するのがふつうになった。多くの同僚は毎日研究所に通っていたが、私はほとんどこの時間を家で執筆に充てた。この頃に、私や同じ職業の連中が仕事を刺激する〈慣習〉を導入し始めた。コーヒーマシンを沸かして飲む儀式、音楽を聴きながらの仕事、机仕事を中断する散歩等々。長男のガーボルが三、四歳の頃だった。良く私が幼稚園に連れて行った（その帰りが「仕事の散歩」になる）。次男のアンドラシシュを含め、子供たちは、私が家に居るときは仕事の邪魔をしてはいけないことをすぐに分かってくれた。もちろん、子供に時間を割くべきか、仕事に時間を割くべきかの二つの選択が、ぶつかり合うこともあった。^{*} 私が記憶する限り、それが鋭い対立になったことはなかったが、子供や妻のテリーは別様に

覚えているかもしれない。

^{*} 多くの親と同様に、私にも子供に童話を読み聞かせる時間があったことを忘れることができない。子供たちが少し大きくなった時に、小熊物語、アリス、陽気なカリンティの作品と一緒に読んだ。この幼い時期の体験や「馬鹿騒ぎ」が、大人になって観察されるユーモア・センスの基礎になったと考えるのは、間違っているだろうか。

研究生生活に多くの喜びを見いだした。会話を好み、夢中になった。生き生きとメモ類を整理した。執筆そのものが楽しみだった。何かに到達した、何かを理解したと感じるような閃光こそ、人生の喜びの瞬間を構成している。ようやく、自分の居場所を見つけることができた。

論文の主要な命題

論文の概念構成を作成するのに一年もかからなかった。同僚からの助言で若干の手直しはしたが、基本的な内容を変えることなく、一九五六年に夏に博士候補論文を提出し、少しの修正を施して、同年九月に Kösgazdasági és Jogi Könyvtár (経済・法律出版社) から出版された。出版に際して、『経済管

理の過度集権化』(A gazdasági vezetés túlzott központosítása, 以下の叙述では『過度集権化』と省略)というタイトルが付けられた。

今、およそ半世紀を経て、再びこれを手にとつて見た。楽しく読めた。当時の政治的ナイーヴさを反映している箇所もあるが、多くの部分は今なお正しいと思うし、著者としての誇りでもある(後で分かると思うが、私のすべての著作に対して同じような思いをもっている訳ではない)。

* これは筆者が思っているだけではない。最初の出版から三五年を経て、ハンガリーの出版社は第二版を製作した。英語版についても同じことが起こった。三〇年の歳月を経て、Oxford University Press が再版を出版した。

その「序言」が明確に論文の全体構成をまとめている。「経済管理や計画化の手法、価格や賃金制度について書かれた教科書や大学の講義録は山ほどある。しかし、これらには共通する重大な誤りがある。それは経済メカニズムが現実はどう機能しているかではなく、著者が考えるようにどう機能しなければならないかを叙述していることである。現実の経済メカニズムがどう機能しているかの諸連関を叙述することは、わが国の経済学文献でいまだ達成されたことのない、新しい課題である」⁽³⁸⁾。

『過度集権化』は以下のような計画指令制度の叙述から始まっている。人々は、「計画経済は何年も先のことを考えて作成される」と考えているだろう。それは間違いである。年間計画ですら、企業では真面目に受け取られていない。というのも、計画が企業の刺激誘因と結び付けられていないからである。(ここで、明瞭に刺激誘因の問題領域を提起している。この問題はかなり後になって、経済学の重要なテーマのひとつになった)。原材料と半製品の供給障害、予測不能な需要の変化、国民経済計画の頻繁な修正が慢性的な不信を醸成し、それが年度計画数値の信頼性を損なっている。生産を規定する四半期計画は、企業の上層機関、つまり工業部門全体を司る管理局から受け取る。企業の自立性は、唱えられているが、実際には存在しない。だから、四半期計画ですら、正確に実現することはできないのだ。計画に執着しようとすれば、常に変化する企業環境と衝突してしまう。逆に、当局が厳しく要求しなければ、権威がなくなってしまう。「このような矛盾は、どのような計画指令制御でも(非常に厳格な制御でも、ヘリベラルな⁽³⁹⁾制御でも)解決することができない。なぜなら、その根源は深く計画制度の矛盾に潜んでいるからである」。(このような文言は、指令経済を擁護する人々の不評を買った。ある討議で、「あれも駄目、これも駄目というなら、いったい君は何を望んでいるのかね」という反撃を受けた)。

「生産価値」がもつとも重要な指令指標とみなされていた。

企業の管理者は、健全な手段で生産価値を増やすことができるだけでなく、トリックによつてもそれが可能になることができるに見破った。たとえば、製品構成を決める時に、なるべく多くの材料を使用し、価格が高くなるようにすれば良い。(まさに、後年の経済学文献で議論の対象となつた刺激誘因の理論と實際を、ここで提示している。報償と罰則に結び付けられる量的指標がどんなものであれ、その指標価値は歪曲された方法によつても影響を受ける。刺激誘因を考案する側がある戦略を導入すると、それを受け取る側は有効な対抗戦略をすぐに見つけるのである)。

『過度集権化』では他の計画指標も扱っており、五五頁にわたつてひとつひとつを取り上げて、それらがいかに一貫性のないものであるか、この計画指標制度がどんな望ましくない副次効果をもっているかを明示している。

ひとつの独立した章を刺激誘因に当て、給与・報償・倫理的認識を良い方向や悪い方向へ誘導する効果を扱っている。行政的管理と懲罰(懲戒、訴追、懲役刑等)にも触れている。「制度の中に物質的関心が組み込まれる度合いが少なければ(したがつて、人間の情熱に依存する部分が少なければ)、その分だけ強制的手段の使用に傾くことになる」。罰則があつても、制度の一貫性の欠如そのものが規則の遵守を難しくさせるのである

る。

それから四〇年経つて書き上げた社会主義経済に関する総括書の主要な命題のひとつが、「社会主義の見せかけの改革、⁴¹緩和⁴²がシステムの作動能力を損なう」というものである。抑圧のない社会主義制度はない。今、私の最初の著書を読み返して、この思考を生み出した事情に思いが馳せた。『過度集権化』では、「新時代」の特徴として、上級機関が規律強化の行政的手段を削減したことを指摘した。「これが導入されたのは、また、物質的刺激の包括的制度が十分に不足を補うことができな時期であつた。古い制度が不変のまま依然として機能していた。あたかも、広範に存在していた行政的規則という「ヘイル」の注入なしで動いている機械のようなもので、その歯車が軋んで音を立て始めていた。その見せかけの状態こそ、当時の障害を引き起こすひとつの原因であつた」。

指令と刺激誘因とが一緒になつて、「制御性」を生み出す。

『過度集権化』では以下のように、それらを列挙している。

1 管理者の規律は量に向けられている。これは好ましい。というの、公的な関心は生産量の増加にあるからである。同時に、それは有害である。なぜなら、一面的な量的視角を蔓延させるからである。

2 誤つた「重要度」にしたがつて課題が設定される。費用の削減や技術発展は低い評価を受ける。なぜなら、これら

は指令にも刺激誘因にも役立たないからである。

3 「一〇〇%」崇拜。もし計画を真面目に受け取るなら、

一〇〇%以下の実績は指令違反を意味する。他方、奇怪なことに、一〇〇%に満たない部分をどんな手段を使っても搾り出そうとすると、非常に有害な効果を伴うのである。

4 「計画経済投機」。これは次のような経済管理者の要領の

良さを名付けたものである。法律や指令の文言を遵守しながら、管理者に最大の報償や榮譽をもたらすような生産・資材利用の実績を「引き出す」ものである。この場合、国民経済的関心が考慮されることは稀である。

5 計画の弛緩と緊張をめぐる闘い。ここでは、後にハンガ

リーの議論で「計画交渉」と呼ばれ、西側のソ連学者が「ラチェット効果」(Ratchet 後戻りしない歯車)と名付けた現象の叙述と分析を行っている。企業が計画の超過達成によって報償と榮譽が得られる場合、企業は最初からこの計画水準を「計画化」する。以前には一〇五%あるいは一一〇%だったものを、次の年度には一〇〇%に設定させるようにする。したがって、企業は生産を抑制し、一〇〇%一〇二%の水準を超えさせないようにする。さらに、計画に先立つ討議では、生産能力を実際よりも小さく見せるように仕掛け、予想される困難を大きく見せて、より軽い計画課題を取得するのである。

6 生産周期の不均等性。生産は独特のリズムをもつ。「追

つ駆け仕事」、「突撃生産」や弛緩の時期が交互にめぐって来る。計画表のリズムと生産の変動との間に、明瞭な連関を描くことができる。計画期間末期が近づいたり、計画実績に伴う報償が危うくなったりする場合には、突撃状態が強まる*。

7 「現在」と「将来」の対立。これは経済科学の中心的問題のひとつで、現在の消費と将来を準備する投資と貯蓄との関連の問題である。「過度集権化」では、この問題を別の側面から分析している。企業の経済管理者はその注意とエネルギーを短期的計画の達成に集中し、将来の効率的生産を準備する長期的課題(技術開発、新製品の導入、労働組織の近代化等)をないがしろにする。

* 生産のリズムとその因果関係を最初に分析したのは、Brody Andráš (1956) である。

『過度集権化』では、上に掲げた制御性を「必然的な傾向」と名付けた。「たんなる希望的意思では消滅しない傾向であり、それを警告する言葉は僅かばかりの効果をもつとしても、それを阻止することはできない。これらを消滅させるためには、計画管理の方法、計画化と刺激誘因の形態を変えなければなら

ない。⁽⁴⁾

このような私のアプローチを、当時の「政治経済学」文献がスターリンに則り「計画性と比例的発展の法則について」議論していたアプローチと対比してみよう。この種の著作の執筆者は、経済の計画的で比例的な発展を望んでいたようだ。このような「規範的」要件を「法則」と名付けているが、法則とは実証科学が使うことができる概念である。科学が法則と名付けることができるのは、「現実」に貫徹するものだけである。「過度集権化」が「必然的な傾向」と名付けた制御性は「現実」に貫徹しているものであり、したがってこれは「計画的で比例的な発展」法則の排除を意味している。

『過度集権化』では、後年の著作で中心的問題のひとつになった「不足」にかかわる問題領域に、独立した章を当てている。生産を分析したことから、当然のこととして、資材の不足現象が検証の対象になった。当時でも不足のもたらす諸帰結を十分に感じ取ることができた。生産性を低下させ、消費者を生産者に従わせる現象が見られた。「不足が中央集権化傾向を強め、他方で中央集権化が不足を激化させる」という不足と集権化の密接な連関を示している。^{*}

* 『過度集権化』では一度だけ、不足に関連した問題を論じたところで、マルクスを引用している。社会主義制度で経済がどのよ

うに管理されるべきかについて、マルクスは一、二の指摘を行っているだけである。『資本論』第二巻で短いコメントを与えている(1978 [1885], II, Kötter 426.p.)。マルクスは、社会主義経済では「常に相対的過剰生産」状態にあるべきだという正しい指摘をおこなっている。このような「生産と並行して増加する在庫」(『過度集権化』)によって、生産変動から経済を守ることができ

る。当時、社会主義経済における恒常的な不足を理解したいと考えていた。その原因の一部(最も重要な部分ではないが)を『過度集権化』で記したが、このより深い因果関係の分析に至るまで、まだ多くの研究が必要だった。

これに続く章では、結論の一般化に向かっている。企業には二つの方向の影響が見られる。他の企業との水平的な関係と上級機関との垂直的な関係である。社会主義経済では水平的な関係による影響はほとんど無視でき、垂直的な関係の支配で特徴づけることができる。このような分類の仕方は、後に広範に利用されたように、成功したと言つて良い。

最終章は、著作全体を貫く基本的思考の総括から始まる。「過度集権化、その相互に関連する系統的なメカニズムには、その内的論理、多くの内的傾向、〈法則性〉が存在する」⁽⁴³⁾。しかし、それは調和的であることを意味しない。逆に、それは矛盾を内包する。不可能であるにもかかわらず、すべてを指令によ

って制御しようとする。実現不可能にもかかわらず、すべてを集権化しようとする。

ここには、後に「制度パラダイム」と名付けた視角が明瞭に現れている。部分を理解するだけでは十分でない。全体は部分の総計以上のものである。したがって、ひとつひとつの部分修正しても十分でない。小さな部分修正は包括的な変化を補うものではない。

最終章では過度集権化の根源を明らかにしようとしたが、仕事半ばで終わっている。この当時、その根源がどれほど深いものか、つまり政治構造や所有関係に至るものであることを理解していなかった。ただ、この因果関係を論じたところに注目し値するセクションがあり、そのタイトルは「あらゆる自発性に対する恐れ⁽⁴⁾」である。この数パラグラフは「過度集権化」を読んだマルクス・レーニン主義の信奉者をかなり挑発するものになった。

『過度集権化』は最後に、当時の影の薄い改革の試みが失敗していることを示し、改革途上に立ち塞がる保守勢力に注意を喚起した。この著作は最後まで実証的な記述と分析に終始し、改革提案を行っていない。ただ、最後の数行が読者を鼓舞するものになっている。「過度集中状態を取り壊していく試みは、けつして無駄にはならないだろう」と。

今、数週間にわたって *Szabad Nép* 時代の私の記事と『過度

集権化』を読み返してみると、叙述スタイルの変化がはっきりしている。自分自身を見つけたと言っても良い。以前に見られた情熱的で業績を上げるような声高のスタイルが、冷静で客観的なスタイルに変わっている。二〇〇頁余の著作のほとんどが事実を伝えている。

文章として書かれたものだけが『過度集権化』のメッセージではない。そこに書かれていないことも、メッセージなのだ。「中立的」な専門用語を使い、マルクス主義政治経済学のジャーゴンを使っていない。当時の経済メカニズムをめぐる議論の中で、改革派経済学者は「市場により大きな領域を」と主張したのではなく、「価値法則を自由に貫徹させるべき」と主張した。かなり後になっても、ソ連ではカントロヴィッチ他の数理経済学者が、数理的手法によって獲得されたパラメータや線型計画法のいわゆる影の価格についても、マルクス主義のジャーゴンを使って説明している。

思想の伝達において、言葉は非常に重要な役割を担っている。『過度集権化』やそれ以後の著作において、私は表立ってマルクス理論を批判していない。他方、マルクス主義の言葉の使用を意識的に避けていることは、それを理解する人にとってきわめて明瞭だろう。(これは本当に意識的に努力したもので、そのことはマルクス主義からの決別を叙述したパラグラフや『過度集権化』を補足する未発表の草稿について、すでに既述した

ところである)。私が示したかったこと、そして同時に読者に教えたかったことは、精神的な陥穽に導くマルクス主義の概念構成を投げ捨てることで、経済に関する内容のある命題を定立することができることである。ハンガリーの経済学文献の中には、こうした方向の賛同者を見つけることができる。しかし、他の社会主義諸国や我が国でも、ほとんどの社会科学分野で、マルクス主義の概念構成が長期にわたって支配的位置を占め、思考の自由を妨げてきた。

著書への反応

博士候補論文の最初の読者たち、同僚経済学者、身近な友人たちは、興奮と賞賛をもって受け止めてくれた。これは予想外の反応であった。自信があつて始めた研究生活ではなかつたので、好意的な評価は私に新たな力を与えてくれた。

研究所の討議でも、多くの賛辞が寄せられた。ブダペストの通例で、口から口へと話題が広がり、普通のものとは異なる「政治的にスキャンダラス」な著作という噂になった。

ハンガリーの規則では、博士候補論文は公開討議にかけられる。学位判定機関である学位認定委員会は論文審査員を指名し、討議の後に評価を与え、学位授与の是非を決める委員会を設置する。

博士候補論文の討議には通常二〇―三〇名が出席し、親戚や友人、テーマに関係する専門家の一部が集まる。私の論文の審査は一九五六年九月二四日に開かれ、多くの人が集まつた。⁽⁴⁵⁾記憶を美化しているかもしれないが、二〇〇名かそれ以上集まつていたと思う。

ピーテル・ジョルジュが議長だった。彼の言葉を引用したい。⁽⁴⁶⁾「私は一時期物理学を勉強した。その時に、物理学における真の科学はガリレオから始まることを学んだ。それ以前に存在したものは、推測であり、物事の思索であつた。物理学にメートル、時間、重さを導入したのはガリレオであつて、彼は物事を測定したのである。そして、事実上、ここから精密科学の歴史が始まつた。当該の博士候補論文に示された客観的な規律、問題の処理における内的陥穽に影響されない明晰な手法は、私にこのガリレオのことを想起させた。これはこうなつていて、あれはあのようになつていて、現象を顕微鏡の下におき、解剖し、見たものを記述する」。科学史の類推は誇張に過ぎるが、これはピーテル・ジョルジュが私の論文を、社会主義社会におけるこれまでの経済学研究に転換をもたらすものとみなし、そのことを感性的に表現したものである。

一人の審査員（討論者）は、軽工業省国家書記（事務次官）のアイタイ・ミクローシュだった。論文内容に同意し、承認するものだった。（後に、彼はカール時代ポストを昇り、

国家計画庁副長官に就任した。『過度集権化』が政治的な攻撃的になった時に、著作のレビューとして彼の審査員見解を出版するように何度も求めた。しかし、彼はこの要求を受け付けなかった。

もう一人の審査員はアウグステイノヴィッチ・マリアで、好意的な見解を表明してくれた。彼女が批判した点は、私の研究には十分な理論的分析が含まれていないことと、抽象的手法を使っていないことであった。討議の慣習にしたがって、審査員が提起した問題に答える段になって、私はグステイ（当時、アウグステイノヴィッチ・マリアのことを皆はこう呼んでいた）の言葉に、非常に苛立つて反応した。抽象化の役割や現実の複雑な連関を説明する際の「純理論」の重要性を否定したつもりではなかった。ただ、グステイは間違った時に、間違った場所ですべてを要求したのだ。マルクスの思考スタイルを真似た理論的空虚から決別することが至上命令だった時なのだ。

公開討議の参加者からも多くの興味深いコメントが寄せられた。もつとも大きな注目を浴びたコメントで、後に問題を指摘する論文類が繰り返しその論拠として使ったのが、マインディ・ピーテルの意見だった。⁽⁴⁸⁾以前からマインディとは、一時期、党本部で面識があった。フリッツシュ・イシュトヴァーン率いる部局で働いていた。彼の批判は、論文の帰結としての諸結論が十分に深められていないというものだった。問題の根源を具体

的な経済制度に求めるだけでは事足りないという。彼によれば、「もし制度が悪いというのであれば、当該の誤りを取り除くことはできない。制度全体を本質的に変えなければならぬ」。

マインディが「制度」で何を理解したのかは分からないが、現在の視点から見て、私も彼と同じように思う。問題の因果関係の分析において、決定的なポイントで分析が止まっている。問題の根源が計画指令経済、極端な集権化の度合い、市場の役割を制限していることを正しく分析しているが、これ以上の深い分析に至らず、経済機能の不全に果たす政治的圧力、イデオロギー独占、私的所有を抑圧する国家所有の基本的な役割を認識することがなかった。もしかしたら、マインディはすでにそのことを理解していたのかもしれないが、私ができることを理解するのにまだ時間が必要だった。当時はまだ、社会主義経済の改革可能性を信じていた。後の著作で、この当時の私の思考状態を「ナイーヴな改革者」であったと記している。

変革の可能性を信じていたので、一九五六年春に、党と政府に対する研究所の改革提案をまとめる作業グループのリーダーを引き受けていた。私の指揮下で、内外の研究者が提案を準備することになった。ナジ・アンドラーシュ、ボッド・ピーテル、リーデイ・アランカが私を補助する同僚だった。八月にはおよそ二〇頁の提案が完成した。冷静な調子と注意深い概念構成で、多くの具体的な詳細を付したハンガリー「市場社会主義」

導入を目指した提案⁽⁴⁹⁾が生まれた。この資料は軽工業を扱うだけの慎ましいものであったが、そこで述べられた文言ははるかに包括的なものであった。この提案資料は、「新経済メカニズム」の導入を図った一九六八年改革の最初の原型的な概念構成だともみなすことができよう。この改革提案の背後にあつて、提案作成の精神的な支柱になつたのは、ピーテル・ジョルジュの論文と私の『過度集権化』であつた。

我々の改革提案をめぐつて、研究所では外部の専門家を招いて、内容のある冷静で、基本的思考に共鳴する議論が展開された。当時の小地主党の経済政策担当政治家であるヴァルガ・イシュトヴァーンは、改革提案と『過度集権化』の双方を詳細に読み、コメントした。この後、彼は一九五七年に設立されたカーダール政府の経済改革委員会の座長を引き受けた。同じく、ナジ・タマーシユも二つの文献を丁寧に検討してくれた。彼は当時、私の博士候補論文の指導者で、研究所の上司でもあつた。共産党は一九六八年の改革準備委員会の書記として、彼を指名した。この二つの文献を検討した多くの人々が、後の一九五七年のヴァルガ委員会、一九六〇年のナジ委員会のメンバーになつた。私の思考が彼らに大きな影響を与えたものと確信している。私が「ナイーヴな改革者」を超え、社会主義の見かけの改革に懐疑的になつた時でも、この影響は多くの研究者の間に残存し続けた。

以前の職場である *Szabad Nép* から、博士候補論文と改革提案をまとめた記事の依頼がきた。偶然の幸運と言おうか、偶然の祝砲と言おうか、私の記事はナジ・イムレ復党のニュースとともに、一〇月一四日の紙面を飾つた⁽⁵⁰⁾。

経済研究所での私の研究生生活は研究補助者から始まつた。この博士候補論文の後、所長のフリッシュ・イシュトヴァーンは公開の場で私の業績を高く評価し、自立した研究者への昇進を発表し、給与を上げて、報奨金もくれた。*Szabad Nép* を解雇されて一年半も経つていなかったが、再び私は上昇気流に乗ることになつた。

政治的背景

もしこれがアメリカのケンブリッジ・マサチューセツツ通りにあるハーヴァード大学やMITで起こつたことだとしたら、「コルナイの経歴の大変化」ということになる。新聞記者から研究者への転進を図り、今その軌道に乗つた、と。

ただ、これらすべてのことは東欧のブダペストで起こつたことだ。一人の大学院生が平和な大学町で、静かな図書館を舞台に教授から与えられた狭い問題領域を解明することを始めたのは訳が違つた。本章のこれまでの部分で、研究者としての経歴を開始した時期の諸事情が明らかにされたので、今度は当時

の政治的背景について描写してみたい。

研究所に移った頃は、まだラーコシとその一派が政府の実権を握っており、彼らの権力基盤が強化されたように見えた。それから八ヶ月経て、ソ連共産党第二〇回党大会におけるニキータ・フルシチョフの彼のスターリン批判報告が、共産主義諸国に嵐のような転換を引き起こした。ハンガリーの政治生活が再び息を吹き返した。急進的な知識人の集まりであるペトユーフ・サークルでは、激しい批判と責任を問う集会が次から次へと開催された。始めは静かに、次第に声高な要求が唱えられ、「新時代」政策への回帰、ラーコシの解任、ナジ・イムレの復党と党指導部への復帰が要求された。

こうした政治的情勢の中で博士候補論文が発表されたことで、私の著作の影響が相乗効果を持つようになった。博士候補論文の公開討論に集まった人々の多くが、研究の学問的レベルに関心があつて来たとは思わない。多くの人は、私の著作が現状の鋭い批判になっているという噂を聞きつけて集まってきた。公開討論が行われた九月二四日は、革命の勃発のわずか一ヶ月前であつた。嵐を予感させる雲が天空を覆い、メーライ・テイボルが彼の臨時総会で要求した「清算の嵐」が近づいていた。私の博士候補論文審査を伝える記事が日刊紙に掲載されたのも、こういう情勢があつたからである。ハンガリーでも外国でも、日刊紙がPhD論文や博士候補論文の討議を扱うことはな

い。明らかに、私の論文の討議を扱ったのは、それがたんなる専門研究家の集まりではなく、政治的事件だったからである。賞賛と並々ならぬ注目を浴びて嬉しくない著者はいない。私も嬉しく思ったが、戸惑ったことも事実である。私の反応を記述するためには、時間を遡る必要がある。専門的研究の仕事と政治的な役割の関係について、当時の私がどのように考えていたかを述べる必要がある。

ハンガリー科学アカデミーのひとつの研究所に職を得た時に、これからはすべての注意と関心を学問研究に向けてと固く心に決めた。新聞記事執筆は本来の仕事とは思われなかった。一九四五―一九五五年までの期間は政治的経歴を辿っていた。政治的経歴の中で、青年運動の専従者になるか、それとも党の中央機関紙編集者になるかの選択は、二次的なものに過ぎない。私は一挙に、政治的経歴から決別したかった。学問研究に精神的な憧れを感じたというだけではない。そこでこそ、自らの能力を遺憾なく発揮できると考えた。少なくとも、「政治からの決別」という負の動機は非常に重要なものであつた。

政治から受けた失望と欺きの感情については第3章末尾に既述した。これに、今ひとつ重要な契機を付加する必要がある。過去一〇年の歳月は私自身にとって大きな試練だった。そして、その試練に耐え切れなかった。欺きには二人の当事者がいる。欺く者だけでなく、欺かれる者がいる。息子のアンドラーシュ

が青年期を迎えた頃に一九五〇年代初めのことが話題になり、こう質問した。「お父さん、そんなに賢いのに、どうしてそれほど馬鹿になれるの」と。

本書のこれまでの諸章において、このプロセスがどのように進化したかの詳細な説明や忠実な解明に取り組んできた。説明でもあり、免罪でもある。アンドラーシユの質問は問題を単純化しているとはいえ、正しいのである。

政治家として成功するために不可欠な資質がある。他の多くの職業と同様に、たんにその能力があるというだけでは十分でない。それ以上に、政治家としての確信が必要だ。何を、何を鼓舞するかについて強い確信を持ち、その確信を他者に及ぼすような能力がなければならぬ。一時期まで、私もこのような確信をもっていた。しかし、一九五五年に、これからはこのような信奉者であることを止めると決心した。すべてのことを疑いたい。これは、誰かが政治家として成功することとは無関係なことだ。

権力欲が成功した政治家を動かす。政治的経歴を辿っていた時でも、私にはこの動機が弱かった。そして、権力に溺れた人間の間を眼前にして、金輪際、権力への道を歩むことはしないと決断した。それからは、権力への道に連なるポストから、身を遠ざけるようにしてきた。

無慈悲さや傍若無人さが少しでもなければ、政治家として大

成することはできない。厚顔でなければならぬ。受けた傷に拘泥せず、感情からではなく計算された政治的配慮から反論できる資質がなければならぬ。その価値体系においては、家族、友人、芸術や自然が与える喜びよりも、政治的理念、党、運動への貢献がより重要性をもつ。この程度の基準から見ても、私は到底、政治家の資質をもっていなかった。自分自身を特徴づけるとすれば、まさにここに列挙した「政治家の資質」とは正反対なものになる。そのような資質を持ちたいと思ったこともなかったが。

政治家と研究者の役割を結合しようとも思わなかった。この二種類の課題を半分ずつ実行することなどできないと（正しく）考えていた。時間やエネルギーが二つの機能に裂かれるからではない。常に二つの葛藤の中に生きなければならぬからだ。二つの役割が精神状態に影響するからでもある。午前に政治家として情熱をもつて偏った見方に立ち、午後には無心に研究に励むことなどできない。偶数日には自らの真実を留保なしに信じ、奇数日には自らの分析を疑いの目で見るなどできない。

学問を選ぶと決断した。もちろん、それ以後、すべての瞬間において、これを一〇〇%守ったとは言わない。常に完全に一貫している人などいない。ただ言えることは、僅かな例外を除き、以後の半世紀にわたって、私は自らの選択に忠実であった。

もちろん、この二つの領域の境界がどこにあるかは、難しい問題である。学問の世界の中でも、完全に政治家的な活動の選択の余地があることなど、思いもよらなかつた。これもひとつの可能性として存在していた。経済科学の中にも、純粹に方法的で技術的性格のものがあつた、それらは高い評価を受けている。しかし、それらは私の関心を捉えなかつた。私がやりたかつたことは、私の周辺に展開していることを理解し研究することだつた。社会主義制度の何が問題なのかは、情熱を動かすテーマだつた。学問へ向かうことが国や人類への責任を放棄することだと、一瞬たりとも感じたことはなかつた。「義務をもつた」学問を開拓したかつたのだ。

ここで再び、私の場合について、「政治」と「学問」の境界がどこにあるのかという問題を提起してみたい。政治でなく学問を選択した私の基本的決断は強固なものであつたが、私の思考の中では、その境界をどこに引くのか明瞭ではなかつた。地上の国境のように、明瞭な境界など存在しないことが分かつた。この二つの世界の間には、どちらにも属さない広い領域が存在する。ひとつひとつ確かめながら、多くの間違いを犯しながら、何を引き受け、何から距離を取るかを、ケースごとに決断するように努めた（それ以後も）。

この境界領域の標識になると考えたものがあつた。学問に貢献しようと思えば、成果を出版しなければならぬ。当時は、

西側のアカデミ界におけるキャリアと出版との関係について、何の知識もなかつた。科学史を紐解くと、机の中に眠つていた研究が後世の研究者を驚かすことがあることは知つていたが、そのような研究は何の影響も持たない。さて、私は合法的出版に政治的な制約があり、出版の自由がない国で働いている。とすれば、現実的にならざるを得ない。合法的出版と非合法的出版の重要な問題については、後にまた触れることにするが、ここで前もつてこの問題を扱うのは、まさにこの時期に人生の難しいダイレンマに陥つたからである。

ケンデ・ピーテルの草稿に対する長文の研究を準備し、マルクス主義に関する自らの視角をまとめ上げた時に、ギメシュ・ミクローシュがこれを読み、その内容に賛同を示して、これを増刷して配布することを提案した。私はこの提案を受け容れなかつた。私にとつてこの草稿の唯一の目的は、自らの視角の明瞭化であつた。博士候補論文を準備するにあつて、自らの思考を整理し、ひとつひとつの論点について公開できるものと公開できないものを勘案することが、当時の私にとつて重要なことであつた。このため、博士候補論文の文言の一部が不明瞭になつた。そのことは心苦しいことであつた。事前に非合法の草稿を配布していたら、公開討議に参加した数百の人々の思考を覚醒させるような影響があつたかもしれない。しかし、合法的に出版された著作はハンガリーでも外国でも多くの読者に届

けられ、持続的な影響を与えることになった。

ペトユーフィ・サークルの会合では精神的かつ政治的な興奮を覚えた。ひとつの会合を除き、すべての集まりに参加した。にもかかわらず、発言したのは唯の一回だけである。経済学的討論で質問をひとつ提起せざるを得なかったからだ。『過度集権化』が討議の題材になったが、私は講演を引き受けなかった。会合の雰囲気は磁石のように、「聴衆」として惹きつけられた。しかし、潜在的な「講演者」としては、ここは「自分の持ち場」に入らないと感じた。ペトユーフィ・サークルの会合は、知識人の専門的な討議と政治集會が結合したようなものだった。このような場合、冷静な議論と並んで、大衆心理学的手段をも操作しなければならない。ペトユーフィ・サークルでの議論は望ましい変化をもたらす役割を担うだろうと感じた。ただ、自分の能力を冷静に判断すれば、このサークルは私向きのフォーラムでないと考えた。私は今、大学でのひとつひとつの講義の後にある「質問―回答」の時間を楽しんでいる。これは学問の役割領域に含まれるものである。ここでは、専門的な知識と知的「当意即妙 (Schlagfertigkeit)」があれば十分である。政治的な色彩の強い集まりでは、声を上げたり、興奮したり、敵に対する憤慨が湧き上がったりする。私にはこのような会合に適する能力がないと感じている。

あれかこれか。この時期の私はこのような形で自分に対する

問いを発した。ある人には私の急な選択があまりに硬直したものに映ったかもしれないし、他の人には理解をもって受け容れられたと思う。人々の反応がどうであれ、私は決断した。中途半端ではなく、完全に学問研究の世界に留まりたい、と。

第6章 革命とその帰結（一九五六年一〇月二三日―一九五九年）

一〇月革命はまったく突然に勃発したという訳ではない。私の友人の二人、ギメシユ・ミクローシユとケンデ・ピーテルはそれぞれ自らの判断にもとづき、政治的緊張が増し、人々の不満が秋には何かの形で爆発するかもしれないと予測していた。九月、一〇月になって、事態の急変が感じられるようになっていた。ただ、何時どのような形で爆発するのか。それは誰にも分からなかっただろう。もちろん、私にはまったく分からなかった。

ナジ・イムレの新プログラム

一〇月二三日のお昼過ぎ、前もってドナート・フェレンツと打ち合わせした通り、二人でヴァシユ・ゾルターン事務所の話し合いに参加した。ドナート・フェレンツは古参の尊敬できる共産主義指導者だった。農地分配の時には、ナジ・イムレ率い

る農業省で国家書記だった。その後、ラーコシ・マーチャーシユの書記局を束ねる役を負ったが、カーダール・ヤーノシユに対する刑事訴追が始まった時に拘束され、監獄で苦しい日々を送った。一九五四年に解放され、我々の研究所の副所長に任命された。当時、排斥された「右派」の指導者の一人とみなされていた。私は尊敬の念をもって接したし、彼も私を評価してくれた。カーダール時代にも監獄に入れられたが、そこからも生還し、友情を深め合った仲である。

ヴァシユ・ゾルターンも古参の共産主義者で、ラーコシとともに、一五年以上もセグドのチツラグ刑務所で過ごした経歴をもつ。その伝説的な経歴で、一九四五年にブダペスト市長の地位に就いた。経済総評議会の議長を経て、国家計画庁長官（その頃に知り合った）になったが、その地位はラーコシの恣意によって格上げされたり、格下げされたりした。彼の事務所に向かった一九五六年には、協同組合全国評議会議長を務めていた。

この時、ヴァシユ・ゾルターンはナジ・イムレ側に付いていた。彼の許に集まり、話し合いを始めた時には、ひっきりなしに電話が鳴っていた。ペム広場にどれほどの群衆が集まり、工科大学の方面に向かったというような情報が届いていた。ドナートは、ナジ・イムレが再び首相になることは確実だと報告した。国会で行う演説とそこで描かれるプログラムを準備しなければならなかった。誰が最初の概念構成をまとめるか、それを決める必要があった。プログラムの経済部分の執筆について、誰かが(多分、ナジ・タマーシユ)私を推薦した。チコシュ・ナジ・ペーラは自分が引き受けても良いと提案したが、ドナートは私を選ぶ決断を下した。工業省の国家書記だったことのあるカルツァグ・イムレは諸提案をまとめたメモを渡してくれた。ピーテル・ジョルジュの同僚の一人であるザラ・ユーリアは、必要なデータの提供で私を助けてくれることになった。そして、中央統計局(KSH)で仕事をしようということになった。この時、ピーテル・ジョルジュは外国に滞在しており、彼の部屋で仕事ができ、彼の秘書も使えることになった。こうして、この仕事を引き受けた。

もちろん、この日の午後がどういう日になるのか、一九五六年一〇月二三日が後年になって何を意味する日になるのか、知る由もなかった。ただ、この会合に参加した人々と同様に、私も何か特別な歴史的時間の間に生きていると実感した。政治で

はなく、学問に携わりたいという強い決意は、このドラマティックな瞬間を迎えて、脇へ置かれた。

会合ではプログラムの内容をめぐって、長時間の討議が続いた。夜遅く家に着いた時に、友人から電話で事態の展開、とくにハンガリー・ラジオ前で展開された事態について知らされた。翌朝早く、中央統計局に向かい、ピーテル・ジョルジュの机の前に座り、プログラムを練り始めた。

残念ながら、私がまとめ上げた文書は消失してしまった。一月四日の後、姉のリリーに預かってもらうように頼んだ。自宅捜査で見つかると思ったからだ。それから程なく、姉と母に、数日だけギメシユ・ミクローシユを匿ってくれるように頼んだ。それから一日経って、母の家を出たところで、彼が拘束された。彼女の所も自宅捜査されると考え、リリーは一〇月にまとめ上げた政府プログラム案を含め、私から預かった書類を焼却した。その内容を復元しようと思えば、私の記憶に頼る以外にない。通常、自分の言いたいことが分かっているれば、私は容易に素早く書くことができる。しかし、このプログラムは違った。何度書き直したか分からない。いつも最初から書き直した。数日で概念構成案ができた。私に与えられた課題は、党の政策でも、法律でも対外政策の素案でもない。私が委任されたのは、経済プログラムとそれに関連する社会的政治的要求の仕上げである。概念構成では一〇月二三日のヴァシユ・ゾルターンの会合で

議論された経済政策の諸問題が列挙された。私は、「正しいと思うことを書けばよい」という自由度が与えられたと考えた。どうせ、ナジ・イムレや彼の側近が眼を通し、何を採用し、何を変更するかを決めるだろうから。

もしこの素案が採用されたなら、首相は適切な準備の後に計画指令制度を廃止し、その代わりに市場経済を發展させる意図を発表するはずであった。これに関連して、企業管理決定過程に労働者が介入できるようにし、いわば工場民主主義を制度化する。(私がこの仕事を開始して数日経った時点で、労働者評議会設立のニュースが入った。そのことも、プログラムに何らかの形で労働者自主管理の組織を組み入れることを後押しした)。

何度か練り直した素案には自営の小工業者や商業者への支援が取り込まれたが、国家所有企業の私的所有への転換という思考は、プログラムの中にはなかった。逆に、国家所有を守らなければならぬという文言が入った。

農業分野では、協同組合の成員がそれを望めば、強制的に創出された協同組合を解散し、農民の私的所有を復活することが容認された。同時に、協同組合を残す場合には、国家補助への道が開かれる。

プログラムでは幅広い対外貿易関係をすべての方向で構築するが、コメコンからの離脱は留保し、外国貿易を完全に自由化

することが謳われた。

素案ではマクロ経済的緊張についても触れられた。現在の生活水準を危険に曝してはならないが、その急速な改善を約束しない*。

* この点について、一〇月二三日の会合では議論が交わされた。ナジ・イムレは大衆受けするプログラムを発表すべきだと考える人がいた。他方で、現実的で実現できるだけのものを発表すべきだと考えた人もいた。今日でも、日々、政治家を悩ませているデイレンマが、もうこの時に浮かび上がっていた。私は適切で責任ある約束だけを言明する立場に立っていた。それは今でも変わらない。

この紙に書かれた素案は、当時の経済状況を考慮した、一九五三年の「新時代」政策の継続発展版だった。それを超えた部分分は、「市場社会主義」と「工場民主主義」の導入である。これらは一九五三年六月の時点では、また行動目標に入っていなかった。以後、ここに至る一〇・一二ヶ月間の研究や専門家の間で好意的に受け止められた改革提案が、私の思考をこの方向に推し進めたのである。

ここで、再び一九五四年からの歴史を振り返ってみよう。一九五四年一〇月の共産党中央指導部会議におけるナジ・イムレ

の（一時的）勝利に続いて国会演説があつたとしたら、まさに私の概念構成はプログラム作成の適切な出発点になっていただろう。まさに私が用意したプログラムはナジ・イムレ用になっており、急進的な改革共産主義者の思考の枠内に「収まる」ものだった。

しかし、歴史は一九五四年一〇月で停止しなかつた。一九五六年一〇月二三日以降に始まつたものは、この枠組みをはるかに越えてしまった。最初の数日は、まだ一党制や改革され「民主化」された制度が維持されるように見えた。しかし、急速に事態が展開し始めた。一九四五年の旧連立パートナーの支援を得て、連立政府が形成されそうになつた。数日のうちに、二〇を超える政党が生まれ、政治領域は複数主義に向かつて走り出した。三日目、四日目になると、私が用意したプログラム案は政治的な現実性を失つたと感じるようになった。私には連立政権の経済プログラムを立案する準備はなかつた。

歴史に「もし」はないが、状況が安定し、政府プログラムを発表できていたとしたら、当時のナジ・イムレ連立政権の経済プログラムはどんなものになつていただろうか。ソ連の武力介入の前日、一九五六年一月三日、ロシオンツィ・ゲーザは記者たちを招いて質問に答えていた。「政府は過去一二年間に達成されたプラスの成果を放棄しないことで、完全に一致している。したがって、土地改革、工場の国有化、社会的達成物を放

棄しない。……政府はまた、どのような状況においても、ハンガリーに資本主義を復活させる意図がないことで、完全に一致している⁽⁵²⁾」。ロシオンツィの会見に先立つ数日（運命を決する）前に、私は政府の経済プログラムを巡つて苦闘していた。正直言つて、政治の将来について、私の予感にはなはだ不確実なものだった。状況が急進的に社会主義改革の線を越え、ハンガリーに西側世界と同様の経済制度が樹立される可能性を排除できないと感じた。

すべてのものが騒がしかつた。過熱した状況、極端なマニフェストのニュースが私の許にも届いた。と同時に、状況の展開の主要な方向に対して、政治的かつ世界観的な違和感はなかつた。逆に、ハンガリーが真の民主主義の方向に向かつて進んでいるように見えることを嬉しく思つた。しかし、私には新しい政治の現実の要件を満足させるようなプログラムを準備する手だてはなかつた。ドナート・フェレンツ、ヴァシユ・ゾルターンやナジ・タマーシユは私を何でもできる経済学者と信じたようだが、それは買いかぶりだつた。どのようにして、一党制から多党制へ、社会主義制度から真の市場経済、資本主義へ動かすことができるのか、まったく何も分からなかつた*。

* それから三三年後の状況は異なつていた。この時には、研究者としても成熟しており、知識材料にもとづいて、同じ問題につい

て伝えるべきものを持っていた。一九八九年に『感情的ピラ』を準備した時には、何を為すべきかを記すことができ、実行に移すべきものを（それを望むなら）伝えることができると感じた。

何日も苦闘した挙げ句、結論を出した。プログラムを仕上げるのは諦めよう。そのことをドナートに伝え、彼は理解をもつて受け止めてくれた。秘書を通して、それまでまとめた文章を彼に渡した。多分、このコピーも消失してしまったと思う。

仕事の完成を諦めたことは苦い思いとなった。専門的かつ政治的な失敗だと感じた。私の周辺には歴史の嵐が吹き荒れていた。私の単純で狭い知識では、新しい状況には対応できない。為す術もなく、書類の山の中に座っていた。

「マジヤールの自由」

机の前に座り続け、ピーテルの秘書たちに口述して文言をタイプさせる日が続き、少し街を歩いて見なくなつた。一〇月二九日朝、近くに住んでいるケンデ・ピーテルを訪ね、それから二人でリュウチエイ・パールの家に向かった。今でも、パールがバラ色のパジャマを着て我々を出迎えた瞬間を良く覚えている。急いで着替え、三人でナジケルト（大環状通り）からラコーツィ通り方面へ出発した。

この日の出来事について認め^{した}た、ケンデの回顧録^{*}を読んだ。状況の諸事実を含め、同じ記憶を共有している。私がそれに付け加えることができるのは、その時に私の思考と感情に生じた変化だけである。

* ケンデは Oral History Archivum のインタヴューで、記憶を伝えている (OHA 84sz. 358., 359., 372.p.)。このインタヴューは一九八七年九月五日から二〇日にかけて行われた。Reyes Sandor (1999, 317-322.p.) は *Magyar Szabadság* 紙を発刊したギメシユ・ミクローシュについて詳細に扱っている。

最初に、ニューヨーク・パロータへ入った。革命前には *Magyar Nenzet* 紙の編集局があったところだ。そこで、オベルソフスキ・ジュラと会った。彼が新しい雑誌 *Iszszög* 誌の編集を始めて、まだ間もなかった。(オベルソフスキはカーダール・レジームの血の裁判所で死刑判決を受けたが、抗議行動の圧力で命が救われた)。命を賭けて勇敢に武器を手に取り蜂起した人々の声を伝えるために、この雑誌を使いたいと雄弁に話した。この仕事に参加しないかと、我々を誘った。この会話の中で、パールとピーテルは意見を言っていたが、私はただ聞き役に徹していた。私は蜂起した人々の勇気を認め感嘆し、武器による行動が事態の転換をもたらしたことを実感していた。し

かし、どんな人が蜂起したのだろうか。その中に一人として知り合いはいなかった。気高い理想にもとづく意識的な闘いなのだろうか。それとも、武器を手ですることを目を輝かせる冒險好きの若者たちなのだろうか。誰がその武器を与えたのだろうか。そもそも、武器が使われることを喜ぶべきことなのだろうか。流血なしに民主主義へ進むことはできないのだろうか。ひとつだけ確かなことがあった。私自身が蜂起者の声にならないければならない倫理的意味や内的衝動を感じることはなかった。武装蜂起者に判決を下したのではない。そうではない。革命が勝利したという興奮に満たされていた。と同時に、何か釈然としないものがあつた。何が起きていて、どんな力が動いているのか、それが分からなかった。

オベルソフスキと仲良く別れて、*Sabud Nép* 本部へ向かった。二年ほど訪れたことがなかった。そこに辿り着くまでに、我々三名の共通見解が出来上がった。どこか別の編集局に加わるのではなく、自分たちで新しい新聞を作ろうということになった。

本部はすでに数多くある蜂起者グループのひとつが占拠していて、ドゥダーシュ・ヨージェフが取り仕切っていた。(彼はカーダールの弾圧による死刑判決を受け、即時に刑の執行が行われた)。リューチエイが彼らと交渉して、ドゥダーシュたちは我々の新聞編集活動を妨げないという伝言を持ち帰ってきた。

途中でギメシュ・ミクローシュが到着して、彼が第一号の巻頭論文を書くことになった。論文名は *Magyar Szabadság* (ハンガリーの自由) で、同時にこれが新聞名にもなった。⁽⁵³⁾リューチエイとケンデは即座に、論文記事を書く準備を始めた。リューチエイが国内政治を、ケンデは国外政治を担当することになった。当然、私の課題は、経済情勢や当面の課題について何かを書くことだった。

政府プログラムを準備した時には、日々、何度も書き直し続けた。今度もそれを始めても良かったが、ほどなく書くのを諦めた。しかし、共同の仕事から抜けたくはなかったので、*Sabud Nép* の最後の日々に従事した仕事を受け持つことにした。紙面をまとめ、技術的編集の仕事を行った。うまく手伝える力にされた。

まだその日のうちに、昔の同僚たちが集まってきた。その中には、レーナート・ガーボル、コヴァーチ・エルジ、ホルヴァート・ラスローがいた。記憶に間違いがなければ、例外なく同僚たちが集まってきた。*Sabud Nép* の過去を背負った、彼の「反乱」の精神的指導者と勇敢な賛同者たちの指揮の下、新聞記者の団が出来上がった。共通の過去と共通の新しい理念が我々を結束させた。それは、民主主義、自立、自由であった。もし社会主義を信じるとすれば、それはラーコシの専制共産主

義とはまったく違うものだった。

政治的な見通しの不明瞭さのために、私のペンは完全に麻痺してしまった。純粋な意図をもってここに集まった賢い人々が、何を望まないかを良く分かっていた。しかし、排除すべき過去に代わるべきものが何なのかについて、相互に語り合う機会をもたなかった。誰と戦術的な同盟を結び、誰と持続的な同盟を結ぼうとするのか。同盟を結びたくない相手は誰なのか。政治目標の達成にどんな手段の使用を容認するのか、どんな手段の利用を拒否するのか。

これまで数十年にわたって、何度となく難しい決断を強いられてきたので、自分自身にどのような能力があり、どのような限界があるのかを客観的に評価できるようにになった。堅固で確信のある知的・倫理的基礎にもとづくものであれば、私の判断は十分信頼に足りるものになる。さらに、もうひとつの条件を上げるとすれば、慎重に勘案できる時間があり、最初の即時の判断を批判的に再考できる時間がなければならない。あのドラマティックな一〇月二九日の旧 *Sabud Neph* 本部では、これら二つのどの基準も満たされていなかった。私の頭の中では旧い共産主義的世界観が崩壊し、新しいものを築き始めたばかりだった。すべてのものが、まだ半分しか出来上がっていないかった。この未成熟な前提条件から、日々の政治的結論を導き出すことができたろうか。このような時に政治的な直感が働き、それ

が為すべきことを照らし出す人もいるだろう。だが、私の直感には聞き役に回ることだった。

本書の初めの部分で、自分自身を「夢遊病者」と特徴づけた。夢うつつに、ベランダの手摺や屋根の縁を自信満々で歩き回る状態である。それ以後、目が覚めた。過去二年、とくに一〇月二三日以後は完全に目が覚めていた。と同時に、自信を喪失していた。

十数年経って、ギメシュ・ミクローシュの連れ合いだったハルダ・アリズと、この一〇月二九日の午後の出来事について話し合う機会があった。あの時、ミクローシュが何を考えどう行動したのか、そして私に何が起こったのかを話し合った。書物に記された我々二人の会話を引用する。細文字がアリズ、太文字が私である。

「——一行すら書けなかった。たんに、この状況でハンガリーの人々に何をアドヴァイスすればよいのか、皆自分からなかった。そして、最後に、これは自分の仕事でないと納得した。」

——究極のところ、それはそれほど大きな問題ではないと思う。ひとつの社会の中では、それぞれに違った役割がある。貴方より役に立てた人は少ないと思う。

——それほど簡単だと思わない。ミクローシュの自己犠牲とこの僕を対峙させて、この十数年、何度も何度も考え直してみたことを考えて見ればよい。明らかに、彼はこのような状況の

中で決断できる能力を自覚していたと思う。

——良心の呵責も彼の行動を動機づけたと思う。

——それは僕にもあった。無かったはずがない。それでも、為すべきことが分からなかった。諭えを使つて見ると良く分かる。もし僕が誰かを車で轢いたとする。近くには医者がいなくても、僕は手術を始められない。人を轢いたけれど、そこからすぐに外科医にはなれなかった」。

私は *Magyar Szabadsg* の仕事を続けなかった。翌日から研究所へ行ったり、街を歩き回ったり、友人に会つたりした。一時の「反乱同僚」だったフェヒール・ライオシユからある集まりの誘いを受けた。創刊を予定していた *Népszabadság* 紙へ同僚をリクルートしていたのだ。フリツシュ・イシュトヴァーンが家に電話してきて、ハンガリー・ラジオへ行つて、何か良いことを喋ろうと誘つたが、それも断つた。私の周辺で何が起きているのか分かるかと努めた。良いニュースに喜び、事が悪い方向に転換することを恐れた。そして、一月四日になった。ソ連の戦車が現れたのだ。

虐げられた日々

ここで、クロノロジカルな叙述をいったん中断する。他の多くのハンガリー人と同様に、これに続く歳月は私にとつても一

番虐げられた時期だった。映画監督がこの時期の私の人生を映し出そうとするならば、種々の場面を切り出すことができる。ジョルシユコチ通りでの尋問のために、不安いっぱいである* 準備をする私。机に向かつて、サムエルソンの書物を真剣にメモする私。病院の廊下で、次男の誕生を待ちこがれ、そこへ看護婦が現れて「健康な男子ですよ」と告げる**。研究所で友人たちとひそひそ話をしている。「党から派遣された委員会が調査を始めた。やがて粛清が始まる」。喜びに満ちた瞬間もある。「過度集権化」の英語版出版の証明が届く。心苦しいニュースもある。親友の拘束が続く。ある繊維工業会社の管理者との専門的な会合。こうやって、恐怖と安心、喜びと苦しみ、教訓的なものとグロテスクなものの画像が、交互に継起する。

* 何度も私を召喚した当該諸事件の尋問は、ブダペスト二区ジョルシユコチ通り三一番地にある内務省の建物で行われた。捜査を担当する機関の正式な名称は、「内務省国家警察本部政治捜査局調査課」である。

あの巨大な建物群の裏側がジョルシユコチ通りに面し、表側はフュー通りに面している。調査課は裏側にあつた。事前拘束を受けた者が捜査の期間だけここに留め置かれ、政治的な訴追が準備される。本章で何度も触れた友人たちがここに拘束されていた。ルーミアアから引き戻されたナジ・イムレと後のナジ・イムレ裁判での被告たちも、この建物に収監されていた。この建物群のフ

ユー通りに面した部分は堅固に囲われていて、軍事裁判局と軍事検察局が占めていた。このうちのひとつの会議室でナジ・イムレの秘密裁判が行われた。ここは訴追する側にとって、きわめて便利な場所だった。被告を車に乗せて、裁判所まで運ぶ必要はなく、建物の中を尋問室から判決室へ移動させるだけでよかった。すべてのことが完全な秘密を保って実行された。このフュー通り七〇番地で、ナジ・イムレ、マリテール・パール、ギメシユ・ミクローシユへの死刑判決が下された。

広場の一角は美しい木立と茂みで区切られていて、今はナジ・イムレ広場と呼ばれている。「ジヨルシユコチ通り」という短い名称は、我々の世代にとって、政治警察による尋問が行われた場所の代名詞である。

*** 一九五七年六月に次男のアンドラーシユが生まれた時は、一九五二年のガールボルの誕生とは違った状況にあった。長男誕生の時は、正気を失った父親は、仕事を他の人に渡して個人的な事情で仕事を離れば、世界や編集局が崩れてしまうか、少なくとも倫理的に重い罪を犯しているように感じていた。次男のこの時は、ふつうの家庭のように事が進んだ。

私は映画監督でないから、当時の抑圧的な雰囲気、自らの感性や思考の興奮の波を再現することはできない。この回顧が当初の課題を達成するためには、「分析」が必要なのだ。相互に絡み合っている糸を解きほぐさなければならぬ。同時期に生じた出来事の相互作用が、興奮・葛藤・恐怖の状態の中で、私

の精神にどのような影響を与えたかを実感させることは、最初から諦める必要がある。本章と次章では、私の人生の断面をそれぞれ別々に扱うことになる。

『経済管理の過度集権化』への批判

革命が勃発する少し前に、『過度集権化』の原稿を出版社に渡した。一月初めに出版社の事務所に出向き、原稿の返却を求めた。自分の手許より安全なところはないと考えた。

一月四日以後、事態が沈静化したので、再び出版社に向かった。一九五七年一月付けの「著者前書き」は、「元々、この原稿は一九五六年一〇月に引き渡されたもの」と覚え書いた後、次のように続けている。「本書の出版はこの時期になつてしまつた。もちろん、再度手に取り、読み通してみた。しかし、何も手を加えるものがないと感じている。学問的な要件を備えた研究の真实性の試金石は、時間に耐えうるか否かである。今この数ヶ月の間に、わが国では十数年に匹敵する諸事件が起きてゐる。多くの人は、政治・経済問題の捉え方をこの数ヶ月で変える必要があると感じている。しかし、私はこう考える。一月二二日に真実だったものは、二四日にも真実のままであるし、一九五七年一月においても真実である。問題は、ただ、元々、真実だったのだからか」ということに尽きる。私は一九五五

一九五六年度の状況について真実を記したという確信があるから（私の確信が正しいか、それはいずれ批評家が決めるだろう）、これを変更する必要性を感じないのである。⁽⁵⁵⁾」

この生意気な文言が、後に私の著書を攻撃した人々を苛立たせた。今まだ先を急ぎたくない。我々は一九五七年初頭にいるのだ。カーダール・ミュニツヒ一派は、蜂起の最後の残り滓まで一掃し、ストライキする労働者をなだめ、復讐キャンペーンを始めることで手いっぱいだった。書籍の出版にまで目を配っている余裕がなかった。幸運なことに、出版社社長のケレス・ティボルと原稿を丁寧に編集してくれたシクローシュ・マルギットは、出版のリスクを引き受けてくれ、原稿を印刷所に送った。それから数ヶ月経って書物が出来上がり、短期間に売り切れた。

それに遡る数ヶ月、一九五六年末に発刊された *Közgazdasági Szemle* 誌上で、エセ・ジュジャが博士候補論文の公開討議に関する素晴らしい紹介記事を書いてくれた。⁽⁵⁶⁾これが私の著作への関心を引き起こした。出版の後、公開討議の雰囲気をもそのまま伝えるような書評がでた。そのうちのひとつがピーテル・ジョルジュによるものである。彼の書評は、ラーコシ派の再結集の場と見られていた週刊誌に掲載されたのだが、完全に『過度集権化』を支持するものだった。⁽⁵⁷⁾

すでに新しい時代の生活が始まったことで、賞賛の言葉も希

薄なものに変わっていった。そして、一九五七年春から私の著書に対する攻撃が始まった。専門雑誌、経済週刊誌、*Népszabadság* 紙、^{*}大学の講義録で、「修正主義」の典型例として取り上げられた。計画経済の基本原理を放棄し、市場の恣意的な力を解放しようとするものに対抗しなければならぬというものだった。「経済科学に現れた修正主義の見解は、反革命のイデオロギー的準備と結び付いており、その経済学的基礎の役割を果たしている」と、私の著書についてリップ・ゲーズが記している。「厳密な意味での経済科学は反革命と関係ないというのには正しくない。……修正主義の芽を放置してはならないというのが教訓である」と、モルナル・エンドレは提案し、私の著書をその典型的な事例として取り上げてみせた。「コルナイの学位論文は、反革命の精神的準備を意味する政治的・イデオロギー的キャンペーンに、完全に組み込まれている」と、グヤーシュ・エミルは党学校の教科書に記した。^{**}

* 共産党のジャーゴンで「修正主義者」というレッテルは、自らをマルクス主義者だと自認しながら、マルクスのあれこれの定理を修正しようとする者に付けられる。私にはこれは当て嵌まらない。というのは、私はマルクス主義を修正しただけではなく、それから決別したからだった。

** このほかに、レーヴァイ・ヨージェフも反革命を準備するイデオロギーについて強烈な論文を書き、理念闘争における怠惰を

痛罵した。かつての編集局の上司は、私についてもレットテルを貼る言葉を投げかけている。この論文はカーダール型の党指導部に「とつても急進的すぎたので、出版が許可されなかった。PIL793. f.2.116. &c. 14.p.」の論文の手稿は一九五七年に準備された。

一九五七年九月、何も考えずに、フリッツシュ・イシュトヴァーンの講演を聞きに出かけた。再組織された党の政治アカデミーが開催したものだ。講演の後半になって、「修正主義」経済学者が取り上げられた。ピーテル・ジョルジュは「注意」程度で免れたが、ナジ・タマーシユとエルドゥーシユ・ピーテルは強い叱責を受けた。そして、最後に私の番になった。聴衆の間に座ってこれを聞いた瞬間の、その驚きと戸惑いに満ちた感覚を今でも忘れることができない。一年前には論文を褒め上げ、報奨金を出し、昇進まで決めたあの同じフリッツシュ・イシュトヴァーンが、その同じ著作を激しく攻撃しているのだ。彼と理解できるというのである。コルナイがこのように考えるのであれば、これはもはや反マルクス主義的視角ではなく、マルクス主義の拒否だ、と。

当時も現在も、私に対する攻撃を二重の感覚をもって受け止めた。私に投げかけられた言葉の直接的な意味を良く考えてみれば、攻撃者の方が正しいと言わざるを得ない。確かに、『過

度集権化』は誤りの指摘や経済管理の部分的な批判をはるかに超えている。システムとしての指令経済が機能していないことを見せている。確かに、『過度集権化』は社会主義制度の基礎を疑い、それによって一〇月二三日の革命をイデオロギー的に準備した精神的な潮流の一部を形成している。確かに、著者の私はマルクス主義から決別した。だから、これらの批判を甘んじて受けよう。

これは事の半分である。もう半分を決めるのは、議論あるいは反論内容の真实性ではない。攻撃者が声を上げた状況である。平等な機会を保持しない当事者の精神的対決だったことだ。コルナイがこう言った。これに対して、リップ・ゲーザ、モルナル・エンドレ、グヤーシユ・エミル、フリッツシュ・イシュトヴァーンが批判する。彼らは自由に攻撃できるが、私は議論にかかわる見解を公に守る機会がない。一九五七年のことである。身近な友人たちは監獄に閉じ込められ、他の者は職を追われた。こういう状況の中で、「修正主義者」、「社会主義経済の放棄」などと認定することは、ほとんど脅迫に近い。モルナル・エンドレも「修正主義の芽を放置してはならない」と公言⁽⁶¹⁾している。

脅迫への変化は後に報告することにして、ここでは著書のその後の運命を語りたい。ハンガリーでの攻撃が続く中、『過度集権化』の歴史の別章が始まっていた。それはナジ・アンドラ

ーシュが、イギリスに亡命しようとしていたザードル・イシュトヴァーンを焚きつけたことから始まった。『過度集権化』とその英語の要約を持ち出し、イギリスの経済学者に届けるということだった。そして、それが実現した。英語の要約は最終的にジョン・ヒックスの許に届いた。オックスフォード大学教授で、近代経済学の重鎮の一人である。後に、かれはノーベル経済学賞を受賞している。これと並行して、イギリスで生活していたハンガリー出身の経済学者アントニー・ドウ・ヤサイ（ヤサイ・アンタル）が本書を知り、ヒックス教授の注意を喚起した。^{*}ヒックスは世界を代表する出版局であるOxford University Press に出版の推薦を行い、それから程なく、私の許に出版契約書が提示された。

^{*} ザードルは自殺してしまつたので、著書の歴史について語り合う機会を失つた。ヤサイ教授とは後年になつて手紙を交わすようになったが、ザードルと彼の行動が別々に行われたものか、それとも相互に関連し合っていたのか、今でも良く分からない。英語版の出版を助力してくれた、ヒックス、ヤサイ、ザードルの三名にはたいへん感謝している。一九九〇年にヤサイ教授から送られた英語の手紙は、私の書庫に今なお保管しているが、それをハンガリー語に翻訳して引用しよう。「貴方が私に借りがあるというのは正しくありません。私が一九五七年に著書の出版をOxford University Press に提案したのは、たいへん独創的で出版に値す

ると考えたからに過ぎません。私が行つた唯一のことは、ハンガリー語が読めるので、その著書に関心を向けることができ、ジョン・ヒックスが私の言葉に信用を与えてくれたことです」。

この思いがけない素晴らしい可能性にしがみついた。規定によつて、出版には研究所長の許可が必要だった。フリツシュ・イシュトヴァーンは二つの顔をもっているだけでない。もつと多くの顔をもっている。最初は天国まで上げておいて、次には地獄に落とす。そして、今度は出版に同意してくれた。^{*}翻訳が始まつた。幸運なことに、ドイツ帝国学校時代の友人ナツプ・マリカの兄ヤーノシュが、英国で経済学の教授をされており、この面倒な仕事を引き受けてくれることになった。非常に良心的に仕事をこなしてくれた。今、当時やり取りした長文の手紙を手にしてみた。専門用語や問題箇所を明瞭化するものだったが、私の文章に忠実な訳文を当てるのは簡単な仕事ではなかつた。それに、ハンガリーのメディアは私の著書を罵り、危険な革命命の作品とみなしていたから、西側で私の著書の出版を助けるというリスクもあつた。

^{*} フリツシュは出版にあつた条件にこだわつた。原著にある「著者前書き」の削除を望んだのである。私は残しなかつたが、本文でも引用した小生意気な文言を削除することに同意した。こ

れとは別に、英語版への「前書き」を書いた。「本書は社会主義計画経済一般を示すものではなく、場所と時間の制約をもった記述である。すでに原著出版以後、改革の方向に向かう変化が観察される」と。この他に、フリッツシュを苛立たせるような部分を削除しなければならなかった。これは譲歩であったが、事後的にみると、この程度の修正を行ってもなお、この著書の外国での出版には価値があったと思う。

一九五八年に英語版⁽⁶²⁾が出来上がり、短期間に大きなセンセーションを巻き起こした。イギリスの主要な新聞のひとつである*Times*や*Manchester Guardian*⁽⁶³⁾は、一面を使った記事で応援してくれたし、西側の有力な専門雑誌も熱意のこもった書評を掲載してくれた。「これは本当に重要な書物である。その論調はオープンで、豊かな洞察があり、真の分析に溢れている」と⁽⁶⁴⁾、*American Economic Review*は伝えている。ロンドンの*Economica*誌の書評は、「コルナイ氏は、論理的な議論と一貫した像を与えたことで、我々すべてを凌駕してしまった。……彼の仕事は今日に至るまで、孤高の作品である。このような著作は、これまで、共産主義世界のどこにも現れたことがない」と伝えている⁽⁶⁵⁾。

かなり後年になって、これらの書評を書いてくれたアレック・ノーヴ、ジョゼフ・ベルリナー、デイヴィッド・グラニック他と個人的に会う機会があった。口々に、著書が大きなセン

セーションを巻き起こしたと語ってくれた。当時、鉄のカーテンの向こうから声を上げ、敢えて英語版で世界に問おうとしているのは誰なのかを推測し合ったという。

研究所からの追放

私の人生の中で、多くの決定的な事件がブダペストのナードル通りと結び付いている。戦前にはここに父の弁護士事務所があった。すでに記したように、経済研究所がこの通りに引越してきた*。ナードル通りとミレーグ通りの角に、再組織化されたハンガリー社会主義労働者党のブダペスト第五区の地区本部があった。一九五六年一月末に、そこで若い婦人の書記と落ちあった。彼女とは夏の別荘で知り合った仲だった。話し合いを始めた。その当時は誰もがそうだったように、政治状況を評価し合った。会話の中で、「僕はもうマルクス主義者じゃない」と伝えた。「私人として」伝えるのではないことを強調した。この宣言を、地区の党書記として受け取ってくれと頼んだ。

* 後になって、ナードル通りに国家計画庁が開設された。数理経済計画モデルを研究していた時には、度々ここを訪れた。ここで、二番目の妻になったダーニエル・ジュジャと知り合った。彼女は計画庁の職員だった。

悪意のない友好的な婦人に対して、どうしてこのようなことを言ったのだろうか。多分、怒りと腹いせからだ。革命事件からまだ間もないのに、再組織を急ぐ人々と、自分から一線を画したかったのだ。研究所でも同じ宣言をした。それでも、党の再組織化が始まっていて、以前の党籍は自動的に消滅していた。再入党したい者は、それを申請する必要があった。かつての相部屋の同僚エルドゥーシユ・ピーテルとホツホ・ロベルトがその組織化を始めた。私は入党しないことを伝えた。ほどなく研究所にやって来た地区の党書記にもそれを伝えた。即座に、私のファイルに、「コルナイ・ヤーノシユは自らをマルクス主義者でないと宣言した」と書き込んだ。ヴァルガ・イシュトヴァーン、ティス・エディーンやラーツ・イエヌーの場合は、最初から「ブルジョア経済学者」としてみなされていたから、マルクス主義の放棄は何の罪にもならない。彼らと比べ、私は「ブルジョア経済学者」ではなく、「異端者」であり、「変節者」だった。一度はその知識を我が物にし、その後には裏切ったのである。「古参の党支持者」というステイタスなら問題なかった。

「古参の党支持者」という響きは、共産主義者も友好的な態度の現れと考えるからだ。これに対して、党を去り、マルクス主義を捨てる者は、背教者であり、裏切り者なのだ。

研究所の同僚の多くは、多少の躊躇の差はあるが、再入党した。ほとんどの連中が私の部屋に来て、再入党の理由を説明す

ることが重要だと感じたようだった。これはとても奇妙な光景だった。まるで私に許可を求めめるか、精神的な安堵を求めめるかのようなうだった。

二人だけ、友人のナジ・アンドラーシユと私だけが行動を起こさず、入党を考えることすらしなかった。今になって、誰がカール時代の黨員だったかを基準に人を評価したくない。党の中には真面目で誠意のある人が多くいたし、逆に党の外には不真面目で信頼できない人も多くいた。今私が回顧しているのは、一九五六―一九五七年の転換期における知識人の職場であり、一、二の例外を除き、すべての同僚が一〇月二三日まで黨員だった所である。革命の最中には、この職場ではほとんどすべての同僚が変化の方向に親近感を抱いていたし、革命に反対する声を上げた者はいなかった。そして、ソ連の戦車によって、革命が押し潰された。その途端に党に戻ってしまう。これは当時の私には特別の重要性をもつ出来事だった。この変わり身の素早さは、今日に至るまで、人間の確信や一貫性に対する理解しがたい疑念と不信を、私に植え付けることになった。

当時の私の評価判断はあまりに厳しすぎて硬直していたかもしれない。確かに、多くの人が素直な社会主義の信奉者として残っていた。そういう人々が、党外にいるよりは党に入り、事態を良い方向に向かわせようという真摯な意図から入党しただろう。それから、少なくとも人々が、信念を変えず、黨員とし

て改革や国の発展のために闘ったことも知っている。しかし、当時の私には、この種の考え方を受け容れることはできなかった。

復興が始まって数週間経った頃、党中央から声がかかった。後に首相になったフォック・イエヌーが私を探していた。以前、鉱工業大臣だった時に知り合った。党が経済メカニズムの改革に取り組み始めたいということだった。私の仕事のことを聞いたので、一緒に協力してくれないかということだった。私は引き受けなかった。

さらに、ヴァルガ・イシュトヴァーンからも声がかかった。彼はその経済学者としての知識や業績にもかかわらず、ラーコシ時代には無視されてきた学者であった。その当時、カーダール・ミューニツヒ政府の要請で、詳細な改革提案を作成する専門委員会長の任命されたのだ。ヴァルガとは数ヶ月前に、何度となく話し合っていた。既述したように、彼は私の著作と一九五六年夏に私の主導で仕上げた改革提案を丹念に研究していた。これから始まる委員会の仕事に参加するように私を説得したが、私はこれも引き受けなかった。

どうしてだろうか。社会主義制度を改革することは不可能だという理論的確信があつて協力を拒んだのではない。「反対者」だったからでもない。「悪くなればなるほど良くなる」というようなマキアヴェリストの反対原理を信奉していた訳でもない。

当時の私は、官僚的な集権化が少しでも緩まれば、それだけでも増しだと考えていた。

私が改革の仕事を拒んだのは経済学者としてではない。「政治的」な理由が動機になっている。ソ連の介入に心の底から怒りを感じた。最初は革命の側に立ちながら、後にそれを裏切ったカーダールとその一派に対して、怒りと嫌悪を感じていた。ナジ・イムレ他の迫害は許されない欺瞞だと考えた。数ページ前にも正直に書いた通り、「勝利」した革命の日々には、何か違和感があつた。何を為すべきかについて、決断することができなかつた。当時の私の本能がそれを示すことができなかった。ところが、革命の敗北に続く日々には、その事情がまったく異なるものになった。「拒まなければならない」と、本能的に感じていたのだ。

一九五七年末に、研究所に党本部から査問委員会を送り込まれ、「反革命」の前・最中・後に果たした研究所の役割を調査した。この委員会を率いたのは、大学学長のハイ・ラーズロー¹だった。(彼はこうも言い放つた。「私が経済大学の学長である限り、コルナイがここで講義することはあり得ない」と。委員会の書記はモルナル・エンドレで、彼は私に対する痛烈な批判論文を書いていたことは先に記した。舞台裏では駆け引きが行われていた。^{*}修正主義の温床になっている研究所を解体すべきだというのが党本部の見解だった。これに対して、フリ

ツシユ・イシュトヴァーンと研究所党組織、主としてエルドゥーシユとホツホは研究所の救済のために苦心した。そこでナジ・アンドラーシユと私の二人を「犠牲」にすることにした。^{**}

* 研究所の党組織は、一九五八年春、五六年一〇月に活動的な役割を果たした同僚（私とナジ・アンドラーシユも含む）に対して、六月に開催される会議で自己批判することを勧めた。「反革命」とナジ・イムレー派からの決別を明確にし、カダール率いる新指導部とマルクス・レーニン主義への忠誠を宣言しろということだった。

会議は一九五八年六月二三日に開かれた。ナジ・イムレー裁判の判決が公開されてから間もなかった。多くの同僚は以前の見解を撤回し、自らの行動の判断において、はるか遠くに行ってしまった。アンドラーシユと私は、繰り返し求められることに対して、十分な回答を与えなかった。我々二人は、研究所の善意の友人たちに報いる必要があると、経済問題に関して政治的に適切でない「間違いがあった」ことを認めた。私の意見表明では、中央計画化と经济管理の重要性について一般的に述べ、私の研究ではそのことの強調が十分でなかったと述べた。しかし、政治的的自己批判一〇月革命、ナジ・イムレーの拒否、政治的・イデオロギー的な忠誠の表明を行わなかった。アンドラーシユも同じように振舞った。こうした行動（研究所に残った同僚が後に「強情者」と名付けられた）もあって、我々二人は研究所から追放されることになった。

** ナジ・タマーシユはこの党の査問について、次のように回顧している。「研究所を反革命の巣窟とみなし、その一団の追放が

予定されていた。フリッツシユはこれらの追放される人々が我慢できる職に転職できるように努力していた。私が見るところでは、それが彼らのためにもなると考えて、彼らを擁護しなかった」(OHA 26. sz. interjú, 133. p. Keszutle 1986)。研究所で行われた党の査問について、一九五八年の *Közgazdasági Szemle* 誌に論文が掲載されている。執筆者はフルネームではなく、K・Iというイニシャルになっている。

フリッツシユ・イシュトヴァーンは、この決定を伝えるのが辛そうだった。新しい仕事場は自分で見つけるようにということだった。アンドラーシユは外国貿易論で知られる専門家だったので、その道を探った。私は軽工業に職を探した。

私の転職を助けてくれた軽工業の同僚たち、シク・ジョルジュ、シマー・ミクローシユ、フュリュップ・シャーンドル、シラー・ジョルジュ他の人々には心から感謝している。しかも、たんに給与を得るための職を得たのではなかった。「隠れて」研究を継続できるような仕事の環境を獲得したのだ。初めは軽工業計画化事務所の被用者になり、後に軽工業研究所のそれになった。

経済研究所の助力もあつたことは事実だ。以前の職場を「追い出された」人々が、適切な新しい職を得るのが難しい事例を多く知っていた。私の転職の背後で、どのようなやり取りがあつたのは分からない。ただ、この時も、フリッツシユ・イシュト

ヴァーンが別の顔、それも友好的な顔を見せていたと思う。我々の追放はフリッツシュではなく、ハイイやモルナルが主導したもののだが、その犠牲を受け容れながら、他方で我々が経済学者としての道を継続できるように助力したのである。

一九五八年九月一日、後ろ髪引かれる想いで、研究所を離れた。新しい生活が始まった。形式的には上述した機関の被用者だったが、実際には何の義務もなく自由に自分の時間を使うことができた。仕事の一部は軽工業省の建物で行った。(その向かいがゾルシユコチ通りの陰鬱な建物群で、友人たちを拘束し、尋問を行っていたところだ)。家で多くの時間を過ごした。仕事の話も事務所ではなく、グレシャム・カフェカジェルボーで行った。

その当時から感じていたことだが、自分の運命を悲観することも、悲観されることもないと思つた。確かに、ハンガリー科学アカデミーや研究所というプレスティージはなくなつたが、私には友人や同僚の防護ネットワークや手助けがあることを知つたからだ。

監獄の影を背負つた自由

一九五六年二月六日、母の家でギメシユ・ミクローシユの勇気ある連れ合いのハルダ・アリズと会つた。二日前にミクロー

シユはここに来て一泊した。その前の日は別の所に泊まっていた。この時、彼が拘束されたことを知つた。そして、初めて私にも監獄の影が近づいているのを感じた。この時から、夜の物音に目を覚まし、台所に駆け寄つて、通りを窺つた。私を連行する車が止まっていなかつた。前にも記したように、ラーコシ時代には拘束される恐れなど感じたこともなかつた。夢遊病者だつたから、勇敢にもペランダの手摺に上り、そこから落ちることなど考えもしなかつたからだ。しかし、もうこの時には体制についていろいろなことを知つてしまい、恐怖を感じていた。

恐怖を感じたが、国を離れなかつた。革命の敗北以後の数週間、鉄のカーテンはほとんど開放されていた。国境を越えるのに、それほどリスクはなかつた。二〇一二十五万人が亡命した。私の近い友人仲間も、何人かが国を離れる決断をした。その中には、一番の親友であるケンデ・ピーテルもいた。何時また会えるのだろうか。私が外に出る、あるいは彼が国に戻る可能性があるだろうか。それを知る由もなかつた。私は妻と共に、残る決心をした。後の章で、「残るか、亡命するか」のディレンマについて、詳しく触れることにする。

本章のサブタイトルは、対象期間の終わりを一九五九年と設定している。これはハンガリーの歴史の区分ではなく、私の個人史の区分である。後から振り返つてみて、警察の執拗な捜査

や尋問の鬱陶しい日々を終止符が打たれたのが、一九五九年なのだ。

Szabad Nép の反乱同僚の一人だったフェケテ・シャーンドルとは、拘束されて尋問が始まった場合に、どのように振舞うべきかを何度も話し合った。彼は自信をもって、面白いと宣言した。その言葉を疑った。(後で見ると、これは正しかった)。ラーコシやピーテル・ガールボルの拷問に苦しめられた人々と話していたし、ソ連、ユーゴスラヴィア、ハンガリーの尋問で何が行われたかを書き留めたものを読んでいたから、私の考え方はかなり前に決まっていた。そこから得た結論ははっきりしていて、誰も最後まで抵抗できないだろうということである。残された肉体と精神の力に依じて、拷問のどの段階で諦めるかが決まる。尋問する側が徹底的に拷問すれば、最後には何でも自白するところまで行き着いてしまうだろう。^{**} 私は慢性的な肩の筋違いに苦しんだ。そのひとつひとつの筋違いが、元に戻るまで、耐え難い苦痛を起こした。私には自分を責める性癖があり、生じるであろう不運を前もって体験することができた。もし意図的に筋違いを起こされ、「……しないなら、元に戻さない」と宣言されたら、何ができるのだろうかと考え抜いた。

* そのうちひとつの会話はフェケテの家で行われた。今、警察の

資料 (ÁBTL 0-10986/1, 187-196. p. Jelentés Fekete Sándor lakásának lehallgatásáról. Keltetés: 1958. június 4.) で分かったことだが、一九五八年七月四日に私が訪問した家で何が話し合われたかが盗聴されていた。通常の会話がそうであるように、ここでもいろいろなテーマが話題になった。高次元の話(ジョルダノ・ブルーノ)や他の異端的殉教者、中国の未来)から、低次元の話(コルナイ家の家事手伝いが仕事を忘れること、新しい家具調度)にまで及んだ。盗聴を実行し、記録を整理した担当官は、「拷問に対抗できる倫理的な力が互いにどれほどあるのか」という問題を議論した会話をよく理解できなかったようだ。四六年経ってこの報告を読むと、聴き取れなかった空白や疑問符が並び、矛盾した感情に支配されていたようだ。これだけの時間が経っているから、もう再びこのような自由な思考を監視したり、個人的な会話を盗み聞きたりするという不躺なことが起こらないと思えば、これら警察官の人間としての鈍感さや無知を心から笑うことができる。

* オウエル (2004 [1949], 270-271. és 288. p.) は「拷問機械を視覚的に量的スカラーで示している。ハンドルをひとつ捻るだけで、すぐに拷問度が増す。虚偽の告発を認めたり、妻を裏切ったりするのに、四〇度で十分か、それとも九〇度が必要かで、捕囚が区別されるだけなのだ。余談になるが、フェケテはこの時期、拘束される少し前に、私にこのオウエルの本を貸してくれたばかりだった (ÁBTL V-145-288/2. irat, 326. p. Keltetés: 1958. December 18. Fekete Sándor önvallomása, 6. pont)。

拷問に至らないように自分の政治的行動を説明しようとした。ソ連の戦車をバックに、共産党の再建が進行していた。

カーダールの政治警察が、Cseka、NKVDやÁHVの拷問手法をどれほど真似た抑圧手法を使うのか、誰も知る由がなかった。拷問を恐れた。もし拷問されたら、力を維持できないだろうから、自分だけでなく、他の人をも裏切るだろうと恐れた。非合法的活動から距離を置く決断をした時に、少なくともこうした屈辱から自分を守りたいと思った。このように考えるに至った動機のひとつは、「自分には限界がある」という辛いが冷静な認識である。

ここで、フェケテ・シャーンドルのことを付け加えておくのが良いと思う。彼は多くの勇敢な非合法活動に参加し、拘束された。肉体的な拷問を受けなかったが、絞首刑の脅迫を受けた。その恐怖から、自分のことだけでなく、友人、理想を同じくする者について、知りうる限りのすべてを告白した。^{*}（私についての告白は前に引用したが、後にまた触れることにする）。

^{*} 一九八一年のラウンドテーブルで、リトヴァーン・ジョルジュがフェケテ・シャーンドルの行動を次のように特徴づけている。

「……彼が個人的に打ち明けてくれたことだが、ギメシユの写真を絞首台に貼り付けて見せたという。この種の手段を使って彼を陥れようとしたのだ。拒否し続けることが事態を悪化するだけだ

と悟った地点まで行き着いた。自己のすべてを売ったということは事実だが、それによって誰も陥れられなかったということも事実で、もちろんそれは彼の所為ではなく、当時、当局がこの問題を終結させたいと考えていたからだと思う」。（このラウンドテーブルの参加者は、チャログ・ジョルト、コザーク・ジュラ、サボール・ミクローシュである。このメモはOHA 800. sz. interjú, 953. p. Keszült 1981-ben）。

こういう訳で、私にははっきりした決意があった。しかし、合法と非合法をどこで線引きできるのか、それが分からなかった。もつとも、法治国家でも、法律が定める境界が常に明瞭であることはない。まして、共産主義の恣意的な支配の時代である。紙に書かれている法律など可能な限り広義に解釈され、捜査機関と裁判所がどのような行動を法律違反とみなすかに依っているだろう。合法的活動に限定したという決断が拘束と裁判判決の可能性を減ずるだろうが、その可能性を排除しないだろうと考えた。^{*}

^{*} 一九五七年当時、ベシユトの街で流行っていたジョークがある。判決を受けた二人の友人が話し合っている。「Aが八年で、どうしてBが四年なのか理解できない。何もやっていないのに」「それは僕にも分からない。だって、何もしなくても二年も食らうのだから」。

もつとも、自分の決意を常に一貫して守った訳でもなかった。時には事前の準備を怠った慢心から、また時には意識的に合法性の境界を踏み出し、「法的」な責任を背負い込む機会を作ったりした。後になって分かったことだが、上述した決意を守りながら、非合法活動への参加を否定したことが、時として刑事訴追の口実を与えることになったのは、歴史の不思議なところである。

何度も尋問された。ある時点から、それがルーティンのようになつた。事前に準備できない時には、悪夢のような出来事になつた。記憶に間違いがなければ、尋問の度に召喚状を受け取つたので、ある程度まで準備することができた*。ただ、召喚状には尋問の事由が書かれていない。だから、予想される事由について、最大限の集中力を働かせて考え抜いた。頭の中で事前になりハールを繰り返した。多くのヴァリエーションや予想される会話を想定しながら、予想される質問にどう答えるかを準備した。時には、私に先立って尋問された友人や近い知人の情報から、予想される質問を考えた。この準備のプロセスは、いわば尋問官と尋問される側との間の精神的な対決であり、「知的な」課題であつた。

* ある時重い病で、家で寝込んでいた。この時、警察官が家までやって来て、ベッドの横に座って尋問した。彼が帰り、家事手伝

いのマグデイがコーヒを持って来たのを見て、息をついたのを覚えていた。

これは本当に難しい課題だつた。一度ならず、私が隠しておきたい事柄を尋問官が正確に知つて驚いた。尋問官は、まず私の虚実が混ざつた告白を最後まで聞き、その後で、どんな情報を入力しているかを伝えるのである。

しかし、実際の難しさは、尋問官と尋問される側との知力と情報力の闘いにあるのではない。真のディレンマは「道義的」なものである。ひとつひとつの情報扱いについて、まだ自由の身にある者同士で合意し合い、さらに拘束が近ければ、後に拘束される者との間でも確認し合つた。(自由の身の者であれ、すでに捕囚の身になつている者であれ、この確認を破つてしまえば、元の木阿弥になる)。尋問されている者が自分に不利になることを言っているのか、他人に不利なことを言っているのか分からなくなる場合、これはもう深刻な問題になつてしまう。証人として尋問されている者が何も話さなければ、放免されることはない。だから、拘束を逃れようとすれば、何かを話さなければならぬ。しかし、どこまで話せばよいのだろうか。この問いには、事前の合意などない。尋問時代の「倫理コード」のような合意はなかつた。

私自身は、倫理的な規則と禁止を自分に課した。一切話さな

い頑固な証人にはならない。尋問官が知っていると予想される事柄については話そう。話すことが拘束されている人々に不利にならないと予想されるものについては、その事実を話そう。

これら自らに課した規則が、審問官と尋問される側との猫とネズミの闘いで、いつも一貫して守られたかどうか分からない。ただはつきりしていることは、この規則を破った記憶はないことだ。もちろん、この規則が英雄的な高い原理でないことは分かっていた。自己の弁護を告発に変えることができるような政治的英雄にはなれない。はるかに慎ましい規準、人間的純粹さの最低要件を自らに課し、可能な限りそれを守ろうとした。

いくつか具体的な事件について、尋問の日付順ではなく、事件のクロノロジーにしたがって振り返ってみたい。

リューチェイ・パール案件は、一〇月二十九日に展開した事件、つまり *Magyar Szabadság* 発刊にかかわるものだった。(上述した一般論の具体例である。私は記事を書くのを断り一晩経って編集部から離れた。にもかかわらず、警察の捜査を免れることはできなかつた)。

リューチェイのケースでは、警察で話すことについて相互に文言まで確認し合い、弁護士とも話した(これは成功したと思う)。(66) 警察の捜査だけでなく、裁判所にも証人として喚問された。彼が解放されてから、何度も尋問のことを話し合った。

私の七五歳の誕生日にもっとも親しい友人たちが集まった時に、

パールの優しい言葉に心動かされ、道義的な安寧を得た。彼は、「パールに害が及ばないように」という表情を写しだす私の不安な声や恐れた顔を再現し、裁判所の尋問を引用して見せた。この時のパールの言葉から分かったことだが、被告席に孤独に座っていた彼にとって、私が法廷から退出する時に彼を見つめ、信頼と愛情のこもった視線を投げかけたことが、一番心強かつたという。

一九五六年一月初旬、ギメシュ・ミクローシュは、かつての記者仲間とともに、私をコルヴィン出版社の部屋に呼び、「非合法の新聞と雑誌を編集・配布して、抵抗を続けなければならぬ」と主張した。私は参加を断った。既述した内的な拒否反応を越えて、この場合には、「状況に鑑みて、意味を見出せない」という反論を用意できた。野蛮な軍事力で革命を潰し、共産主義権力が復興した。それに対して、このささやかな新聞がどれほどの読者を動かすことができるというのだろうか、誰がその後ろ盾になれるのだろうか。予想される政治的效果はそのリスクに比べてはるかに小さいと見た。

この議論は正しいだろうか。今日に至るまで、私の回答に確信がもてない。もし「リスク・利益」の収支計算をすれば、私が正しいだろう。しかし、これだけが唯一のアプローチではない。歴史的な長い目で見れば、ミクローシュのようなリスクを背負った英雄がいたことは、ハンガリー民族にとって大きな

倫理的価値である。October 23と命名された新聞が発刊され、この事実によつて、革命精神を壊滅させることができなことを証明したのである。

一九五七年四月一六日、ジョルシユコチ通りで尋問が始まった。「コルヴィン出版社の会合に出席したのは誰か」と。覚えていないと、話を逸らした。そこで、尋問官は参加者の一人で、すでに拘束されているP・Pの四月一〇日付けの自白書を読み上げた。そこには、会合の詳細と事実関係が記されていた。⁽⁶⁸⁾胸が裂ける思いだった。これはもう、P・Pの自白を裏付けるように参加者の名前を認める以外に方法がないと決心した。

尋問官はさらに、コルヴィン出版社での話し合いで、ギメシユが非合法の新聞発行を提案したことへの確認を求めた。以下は、尋問調書からのやり取りである。

「質問…会合でギメシユはどのような問題を提起したのか。

回答…それはもう良く思い出せない。会合では種々のたくさんの話題が提起されたので。

質問…我々の手許にある資料では、ギメシユは非合法の新聞を発刊しようと具体的に提起した。これに関して、貴方にP・Pの自白書から引用する。ギメシユは、非合法の増刷り新聞を発刊し、これを継続したいと提起した。これについて、貴方の見解を述べられたい。

回答…これに関して何も覚えていない。活動的な政治活動に

参加したくないと公言していたので、新聞に関して言えることが何もない。他に言いようがない。⁽⁶⁹⁾」

捜査の観点から言えば、私の尋問はほとんど役に立たなかつたと思う。一月のコルヴィン出版社に誰がいたかというギメシユの「犯罪リスト」にそれほど重要性はなかつただろう。あつたとすれば、それは新聞が発刊されたという事実である。ギメシユは野蛮な尋問を受けた後に、このことを認めた。^{*}

* レーヴィイス・シャーンドルは、死刑判決に至るまでの拘束期間に、ギメシユ・ミクローシユが受けた凄まじい圧力と威嚇を詳細に叙述している。

尋問は深く心を揺さぶるものだった。今、初めて、一人の拘束された人間P・Pが、同じく拘束された同僚や自由の身にあるかつての戦友のことについて自白している事件を目の当たりにしている。それから四七年経つて、自伝の資料を整理する中で、P・Pの多くの自白ファイルを最後まで読み通した。彼は拘束されて間もなく、本当に多くの人物について、詳細な「解説」報告を与えたことが分かつた。⁽⁷⁰⁾

コルヴィン出版社の会合は、私が参加を拒んだ二つ目の事例であつたが、それでもジョルシユコチ通りの喚問から放免されることはなかつた。

私自身の視点から見て、フェケテ・シャードルのケースは、これらと異なっていた。これは、計略的で非合法的な活動への参加を拒否するという点で、一貫性を欠いていた事例になる。

フェケテは一九五六—一九五七年に *Hungaricus* というペンネームで研究資料を準備した。革命、その原因とプロセス、成功と失敗を評価しようとしたものだ。⁽⁷¹⁾ 多くの友人にこれを見せ、私にも見せてくれた。私が個人的な会話の中で彼に話したことが、そのまま正確に警察の自白調書に引用されている。前章でも述べたように、私の眼には、彼の研究は「過剰なほどにマルクス主義的」だった。

この *Hungaricus* の運命について触れてみたい。その理論的・世界的・政治的視点に私は留保を付したが、この研究を西側に持ち出し、出版したいという彼の願いを助けることにした。私の友人仲間の中に、キプロス・ギリシア共産党指導者の息子のヨルゴス・ヴァシリウ (*Jorgos Vasiliu*) がいて、フェケテは彼と知り合いになった。ヨルゴスは優しくて賢い青年で、フリッツシュ・イシュトヴァーンの博士候補生だった。こうした関係で、ナジ・アンドラーシュや私と交友を結んだ。私の家にも足繁く通った。彼は合法的にフランスやイギリスへの旅行を準備していて、フェケテの研究資料を持ち出し、ケンデとフェイトゥー・フェレンツに渡すことを引き受けた。フェイトゥーは伝説的な歴史家であり、ジャーナリストであった。^{***} 私が

彼に直接頼んだ訳ではないが、フェケテが頼んだことを知っていた。警察でのヨルゴスの自白で分かったことだが、フェイトゥーに渡す時に、私の名前を出すようにとフェケテに指示された。そうすることで、パリにいる仲間が挑発されているのではないと安心するからということだった。この研究はパリの知識人フォーラム誌に掲載され、大きな反響を呼んだ。⁽⁷²⁾ この研究資料が宛先に届いたことを知らせる暗黙のメッセージを送ると、ヨルゴスは私に約束していた。

* ヘゲドゥーシュ・B・アンドラーシュは一九九一年に彼をインタヴューし、その記録はハンガリー語でも出版された。そこでは、ギリシア名のハンガリー語表記は、*Georgios Vasiliu* となっている。我々は彼のことをヨルゴスと呼んでいた。本書でもこれを踏襲する。

** フェイトゥー・フェレンツは、パリ移住前、ヨーゼフ・アッティラとともに *Szék Szó* の編集者の一人だった。フランスで名声を獲得し、東欧のもっとも著名な専門家の一人とみなされている。この文章を書いている週に、ハンガリーの友人たちと九五歳の誕生日を祝った。

警察はヨルゴスを拷問した。⁽⁷³⁾ 党員だったが、このために党から追放された。そしてほどなく、ハンガリーを離れた。ヨルゴスは三〇年後に、キプロス大統領に就任した。^{*}

* ハンガリー大統領グンツ・アルバードは、一九九〇年に日本であるレセプションに参加した。彼の傍に誰かが立ち、少々訛りのあるアクセントで、流暢にハンガリー語で声をかけた。「私もハンガリーの大統領です」と。ヨルゴスは当時、キプロス大統領だった。

ここで、一九五八―一九五九年のジョルジュコチ通りに戻ろう。私がケンデ・ピーテル⁽⁷⁴⁾と関係を維持し、Hungaricusの密輸⁽⁷⁵⁾を知っていたことが発覚し、しかもフェケテとヨルゴスの自白からもうすでに否定できない事実になっていた。「告発義務の看過」があつたことはきわめて明瞭だった*。

* 私の名前が出てくる度に、何度も喚問が繰り返され、それが皆「犯罪歴」に記された。「Hungaricus」と命名された反革命の出版物を西側に送つたことを認めた。一九五七年に西側に逃亡した非合法革命家の一味と関係を保持していた。一九五九年二月九日に警察の監視下に置かれた」とそのカードに記されている。

Hungaricus の件は、政治活動に参加しない、非合法活動に参加しないという私の決断を破るものだった。どうして一貫性を保持しなかったのかを説明するのは難しい。入り組んだ友人関係の中で、繰り返し拒否を続けることができなかつたのかも知れない。以前には、もっとも近しい友人が政治活動への参加

を勧めても、自分で決めた禁止規則を守って拒否してきた。フェケテ・シャーンドルは友人だったが、ケンデ、リユーチエイやギメシユのような親しい仲間ではなかつた。Hungaricusの送付が浮上した時には、ケンデはもうパリに居て、リユーチエイとギメシユは監獄にいた。もしこの送付を拒めば、かつての友人仲間の最後の一人であるフェケテの友情も失うと考えたのかもしれない。

結局、そうやっても、友情は失われてしまったのだが。

友情と連帯

カーダール体制が迫害した人々と連帯することを特別に重要だと感じた。ラーコシの監獄から解放されてきた人々の間には、友人たちが彼らとその肉親を見放したという思いがあり、私の記憶が警告を発した。

ノヴォバーツキー・シャーンドルは Szabad Nép の反乱者の一人で、大の親友だった。革命前、*Proletari Uszga* 紙に掲載された論文は何度も引用され、良く知られていた。スターリンの「我々共産主義者は特別な人間なのだ⁽⁷⁶⁾」という言葉を引き合いにして、共産主義者の傲慢を語っていた。こういう軽蔑的な文言を許すことができなかつたのだろう。シャーンドルが連行された時、その理由が分からなかつた。共通の友人であるフェ

ヒール・シャーンドルを探そうとした。一度ならず一緒にノヴォオバーツキーの家に行き、反乱の総会の準備をした仲だった。

フェヒールは一時、ナジ・イムレに近い闘士だったが、その時はカーダールの直々の側近になっていた。ナイーヴな頭で、シャーンドルの解放に尽力してもらおうと考えた。国会に彼の事務所があった。彼の秘書の所まで辿り着いた。彼女とは編集局時代に知り合っていたし、事前に電話で要件を伝えていた。フェヒールは彼女に伝言を残し、「会いたくない」と伝えた。ノヴォオバーツキーの件では何もしたくないことだった。

多くの友人と共に、拘束者の肉親のために、「お金を集めて回った」⁽¹⁷⁾。これは私が決めた自分の限界規則を「破らない」と考えた。これは「政治的」な活動ではなく、「ヒューマニズム」の活動だと考えた。友人の肉親はどうでも良いとは思わなかった。何人かの友人の場合はたんに「友人の肉親」ではなく、たとえばリューチェイの妻のギズイやノヴォオバーツキーの妻のエヴァは「完全な」友人でもあった。お金を集める以上に、面識のない獄中者の妻や子供を助けることも倫理的な義務だと感じていた。

やがて、「ヒューマニズム」の活動が政治の外にあるという考えは、幻想に過ぎないことが分かった。メーライーリトヴァーン・フェケテ事件の捜査が始まってから、集金活動も政治的陰謀の一部だとみなされるようになった。かつての非合法

共産党にとって、赤十字が孤立した党に親近感をもつ広範な人々との接点になる「大衆組織」だったことを、警察の指導部が感知したのだと思う。この集金活動も、こうした活動の隠れ蓑だと考えた可能性がある。人間は政治的な意図からだけでなく、人間的な連帯の意思によっても動機づけられることを理解できなかったのだろう。

これは悲しい出来事であったが、別の出来事、ペストの連中が使う言葉で言えば、ジョークもあった。拘束という雷鳴が鳴り続けている時も、消沈しないように努力していた。一九五七年末、大晦日を楽しく過ごすために、いろいろ準備した。ハナーク・ピーテルの家で、一〇二〇人を集めた。ピーテルと私がプログラムを作った。最後に、良く準備された余興を見せた。そのもつとも成功した場面は、今でもはっきり記憶に残っている。フェケテ・シャーンドルとリトヴァーン・ジョルジュが、ズボンからワイシャツを表に出し、そのワイシャツの上を腰ベルトで縛り、軍帽をかぶった。まさに、ロシアの音楽家風情を醸し出した。場面はシベリア。リトヴァーンはかなり前に流刑に会い、そこにフェケテが到着して、ブダペストで誰が何をしているかを話し始める。あの騒々しかった革命家が最近入党し、別の奴を監獄にぶち込んでというような会話が続いた。このシーンは大喝采を浴びた。すべてがそうでないとしても、予言的な意味をもっていた。

これには後日談があつて、ジョルシユコチ通りでもこの余興が続いた。⁽⁷⁸⁾大晦日の絞首台のユーモアを真面目に受け取り、我々の余興を謀略組織化の一部であるとみなしたのだ。この組織は人々をどのように鼓舞することができるか、また人々の間にどのような反革命の気分を醸成することができるかを試そうとしたものだともなされた。

諸事件の途中で（部分的には事後的に、警察の記録や諜報部員の報告から）、「すべての友人関係がこの厳しい歳月を生き延びたわけではなかった」ことが明らかになった。生き延びた関係は強まった。私にとって、率直かつ信頼できる会話ができ、一番難しい時期でも頼りにできた人々がいたことが、一番嬉しい。

その第一番目に感謝しなければならないのは、最初の妻であるテリーである。苦しい時代と一緒に生きてきた。テリーは私の傍にいて、常に理解やアドヴァイスや助力を求めることができた。

この次に来るのが、非常に親しかった人々、ハナーク・ピートルとカタリン、リユーチェイ・ギズイ、フォーニイ・ドウチ、チャトー・エーヴァ、リトヴァーン・ジュリとエヴァ、ナジ・アンドラーシユ、ロシヨンツイ・アーギである。いろいろな糸が我々を結んでいる。新鮮な政治ニュースの交換から大理論の討議まで、ジョークの言い合いから窮地に陥った仲間の救済に

まで及んでいる。この友情は生涯のものである。

後年、アメリカで多くの時間を過ごした時に、人々がいとも簡単に「友人」という言葉を使うのを観察した。パーティーで時たま一緒に楽しんだり、大学の委員会で会つたりするような関係も友人なのだ。我々の仲間では、このような単純な基準を使わない。「友人」という言葉にもランクがある。友人なしには、専制時代を生き抜くのはたいへんだっただろうと思う。

第7章 私の大学（一九五七年―一九五九年）

ゴリキーは大学で勉強しているはずの年齢期に、大学の講義を受けることなく、生活から多くのことを学んだ人生の時期を「私の大学」と名付けている。私も、自らの発展史について、この表現を使いたい。有用な経験として、また自覚的な教訓として一九五五年前に獲得したものは、専門家になるための「ブレ・トレ・ニング」だったと考えることができる。その後、職業的な研究者となつてからも、事実上、独学生として研究を続けたが、その時には方法論の面でかなり進歩していた。

自己研鑽

革命が潰されてから、国を離れないと決めたものの、「西側の経済学の一員に加わりたい」という決意が固まった。ソ連の戦車の侵入が引き起こした怒りは、意識的な「西側への志向」に特別に強い衝動を与えた。

ドイツ語の読解は問題なかったが、ギムナジウムで学んだ英語は錆び付いていた。だから、一九五七年の私の第一課題は英語の勉強だった。会話は難しくても、思ったより早く、英語の専門論文を読めるようになった。

「書物に没頭した」（少年時代の文学書のように）と言っても良い。たくさん物を系統的に読んだ。アドヴァイスをもらつたこともあつたし、偶然の幸運もあつたが、とにかく基本的な文献を選択できた。サムエルソンの有名な教科書はドイツ語の翻訳で読んだ。それから、西ドイツの経済学者エリック・シュナイダーのいわば「中級」の三巻本の教科書（第一級の演繹的で現代的な）を、丁寧⁷⁹に学んだ。

これで概論的な仕上げを終え、それから種々の単行本、論文集、雑誌論文を読み出した。当時、涉猟した文献のメモが手許に大量に残っている。それらの著者をアルファベット順に記すと、アロー⁸⁰、アロー・カーリン・スカーフ、ポウルディング、

オイケン、ハーバラー、ハイエク、ヒックス、カレツキ、ピグー、サムエルソン、シュタツケルベルク、⁽⁸³⁾ティンバーゲンのようになる。ここに列挙した著者は、後に国外で獲得した知識を元に、「大」^{*}学者と考えたものである。この他に、後から振り返って見て、うまい選択ではなかった著作も多く読んだ。それに費やした時間や労力を、もっと優れた作品に費やしていれば良かったと思う。残念ながら、現代の著作に通暁した道案内役ができる先生はいなかった。

* オイケンやフォン・シュタツケルベルクはドイツの経済学者で、その重要な経済思想で経済科学に貢献している。アングロサクソン系の大学経済学部では、彼らの著作が文献案内から漏れているのが残念である。彼らの著作はドイツ語で読めたので、一九五七年には英語の著作よりはるかに読みやすかった。

** ピーテル・ジョルジュや、作曲家で後にオペラハウスの支配人になったミハイ・アンドラーシュが西側に旅行する度に、私に書籍を持ち帰ってくれた。その他の著作は、ブダペスト大学とアカデミー研究所の図書館を使った。

本当に集中的に学んだ。文章を追っただけでなく、記憶に留めるために主要な命題をメモし、例題を解いた。文献がその可能性を与える場合には、「社会主義経済に関連して、それから何を結論できるだろうか」と突き詰めて考えるようにした。ハ

ンガリー企業、ハンガリー工業、あるいは経済全体の機能の理解に、この論理的機構が適用可能だろうか、と。読み込んだ文献の諸命題だけでなく、その「方法論やスタイル」もその後の精神的活動に大きなインパクトを与えた。論理的推論（時として難しいが、だからこそ明瞭に迫ることができる）が結論を導く。空虚なドグマによる推測ではないのだ。偉人の言葉を引用することで、議論を補充することはできない。（これは西側の学生にとって自明のことだが、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリン、ラーコシの引用で埋まっていた文献を学んだ者にとつて、まさに一服の清涼だった）。

とくにミクロ経済学やそれに関連するテーマに興味を惹かれた。厚生経済学や合理的決定理論がそれである。（ケインズを学んだのは、これより後になる）。「ブルジョア経済学」に対するマルクス主義的偏見は完全に除去されていたので、「主流派」経済思想を受け容れるのに何の問題もなかった。このプロセスは十数年前のマルクス主義習得のように、「主義」への無批判的な完全帰依とは違っていた。これらの著作が与える経済現象の説明は説得的に思えた。この当時、サムエルソンの教科書で、「新古典派」の意味を知っていた。そこから判断するに、「独学生」として学んだ結果、自らを新古典派の潮流の追随者とみなしてもそれほど間違いではないように思えた。しかし、それを感じるとどませたのは真の疑念でも反論でもない。以前の幻想

がもたらした頑固さ、精神的に自立したいという決意が、新古典派への同調を押しとどめた。

私の学習を後押ししてくれた人がいる訳でも、キャリアに必要な評価を与える人がいた訳でもない。午前中に警察の尋問へ出頭し、午後に書物を学んだ日もある。月曜日に恐ろしく悪いニュースが来ても、火曜日も水曜日も、自らに課した課題を実行した。この時も（それから後になっても、重い懸念で圧迫されるような時でも）、勉強という仕事療法で精神的な傷を癒した。

ここで少しだけ、時間を飛ばしてみたい。私がアメリカの大学で教鞭をとるようになった時に、同僚や学生たちは、私がどのように経済学的知識を習得したのかを一度として尋ねてこなかった。彼らには自明のことのように思えたのかもしれない。しかし、そうではない。ブダペストの経済大学へ通わなかっただけではない。もしその大学を卒業していたとしても（一九四〇年代あるいは一九五〇年代のマルクス主義イデオロギーの権力奪取時代と専制時代に通っていたとしたら）、現代的な西側の経済学を学ぶことはできなかったのだ。

ランゲーハイエク論争

一九三〇年代に西側の経済学者の間で社会主義について展開

された論争は、私の研究活動に特別な影響を与えたので、これを取り上げる必要がある。当時、アメリカにいたポーランドの偉大な経済学者オスカール・ランゲの社会主義に関する古典的な論文は、私が英語で読んだ最初の専門論文だった。後になって、この論争の主要な諸点を涉猟した。その中には、計画に焦点をおいた論争触発の論文集⁽⁸⁵⁾、アツバ・ラーナーの *Economics of Control* も含まれる。文献涉猟において大いに助けられたのが、アブラム・バーグソンの優れた論文で、当該文献について広い見地を示してくれた。これらの著作を読んでいた時は、後年にランゲやラーナー、モーリス・ドップと会うことになることなど思いもよらなかったし、ハーヴァード大学でアブラム・バーグソンの研究室と隣合わせになることなど夢にも思わなかった（後に、ケンブリッジのマンションでも隣組になった）。

社会主義経済の資源配分を市場に任せなければならないという考えが私に届いた最初の契機は、ピーテル・ジョルジュとの会話や論文であり、ユーゴスラヴィアのシステムに関する情報であった。私の著書は「過度の集権化」を批判するものだった。しかし、すでに二〇年も前に、シカゴとロンドンで、イギリスとアメリカのケンブリッジで、経済学者が高い理論的水準で、企業が公有にある経済で分権化がどこまで可能かを議論していた。ランゲはまさに公有企業が生産する理論モデルを作っていた。唯一の経済目標は収益性である。^{*} 価格を自由に形成するこ

とはできず、中央計画当局がきわめて単純な規則にしたがってこれを指示する。すなわち、需要が供給を上回っている生産物があれば、その価格を上げる。逆に、供給が需要を上回っているならば、それを下げる。中央計画当局には、需要・供給関係を監視し、それにしたがって価格を変更する以外のドグマは存在しない。ランゲは市場状態が均衡に向かつて収斂することを示したのだが、これは新古典派の市場と価格の関係に関する収斂定理と完全に一致する。この時に、ランゲの論文から「試行錯誤」(trial and error)という英語のイデオムを知った。⁽⁸⁾ 試行と錯誤を通して、価格が「均衡価格」とみなされる状態に到達する。いわゆる「一般均衡理論」の創始者で、経済学史に名を残したフランス・スイス人経済学者が、レオン・ワルラスである。ランゲの研究はまさにワルラス経済学の薫陶を受けたものであることは明らかだった。

* ランゲは初め費用最小化を想定していたが、後の論文でこのように規定し直した。

ランゲの研究はその形式と発表時期において、多くの西側の左翼的経済学者の知的・イデオロギー的要求を満足させるものだった。つまり、一方で「政治的な」同調を基礎に何らかの形で社会主義制度を受容する方向に向かわせ、他方でマルクス主

義の反市場主義を捨てることができた。これら左翼的経済学者たちは実践的な意味においてだけでなく、理論的確信においても、市場派だった。マルクス主義と距離を置き、ワルラスや新古典派理論の追隨者だとも公言した。それゆえ、ランゲによって提案された総合は、興奮をもって歓迎された。私もこのような思考に親近感を覚えた。その理論的内容が説得的に思えただけでなく、多分こう表現するのが良いと思うのだが、思考過程の「美学」、つまり理論構築の簡明さと明瞭さの調和に魅惑された。

他方、ハイエクの批判は私に、思考覚醒の影響を与えた。主要な議論は理論的な思考からではなく、実際の熟慮から生まれたものだった。中央計画者が数百万の生産物の需給を如何にして追跡することができるのか。この議論は、「集権化された知識には限界がある」という現象に眼を向けさせることになった。社会の知識は分権化されている。分権化された市場経済と私の所有だけが、すべての人に保有されている知識の最適利用の誘因を与える。ハイエクを読むことで、知識、刺激誘因、所有の間に保たれる密接な関係へ注意を向けることになった。当時はまだその連関構造が明瞭ではなかったが、少なくとも方法的に考え始める契機になった。

かなり後になって多くの著作で記述した私の見解は、最終的にランゲの提案を否定することになるが、一九五七年当時、ど

のように考えていたかを振り返ってみても生産的でない。後の私の批判は、一方における政治的構造と所有関係と、他方における市場的调整との間に、切り離せない関係があることを前提している。一九五七年当時はまだこの関係を十分に見通してはいなかった。当時の私の反応は、どちらに軍配を上げて良いか分からないうようなもので、ランゲやラーナーの議論は賢く一貫性のあるものに見えるが、ハイエクの批判も捨てがたかった。

多分、議論の対象よりも、そのスタイルが強く影響を与えたと思う。ハンガリーでもほとんど同じテーマで議論が続いていた。ここハンガリーではピーテル・ジョルジュと私が、西側のランゲやラーナーと類似した思考をかじっていたが、我々はパージされ脅迫され、他方の西側では文明的な対話が行われていた。気絶するほどの責めを感じながら、受け答えしなければならなかった。この時になって、ようやく、この手法はモルナー・エンドレヤリツプ・ゲーズが編み出したものでないことがはっきりした。敵に対しては不遜を、違った見解も持つ者に対しては見下す傲慢は、マルクスに始まり、レーニンによって受け継がれ、スターリンによって極められた伝統なのだ。スターリンにいたっては、敵を責めるだけでなく、頭を撃ち抜くのである。

軽工業の研究

このような勉学と並行して、「過度集権化」で始めた研究を続けた。「過度集権化」で総括した諸命題のかなりの部分を補足したかった。ひとつは、以前にはエネルギーがなくてそこまですり着けなかったテーマ、たとえば価格、投資、租税・信用制度の検討へと広げられた。もうひとつは、経済管理の手法にどのような変化が生じたかを追跡したかった。革命前に陽の目を見た改革提案やヴァルガ委員会が提出した提案が活かされているのだろうか。前者も後者も同じ方向性を示しており、計画指令制度を廃止するまでは行かないものの、その役割を狭めて、市場メカニズムの機能領域を拡大しようとするものだった。研究に集中した。以前の軽工業の人間関係を新たにし、新しい知人で補った。この時には、もっと系統的で良く準備された質問で、聞き取り調査を行うことができるようになった。

この中で、西側の文献から獲得した新しい知識を活用しようと考えた。たとえば、企業の費用関数を学んだ後の工場訪問では、ある繊維企業の実際の費用関数を決定しようと考えた。多段階の垂直的生産が行われているながら、多種類の製品が生産されているようなケースである。また、代替率や限界代替率の概念を学んだ時には、ハンガリーにおける相互に代替可能な輸入

資材と国内資材の価格決定がどうなるかを明らかにしようとした。もしハンガリーの慣行が合理的でない（西側の専門文献で知られている規範的モデルに合致しない）場合、価格決定の慣行をどのように修正しなければならないか。

このように、学習と研究がうまく噛み合っていた。学習者が紙に書かれたモデルと実際の慣行を比較すれば、演繹的に有用なものになる。学んだものを記憶する上でも、これは大いに役に立つ。これよりさらに重要なことは、理論の応用可能性を検証することに慣れることである。ここでは、何か理論の大定理ではなく、一般的な新古典派理論を構成する一部を問題にしている。少なくともこれら小さな諸連関について、私はこれをしてみる事ができた。「理論と現実を繰り返し対峙させる」ことこそ、マルクス主義の著作に欠如していると感じている点だった。

新たに学んだ理論の実践的な検証と応用は頭の中やメモだけに留めておくのではなく、大小の論文の形でも留めておこうと考えた。各種の書き物を、技術者や経済専門家が読む発行部数の少ない雑誌に掲載した*。いろいろな要因が執筆を促した。それらはまさに指の体操のようなものだった。執筆することなしでは生きていられないような作家、あるいは「物書き」のような存在だった。思考を明晰にしたいという欲求も、論文執筆を促すのである。どんな問題を扱っている場合も、当時も現在も、

記述することでバラバラな考えをまとめることができる。その書き物が論文の場合もあるし、議論している場合には、手紙（相手に送られないものも含めて）や自分用のメモになる場合もある。とにかく、明晰化するために、私には書き物が不可欠なのだ。

* 研究に関連する問題だけでなく、まったく別のテーマでも論文を書いた。Etele és Tudomány, Figyelő, Közgazdasági Szemle, Statisztikai Szemle 誌などの編集者を思い出して嬉しく思う。当時、私の論文を掲載すれば、「お上」が快く思わなかったことを承知で掲載してくれたのだ。それだけでなく、掲載すれば、私にながしかの所得が入るという支援の意味もあった。時には、無署名論文として、あるいはイニシャル（場合によっては偽のイニシャル）で掲載しなければならないこともあった。

知識を他の人と共有したいという欲求も、執筆を促した。私があればこれを理解したら、他の人にも私の論文の読解を通して、理解してもらいたかった。これらの小論文は、経済学的思考の発展から見ても、取るに足らない物だった。科学に貢献した訳ではないが、自らの専門家としての向上を助けるものになった。いわばスポーツマンが考えるトレーニングのようなものだったと思う。

「一線を描す」

私の回顧の構成は、相互に関連し合う事件の分離可能性にもとづいている。前章では私の周辺と私自身生じた政治的な嵐を扱っているが、本章では一変して静かな精神活動を扱っている。

読書、同僚との会話、メモの作成、専門論文の執筆。これらはオックスフォードであれ、プリンストンであれ、はたまたキールであれ、どこでも若い研究者が行っているものだ。しかし、ここでも読者の注意を喚起したい。当時、私が置かれていた状況は違っていた。文献渉猟、警察の尋問、論文執筆、抑圧的な政治的諸事件が、私の思考や感性の世界の中に、頭をよぎるさまざまな思いと一緒に渾然一体として存在していた。政治の世界が専門の世界に土足で踏み込んでくる事件もあった。

警察がフエケテ・シャーンドルの *Hungaricus* 事件を扱っていた頃、研究所の昔の同僚が私を訪ねてきた。活動的で確信的な党员だった。私に対してはいつも親しく振舞い、相互の関係は良かった。私の考え方や友人関係についても、すべて知っていた。あれこれ話し始めたが、要するにひとつの忠告メッセージを持ってきたことが分かった。「同志たちは、パリからわが国を攻撃し、君の著作を利用しているケンデ・ピーテルと、君が何らかの形で一線を描することが良いと考えている」と。

「同志たち」というのは、当時良く使われていた無名的代名詞だ。誰がそのメッセージを寄越したのか、後にも彼から聞いたことはなかった。もし生きていれば、この回顧録を書くにあたって、聞きたいところだ。多分、フリッツシュ・イシュトヴァーンが送ったのだと推測する。捜査員がフリッツシュから私のことを聞きだそうとし、*Hungaricus* 事件を説明したのだと思う。

ヨルゴス・ヴァシリウは彼の博士候補生だったから、これは彼にとっても不快な事件だっただろう。すぐ後に触れる *Köszön-dasági Szemle* 誌に掲載された私の論文を審査したのもフリッツシュだったから。もちろん、これは皆、推測である。党中央や警察がメッセージの源泉だったかもしれない。この同僚がどんなに優しい声で伝えようが、そのメッセージを受け取った者が強い脅迫と感ずるのは当然だろう。

ケンデ・ピーテルは、フランスの雑誌に、ハンガリーの計画経済について興味深い論文を書いており、そこで何度も私の『過度集権化』に触れている⁽⁸⁸⁾。科学出版の常套として、思考や情報の源泉を正しく明示することが重要だと考えたのだろう。さらに言えば、『過度集権化』の完成にある程度まで彼も「一役」買っているから、そうすることが正当だと考えたと思う。実際、これを執筆する過程で、彼との対話が非常に大きな影響を及ぼした。また、引用されれば、ふつうは著者が喜ぶものだと考えただろう。確かに、一般にはそうだが、ケンデ・ピーテ

ルの論文が出版された一九五七年は別だった。まさにこの時、*ジオルシユコ*チ通りでは、さまざまな事件の捜査とともに、フエケテとヨルゴスの尋問が始まっており、*Hungaricus* 出版におけるコルナイ・ケンデ関係の役割が問題になっていった。フエケテの尋問調書を私に見せ、これについて私を尋問していた（既述したように、コルナイ・ケンデ関係も、警察の「犯罪リスト」に掲載されていた）。

私は送られたメッセージに込められた「提案」を実行することにした。ちょうど、軽工業の研究資料にもとづいて論文を執筆しており、「量的視角」や「経済性の視角」が経済管理者の行動にどの程度影響するかを扱っていた。⁽⁸⁹⁾ いわば藁にもすがらる思いで、この論文の中で、「一線を画す」という表現を搾り出した。この論文でケンデ・ピーテルが「過度集権化」から社会主義の失敗を引き出したことに抗議した。自己批判的な注釈として、「このような結論が出されるとすれば、『過度集権化』の概念化に誤りがあった」と。

圧力に譲歩したことは、憂鬱で屈辱的な思いだった。それも、ピーテルに対して行ったのだから、自己嫌悪に陥った。ピーテルが安全なパリにいて害を被ることはないし、私の状況が良くなるのだからと考えることができれば、平静で居られたかもしれない。経済学者はこのような場合、冷たい頭で、これを「パレート最適解^{*}」と記すだろう。

* ある変化が、他の状況を悪化させることなく、ある個人あるいは集団の状況が改善される場合に、パレート最適規準を満たすという。イタリアの経済学者、ウィルフレッド・パレートが経済学に導入したものである。

このような判定は生存のための戦略として、根拠をもつと言えるかもしれない。しかし、この「一線を画する」ことで、私は友情に貫くべき基準を破ってしまったという思いに囚われた。一九六四年に彼と会った。ピーテルが亡命してから、これが初めての再会だった。当然、あの論文の話になり、ピーテルはほんの一時だけだが、私を責めた。どうしてメッセージを送ってくれなかったのか、「これを書くように強いられたけれど、もちろんこんな風には考えていない」と。私は間違いを認めた。そして、もうこれ以上、この問題に触れないことを確認し合った。その後、彼の長い亡命歲月の中で、世界のいたるところで出会った。パリ、ヴェニス、ベルギー、オランダ、イギリス、スイス、ドイツ、そして一九八〇年代末以降はブダペストでも。しかし、この苦いテーマが我々の話題になることはなかった。

ピーテルの反応には種々の感情が混ざっていたが、多分、ユーモアと皮肉が主たるものだと思う。当該論文を含むピーテルの著書が、五年後にフランスで出版された時に、私にも一部、

次のような献辞を添えて送られてきた。⁽⁹⁰⁾「私の論敵の作品といまだ格闘しています。嗚呼、ご主人様、主よ、友より救い給え！ ある著者」。

袋小路

最近になって、軽工業研究で出版されたものに眼を通して、「利潤分配を修正しなければならぬか」という表題のものを見つけた。今から見るとつまらないタイトルのように見えるが、非常に面白いテーマを扱っている。一九五七年から、政府は、国営企業の経営者や勤労者に、利潤増加へ関心向けさせるようにした。初め、これはうまく行きそうに見えた。国営企業が一面的な「生産量最大化」関心から離れて、私的所有にもとづく市場経済に特徴的な「利潤最大化」関心へ接近すると考えられた。ところが、企業間での利潤分配の分布が「不正」になることが分かった。ある企業で利潤が小さいのは、たとえば輸出製品への需要の低下によって、企業に責任のない対外貿易条件が不利になるからである。また別の企業では、上部機関があまり収益性のない生産を強制することから、利潤が小さくなる。また、他の企業に比べて、技術設備が陳腐化しているので、利潤が小さいと説明できる企業もある。当該企業の投資や技術発展について決めるのは、企業ではなく、上部機関で

ある。だから、これらの企業は利潤分配の「修正」を要求したのである。こうして、彼らに責任のない原因で生じた停滞分を補填するのである。つまり、利潤は需要と供給、価格と費用との差額のような市場カテゴリーで決めるのではなく、企業の「良好な」あるいは「悪い」実績を公正に相殺したものになる。一九五八年にこの論文を書いた時に、二〇年後に「ソフトな予算制約」シンドロームと名付けた問題領域に辿り着いたのである。企業は上部機関を説得して、「仕方のない」損失を補填させようとする。実際に利潤関心が全面的に機能するのは、自己責任であろうと、環境の不運な所為であろうと、企業を金融的苦境から救済しない場合である。これは「公正」でないかもしれないが、こうやって初めて、企業は困難に立ち向かい、不利な環境への適応を図り、難しい状況でも技術的経済的革新で利潤を得ようとするのである。不利な環境を理由にした補填は企業を受身にし、闘うことなく、国家補助に依存させる。

この論文の事例のように、もしもっと自由な環境の中で研究活動を行っていたなら、もっと早く後の認識に辿り着いていたのではないかと思う。そうできなかったのは残念だ。とくに、一九五七年に始めた軽工業研究の基本問題のひとつ、「一九五六年以後、経済メカニズムはどれほど変化したのか」という問題への回答が、とくに大きな困難にぶつかった。官僚的な過度集権化には戻らないという政府の約束は守られているのだろう

か。実際問題として、分権化の方向への好ましい変化はほんの僅かで（利潤分配もそのひとつのはずだった）、こんな僅かな変化なら短期のうちにならぬ多くのものを元に戻すことができずた。

これを明言したり、研究成果として出版したりすることは、政治的条件から不可能だった。机の引き出しに仕舞い込むために執筆するのは意味がなかった。研究がもたらした結論を経済的な事実の証明を付して執筆できない、出版できないとすれば、研究の継続が政治的制約とぶつかるのだと認識せざるを得ない。袋小路に入ってしまったように感じた。この回顧録を認めていた時に、この状況判断が正しかったのかどうか再確認した。

『過度集権化』の続編ができなかったか、それを行う意味があったのではないかと、はつきりしていることは、当時の私は「それが不可能で、意味のないもの」と考えていたことだ。

私の中に、「テーマの小さな変更だけでは十分でない」という確信が形成された。新しい研究方向を選択しなければならぬ。この方向が、次章で扱う「数学手法の経済学的応用」だった。

本章のサブタイトルにあるように、一九五九年が本章の最終年である。もちろん、それまでのテーマがある日突然に、別のものに変った訳ではない。一九五九年を最終年と理解するのは、一九五六年以降の軽工業の経済管理手法にかかわる研究を、

完全にきっぱりと止めたからである。本当に多くの仕事がかこに眠っている。一九五七年以降の専門家として成長の視点から有用だったものを除けば、「トレーニング」としての意味はあったが、基本的には不毛で無駄な仕事だった。私の書庫には当時の数千ものメモが整理されている。回顧録を書くにあたって、これらを手にした時の感情は複雑だった。

人生の決断

どんな報告も、「同志諸君、これは偶然なことではなく……」という空虚な枕詞で始まる。マルクス哲学の精緻な研究者は、すべての事象は前もって定まっているというような極端な宿命論を、マルクスの著作から引いて引き出せないという。他方、社会主義制度の日常生活では、「党書記や巻頭論文の執筆者、歴史教師や計画庁の課長は、「代替肢は存在しない」という印象を与えたがる。ただひとつだけ、つまり進歩的歴史勢力が支配するものだけが可能なのだ。この支配は往々にして自己の指令と同一視される。他に道はない、ただ農業集団化あるのみ。ただひとつの国民経済計画案が作成され、形式上、これを承認することも否認することもできるが、すべての機関が承認しなければならぬ。ただひとつの党が存在し、それを選択しなければならぬ。

一九五〇年代の後半には、多様な形式で多様な源泉から、「けれども、選択肢はある」という反対理念が私の所へ流れ込んできた。

その頃、ネーメット・ラーズローの戯曲を読んだ。私にとつてシヨッキングな体験であった。順番に人物を組上に載せ、まことに大きな選択のディレンマを与える回答の選択肢を、次から次へと描いていくのである。躊躇なくすべての譲歩を拒否したフス・ヤーノシュ（火炙りにされた）、もつとも難しい瞬間に譲歩したガリレオ（このために自己の安寧を得ることができなかった）、発言を撤回したミストートファルシ・キシシュ・ミクローシュ（精神的に節度のない譲歩に陥った）、革命時には情熱を燃やすこともなかったのに、革命の敗北に悩んだセーチエーニイ（自殺を図った）、自らの意思だけでなく、周囲の要請に応じて戦場に出かけたペトウーフィ（殉教者として死亡）。ネーメット・ラーズローの戯曲の主人公たちは、何が正しい決断かを示してくれるものではないが、大きな悲劇的ディレンマの代替的解決策や選択の苦しさを描いている。

さらに、この頃にも、実存主義哲学に出会った。最初はサルトルの短い著作を手にし、それから別の作品を読み始めた。ここから最初に読み取ったのは（多分、それを読み取ろうとしたから）、もし神が存在しないとすると、人間は自由であり、選択せざるを得ない存在だということだ。選択の可能性が残って

おらず、意思決定者に責任を負わせることができない絶望的な状況などありえない。私のように「いづれ党が決定する」と頭をたたき込まれた者にとって、自己の意思決定に責任を持つのは自分であり、それを状況に転化してはならないと理解することが、決定的に重要だった。

この他に、経済学者として、「合理的選択」モデルが、思考の概念構成の枠組みになっていった。本書の後の章で、この理論の批判を扱っている。ここでは、このモデルの大きな長所を取り上げてみたい。このモデルの基本構造は、「選択が存在する」ことを示唆している。これを実証分析に使う場合、事後的に、あるいは反証として、どれが過去において可能な（しかし、排除された）選択肢だったかを確定しなければならぬ。規範的に使う場合、現実には我々とは独立して存在し、我々の選択を制約する限界がどのようなかを正確に考慮しなければならぬ。このように制限されれば、可能な選択肢の集合の中から、自由に選択することができる。

一九五九年辺りで、私の選択がどのようなものだったかをまとめてみよう。ただひとつのドラマティックな転換が生じて、新しい道に入る人もいるだろう。将来、どのように生きようとするのかを決めるまで、私には一九五四―一九五九年の五年の時間が必要だった。良く考え抜いた決定と思いつき、強制された狭い選択可能性とほとんど無制限の広い選択可能性の連続

と重ね合わせから、これらを事後的に振り返ってみると、一九五九年辺りに成熟した決断のいくつかが形成された。ここでは、その五つを取り上げる。

- 1 共産党と決別する。
- 2 亡命しない。
- 3 政治ではなく、学問研究を職業にする。共産主義体制に対する英雄的で非合法的な闘いには加わらない。学問研究活動を通して、社会の革新に貢献したい。

4 マルクス主義と決別する。

5 現代的な経済学の基礎知識を我が物にする。勉学と研究を通して、西側経済学界の一員になりたい。

これらの決断については、それぞれ別個に以前の各章で既述したが、ここではそれを並べることで、私の決断を総括的に一瞥したい。どの決断も自明のものでもなければ、事前に決定されたものでもない。上のひとつあるいは二つの決定においてデイレンマに陥った、あるいは五点すべてにおいて私と異なる選択を行った事例は、私の周辺、近しい友人に数多く見られる。

私の場合、一九五九年にはもう、これらの決断はもはや曖昧ではつきり描けないような意思の緩い集合ではなく、意識的に考え抜いた人生戦略だった。これらの原理について、私に近しい人々とも話した。

それから四五五年の歳月が過ぎた。これだけの時間が過ぎて、

「この五つの決断は、以後の私の人生を決める決断だった」と言うことができる。もちろん、すべてを例外なしに、すべての場合に貫いたとは言えない。人間は誤りやすい存在だ。とにかく、可能な限り、選択した人生の戦略にこだわるように努めた。自らの原理に背いた時には、事後に重い自責の念に駆られた。「自己に忠実であれ」という倫理的命令が、私にとって大きな価値となったのである。

第8章 経済学への数学的手法の適用（一九五七年―一九六八年）

――「三水準計画化」をめぐる――

経済学研究が進むにつれ、現代経済学における数学が果たす役割の重要性がますます明瞭になった。数学的言語を理解できなければ、論文を把握することができない。時代の水準に立つて経済学研究を行いたいなら、数学的手法の応用を勉強しなければならぬ。この努力の証として、勉強や研究の「手法」を漸次的に改変して、数学的手法を利用することに努めた。

リプターク・タマーシュとの出会い

論理的な明瞭性に惹かれていたことが、私の思考をこのような数学的ディスプレインへ接近させるのを容易にしたと言える。中等学校では常に数学と物理の成績は良かった。一九五七年以降はいわば「独学大学院生」の時期で、中等学校の数学教科書から学び直し、さらに鍛えることが必要だと感じた。家で書物から勉強する傍ら、いろいろなコースに参加して、当時の経済

学者が使っていた数学（線型代数、解析）を中心に勉強した。研究者としても数学的手法を使ってみたかった。前章で既述したように、一九五七年以降に軽工業の経済管理手法に生じた変更を研究し、企業の利潤の役割に関心をもっていたから、その実証的な検証の枠組みの中で数学的手法を使ってみたかった。ほとんどの西側の研究は、企業が利潤を最大化するという前提で、企業の意思決定動機を記述できるとみなしている。

さて、一九五七年以降、軽工業企業の経営者や勤労者の関心を利潤に向けさせることが試みられた。種々の報酬が利潤と結び付けられることになったが、非常に特殊な方法が使われた。利潤分配は、（売上げに対する比率で表現される）収益性が決められた一定水準を超えるかどうか依存していた。数学的表現を使えば、企業が最大化する利潤の「絶対額」ではなく、利潤と売上げの「比率」が刺激誘因だった。多くの人はこの刺激誘因が効くと考えていたが、私にはこの二種類の利害関心が相

互に異なる経済効果をもたらすことは明らかだった。

数学的形式で二種類の最大化関数とそれに属するプログラム課題を記述し始めた。苦勞してモデルを作ってみたが、満足できなかった。ちょうどその時、経済研究所の同僚で、私よりはるか先に数学の経済学的応用の道を歩んでいたブローディ・アンドラーシュが、ハンガリー科学アカデミー数学研究所の若い数学者と引き合わせてくれる手筈を調えた。ブローディは数学研究所長で世界的に著名な数学者のレーニイ・アルフレッドと共同研究を行っており、数学研究所と良い関係にあった。その彼から、経済学への応用に関心をもっているレーニイの博士候補準備生、リプターク・タマーシユのことを聞いていたのだ。

こうして、タマーシユと知り合った。共同研究関係が密接になり、友情関係も出来上がった。程なく、政治的な見解も一致することが分かった。忘れてならないのは、まだ一九五七年である。政治的な関係を気にしなければならない人物と、信頼できる関係が築けなかった時代である。

異常なほど痩せた青年だった（歳を取っても、痩せたままだった）。如才がなく、優しい声、賢い話し振りに、すぐに魅了された。この性格の故に、外見はそれほどでもなかったが、女性たちに人気があった。

リプタークは特別に優れた数学的才能の持ち主だった。天才的と言っても過言ではない。すでに獲得した膨大な知識を絶対

的な確信をもって利用するだけでなく、どこかで見つけた定理や手法を使って即興的にまとめ上げる才能もっていた。独創的で、真の革新者だった。

リプタークから本当に多くのものを学んだ。長期にわたって、彼が私の数学「家庭教師」だった。何か方法論にもとづくコースを用意してくれたのではなく、必要に応じてテーマを取り上げてくれた。このような場合、まず文献を紹介して、それを理解するのを助けてくれた。彼から得た助力や知識のほかに、ひとつの課題に対してどのように「対応」しなければならないのかをも学ぶことができた。モデルがどのような抽象的仮説にもとづいていて、現実と比べてどこが単純化されているのかを隠そうとしなかった。それとは反対に、最大限の知的率直さで、モデルに隠されている単純化を暴き出そうとしていた。

絶対的な精確さを要求した。この尊敬に値する学問の当然の務めが極端になることがあり、後の精神障害の前兆を見せていた。まだ、計算機時代になる前だ。タマーシユはすべて手書きで仕事し、書道家のような字体で記していた。数式で一杯の文書の二〇頁目で間違いを犯したら、それを修正することはしなかった。すべてを捨てて、初めから書き直し始めていた。手書きでも完璧でなければならなかったのだ。

私はこの精確さの水準にほど遠かったが、彼を見習ううちに、随分と進歩した。それからというもの、私が文章を書きながら

何か正確でないと感じる時は、「タマーシユならここで破り捨て、最初からやるだろうな」という数学者的な精確性を思い浮かべる。

リプタークを何か理想化して描きたくはない。素晴らしい知性と無限の優しさをもつ人間だったが、生活の別の次元では理解し難いところがあった。私は自分に対して、どこへ行く場合でも時間を守ることを要求していた（だから、大抵、どんな約束でも時間前に到着する）。他の人が時間を守らないことに対しては、苛々するだけでなく、怒りを感じる。^{*}とにかく、約束した時間を守るようにするのが私の習慣だ。これができないと、良心の呵責を感じるほどで、不可抗力の場合には遅れを最小限にしようとする。タマーシユは、この点では、私と正反対だった。というより、約束した時間を守ることはほとんどなかった。遅刻やすっぱかし、約束の不履行などを子供じみた理由で言い訳したり、まったく言い訳したりしないこともあった。この性格の違いが多くの摩擦を惹き起こした。

^{*} まだ駆け出しの新聞記者だった頃、党の経済政策の「シーザー」であるゲルー・エルヌーが時間を指定して私を招いた。少しばかり待機していたが、やがて苛立つて秘書に言い放った。「もう二〇分も過ぎていて、僕はもう帰る」と。秘書たちは私の行動を理解できないようだった。伝言なしで例を見ない行動をとつ

たことで、私が時間に拘泥していることをゲルーに印象づけたように見えただろう。

利潤分配の数学的検証

一九五七年にリプタークの協力を求めた経済問題に戻ろう。意味ある回答を求めるために、現実がもつ複雑性を単純化しないとすると、この問題を数学的に扱うのが難しいことが分かった。独特の非線型計画問題を分析しなければならぬのだ。何度も腕まくりして考えた。研究の諸章のそれぞれについて、頭を悩まし長時間の共同作業を通して、かなりの数のヴァリエーションを作成した。最終的に、およそ二五〇頁の研究をまとめた。これは兩名にとって、満足できるものだった。

ところが、ここで仕事が中断した。タマーシユが拘束されたのだ。前章で何度も触れた活動に、彼が参加していた。フエケテ・シャーンドルが記した *Hungaricus* と題する研究は、私も外国への密輸に協力したのだが、増刷りされてハンガリーの知識人サークルに配布された。タマーシユはこの時、増刷り機械を操作する役割を担った。私もタマーシユも同じ活動に参加した仲間だった訳だが、その時お互いを知らなかった。この後、政治ではなく、学問のフロントで一緒に仕事をする事になった。互いが共通する政治的過去で結ばれていたことを知った。

だから拘束は予期せぬことではなかった。

裁判でタマーシユは共謀者として裁かれた。捜査での拘束からその後の獄中生活は、およそ一年続いた。一度、共同研究に關連して、いくつかの数学問題をまとめ、彼の妻のマニイに渡した。これをタマーシユに渡し、監獄でこれらの問題を考えるように伝言した。その問題の解決が急がれた訳ではない。面白い専門的課題があれば、獄中生活の苦しさから気を紛らわせることができるかと考えたからだ。^{*}ところが、タマーシユは数学や経済学の問題を考えるとどこか、自殺を凶った。これは後の鬱病の危機的な兆候だった。幸い、この時は一命を取り留めた。

^{*} この考えが間違っていたとは思わない。後で分かったことだが、一九五六年の判決を受けた多くの人々が、獄中で、外国語を学んだり、翻訳の仕事をしたり、さらには文学作品を創作した作家もいた。

私が経済研究所から追放された時には、タマーシユはまだ獄中だった。我々の手稿の出版を援助してくれるように軽工業省に頼んだ。援助する用意があり、印刷費用を持つことになったが、条件として獄中にいるリプターク・タマーシユの名前を表示しないことに拘った。私はタマーシユの師であるレーニイ・アルフレードを訪ね、タマーシユの名前の代わりに、「ハンガ

リー科学アカデミー数学研究所との共同著作として」という形式を使うことで合意した。こうして、増刷りされたみすばらしい装丁ではあるが、我々の研究が「書籍」の形で一九五八年に出版された。⁽²⁾

この著書の文献リストには、ハンガリーの軽工業に関する実証研究とともに、いくつかの西側の経済学作品が掲載されている。もちろん、それは当時、私が勉強していたものだ。その第五章ではエリック・シュナイダーやヤン・ティンバーゲンの名前を挙げているが、現在から見ればほとんど何の意味もない。ただ、一九五七年のハンガリーでは、いまだ「ブルジョア経済学者」を肯定的に触れる慣習がなかった。

タマーシユが監獄から出てきた時に、我々の著作を西側で発表しようとした。雑誌論文に適した紙幅の英語論文を作成した。^{*}この時期、タマーシユは水を得た魚のようだった。私はこの時初めて、西側の数理経済学雑誌のスタイルと形式要件を学んだのだが、タマーシユはかなり以前から西側の数学雑誌を読んでいた。論文の内容は二人の共同の精神的産物であるが、諸概念の数学的定式化や「西側の」構成やスタイルは、もっぱらタマーシユの産物である。

^{*} ハンガリー語を英語に翻訳したのは、ハトヴァニイ・ヨージェフである。彼の生涯はこのような脚注ではなく、独立した小説に

値するものだ。著名な富豪であるハトヴァニイ家の一員だった。ハトヴァニイ・ライオシユの従兄弟で、ライオシユはアディとヨージェフ・アッティラの「発掘者」で、これら二人の文学偉人や他の作家の支援者として知られ、ハンガリーの文学生活の精神的な組織者で開拓者である。

ハトヴァニイ・ヨージェフはケンブリッジで物理学を学び、英語を母語のように我が物にした。イギリスで共産党員になり、戦後、社会主義ハンガリーへの義務を感じて帰国したが、そこで「イギリスのスパイ」として拘束された。イギリスの学問生活を捨て、富と名声の家と絆を断ち、祖国に戻ってきた情熱的な共産主義者を、スパイと見るよりもっと別の形で貢献してもらえただけなのに。一九五四年に多くの人が解放された時に彼も出獄したが、一九五六年の後に再び拘束された。その後、再び自由になった時に、翻訳で食いつないでいた。たんにお金のためではなく、意味ある仕事を探していた。こういう事情で、私が研究論文の翻訳を依頼した。

ハトヴァニイ・ヨージェフは後年、アカデミーの生活に戻り、ハンガリーの電子計算機研究の精神的なリーダーとなり、国際的にも著名な文化人になった。

この当時だけでなく、さらに以後長期間にわたって、許可なしに学問研究著作を西側に送ることができない規則になっていた。通常の手続きは、研究者が所属の研究所や大学の組織上の上司に見せる。その上司はさらに上の上部組織に渡す。政治的

に問題があるものは、党中央に渡される。^{*}これらのどの段階かで、西側での出版の是非が決定される。

* 二〇〇四年現在、私の著作のひとつが中国で出版途上にある。

最初の出版社はこの著作に政治的問題があると考え、「出版許可」を党中央に求めた。出版は許可されなかった。以後、別の出版社がこの課題に取り組んでいる。さて、どうなることか。

リプタークと私は、誰からも許可を取らないと決断した。ただ封筒に入れて、郵便で出そうと。ハンガリー人の著作を非法に外国へ持ち出した^むで、まだ多くの人々が獄中にいた。リプタークも私も、この件に絡んでいた。確かに、今送ろうとしている著作は政治的なものではない。しかし、その手続きは合法的でなく、規則を迂回したものだ。我々二人とも、自分たちの著作を公的許可の従属物にしたくなかった。これを皮切りに、以後、私の著作の外国出版にこの方法を貫いた。許可を求めることなく、雑誌や出版社に送付した。多くのハンガリーの同僚や他の社会主義国の研究者は依然として許可を申請しており、後になって、彼らは外国出版の許可が得られなかったと不満を述べていた。私は、ハシエクの小説『善良な兵士シュヴェイクの冒険』にある、自堕落な k und k (kaiserlich and königlich) 統治下で作られた処方箋に従った。シュヴェイク歩兵に

よれば、「けつして尋ねてはならない。尋ねられれば、『no』
という答えになる」からだ。

我々の論文草稿を、数理経済学の代表的雑誌である *Econometrica* に送付した。数年後に分かったことだが、この草稿は編集委員の一人であるエドモンド・マランヴォーの手に渡り、一言の修正要求もなく、出版論文として受理された。⁹³論文は一九六二年に出版された。この論文はきわめて特殊な問題を扱っている。というのは、もっぱらハンガリーで採用されていた企業の刺激誘因形式を分析するものだからである。ひとつの社会主義経済を分析することを強調した。問題の提起そのものが、知的なチャレンジだった。

——刺激誘因は事前に与えられていない。所有関係や制度的な所与の賦存条件によって、自然な形で自発的な形で生まれてくるものではない。このようなアプローチは、依頼人と代理人 (principal and agent) の関係を扱う膨大な文献が示している研究方向や刺激誘因の先駆的研究であった。

——価格も事前に与えられておらず、市場ではなく、中央の価格制御がそれを決定する。論文が分析したのは、一方における企業の刺激誘因と価格、他方における生産量と生産物構成との間に存在する経済的関係である。どの刺激誘因が生産能力以下の生産、あるいは生産能力以上の生産を誘導するか、どのような方向に産出構成を引っ張るかである。

* かなり後になって、西側の代表的な雑誌編集・校閲の実際を知ることになった。提出された手稿の返却や再考の多くが、これに関連している。この時になって、漸く、修正なして手稿が受理されたことが大きな意味をもつことを知った。

東欧の経済学者たちはよく、西側の専門雑誌に掲載されないのは、編集者が東欧経済に関心がないからだと話していた。私自身の経験はこれを裏付けない。逆に、*Econometrica* に掲載されたこの最初の論文や以後の著作は、まさに社会主義国に生きる著者が書いたからこそ、また彼らの言語、現代経済学の言語で編集者から遠く離れた世界を伝えたからこそ、関心を惹き起こしたのである。

繊維工業の計画化

リップターク・タマーシユとは理論的な経済分析を行った。これと並行して、私自身の研究関心が別の研究方向へ向った。それが計画化達成のための数学的手法の利用である。これは何らか理論的な命題を獲得することに目的があるのではなく、実際の決定を準備する計算で使われる数量的データが映し出す経済を分析することである。だから、これは応用科学である。

文献を渉猟した。ミクロ経済学、意思決定理論、オペレーシ

オン分析、「費用ー便益」分析などが相互に関係する領域で知識を蓄積し、これらを中央計画化された社会主義経済環境の中で利用するためにはどうしたらよいかを考えた。計算の数学的手法については、線型計画法を利用した。この手法の概念構成や計算のために構成されたモデル構造を理解し、実際に生じる生産物構成の問題を線型計画問題に転換する思考「技術」を我が物にした。

この時期の私に大きな影響を与えた著作は、ドーフマン、サムエルソン、ソローの共著になる線型計画の経済学への応用である。この著作の他に、クープマンズが編集した著作に収められた三つの論文は、マイクロ経済学で明らかになっている諸連関が線型計画法の世界でどのように映し出されるかを理解するのに役立つ⁹⁴⁾。しばらくすると、二種類の思考の間、つまり理論的なマイクロ経済学と数値的な意思決定計算の実際の思考の間を往来するのが苦にならなくなった*。

* 駆け出しの研究者時代に出会ったこの四人の精神的な偉人と、後年になって「現実の人生」の中で出会い、交友できたことは大きな思い出になっている。

最初の線型計画モデルは、次のような問題に答えようとしたものだ。綿工業では計画者は種々の技術的代替方法を選択でき

る。現存の技術に拘るか、僅かな投資で少しばかりの技術進歩を達成するか、それとも大きな投資で高価な輸入技術を使って生産性を急激に伸ばすか。モデル計算は唯一明瞭な回答を与えようとするものではない。そうではなくて、目的達成の選択が多くの種類の要因（利子、為替平価、将来の輸出入）に依存していることを、数値的に表現しようとするものであった。

アプローチの新鮮さに惹かれて、この研究には、軽工業の計画者、技術・外国貿易の専門家、計算技術者などが加わった。ハンガリーでは当時、電子計算機の黎明期を迎えていた。この点でも、我々は西側の科学に遅れていた。我々は初めて見る計算機の壮観に圧倒された。当時はまだ、真空管で作動し、一部屋を丸ごと占拠する代物だった。ハンガリー科学アカデミー電子計算機センターに設置されていた記念碑的なサイズの機械は、現在のラップトップPCの機能にも及ばない。情熱的な数学者と技術者のグループが何週間もかけて、二四本の方程式からなる問題を解いていた*。（現在では、この数百倍のモデル計算を一瞬のうちに実行できる）。我々は二種類の将来性ある道を開拓するバイオニア、つまり線型計画法と電子計算機のハンガリーにおける現実経済への利用のバイオニアだという喜びに溢れていた。

* 正確には、線型計画では不等式の形式で表現され、上限と下限

で制約された領域が意思決定の限界(制約)を設定する。

数学的手法を応用する二つのグループの間で、思考を覚醒する共同作業やライバルの競争が展開された。一方の線型計画法の利用者と、他方の投入産出分析(ロシア出身のアメリカの経済学者によって開発された)の利用者である。この後者のグループはプロードイ・アンドラーシュが引つ張り、後にはアウグスティン・ヴィツチ・マリアも加わったが、早い時期からこの研究を始めていたので、多くの点で我々の先を行っていた。私が線型計画法に関心を持ち出した頃には、すでに投入産出分析は良く知られた分野になっていた。中央統計局も、実際の統計調査にもとづいて、大規模な投入産出表を作成することに全力を尽くしていた。この実証的なバックグラウンドが計算を支えていた。他方、我々の線型計画モデルのパラメータは、もっぱら専門家の予測にもとづいていた。いわば、現実には有効な数値がどのようなものかという直感的「感覚」に頼っていたのである。

二つのアプローチについて、多くの会話や議論がなされたし、個人的な会合や大きな会議も開かれた。私は理論的な思考関心から、線型計画法を利用する側に立っていた。私の眼には、投入産出分析は「決定論」的哲学に支配されていると映った。いったん最終需要ベクトルが与えられれば(しかも計画者はこれ

を「所与」のものとしたがる)、これに対応する生産量と投入・産出構成が一義的に決められる。これに対して、線型計画法は「選択」の可能性に支配されている。すでに既述したように、私の世界観の再生にとって、このことの持つ意味は大きかった。

プロードイ・アンドラーシュは、マルクス『資本論』第二巻の良く知られた「再生産表式」をレオンティエフ・モデルで表現できることを見事に示した。⁽⁹⁵⁾マルクスでは「平均」生産費や「平均」利潤が重要な役割を果たしており、すべての係数が社会的平均を代表する投入産出分析とうまく適合するのである。当時も今も、マルクス主義者が「再生産」分析と名付け、現代の経済学者がダイナミック・モデルと呼んでいるもののパイオニアとして、私はマルクスを認めている。にもかかわらず、マルクス主義政治経済学との親近性が投入産出分析の魅力を失わせただけでなく、その分析手法に不信感すら抱かせたのである。「ここには何か技術選択や意思決定が失われている」と、正しくも、見たのである。だから、新古典派経済学に、そしてそれに近い線型計画法に親近感を抱いた。西側の理論で重要な役割を果たしている「限界」カテゴリー(限界費用、限界代替率、資源の限界収益率等々)が投入産出分析で計算されないのに対し、線型計画法ではこれらの指標が自動的に生成される。^{*}

* 西側文献のハンガリー語訳では、英語の marginal に対応する訳語として、「境界 (border)」という語を当てている。「境界」費用、代替「境界」率、「境界」収益率などがそれである。どれも変数の第一次微分であり、変化率の大きさを表現している。単純化した事例だが、生産が一単位増加する時に、費用がどれほど増加するかと考えると、「限界費用」が得られる。もうひとつの事例だが、利用可能な資源が一単位増加する時、全体産出がどれほど増加するかを考えると、「限界産出」が得られる。

二つの「空^{から}」の数学的枠組みが相互に対峙しているように見える。二種類の非政治的・非イデオロギー的な数学的手法だ。この二つの手法の比較論に、私は独自の仕方、理論的不同意を持ち込んだ。暗黙のうちではあったが、議論の精神的な背景には、「現代数学的思考の技術を借りて、マルクス主義を革新しなければならぬのか、それともそれと決別しなければならぬのか（これは私の強い個人的な意思であった）」という問題があった。

二水準計画化

綿工業の数理計画が成功の評価を得たので、他の工業部門も抜おうと思った。これらの諸部門のデータをうまく関係づけることができないうか。以前から一国全体の経済を対象とす

る問題に関心があったが、いつたいどうやったら線型計画法を国民経済計画のレベルに應用できるのだろうか。

もし個別部門モデルと同じ程度の詳細さで経済全体をモデル化しようとすると、少なくとも二〇倍あるいは五〇倍の方程式体系が必要になる。当時のプリミティブな計算機技術では、これは解決不能な問題だった。ここから、大きな国民経済モデルを小さな部分に分解するという考えが浮上した。部分的な計算を積み上げ、ひとつの「大」共通解に辿り着かせるのだ。これが当時知られていた線型計画のいわゆる「分解」アルゴリズムで、これが計算技術を導いてくれる。したがって、これに相應しい手続きを見つけることが必要だった。

そこで、私は国家計画庁（中央計画当局）がどのように仕事をしているのだろうかと考えた。まず初めに、マクロ水準の指標がある。これを経済部門ごとに分解する。つまり、分解された指標をそれぞれの経済部門を管理する経済省に渡し、そこで計画庁から与えられた数値を検討する。その後で、中央計画当局と討議を開始する。逐次の交渉が終わり、中央計画当局が部門指標を修正し、それで国民経済水準の計画とその部門配分が決まる。

もうひとつ、別の第三の方法が閃いた。それはサムエルソンの理論から見つけたものだ。⁽⁹⁶⁾市場のどの実際の瞬間においても、種々の取引ごとに、ひとつの生産物について多種の価格が存在

するが、市場が最適均衡状態になれば、価格の平準化が達成される。そして、ひとつの生産物に、唯ひとつの価格が存在する。これら上述した思考源泉が、二水準計画化アルゴリズムの基本的思想を形成した。そこから、ひとつのモデルの概略を考案した。そのモデルでは、中央計画当局が数量（投入割当と産出義務）を各経済部門に割り当てる。各部門は中央から与えられた指標を満足させるような最良の計画を、個別部門の線型計画の枠組みで作成し、その投入財と産出財の「影の価格」を中央当局に伝える。これはある種の独特な経済性の報告である。価格均衡の原理にもとづいて、中央当局は再び割当を実行する（限界産出が低い部門から資源を引き上げ、それを高い部門に振り当てる）。同じように、産出義務量についても調整する。この分配データにもとづいて、各経済部門は再度、計算を行う。最良の分配に到達するまで、この手続きが繰り返される。

こうした思考は出来上がったが、それを精確に記述することができなかった。アナロジで示すことはできた。もしサムエルソンが価格均衡傾向を証明できていれば、ここでも、上述した分配・再分配規則が最適解の均衡に導くはずである。しかし、このアナロジを示すだけでは不十分で、命題そのものを証明しなければならぬ。しかし、その力は私になかった。

私ができないことを、リプターク・タマーシユが解決できた。素晴らしいアイデアが生まれた。「この問題をゲーム理論の

モデルで構成する」というアイデアで、これを考案した一九六三年はまだゲーム理論が大きなルネサンスを迎えるはるか前のことであった。プレーヤーの一人が中央計画当局で、もう一人が経済部門の総体である。この概念構成に従えば、厳密に証明できる数学定理、「上に描いた手続きは、最適解へ限りなく接近（収斂）する」が存在する。

こうして、「二水準計画化（Two-Level Planning）」と題された研究が出来上がった。⁽⁹⁷⁾このモデルと計算アルゴリズムの経済学的基本思想は私から派生したもので、私が数学モデルとアルゴリズムの解釈を担当したが、精確な記述や叙述の「エレガンス」はリプターク・タマーシユのものである。難しい問題を数学的に処理できるように転換し、我々の推測が証明できるようにした「トリック」（ゲーム理論への課題の再定式化）は、彼の頭脳から飛び出したものだ。

この研究を再び *Econometrica* へ送付した。⁽⁹⁸⁾そのプロセスは前回の掲載と同じだった。即座に、修正なしで受理され、一九六五年に出版された。この論文によって、我々の名前が数理経済学の世界で知られるところとなった。一九七一年にアローが *Econometrica* に掲載された最重要論文を編集した折、選ばれた二二本の論文の中に「二水準計画化」が収められた。⁽⁹⁹⁾

この論文は我々の二種類の努力を統一したものだ。ひとつは、経済部門モデルを国民経済レベルの計画化に転換するこ

とであり、もうひとつは部門モデルを統一するアルゴリズムを獲得することであった。これについては、すぐ後に触れることにする。その前にもうひとつの目的であった「集権化された計画化の理論的検証」について、触れておく必要がある。

中央計画化の理想モデル

二水準計画は集権化された計画の理想化モデルと考えることができる。このモデルは、中央計画当局と部門計画者が共同努力によって、以下の要件を満足する計画に到達できる手続きが存在することを証明している。

——部門計画は中央計画数値と正確に整合している。中央と部門の計画が完全に調和している。

——計画は実現可能で、国民経済レベルでも部門レベルでも、資源の制約の中に「収まる」。

——計画は計算されたヴァリエーションの中で、最良のものである。これが中央計画当局によって指示された目的をもっともよく満足することを証明する。

——計画は単純な中央指令ではない。すべての情報が中央経済当局の手中にあることを前提しない。それとは逆に、分権的（モデルでは経済部門）に蓄積された情報にも依拠して構築されている。

西側の数理経済学者が二水準計画の理論モデルに関心を示したのは、それが前章でも紹介したランゲ・モデルと簡明かつ鮮明に対峙しているモデルだからである。当時のランゲはその思考の展開に数学モデルを使っていない。後になって、数学的言語に移植された。その理論的構成を示したのが、フランスの経済学者エドモンド・マランヴォー⁽¹⁰⁾である。彼のモデルには、我々のものと同様に、上位の中央機関と下位の単位（企業）が存在する。ここでも、中央機関と下位単位との間で情報が流れる。他方、情報フローの経済学的内容について言えば、ランゲ・マランヴォー・モデルとコルナイ・リブターク・モデルでは相互に「逆転」している。ランゲ・マランヴォーの世界では、中央機関が価格を確定して、企業はその価格に適応しながら生産量と投入量を決め、中央機関に報告する。中央機関はこの報告にもとづき、どこに超過需要あるいは超過供給があるかを確定することができる。ここから、中央機関はどの企業でどのような方向へ中央決定価格を変更するかを決める。これはまさに「市場社会主義」の理想化された図式である。我々のモデルでは情報フローがちょうど逆になっている。上から下へは価格情報が流れるのではなく、数量情報（資源割当と生産量義務）が流れる。そして、下から上へは分配された資源と産出課題の経済性についての報告が流れる。これはまさに「中央集権的計画化」の理想化された図式である。

* リブタークと私が二水準計画化モデルを作成していた時には、まだマランヴォー・モデルを知らなかった。マランヴォーが *Econometrica* の編集委員の一人として我々の論文を手にした時に、熱意を持って掲載のために助力してくれた。以後も、あらゆる機会に、私の仕事に手を差し伸べてくれた。

さらに、この対比を続けることができる。コルナイ・リブターク・モデルは「完全計画化」モデルである。この対極にあるのが、「完全市場」のワルラスの一般均衡モデルである。「完全集権化が完全に機能する」システムを理論的に構想することができることを前者のモデルが証明したとすれば、後者のモデルは「完全分権化が完全に機能する」システムを理論的に構想できるという正反対のことを証明している。

ここでさらにいくつかの点を敷衍しておきたい。ここでは、私が当該論文をどう考えていたかを再現するのではなく、二〇〇四年の段階でどのように評価できるかを考えてみたい。つまり、世界から閉ざされた東欧の二人の研究者から見ても、この成果をどう見るのかという相対的な評価を行うつもりはない。そうではなくて、我々の論文に、今もなお「持続する有効性」をもつ理論的主張が存在するか否かを問うてみたい。

私はこれに肯定的に答える。数学的モデルの強みは、「定立された命題がいかなる諸条件のもとで有効か」を、正確に解明

する点にある。ひとつの数理経済モデルをどのように正しく解しなければならぬかを知っている人は、まさにこれらの諸条件を考慮することができる。二水準計画化アルゴリズムは、以下の諸条件を満足する時に（その時に限り）有効である。

1 モデルでは中央計画当局の目的が明瞭かつ一義的に規定されている。（これが目的関数を構成する）。社会主義経済の現実はこの点と異なっている。中央の経済管理は一貫性を欠き、突然の政策変更、思いつき、前進や後退などで揺れ、内部の諸対立の影響を受ける。経済政策は種々の目的を系統的にまとめ上げることができず、諸目的の相対的ウェイトを決めることもできなければ、決めようとする努力もない。

2 モデルでは諸経済部門に中央から独立した自己努力は存在しない。自己目的は中央のそれに従属している。社会主義経済の現実では、ヒエラルキーの各段階で、すべてのプレーヤーが自己の利益を貫徹させようとする。

3 モデルでは、賦存条件にもとづく上限と下限を考慮して、計画計算が行われる。現実では、その実行が種々の限界（制約）と衝突することが分かっているが、非現実的な（多くの場合、緊張度の高い）計画が承認される。

4 モデルでは、上から下へ流れる情報も、下から上へ流れる情報も、すべて正確であることが前提される。現実の社

会主義経済では、すべてのデータは不確実である。さらに、プレーヤーは自己の利害関心にしたがって嘘をつく。彼らが好む状況に応じて、上方あるいは下方へ歪んだ数値が流れる。

5 モデルでは完全な規律が保たれる。時間通りに中央の指標が到着し、時間通りに同じテンポで経済部門の返答が到着する。社会主義経済の現実では、機械ではなく人間が働いているので、遅延や混乱が頻発する。

6 モデルでは、計画化機構がもっとも望ましい解決に接近すべく、中央と経済部門との間の逐次的情報交換をねばり強く行う。社会主義の現実では、切迫したテンポで計画が策定される。計画指標の逐次修正の意図があったとしても、たんにその時間がない。

したがって、以下のような思考過程を辿らざるを得ない。

第一に、「もし……ば、中央計画が完全に機能する」という理論モデルの命題を理解する。

第二に、「もし……ば」という条件を良く検討し、理論的仮説と現実を対峙させる。

第三に、仮説が現実化することはないことを確認する。さらに、現実化することが不可能だと宣言できる。

第四に、最終的に結論が導かれる。「中央計画化が完全に機能することは不可能である」と。

理論モデルの役割のひとつは、思考の厳密な推論を与えることだ。この役割において、二水準計画化モデルは今日においても、有効であり、有用な思考手段である。

これにもうひとつ、個人的なコメントを付与しておくのがよいだろう。後の諸章において分かる通り、後の時期になって、新古典派の思考、その理論的な核心であるワルラスの一般均衡理論に対して、私はきわめて批判的になった。上述した思考過程やモデルの仮説の検証、現実との対峙を通して、私の中に主流派批判が強まった。二水準計画化モデルを構成していた頃は、そのような批判的視角がまったくなかったか、あったとしても萌芽的なものでしかなかった。当時は新古典派の主流派と自らをほとんど同一視していた。この潮流と完全に波長を同じくしていたことを、主流派の代表的経済学者も感じていたと思う。だからこそ、私の仕事と私個人への知的関心が高まった。

国民経済計画化の出発的原理

二水準計画化を執筆していた頃、リブターク・タマーシユは問題の理論的側面に関心を寄せていた。数学者としても、問題がどのように定式化されるかは専門家としての意欲を湧き立たせるものだった。これに対して、私は理論の解釈や実際の応用について関心をもっていた。

計画庁や省庁が作成した公的計画と研究者が数学的モデルで計算した計画との間に、どのような関係があるのかを明確にしなければならぬ。経済学理論の主流派が提案する手続きは、社会の共通利益を表現するいわゆる「厚生関数」を構成することである。モデル計算では、これが目的関数となる。客観的な環境を記述する諸制約を遵守し、社会の構成員にとって最大厚生を保証するものが、最適計画になる。賢明な経済学研究者がいろいろ配慮しながら、「厚生関数」の決定と解釈を行う。自らの先入観に従って、厚生の物質的・非物質的（文化的、戦略的、地政学的等々）構成を考慮しつつ、何が「厚生」であるかを解釈する。現在世代の厚生のみならず、将来世代のそれをも計算に入れなければならない。いったんこのような「厚生関数」が与えられれば、数理計画者は計画を策定し、これが「最適計画」だと付して、計画を提出するだろう。「君たち政治決定を行う者は、伝統的手法で作成した計画の計画ではなく、この最適計画を受け容れ給え」と*。

* 議論では次のような考えも浮上した。数理計画者は経済指導者
にその選択順序を質問し、これをモデルの目的関数の中に組み込む。この場合は、住民の判断ではなく、政治家の判断がモデルに組み込まれることになる。

私がこの課題に直面した時に、別のアプローチを採ろうと考えた。自らの研究の出発原理を構想しながら、多くの解決法が頭に浮かんできた。

戦術的な配慮もあった。中央計画当局が我々を競争相手とみなし、モデルと計算で彼らの仕事を奪おうとしているのではないかと考えて欲しくなかった。数理計画者と非数理的な「伝統的」計画者との間に、友好的な協力関係が形成されることを望んだ。そして、これはかなりの程度実現された。国家計画庁の長期計画担当の指導者であったヘティーニ・イシユトヴァーシは、我々の仕事に大きな関心を寄せ、支援してくれた。*

* 社会主義労働者党が設置した「改革委員会」への参加を拒否しながら、どうして国家計画庁との協力関係に積極的だったのかと問われるのは当然である。この点については、一九六八年改革を扱う第15章で触れることにする。

私には理論的な拒否反応もあった。当時もそれ以後も、「厚生関数」が確定できるという見解を受け容れることはできない。別言すれば、「社会的利益」が何であるかを一義的に確定することができない。社会は同質的な単位ではない。どのグループや個人が何を自己の利益と考えるか、何を厚生とみなすか、現在世代と将来世代の間で利潤と費用をどう分け合うべきか等々

について、意見は大きく分かれる。財政、経済法や計画を決定する政治の場で、利害対立がさらけ出される。モデルを作る経済学者はこの決定に責任を持ってない。この私の拒否見解は、出版された論文においても表明されている*。

* テインバーゲン教授もこの議論に加わっている。教授はアブラム・バーグソンやラグナー・フリッシュとともに、「厚生関数」を構成することを可能で望ましいものと考えている。名誉なことに、ティンバーゲン (1981 [1969], 21, p.) はノーベル賞受賞講演で、私と交わした議論について触れている。そこでは、次のように提案している。「西側も東側も、自らの厚生関数の特定化を試みれば、それぞれの目標が実際に大きく違っているものかどうかが分かるだろう」。ティンバーゲンのこの提案は平和共存と協力関係の推進に積極的な姿勢を表したものだ、残念ながらその真摯な意図は政治的なナイーヴさを伴うものだった。

一九六〇年代における「厚生関数」に関する理論的懐疑を概念化している時はまだ、ケネス・アローのもっとも生産的な思考で、大きな影響を及ぼし、かつその後重要な研究潮流を形成した「不可能性定理」の理論的著作を知らなかった。厳密な推論で、「相互に異なる個人の選好を共通の厚生関数に統一する民主主義的な意思決定手続きは存在しない」という命題を証明したのである。この研究を知り、「厚生関数」の最大化や社

会的利益を表現する「国民経済最適基準」の決定というような思考から距離をとった私の態度は正しかったと考えた。

* 社会的選択理論の広がりや深化に果たしたアマーティア・セン (1997 [1982]) の仕事は特筆に値する。幸運なことに、二〇〇年を経て、アマーティア・センとはハーヴァード大学の同僚で友人となった。社会的選択問題について議論する機会が何度もあった。

これに関連して、出版物には書いたことのない政治的・イデオロギー的な配慮も働いていた。所与の体制において、好むと好まざるとにかかわらず、基本的な決定が党のヒエラルキーの頂点から生まれることを前提せざるを得なかった。国家計画庁や省庁で働く計画者たちはこれに適応しなければならぬ。もし彼らに口述された諸指標が現実的でなくても、これを上級機関の指令とする以外に方法がない場合には、口述される言葉を慎重に推し量る裁量が必要だった。

伝統的な手法を使う計画者と一線を画しながら、私は数学的手法による計画計算を実行した。こうして、意思決定者とはある程度の距離をとろうとしたのである。どのような「厚生関数」を採用しなければならぬかという議論に巻き込まれなくなかった。その代わりに、「公式計画」を所与のものとし、それをモデルの制約条件として記すという単純な手法をとった。

他方、目的関数として、その改善が議論するまでもなく有用である指標を使った。たとえば、交換性通貨で決済される経常収支の改善が、このような事例である。ここから、伝統的手法で作成された計画に、ハンガリーの債務を増やさないと「加えた」ものが、モデルを構成する。「君たち計画者は、我々数理計画者とは独立して、一国の計画を立案し給え。我々はそれを前提にし、それに比べて国民経済状態を若干改善するように努力する」。政治的状况や将来について誰がどのように考えようとも、「一国の債務が増えないことが益となる」という点で誰もが一致できる。^{*}

^{*} 我々の計算では多種の目的関数を使った。公的計画のすべての指標を達成することに加えて、たとえば住民消費を最大化する。種々の目的関数を計算することで、多くの代替計画案を作成し、選択の可能性を増やすことができた。こうすることで、「ただひとつの計画が可能である」というドグマを否定することも示したかった。

この時期、ソ連でも計画化への数学的手法の利用という考えが浮上した。線形計画法の数学的基礎を発見したレオニード・V・カントロヴィッチは、モスクワとノヴォシビルスクで計画モデルを作成していたグループの精神的な指導者であった。ソ

連学派の主張はブダペストで私が主張していたものとはかなり異なっている。彼らは「最適計画」の作成を約束していた。これは私の耳には嘘のように響いた。「根拠がないどころか、誤った幻想を引き起こすものだ」と。ハンガリーにもこの追隨者がいたので、このような視角を繰り返した。私ははるかに謙虚な約束しかできない。「うまく行つた場合でも、我々の計算は、公式計画が描いたものに比べて、実感できる程度の改善をもたらす提案を導くことができるだけ」である。

経済の実行計画化、つまり国民経済の年間計画の策定に、線形計画法が利用できるなど考えたことは一瞬たりともない。生産と消費の日常的な調整は市場の役割であつて、数学モデルの役割でないことは、私にとって自明なことであつた。私は中・長期の計画化のみに関係したかつた。経済部門の計画者たちも投資の代替案の選択に専念しており、私もこの態度を国民経済モデルのレベルでも維持したかつた。

コンピュータシオン

ここで、我々の構想の実際的な実現のことに短く触れておきたい。この時期、一九六二—一九六三年には容赦ない抑圧が影を潜めていた。全般的なアムネスティの圧力で、一九五六年以降に獄中にあつた友人たちが解放されてきた。私にとって

も、軽工業への「流刑」が終わりに近づいたという兆候があった。繊維工業研究の枠組みの中でハンガリーの最初の電算機技術者（ハンガリー科学アカデミー電子計算機センター技術者）たちと共同作業をした時に、彼らの所へ来ないかという誘いを受けた。これを喜んで受けた。

この中で、国家計画庁付属計画経済研究所と仕事の関係ができた。この研究所は計画化への数学的手法の応用でパイオニア的な役割を果たしていた*。その同僚たちの積極的な参加と、研究所の指導者の効果的な支援を引き出して、国民経済計画化の仕事が始まった。

* 計画庁の指導部は、私が計画庁に完全移籍することを望んでいたようだ。ところが、この発案は計画庁人事部の拒否にあつて挫折した。今、当時の警察資料にアクセスできるようになって、何がこの拒否をもたらしたのかを再構成することができる。計画庁の人事部は私の職場の人事係に意見を求めた。繊維工業の二つの職場では、私を新しい職場へ押し出すべく、「中立的」な意見を述べて、転職の障害にならないように努めた。他方、科学アカデミー経済研究所が送付した評価は「二面」的だった。一方で専門的業績を評価しながら、他方で一九五六年とそれ以後の時期にどんな役割を担ったか、さらに政治的理由によって研究所を追放されたことを記していた。これでは国家計画庁が十分な信頼を得られないと感じたとしても仕方がない。これと並行して、国家計画

庁は内務省に対しても、この件についての見解を求めた。内務省の内部スパイ阻止を担当するIII/III課と外部スパイ阻止を担当するIII/II課が相互に意見を交換した。「私の資料」を取り出して、こう結論した。「当該人物に関する我々の記録では、反革命において積極的な活動に参加した」(ÁBTL V.145-288 a. 502-505. p. A III/III-as osztály által indított vizsgálatról szólt utastás keletkezése: 1962. December 27). 明らかに、内務省の禁止によって、国家計画庁は私を雇用することを諦めた。コルナイがアカデミー研究所に戻るのには悪くないが、国家計画庁に引き入れるのはトウ・マツチという訳だ。この事例が典型的に示しているように、私の人生は「二次元」で進行していた。可視的な部分では、全身全霊で計画化の数学手法を研究していた。他方の「不可視的」な部分では、人事部と政治警察が相互に結ばれたネットワークで監視し、私の運命に介入していた。

コルナイ・リプターク・モデルの構成に従つて、ひとつの中央モデルと一八部門のセクター・モデル（最初の実験的計算として）から成るモデル・ネットワークの構築が始まった。私はセクター・モデルの構築者を順次リクルートした。モデルごとに、経済学者、種々の中央・部門機関の技術者、省庁の専門家を集めた。これと並行して、核になる集団を組織し、フルタイムで我々の計算を行ってくれる専門家をリクルートし、他方で部分的問題の解決を助けてくれたりアドヴァイスをくれたりするグループを組織した。最盛期にはこの集団は一五〇―二

〇〇名にも達し、それぞれが意欲をもってモデル構築やデータ収集、計算に取り組んでくれた。このプロジェクトに参加した「二水準派」は、当時まだその分野の駆け出しの人が多かったが、後に経済政策家、経済指導者、経済学研究者として名が知られるようになった（バーデル・グスタフ、ベネデク・パール、ヨナーシユ・アンナ、ナジ・アンドラーシユ、ラバル・フエレンツ、リムレル・ユードット、シモン・ジョルジュ、シヴァーク・ヨージェフ、タルドシユ・マールトン他である）。一級の人材が集められていた。

このような場合、資金集めが必要になる。省庁を順に回り、セクター・モデルのために金銭支援を獲得した。協力者や「発注者」、つまり支援を考えている省庁の指導部や関心をもって同僚のために、情報プレティンを用意した。この出版物のひとつは、協力者のために、モデルの構成、実行される計算、応用のための理論的解説の詳細な手引きを与えるものだった。もうひとつの出版物は、計算結果を報告するものだった。これらの小冊子の大部分は私が執筆した。この時期、この仕事に関連して私が執筆した報告は、二〇〇〇頁を超える。それらは増刷りされて、国内の経済学者に配布された。

私が指揮した最初のプロジェクトは一九六三年に始まり、五年間続いた*。経済部門計算は大方、順調に進行し、注目に値する結果をもたらした。これに比べ、中央の計算には問題が多か

った。当時の計算機技術では、コルナイ・リプターク・アルゴリズムは非常に遅く、無用に計算時間を必要とすることが分かった。エレガントではあるが効率の悪いアルゴリズムに代えて、粗野なアプローチ手法を採用せざるを得なかった。

* 国民経済計画化の最後の増刷りプレティンは一九六八年に発行され、計算結果を公表した。この最初の実験プロジェクトが終了した後は、この仕事に直接加わることはなく、一緒に仕事をした同僚がこれを指揮することになった。

さらに、もうひとつ別の、小規模な総括国民経済計画化モデルもまとめ上げ、種々の計算を実行した。大規模な二水準モデルの計算結果が遅れるなら、せめてこの小モデルで線型計画法の有用性を計画者に見せておくというのが、その作成目的だった*。

* 後に私の二番目の妻になったダーニエル・ジュジャ（当時は、ウーイラキ・ジュジャ）と一緒にモデルを構成し、その結果を公表した。この仕事を通して、親しい間柄になった。私にとつて、数理計画化に費やした歳月が実り多いものでなかったとしても、これだけで十分に価値があった。

何年も経過し、データ収集や計算技術の困難に何度も遭遇す

る中で、次第に初期の情熱が薄れていった。一時の熱狂的な集団が次第に先細り、残った者も草臥れてしまった。誰もが、すべてを捨て去って離れるのではなく、何か意味ある終焉を迎えたいと考えていた。しかし、計算の最終結果はあまり芳しいものではなかった。国民経済計画の数理モデルと電子計算機による計算によって、科学的要件を満たした土台を構築したとは言えなかつたし、我々もそれを言わなかつた。

プロジェクトの終わりが近づくと、成功と失敗の経験が一度に現れたような混乱した状況になった。この仕事に参加したすべての人が一堂に会して、経験をまとめて評価することは一度も行われなかつた。この膨大な仕事の諸結果は、皆それぞれが自分の研究の中で公表した。私も多くの論文を書いた。私の観察と結論の一部は数理計画に関する著作に収めた。その第二版では国民経済計画モデルとその計算結果、ならびに若干の経済学的教訓を報告している*。

* 『経済構造の数理計画化』と題する著作の第二版が一九七二年に出版された。ここに挿入された補遺を国民経済計画研究の一部とみなすと、ほぼ一〇年にわたってこの研究にかなりの力を注いだことになる。

意味有りや？

私だけでなく多くの協力者が膨大な時間と労力を投資したこの巨大なプロジェクトを、現在の視点からどのように評価できるだろうか。この仕事を始めた時に期待していたものと実際に実現したものとを、ひとつひとつ検討してみたい。以下の分析は主として国民経済水準のモデル化にかかわるものであるが、一部は数理計画に関する研究にもかかわっている。

事前的期待のひとつは当時の政治環境に関係している。前章末に記したように、一九五〇年代末になって、『過度集権化』に始まる実証研究の継続が袋小路に入ったと感じていた。

経験が既存の経済管理レジームの鋭利な批判を導くとすれば（実際にもそれを導いたはずだが）、これを出版できるはずがなかった。数学的手法の応用がこの袋小路からの脱出を約束していた。数学的言語は、研究所や出版社、あるいは雑誌編集の仕事を政治的に監視する機関や党本部の担当者には理解不能だ。手稿にちよつとした数学公式があるだけで、彼らはすぐに読むのを止める。数学言語は政治家や「ブルジョア経済学」を監視する者の眼から守る、ある種の保護を意味する。数学的形式主義は政治的な中立性の印象を醸し出すのである。これはある程度まで当たっており、公式や方程式、幾何学図形に最初から

「党の見解」など付されていない。だから、研究のこの領域は比較的安寧を約束する場であった。

この期待は実現した。数学手法を使った私の研究には、誰も政治的な視点から介入することはなかった。監視者がいたとしても、適切なテーマを選択することで、簡単に煙に巻くことができたと言えるかもしれない。これは今でも心地よい。

数学的手法の応用にかかわる私の研究方向として、何よりもまず自己研鑽を行い、近代的な経済科学を我が物にしたいと考えていた。そして、この期待は十二分に達成された。

この仕事では自分が学ぶだけでなく、教えたいとも思った。この面では、実際に実現できただけでなく、私の希望以上のものを叶えてくれた。大学の教育からは排除されており、弟子をもつ形式的な資格がなかった。しかし、大きな、それも当初の構想を超える大きな研究チームを指揮することで、教育することが可能になった。もちろん、公式の「教員・学生」という関係ではない。研究チームの同僚の一部は私と同年代か年長であったし、形式的に私が上司だった訳でもないが、この仕事の枠組みの中で私が彼らを指揮することを、皆が自発的に受け容れていた。私が彼らに多くの思考を仲介できたと考えている。部門の国民経済計画化は、私だけでなく、彼らが現代的なミクロ経済学を知りそれを我が物にするのに大いに寄与した。

経済計算と研究における数学手法の応用は、狭い意味での

「方法的」試みに留まるものではなかった。現実と対峙することで、精神的な運動へと広がった。この独自の運動において、我々「二水準派」はひとつの核を形成していたが、別のグループ（「投入産出」派、計量経済学者、オペレーションリサーチ研究者）も存在していた。もちろん、相互に重なりあっていた。多くの人がそれぞれのグループ創設の理念を実現する方法論やテーマを、重複して扱っていた。彼らすべてに共通していたことは、一九五〇年代における転換、つまり空虚な「政治経済学」から精密で現代的な経済科学の成果習得への転換であった。一緒に会議を開いた。何人かの同僚とともに、ハンガリー経済学会数理経済専門部会を設立した*。

* この頃には国際計量経済学会の運用規則を知っており、これをモデルとして、会長を無期限に任命するのではなく、一年ごとの選挙にすることを主張した。そしてこれが実現したのだが、ただ我々の専門部会だけのことだった。最初の部長だった私も、その後を継いだ人も、一年だけ務めた。このローテーション方式は上部機関であるハンガリー経済学会の指導部には不評だった。その会長はいわば終身ポストだった。担当の政治組織が問題ないと考えている間は、そのポストに留まり続けることができる。数年経て、この慣例が数理経済専門部会にも押し付けられた。

既述したように、私は西側の専門世界の一員になりたかった。

この点では、私の期待を超えて事態が進行した。西側の強い潮流の中に組み込まれていくと感ずることができた。この時期はまさに、フランス、オランダ、スカンジナビア諸国や他の先進諸国で国民経済計画目標が作られ、数学的モデルが使われ出した時代だった。発展途上国を扱っている経済学者も、こぞって計画モデルを作った時代である。インド、メキシコ、トルコなどのモデルが、現地の研究者とともに作成された。インドでは国家計画委員会が設置され、数理経済学者が大きな影響力をもつ役割をになった。

ハンガリーの計画モデルも、西側で大きな注目を浴びた。ランゲーマランヴォー・モデルとコルナイ・リプターク・モデルの理論比較という視点だけでなく、実際への応用面で、フランス、オランダ、インドのモデル構成、データ収集、利用の経験をハンガリーのそれと比較するという意味があった。こうして、我々の仕事は国境を越えて評価され、大きな精神的成果として認知された。

事前の期待と実際の成果の比較という視点でみると、「果たして、我々が導入した方法論が、計画の実践に貫徹することに成功したのだろうか」という問題を提起しなければならぬ。これまで述べた肯定的な諸条件にもかかわらず、この回答ははるかに明瞭性を欠くものにならざるをえない。

まず成果であるが、国家計画庁や省庁で以前から投入産出分

析の計算が行われていたが、その計画化手段に線型計画法が加わった。これらの手法を応用する課あるいはグループが設置され、そこでの計算結果は日常的に計画化機構の指導部に提出されるようになった。彼らはこの取得した数値を検討していたと思うが、どれほど受容されたのか、答える術がない*。

* 私の仕事は一九六〇年代末から別の方向に転換した。したがって、以後の歳月の経験を直接に述べる立場にない。私が体験したものでより良好だったかもしれない。PCの普及や性能の向上によって、数理計画化の役割が強まったはずだ。しかし、これはもはや決定不能になった。というのは、体制転換によって、中央計画化機構が解体されてしまったからである。

次に失敗であるが、私が内部から状況を観察できた限りでは、数理計画化は伝統的な計画化の官僚組織には異質の器官で、そこに組み込まれることがなかったという印象をもっている。国家計画庁や省庁の多くの上層指導者は我々の仕事に親近感を抱いていた。我々の仕事に後光が差している時もあった。数学や電子計算機を使っているのだから、計画化を科学的で近代的なものにするという印象を与えた。ならば、何が問題だったのだろうか。

すべての問題は、二水準計画化の理論モデルを紹介した時に

扱った問題に関係している。理論モデルがその本質的な特徴において現実と乖離しているだけでなく、モデルの計画化目標への応用もまた、現実の社会主義計画化の日常的慣習と調和していないのである。数学モデルに依拠して計画化を実行する場合には、次の諸条件が満足される必要がある。

1 経済政策の意図を明瞭に宣言しなければならぬ。そして、その意図や目標が変化する度に、改めて計画作成の仕事を始めなければならない。しかし、これを進んで行おうとする政治家はいるだろうか。政治家は二重解釈で得をしない一般的な目標が相互に矛盾しても構わない。掴み所のない一般化でまとめることを好む。経済政策目標の相対的なウェイトや優先順位を数値的に示すことを好まない。しかし、これらは皆、計画化モデルの目標関数に数量的な形式で表現される情報だ。これらの数値は事後的に求めることができるので、政治家はこれを事前に与えるリスクを負わない。

2 国民経済計画化の資料を集め、その部分的な成果を見た時に、「機関や個人の数ほど、受け取り方が違っている」ということを体験できた。我々の計算が運良く実現したいものを支持する結果をもたらした時には、素直に喜ぶ。しかし、そうでない場合には、モデルが現実を単純化しすぎた（これは真実）、あれこれを無視していた、データの信

頼性が欠けていた（これも真実）等々と、冷笑する。

3 多くの場合、経済政策の努力方向を表現する「目標」と諸決定を規制する「限界（制約）」を区別する必要があること、経済政治家やそれに奉仕する計画者に理解させることは難しい。上述した第1点に指摘したように、インフレの減速より成長が重要だとか、その逆を明言することを経済政治家は好まない。むしろ、それら二つとも目標にする。モデルの数学的構造から見て、難しいことは何もない。モデルではこの種のマクロ経済政策的意図も、数学的な意味で、「限界（制約）」として記述しなければならぬ。ただ、これらの経済政治家が構想する恣意的で「主観的」な制約が、相互に調和していて、同時に達成可能であるかどうかは不確かである。さらに、それが外的な環境（たとえば、自然資源、生産能力、労働ストック、輸入制約）を反映する「客観的」な制約と矛盾しないかという問題もある。

4 我々自身、計算機に投入したデータを十分に吟味しなかつた。ハンガリーの計算機技術者のスラングにあるように「我々を食わせようとする、つまり数字を食わせようとする」。実際、彼らは推計にどのような計算を用いたかを話そうとしなかつた。「チーズのラベル」の上に数字を書いたりしたことなど、隠していた。このように出てきた数字が、資源の取得と産出義務の決定をめぐる交渉で、計画者

の交渉武器になっているのである。

5/6 二一世紀の計算機をもってすれば、計画化のリズムを保てたかもしれないが、当時は不可能だった。計算は常に遅延した。このような場合、厳密な方程式体系を計算するより、ちょっと一瞥して、計画者のルーティンに依拠して、計画バランスを「推し量る」のである。

これらすべての困難は共通の源泉をもっている。社会主義の計画化はいわば魔法使いの台所のようなもので、調理師たちはそこで何が行われているのかを外部の者に見せない。公開性と明瞭性を許容しない。数学モデルは彼らに規律を強いる。加算しなければならぬ所は厳密に加算し、減算しなければならぬところは厳密に減算しなければならない。しかし、これが彼らにとつて受け容れ難いのである。

この問題を今の頭で考え直してみると、既述したハイエク・タイプの議論に辿り着く。すべての知識すべての情報を、単一のセンター（中央）、あるいはセンターとそれを支えるサブ・センターに集めることは不可能だ。知識は必然的に分権化される。情報を所有するものが自らのために利用することで、情報の効率的な完全利用が実現する。したがって、分権化された情報には、営業の自由と私的所有が付随していなければならない。もちろん、最後の断片まで情報を分権化する必要はないとしても、可能な限り分権化されているのが望ましい。

ここで我々は、「社会主義中央計画化の標準的な機能のひとつとして、数理計画化が有効に組み込まれないのはどうしてだろうか」という問題を越えて、「所与の社会主義政治・社会・経済環境の中で、中央計画化が効率的に近代的に機能しないのはどうしてだろうか」という一般的な問題に辿り着く。

計画化に携わる諸機関の壁の内側で、長期間のインサイダーとして仕事に従事してみても、結局のところ、中央計画化思想が強められたことがなかったし、逆にそれから離れることになった。すでに一九五六年には官僚的な集権化に立ち向かっていたこの時は、「下から」企業とその直接的な管理の下級当局のレベルで、問題を探求していた。そして今、一九六三—一九六八年の期間には、何が起こっているのかを「上から」知ることになった。その結果、社会主義の信奉者が唱えるような期待は、どのような現代的な技術を使っても、社会主義の計画化では実現できないという確信がより深まったのである。

期待と成果の比較対照を終えるにあたって、まさにこの計画化の可能性信仰について今少し考えてみたい。社会主義が多くの人を引きつけるのは、先を見通した意識的な計画化の可能性である。恣意的で盲目的な力（市場）に替えて、人間の意思が経済を制御するという考えは魅力的だ。一国規模の計画化の成功は、人間の合理性への信頼を証明するものになる。それだけではない。社会主義国で行われた国家計画化は、その思想や希

望を現実化しようとする人類の歴史上例をみない大胆な試みだった。

記憶を辿りながら、共産主義思想やマルクス主義理論から段階を踏んでどのように決別したかを説明しよう。数理計画法に従事している時には、すでに政治的な決別は完全だったし、マルクス主義政治経済学からも距離をとっていた。しかし、なお投資資源の配分や経済の長期的発展構造の決定において、中央計画法が効率的で先進的な役割を果たし得ることに期待を抱いていた。とりわけ、現代的技術（数学的モデルと計算機）があれば、なおさらのことと考えていた。その期待が失望に変わり、愕然とした。

この失望感が、計画者と共にした時間に多くのことを学んだという意識と混ざり合っていた。これは文化人類学者が研究対象になる人々と一緒に何ヶ月も一緒に暮らすのと似ている。社会主義システムを内部から知ることになったのだから、私の仕事は空虚なものではなかった。この観点から見れば、国民経済計画法の大プロジェクトは、私にとって計り知れない価値のあるものだった。

ここで、私の履歴の報告を中断して、ひとつだけ注釈しておきたい。今、二〇〇四年の現在、計画法の可能性についてどう考えているかを記しておきたい。残念なことに、共産主義制度の失敗が計画法思想を失墜させてしまった。ハンガリーの計画

庁やソ連のゴスプラン、あるいは他の社会主義国の計画法機関が解体されただけでない。ソ連圏以外でも、計画法に関与していた機関が邪魔者扱いされたり、影響力を失ったりしていった。現在でも、国民経済計画法にファンタジーを抱く者が、共産主義者やマルクス主義思想の受容者になる必要はない。財政年度を超えた長期の計算をおこなったり、一国の将来的発展の選択肢を広げて見せたりする試算が必要なはずだ。この種の計画法を実行したからといって、その計画を指令でもって強制する必要はない。こうした代替的發展経路の計算が、政治家や経済的利害の代表者の思考や議論の基礎として役立つだけで良い。これは当時、ラグナー・フリッツシュ、ヤン・ティンバーゲンや一九六〇年代のフランスの計画者たちが考えていたものと同様で、共産主義経済の「命令的」計画に替えて、市場経済に適合した「指示的」計画を推奨するものだった。遅かれ早かれ、共産主義制度の枠組みで行われた古いタイプの計画法の悪夢が忘れ去られれば、計画法思想のルネサンスが始まるだろう。その時には、かつての数理経済計画者が収集した経験が何かの役に立つだろう。

数学者との協働

再び、個人史に戻ろう。一九六五年論文の後も共同研究を進

めようと、私もリプターク・タマーシユもいろいろ試みた。しかし、これは実現しなかった。タマーシユは日増しに重い精神障害に冒され始め、それが研究能力を浸食していった。「二水準計画化」以後は、私とも、また他の研究者とも、かといって一人でも、意味ある仕事を創作できなくなった。私や友人たちが、食いつなげる仕事（少なくとも所得を稼げる仕事）を与えようとした。しかし、イギリスに亡命してしまった。最初は我々も、イギリスでそれなりの名声に因應だけの研究成果を上げるものと信じていた。しかし、後になって、その希望を捨てなければならぬことが分かった。天才的な魂が生産的な活動をおこなう力を失ったのだから、後はイギリスの福祉国家が与えてくれるサービスの世話になることで安堵するしか方途がなかった。一九九八年、ブダペスト訪問中の事故で逝去した。

数学モデル化を始めた時には、この種の課題は経済学者と数学者との協働によって解決されることは自明のように思えた。タマーシユとの協力関係では、たんに二つの専門分野が相互に補充するのではなく、二種類のデイスイプリンに影響を受けた二種類の思考法が幸運な補充関係で結ばれていた。数学では抽象化の究極まで数学者を追い込むとすれば、経済学者は繰り返し現実世界を凝視するように習慣づけられている。もちろん、最高度の抽象化能力と最高度の現実感覚がひとつの頭脳に共存していることが理想である。しかし、これを期待するの

は難しい。

リプターク・タマーシユとの協働関係が絶たれてから、他の数学者や数学専攻出身の数理経済学者と種々のテーマで一緒に研究したり、共著で出版したりした。ヴェルリツシユ・ピーテル、ドウムオルク・バーリント、マルトシユ・ペーラ、ユルゲン・ヴァイブル、シモノヴィッチ・アンドラーシユの面々と、実りある共同研究関係が築かれた。これらすべての協働において、経済学者と数学者の視角と知識の相互補充が有効に貫徹した。

後に西側世界の経済学研究を身近に知るようになった時に、私が自明なものと考えていた協働関係はもはや存在しないことが分かった。経済学者になろうとする者は、先端の数学的手法を使った著作を生み出せるほどの数学知識を習得していなければならぬ。共同研究の場合でも、著者は皆、「二分野の専門」研究者、つまり高い水準の数学手法を応用できる経済学者なのだ。

この状況は多くの利点をもっている。私は弱さを美德にしたくない。私は洗練された数学手法を一人で使う自信を与えてくれるような「正式な」大学院教育を受けなかったことで、何度も苦い思いをした。今、例外なくすべての経済学者が「自力」で数学に立ち向かうことに、デメリットもあるだろう。自らの数学知識が枯渇するところで、研究の限界が引かれるからであ

る。「プロ」の数学者なら、この限界はいかにも狭いと主張するだろう。数理経済学の「技術的」限界を決めるのは、多くの場合、元々が数学出身か数学を本職とする研究者である。ノイマンやナツシュを考えて見ればよい。数学に明るい経済学者にとっても数学面で難しすぎる問題があるだろう。しかし、それを解決できる数学者が見つかるだろう。

現代では学際研究の重要性が叫ばれている。将来、「コルナイーリブターク」型の経済学者と数学者の協力形態のような多彩な経済研究に道がないか、考えてみる価値があると思う。

第9章 西側への旅行（一九六三年）

一九六三年夏、とうとう私の願望と希望が実現した。イギリス・ケンブリッジの会議へ出かけることができたのだ。そこに至るまで、多くの出来事があった。

先行した出来事

『過度集権化』がイギリスで出版された時に、LSE (London School of Economics) の経済学科長、エリー・デヴォンズ教授が、イギリスの日刊紙 *Manchester Guardian* に一面の賞賛記事を寄稿した。彼の発案で、一九五九年にLSE訪問の招待を受けた。講義とセミナーを担当して欲しいということだった。それ以外のオブリゲーションはなかった。

人生で初めての西側学界からの招聘に身震いした。すぐにパスポートを申請したが、長く待たされた後に却下された。何度もイギリス行きの申請を行ったが、その度に却下された。

一九六二年、政治的抑圧が緩和されたことの証として、国外旅行が許可された。だが、西側にはなく、他の社会主義国へだ。軽工業で仕事をしていた友人たちのお陰で、東ドイツ、ポーランド、チェコスロヴァキアの会議に出席して講演した。これは外国での最初の学問的デビューだった。

一九六二年に、国際経済学連合 (IEA、International Economic Association) から、一九六三年にケンブリッジで開催される円卓会議への招待状が送られてきた。テーマは、「長期における成長と計画の活動分析」であった。当時、線型計画法やこれに近い数学的技術の経済学への応用を、「活動分析」(activity analysis) と呼んでいた。フランスのエドモンド・マランヴォーが会議の組織者の一人で、前章で既述したように、*Econometrica* の編集者としてリプターク・タマーシュとの共同論文を承知していた。リプタークも招待されたのだが、「犯罪歴」のために、彼はパスポート申請すらしなかった。今

度はLSEではなく、IEAの招待状をもとに旅行許可を申請した。そして、許可を取得したのだ。

英国ケンブリッジ

五年の待機の後に、とうとう遮断機が上った。とくに嬉しかったのは、友人のナジ・アンドラーシユも招待されたことだった。二人で研究所を追放されたが、今度は二人でイギリスへ旅立つことになった。

一九六三年七月にロンドンに到着し、次の日にケンブリッジに向かった。クラウ・カレッジで会議が開かれ、そこが宿舍にもなった。ケンブリッジは学問に飢える若い研究者にはパラダイスのように思えた。均斉がとれて落ち着き並ぶカレッジの建物の巡りを散策した。それから、有名なカレッジを順に見て回った。キング、トリニティなどを見学したが、どのカレッジにも四角形の中庭には彼の有名な芝生が敷き詰められていた。これ以後、何度もイギリスを訪れることになったが、今でも、見事な建物や公園に囲まれたイギリス・ケンブリッジは世界でもっとも美しい場所のひとつだと思う。虐げられた街ブダペストから、安寧と平和を醸し出すこの街にやってきた。

IEAの円卓会議は小規模の集まりで、それぞれのテーマについて最良の専門家を集めたものだった。講演者の何人かを列

挙すると、モリス・アレ（後にノーベル経済学賞）、シユクハモイ・チャクラヴァルティ、ロバート・ドーフマン、フランク・ハーン、レオニード・ハーヴィッツ、タイリング・クープマンズ（後にノーベル経済学賞）、ライオネル・マッケンジー、ロイ・ラードナー、リチャード・ストーン（後にノーベル経済学賞）となる。この時、すでに何人かの著作を読んでいたので、参加者の大半の名前は文献リストから知っていたが、実際に実物を見るのは私にとって特別の出来事だった。その他の参加者がどれほど優れた学者であるかは、後になってようやく知ることになった。

講演や討論の水準は非常に高く、ブダペストのそれと比べものにならなかつた。私に対して皆、友好的に接してくれたが、最後まで不安でいっぱいそのまま席に座り続けていた。このような仲間内に入れることはけっしてないだろうと感じたものだ*。

* このパラグラフを書いているその時に、私があの歴史的な一九六三年会議を開催したIEA会長を務めている。感慨無量である。

当時はまだ、英語で講演する自信がなかつた。ドイツ語で話し、公式通訳あるいはクープマンズやハーヴィッツなどドイツ語を解する経済学者が通訳してくれた。講演前⁽¹⁰⁾はとても緊張した。（講演前の緊張は、以後も私の仕事には付き物になった。

ライブで自分の思考を話せるのはたいへん楽しいことだが、毎回、そこに至るまでに払う代価は小さくない。

会議は思考を覚醒させる興味深いテーマで溢れていた（この会議の資料は後に書物として発刊された^(四)）。この時初めて、前章で触れたマランヴォーの計画化モデルを知ることになったのだが、会議では我々の二水準モデルと比較対照された。

学生寮に宿泊することになったが、ブダペストのいわゆる人民寮の窮屈な部屋に比べると、小綺麗な家具付きフラットのようだった。ある朝、クープマンズとハーヴィッツが私の部屋を訪れた。研究のことや国内情勢のことなど、すべてのことを語り合った。これがクープマンズとの最初の出会いで、友人として受け容れ、以後、私の仕事に対してさまざまな支援を差し伸べてくれた。陽気でジョークを飛ばし、すぐに仲間になるようなタイプではない。オーブンかつ直截で、真剣だが感傷的ではなく、深いヒューマニズムに満ちた思考の持ち主だった。自らの言葉ではなく、会話の相手の話すことを重視していた。何の予見もなく、話し手を注視する。この態度は今でも変わらない。

この会話はある意味で「口頭試問」のようなもので、私にはこれ以上の素晴らしい先生を選べるはずなどなかった。同時に、お互いを知り合う機会でもあった。オランダ生まれのクープマンズはティンバーゲンのところで研究を始めた。ハーヴィッツはポーランドのオスカー・ランゲの助手だった。二人ともアメ

リカ生活は一〇年以上続いていた。多分、彼らにとって、私が鉄のカーテンから来た初めての人物で、英語はブローケンだった^(五)。たが、ともかくひとつの言葉で話し合うことができた。彼らにとっても、この出会いが興味深かったのだと思う。

夕方、会議参加者のレセプションがカルドア・マイクロシュ宅で開かれた。（彼のことは第1章で紹介した）。インドのスクーフを巻いてジョーン・ロビンソンが現れた。二〇世紀の経済学を代表する一人で、不完全競争理論の泰斗である。読書からその名を知っていたが、^{*}ここでも伝説的人物に会うことができた。

* ジョーン・ロビンソンは常に至るところで旋風を巻き起こしていた。歳をとつてからは、熱情的で偏見のある毛沢東主義者になった。一九七七年、ハンガリー人の小さなグループがカルドア宅に集まった。シトフスキーと夫人のエリーザベト、私と妻のジュジャだった。ハンガリー語で話が弾んでいたところに、いきなりジョーン・ロビンソンが入り込んできた。彼女はカルドア宅の常連客だった。我々はしばらくハンガリー語の会話を止めなかった。ロビンソンはしばらく我慢していたが、命令調で「コルナイ、私と一緒に来なさい」と声をかけた。私はハンガリー人のサークルから引き離され、近所にある彼女の家に行き、中国について話し合う破目になった。彼女が何としても私を説得したかったことは、中国が共産主義へ向かう真の道を歩んでいるということだった。

彼女の言に従えば、党と国家の役人は、「自発的に人民に奉仕して」おり、ソ連のように物的刺激で動いていてのではない。それへの反論や東欧の経験など、関心がなかった。

会議の後、ロンドンに戻った。LSEを訪問した。招聘状の発案者デヴォンズ教授はダイレクター（LSEでは学長のことをこう呼んでいる）のスイドニー・ケイン卿に私を紹介した。スイドニー卿はワイシャツ姿で、シャツの端がズボンから出ていた。これは私にも度々あることだが。気が付いたり、誰かが声をかけたりしてくれば、私はそれを直すのが、スイドニー卿を思い浮かべると、それも気にならなくなる。

何も起こらない限り、翌年にロンドンへ来ることで話が付いた。

ロンドン経済大学

こうして、一九六四年春に、列車でロンドンに到着した。あまりの興奮に、ヴィクトリア駅で書類カバンを置き忘れてしまった。二、三時間経ってから気が付いた。急いで戻ったら、置いたところにカバンがあったのだ。これでイギリス人への信頼感が増した*。

* 以後もよく物を置き忘れた。私の場合、これは老齢化の兆候ではなく、持つて生まれた資質なのだと思うと安心する。

次の日にはもう大学にいた。ほどなく講義を始めた。計画経済と数学的手法の応用について、一連の講義をした。私の印象では、難しかったと思うが、私の英語や話は理解できたようだ。一〇―一五名の小さな大学院生のグループが、講義に関心を寄せているのが分かった。そのうちの何人かは私の研究室にやってきて、コースで取り上げた話題について話し合った。その一人がマイケル・エルマンで、彼は初めから大きな関心を示していた。当時から鋭い思考の持ち主だった。後にアムステルダム大学教授になったエルマンとは、同僚・友人関係が続いた。

西側の若い研究者にとつて、教育活動を始めることに特別な問題は生じない。学生として、大学で行われる教育がどのようなものを分かっているからである。しかし、私はハンガリーでも外国でも、経済学の学生だったことがない。にもかかわらず、今ロンドンでいきなり教員の仕事に加わった。これは本当に難しい仕事だった。教育手法を自分で編み出さなければならなかった。

多くの体験があつた。LSEの教授や外国の客員教授の講義をたくさん聴いた。当時、A・W・フィリップス（フィリップス曲線でマクロ経済学に名を残している）も講義していた。ロ

ーレンス・クラインやロバート・ソローのアメリカ人大学者二名の客員講義は、学生たちで溢れていた。この数ヶ月は、世界のこの場所で経済学教育がどのように行われているかを知る最初の機会になった。

たくさんのことを学んだが、本当のことを言えば、非常に孤独に感じていた。学生からは歳が離れていたし、かといって教員として誰とも交友できる訳ではなかった。教員との関係が全体として緩かったのかもしれない。ただ、LSEのソ連専門家で、ポーランドから亡命したアルフレッド・ザウバーマン教授が友人仲間に入れてくれた。もう一人、スコットランドを訪問している時に友情関係を結んだ人がいる。ソ連の歴史と経済で世界的に知られた専門家であるアレック・ノーヴと知り合った。温かい心の持ち主で、ユーモアに溢れ、とても親切だった。後に度々出会い、議論した。当時、彼は「現存」している社会主義ではなく、「実現可能」な社会主義を固く信じていた。我々東欧の仲間内の多くがこの思考に失望していた時だった。LSEには同胞のラカトシュ・イムレが教鞭を取っていた。当時すでに、ロンドン大学でも多くの人がこの才能ある知識人に注目していた。後に世界的な名声を得て、今日に至るまで科学理論の大家として知られている。ブダペストで彼の話は聞いていた。ブダペストの共通の知人からその特筆すべき才能のことでだけでなく、政治的な過去の悪い噂も聞いた。私はその過去

の話を知っていると考えたのかもしれないし、たんに私に親しみを持たなかったのかもしれない。一、二度、ちょっと挨拶しただけで、以後、私を避けていた。

幸いにも、ラカトシュのケースは例外的なものだった。外国旅行ではいつも、ハンガリーから亡命した同僚たちが私に目をかけてくれ、仕事や生活を助けてくれた。ハンガリーから来たと言えば、もうそれだけで連帯と支援を享受できた。温かい友情を育んでもらった人々を上げておきたい。バラツシャ・ペーラ、バロー・タマーシユ、フェルナー・ヴィルモシユ（ウイリアム）、ハルチャーニイ（ハルサーニイ）・ヤーノシユ、カルドア・ミクローシユ、クウォント・リハルド（リチャード）、シトフスキー・テイポール、そしてヴィエトリス・タマーシユである。

もちろん、イギリス滞在は専門家との出会い以上の意味があった。ロンドンへ旅行するのは、長年の夢だった。子供時代の愛読書のひとつが、*Hullo, it London* と題する書物だった。この書物から有名な通りや広場、歴史的な建造物や記念碑の名前を知っていた。それらが眼前にあつたのだ。

不足経済で過ごした歳月の後だから、ピーテル・ジョルジュやギメシユ・ミクローシユが圧倒された豊かさ、その経済と安寧に驚きを禁じ得なかった。すでに一九六三年のケンブリッジへの旅で、僅かな瞬間ではあつたが、イギリスの生活を垣間見

ることができた。そして、今、ロンドンで数ヶ月過ごすことになった。もちろん、旅行する前からイギリスとハンガリーの生活に違いがあることは分かっていた。しかし、本で読むのと知人から聴くのが違うように、近くで見ると日常生活の中で過ごして見るのも違う。本当に、ここから私の仕事を特徴づけている「比較経済学」のアプローチが始まったと言つてよい。このアプローチは二つの制度を理論的統計的に比較するのだが、その背後には、思考の覚醒と確証を伴う、双方の制度での直接体験という個人的な知的遭遇がある。

諜報部員の報告から

四〇年前の出来事を記した後、秘密警察の書類が入手できた。そこから多くのことが分かった。私の旅行に関連して、私の知らない所や秘密警察の事務所で行われていたのか。

バーチカイ・タマーシユは経済学者の諜報部員として、政治警察に奉仕していた。私が入手した報告は私のことをこう記している。^馬「およそ一ヶ月前、コルナイ・ヤーノシユと話した。

彼はマルクス主義者ではないと表明した。……たとえば、労働者階級の絶対的窮乏化を受け容れない、労働者階級の指導的役割を受け容れない……国家の経済に対する指導的役割を受け容れない……」。

本書のための資料収集に際して、多くの諜報部員の報告を読んだ。報告には一定の形式があるようだ。政治警察の担当官が報告を評価し、エージェントに与える指示を付加する。上記のバーチカイ報告に対する担当官の注釈は次のようになっていた。「決済・コルナイが秋にイギリスに渡航しようとしている件。

評価・コルナイが修正主義的見解を放棄していないことを暴露しており、この報告は価値がある。もしそうであれば、イギリスに旅行するのは我々にとって良いことではない。コルナイを容易に懐柔し、スパイにすることも可能だからである。

指示・コルナイと話し、どの点でマルクス主義に同意できないのかを明確にすべし」。

バーチカイのファイルはかなり分厚い報告集である。^{*}彼の同僚、友人、親戚・縁者には経済学者、文学者、映画人がいたが、それらの人々について報告したものだ。実父や妹との会話から得た情報も利用されていた。バーチカイは狭い意味での友人仲間ではなかったが、長年にわたつて友情関係を結んできた仲間だった。

* ラツイック・エリカ (Laczik Erika, 2005) の記事がバーチカイ・タマーシユの諜報活動を開示することになった。およそ五年前、一九五六年一月二十九日から一九六一年八月一六日にわたつ

て、諜報活動に従事していた。この記事はパーチカイがどこから情報を入手し、誰について報告していたかを詳細に伝えている。

この記事が出て、パーチカイは諜報部員だったことを公に認めた。

イギリス旅行許可に関連した警察の文書を、私の仮説で補足してみたい。革命の壊滅から始まったカーダール体制の暗黒の抑圧時代は一九六二—一九六三年のアムネスティまで続き、政治警察が幅を効かせ、私のパスポート申請却下のようなことがまかり通っていた。抑圧のネジが少し緩められ、西側向けに友好的な顔を見せようとしていた時に、硬直的な警察の見解の頭ごしに新しい文化・対外政策が決められ、我々の出国が認められた。もちろん、秘密警察は、後で見えるように、引き続き私を監視していた。

ロンドンでかつての新聞記者の同僚R・Rと会った。その時まで一七年の友人関係が続いていた。彼はハンガリーの新聞の特派員としてロンドンで働いていた。彼が表明した政治的見解のほとんどの点で、意見が分かれた。にもかかわらず、我々は友人だと思っていた。獄中に繋がれた友人たちの家族のためにお金を集めた時も、彼に寄付を求め、彼もこの人道的支援のためにお金を出してくれた。

ロンドンでは何度も会って、長話をした。車で遠出に連れて行ってもらった。土産屋でアフリカの木材から彫られたレリー

フを買う時に、一緒に付いて来てくれ、どこが安いか教えてくれた。彼はこの種の収集狂だった。

最近になって警察や諜報機関が作成した私のファイルを手にして、私の見解や会話を詳細に記述した報告を見つけて驚愕した。⁽¹⁰⁶⁾ その報告は一九六五年に作成された。当時、秘密警察が私の情報を収集する必要があり、ロンドンに常駐するエージェントのR・Rが私を良く知っていることが分かった。そこでこのエージェントが指令を受けた。すぐに引き受け、報告のために、我々の会話を引用したのである。

R・Rは私だけでなく、他の人についても報告している。もちろん、暗号名を使っていた。報告は私の見解を正確に伝えている。美化（カーダール体制の視角からみた「美化」）もしていないが、現状に対する私の反対論を誇張している訳でもない。個人的な会話で彼に話したことが、そのまま報告されている。報告を引用すると、コルナイは「自らを共産主義者とみなさない。……政治に背を向けたがっている。……リ्यूーチェイ・パールの妻を支援するように求めた。……それを非科学的なものとみなし、失敗したと言った。……」。

R・Rに何もかも話す必要はなかったのだろうか。友情を信じなければ、人は誰を信じればよいのだろうか。それとも、共産党への忠誠心より友情の方が強いと考えたのは、ナイーヴで、馬鹿なお人好しだったのだろうか。政治的な見解は違っても、

私は友人だと信じた。しかし、彼は「一九五三—一九五四年は深い友情で結ばれていた。以後、見解の違いから我々の友情は消滅した」と報告しているのである。

厳重に保管されていた文書から、R・Rが誰であるかを正確に知っている。本書で大文字のイニシャルで記された他の諜報部員、裏切り者、秘密エージェントが誰であるかについても、同様である。いずれ歴史の中に登場してくると思う。名前を知っているなら、どうしてそれを記さないのかという疑問があるだろう。

この自伝を著している時点で、ハンガリーの法律は誰が裏切ったか、誰が報告を書いた諜報部員だったかを国民が知る権利を保証している。しかし、その情報を公にする権利を認めていないのである。

* 必要な情報が入手できなくて、この権利を行使できないのは別の問題である。

共産主義体制の崩壊に伴い、秘密警察の文書類をどうすべきかをめぐって激しい議論が戦わされた。Stasi (Ministerium für Staatssicherheit の略称) 文書をすべての人にアクセス可能にする東ドイツのラディカルなやり方に、多くの人が賛成した。ハンガリーでもこの手続きを主張する人々がいた。しかし、

これは問題を決定できる政治勢力の抵抗に出会った。公開討論では法、国家安全、倫理の諸点からの反対論があった。そこには政党の利害関係が反映していたことも否定できない。党の政治家の中には、自分たちが関与していなくても、党の隊列に諜報部員がいることを暴露されるのを恐れただろう。事ある毎に法律を修正して、「諜報活動」に携わっていたエージェントの名前を公表すべきではないかという議論が浮上している。本書を執筆している二〇〇五年二月現在、再び舞台の表と裏で、何が必要で何が許されるか、諜報部員や上部機関、犠牲者や諜報対象者のデータのうち何を公開禁止にするのかをめぐって、議論が続けられている。本書の原稿を提出した段階では、まだ決着がつかっていない。

自分自身に問うてみる。「もし氏名公表の法的障害が取り除かれたなら、公表するだろうか」。法的障害を理由にこの問題を回避しようというのではなく、倫理と感情のデレンマと向かい合ってみたい。

本書の多くの箇所での種の事例が出てくるので、何度もこの問題を考えざるを得なかった。それぞれの事情は異なっている。諜報部員、つまり知人や友人を秘密警察に売った人物が、知らない仲ではなかったとはいえ、その関係が表面的だった者もある。五—一〇人の狭い友人の中に勘定していた者もある。一五年やそれ以上の歳月にわたって、仕事や政治、家族や子供

のことを話し合ってきた会話を思い浮かべてみると、どうして裏切ることができたのだろうかと思う。私だけでなく、他の友人をも巻き込むこの忌まわしい役割を演じさせたものは何だろうか。

私には分からない。西側世界、中でもアメリカで過ごした長い時間の間、私を捕らえた重要な概念がある。due processがそれである。「公正な手続きに付随する権利」とでも訳せるだろうか。疑念をもたれたり、非難されたりした人々には、自らを弁護する機会が与えられなければならない。疑念や非難が間違っているならば、それを排除できなければならない。疑いを晴らす状況があるならば、それを見せる術がなければならない。疑念を持つ者、非難する者は、疑惑を受けた者の自供とは別に、その証拠を見せなければならない。疑いが強い場合であれ、弱い場合であれ、それを明示しなければならない。証人を尋問しなければならない。判決が下れば、それを公表する術がなくてはならない。だが、三〇年も四〇年も経った今、この公正な手続きに付随する権利を誰が行使できるといえるのだろうか。裏切った人の何人かは、もうこの世にいない。

体制への協力を拒否した私の熟慮が、一番重要だったと言おうとしているのではない。私は倫理裁判官ではない。ただ、誰も抵抗できないような手段で、この忌まわしい役割を強いたと断言できるのだろうか。

「諜報部員も犠牲者で、醜い強権的体制がこの役割を強いた」と宣言することで、無条件に免罪することはできない。確かに、何よりも体制に判決を下さなければならない。しかし、これで「すべての人は自らの行動に責任がある」という私の確信をながいがしろにはできない。「否」と言えた人もいた。最初から駄目だと分かっていたから、諜報部員への懐柔工作すら受けなかった人もいる。他方、この逆の事例を一般化することもできない。状況を検証しないで、諜報部員の罪を判定することはできない。

私は判決を下そうとは思わない。復讐という考えは私にはない。諜報部員の名前を公表することは、それ自体がひとつの懲罰だ。私はR・Rその他の諜報部員を罰して、間接的に彼らの家族をも罰することになるような権利を行使したくはない。

この自伝の最初の構想にはバーチカイ・タマーシユの名前はなかった。彼もまた、二文字のイニシャルで触れる予定だった。手稿を準備している時に新聞記事が出て、名前が公表された。その記事は、バーチカイが私についても諜報を行ったことを明記していた。このような状況の中で、もやは「無名性」を保持する意味がなくなった。

ここ数ヶ月の間、新聞記事で、諜報部員の暴露が続いた。このプロセスを倫理的法的に評価することが、本書の目的ではない。暴露キャンペーンに参加する意思は毛頭ない。すでに記し

た原理を再考し、かつ新たに見つかった事実を考慮しても、暴露の権利を留保する。すでに諜報部員として暴露され、当人もそれを認めたケースについて実名を記すことは、これまで記した原理と矛盾しないと考える。

少し回り道をしたが、再度、諜報報告やその分析の思考過程に立ち戻ってみたい。当時の書類を検討する中で、同時に二つの事柄が進行していたことが分かる。ひとつは私が実際に体験したものだ。旅行許可を申請し、それが却下され、その後には許可され、旅行し、再びブダペストに戻ってきた。次はどうなるだろうと、いつも心配していた。これと同時に、私の知らない所で、別の出来事が進行していた。私についての報告が作成され、私の言動に評価が下されていた。私の行動のみならず、思想にも評価が加えられていた。オーウェルの言を借りれば、「どんな思想の罪を犯したのか」を分析していた。

私の旅行を阻んでいた禁止令が解かれた時に、秘密警察とスパイ排除機関（これらの二つの組織はひとつの部局で統一的に機能していた）は、私を諜報部員に組織する必要性を検討したようだ。この提案は私のイギリス旅行の直後に、大使館員で諜報部員の一人であるX・Xに引き継がれた。X・Xがとても慇懃で親しげだったのを覚えている。彼がハンガリー秘密警察のロンドン諜報部員の一人だと考えもしないほど、私はナイーヴだった。⁽¹⁰⁾ 織物店に連れて行ってくれて、割引してもらって素晴

らしいイギリスの綿織物を買ったのを覚えている。^{*}

* 本場に親しげだったので、最初の一九六三年旅行を終えた後、次の一九六四年旅行の前にブダペストから彼に手紙を書いた。またロンドンに行くが、今度はそので語学の勉強をしたいから、どこか良い語学学校を紹介して欲しいと書いた。X・Xの秘密諜報部員ファイルの中に、この個人的な私信が報告に添付してあるのを見つけた時には仰天した。

X・Xは本国からの指示を真面目に受け、私が何者なのか、どんな思想をもっているのかを注意深く観察しようだ。一九六四年三月二六日に作成された文書は、次のような決定を下している。「先の提案にもとづき、X・X同志は対象者（ファイルの標題はコルナイ・ヤーノシュ）の活動での利用可能性を検討した。観察の結果、この人物は組織するのに適していないと判断される。過去の十年に見られた政治的動揺のために、旅行前には、外務省でも我々の部署でも彼を矯正しなかった。旅行後は対象者の行動様式に従って、X・X同志は黒を使っても良いが、ただし大使館の合法的な仕事に関連した問題に限る」⁽¹⁰⁾

ここで少しばかり、説明を要しよう。ハンガリーの秘密警察の独特なスラングである「矯正」や「黒を使う」という表現は何を意味しているのだろうか。政治的情報収集の観点から、西

側への旅行する有用で政治的に忠誠心のある人物を旅行前に「矯正する」。これは職場の人事部で行われる場合もあるし、外務省や警察に出頭させる場合もある。国外でどのように振舞い、誰と密に誰と距離をとるか、どのような情報を取得するかを解説するのである。旅行者が後に体験を報告することが求められる。「矯正」はいまだ公的に組織されたことを意味するものではなく、関係をとつたということに過ぎないが、後にその関係が強まることが予定されている。政治警察や情報機関が旅行者とこのような緩い関係を取るリスクを負うのは、対象者の忠誠心に確信が持てる場合だけである。というのは、西側へ旅行した者が、彼の地で「矯正」内容を暴露するのは困るからである。私の場合、思想警察にとつて（私の自己宣言や諜報部員の報告から）、公式に組織するのが難しいだけでなく、「矯正」にすら不適なほど信頼できないということだ。「共産党の基本理念へ背信」という思想が、組織化されることから私の身を守つた。

もうひとつ、秘密警察スラングの説明のために、ケネディ・ヤーノシュが編纂した「辞書」^(四)を引用しておこう。「黒い」情報収集・諜報部員やエージェントが会話の中で、相手が敵と向き合つて、敵に重要な情報材料を与えていると意識させることなく、有用なデータや情報を得ること。相手は敵の「黒い」意図を知らない。諜報部員やエージェントが会話を企画し、準備する。これに従えば、織物店に向かつてリージェント通りを

歩いている時に、X・Xは種々のテーマで話しかけてきて、結局は依頼者のために私から重要な情報を取ろうとしていたことになる。私がエージェントと向き合っていることを知らなかつたとしても、私から何か役に立つ情報を得たとは思わない。

この時期のもうひとつのファイルを知っている。二度目の招待状をもとに出国願いが政治警察に届けられた時に、私の仕事を良く知っている者（評価報告から分かる）が、私の人物評を書いている。それが秘密警察の内部の者か、あるいは依頼された外部の専門家であるかは分からないが、その内容からして、経済学者の同僚が私の仕事を評価していることは確かである。

次のように書いている。コルナイは、「国内では電子計算機（数学プログラミング）の経済学への応用で、パイオニア的な役割を果たした。これはほとんど西側を源泉とするものばかりで、西側が知らない何かを導出した訳ではない。外国から連続して届いている招待を、国内の業績から説明できない。コルナイが西側に与えられる新しいものは何もない」^(五)。

旅行と外国出版のメモワール

秘密警察の私の仕事に対する専門的見解に含まれている一部の情報は、事実には適合している。当時、西側からの招待が続いていた。ハンガリーの計算機について、西側が私から学ぼうと

したのではないことも事実である。我々の機械は巨大なソ連製のウラル電子計算機で、西側のそれに何世代も遅れていた。私が線型計画法の経済学への応用を西側の書物から学んだのであって、その逆ではないことも事実である。しかし、西側の専門家が会って聞きたいというのは、私が何か新しいことを伝えることができたからではないだろうか。

秘密警察の事務所で私の招待の件が話し合われただけではない。経済学の同僚の間でも、日常会話の話題になった。狭いブダペストの常だが、誰かが噂をすれば、遅かれ早かれ、その話は本人に「木霊こだましてくる」。だから、私の招待のことを「コルナイはとても要領が良い」とコメントしている者がいることを知った。うまく関係を作って、招聘者の知り合いを仕留めた、と。

この判断を検証してみたい。というより、一九六三年と一九六四年の西側旅行の後に、招待状が連続して届くようになったことを検証してみたい。国外への招待が増え、私の国外旅行が頻繁になり、恒常化した。それぞれの研究者がどのような事情で国外に旅行したのか、そのことを調べたこともないので、一般化することなどできない。だから、ここでは私の場合に限って記述する。

例外なく、私への招待は皆、私の仕事への好意的な評価にもとづいている。既述したように、一九六三年のケンブリッジへ

の招待は、*Econometrica* 掲載の論文が会議の組織者の一人であるマランヴォー教授に良い印象を与えたからにはほかならない。LSEへの招待は、オックスフォードから出版された著書が、デヴォンズ学科長の目にとまったからであった。国際計量経済学会 (*Econometric Society*) の一九六六年ローマ総会への招待は、イギリスで知り合ったクープマンズが計画化分科会の組織者で、私の役割が重要だと考えたからである。これに続いて、ヴェネチアで開かれた東西経済学者の集いのセミナーに参加した。この組織者は、『過度集権化』に注目していた*。

* この当時、西側の経済学者は二種類のコルナイを見ていた。ソ連・東欧の専門研究者、ソ連学や比較経済学の専門家には、私は『過度集権化』の著者だった。他方、数理経済学者には、私はコルナイ・リプターク・モデルの著者だった。この時期、ソ連学者は *Econometrica* を読まなかったし、理論経済学者は共産主義経済に関する著作をフォローしていなかった。上記の招待はそれぞれ交互にやってきたのだ。この二種類の視角から形成された異なる顔が統一されるまで、別々のところから招待状が届いた。

この話をさらに続けることもできるが、必要ないだろう。多くの場所に向いたが、一度たりとも、招待状を送ってくれるように依頼したことはない。この話がテーマになると、私は常に若い同僚に、国際的な注目を浴びる機関紙誌に投稿すること

を勧めている。遅かれ早かれその成果が出て、仕事への関心を呼ぶことになる。このアドヴァイスに従った人もいれば、従わなかった人もいる。

今日、政治・ビジネス・文化・学問の世界で、「関係のネットワーク」の重要性が叫ばれている。人生の戦略としてこの「ネットワーキング」を第一義的に考え、多くの良好な関係が生まれること自体が成功だとみなす人がいる。ここで、何が正しい戦略かを議論したくはないし、目的や倫理的視点から可能な戦略を評価したいとも思わない。私にとってひとつひとつの関係の創出はそれ自体で評価できる実績ではなく、研究者活動あるいは教員としての教育活動から副産物として生じたものである。何よりもまず、論文、著書、講演への評価として、種々の人々が私との関係をとってきた。そのうちの一部が同僚的な知人、あるいは教員・学生との関係として残り、また別の一部が友人関係を築いてきた。現在では、この「ネット」は物凄い規模になった。これを繋ぐ糸は百を超え、千に至るだろう。本源的な糸が二次的な糸を生むというように、ある時点を越えると、知人と名声の広がりには自生的なものに転化していく。ここでとくに強調したいのは、本源的関係の「源泉」である。私の場合、これは何よりもまず、学問的な実績が生み出したものであった。

本章の主題である旅行に戻ろう。旅行を列挙したり、旅行体

験を記したりして、読者に余計な負担をかけようとは思わない。(その能力もない。外国から戻って家族や友人に面白可笑しく、観た物を伝えることに成功したことがない)。ここでは、私のすべての旅行に共通している総括的なメモを記しておきたい。旅行や国外での仕事、国外での出版に関連して、私が自分に課した規則のいくつかを紹介したい。

一九六三年と一九六四年の西側旅行以後、私の国外旅行はほぼすべて許可された。(西側の読者や若い世代のために記しておくが、有効なパスポートを持っているだけでは出国には十分でなかった。一回ごとに出国許可を得る必要があった。これを人々は「窓」と呼んでいた)。旅行者が窓を得るためには、特別の申請書の提出が必要で、それには職場の上司、人事課、職場の党書記の署名が必要だった。署名者の好意を期待できる場合でも、この手続きそのものが屈辱的だった。出国許可をもらい慣れている場合でも、「もしかして今度は拒否されるのでは」^{*}という思いが膨らんだものだ。体制転換の後にこの手続きが廃止され、旅行の自由が実現した時には、開放感があった。

* 一九七〇年に国連の欧州経済委員会が主催したブルガリアの国際会議に招待された。この時、出国許可が遅れて、非常に憂鬱だったのを覚えている。本当に、文字通り最後の瞬間に、出発の数時間前に窓が開いた。

旅行から戻ると、必ず上司に「出張報告」を提出しなければならなかった。内容のない形だけのものだったが、最初の西側旅行の時にはこの義務を果たした。しかし、国内での専門家としての地位が固まってからは、もう出張報告を出さなかった。何度か催促されたが、私から報告が出ないものと分かると、担当者は諦めた。空虚な出張報告から何かを嗅ぎつけようという組織に何も与えたくなかったというより、屈辱を感じる義務を履行したくなかっただけのことだった。

招待者が費用をすべて引き受ける場合だけ、外国からの招待を受けた。^{*}私の職場がどこであれ、渡航費用は詰まるところ国家予算で賄うしかない。国家予算を得ることで国民的責任を意識させることはできない。種々の機関の教員や研究者の旅行に振り向けられる予算枠が小さいことを考えた。旅行の希望をめぐって、激しいやり取りが交わされている。外国へ行きたいというのは、当然の欲求だろう。いずれにしても、私はこの予算分捕り合戦には参加しないと決めた。

^{*} 招待ベースではなく、ハンガリーの国家機関が派遣する場合は、この限りでない。たとえば、ソ連とハンガリーのアカデミーが交換研究員の協定を結び、相互に費用を分担する場合がそれである。ソ連の同僚が私のことを知りたくても、直に私を招待することはできなかった。このような時に、ソ連のアカデミーがハンガリー

のアカデミーに対して、私の派遣を要請することが必要だった。

祖国（他の共産主義国）と西側で違った二種類の顔を見せないように努めた。これは簡単ではなかった。西側の自由な雰囲気では自然と言葉も弾むが、脅迫や告訴、諜報や検閲、追求などによって閉塞状況にある所では、同じようには行かなかった。私が「自己防衛」のために規則を自分で決めたのは、こういう理由からである。西側では、聴衆の中にハンガリー秘密警察の諜報部員がいるものと前提して、講演を行った。（これは正しかった。たとえば、今、手にして見られるエージェントの報告の中に、一九八五年にニューヨークで行った講演の通報がある。これについては後の章で詳しく触れる）。他方、自己防衛というより、モラルの観点から考えても、「二面性」を疎んじていた。こうして、自己防衛を意識した講演や論文と、「二水準」との境界が次第に消えていった。こちらで言ったり書いたりしていることと、向こうでやっていることを違わせることに執着していたら、より難しい状況になっていたことは間違いない。

さらに、公開での役割と違い、信頼できる友人のサークル（東でも西でも）ではよりオープンになるように努めたが、東欧での講演や論文が西側やアメリカでのそれと違わないようにした。

「ひとつの顔」を見せるように、すべての著作をハンガリー

語と英語（あるいは別の西欧語）で同時に出版するように最大限の努力をした。もっぱら鉄のカーテンから東側へ、あるいは西側へ向けたような著作はほとんどない。

ここまで端的かつ客観的に、やや無味乾燥的な言葉でまとめた私の決断は、一九六四年から一九八九年の期間でもっとも悩んだ問題だった。この面では、体制転換は私にとって、重石が外れるようなものだった。

謀略の失敗

次に述べる事件は秘密警察の活動を扱った本章で取り扱っておくべきものだ。このパラグラフを書き始めている私の手許には、経済学者ジョン・マイケル・モンティアス（イェール大学教授）から私に送られてきた一九六四年一〇月一四日付けの手紙のコピーがある。奨学金を取得してハンガリーで過ごしたいので、アドヴァイスが欲しいということだった。すでにハンガリー語の勉強も始めていると付け加えてあった。

この手紙には先行する出来事がある。モンティアスの仕事は著作で知っていたが、彼が一九六三年に数理経済学の会議に出席した折、ブダペストで個人的に会うことができた。彼が会議の注目の的になったのは、自発的に、国際的に知られるソ連の数理経済学者レオニード・カントロヴィツチの講演をロシア語

から英語に同時通訳した時だった。講演の後の討論でも、双方の通訳を行った。ここから、経済学だけでなく、特別な言語能力の持ち主であることも明らかになった。この後、ソ連学やソ連・東欧事情の東西の経済学者が集うヴェネチア会議で、もう一度彼に会った。

この手紙の話に戻ろう。この手紙のコピーは私の書簡集から取り出したものではなく、秘密警察のファイルから入手したものである。アメリカの大学教授から送られてきた私信をブダペストで開封し、中身をコピーし、再び封をして、ハンガリー郵便局が何もなかったかのように配達したのである。当時、多くの人がこの種のことを良くある出来事だと考えていたが、今、手に取るほどに明らか事実には特別な感情を抱いた。

当時は、「モンティアス事件」について、ほんの少ししか分からなかったが、今、秘密警察のファイルから事件の全貌を再構成することができる。

モンティアスはアメリカのソ連学の分野で傑出した人物だった。多くが共産主義地域の言語のひとつしか解せないのに、彼は多くの言葉を話し、読むことができた。この時期のソ連学者の多くはソ連や東欧の政治経済状況を良く知る、訓練された経済学者だったが、現代経済数学の形式で表現された理論には不案内だった。これに対して、モンティアスは現代的手法を解する新しい世代に属している（クープマンズとの共著もある）。

モンティアスのブダペスト留学準備を喜んで引き受けた。テーマの選択についてアドヴァイスし、ハンガリーの同僚への紹介も約束した。何度も手紙をやり取りした。モンティアスは研究計画やハンガリーとの関係を記した正式な留学応募申請を提出した。応募申請書の該当欄には私の名前も入っていた。⁽¹³⁾

表舞台では、国際的な科学協力関係規則と慣例にもとづいて事態が進行し、モンティアスもハンガリーの同僚たちも来訪の準備をしていた。他方、この裏舞台では、秘密警察が精力的に動いていた。まず、チェコスロヴァキアから、「モンティアスはCIAのエージェントだ」という確証がある^{*}という警告が届いた。スパイ排除機関は大捕物が始まると意気込んだようだ。

^{*} 今、手許にあるファイルから、共産主義国家の秘密警察が密接な協力関係にあったことが明瞭になった。チェコスロヴァキアの国家安全機関は、一九六三年に当該国に滞在していたモンティアスの住居の自宅捜査を行った。彼のコートから私の名前と電話番号が記されたメモが発見され、これがハンガリーの機関に通報された (IH 1656.02/2-2358, 3p. Kellezés: 1964. május 8. Továbbá IH 34-4-797/1965, 4p. Kellezés: 1965. április 23.)。

来訪の期日が近づくにつれ、次第に多くの人員がこの事件につき込まれた。彼らはモンティアスの応募書類に記された名前

から、関係するハンガリー人研究者の「ファイル」を取り出して準備した。私以外の名前も記されていたが、ここではアルヒーフの検証から、私に関係してどのような行動が取られたかを明らかにしたい。

彼らは一九五六一―一九五九年のファイル、一九六三年と一九六四年のイギリス旅行に関連して秘密警察第III部の種々の課が作成したファイルを取り出し、Z・Z担当長が私に関する総括報告を書いている⁽¹⁴⁾。私に関係して疑われたすべての諸点を列挙している。

秘密警察のファイルを調べている中で、一九六三年の電話盗聴報告が出てきた。当時、私に関係を持っていた知人のリストが出来上がっていた。ブダペストの友人、親戚、経済学の同僚たちの他に、外国人としてデヴォンズやクープマンズがリストに載っていたが、彼らの眼から見て、怪しいものは何も発見できなかった。リプターク・タマーシユがお金を無心したことも記されている。もうひとつ電話の盗聴記録から引用すると、「ヘルガ? オルガ? が金でコルナイを養っている⁽¹⁵⁾」とある。ある女がコルナイを養っている。これはきわめて怪しい。しかし、実際はエルガという優しい知人に、夏の休暇時にお金を貸したのだ。その返済のことを電話で話していた。この暗い事件の中でもまだ余裕があれば、盗聴の馬鹿騒ぎを笑うこともできただろう。

Z・Zの報告に対して、上司が私を「隠し球 (alldoban)」として使うのは適切でないというコメントを手書きで記している。この表現が何を意味しているか専門家に聞いてみた。諜報には信頼できる従順なエージェントが必要で、そのエージェントが監視対象者の個人的信頼を得られることが重要である。このエージェントを監視対象者に「投げ込み」、そこから有用な情報を得るのである。

表舞台に戻ろう。モンティアスの応募はハンガリーの対外交関係機関が受理し、入国ビザも取得した。モンティアスが到着し、多くのハンガリー人経済学者との出会いも実現した。ハンガリー語も習い始めた。ハンガリー語の家庭教師に、友人のハナーク・カティを紹介した。ハンガリー語の学習は良くはかどった。通例のように、夫人とオペラに通ったり、同僚たちと会食したりした。我が家にも招いた。

ファイルから明らかになったことは、この間、秘密の監視が続いていた。電話を盗聴し、通りを尾行していた。監視者の報告を読んだが、何頁にもなる文書からは何も明らかになっていない。醜い勢力が捜査を行っていることを知らなければ、この報告を笑って済ませることもできよう。スパイ小説を知らないが、多分、諜報機関内部の報告では監視対象者の実名を使ってはならない規則や習慣があるのだと思う。我々は当時、プスタセリ通りに住んでいたので、コルナイとかラキという名字を使

うのではなく、「プスタ」と「プスタネー」が使われている。ハナークたちはガラシユ通りに住んでいたもので、「ガラシユ」と「ガラシユネー」と名付けられた。モンティアスも内部報告ではモンティアスと名付けられることはなく、「ズイメリオー」という名で出てくる（尾行報告では、変化を付けて「メシユテル」という名を付けている）。

謀略が練られた。科学研究奨学金を利用して、モンティアスはハンガリー経済とコメコンに関する国家機密文書入手した。廉で訴追しなければならぬ。そこで、モンティアスと関係があったハンガリーの経済学者の尋問を始めたのである。

私も取り調べられた。今、その調書を読み返している。誰一人として、モンティアスに不利になる証言をしていないし、誰一人としてモンティアスが機密資料を入手した疑惑を確証しなかった。

しばらく経って、ハンガリーからの即時退去命令が出た。退去命令を説明する新聞記事が出た。機密資料の収集を図るスパイ行為があったと事由を記した公報が出された。しかし、これを事実や証言あるいは証拠で裏付けることはできなかった。公開の訴追は断念された。

この出来事はいろいろな点で注目値する。本書で何度も示したように、学問の分野もけっして例外や保護された領域ではないことが示された。ここにも、全体主義国家の触手が伸びて

おり、監視や強権を振るう対象になっていた。

このように、ラーコシ時代とカーダール時代には連続性があると同時に、本質的な変化も生じていた。昔の保安局時代であれば、アメリカの教授もハンガリーの友人もすべて拘束し、CIAのスパイだと自供しそれを裁判で認めるまで拷問しただろう。今回の事件でも、ハンガリーの証人たちにとって、尋問は抑圧的で虐げられた体験だった。しかし、虚偽の疑惑を断固として認めない余地が残されていた*。

* 本書で既述したように、「西側の経済学界の仲間になりたい」というのが、一九五六年以後の私の決断だった。これがリスクを伴うことは分かっていた。「西側との関係」があるという事実だけで疑惑をもたれ、謀略で「スパイ」の嫌疑をかけられる時代に生きていた。共産主義体制が維持されている間、常にこの悪夢に悩まされた。もちろん、後から振り返ってみると、スターリン体制の復活はなかったのだが、復活の策略が必ず失敗するという保証はどこにもなかった。

モンテアス事件が進行していた時期、ハンガリーの政治には相異なる政治的潮流が対立していた。「ソフト」な改革志向のラインは文化や学問の分野で西側との友好関係を築きたいと考えていた。これに対して、「ハード」な反改革勢力はあらゆる機会を捉えて東西関係の悪化を企んでいた。このアメリカの

スパイ摘発は「ハード」ラインの追隨者によって企てられたものだが、失敗に終わったと言えよう。

この事件に関して、二つのことを付け加えておきたい。

ひとつは、モンテアス教授とのその後の関係である。一九七〇年に半年だけ、イエール大学に滞在した。この時、何度も彼と会って話をした。しかし、彼の追放事件が話題になることはなかった。私はハンガリーに戻る身なのだから、それに触れないでおくことが、思慮ある態度だと考えたのだと思う。以後、イエール大学を訪問する度に彼と会い、彼が主宰する研究所で講演した。一九七六年に比較体制論の著書が出版された時には、これを賞賛する書評を書いた¹²⁾。優れた著書だと考えたからだけではない。あくまで学者であることを見せることが大切だと考えたからでもある。モンテアスは体制比較を扱う研究者の雑誌である *Journal of Comparative Economics* の創刊編集委員である。この雑誌は社会主義国の経済学者向けに多くのフォーラムを組織してきたし、私も多くの論文を掲載してきた。

モンテアスは一九七〇年代に再度ハンガリーを来訪した¹³⁾が、ハンガリーの当局は入国許可を与えなかった。旧体制の最後の瞬間である一九八九年に、ハンガリーは彼の名前を禁止リストから外した¹⁴⁾。

残念ながら、ハンガリー事件はモンテアスから「ソ連学」への興味を奪ってしまったようだ。この分野の大きな損失であ

る。彼の興味は文化史に向かっている。一七世紀のオランダの絵画に関する彼の仕事は、美術史家によつてこのテーマの古典的著作に数えられるものとみなされている^(四)。

もうひとつは、ブダペストの事件に関するものである。一九九八年にモンテアス事件のファイルへのアクセスを申請した時のことだ。閲覧許可を得たが、種々の制限が課せられた。当時はまだ、文書をコピーすることが許されなかった。ファイルに目を通してある間、係員が傍に居た。ファイルの一部をこっそりと切り取つて、ポケットに仕舞い込むことを監視しなければならなかったのだと思う。親切的な男性だった。ファイルを読み終わった時に、彼が話しかけてきた。「そう、我々はこの人物を逮捕できなかったのですよね……」という意味のことを話した。録音テープを持つていなかったのだ、彼の言ったことを正確に復元できないのだが、複数第一人称で、皮肉っぽくやや無念な声で、こうコメントしたのだ。これも旧体制のある種の継続性を示しているのだろうか。

第10章 価格に挑む（一九六七年—一九七〇年）

——「反均衡」をめぐる——

数理計画による計画化計算に携わりながら、新しい研究プログラムに手を付け始めていた。それが新古典派理論批判、なかでも一般均衡理論の批判である。この研究の成果が、*Anti-Equilibrium*（「反均衡」）と題する著作にまとめられた。

出版にいたる経緯

最初の短い手稿は一九六七年⁽¹²⁾に出来上った。「経済メカニズム理論と研究課題に関するエッセイ」（以下では、これを「エッセイ」と呼ぶ）と標題を付した。^{*}これを英語に翻訳した。⁽¹³⁾

* この手稿を書いた頃から、集中力を必要とする大きな仕事の時には、「逃避」する習慣が付いた。家や研究所で仕事をするのではなく、荷物をまとめて、別荘かホテルに隠れるのである。家族も同僚も外部の訪問者も連絡がとれないようにする。こうして、

一、二週間の間、根を詰めて仕事をする。タイプを打つ手が草臥れて、タイプ（後にはPC）が打てなくなるまで、レストランのボーイと掃除婦以外は誰も声をかけない。ある時期からもうこれが「常習」的な習慣になってしまい、大きな研究や著書を構想する時に、このような環境が得られないと、何かが足りないと感じてしまうようになった。「反均衡」の最初のヴァージョンはシオフォクで書き始め、その続きをヴィシエグラードで書き、最後は一番好きなマートラハーズにある科学アカデミーの保養所で仕上げた。パラダイスのような静寂で私が仕事に集中できるのを助けてくれた保養所の皆さんには、感謝の言葉もない。

ちようどこの頃、ケネス・アローから、スタンフォード大学の研究所への招聘が届いた。アローは一九七二年にノーベル経済学賞を受賞したが、誰が見ても数理経済学理論では「当代切つて」の学者だった。私は「エッセイ」を持参して、スタンフォードでさらに手を加えた。やや居心地の悪さを感じていた。

というのも、この「エッセイ」はアローとフランス生まれのアメリカの経済学者ドブリューが創った理論の批判を目的にしていたからだ。私が何を持参したかをアローに話す勇気がなかった。他の同僚たちには見せていたので、それをアローが聞きつけた。それを見せるように言い、彼は丁寧に読んでくれた。

(アローは概念把握と知的反応が物凄く速い。話すスピードも速く、付いていくのが難しい。思考が飛び跳ねるようなスピードで展開するので、聴衆は息つく暇もないほどである)。アローはこれを批判するのではなく、知的な挑戦だと熱意を持って受け止めてくれた。まさに彼の理論が何の異論もなく受け容れられている理論のメッカのことだ。この手稿がアロー・ドブリュー理論の正確な知識に基礎づけられた批判であり、理論内容を詳細かつ客観的に読者に知らしめた後に、その理論の批判が為されていると賞賛した。アローは多くの建設的なアドヴァイスを与えて、手稿の修正を助けてくれた。微笑みながら、「一般均衡理論の墓場の美しい墓標になるだろう」とも付け加えた。ブダペストに戻って、この「エッセイ」を仕上げたが、大部の著書のように膨れあがった。(今になって考えれば、コンパクトなままで良かった)。ハンガリー語の文章と英語の新訳が出来上がる頃に、クープマンズから招聘状をもらった。イエール大学のコールズ委員会の研究所への招聘だった。これはアメリカの数理経済学研究の伝説的な研究所である。一般均衡理論

の古典的著作であるドブリューの *Theory of Value* もここで書かれた。まさにこの著書こそ、『反均衡』がその構成の分解を試みた著作に他ならない。クープマンズも現代数理均衡理論の泰斗の一人であるが、私の均衡理論批判を受け止めてくれた。このテーマに関するセミナーを開くことを提案し、彼自身もさらなる修正版のために多くの提案をしてくれた*。クープマンズとコールズ研究所の彼の同僚であるトービン教授が、ブダペストで行った翻訳をチェックするように自分の学生に依頼した。

* 『反均衡』を書き上げる途上の文書類を整理している中で、クープマンズからももらったコメントを手にして感慨にふけた。自らがタイプした二一頁にもなるコメントで、手稿の一頁毎に気付いた諸点をまとめたものだった。一人の若い研究者に対して、大学者がこのようなコメントを作ることなど、稀なことだと思う。

自らの理論への批判がより精確でより水準の高いものになるようにと、アローとクープマンズがあらゆる助力を惜しまなかった。その寛容さや真の学問的態度を、生涯忘れることはできない*。『反均衡』は一九七〇年にハンガリー語と英語で出版され、後に多くの言語に翻訳されることになった。

* クープマンズの人間的な大きさを伝える出来事がある。クープ

マンズはソ連の数理経済学者カントロヴィッチと、線型計画法を仕上げた業績でノーベル経済学賞を同時受賞した。グループマンズは、線型計画法の実際的应用を可能にしたアルゴリズムを仕上げたのはジョージ・ダンツウィッグだから、彼にも授与されるべきだったと考えた。したがって、彼が獲得すべき賞金は半分ではなく三分の一だと考え、半分と三分の一との差額をある国際研究所に寄付したのだ。

著書執筆の動機

計画指令的な社会主義経済メカニズムを批判的に考え始め、近代経済学の知識を得た段になって、本質的な疑問が湧き上がってきた。

意思決定をより良く導く価格体系とはどのようなものなのか。価格形成を需給の自由な動きに任せて良いのだろうか。ある程度まで、国家の介入のようなのが必要ではないか。

社会主義制度の内部に市場経済を創出することができるだろうか。国家所有と共産主義制度の政治構造は整合するのだろうか。それとも、政治と経済には非常に密接な関係があるのだろうか。

二つの「大」制度を比較した時に、どうして資本主義が社会主義より効率的なのだろうか。市場均衡をもたらす、最適な投入-産出結合の採用を促す価格をうまく創り出すことができ

るからだろうか。それとも、資本主義の経済的發展をもっとうまく説明することができるものがあるのだろうか。

この頃には書物の理論から得た知識だけではなかった。ロンドンその他の西側の都市で何ヶ月も過ごしていた。「市場供給」は書物の表現にとどまらず、ロンドンのオックスフォード通りのセルフリッジ・デパートや、チューリッヒのバーンホフ通りのお店屋さんをイメージするものになった。信じられないほど多くの種類の商品売り手に売らせる力は、いったい何なのだろう。旅行の度に、新しい商品が現れた(当時はポケット計算機が、後には卓上PCがというように)。次から次に新商品を生産者に創造させる力は何なのだろう。

理論的な確信に拘泥するのは、恋する人への恋情と似ている。情熱的かつ盲目的にマルクス主義にこだわった時期があった。それからの決別は大きなショックだった。新古典派理論へも少しばかり恋をした。初めのうちはバイアスのかかった見方をしていた。恋している間は、人は恋愛対象の小さな間違いを大目に見るものだ。だが、この情熱はマルクス主義へのそれに比べて、強いものではなかった。目覚めるのが早かった。悩ましい疑問に新古典派理論が満足できる回答を与えない、場合によっては間違った回答しか得られないと思うようになり、苛立ち始め、仕舞いには怒りさえ感じるようになった。

すでに記したように、マルクス理論に背を向けたのは、その

諸定理が現実と合致しないからだった。そして、新古典派理論についても、何か同じような印象を抱くようになった。マルクス理論の場合と違って、それほど鋭利に問題が現れた訳ではない。

良心的で実証的に証明された部分定理が多くある。経済測定理論に特化している専門分野である計量経済学は、この目的のために第一級の手法を仕上げ、この技術を経済学専攻の学生に教え込んでいる。私が欠如していると感じたのは、部分ではなく、全体に関する「理論と現実」の対比だった。資本主義と社会主義の全体システムにかかわる一般理論が欠如していた。こうした考えが、一般均衡理論を批判的検討の俎上に乗せることになった。

経済学で「新古典派理論」と名付けられるものは、多種の部分理論から構成されている。西側の定評ある経済学教科書は、これを構成する諸理論、最重要な諸概念、理論が答えようとする諸課題、諸命題の証明に使われる手法を手際よく解説している。新古典派理論は現代経済学的主流を構成している。この思考の集合の核を成すものが、一九世紀後半にフランスの経済学者レオン・ワルラスが創った一般均衡理論である。ワルラス・モデルの単純化された世界では、企業は最大利潤を求めて活動する。さらに、このモデルには「効用」を最大化するようにカネを支出する家計が存在する。そして、この理論は、企業と家計の需給均衡をもたらす価格が存在し、一定の条件のもとで最

適均衡が形成されることを明らかにする。均衡、調和、所与の条件下での相対的にもっとも望ましい状態こそ、この理論が描く社会的構成図なのである。

新古典派理論の多くのモデルの中でも、ワルラス・モデルは唯一、マクロ経済学理論のように集計化せずに要素に分解されたままで、経済生活の全体を握もうとする試みである。ここでは、経済主体と主体間の種々の取引が描かれる。これは市場経済をシステムとして描いた唯一のモデルである。したがって、新古典派理論から得られる回答に問題を感じたとすれば、この一般均衡理論を批判の俎上に乗せなければならないと考えたのである。

ワルラスも数学的形式で理論を創っているが、後のアロー、ドブリュー、クープマンズ他の手によって、理論証明の数学的武器が完成された。このように創り上げられた理論は厳密な論理によつて構成されている。そのコンパクトさと水晶のような透明さは、「美しい」とさえ言える。この理論を知る者は、皆、その美に魅了されてしまう。私も、批判的な疑問が浮上するまでは、この理論に魅せられた。

私の主要な疑問は、この理論、この理論から派生した多種の研究、一般的な新古典派の研究プログラムが、「大問題」に依っていないことだった。つまり、社会主義や資本主義の深い理解に寄与しないし、世界をどのように「改革」しなければなら

ないかについて何の手がかりも与えないのだ。完全にこの言葉通りではないが、『反均衡』の前書きでも後書きでも、このように記した。

類似性への思索

ワルラス・アロー・ドブリュー・モデルは、コルナイ・リブターク・モデルと対比できる。この二つはちょうど正反対の経済像を描いている。前者は完全に分権化された経済を、後者は完全に集権化された経済を描いている。前者のモデルでは、相互に独立している相互に同等な分権的単位の間の情報を、価格が担っている。これに対して、後者のモデルでは、中央機関がこれに従属する（従属することが義務付けられている）単位に、数量的指標を与える。

そして、ここから驚くべき結論が得られる。双方のモデルとも、一定の規則が遵守されれば、均衡状態が存在する。さらに一定の条件下では、双方のモデルは最適状態に到達する。この命題は数学的に証明可能である。

この類似性が私を悩ませた。これに従えば、集権化されていようと分権化されていようと、どちらでも構わないということなるではないか。資本主義が存在するか、社会主義が存在するかは、同じことになってしまおうではないか。それとも、この双

方のモデルとも現実を無視しているから、驚くべき併存性を見せているのだろうか。つまり、現実の資本主義と現実の社会主義との差異、現実の市場経済と現実の指令経済との差異を説明する特質を無視しているからではないか。

これら二種のモデルが前提する（現実の本質的特質を捨象した）仮説については、以前から問題を感じていた。その点については数理計画化を扱った章でも触れたが、ここで再度、振り返ってみたい。

この双方の一般モデルとも、意思決定者が精確な情報を入力していると仮定している。現実の二つの世界では、情報は恣意的あるいは意図的な歪曲を受ける。ただ、現実における類似性はここまでで、ここから本質的な差異が現れる。自由営業と私的所有にもとづく資本主義は、情報と刺激誘因との間の関係を創り出す。すべての人は所有する知識あるいは購入した知識を、自分のために最大限に活用することができる。自らが使う知識の正確性が、自己関心事となる。これに対して、社会主義では恣意的な情報で、中央機関に「奉仕しなければならない」。たとえば、否応なく、コルホーズに小麦の情報を提供しなければならぬ。情報を手にした者はそれで事業を起すことはできないし、情報を買うこともそれで経営することもできず、入手した情報は中央機関に渡さなければならない。分権化された情報と分権化された刺激誘因が結合して、資本主義に巨大な起動

力を与えるが、社会主義にはそれが欠如している。

ワルラス・モデルでも二水準計画化モデルでも、ともにすべてのプロセスは摩擦なしで進行する。適応が完全に行われるのだ。現実には二つの体制とも、適応は軋^きみのプロセスである。しかし、それは一様ではない。多くの理由から、資本主義に比べて、社会主義体制のそれははるかに硬直的である。分権化された経済における主要な意思決定は、最下位の単位によって行われる。これに対して、集権化された経済では、問題を知らせるシグナルは多段階のヒエラルキーを経由しなければならぬ。つまり、情報は当該問題の決定権があるレベルまで上り、それから今度は、摩擦解消の決定実行を行うレベルまで、ごくしゃくしながら下る。このプロセスはかなり長い。これにもうひとつの要因が加わる。在庫に余裕があれば、素早い適応も可能なのだが、強制的成長を強いる緊張計画は余裕ある在庫形成を許さない。

これにもうひとつの問題が加わる。双方のモデルとも、意思決定者は合理的に振舞う。ここで言う「合理性」は新古典派が規定する意味である。選好が安定的で、その選好に従って可能な選択肢を首尾一貫して選択する。ここにも重大な問題がある。ここではひとつだけ指摘しておく。コルナイ・リプターク・モデルは中央計画化機関が厳密に合理的であり、その意思決定は完全に系統的であると仮定している。ブダペストの計画庁に

足繁く通い、そこで党中央からどんな指示が来るかを聞いた。合理的なものだろうか。系統性があるものだろうか。そうではない。現実離れた、非現実的な希望なのだ。種々の政治勢力、業種や地域のロビー活動が、計画化の専門家に圧力を加える。力関係が変わるに従い、優先順位も変わる。混乱を伴いながら、ひとつひとつの優先順位が転換される。(分権化された経済における個人的意思決定の合理性と系統性については、後に触れる)。

これら二つの一般モデルに共通することは、静態的である点だ。ところが、二つの経済が決定的に違う点は、そのダイナミズムである。資本主義経済には、生産者に恒常的な技術革新を迫る競争動力がある。これに対して、社会主義では自発的な競争力が影響することはなく、中央計画化当局から得る官僚的指令にもとづいて、渋々義務的に、生産者に新製品の開発を促すのである*。

* 双方のモデルが無視したもうひとつ重要な差異がある。均衡理論の批判に取り組んだ時には、私はすでに共産主義体制の抑圧的政治構造や公式イデオロギーと鋭く対峙していた。しかし、当時はまだ、民主主義と経済的分権化、あるいは専制と経済的集権化との間に存在する複雑な諸関係を理解していなかった。この議論は出版された私の著作に欠如していただけでなく、当時の私の思考はそこまで至っていなかったのだ。

一般理論から期待されるもの、期待されないもの

私の中に、これら二つのモデルに対する違和感がどのような形成されたのかを、説明しようと思った。双方のモデルに問題を感じていたが、それぞれへの私の反応は異なっていた。まず、二水準計画化モデルを考えてみよう。当時はその理論的解釈を徹底して行うことはなかった。第8章でみたように、初めは「完全中央計画化」モデルとして把握することが可能だった。今になって考えれば、少なくとも抽象理論上のこととはいえ、完全計画化が可能であるとすれば、表面的で偏見をもつ読者は、社会主義賛美の理論だと考えるだろう。

この種の思考によって、ワルラス・アロー・ドブリュー・モデルに対する私の批判が抑制されることはなかった。今現在の頭で考えてみると、私の批判の科学的出発点において、重大な誤りがあったと思う。^{*}この問題の鍵は、「抽象理論から何を期待するのか」を明瞭にすることである。

* 「反均衡」におけるこの誤りについて、フランク・ハーンは一九七三年に記した論文のような非常に丁寧な長い書評の中で指摘している。その論文の標題に、シエイクスピアからの引用を選んでいる。「我がが不満の冬 (The Winter of Our Discontent)」

と題して、私の不満を標的にしているが、それは彼自身の不満でもあった。

モデルの構築者はいろいろな誤りを犯すが、現実を無視しているからといって、非難されるべきではない。これは理論構築において本質的なことである。誰もが現実に見ることができものを前提するのではなく、それから遠く離れたものを前提していることを指摘して、モデルを批判するのはたやすいことである。

ひとつの理論モデルは多様な課題に使うことができる。それらの中から、相互に依存し合っている二つの課題を取り上げてみたい。

理論モデルは、ある命題がどのような条件の下で真であるかを明瞭にするのに役立つ。モデル構築者の理論創造の過程では、ほとんどの場合、前提から出発するのではなく、思考過程の「結論として」出てくるものから出発する。ここから、「遡及」して進むのである。この結論が真であるためには、何を前提しなければならぬのか、と。可能な限り、簡潔にモデルを構築しようとする。命題が証明可能であるための必要かつ十分条件は何か、と。こうして思考過程が完成すれば、他の多くの命題を否定する、あるいは疑問視する出発点になり得るのである。たとえば、アロー・ドブリュー・モデルは、「均衡が存在し、

かつ（一定の基準に従って解釈された）最適状態に到達できるが、それは経済に流れる情報が正確である場合に限る」ことを主張する。このことはもちろん、アローやドブリューが現実の情報が持つ不確定性や不正確さに無知であることを示しているのではない*。このモデルを正しく解釈する者は、この思考からある警告を読み取ることができる。「情報が不確定で歪曲されていれば、市場メカニズムが経済を最適状態に至らせることは絶対にない」と、情報が正確である場合にのみ、こう（条件のように）なるのである。

* アローは不確定性の影響や市場の失敗について、重要な研究を行っている。たとえば、医療が純粹な市場メカニズムによって合目的に機能させることができないことを証明した理論の先駆者である。

このような視角からワルラス・アロー・ドブリュー・モデルの諸仮定を最後まで辿っていくと、そこに見えてくるのは、市場の弁護論ではなく、非常に厳密な警告のリストである。もしあれこれの抽象性を取り外してしまおうと、理論の最終結論は有効でなくなり、市場はもはや完全な規制者とはみなされなくなる*。

* ワルラス・アロー・ドブリュー・モデルに関連して用いられたこの思考プロセスは、コルナイ・リプタック・モデルの理論的解釈を行った第8章で、すでに一度、最後まで辿っている。

非常に一般化された極度に抽象的な「純粹」モデルのうちひとつの課題が、これに関連している。それは比較対照の規準として使用可能であり、模範の役割を果たすことである。現実の資本主義における市場経済はワルラスのアイデアルからほど遠い。他方、現実がそれからどれほど遠いかに関心を持てば、このアイデアルは適切な規準になる。たとえば、ワルラス・モデルで叙述される絶対的正確性から、現実の情報がどれほど乖離しているかを言うことができる。また、ワルラス・モデルの摩擦のない世界と区別される現実の摩擦を確定することができる。「不足」と題する著書では、まさにこの種の比較対照目的のために、ワルラス・モデルをうまく利用できたことを認めなければならぬ。

これと同じことが、コルナイ・リプタック・モデルについても言える。この「完全計画法」の純粹モデルによって、アイデアルからほど遠い現実の計画法を比較測定できる。

したがって、「純粹」かつアイデアルの極端な世界を見せるモデルの中に欠陥を求めめるのではなく、多くが誤って解釈し、そこから間違った結論を導くことに問題がある。理論的研究の

読者は、往々にして、思考の大きな「飛躍」をしがちである。モデルの厳密な諸仮定を忘れ、モデル内部で有効な命題を誤って解釈する。たとえば、ワルラス・アロー・ドブリュー・モデルから、すべての国家的介入から自由な市場の礼賛だけを読み取るとしたら（モデルの丁寧な理解からはこのような結論は出てこないが）、これは明らかに誤解であり、この一知半解は批判を受けてしかるべきだろう。

理論が現実から乖離しているからといって、それだけで理論を誤りとみなすことはできない。しかし、理論を自己の思考の中に埋め込もうとする者は、現実のどこを捨象しているのか、現実とどれほど乖離しているのかに細心の注意を払わなければならない。経済学研究を志す者に対して、純粹理論から現実的な結論を引き出したり、「経済政策的含意」を語ったりすること、慎重の上にも慎重であるべきことを徹底強調して教育することが大切である。このような場合、すべての仮説を再検討することが必要である。理論形成に必要な現実の捨象が、現実的環境を無視できないケースでは、実際の提案の欠陥を引き起こす。

『反均衡』が本質的な科学理論的誤りを含んでいたという指摘から、本節を書き始めた。理論の純粹性（諸仮説の抽象性や現実を無視した特性）を批判すべきでなかった。新古典派を批判すべきだったのである。批判の正しい標題は、「主流派の教

育実践と研究計画」とすべきであった。純粹理論の創造者に、このような警告を記すべきだと強制してはならなかった。理論を解釈し教育するすべての人々に対して、その補完的な説明を省略した理由を問うことができる。理論を正しく教えたか。それが説明するものはいったい何なのか。理論の正しい解釈で省略されたものが何なのか。必要な警告が何であり、理論的な論文の執筆や理論の教育者がふつう実行しないものは何なのか。どんなテーマの研究を促し、どんなテーマの研究を阻害するのか。『反均衡』で展開した批判が、これらの諸問題に焦点を当てていれば良かった。『反均衡』が最後まで引きずっていた科学理論としての過ちが、著書の説得力を弱めることになった。批判が正鵠を得ており、思考覚醒的である箇所においても、その力を弱めることになった。

合理的意思決定者

ここで、現在でも正しいと考える著書の諸点を取り上げてみたい。合理的意思決定者の行動に関する諸仮説は、抽象的なワルラス・アロー・ドブリュー・モデルのみならず、新古典派の全般的思考のもっとも重要な要素のひとつである。経済学の「合理性」の解釈は、他の学問や日常的な使用とは異なる独自なものである。

主流派経済学者にとつて、「合理性」概念は無矛盾で時間的
な首尾一貫性の要請と一致する。^{*}

^{*} この問題に不案内な人のために、この思考の要点をまとめておく。自らの選好が存在し、その選好に従う場合に、意思決定者が合理的であるという。A案がB案より好ましいか、あるいはB案がA案より好ましいか、A案とB案は無差別である。もしいったんA案を選好すれば、次にB案を選択することはできない。

新古典派の多くの著作では、意思決定者に一定の「効用関数」があることを仮定する。意思決定者の行動は、「効用」を最大化する、あるいは「最適化」することで特徴づけられる。一定の仮説の下で、二つの形式（選好順序と効用関数の最大化）が同等であることが証明される。

アマーティア・セン（一九七七年）は「合理的な愚人」もまたこのモデルが描く合理的意思決定者であることを示すことによつて、この概念をうまく皮肉っている。気違いじみた固定観念を踏襲しても、それが系統的であれば、合理的とみなされるのである。

先に示した科学理論の思考過程にもとづき、厳密に系統的な意思決定者を描く極端なモデルも、有用な役割を果たすことができる。これもひとつの模範の役割を果たすことができる。現実の意思決定者がどれほどの非系統性を示しているのかを確定したい場合、どのような決定問題において、どのような方向に、どの程度にどのような頻度で理想的な系統的意思決定者から乖

離するかを確定したい場合に、ひとつの模範となり得る。『反均衡』がこの有効な役割を十分に強調しなかつたのは、無念と言わざるをえない。

残念ながら、新古典派の種々のモデルでは、このような隠された解釈に従つて、系統的かつ合理的な意思決定モデルを使うことはない。そのように使うのではなく、典型的な人間行動をおおよそ模写するものとして、厳密かつ系統的に構成される効用最大化と最適化のモデルを想定する。人間行動の普遍的な説明モデルを掌中にできるがごとく振舞うのである。この説明手段を手に入れば、狭い意味での経済決定のみならず、離婚から子供の数や国会投票に至るまで、あらゆる選択問題を叙述できるといのである。私の著作は、この単純化されかつ誤つたアプローチを批判したものである。先に新古典派モデルの解釈と教育について一般的に記したように、著書では最適化、効用関数、選好順序の諸理論に厳しい批判を加えた。経済学者はある普遍モデルと考えると、それが妥当でない概念的枠組みの中でも、そのモデルで考えようとする習性をもっている。

『反均衡』では二つのかなり長い章でこの問題を扱っているが、ここではひとつの問題に絞つて考えてみたい。『反均衡』はひとつの重要なアプローチを導入した。反復決定と非反復決定、比較可能な決定と比較不能な決定の区別がそれである。

食事の時にどんな飲料を飲むかは、日常的な選択に属してい

る。具体的な飲料の選択がその日のメニューや雰囲気依存するとしても、私の消費行動はある程度きまったパターンをとるだろう。つまり、飲料の嗜好や非嗜好はかなりの程度、安定的なものだと言える。飲料の選択は反復決定であり、今日の選択問題はすべての面で、昨日のそれと比較することができる。

もうひとつ、別の決定ディレンマを取り上げてみよう。一九五六―一九五七年の冬、国境が開き、それほど大きなリスクなしに、鉄のカーテンをぐり抜けることができた。その前は閉じていたから、人々はほどなく再び閉められると予想した（それは正しかった）。留まるべきか、亡命すべきか。これは反復不能な決定問題だった。もちろん、これ以後にも亡命した人はいるが、その状況はまったく異なっていた。失敗するリスクも違っていたし、国外での受け入れ体制も違っていた。したがって、この時期以降の「残留か亡命か」という問題は、一九五六―一九五七年冬のディレンマとは比較可能でないのだ。

これに二つのことを付け加えておきたい。

新古典派モデルは反復可能で比較可能な決定問題の分析に利用できる。それを使って、決定の首尾一貫性の欠如を測ることができる。しかし、非反復的決定や比較不能な決定では、「合理的決定」モデルは解釈不能に陥り、使うことができない。

もちろん、最初に取り上げたような反復する「小」決定も、経済学者にとって興味深いものだろう。消費者行動の恒常的な

観察にもとづく需要関数の予測や企業経営者の反復決定を映し出す企業行動関数などは、そのようなものである。

しかし、人生の最重要な「大」決定のほとんどは、反復不能なものである。個人や民族の歴史には運命的な転換点がある。それらは覆すことが不可能な出来事である。にもかかわらず、真の大問題の決定において、人間行動を選好順序によって説明したがる社会学者がいる。一九六七―一九七〇年頃に、この問題に関する私の見解をまとめ、上述した区別を導入したが、基本的にこの問題を自省的なものに留めた。他の人の精神に、どのような思考プロセスがあるかは分からないが、自分のものは分かるからである。亡命すべきか、再入党すべきか、革命の瞬間において何を為すべきかのような大決定を要するドラマティックな瞬間には、事前に与えられた選好など存在しないことを知っている。^{*} 価値（選好）、状況、選択の可能性の間に、独特な相互影響が生まれる。「制約」と「選好」の境界線を引くことができないのだ。厳密に時間的な首尾一貫性を問題にすることもできない。当時の瞬間的な大きな期待や大決定の状況が、後の時期には根本的に変化しているからである。

* 第2章で、私が共産党に入党した決定プロセスを叙述した。事前にはこの決定を導く選好など存在しなかった。さまざまな動機が私の決断を促した。この長い人生期間に関する大決定がいった

ん為された後は、以後の期間における小さな反復する決定問題を導くような選択が形成された。

今もなお、上述した区別や批判的な注釈が、けっして方向違いでなかったと思っている。

『反均衡』執筆以後、このテーマに関してどのような展開があったかを一義的に判断するのは難しい。まさに『反均衡』が望ましいとみなした方向に向かった研究も確かにある。その中でもっとも重要なものが心理学者と理論経済学者との共同作業で、意思決定過程の検証、とくに「首尾一貫した意思決定者」の理想モデルの検証である。ここから、多くの価値ある結論が生まれた。この研究計画からひとつの学問的学派が形成され、自らを「行動経済学」と名付け、新しい視点から、現実により忠実なモデルで人間行動を映し出そうとしている。この潮流の頂点に立つのが、アモシユ・ツヴェルスキとダニエル・カーネマンの業績で、多くの理論的変則性を明らかにしている。つまり、標準的な合理的意思決定モデルに有効なものから、恒常的に乖離しているものを良く観察している。この理論の一般的な認知は、カーネマンに授与されたノーベル経済学賞が教えてくれる（残念ながら、共同開発者のツヴェルスキはこの榮譽を受ける前にこの世を去った*）。

* 例に漏れず、彼らの業績に敬意を表し、脚注で触れるのが慣習になつてゐる。そして、主流派の多くの経済学者は、この理論があたかも存在しないかのように、通常の議論を続けるのが常である。「他の人もやっているから」と、通常の仮説をそのまま適用するのである。ツヴェルスキの業績をモデルに組み込むのはたいへん難しいし（これが言い訳にもなっている）、数学的な表現がとて難解になつてしまふのである。

彼らのモデルを除けば、今日までの展開は芳しいとは言えない。「合理的選択」モデルは広範な学問領域、たとえば社会学、政治学、歴史学、さらにはまったく意味のない領域（一度限りの反復しない出来事の研究が特別な役割を果たす学問領域）などで応用されている。それも先に述べたような比較対照の規準として使うのではなく、多くの場合、非常に粗野に単純化して使つてゐる。十数年前に述べた警告や批判は、今もなお有効である。

非價格的シグナル

批判した理論では、システムを構成する諸単位間に、ただひとつの型の情報が流れている。それが價格である。この排他性が私を悩ませた。

社会主義の企業間関係において、價格が生産者と消費者に影響

響を与えることはない。ここでは、別種類の情報が影響力をもっている。計画化指令、在庫の増加あるいは減少によって与えられるシグナル情報、製品の購入待機を示す行列の長さや待機時間、数量単位で示される注文等々がそれである。これらすべてが分析から欠落すると、市場メカニズムに依拠する場合に、価格シグナルがもたらす特別な利点が何かを説明することができないのだ。

もちろん、資本主義市場経済でも価格情報が唯一の情報伝達機能を担っている訳ではない。そこでも、さまざまな非價格的なシグナルが大きな役割を果たしている。

この問題の分析においても、『反均衡』は正しい方向に向かっていた。過去数十年にわたって、種々のシグナルや情報の役割について、科学的な分析が深められてきたことは望ましいことである。

均衡、買い手市場、売り手市場

「経済学でとくに難しいと思えるのは、カテゴリーの定義である。……その精確さの欠如が、この概念の領域から始まっている……」と、ノイマン・ヤーノシュ（フォン・ノイマン）が述べている。^(註)私を悩ました（現在もなお）のが、均衡概念である。

物理学その他の自然科学では、これは実証的概念として使われている。ラテン語であれ、英語であれ、ドイツ語であれ、この表現は両側に同じ重りが乗っている秤を思い起こさせる。秤に触れると、少し揺れた後に、再び平衡状態に戻る。触れなければ、平衡状態から動くことはない（安定的均衡）。同じように、動的均衡経路について語る事ができる。システムは動くが、その映像から一枚の画像を切り出すと、平衡状態にあるシステムを見ることが出来る。

新古典派の「市場均衡」概念は、この実証的意味において使われている。静学理論では、すべての生産物について供給と需要が等しい時に、市場は均衡状態にある。多くの分析目的にとって、この定義で十分である。基本的な経済学知識の普及によって、この定義が一般的な知識となり、経済政策家や新聞の用語になった。

これが問題の「規範的」なアプローチにも関係する。市場が均衡することは「望ましい」。需要が供給を上回って不足が生じることは「悪い」ことだが、売れない在庫が増えることも「良くない」ことだ。

用語の使用には啓蒙的の力があり、単純化によって専門分野のみならず、日常用語にもなることは分かっている。しかしなお、『反均衡』執筆時も現在も、この用語の使用状況に満足していない。

まず初めに、資本主義を考えてみよう。売り手は常に現在の価格で売れる量（売り手と買い手の総体を考慮）以上に売りたいと願っている。売り手のそれぞれが、これまで以上に売れるように（成功するように）準備する。そのために、余剰生産能力と在庫がある。その意味で、供給は需要を上回っている。供給がロング側で、需要がショート側である。そして、取引、つまり実際の売買は常にショート側に従って実現する。今、「均衡」表現を物理学的に使うとすると、これが市場均衡の状態では「供給と需要が等しい」状態ではない。この状態については後にも再々立ち戻ることになる。景気循環の中でも、この問題に触れる（たとえば、景気過熱時には余剰生産能力がなくなるか、きわめて小さくなり、在庫が異常に縮少する）。しかし、ここで頭を悩ませる必要はない。まさにこの非対称性こそ、資本主義の真の原動力が隠されているのだから。これが競争を引き起こし、競争を生み出すのである。この種の非対称性が買い手に優位性を与えることになる。買い手は売り手を選ぶことができるが、売り手は買い手を選ぶことはできない。そして、もっとも重要なことは、競争や競合が技術発展や新製品の開発を強制することである。

私がこの非対称性に敏感だったのは、まさに売り手が優位にあって、売り手が買い手を選ぶ正反対の状況の中で生活していたからである。この状態は均衡からの一時的なブレではなく、

超過需要が常態になっているのである。一定の政治・経済的環境が不足を常に再生産するのである。不足経済が社会主義システムの現実的な均衡状態であって、「需要と供給が等しい」状態ではないのだ。

『反均衡』ではこの二種類の均衡状態に対して、耳慣れない新しい名前を付けた。それが「圧力」と「吸引」である。前者では売り手が買い手に製品を押し付けるのに対し、後者では買い手の渴望が売り場から製品を吸い込むのである。しかし、この命名は専門分野でも日常用語でも受け容れられなかったと言わざるを得ない。後の私の著作ではこの用語を使うのを諦めた。その代わりに、経済学者の間で以前から使われていた「買い手市場」と「売り手市場」という表現を使うことにした。この表現が嫌悪感を引き起こさせることはなかった。

命名の不首尾が主たる問題だった訳ではない。二つの体制に特徴的な一面性、非対称的状态、売り手あるいは買い手の優位性という基本的な思考が、既存の概念を完全に突破できなかったのである。しかし、現在もなお、私は自らの命題を正しいと考えているが、残念ながら、同僚たちを説得できずにいる。

ワルラス・アロード・ブリュー理論では、「競争的均衡」概念が現れる。この状況では、すべての部分市場で供給と需要が等しい。この理論カテゴリーもひとつの模範として使えることができると思う。ワルラスの競争的均衡状態がこのようなもの

であり、そこからこのように乖離していると言うことができ
ば、ひとつの現実的システムの記述を容易にするだろう。ただ、
この概念における「競争的」という表現は奇妙だ。資本主義が

このワルラス的静止状態に到達すれば、現実の競争は消滅して
しまう。^{*}もうここでは売り焦ることも、新機軸を考える必要も
なく、すべての製品が相手を見つけ、すべての生産・販売者が
ちょうど生産しただけのものを買い手に売ることができ。幸
運なことに、実際の資本主義ではこれが正常で継続的な状態で
はなく、生産・販売者が相互に打ち負かす競争を行い、製品構
成の恒常的な革新が起きるのである。

* 『反均衡』に先立つ「エッセイ」では、このワルラスの「競争
的均衡」をある男女関係、つまり不感症の女性と不能な男性の関
係に喩えた。この類似性を著書から外したことを見ると、執筆当
時、抑制したスタイルの方が目的に適っていると判断したようだ。

今、ここに至って、著書の題名『反均衡』が持っていた二つ
の意味を説明することができる。ひとつは、一般均衡理論の批
判である。いまひとつは、いわゆる「競争的均衡」の静止した
革新への動力をもたない状態を望ましいとする考えに対する、
異議申し立てである。

政治的視点から解釈した一般均衡理論

資本主義批判者は、新古典派がその理論によって、体制を擁
護し賞賛していると非難する。これは誤った一般化だ。

新古典派理論とその理論的核である一般均衡理論は、政治的
に中立である。その基本定理も概念体系も、政治的視点から
「バイアス」がかかったものではない。この理論の追隨者や利
用者には、保守主義者もいれば自由主義者も社会主義者もいる。
『反均衡』ではこの点をとくに強調し、新古典派に属する研究
者を「ブルジョア経済学者」とか「資本主義の擁護者」と批判
する者たちとは対峙した。

体制比較の研究者の視点や存在する秩序の变革を望む研究者
の視点から考えると、当時の西側の経済学に二種類の典型的な
誤りを発見した。ひとつは、市場の理想化に魅せられて、国家
や補完的な規制メカニズムの必要性をその経済学的思考に組み
込めない過ちである。いまひとつは、先に既述した現実市場の
真の利点、資本主義の現実的原動力を分析できないという過ち
である。市場に対する無条件的な薔薇色の絵と不十分な薔薇色
の絵を、同時に描いているようなものである。

ラディカルな社会主義精神の作品が、ワルラス・アロー・
ドブリュー・モデル（より一般的に新古典派的思考）と、どこ

で接点を持つているのかを丁寧に解きほぐすことに努めた。

その事例のひとつが、本書ですでに触れたオスカー・ランゲで、彼はワルラス理論の思考体系を使って彼の有名な社会主義理論を創り上げた。

新しい事例として、ソ連のカントロヴィッチ学派がある。彼らは線型計画法で得られる影の価格で経済を制御する、つまり事前に市場で形成される価格をこれで補正することを提案した。方程式体系、若干の修正を伴った数学形式、ワルラス方程式のヴァリエーションの特徴をもつカントロヴィッチのアプローチを、西側の経済学者が認知したことは容易に理解できよう。

『反均衡』はまた、『資本論』第二巻の再生産表式や動的均衡概念が、多くの点で、一般均衡理論と共通するところがあることを示した。これはマルクス主義の読者を苛立たせることになった。

にもかかわらず、ラディカルな社会主義者は連帯して『反均衡』を歓迎し、これと一線を画することはなかった。「敵は共通」と喜んだのだ。弱々しい「競争的均衡」による賞賛よりはるかに強い資本主義「擁護」を、ここから読み取らなかつたのだ。私の著書では、マルクス・エンゲルスが『共産党宣言』でも認め、シュンペーターがその理論的の中核に据えた資本主義経済の利点を取り上げた。それが技術的進歩であり、恒常的な革新の原動力である。これらはまさに資本主義制度内部の特性

にしたがって恒常的に生成されるものなのである。^{*}

* 著書では、生産・消費・生活様式のそれぞれについて、何時どの国で革命的变化をもたらすような新製品が生まれたかを、詳細な表で示した。そこから明らかなように、社会主義国の存続期間において、きわめて僅かな「革命的」製品しか生まれていないことが分かる。そのほとんどが資本主義経済で生まれている。この比較対照そのものも、社会主義経済への告訴状のようなものである。

科学における改革、革命

当時の経済学の状況を振り返ってみると、私が望ましいと考えた方向を目指す研究が続いていたし、ワルラス理論と現実の隙間を埋めようとする試みも始まっていた。しかし、私にはそれが遅々たるものを感じられた。既存の科学的思考の改革ではなく、革命が必要だと考えた。もちろん、傲慢にも、私の著書が革命をもたらすのだと一瞬たりとも考えたことはない。私自身、自らの著作を半製品とみなしていた。高々、革命の希望を表明する以上の作品ではないと考えていた。

確かに、かなり厳しい表現を使った。ハイゼンベルクの表現を借りて、修正不能で閉じた公理体系を成している一般均衡理

論を「数学的結晶」^(四)と名付けもした。今になって考えると、この急進性は誤りだったと思う*。

* マルクス主義からの決別は急進主義そのものだった。マルクス主義から獲得した精神的資本価値をまず「ゼロに清算」してすべてを捨て去り、それからひとつひとつの定理や手法を再考しながら、受け容れることができるかどうかを検証した。新古典派理論との関係では、このような急進主義は生じなかった（その強い兆候が見られるが）。ラカトシユ・イムレの表現を借りれば、後者は退化する研究計画ではなく、発展能力を残したものだ。

クーンの古典的な科学理論^(四)以後、自然科学史の中で、真の意味で革命が生じているかどうかが議論のテーマになっている。社会科学の発展に限れば、転換や飛躍がある場合でも、以前の思考を新しいもので補完するような継続性が顕著に見られるように思う。いわば改革と革命の諸要素が連続的に絡み合っているようだ。

『反均衡』執筆時には、新古典派の発展の余地と能力を過少評価していた。簡単に紹介したものやここで触れることができなかつたものを含め、多くの新しい成果を見る限り、華々しい革命を経なくても、この学派は一九六〇年代の状況からかなり先に進むことできたと言えよう。

ただ、新古典派に対する当時の私の不満はそれなりの根拠があり、現在もなおその不満が解消されていないことを付け加えておきたい。自己革新能力があるように見えるが、頑迷さも見える。確立された心地良い思考図式を、硬直的に墨守しているしかも、その応用が誰の目から見ても間違っている領域において、そうなのだ。

最初の反応、長期の影響

『反均衡』の発刊は大きな反響を呼んだ。広範な認知を得たと言える。ケネス・アローやハーバート・サイモンのノーベル賞受賞講演でも、この著書の文言のいくつかに言及された^(四)。発刊の数年間には、多くの論文や著作でこの著書が引用された。国際的な専門雑誌には三八本の書評が掲載された。経済学専攻の学生も、いたるところで著書を議論していた。一冊の著書が当時の支配的な経済学派を包括的に批判しているという単純なことが、関心を引き起こし、著書に没頭させたと言える。

著書を厳しく拒否するものはほとんど稀で、そのことから私の仕事の実を結び、新たな理論の激動を呼び起こし、大きな影響を与えるものと信じたのである。

しかし、そのようにはならなかった。最初の拒否反応が次の拒否反応をもたらした訳ではなかったが、当初の積極的な関与

もまた続かなかつた。議論が止まってしまったのだ。当初の電撃的な関心が、沈黙に変わってしまった*。

* フランス出身の著名なマクロ経済学者オリヴィエ・ブランシヤール (1909, 2005. p.) が、ある雑誌で私のインタヴューを行った。私は『反均衡』が発刊数年で、「消えてしまった」と指摘したが、私のこの指摘に対して、彼は次のように反応した。「私はたいへん影響力があった著書だと思う。わがフランスでは、我々が読んだ著作の中でも、もつとも影響力のあった著書のひとつだ。共通の知識になると、それ以後はとくに触れられなくなるものだ。他の思考も同じような運命にあると思う。それが成功の印なのかもしれない」。

既述したように、『反均衡』が望ましいと指摘した方向を指した実りある研究が、多くの領域で続けられている。これは私にとつても歓迎すべきことだが、率直に言えば、新しい理論的発展史の開拓的作品として『反均衡』に言及されないのは、悲しいことだ*。

* 多くの経済学者が新古典派理論の包括的批判をおこなっており、その批判点の多くは一九七〇年の私の著書で取り上げたものとほとんど同じ視角を繰り返しているだけだが、私の著作への言及はない。どうしてだろうか。考えられることは、その研究者がたんに

に『反均衡』を知らず、それとは独立に研究を始めたからかもしれない。あるいは、『反均衡』を読んだが、それが知識の下の層に押し込められ、出版や講演の際にはもう記憶の中から消えてしまっているのかもしれない。あるいは、すでに『反均衡』で議論されていることを覚えていたが、読者や聴衆にそのことを伝える必要がないと考えているだけのことかもしれない。

私はこの著書が経済学的思考に大きな影響を与えると期待したのだが、どうして期待したほどの影響を及ぼさなかったのだろうか。私の著作の中には、期待した通りの影響を与えたり、期待以上のものを与えたりした作品がある。だとしたら、『反均衡』で失望すべき理由があるのだろうか。

問題があったとすれば、その叙述スタイル、あるいは「作品の属性」にあったと言えるかもしれない。実際には数学的分析で使われることのない数学記号を多用したことだ。あまりに瑣末な定義が多かったからかもしれない。厳密な分析には明瞭化に手間がかかるような定義は使われない。カテゴリーの「再洗礼」に満ち満ちていたからかもしれない。これが成功することはほとんどない。これが逆効果をもったことは確かだ。新しい概念が多すぎて、読者を遠ざげたのかもしれない。

著書に先行した「エッセイ」は、はるかに短くコンパクトで、明瞭な散文で書かれていたので、多くの点でより効果的だった

と思う。私は状況を見誤った。数学手法を使った多くの仕事を見てきたので、私の仕事もこのジャンルへ適応させなければならぬと考えた。言いたいことをエッセイ・スタイルで書いておけばよかつたと思う。

『反均衡』における私の批判は抑制されたもので文明的なものだつたと思う。マルクス・レーニン主義の傲慢さで鍛えられた痕跡はなかつたと思う。それでも、そのトーンははるかに急進的だつた。イスラエルの心理・経済学者でカーネマンとも意思決定理論の理解に貢献したツヴェルスキについて、デヴィッド・ライブソンとリチャード・ゼックハウザーが記した著作⁽¹⁰⁾を読んで、心を打たれた。ツヴェルスキは私が『反均衡』で犯した「儀礼的」過ちとは無縁だつた。彼は「初めからやり直そう」とは言わず、これまで使用されてきたモデルの価値を認め、「ここから出発して、別のもの続けてみよう」と言つたのだ。こうした態度こそ、変化の必要性を感じている同僚を説得するのに役立つだろう。

失敗（より正確には、半ば失敗）の原因を分析するとすれば、スタイルや「作品の属性」より、もっと重要な内容上の原因を探る必要があるだろう。

批判は、高々、所与の理論への敬意を弱めるだけで、それによつて新しい理論への精神的な抵抗を和らげることができるだけである。批判それ自体が、その専門で一般的に受容され使用

されている理論を放棄させることはけつしてない。理論の真空が生じることはない。新しい理論は、よりうまく使えるという説得なしに、古い理論にとつて代わることはない*。

* このことは著書出版の後に、その反応から明らかになつたものではない。このことについては、手稿の時点で多くの人が私の注意を喚起してくれた。私の収集資料の中に、ひとつの手紙がある。イェール大学から一九七〇年にブダペストの友人宛に送つたもので、『反均衡』のテーマ領域に関連して私が行つた講演の反響を報告したものである。最初に認知に言及した後、次のように続けている。「意見のもうひとつのグループには、認知と不満が混ざつている。……ある同僚は、自己諧謔的に、分裂症的行動だと名付けた。つまり、頭脳の裂け目の一方でやつていことが悪いことだと知つていながら、他方の裂け目でそれをやつていようなものだ、と。誰かがもっと良いものを手に与えてくれれば、このような分裂がなくなるのだが」。

『反均衡』は新しい理論を提供したものではない。だからこそ、突破できないものがあつた。

ひとつの事例を上げてみる。著書は、ワルラス・アロー・ドブリュー・モデルが、均衡状態においてすべての人が平和的で美しい場所を見つけるといふ調和的な図式を描いていることを示している。しかし、種々の対立のモデルにもつと注意を向

ける時代だ。著書では、国家の官僚的諸部門間の対立や企業間の対立を事例として上げている。諸対立の研究の提案は、ゲーム理論のルネサンスが始まるはるか以前のことで。

まさに、これが問題なのだ。諸対立の研究がブームになるのは、ナツシユ他の新しい理論的用具を用いて、新しい理論構築が利用可能だと分かった時だ。

要するに、「提案」だけで生産的な研究計画が開始されるような大テーマや重要テーマはひとつとして存在しない。現実の生産的な研究計画は、刺激的で建設的な創作によって始まるのである。アングロサクソンの世界では、このような作品を「含蓄のある (seminal)」と呼んでいる。つまり、「創造・繁殖力がある」ということだ。

「使用人がいなければ、あなたが主人」（自分でやるしかない）というハンガリーの諺がある。『反均衡』で提起した研究諸課題の多くは、自分で（一人あるいは同僚たちと）実行することになった。この試みの中から、いくつか新しい理論的成果も生まれた（それらについては、後の章で触れる）。

この問題を考え始めると、結局はこれまでの人生のすべての成果について考えることに行き着く。ある大きなアイデアや真に独創的で重要な思考を得て、残りの人生をこの思考を彫琢し発展させることに賭け、これを応用したり宣伝したりして、ひとつの学派を形成するような研究者がいる。また、二つ三つ

の重要な思考を基礎に、それを最後まで追及する研究者もいる。上述した研究者はみなこのタイプである。理論史はこの種の集中した研究戦略が真に大きな成果をもたらし得ることを教えている。しかし、私の性癖が別の戦略を取らせたことを言わざるを得ない。常に、次から次へと新しい思考が私を襲った。だから、残念なことに、あれこれの思考に留まり、最大の細心さと忍耐でその思考を育み始め、応用し宣伝して、その思考を中心に学派を形成する忍耐強さがなかった。しばらくして思考が動き出すと（いくつかのケースで実際に動き出した）、新しい思考が刺激し出して、もう次の思考へ進もうとするのである。もちろん、すべてがそうだった訳ではないが、私の仕事の多くがこのようなものだった。『反均衡』の内容とその後の歴史は、この私の「飛び跳ね癖」を良く教えている。私の著書は丁寧構成されていたと思うが、ひとつの半加工思考から次のそれへの急ぎ足になっている。

書いて良かった？

『反均衡』を執筆し公刊したことで、私の以後の研究者としての道に多くの困難を作りだしたことは間違いない。我が専門分野の新古典派の中には、偏見をもった盲目的な追従者がいて、私の著作を許し難い罪だと考える者もいる。今から見れば多く

の過ちや弱点をもつものだが、著書に記した視角の多くは現在もなお有効だと考えているから、なおさらである。今もなお、私は新古典派の盲目的な追隨者ではなく、常に批判的視点でこの学派を見ている。だから、最近は、片足は主流派におき、もう片足はその外側においていると話すことにしている。價格的視点から新古典派的手法で取り組める問題群もあれば、價格的視点を排して取り組む問題群もある。このような半分が外、半分が内という状況は、時として摩擦を引き起こす。私の著作は多くの場合、「他者」に十分に開かれていない編集者や監修者の好みに合わないのだ。

この著書を書こうとした勇氣はどこから来たのだろうか。この厳しい批判の書が多く敵対心を生み出すだろうことは、執筆前から自明のことであった。マルクス主義への失望の後、常に物事を批判的に再検討するという習性が身に付いたことが影響したことは間違いない。マルクス主義に対して、一度は盲信し無批判だったことから、もう一度、同じ過ちを繰り返したくないという強い気持ちがあった。

以前の章でも書いた通り、大学へ通わず、独学生のように自らを鍛錬したことが、いろいろな不利益をもたらした。もちろん、その利点もあった。新古典派理論を学んだことは学んだが、大学のように講義やセミナーで繰り返し理論をたたき込まれ、すべての質問に正しい回答が夢にまで出てくるほどに試験の準備

をする必要がなかった。ハイドンと比較するつもりはないが、その置かれた状況には類似点がある。ハイドンは長期にわたって、世界の音楽の中心から隔離された時を過ごした（ハンガリーのエステルハーズイ家の城で）。彼は次のように記している。「私は世界から隔離されていた。だから、自分で開花し、自分で責任を負う可能性だけが存在した。エステルハーズイには注意を喚起したり、疑問を投げかけたりする者が誰もいなかった。こうして、独創的なものになり得た……」。

私の学問的キャリアがアメリカの大学で展開されていたとすれば、ちょうど『反均衡』を執筆した時期が、年齢的に教授への任命時期に当たる。半製品のな文言が詰まっているだけでなく、正統派の基本教義の批判思考を含むような手稿など、専門雑誌編集者から投げ返されたに違いない。教授任命は指定雑誌への投稿論文に依存している。教授任命に発言権をもっている同僚たちを怒らせないように、慎重に振舞ったかもしれない。こう考えてみると、遠いハンガリーに生きていたことが本当に幸いしたと思う。変に聞こえるかもしれないが、このことがより大きな自己主権をもつことを容易にしたと思う。とにかく、西側の若い研究者が鍛錬時と昇進時におこなうような形で、西側の学問世界に「飛び込んだ」訳ではなかった。

結局のところ、この節のタイトルにどう答えるのか。この著書を書いたことを後悔するのだろうか。この自分の事例もまた、

人間行動が首尾一貫性を欠く事例のひとつになるだろう。「もし書いていなかったとしたら」と考えることがある。ところが、これを少し修正して、「事後的に、自分の作品の中から、新古典派批判を除くことなど考えたくもない」と思う。もつとも、何かオーウェルのトリックのように、一九七〇年のヴァージョンを消滅させることができ、そこに現在の視点から書き込み、現在の知識にもとづいて新しいヴァージョンができたらいとも思う。こうやって改訂されたヴァージョンを、図書館で埃まみれになっている原本と交換できると良い。ただ、ミクスアトも言っている。「一度書いたものは、斧で断ち割ることもできない」と。

いろいろ考えてみれば、『反均衡』が出来上がったことは悪くはなかった。すでに触れたフランク・ハーンは著書に対するもつとも細心かつ鋭い批判を行っているが、すべての批判を終えた後に、その批判論文の結びにこう記している。「私が本書を手にしなかったより、手にして良かった。コルナイの誠実さや明快な整合性が、間違った言明からも人々に正しいものを引き出させる力をもっている。そして、正しいものの中には、本当に素晴らしいものがある」と。私は自らの仕事に誇りすら感じている。ハーンが書いたように、「手にしなかったより、手にして良かった」とすれば、まさにこれが私にできたことだ。益もあつたと思う。執筆や著書をめぐって展開された議論

から、学ぶことができた。とにかく、これも私の人生の一部を構成している。

主観的なコメント

最後に、経済学や学問の世界から少し離れて、『反均衡』に纏わる個人的なメモを記しておきたい。著書の概念構成を読んだ一人が、次のようにコメントした。「どうしてこんなに細かく失敗の原因を探る必要があるのか。放っておけば良いのに」と。別の読者はこうもコメントした。「人は傷つけられることを好まない。……君が取り上げているものは、すべて無益だと言っているようなものだ。誰もがこのことを重要だと感じるとは思わない」と。

著書出版に関連して生じた問題をすべて、蠅を追い払うように無視することもできる。ただ、私はこのようなタイプの人間ではないのだ。フランスの歌手エディット・ピアフが歌ったように、「いえいえ、何も責めません」と言えるような人が羨ましい。自分自身について、とてもこうは言えない。責めるものもあれば、責めないものもある。私の人生のステップで、事後的に一義的な判定を下すことができないものは少ないとは言えない。昔の選択のディレンマに、今でも悩まされることがある。別の選択肢をとるべきではなかったか、と。とにかく、成功よ

りも失敗をより深く生き延びてきたと言える。

『反均衡』は私の著作リストのひとつにすぎないものではない。この著作こそ、私の経済学分野のもっとも野心的な挑戦だった。自分の能力以上の大きくて難しい課題に取り組んだ。そのことは分かっていた。だからこそ、これを語ることは楽しい思考作業ではなかった。

私にとって、成功か失敗かはどうでも良いことではない。ほとんどの人は告白しないが、この面では学問研究に携わる誰もが同じように感じていると思う。それをあからさまに言うことが、評判を落とすと考えているからだろう。しかし、研究業績が特別な興奮を引き起こさなかったとしても、事後的な評価を受け、科学研究を進歩させた、真理を発見したという印象を与えれば、素晴らしいことだ。もしそうなら、文学ほかの芸術やスポーツ、生産やビジネスの世界のように表彰があっても良いではないか。ところが、その反対に、種々の否定的な反応や沈黙による無視から始まって、公の中傷や侮蔑に至るようなことが起こるのはどうしてだろう。統治者や聖人ならそのようなことに頓着しないだろう。しかし、ほとんどの弱い人間には、成功と失敗を生き延びることと人生の推進力との間に、密接な正の関係がある。確かに、知ることの喜び、真理の探求が、主たる推進力を高める動機になる。しかし、業績に対する他者の評価に無関心であれば、緊張感が失われるだろう。

本章でも、また本書の別の箇所でも、私は正直な自己批判に努めている。『反均衡』が期待したほどの影響をもたなかった原因が、どこまで自分自身にかかわっていたのかを明確にしたかった。こうすることで、「私だけに問題があったのか」という疑問を提起することに、倫理的な抛り所を与えてくれる。これに答えようとすることで、何か「心の痛み」を話そうというのではない。私が包括的な批判に対して経済学が頑なな姿勢をとっていることを話題にしたり、研究者の記憶の不確かさを語ったり、しかしまさにその記憶によってこそ真に新しい思想の萌芽を見いだすことができたりすることを語る時には、いわば多くの研究者の批判を自分なりに翻訳して記しているのだ。

先の二人の批判的なコメントにしたがって、叙述を簡単に済ますこともできた。この第10章でも、あるいは本書の他の箇所でも、いくつかの節を削除すれば、論争的な印象が消え去っただろう。削除された後に残った私の顔は読者にとって、より「学者」的アイディアに満ちた横顔になるかもしれないが、それでは本当の私を描いたものにはならないのだ。

第二章 研究所、大学、アカデミー（一九六七年）

純粋理論の世界からとても純粋とは言えないブダペストの社会に戻ろう。『反均衡』の最初のハンガリー語ヴァージョンを書いた時には、まだ電子計算機センターが私の職場で、数理計画化にまだ半分ほど力を割いていた。だが、この時すでに、一九五八年に追放された科学アカデミー経済学研究所には、非常勤で籍を置くようになっていた。一九六七年に研究所長のフリッシュ・イシュトヴァーンから、フルタイムで戻って来いという誘いを受けた。これを受け容れ、以後二五年間、ここがハンガリーにおける私の職場になった。

経済科学分野の公的な第一人者

私を呼び戻したフリッシュ・イシュトヴァーンについて、少し記しておこう。ハンガリー科学アカデミーとそこに属する研究所は複雑なヒエラルキーにしたがって構成されている。フリ

ッシュ・イシュトヴァーンはアカデミー第九部の部長で、経済学、法学ほかの社会科学の指揮・運営の責任者だった。彼は科学アカデミー経済学研究所の所長であり、第九部内の担当分野の責任者でもあった。要するに、彼はもつともランクの高い研究所の所長だったが、ヒエラルキーの三つのレベルでポストを保有するのは稀なことだ。大きな権力が集中している構造の中で、長でもあり監督者でもあるという二重の役割を担っていた。矛盾した人物だった。精神的にはいろいろな価値観が競合し、行動では伝統的なものと慣習的なものが混ざって、いつも変化していた。まず、何よりも共産主義者だった。青年時代に裕福な家を飛び出し、迫害を受けながら非法法の共産党に入党し、死ぬまで確固としたレーニン主義の信奉者だった。一時、モスクワに亡命していたこともあって、その時の行動様式から、同僚たちとは距離をとり、完全に信頼関係を持つことはなかった。粗野な命令を行うような人ではなく、大声を上げるような専制

的な支配を好まなかった。ドイツとイギリスで研究を行ったことがあり、ソフトな話しぶりや如才ない紳士の振舞いに、その痕跡がうかがえた。学問研究者としては生産的でなく、重要で独創的な思考はひとつもなかった。他方、学問研究の組織者としては、名声を得ていた。可能で許される場合には、所属研究者の意見発表の自由を尊重していたし（もちろん、これを抑圧すること自体がグロテスクだが）、ソ連や他の東欧諸国のように、党のラインに従うように部下の研究者に強いることはしなかった。とくに実証研究を推奨し、現実観察を好んだ。

フリッシュ・イシュトヴァーンと私の間には、アンピヴァレントな関係が作られた。彼は二五歳年上で、我々の関係は家長的ないし父子的な色彩の強いものだった。彼は私を親しく「ヤンチー」と呼びかけ、私は他の皆と同様に、彼をフリッシュユ同志と呼んでいた。

ここで、繰り返しになるが、以前の章で別々に触れた出来事をまとめる必要がある。Sabbat Negy 紙の記者時代、フリッシュユは党の経済政策に関係する情報や指令を私に伝える役割を果たしていた。この機関紙編集局から追放された時に、彼が私を引き取ってくれた（給与は最低限まで減らされたが）。私の研究が報償を受けた時には、私を昇進させ、研究所の同僚たちに見習うべき手本だと論じた。一〇月革命時には私に電話をかけてきて、共産党の側に立っていることをラジオで話せと説得し

たが、断った。破壊の後には、党の壇上から私をマルクス主義の裏切り者と名指しした。研究所からの追放は彼が主導したものではなかったが、それを阻止することなく、厳格な党員兵士として追放命令を実行した。他方で、新しい職場を探すのを手伝ってくれ、著書の英語版出版も承認してくれた。

そして、今、研究所に再び呼び戻された。この先はどう続くのだろうか。私の仕事をどれほど評価し尊敬しているかを、いろいろな形で表現した。仕事を終えて家で横になっている時に我が家を訪れ、彼の後を継いで、研究所長にならないかと尋ねたこともあった（私は断った）。

何もなかったかのように

研究所からの追放は、私の人生の中でも大きなドラマのひとつだった。研究所への復帰は静かに、何事もなく進んだ。まるで何もなかったかのように。フリッシュユ・イシュトヴァーンは過去のことには触れなかったし、研究所の他の上司も私もそうした。

私の中にはさまざまな考えや感情が混ざっていた。当時、一九六八年に導入された「新経済メカニズム」の準備が進行している最中だった。研究所に戻る一、二年前に、党中央委員会書記で改革作業を指揮していたニエルシュ・レジュューと立ち話す

る機会があった。彼は何気なく、「貴方が復権されたのをご存じですよ」と伝えた。これに対して、「僕がどうやってそれを知るのでしょうか。誰も教えてくれませんでした」と答えた。一九五六―一九五七年に私の著書を読んだ者や、私の著書や一九五六年夏に作成した改革提案の議論に参加した者、それから当時そのテーマについて語り合った者の多くが、改革の準備作業に加わっていた。私の思考が彼らに影響を与えていると思っただ。ただ、誰一人として、一言もそのことを記していない。フリッツシュ・イシュトヴァーンもまたそのことには触れず、数年前には党の名前で改革の開拓者を批判し、とりわけ私には厳しい批判を浴びせた改革案を、今はまた現在の党の路線に従って、支持しているのである。

同時に、ここで経済改革に私がどう関係するのかを問いつめられたとしたら、困っていたと思う。当時はもう、人生の「ナイーブな改革者」時代を超えており、計画されている改革はそれほど遠くへは行けまいという確信が強まっていた。既存の体制に対する対峙は、もちろん政治的なものである。一九五八年に研究所に送り込まれた査察官がまとめた私に対する問責は、前に引用した通りである。彼らがイデオロギー的な敵対者とみなしたのであれば、それは正しい。実際、著作でも共産主義的世界観の腐食に言及していたし、革命の知的な活動の一翼をも担っていた。信頼できないと感じたのであれば、それも正しい。

友人の多くが獄中にいたり、亡命したり、職場から追放されていたし、マルクス主義を拒否し、党への参加を断った。著書だけが原因で研究所から追放されたのではなく、共産党に敵対したからだ。だから、今ここで「すべてが元に戻った」を言われてみても、私には意味をもたないのである。政治的な意味での「復権」は、他の同志がそれを受け容れない場合でも、共産主義者として残る者について言えることなのだ*。

* 一九五〇年代に流行ったジョークがある。コーンが党から追放された。そして、夜中に夢を見た。アメリカの軍隊がハンガリーを占領して、アイゼンハワーが一九一九年のホルティ・ミクローシュのように白馬に乗ってブダペストにやってきた。ラーコシ・マーチャーシュは跪いてブダペスト市の鍵を手渡した。アイゼンハワーは命令調で宣った。「ラーコシ。コーンを党に戻さない」と。もともと、一九六七年当時には、私は可哀そうなコーンの滑稽な夢から遠い世界にいた。

私の復職を決定した人々は、当時の決定を撤回しようとはしなかった。私自身は、私を追放し復職を決めた人々と何らかの合意があるという印象を与えなくなかった。どちらの側にも受け容れられる唯一の方法は、「何も追及しない」ということだった。そして、これこそ、カードール時代に一般的にとられた方法なのだ。

この恩讐を越えるというのは、何か棘が刺さったような感じだった。かつての政治的闘いの一時的な敗北のように、この時点ではこれが一番不快でない解決方法だと受け止めた。政治の舞台に踏み込んだ者は、自らの傷を舐めてはいけない。だが、研究者として、学問する者として、一九五八年に研究の自由に大きな傷を受けた。フリッツシュ・イシュトヴァーンには、この件について、何かを語る倫理的勇気がなかった。

信頼と忍耐

以下では私が同僚たちにとれほどの信頼感を感じていたかを叙述する。以下の分析からは一九六七年以前に友情関係を育んできた友人を除いた。ナジ・アンドラーシュと一緒に研究所を追放され、一九七三年に呼び戻された。リムレル・ユードイツトは私が採用した研究者だ。^{*}タルドシュ・マールトンは一九五六年頃に親しくなり、一九七〇年代末に研究所の同僚になった。ここからは研究所の他の同僚たちとの関係を記述する。

^{*} 軽工業への「流刑」時代の一九五九年、研究助手を一人雇えることになった。大学の知り合いを通して、一番出来る学生を紹介してもらった。こうして採用したのがリムレル・ユードイツトで、私の研究者生活で最初の「研究助手」だった。後に、彼女は良く

知られた研究者に成長していった。私が職場を変える度に、彼女も私と同じ職場に移ってきた。

研究所に戻ったが、直接係わりのあるような政治問題を話題にすることは、憂鬱な不安が抑止力になった。まだ私の中には尋問の体験が残っていた。親しい友人が尋問官に私の著作に付されたイデオロギー的なメモを喋っている。もしかして、今喋っている相手と同じ事をするのではないか、という猜疑心からなかなか解き放たれなかった。

仕事仲間も、このよそよそしい距離感を感じていたようだ。若くしてこの世を去ったファルカシュ・カテイとは一、二年一緒に仕事をして、互いに気に入っている仲だったが、ある時、叱責するような眼差しでこう尋ねた。「ヤーノシュ。言っごらん。どうして我々に対して、そんなに不信任を抱いているの」と。その時に、何が私の中にこのような感情を引き起こしているのかを実感できるように話した。どんな議論が展開されたかが問題ではなく、その会話の雰囲気私に影響を与えた。それから、私の信頼を悪用しないと感じた人には心を開き始めたが、その解凍は遅々たるもので、ゆっくりと、しかも多くの場合は部分的に進行していった。

後になっても、自分から進んで、完全にオープンに、その日の政治的重要ニュースについて議論したことはなかった（誰と

話しているのかを考へることなしに)。強い自己抑制を自らに課した。すべての人を、個人、著作、言動に従つて自分で評価し、信頼度の濃さを測つた。ヨーージェフ・アッティラは、「信頼を無駄に使うな」と書いている。私は本当に無駄使いしなかつた。

私の周辺にいる同僚たち、とくに若い人々には、政治的見解を披瀝するのではなく、別種の効果的方法で影響力を行使した私の作業スタイルの観察、会話から明らかになる私の専門的要求水準、著作を学ぶことから分かる知的方向性。これらのインパクトに耐える者は、多くのことを受け容れることができるはずだ。

時が経つにつれ、心を開いて話し合える相手が増えてきた。数年経つて、一、二名の同僚を研究所に招聘できる可能性も開かれた。グループ・リーダーにもなり、私の直接的な指導下で若い研究者が仕事をを行うようになった。ガーチ・ヤーノシュとラツコー・マリーアの夫婦は大学の教え子だ。二つのポストは取れないから、どちらかが研究所に来ないかと誘つた。彼らは相談して、マリーアが来ることに決めた。同じように、サポー・ユーディットも大学の教え子だった。リプタークが推薦したシモノヴィツチ・アンドラーシュは、大学の数学科を終えたところだった。後になって、ラキ・ミハイもグループのメンバーになった。カピターニイ・ジュジャはもともと高校の数学

教師だったが、計算機技術者として別の研究所の同僚と仕事をしていた関係で私の所へ誘い、同じような仕事に従事してもらつた。後になって、徐々に経済学研究者として、研鑽を積んでもらつた。これまで取り上げた人々は皆、私に比べて若い研究者だった。私のグループのメンバーではなかったが、研究者として我々のグループとともに仕事したマルトシュ・ペーラは、私と同年代で、数学専攻出身の研究者だった。

コルナイ・グループは共通の仕事と似通つた専門的視点で結ばれた集団である（これについては次章で触れる）。もちろん、人間的な親近感や友情でも結ばれていた。すでに触れたことが、私の周りで仕事をする場合には、専門的な繋がりだけでは不十分だった。Szabad Nép 紙の編集局時代もそうだったし、今この経済研究所でもそのように形成された。後のハーヴァード大学でも、同じような関係を作り上げた。仕事を組織化するのに、これは効率的でプロフェッショナルな方法でないかもしれないが、仕事の規準だけから主従関係を構築するのを避けた。しかし、こうした私の慣習や要求を疎ましく思つたことはない。私にとつて、人間関係の温かみ、友情や信頼は、何物にも代え難いものだった。

* 研究所の当時の研究体制にしたがつて、多数の研究グループが並存しており、経験豊かな研究者がそれぞれのグループを主導し

ていた。ここで言うグループは、このような組織化された「集團」という意味で使用している。

コルナイ・グループがきつかり一時半に一緒に昼食をとるのが習慣になった。早くお昼を食べるのを提案したのは私で、食堂で順番を待つのが嫌で、一番先に食べようと皆を急かしたからだ。いつも何人かの同僚が、我々の昼食グループに加わった。特別に旨い食事がでた訳ではないが、仲間同士で楽しく会話できるのが喜びだった。

同僚あるいは友情関係は私のグループのメンバーだけに留まらなかった。この時期に研究所に入ってきた他のグループの若い人たちにも広がった。パウエル・タマーシユ、マダラス・アツテイラ、シヨオシユ・カロイ・アツテイラ、マヨール・イヴァーン、ケルー・ヤーノシユ、ペテ・ピーテル、ケルテシユ・ガーボル、ミハイイ・ピーテルなどで、これ以外にも名前を上げると長いリストになってしまう。彼らは皆、注目される研究歴を経て、大学教授になった。このうちの何人かは、体制転換以後、短期あるいは長期にわたって、政治的な分野でも活躍した。彼らの思考が形成し始めた頃に、私は彼らと出会ったことになる。長い会話を続けてきた者もいれば、それほど親密でなかった者もある。何人かは大学の教え子にもあたる。研究所での彼らの研究を注意深く読み、注釈しただけでなく（当時

作成したメモは今でも保存している）、我々の間では研究、経済改革、さらには知識人生活や倫理の一般の問題が話し合われた。

私にとつて、グループ・メンバーたちとの会話や彼らの研究成果を読むことがたいへん参考になった。ハンガリー経済の現状、経済学者間の論争、国の一般的状況、将来の選択肢など、たくさんのお話を学んだ。これは精神的な爽快さを与える環境で、毎日ここに通うのが楽しかった。これとは逆の不快なことは少ししか語れない。私の仕事や個人的関係に影響を及ぼしたものがどのような力なのか知る由もないが、それは当人たちが語るべきものだろう。彼らとは今でも時々会話し、その何人かとはかなり頻繁に会つてもいるが、これについて、理解しうる態度による釈明はない。

研究所内部の関係ネットワーク、結節点、方向ベクトル、それぞれとの関係の強さは、社会学者が描ける対象になるだろう。こうした図が描ければ、どのような濃度やクラスターが形成されているかを示すことができるだろう。クラスターは種々の要因から形成される。

ひとつの結束要因あるいは分離要因は、数学手法の利用であった。この点で、ハンガリーの状況は数十年前のアメリカの大学経済学部と良く似ていた。研究者の多くは数学的モデルや計量的分析の利用を嫌っていた。我が国でも、数学の支配に恐怖

を抱いて敵対し、これを知的欺瞞と考える者もいた。過去にマルクス主義者だったか否かにかかわらず、またカーダール政権を支持するか否かにかかわらず、数学的手法を使う研究者は独自のまとまりをみせていた。

すべての大きな組織がそうであるように、我々のところでも、グループを牽引する際だった（魅力的あるいは嫌われた）個人がいた。

グループ形成やグループを分けるもつとも重要な要因は、世観や政治的見解だった*。もちろん、研究所の中では政治的見解を宣言する訳ではないが、誰がどのような見解に共感を抱いているかは誰もが知っていた。明らかに、西側世界の同様な職場よりは、我が国の方が政治的見解の共有が大きなウェイトを占めていた。

* 関係のネットワークはいろいろな規準によって形成されるので、当然、相互に重なり合っている。一人一人の研究者は同時に多くのグループと、緩やかなあるいは強い関係を取り結んでいる。

研究所総体で言えば、政治的視点からみると、常に異質な構成になっていて、その政治的スペクトラムはかなり多種で幅広いものだった。頑迷なスターリン主義者は一人としていなかったが、古いタイプのドグマに囚われた保守的共産主義者は何人

かいた。多くは漸次的啓蒙を旨とする「改革派共産主義者」に入る。彼らは多くの変化を望み、体制に多少の市場的要素を組み込むことや、より大きな批判の自由や「民主主義」を求めるが、基本的にはカーダール体制に安住を感じている者である。さらに、共産党と決別したり、距離をとったりする者、権力レジームに厳しい批判をおこなう者もいた。

研究所の政治的構成は時につれて変化した。一部の人が去り、新しい人が入ってくる。多くの同僚の思考もまた、時とともに変化した。それに従って、グループの規模や構成も変わった。この動的な過程をどの時点で区切ってみても、そこには常に政治的信念にもとづいて組織された非公式なグループが存在した。これを近くから観察すると、確かなことが言える。互いに近い考え（把握力）をもつ人々が、そうでない場合に比べて、はるかに大きな政治的信頼を抱き合うことである。私もまたこのグループに入る。政治的見解の違いに煩わされることのない個人的関係を望んだ*。

* 個人的に言えば、カーダール時代の弛んだ後の時期には、政治的・世界観的なクラスタの境界を硬直的に守ることはしなかった。明らかに私とは違う政治的信念を明瞭にした同僚がいたが、彼らと友情関係を結ぶことができた。

確かに各種のグループが存在したが、それぞれが塹壕を掘って、互いを撃ち合うことはしなかった。年配者も中年も（当時の私はこの後者に入る）皆、一九五六年のトラウマに囚われていた。それぞれが自らの世界観に従って、これを解きほぐす必要があった。ただ、この知識人世代に共通しているものがあつた。それは互いにイデオロギー的で政治的な戦争を始めたくなという思いだつた。種々のグループの間に、独特な *Tengra Dei*（神の休戦）が形成された。つまり、我々は君たちを攻撃しないが、君たちが我々を辱めないものと期待する。 *Leben und leben lassen*. それぞれの生活に干渉しないのだ。表だって激しい政治的な対立は起きなかった。

このような状況をどう評価できるだろうか。皆がそれぞれの原理を堅持し、屈辱的な譲歩を与えることはしなかった。*それが「研究所の外」で、それぞれの闘いを続けた（闘う関係があれば）。それぞれが時宜的で公的利益がからむことがあれば、自らの顔を表にだすこともできたし、研究の中で自らの視点を主張することもできた。しかし、「研究所の中」では、独特な「寛容」が支配した。互いに責めない。これをいったん始めると、蜂の巣を突いたようになり、外からもっと大きな傷を受けることになるからだ。独裁者の容赦ない仕打ちが待っている。多分、共通の危険、共通の敵という知恵が、相互の寛容を醸成したと思う。今ではこのような知的共同体を見つけること

はできないだろう。当時の権力関係では、カーダール体制の側に明瞭に立つ者やマルクス主義理論を標榜する者にとつて、研究所は保証された地位だつた。だが、権力的な地位から政治論争をふっかけられることはなかったし、マルクス主義的見解を「普及」し始めることもなく、違ったように考える者は当たり障りなく放つて置かれた。これは私にとつて、気が休まるものだつた。*

* 誰もがこの見解を共にするとは考えていない。急進的な見解もある。つまり、カーダール時代のこの地域的な「平和協定」は受け容れられない妥協であり、体制残存を延命させるものだと考える見方である。延命させたと考えることもできるが、個人の生活をより耐え得るものにしたとも言える。この価値評価は結局のところ、基本的問題に行き着く。「個人の運命をより良い方向に転換することを、大きな共同体の目的（今の文脈の中では、体制の速やかな転換）に従属させることができるか否か」。

** もちろん、研究所長だつたフリッツシュ・イシュトヴァーン、ニエルシュ・レジュエ、シポシュ・アラダールが政治的純化に努めなかつたということも一役買っている。加えて言えば、パウエル・タマーシュに対する政治的攻撃が始まり、「上から」追放が要求された時に、当時の所長のニエルシュ・レジュエは彼を擁護した。

後になって振り返つてみると、外はまだ荒海だつたのに、研

研究所は比較的平和な島だった。私にとって研究がもつとも重要な仕事であり、全力と最大限の集中を必要とした。それには安寧が必要だった*。

* 私生活で危機的な時期を過ごしていた私にとって、研究所の落ち着いた雰囲気は助け船だった。ラキ・テレイズとの最初の結婚が破綻した。一九七〇年にイェール大学で半年を過ごした後ハンガリーに戻り、ほどなく二番目の妻になるダーニエル・ジュジャとともに、新しい住居に引っ越した。

挫折した研究所改革

何度も外国へ旅行した。会議や講演に出かけただけでなく、長期に滞在もした。外国での生活がどんなものか、西側の著名な学問の府での研究や教育がどのように行われているかを、内部からみる事ができた。そこで観察したものはいくつかを我が研究所にも導入したいと考えた。一九六九年、二人の同僚シユミット・アーダムとコヴァーチ・ヤーンシユとともに、改革提案を作成した⁽⁸⁾。提案文書には三人の考えが反映されていたが、もつとも繊細で問題を引き起こしそうな部分は私が担当した。提案の要旨は、研究所の発展と出版との関係をもつと密にすべきだという点にあった。出版の価値をもつと重視すべきだ。

外国での出版をもつと評価すべきだし、著書の出版や論文を掲載する雑誌の権威を高めることに配慮すべきだ。

これらは皆、西側世界では至極当然のことだ*。しかし、ハンガリーではとても一般的に受け容れられたものではなかった。

* 西側ではすでにこれが極端な状況に陥っていた（現在もなお）。出版への異常な駆り立てが、弊害を生み出していた。これについては、後の章で扱う。

ハンガリーでの出版は十分に厳しい審査を受けない。水準の高い内容のある研究も出版されるが、それと並んで専門的な要請に依っていないものも比較的簡単に発表の場を得ていた。西側で発刊されるものは非常に少なく、定評のある雑誌に送ろうとする事も稀だった。経済における初期「市場社会主義」が注目されつつあった。だから、西側への輸出市場で地位を確保することが、真の製品品質テストになると分かっていたが、研究者の成果をこのテストにかける必要はないと考えていたのである。

出版物を厳しい国際的テストにかけることが遅れていただけではない。同僚の一部はほとんど何も出版しないで、研究所で無為に過ごしていた。いったん研究所に採用された者は終身そこにしがみつくことができる。能力のある生産的な研究者がポ

ストを探している場合でも、ポストを譲ることはない。

もうひとつ問題を指摘しなければならぬ。出版物がある者の多くも、西側基準からみれば、非常に生産性の低いものだった。西側の大学教授のように教育にエネルギーを割く必要がないにもかかわらず、その出版点数は（単純にその数だけを見て、西側の一流大学の同年代研究者が生み出すものに比べれば、僅かなものに過ぎなかった。

ここにまとめた要求はたんに西側の経験だけで作成されたものではない。自らの労働倫理や専門家としての野心を、他の研究者にも求めようとしたのである。ハンガリーの諺にあるように、「自分の生き方が、判断基準」なのだ。労働日の小さな部分を会話に割いてもよいが、ほとんどの時間は生産的な研究に使いたい。多くが際限なくお喋りに時間を費やしているのを見て、苛立った。もちろん、部屋の中の会話や議論が、表の生活や知的・政治的不信を補完する役割をもち、理念の明瞭化や新しい思考の覚醒を促し、新しい知識の普及に役立つことを否定しない。しかし、これらの会話の内容は、たわいない無内容なもので、我々の研究から貴重な時間を奪うものだった。

研究所の経理部長などは出勤時間を記録することで労働規律を締めようとしたが、これはグロテスクな行政規律で、何の役にも立たない。原動力は研究者の内部からでなければならぬ。西側の多くの研究者の場合、内的な動因は外的な刺激要因

と切り離されていないから、研究所への採用、研究ポストの維持、昇進、研究所の公式・非公式の顕彰条件を明瞭化することが必要だと考えた。

この改革提案の受け取り方は賛否両論だった。「言われたことは分かります」という態度だが、実際にはほとんどの同僚は提案された考えには親近感を抱いていなかった。マルクス主義者の書くものなど、西側の出版社や雑誌は投げ捨てるだろうという反論する者もいた（これは事実ではない。多くの反例を上げることができる）。さらに、東側で起きていることなどに西側は関心ないと言う者もいた（これも事実ではない。出版のチャンスは研究者がテーマを扱う専門的レベルに依存している）。個人的な会話では別の議論もあった。体制批判がかなりの所まで進んでいるので、これを合法的に出版するのは難しいというものだった（これは難しい問題で、後の章で詳しく扱うことにする）。

当時は、西側の雑誌の選考メカニズムに何の問題もありえないと考えていたが、今ではかなり批判的に見ている。時には理不尽にも、耳慣れない思考を展開したパイオニア的な論文を下し、重要な成果の公表を妨げることもある。価値があるとは思えないようなものが選考を通過してしまうこともある。とくに新しい重要な事柄がある訳ではないのに、主流派の思考の枠にはまっており、そのスタイルと手法をとっているからだ。この

ような問題や間違いがあるとしても、成果の真の学問的価値と国際的に認知された雑誌での公表には、強い相関がある。だから、事後的にも、権威ある雑誌に論文を送るよう勧めた考えは間違っていないと思う。

改革提案に対して、もうひとつ別の反論があった。「どうしても、そこまで出版にこだわるのか分らない」というものだ。経済政策の作成に参加したり、専門家としての役割を果たしたりすることも、これに劣らず、あるいはそれ以上に重要だという。このような場合、当然のことながら、出版された政府や党の方針にその名前は記されない。この議論にも加わった。確かに、経済政策の活動も認知に値する重要な成果だが、学問の道を歩もうとすれば、それだけでは不十分だ。

既述したように、世界観や政治的見解によって研究所内のグループが区別された。しかし、この改革提案は政治的クラスターの境界を突き破り、研究集団を再構成することになった。我々の提案を正しいものと受け止めた人もかなりの数に上った。というのは、すでに精力的に出版していたり、近い将来に成果を国際的な雑誌に掲載したい野心をもっていたりする者は、提案に親近感を抱いていた*。他方、提案に反対したのは、政治的見解に関係なく、西側基準の採用から見て、能力や勤勉さ、あるいは野心が欠如している者だった。学問的業績を（それなりに信頼できる形で）証明する出版競争に参加したくない者だっ

た。

* 改革提案を提出する前の時期に、すでに多くのハンガリーの経済学者（研究所の同僚を含めて）が、注目すべき成果を公表していた。この数はさらに増え続けた。この改革提案の議論からかなりの時間が過ぎてから、漸次的に、出版業績を専門的に評価したり、事前の基準に照らし合わしたりするようになった。

改革提案は実践的には失敗した。研究所の公的な基準や手続きには何の変更も加えられなかった。すべてが古いままに残った。

同僚たちが個人として、自らの専門家としての生活戦略をどのように決めていったかは、また別の問題である。数が少ないとはいえ、西側の専門的認知を得ようと努力した人もいる。彼らは意識的に、成功するか失敗するか分からないが、外国で出版しようと努力したり、外国での会議や講演で売り込みを図ったりした。しかし、ほとんどの者は競争に登録することすらしなかった。当時の同僚たちの多くと話し合う機会があった。体制転換の後に、彼らは間違っていたことを認めた。しかし、長期にわたった遅れを取り戻すことは、簡単ではない。

禁じられた教育活動——それでも教育した

一九五八年に党の査問委員が研究所に送り込まれた時のことは、すでに第6章に書いた。委員の一人のハイ・ラーズローは、「私が経済大学の学長である限り、コルナイはここで教えることはできない」と言い放った。彼がその言葉を守つただけでなく、その後継者も前任者の決断に忠実だった。多くの外国の大学から、教授の招聘を受けた。当時、ハンガリーの経済学教育を独占していた大学は、ブダペストのカール・マルクス経済大学(MKKE)で、数十年にわたつてこの大学から教授要請が届いたことはなかった。党の上部機関が「コルナイには研究を許すが、若者から遠ざけなければならない」という考えを、陰に陽に大学幹部に伝えたものと考えている。

* 一九五六年一〇月に、大学生たちがどんな刺激的な役割を演じたかを、党の指導部は覚えていた。だから、精神的に有害な影響を与える知識人を、学生から隔離しておくことに努めた。一九五六年の判決を受けた者のうち何人かはアカデミーの研究所で研究することを許可されたが、誰一人として大学の職を得ることはなかった。

カードール体制の崩壊がかなり進んだ一九八七年、当時の学長のチャーキ・チャバから初めての招聘状を受け取った。以下は彼に送つた返答である。⁽³⁵⁾

「貴方の招待を受けたのは、すでにハーヴァード大学の招聘を受けた後です。貴方の提案は有り難いですが、遅すぎたと言わざるを得ません。人は人生を一度きりしか生きられません。MKKEの提案がもつと前にあれば、私の人生がどのようなになっていたかは分かりません。しかし、はっきり言えることは、ハーヴァード大学の招聘を受ける前であれば、ここに至る三十年間、いつでもMKKEのお役に立つように全力を尽くしたものだと思えます。若いハンガリーのエコノミストを養成する所に、私が招聘されず、教授権を与え精神的影響を与えるのを拒み、若者との密な関係を築き上げることをも拒まれたことは、私の全研究生生活において苦痛を感じさせるものでした。これは私にとって、取り返しのできない損失であり、他の教授や研究業績で埋め合わせることはできません」。

教授職を得なかつたが、それでもいろいろな形式をとつてMKKEで教えることができた。一九六八年には「名誉教授号」も獲得した。ただし、これは教授としての権利を何ひとつ伴わないもので、セミナーを開催したり、講演シリーズを受け持つたりできるものだった。三年にわたつて、「専門セミナー」を開いた。真似できる事例を知らなかつたので、自分流に教育方

法を考えた。一年を通して、自分の研究から選んだ問題を扱った。この仕事がいへん好きで、セミナーに参加したメンバーの思い出が今でも残っているし、温かい絆で結ばれている。月並みな教科書類より、研究者自身の思考を直接知ることが若い人への有効な勉強材料になると思ったし、だからこそ通常の教科書では学ぶことができないような非正統的な知識を与えようと思った。知識の伝達よりも、批判的思考精神を呼び起こすことに努めた。このセミナーに参加した学生から、それなりの数が経済学者、教員、経済指導者に育っていった。

一九七〇年に形成されたライク・コレギウムとの関係はまた、特別なものだ。学寮長だったチカーン・アッティラがハンガリーで唯一ともいえる精神的なサークルを創り出した。ライク・コレギウムはラーコシ時代に解散させられた人民コレギウムやエトヴォシユ・コレギウムの伝統を受け継ぎ、パリのエリート校 (*grandes écoles*) やオクスフォード・ケンブリッジのカレッジの経験にもとづき、これに独自の革新で修正ないし補充したものだ。MKKEの最良の学生が選抜を経て、コレギウムの学生になる。大学の通常の授業では教えないような新しい知識を教える。ドクトリンから決別して独立した思考で学生を育てる。そのことは、講師陣に良く表れている。そのリストには、数年前まで獄中にいた人、一九七〇年代に組織された「民主的反対者」、共産主義体制と対峙する反体制の精神的指導者

たちが並んでいた。

何度もここで講義した。新しい研究を準備している場合は、まず初めに柔軟な頭脳と理解力をもつライク・コレギウムの学生の前で講義して、自分の考えを試してみた。

PhD取得に必要な大学院教育は、多くの西側諸国では大学が行っている。第5章で述べたように、ソ連を模範にしている諸国は別の方法をとっていた。PhDに同等な「博士候補」学位の取得に必要な鍛錬、いわゆる博士候補準備課程を組織するのは大学ではなく、大学から分離されてこの目的のために設立された中央機関、学位認定委員会が組織する。ここが博士候補準備生を指導する「準備生指導者」を指名する。これは西側でいう大学院生アドヴァイザーの東側版に匹敵する。いろいろ違いはあるが、たとえば西側では学生がアドヴァイザーを選ぶが、東側ではいろいろな基準（政治的観点も）によって、中央機関である学位認定委員会が指名する*。

* もちろん、どちらの制度でも、一方通行的な決定が行われる訳ではない。アドヴァイザーにしても候補準備指導者にしても、その受諾が必要である。

私も後年になって、ハーヴァード大学で多くの大学院生のアドヴァイザーになった。ハンガリーでは状況が異なっていた。

私は一九五六年に博士候補学位を取得したので、ハンガリーの法規によれば、この学位取得後は私も博士候補準備生の指導者になる資格があった。しかし、学位認定委員会が存続していた半世紀の間、私に一人の候補生も割り当てなかった。西側の言葉で言えば、ハンガリーでは一人たりとも大学院生を私に委託しなかった。

これを考えると、胸が痛む。西側の大学では教授がよく「私の学生だった……」という言い回しを使う。PhDの大学院プログラムでアドヴァイザーだった関係をこのように表現する。この意味では、私には「私の学生だった」と言える学生がハンガリーにいない。「私は自分をコルナイの弟子だと考える」と公言する経済学者もいることが、少しの慰めになるだろうか。

アカデミー会員になった事情

ソ連を模範にしたハンガリー科学アカデミーは、いろいろな役割領域をもっている。アカデミー付属の研究所員として、私はアカデミーの有給の被用者だった。アカデミーは一万人以上の被用者を雇っている雇い主だった。

同時に、ハンガリー科学アカデミーは国のアカデミックな伝統的役割をも担っている。自らを「最高の科学者の組織」と宣言している。しかし、誰が「最高」だと判断するのだろうか。

アカデミーの基本規則の字句を読む限り、判定の手続きは西側のアカデミーが採用しているものと大差ない。慎重な事前の評価にもとづいて、アカデミー会員が自立的に秘密投票による多数決で、新しい会員を選ぶとある*。実際にこの選考がどのように行われるのかを、もつと近くから検証する必要がある。私の事例に即して見ると、よく分かる。

* 会員には二段階ある。低い方はアカデミー準会員で、高い方がアカデミー正会員である。準会員になるのが「大飛躍」で、誰かを会員にしたければ、この飛躍のために努力しなければならぬ。その後の昇進にはもう何の問題もない。準会員は一定の年月の後、自動的に正会員になる。

当時のアカデミー規則をよく読めば、アカデミー会員には「もつとも進んだ世界観」を我が物にしていることが期待されている*。私をアカデミー会員に推薦しようとした人々は、ここで問題にぶつかった。諜報機関の調査にも記されている通り、自らの宣言によつて、私はマルクス・レーニン主義者ではなかった。そのことは、私の著作を読んだ専門家なら誰でも分かったことだ。

* ハンガリー科学アカデミー基本規則第一条(1)項にはこう記

されている。「(ハンガリー科学アカデミーは)弁証法的唯物論の科学的世界観にもとづいて(活動を行う)」と。

* * アカデミー会員とロビー活動して、投票依頼をする「自薦」者は常に存在する。これとは反対に、このような自己宣伝活動を潔とせず、会員の良心に任せざる者もいる。私についていえば、アカデミー会員の場合も他の顕彰の場合も、常にこの後者の部類に入っている。一九七〇年代に私のアカデミー会員を支持してくれた人々は、自らの専門的な判断とイニシアティブで行ったものである。

アカデミー会員の中で私の会員問題が浮上した一九七〇年代初め、私は国内だけでなく、国外でも名前を知られるようになっていた。しかも、当事者にとって不快なことに、すでにアメリカ科学アカデミーが私を会員に選んでおり、その他の国際的な顕彰をも受けていた。当時のカードル体制は、ハンガリーが文明化された文化的で「西側の」な精神生活を保持していることを対外的に顕示したいと望んでいた。ハンガリーの研究者がアメリカ科学アカデミー会員なのに、まだハンガリーの会員でないことをどう処理するか。私の会員資格を議論している場合ではなかった。

ここで、会員選出の形式的なプロセスを叙述せざるを得ない。それなしには、実際に何が起こったのかを理解することができない。正式な選考過程は二段階で行われる。まず、対象候補の

専門分野の部会(私の場合は、法学・経済学・その他の社会科学が属する第九部会)が、総会に推薦する候補を秘密投票で決める。ここでは、投票の過半数を得ることが必要になる。次に、アカデミー会員全員が集まる総会で、再び秘密投票で、部会から推薦された候補について採決する。総会の投票はかなりルーティン的で、通常、部会が推薦した候補が大多数の得票を得る。したがって、本当の闘いは総会に推薦する部会のところで行われる。

アカデミー会員のほとんどが黨員だった。部会の「公式」協議に先立って、部会の黨員による会議もたれることは、公然の秘密だった。この黨員会議で、候補に上げられた人物のうち、誰に賛成し、誰に反対するかが決められた。共産黨員が多数を占めている訳だから、結局のところ、黨員が新しい会員を決めることになる。

私が初めて候補対象になった一九七三年会員推薦のケースでは、事前の選考過程である黨員会議で否決された。現在入手しうるアルヒーフから分かることは、党中央の関係部局が党の最高決定機関である政治局に対して、一九七三年のアカデミー總會準備について報告を作成している。⁽¹³⁾この報告で、黨員がどの候補を支持し、誰を否決するかを記している。私の場合、フリッシュ・イシュトヴァーンは支持したが、共産黨員のほとんど(その中には、大学での教授を禁止したハイ・ラーズローも

いる)が反対した。^{*} 政治局はこの件について、私の候補推薦を「支持しない」(禁ずる)と決定を下した。⁽¹⁵⁷⁾

* 党中央の担当部長であるコルニデス・ミハイは、一九七五年に再び私の候補指名が問題になった時に、一九七二年の最初の候補指名に際して付された意見を引用している。政治局会議で読み上げられた記録は、次のようになっていた。「最初に名前があがった時には、反対意見が聞かれた。次のように主張する者もいた。専門的レベルは低く、水準に達しておらず、実践から切り離された象牙の塔的なものであり、政治的に信頼できないものと考えらる」。

次の選考は一九七六年総会だった。ここでも、事前の選考プロセスが展開された。この時期には、党員会議で反対するものはかろうじて多数を占めるに過ぎなかった。それでも、党員会議が私の候補指名を拒否するのに十分だった。

慣例にしたがって、党中央の関連部局が一九七五年一〇月の政治局会議に、一九七六年のアカデミー総会準備に関する報告を提出した。その中には、私の問題も含まれていた。報告は二年前の政治局会議における否決決定に触れながら、「事態は本質的に変化していない」という意見を付していた。⁽¹⁵⁸⁾ これにしたがって、政治局は私の候補問題を即決することなく、後に扱う決定をおこなった。

この後、予期せぬ転換が生じた。ハンガリー科学アカデミー第九部会で、経済学と法学アカデミー会員の会議が開かれた(ここには党員会員だけでなく、会員すべてが参加する。この会議が規則の上で、候補を「決定」する)。シナリオ通りであれば、つまりすべての党員会員が事前の打ち合わせ通りに反対投票すれば、秘密投票で私が多数を得ることはできないはずだった。

ところが、驚いたことに圧倒的多数が私の候補指名に賛成票を投じたのだ。ということは、党員会議で私への支持を表明しなかったが、いわば党の規律を破って、秘密投票では私に投票した者がいるのだ。私他に、党との関係で問題なかったもう一人の経済学者が、必要な多数を獲得した。

ただ、問題を複雑にしたのは、党中央が支持した二名の経済学者がちょうど五〇%の賛成票を得たことだった。アカデミーの規則を字句通りに解釈すれば、彼らを総会に候補として推薦することができない。過半数に一票足りないからだ。

党のアカデミー担当者にとって、悩ましい状況が創り出された。政治的に疑問符が付くコルナイが多数を得て、党が推薦した候補が多数を獲得できなかった。この意思決定を下せるはずのアカデミー内部では問題を解決することができず、かといって党の中級機関でも処理できないディレンマを生み出した。明らかに、党の最高機関である政治局が決定を下す必要があった。

一九七六年一月、政治局会議で再びアカデミー会員問題が議論され、新しい報告が用意された。担当者は、「コルナイの仕事に対してさまざまな関心が寄せられ、全体として好意的な意見が得られた」と報告した⁽¹⁸⁾。最後に、カーダール・ヤーノシュが次のように見解をまとめた（以下は会議録の引用）。

「これらの変化を勘案すれば、私はコルナイを受け容れるべきだと思う。というのも、彼の政治的思考がそれほど影響力をもつとは思われないからである。比較するのは難しいが、これは党の機関や党員に関するのではなくアカデミーの問題で、政治的な問題が多少あっても、その学問成果がポジティブで生産的なものであれば、有用なアカデミー会員となれる。党員の古い原理的確信の度合いに合致しないとしても、これを排除する理由にはならない⁽¹⁹⁾」。

これで問題が決着した。この後は、私の会員問題は障害なく進んだ。

他方、党中央は適切なバランスを保証するの必要を感じた。規則はあるが、五〇％の得票を獲得した二名を総会の投票にかけべきだと考えた。コルナイの他に三名がアカデミーに加われれば、適切なバランスがとれる。そして、その通りになった。一九七六年の総会では、四名の経済学者の新会員を選出した。

一九七〇年代のアカデミーの自治、主権の一部である秘密投票、規則の適用は、このように機能していた。選考では共産党

の権力的視点を貫徹するという意向と、学問的業績の勘案が、独特の仕方では混ざっていた。政治的基準によって選考するといふ強い圧力はアカデミーの組織構成に影響を与え、今日にいたるまで影響を及ぼしている。

私のケースをアメリカの場合に喩えてみると、国立アカデミーあるいはアメリカ科学アカデミーの会員選出をアメリカ合衆国政府が議論し、最終的に大統領が誰某が良い、誰某がなるべきだと言っているようなものだ。いかに馬鹿げた手続きかが分かるだろう。

以上の出来事は、アカデミーの自治の形骸化と並んで、このカーダール・アーツェル（当時の文化担当政治局員）の文化政策に特徴的な譲歩容認の姿勢を良く示している。しかし、彼らはひとつひとつの譲歩によって後退した訳ではない。私の会員問題のように、秘密投票で反逆する党員の一部がそう望むなら、それでも構わないという譲歩をする。同時に、引き続き党の掌中に収めておくために、党のラインに従う多数を確保するのである（「自治」組織内部で政治的意思を貫徹させる形式的条件がそれであれば）。

アカデミー会員の特権

共産主義体制下の科学アカデミー会員は特別な地位にある。

給与が引き上げられ、さまざまな特権を享受する。

ハンガリーと比べて、ソ連のアカデミー会員の方が世間的評価（地位や肩書きの相対的な Prestige）は高い。私の会員選出からほどなくして、私の仕事を知っているソ連の友人からの提案で、ソ連科学アカデミーからモスクワ訪問の招待を受けた。空港に到着したが、誰も迎えがいなかった。しかし、とにかく宿舎に辿り着いた（当時はそれほど簡単なことではなかった）。翌日朝、電話が鳴り、ソ連アカデミー国際部からお詫びが入った。昨日まで、私のことを「博士候補」にすぎないと考えていたというのだ。そして今、アカデミー会員に選出されたことが分かったという。車を送る必要があったのに、失礼があったと謝った。この時点から、運転手付きの車が割り当てられた。

ハンガリーでもアカデミー会員の肩書きは、それなりの重みがあった。会員選出に先立つ数年前に、電話付きの小さなフラットから、新しい大きなフラットへ引っ越した。新しい住宅はさまざまな利点をもっていたが、電話がなかった。携帯電話を一時も手放せない若い人には想像できないだろうが、当時は電話を敷設するのに何年も待たなければならなかった。もしかしたら、敷設を助けてもらえるかもしれない。そこで、引っ越しして間もなく、一九七五年に新しい研究所長に就任したニエルシュ・レジューに、電話を敷けるように働きかけてくれないか

と頼んだ。少し前まで、大きな権力をもつ党本部の書記だったから、経済関係の人々は彼の言いに分に注意を払っていた。彼はこの件で関係者と話ししてくれ、電話・郵便局の知り合いのアドヴァイスを受けて、次のように提案した。「今は特別に電話を設置できる時機ではない。もう一段階上に行くまで待って、科学アカデミー会員になったらもう一度やってみよう」。そして、会員になった。ニエルシュ・レジューに電話したら、数日経って、電話工事が現れた。

特権を受ける者になることは、倫理的なディレンマを引き起こす。さまざまな感情が私の中に入り交じっていた。他の研究者や人々が享受していない特権を受けたという意識は、悩ましいものだった。しかし、自分が獲得したものはけっして分不相応なものではないと判断した。私の仕事を率直に評価した同僚たちが、私の選出のために闘ってくれた。だから、アカデミー会員に伴う優遇措置を快く受けようと思った。

* 西側の友人との会話で、何度となく経験したことがある。それはアカデミー会員が享受している物質的な特権について、完全に間違った観念を抱いていることだ。多くの人が、西側の水準で測っても特別に高い生活水準で生活していると考えている。もちろん、これは現実と違っている。アカデミー会員の「特別」給与は、西側の教授のそれに比べると端た金にすぎないものだ。アカデミーの保養所も二つ星か三つ星のホテルのようなもので、西側の教

授の方がよほど立派なホテルを利用することができる。確かに、専用車が空港に出迎えることはないが、問題なくタクシーを使える。それに、電話を敷設するのに、コネを使う必要もない。

社会主義体制の他の特権グループと同様に、アカデミー会員が享受したものは、平均的に低い研究者の生活水準に比較して、物質的な特権を受けるといふ程度のことだ。アカデミー会員の特権の中で、私にとって一番重要だったのは、旅行の制約や制限が緩まったことだった（完全に自由になった訳ではなかったが）。

第12章 模索と準備（一九七一年―一九七六年）

――「強いられた成長」と「非価格シグナルによる制御」をめぐる

『反均衡』と題する著書は一九七〇年に出版された。これに続く六・七年は、さまざまな精神的刺激が私に影響を与えた。読書、討論、種々の方向に向かった私の研究、旅行、消費者としての経験、自宅の建築を通した個人的な出来事などがそれである。今になってこの時期を振り返ってみると、これらの経験があったお陰で、一九七六年から開始した社会主義経済の包括的分析を準備することができたし、かなり後になって始めた研究や人生に大きな影響を与えた出来事を経験したと思う。もちろん、この時期を、数年後に書き始めた著書の「準備」期と名付けたのは、事後的に考えた場合のことである。一九七一年にはまだ不足経済をテーマにする著書を書こうと考えもしなかった。この自伝の目的のひとつは、回顧や体験にもとづき、経済学研究を通して創作活動がどのように展開されるか、理解や知識がどのように獲得されていくのか、あるいは突然生じる袋小路への迷いがどうして生じるのかを示すことにある。このため

に、新鮮で精神的な出来事が、後に創作された著作にどのように影響したかを示す関係を取り上げることになる。本書の他の部分と違って、本章は論理的な構成をとっていない。多種の継起した事柄あるいは並行的に進行した事柄や、精神的な刺激をまとめ上げる力が、一九八〇年に出来上がった著書に結実するのである。

この時期、ハンガリー経済において重要な出来事が進行していた。一九六八年に熱狂的に始まった改革は一九七〇年代初めに停滞し、しばらく逆方向の反改革勢力の側に政治権力が傾いた。いくつかの点で、明らかな逆行が見られた。精神生活やイデオロギー面でも、以前の引き締め意図が感じられるほどになっていた。もちろん、これらの状況が私に影響を与えたことは間違いないが、これ以外にも影響を与えないではおかない衝撃的な体験があった。

強いられた成長か、調和的成長か

オランダの経済学者ヤン・ティンバーゲンは、ラグナー・フリッシュとともにノーベル経済学賞の第一回受賞者だが、ロッテルダム大学の「De Vries 講演シリーズ」の一九七一年講演に私を招聘してくれた。

ティンバーゲンは今まで出会った人物の中で、もっとも傑出した一人であった。途方もない知識と思考の獨創性が、簡明さと謙譲さや心の温かさに伴われていた。私が見つけた唯一の弱点がある。それは、誰もが彼と同じように、合理的かつ明晰で利他主義的であると信じるほどにナイーブな点だ。

この特別に名誉ある招聘に身震いし、いつものように新しいテーマを見つけなければならぬと思った。この時期まで、長い期間にわたって長期計画化の可能性の問題に携わっており、成長戦略をめぐる議論にも参加していた。だから、オランダ講演のテーマとして、「成長理論」をめぐる問題領域を選ぶことにした。

次のような喩えで講演を始めた。「上半身は上質の材料で仕上げられたワイシャツ、洒落たネクタイ、エレガントな上着で装いながら、擦り切れたズボンと穴の空いた靴を履いているような人は、非調和な印象を与える」⁽¹⁸⁾。同じような非調和は、

種々の経済セクターが不均等に発展している諸国にも観察できる。私の講演はいわゆる「社会主義的工業化」理論の批判で、成長過程で生じた不比例性、非調和や重大な問題からその功罪を明らかにしようとしたものである。ハンガリー語の表題で使った「強いられた成長 (erőltetett növekedés)」より、英語の *push* の方が内容をうまく表現しているかもしれない。先を急ぐ、出来るだけ高い成長率を達成する、それも住民の生活水準の向上を犠牲にして、重工業の成長を優先する。この成長政策は、これまで蓄積された国民資産、建築物、機械・設備、道路などの適正な維持管理、保健や教育、環境のすべてを犠牲にし、適切な危機管理の備蓄すら犠牲にするものだった。

後に「強いられた成長か、調和的成長か」と題した書物になった私の講演は、当時、大きなセンセーションを巻き起こしたアルバート・ハーシュマンとポール・ストリーテンの不均衡成長理論に議論を挑むものだった⁽¹⁹⁾。彼らの議論によれば、発展途上国における不均衡状態、不足、ボトルネックの存在は、利点ですらあるという。なぜなら、不活動な社会に対して、これらが比例性や均衡の回復を促す強いインパクトを与えるからだという。私はこれとは正反対に、社会主義経済における苦い経験から、これらの不比例性が利点よりもはるかに多くの問題を引き起こしていることを知っている。^{*}社会主義経済で作成される計画の問題は不活動を生むことにあるのではなく、超活性的で

強引な投資を準備させることにある。私の研究の核心は、この歪曲された強制成長と不足の連関を取り出すことであつたが、当時はまだ、この二つの問題領域間の因果関係を分析するものではなかつた。

* この著書は中国語にも翻訳された。最近、中国を訪問した折、この分析が話題になつた。非常に加速された過熱的な成長と、それに伴う一面的な「成長信仰」の影の部分や社会的損失が、先鋭さを増している。調和的成長の要請を強調することが、時宜に適つたものになつてゐる。

強いられた成長理論の検証に関連して、多くの研究者と共同で、ハンガリーの統計データを利用した動学的同時推計モデルの構成やその応用を行つた。この時に、推計や分析に計算機を利用する手法を知ることになつた。われわれが「計画吸引」と呼んだ計算では、不均衡成長がインフラストラクチャーの保全をないがしろにする有害な帰結をもたらすことを明らかにしている*。

* この研究には、妻のダーニエル・ジュジャ、マルトシュ・ペーラ、ヨナーシユ・アンナが加わつた。

英国ケンブリッジへの招聘

一九七一年にジュネーヴの会議に参加した。イギリスの経済学者、リチャード・ストーンも参加していた。一九六三年に初めてイギリスに旅行した時に、彼と知り合つた*。個人的に誘いを受け、ケンブリッジ大学への常勤研究職への招聘を提案された。当時のケンブリッジでは、二つの経済学グループ間の緊張が高まつてゐた。フランク・ハーンをリーダーとする数理経済学グループが、ジョン・ロビンソンやカルドア・ミクローシユ（カルドア卿）と対立してゐた。この二つのグループは私が教授職を得ることを望んでゐたようだ。二つのグループ間の緊張関係を和らげる役割を果たせるのではないかと考えたようだ。ストーンは彼自身の希望としてではなく、同僚からの依頼として私に教授職を提案したのである。

* ストーンは理論に閉じこもつた学者ではなく、実践に役立つような研究に関心をもつてゐる学者だつた。国民経済計算体系を主導した学者であり、国連がこの体系を受け容れ、以後、国民経済計算の統一体系と比較研究が可能になつた。ストーンはこの数年後にノーベル経済学賞を受賞した。仕事に対する献身と日常的な娯楽が、うまく調和してゐる人だつた。いろいろな役割をこなしていたが、そのなかでも自慢のひとつは、キングズ・カレッジの

「ワイン委員会」の長を務めていることだった。この委員会はカレッジのワインセラーが購入するワインを決定できる権限をもっているのだ。

ケンブリッジと言えば、ケインズが在籍した経済学の牙城である。私が最初に西側学界に足を踏み入れた場所であり、数百年の伝統をもつカレッジが並び、草花に満ちた公園と小川に漂う安寧に満ちた世界だ。この時、二度目の亡命の機会が訪れた。この時はもう、一九五六一―一九五七年の亡命の波が押し寄せた不安に満ちた時期とは違っていた。あれから一五年の歳月が過ぎ、今、残りの人生に世界の最高学府のひとつから教授職が提示されている。

少し考える時間をもらい、一緒に会議に参加していた妻と話し合った。その後、たいへんな榮譽に感謝しつつ、断りの返事をした。この「亡命か残留か」という決断のディレンマについては、後に詳しく扱っている。ここでは、時間的な経緯で、この出来事を記した。

腰までギブス——ケインズとハーシユマン

一九七二年に二度の手術を受けた。両肩の痛みが激しくなり、手術によってこの痛みを除去する以外に方法がなかった。何週

間も上半身をギブスで固め、動きが制限された。^{*}読書するのに理想的な状況だった。一〇ベッドの病室はいっぱいで、椅子ひとつ入れる余地もなかった。起きあがれるようになってから、ほとんどの時間を廊下で過ごした。少し経って、家に帰ることが許された。病院や家に見舞ってくれた友人たちは、推理小説などではなく、ケインズの『雇用、利子、貨幣の一般理論』を手に見ているのを見て驚いていた。

^{*} なんともグロテスクな様相だった。家に戻るエレヴェーターの中で、子供が私を見て、怖がって泣いたのを覚えている。伸びた爪を水平の状態に保つように手首が固定されていた。ユーモアのある息子のガーボルはこれを見て、ズボンを吊り下げるハンガーにびったりだと言い、この提案を图示して見せた。

一九五七―一九五八年頃、独学生だった時に、一度マクロ経済学を学んだが、当時は記憶の別の場所に仕舞い込んだままだった。ケインズを再読することで、「ケインズの不均衡論を不足経済にどのように適用できるか」という思考が生まれた。

ケインズにとって資本主義の弊害を分析する際のキーになる概念が「失業」だったとすれば、私にとって分析で同じ位置を占めるものが「不足」であった。ケインズは需要制約が売り手と買い手の取引を規定する経済を記述している。所与の価格で、

生産者もつと多くのものを生産できるのだが、需要が十分にない。私が描きたかったのは、これと正反対の現象である。つまり、供給制約が売り手と買い手の取引を規定している経済状態である。所与の価格で、消費者はもつと多くのものを購入できるのだが、供給が十分でないのだ。

もうひとつ、この時期に私に大きな影響を与えた著作がある。アルバート・ハーシュマンの明晰な著書『Exit, Voice and Loyalty』がそれである。その基本的な思考をひとつの簡単な事例で示すことができる。あるレストランの常連客が出される料理に不満をもつようになった。この場合、どうすればよいか。ひとつは、店の店主に不満を告げる（声による抗議）。もうひとつは、別の店に移る（退出）。とは言つても、長年通い続けた店への愛着が、退出行動を抑制することもある（忠誠）。

いろいろな状況が、この図式に類似している。馴染みの店に不満を感じる消費者、株式市場の株主、今通っている学校の生徒や両親にも、同じようなディレンマが見られる。苦情を聞く耳をもっているか、問題除去のために何らかの措置をとるだろうか。誰かが声を荒げる危険があるだろうか。退出の効果はあるだろうか。そもそも、退出の方法があるだろうか。このようなハーシュマンの思考覚醒的で挑発的な質問は、私を不足経済の問題へと導くことになった。フィアットやシトロエンの経営者は、車の品質に対する苦情が殺到すれば、熟慮せざるを得な

いし、これまで忠誠的だった顧客が無言のままトヨタやフォルクスワーゲンに乗り換えてしまったら、驚愕するだろう。シユコダやトラバントの経営者は、買い手の声に関心があるだろうか。製品購入に何年間も行列に並び待機しなければならぬとすれば、乗り換えを恐れる必要はどこにもない。不足経済には有効な抗議（声）も脅迫的な退出も存在しない。好きだろうが嫌いだろが、これしかないのだ。

ハーシュマンが強調するように、シグナルとしての抗議（声）や退出には、（うまく行く場合には）フィードバックが付随している。メカニズムが良好に機能している場合には、シグナルは状況を好転させる影響をもつ。この二つのシグナルが障害なく貫徹し、両方とも効果があれば、システムあるいは下位システムは効率的に機能する。

ハーシュマンの思考は経済の枠を超えている。彼自身、スターリン主義的共産党の党員が置かれた状況を指摘している。本当に重要な問題について声を上げることができないし、自発的に党を去ることもできない。なぜなら、報復を覚悟せざるを得ないからである。フィードバックの閉鎖がスターリン主義党の硬直性を引き起こし、重大な退化をもたらす。あるいは、もうひとつの思考経路が、亡命のディレンマになる。国に留まり、不満の声を上げるか、それとも退出し国を去ることを選択して、国の状況に対して抗議の意思を表明するかである。

当時は書物でハーシュマンのことを知ったのだが、一〇年後にプリンストンの高等研究所に招聘された時に、個人的に知り合うことができた。流行の主流派から距離をとりつつ独創的な視角を保持し、その仰天するような幅広い知識と読解力は私に大きな精神的影響を与えた。

手術の後、病院から家に戻ったが、腰までギプスを嵌めたまま、母の八〇歳の誕生パーティに加わった。母はこの日を待ち焦がれていて、あまりの盛大さに落ち着かない様子だった。家族全員が加わって、写真を撮った。それから数ヶ月して、母は静かな眠りについて、もう目を覚ますことはなかった。あの快活な声を聞くことができない喪失感、言い尽くせない。家族の治療にあたった医学教授たちをとくに尊敬していて、「著名な教授」と口癖のように話していた。母にとつて、人に与えられる資産や政府機構の地位に比べて、「教授」ははるかに高い地位だった。息子が教授になるまで生き長らえることなく、アメリカにいる我々を訪問できなかつたのは、なんとも残念至極だ。セント・イシユトヴァーン環状通りにあるサライ菓子店でコーヒを飲みながら、年老いた友人たちに自慢話を聞かせたことだろうに。

プリンストンでの講義

術後の回復も進み、一九七二年は丸一年、アメリカに滞在した。最初の逗留地はプリンストン大学で、一学期をそこで過ごした。^{**}若い経済学者の種々のタイプを観察することができて、興味深かった。私のコースにはヨーロッパからの学生が多数参加していて、資本主義経済のさまざまな問題を考えつつ、一定の修正を加えた福祉国家への方向を模索していた。こうした思考が計画化への関心を高め、「内部」から計画経済を研究した者がそこで何を見たのかを知りたかつたようだ。コースに参加していた二人の学生とはプリンストンで友情を深め、以後も交友が続いた。その一人がルカ・カツェリで、一九八〇年代初めの社会党のパパンドレウー政権時に、ギリシア計画庁長官を務めた。もう一人はケマール・デルヴィシユで、世界銀行の副総裁を務めた後に、経済危機の処理のためにトルコに戻り、社会民主主義的政治的視点から、難しい歳月を大蔵大臣として乗りきった。トルコとギリシアとの対立には長い歴史的過去があり、いろいろな原因によって、次から次へと新しい問題が起きていく。しかし、民族を越えた大学の精神的世界の中では、トルコ人とギリシア人、その家族同士が友情を育んでいた。

* 前にも約束した通り、読者に旅行記を読ませようとしているのではない。その約束は破らない。本章でもまた後の諸章でも、私の逗留地について記しているが、それは旅行記ではなく、それぞれの地における知的な体験と政治的な経験を記すものである。

** 多くのミクロ経済学の著作で知られる我が同胞のリチャード・クウォント教授からは、本当に温かく配慮の行き届いた援助をいただいた。忘れることはできない。

ルカ・カツェリ、ケマール・デルヴィシユや他の類似の思考を持つ学生は、資本主義経済の左翼的な方向への改革に親近感を抱いていた。体制を清算して、別の社会主義体制に代えるという意図はなかった。共産主義体制の多くの国における問題の深刻さが、革命的な理念を抑制したのかもしれない。当時、プリンストンにはもうひとつの学生グループがあつて、自らを「ラディカルな経済学者」と名付けていた。マルクスの『資本論』を一生懸命に読解していた（私が二五年前に読んだように、一言一句、丁寧に読んだとは思わないが）。彼らは私が何者で、どこから来たのかを知っていたし、私の講義が「現存する」^{*}社会主義の問題であることも知っていた。にもかかわらず（それゆえに）、誰一人として、私のコースに参加しなかった。ただ、一度、授業外の集まりに私を呼んだことがある。素直でナイーブな、善意のある若者たちのように思えた。

* 多くの知識人は「現存する」という修飾語を、皮肉を込めて使っている。括弧付きで使っている人は多いが、私はむしろ括弧なしで使いたい。社会主義は存在した。そして、そのようなものとして存在した（社会主義思想の信奉者が描いたようなものではなく）^{*} かったが）。

この話し合いの場に、東側の経験という武器だけで出かけたのではない。すでに、一九六八年のアメリカ滞在時に、*New Left* の牙城のひとつだったカリフォルニア大学で、この方向に向かう思考と出会っている。一九六八年パリの学生蜂起も経験していた。ヨーロッパ諸国でもブダペストでも、多くの場所で「新左翼」と出会い、時には忍耐強く時には怒鳴り合いながら、何度となく議論していた。「冷蔵庫社会主義」（訳注…消費重視の社会主義）に対する抗議行動が展開されたが、ハンガリーでは生活環境の若干の改善が見られ、不足経済が和らぎ、前には入手できなかったものが手に入るようになっていた。市場経済を広げる措置がとられたが、それは気高い理念にもとづくものではなく、人々の生活を改善しようという意図にもとづくものだった。

ちょうどこの頃、スウェーデンの経済学者アーサー・リンドベックの著書『*The Political Economy of the New Left: An Outsider's View*』が出版された。これは新左翼的な視角とそれ

に対抗するリベラルな思考をコンパクトにまとめたものだった。プリンストンの若い「ラディカルズ」たちと議論した時には、彼らの見解を踏まえて反論することに努めた。これは成功しなかった。彼らが強調したことは、社会主義に問題があるのでではなく、ソ連や東欧諸国が正しい社会主義理念を誤って適用していることが問題だという。うまくやらなければならぬ……。

このプリンストンの話し合いや先進国の新左翼知識人との出会いは、本書の初めの諸章で私自身のことについて記述したことを証明している。それは、「信奉は理詰めな議論をはるかに凌駕する」ということである。信奉が深くて誠実であればあるほど、その確信の基礎を揺るがす衝撃ははるかに大きな思想転換をもたらしださう。

プリンストン滞在中、三人の子供（ガーボル、ユーディット、アンドラーシュ）は、二ヶ月間、我々と生活を共にした。子供の親として、教員とは別の視点で、ハンガリーのティーンエイジャーがアメリカとの最初の出会いからどのような体験を得るのだろうかかと観察した。もちろん、それぞれ違った個性があるから、それぞれ違うように体験を消化するだろう。にもかかわらず、類似点もあった。他の旅行者と同じように、ニューヨークの摩天楼、美術館、プリンストンの美しいキャンパスに驚いた。ここでは、不足経済と社会主義経済の研究者として、興味深いと感じた反応だけを取り上げてみたい。少なくとも初めの

数日間は、ハンガリーの子供が手にできない食品や飲料を食べていた。アイスクリームや Dr. Pepper に^{はま}填る子もいれば、コインフレックを腹いっぱい食べる子もいた。無数のテレビ・チャンネルが提供する番組に夢中になり、テレビ画面に張り付いたままになる子、ロックや音楽家に魅了される子。アンドラーシュとユーディットはプリンストンの中等学校に二、三週間通い、ガーボルはイエール大学の学生寮で数週間を過ごした。学校での体験の中でも、ハンガリーと比べてはるかに学生の自由選程度が高いことを一番評価したようだ。アメリカの生活体験は三名の子供に強い影響を与えた。ハンガリーに戻ってからも、しばらくの間、その影響が感じられた。後に成人してから、この時の体験が知的なものに高められたと思う。今から思うと、彼らもそして我々親も、最初のアメリカ滞在が思考の開放と自由を優先する価値体系の構築に、大きく寄与したと考えている。

最後に、一九七二年のプリンストン滞在中、もうひとつだけ付け加えておこう。一九七四年にプリンストン大学から教授職の招聘を受けた⁽¹⁴⁾。ケンブリッジからの招聘と同様のものだった。大学環境も良く似ていた。プリンストンのキャンパスの建物やスタイル、美しい公園はケンブリッジやオックスフォードの雰囲気⁽¹⁵⁾を醸し出していた。胸騒ぎする新たな提案に対して、再び断りの回答を送った。

スタンフォードとワシントン

一九七二—一九七三年の第二学期は、スタンフォード大学で過ごした。この時期にはいろいろな思い出がある。ケネス・アローやアラン・マン夫妻との交遊に加えて、シトフスキー・テイボール夫妻と付き合いが始まったことである。彼らとは一九七〇年にイェール大学で知り合ったが、親密な友情関係に発展したのはこの時期である。

テイボールはハンガリーに生まれ、育った。父はハンガリーの公的生活やビジネスの世界で知られる傑出した人物だった。外務大臣やハンガリー最大の商業銀行頭取を務めた。保守的な視角をもつ紳士だった。テイボールは両親との関係を大切にしながら、世界観では両親とは違った道を選んだ。リベラルな思考の持ち主として、貧しい人々や虐げられた人々を思い遣り、世界の遅れた国々の発展に共感を抱いた。彼の経済政策はこのような社会層や国々の状況を好転させることに向けられた。

我々が知り合った時には、もうアメリカに一〇年以上も住んでいた。繊細で、ソフトな声の、いつも快活な人物だった。アメリカ文化とヨーロッパ文化の最良のものを融合させたような趣があった。日常会話の中で、アメリカ人は良い生活をしているが、人生を楽しんでいないという話になった。劇場や音楽会

に行かないし、美味しくて健康な物を食する代わりに、ファースト・フード信仰に取り憑かれている。後に、この批判的観察が学問的な体系と統計的データを備えた著書になった。それが *Joyless Economy*^{*} である。

* この著書が出版された後、アメリカの消費生活の歪みを克服する試みが、広がっているようだ。

残念なことだが、一九七三年当時、我々の会話には市場機能の分析が入ってこなかった。数年経って、それも『不足』を書き上げてから、彼の思考と重要な接点があるのが分かった。我々二人とも、買い手と売り手の「非対称性」を扱っていたのだ（これに対して、通常のアプローチは、取引における両当事者が鏡像のように完全な対称性をなしているものとみなす）。買い手と売り手の非対称性の重要な側面について、シトフスキーはかなり以前の研究で明らかにしている。それがプライスマーカー (price-maker) とプライステイカー (price-taker) の役割と行動の区別である。この区別を経済学に導入したのがテイボールであることを、一九七三年には知らなかった。控え目な彼はそのことに触れることすらしなかった（だから、このテーマが会話から抜け落ちたのだと思う）。

学期が終わり、一ヶ月間、ワシントンに旅行した。当時はま

だ、ワシントンの国際金融機関は東欧人には門戸が開かれていなかった。私を知る限り、一九六八年以降、(共産主義レジームによって、帝国主義の牙城と称された)世銀の研究部門の仕事に携わっている東欧の経済学研究者は、私一人だった。私は二つの研究をまとめ、出版された。出版にあたっては、世銀の委託によるという文言を付することに同意した。

ワシントン滞在中にウォーターゲート事件が勃発した。この時にはもうかなりアメリカの生活が分かっていた。*New York Times* や *Washington Post* は前から読んでいて、影響を受けていた。無署名の巻頭論文の執筆者は、コンパクトに水晶のような透明な論理で、信頼できる情報にもとづきながらリベラルな論陣を張っていた。私はそれに共感を抱いていた。それに劣らず印象づけられたのは、新聞の *op-ed* (*Opinions and editorials*) 面で、そこで戦わされる議論や視点である。同じような影響を受けたものに、*Public Channel* (商業的ではなく、主として寄付によって賄われている) テレビ局の夕方のニュースがある。有名なマクネイル・レーラー・アワーでは、ニュースの客観的報道に加え、常に討論に時間が割かれていた。国内問題であれば共和党と民主党の意見を代表する政治家が、インド・パキスタン衝突であればインドとパキスタンの大使が、討論者として呼ばれた。相互に対立する視点の双方の声が聞け、声の調子も論争相手に対しても文明的なものだった。司会者は

見解をまとめることはせずに、きわどい質問を提起していた。毎日の事件のコメントを見聞きする中で、表現の自由や討論の文化の意味するところを知ることになった。これらは皆、私にとって、民主主義の学校だった*。

* タブロイド新聞は読まなかったし、数え切れないほどの信仰番組も見なかった。私はアメリカの新聞やテレビ番組で、最高水準にあるジャーナリズムに注目していた。そこから分かったことが、二つのことが同時に進行している。それは報道の自由が政府への鋭い批判や質の高い意見を可能にするが、同時に文化的なゴミにも扉を開くことにもなる。これらは独特な双対生産物なのだ。報道の自由が市場経済や起業の自由と結び付き、信仰文化商品の生産と販売は巨大なビジネスの可能性を生み出している。

このように、ウォーターゲート事件が始まった時には、報道の自由がどのように機能しているかについて、ある程度は分かっていた。報道の自由が長い歴史をもち、市民生活の一部を構成しているような所でも、ひとつの日報紙が報道の自由に敵対する大統領の弱点を捉えることは稀なことだった。しかし、いったんこうなると、警察犬のように遺留品の臭いを嗅ぎつけ、次から次へと事実を暴露していく。家に戻ると、コメントーターが、それも公的な代表者だけでなく、状況を見誤った中立的な知識人までもが、中国とソ連に対するアメリカの姿勢を和ら

げたために、超反動派がニクソンを攻撃しているという始末である。これに比べて、私の方がアメリカに何が起きているかを「内部」から見て理解することができた。攻撃は反対の方向からやってきたのだ。あらゆるものに懐疑的・強権的で、法を超える手法を用いても権力にしがみつこうとする大統領に対して、報道の自由を守り人権を守ろうとした人々が、ニクソンを大統領から引き降ろそうとしたのである。選挙前の不法な活動のためだけで攻撃されたのではなく、その後の証拠隠滅、嘘の証言の強要、罪の隠蔽ないし完全否定のカヴァアアップに努めたからだ。まるで興奮する推理小説を読んでいるかのようだった。テレビ画面に釘付けになり、証人の証言や議会調査を見たものだ。

ウォーターゲート事件が結末を見る前に、アメリカを去ってしまった。ハンガリーに戻って、ニクソン辞任を当然のこととして受け取った。

自律的制御

『反均衡』出版後の一九七〇年代初め、マルトシユ・ペーラ、シモノヴィツチ・アンドラーシユ、カピターニイ・ジュジャとともに、著書の思考を数学的モデル化することに着手した*。一九七三年には最初の研究を、マルトシユ・ペーラとの共同論文

として発表した。それが *Autonomous Control of the Economic System* 及び *Econometrica* に掲載された。^(註)

* この部分で第一人称複数形を使っているのは偶然ではなく、研究を遂行したグループの共通理念を記しているからである。シモノヴィツチ・アンドラーシユは二〇〇三年の論文で、ここに記された研究グループを、「制御理論のハンガリー学派」と名付けている。

この喩えは人間の神経系理論のような高等な組織体から着想されたものである。高次元の制御の課題を担うのは中枢神経で、より単純な、たとえば呼吸、消化、血液循環、心臓、肺臓、胃、腸、腎臓の自動的な機能を制御しているのは、自律神経である。同じような分業関係が、経済システムにも観察できる。何度となく繰り返される、ほとんど自動的な制御課題は、非常に単純なメカニズムが実行している。

論文ではこの考え方を一般的な形で示し、その後で詳細に、数学的形式でひとつの事例を示している。それが在庫シグナルによる制御である。ひとつの事例として、スーパーマーケットを考えてみよう。製品の補充を滞りなくおこなうのに、超過需要や超過供給によって製品価格が上ったり下ったりするのを待ったり、利益が増えたり減ったりするのを待ったりする必要は

ない。対象の製品在庫を監視するだけで十分だ。もし在庫が正常水準を上回れば待機し、再び下り始めれば仕入れするという具合に。通常の業務を価格シグナルなしで、在庫の増減を監視するだけで、買い手への供給が安定的に維持される。

多くの種類のシグナルを扱った。もうひとつ非價格的シグナルで重要なものが、発注残高である。あるいは、これと同類の情報、商品待機時間（行列の長さ）である。ある「正常な」待機時間（行列）が存在する。それ（行列）が正常より長くなれば、より多くの製品やサービスを供給しなければならぬ。それが短くなりすぎれば、資源を再編成して、待機（行列）が平常より長いところに仕向ければよい。

* 『不足』はもうひとつ、注目に値する非價格情報を指摘している。それは「カタストロフィー」シグナルである。ある種の決定は、非常に重大な問題が発生するまで下されることがある。カタストロフィーが生じた時に、必要な措置が講じられる。

これらの観察から、いろいろなことが導かれる。

多くの著者は社会主義経済があたかも中央機関にすべての制御が委ねられているように描いている。そのようなことはあり得ない。実際、どんなに集権化されていても、多くのプロセスは分権的に制御されていて、既述したような基本的で単純な自

律的制御メカニズムが働いている。

確かに、この「自律的」分権化は資源の効率的な分配を保証するものではない。技術発展を導くものではないし、新製品の要請へ適応するようなものでもない。この後者の制御には、相対的な狭隘性を反映する価格や、価格・費用・利益に反応する刺激要因が必要だ。自律的制御が調整的機能を果たせるのは、既設の技術、所与の投入産出結合、供給と需要によって製品構成が定まっている場合である。それは従来の規格に従うような生産の保守的な適応調整を保証する。その限りで有効である。つまり、良くも悪くも、経済を機能させるのに有効なのだ。

我々の研究の中心になった重要概念は、この「機能力」(viability)*である。我々が理解しようとした現象は、「社会主義経済に歪んだ価格や間違った刺激要因が作用しているにもかかわらず、日々生き延びることがどうして可能になるのか」である（少し先を急いでコメントしておく必要がある。体制転換以後に発刊された書物や専門家の間に、「機能しなかった」から社会主義が崩壊したという主張が流布した。正しいように聞こえるが、事の本質を捉えていない。体制の基本的要素は最後の一日まで「機能していた」。人々は仕事場に出かけ働き、店では買い手にサービスし、学校では子供を教え、病院では看護婦が患者を看ていた。体制は「うまく」機能しなかった。機能不全が体制を弱め、指導者が自信を失い、外圧に抗しきれなく

なった。このように崩壊の原因分析を続けることができる。しかし、機能力の基本的要件を、最後まで充足することができる(た)。どうしてだろうか。その回答は中央計画化やその抑圧的な規程効果に求めることはできない。自律的制御がその回答の重要な部分を与えてくれる。

* 機能力は効率性と最適性の条件である。しかし、この命題は逆転不能である。非効率的システム、非最適システムでも、機能可能であり得る。

我々は今、社会主義経済の検証に注意を集中しているのだが、その回答はこの境界をはるかに超えている。すべての経済体制に自律的制御が存在し、これがプリミティブで基本的な制御機能の大部分を制御している。

我々がモデル構造を構築した時には、経済の基本的プロセスの制御は住宅に設置されたセントラル・ヒーティングのメカニズムに似ているということから出発した。サーモスタットの望ましい温度に設定する。これを温度の「ノルム」と名付ける。実際の温度がこのノルムより高くなれば暖房が切れ、低くなれば入る。これを「ノルムによる制御」と名付けた。経済(さらに、それを超える社会)では、この種のメカニズムが種々のプロセスを制御している。いったんノルムが与えられれば、ノルム

ムによる制御が「機能可能」になる。

種々の経験からノルムが存在していることが分かる。社会はいろいろな方法で、ノルムから離れた個人や組織を、ノルムの近くに引き戻そうとする。これは社会主義でも見られるところで、人々の行動が規定のものを越える(羽目を外す)ことを許さない。これは種々の仕方でも現れる一般的な現象であると考えた。^{*}我々の研究成果をまず雑誌論文で発表し、後にそれをまとめた。これは本章の対象期間以後の一九八一年に『非価格制御』(Sabaljovozs trjvelzesek nelhiti)として出版された。⁽¹⁶⁾これに関連して、この十年にわたった研究から気付いたことを、ここでまとめておくのが良いと思う。学術出版ということ、これを測れば、満足しない訳にはいかない。定評ある雑誌が我々の論文を掲載し、North-Holland社が「緑のシリーズ」^{**}で我々の著書⁽¹⁷⁾を出版した。しかし、この研究を始めた時に期待した反響を聞くことができなかった。^{***}

* もうひとつの自律的制御メカニズムに、「許容範囲」がある。これは一定の上限と下限の間を、当該の変数が動く場合である。

当時まだ駆け出し(その後、大きな専門的評価を獲得した)の研究者だったイレナ・ゴスフェルドが、許容範囲で動くメカニズムの数学的モデルを作成した。このメカニズムは、経済分野に限らず、政治・社会行動の制御にも有効なメカニズムである。

** Contribution to Economic Analysisと題されたシリーズの

ことで、我々の著書は第一三三巻である。

*** ここでいう期待と実績の比較は、私個人の意見である。グループの他の研究者がこの意見に賛同するか否は、分からない。

これにはいろいろな理由があると思う。社会・政治・経済体制の比較をおこなっている経済学者のほとんどは、イデオロギー的・政治的な内容をもつものや、少なくともこの種の「含意」をもつものに関心がある。市場対中央計画、価格対指令、集権化対分権化というようなテーマは、研究者がどのような政治的立場にあっても、エキサイティングなものである。ところが、どの体制にも存在するような現象には、ソ連や東欧、あるいは中国の研究に専念している経済学者は関心がないかもしれない。とくに、共産主義体制と対峙している研究者（社会主義世界内部であろうと外部であろうと）には、この説明が当て嵌まっているかもしれない。実際、「多くの機能不全にもかかわらず、社会主義経済が機能でき、自律的に動いていたのはどうか」という問題に関心のある研究者は、きわめて少なかつた。（この関連で「自律的」というのは、まさに当を得た表現だ）。

* あるいは、研究で使用された数学的装置が、最初から多くの経済学者を遠ざけたのかも知れない。他方、数学的モデルで記述された研究を好む経済学者の中で、我々が採用した特殊な数学的ア

プローチに違和感を抱いている人々がいる。これについては、すぐ後に触れる。

今、理論を扱っている経済学分野のグループを考えてみよう。たとえば、ハンガリーの経済学研究所では、数学的手法の利用に反感を抱いている理論研究者が、不快感を抱いて我々の研究を注視していたことは理解できる。しかし、数学的形式の分析を追究する内外の経済学者の間で、大きな反響を呼ばなかったのはどうしてだろう。それを知る機会がなかったとは思えない。*Econometrica* の論文や North-Holland 社の書籍は、通常の読み物の範囲に入っている。私の著作の中でも、数学的形式化が不足していると、掲載を拒まれたものがある。しかし、この場合は、洗練されているとは言えないかもしれないが、現代的な形式で武装した数学モデルで、我々の思考をまとめ上げている多分、「理論的な骨組み」から説明されるのではないかと考えている。我々の研究は「最適基準」を使っていない。我々は経済プレーヤーに効用関数があるか否か、達成したい目的があるか否かの問題を扱っていない。我々はもつと単純に、初步的な性格（だからこそ多くの点で一般性をもっている）のモデルで、経済システムのプレーヤーの行動を記述しようとしたのである。何らかの衝撃が意思決定者を捉え、彼は一定の規則性でそれに反応する。使用された数学装置（微分および微分方程

式)は、この単純な形式化(衝撃↓反応)に適合している。最適解を求めたのではなく、所与の制御メカニズムの他に、維持可能な動的な経路がシステムに存在するか否か、もし存在するとすれば、それはどのような特質をもつのかを調べたのである。多くの自然科学が応用した視点と、多くの点で類似している。

経済学的主流派、とくに数理的手法を使う理論経済学者たちは、最適化なしのモデルなど存在しないという考えに取り憑かれている。意思決定者の効用関数を明示しないミクロ経済モデルなど意味がないと考えている。マクロの規則性が「ミクロ的基礎」(効用を最大化する「合理的」な意思決定者にかかわる新古典派的基礎)と良く調和していることを証明しなければならぬ。ここ十数年、この要件が緩められるどころか、逆に厳守することが求められるようになっていく。ケインズ的なインスピレーションで、実証的な観察からある衝撃(たとえば利率の引き上げ)が何らかの反応を引き起こすことを語るような甘い判断が、許されなくなっている。「観察された規則性が、ミクロ行動に関する新古典派理論の基礎と整合しているか示し給え」ということになる。この厳しい規律から、正統派意思決定理論の世界から、我々が提示したモデル群は追い出されたのである。

これは落胆させることではあったが、状況はそれほど絶望的ではない。私は狭く限定された理論の独占状態が知識や理解の

プロセスを制約すると確信しているが、この確信は私だけのものではない。確かに狭義のミクロ的基礎から出発して、多くのことを説明できる。しかし、経済や社会の多くの現象の解明に、この基礎は不必要な厳格性を要求したり(その例が、自律的制御である)、時には誤った方向に導いたりすることがある(政治的分野、あるいは政治と経済の関係の分析において)。多くの人がこのように感じるとすれば、遅かれ早かれ、このような窮屈さから研究が離れていくだろう。

きしむ適応機械

一九七四年に「きしむ適応機械」と題する研究を発表した。⁽¹⁸⁾

これは『不足』の多くの思考を先取りしたものだ。この研究のタイトルは適切なものだったが、内容的には稚拙で、思考は十分に固まっておらず、概念構成も完成半ばであった。研究所におけるこの研究の討議では、研究の内在的な価値を認める同僚も何人かはいたが、かなり乱暴な批判を受けた。とくに、同僚のエルドゥーシユ・ピーテルがその先陣を切った。

彼のことはすでに何度か取り上げた。会話するのが楽しい仲間だった。一九五五年に初めて研究所に入った時に相部屋だった。しばらく彼の助手を務めた。後になって、お互いに疎遠になった。とくに、一九五七年に彼が党の指導部に入り、私が党

から離れてからはそうだった。しかし、我々の友情関係は続いていた。

彼は非常に機知に富んでいた。マルクス主義の基礎が西側の知識、とくにケインズ理解に裏打ちされていた。精神的な開放性、既存の政治・経済状態に対する批判的な視角、共産主義理念に対する無条件の拘泥が、独特の仕方でも混ざっていた。何度となく嫌がらせを受け、一時は党からも追放されたが、最後の最後まで頑固に信念を守り通した人物である。

ある研究が気に入らないと、たんに批判するだけでは収まらなかった。本当に、徹底して打ち砕いた。そのために、理に適った議論だけでなく、傲慢な嘲笑的手段をも使った。このようなスタイルを誰から学んだのか、マルクスからかそれともレーニンからか。いや、それらの師を越えるほどのものだった。もつとも、このような知的サディズムはマルクス主義者だけでなく、他のグループにも見られることを知っている。他人の仕事を粉々にして、知的な侮蔑を加えることに喜びを感じる人がいる。他人の研究が攻撃対象になっている場合も、このエルドゥー・シー・タイプの子猫さには眉をひそめた。それが、今度は、私の研究がその餌食になったのである。

これには参った。批判は喜んで受ける。この半製品を出版社に渡さず、後のもつと成熟した『不足』が出版できたことは、はるかに良かった。そのためにも、研究者は研究を丁寧に検討

する姿勢が必要だが、知的な侮辱を与える必要はない。^{*} 正しい批判であれば、批判的な分析に加えて、研究に散りばめられている成果や特質を認め、そこに隠されている将来性(将来的な成果を予定するものであるなら)や思考の展開、あるいは概念構築の再考を研究者に求めるだろう。

* 私が何故、この昔の出来事を無視したり、ちよつと皮肉つて済ましたりすることができないのかと問う人がいるだろう。これをやれば、読者に対して率直でなくなる。最近、記憶の性質に関するD・ドライスマの教訓的な著書を読んだ。それによれば、人間は成功や喜びの瞬間よりも、屈辱を受けた出来事の方をより詳細により正確に、異常なほどにはつきりと覚えていくという。「他の多くの記憶の中で、傷心の記憶だけが広がるか、あるいは他の記憶とともに縮小されることがないかのようだ。元の影響力が保持されるだけでなく、その色彩、香り、鋭利さまでもが保持される。歳を取っても、なおはっきりと残っている。あたかも、他の記憶に対する特権的な地位を維持するかのよう」(Draaisma, 2003, 169. p.)。

容赦ない批判を受けた後は、研究を続ける気持ちを手放さなければ、歯を食いしばって、自らを信じなければならぬ。幸いにも、私にはこれに必要な決意と研究方向の正しさへの確信があった。

「きしむ適応機械」の研究と並行して、私はもうひとつのテーマを指揮していた。これは非常に野心的な仕事で、ハンガリーのデータを基礎にして、巨大なマクロ同時推計モデルを構築するものだった。しかし、この研究は挫折してしまった。この仕事に大きな力を注いだだけに残念で、とくに若い助手だったガーチ・ヤーノシュやラツコー・マリアが注いだエネルギーを無駄にしてしまった。

自らの研究者としての「行動模型」を描かなければならないとしたら、一九七二—一九七六年の時期がもつともその特徴を示している。多くの西側の研究者にとって、資本主義経済のひとつひとつの問題を分析することはそれほど難しいことではなかった。すでに思考の構築物が出来上がっており、それに煉瓦を積み重ねるだけで良いからだ。これに対して、社会主義経済システムの説明には、そのような出来上がった構築物が無い。現実の理解を得ようと思えば、道を叩きながら歩かねばならず、時には袋小路に迷い、そこから立ち戻り、再び新しい途を探すが、ほとんど不可避なのである。

私は絶望しないで新しい道を探したと言える。ひとつひとつが生涯のテーマになるような大きな仕事を、一度にいくつも手にした。この仕事のスタイルの問題は、前進すべき前線を広げすぎることにある。私自身、研究者としての産出量とその質について、恥ずべきものはなにもない。しかし、事後的に研究活

動の「投入・産出」比を振り返ってみると、驚くべきものがある。多くの出版物はあるが、その多くが半製品で、出版に熟する前に挫折したようなものだ。大きなプロジェクトに多数の同僚を動員して、途中で終わったものも多い。いろいろ並行して行った研究成果の多くは、最終的に、「不足」に有機的にまとめ上げられたが、その他の成果は捨て去られてしまった。彫刻家が大きな大理石の塊で仕事を始め、彫刻が出来上がる頃には、多くの貴重な材料や時間が失われているようなものだ。

このことは今になって分かったことではなく、前から意識していた。そのスタイルを変えることができなかったし、今もできない。何度も繰り返しながら、今日に至るまで、「無駄」を経験している。

新しい住居の完成

研究に大きな力を注ぎながら、もうひとつ別の仕事、住宅建設にもかなりのエネルギーを使っていた。一九七四年に、我々他四家族の住居を含む新しい集合住宅の建設が終わった。この建設の法的・組織的形態は、当時、「自己建設」による建築と名付けられていた。これは元請け業者がいないことを意味する。住宅の所有者になる人々が、それぞれの専門業者を集める。公的な許可をもっている小工業者や「灰色経済」に属している

「自営業者」に仕事を依頼する。我々は資材や部品を入手しなければならぬ。

いろいろなトラブルを抱えながら仕事が進むから、妻や私は否応なく建設マネージャーにならざるを得ない。いろいろな問題に直面しなければならなかった。必要な資材がほとんど入手不可能な時にどうする。硬質煉瓦や風呂場のタイルを入手するのに、いろいろな店を歩き回り、他に仕方がない時には、怪しげな品質の物で我慢しなければならぬ。^{*}不足経済のあらゆる購入経験をした。これが後の『不足』の思考の枠組みの中に取り入れられた。探索、待機、不足が引き起こす強制代替、購入意図の放棄を、それぞれ区別することができた。製品の不足に加え、労働力の不足の意味することを体験できた。あれこれの熟練労働者が見つからないと、建築工事全体が止まってしまう。不足が腐敗をもたらすことも分かった。不足財を入手するため、どの工場の倉庫係にどれほど支払う必要があるのかも学んだ。許可を与える区役所の担当官が、どのブランドのコニヤックが好きかも知った。^{**}

^{*} バスタブを買うのに、ソルノークに住む義理の母の「コネ」^まで使わなければならなかった。少々傷のある二級品しか手に入らなかったが、そこから一〇〇キロメートルも離れたブダペストに持ってこなければならなかった。

^{**} ケネディ・ヤーノシュは「私的」建設で体験した同じような経験を、日記風の著書にまとめている。そのタイトルに、ラーコシ・マーチャーシュが使っていたスローガンを選んだ。「国は君のもの。自分のために建設しよう」。この著書はパリの亡命者が出版している Magyar Fizetek Könyvei シリーズのひとつとして公刊された。

この頃は頻繁に西側に旅行していた。その度に、購入リストをポケットに入れていた。このリストは国内よりも外国の方が安いものを記したものでなく、またその土地に特別なものだから買おうとして記したものでもない。国内では買えないが、正常に機能している市場経済で入手できるもののリストだった。モスクワでの出来事は、買いつけと売り手の関係に見られる乖離を特徴的に見せてくれた。西側の空港では列に並んでタクシーを待つ。順にタクシーに乗り込み、行き先を告げる。モスクワではタクシーが着く度に、お客が群がって、このタクシーがどこへ行くのかを尋ねる。タクシーの答えた目的地が合えば、客が乗り込む。誰が旅程の目的を決めるのだろうか。お客か、それともタクシーか。

誰もが不足経済でこのような経験をもっている。それも至る所で。学問研究者から掃除婦に至るまで、会社経営者から運転手に至るまで、誰と話しても、不足経済に関係する出来事、小

さな苛立ちから大きな苦悩に至るまで、話が尽きない。これらすべてが私の中に取り込まれ、不足に関する著書の記述を始め時に、取り出されることになった。

市場化改革——カルカッタ毛沢東主義者の見解

一九七五年、インドの経済学者の招聘で、妻と共に二ヶ月間、研究と講義のためにインドへ旅行した。この体験に一節を割くが、ただひとつのエピソードだけを扱う。

旅行前に、統計データからこの巨大で輝かしい文化的伝統をもつ国が、どのような経済発展段階にあるかを確認していた。優れたインドの経済学者と知己だった。後に計画委員会の長になったチャクラヴァルティとは、一九六三年に、最初のイギリス旅行の時に知り合い、シュリニヴァザン（友人たちは「ズ」と呼んでいた）とは一九六八年のスタンフォードで親交を深めた。彼らは現地の案内役を買って出る前に、いろいろなることを解説してくれた。言葉や文字で書かれたものと、実際に眼で見るとは違うのだ、と。カルカッタの道路脇に立てられた見窄らしいテントで生活する家族を見た瞬間、汚れた下水が流れる河で食器を洗う婦人を見、道路で仮死状態のように横たわる人々を見た時に、私はトラウマに襲われた。専門家は、カルカッタはインドの都市でもっとも人口密度が高く、悲惨さがもつ

とも鮮明に現れている街だと説明した。

当時、インドの共産党は二つに分裂していた。モスクワ派は少数派だが改革志向のソ連に共感を寄せるグループで、もうひとつは急進的で革命的な北京派の毛沢東主義者のグループである。この後者はテロ手段をも厭わないグループで、カルカッタは毛沢東主義者のセンターだった。

連続講義をおこなったが、ひとつの講義の討論が記憶に残っている*。一九六八年のハンガリー改革とその後の変化から生じたデイレンマを話した。討議では、ほとんどが厳しく（怒りを込めてという方が正しいかもしれない）、社会主義システムを市場経済の方向に動かしていく考えを排斥した。それよりも、配給制度を維持し、不足を分け合う方が良い、配給で皆が同じだけのものを獲得すべきだ、市場の無政府性に対して闘うという。彼らは計画経済の組織的優位性を強調するのではなく、それが難しい問題をもたらすことは理解しているようだった。だが、どのようなマクロ経済政策やミクロ的刺激誘因が生産や供給を増やすかには、関心がなかった。彼らの思考と感情を支配していたのは、分配の公正さである。大学教授であろうと、あのカルカッタの悲惨さの中で生活していれば、このように考えることは理解できた。理解はしたが、同意することはできなかった。当時も今も、どん底から抜け出す道は分配ではなく、生産の改革に求めなければならないと考えている。すべての人に

平等に悲惨を分け与える配給制度が、一時的に、荒ぶる公正感情を静めることができても、問題を解決することにはならない。

つていただろう。議論はしたが、相互に何も意見の一致を見る
ことができなかつた。

* 後に「効率性と社会主義倫理」というタイトルで論文にまとめた思考を、ここで初めて展開した。

その後、ある教授宅で、少人数で政治問題の議論が続けられた。当時、発展途上国で、インドだけが唯一、民主主義的な国会制度を保持していた。政府には合法的野党が存在し、支配政党を選挙で交代させることができ、新聞は権力を批判し、裁判所は政党や政府から独立していた。資本主義の急進的な反対者はこれをけなした。何百万人も飢えているのに、民主主義の空虚な枠組みが何の役に立つというのか。それよりも専制の方が良い、公正な分配でこれ以上の飢餓を増やすべきではない。空虚な市民的民主主義と同居する悲惨と飢餓より、はるかに増しだというのだ。

かなり後になって、中国の毛沢東支配時代に、多数の人命が飢餓で失われたことが明らかになった。社会主義的所有や計画経済はこの悲惨な荒廃を防ぐことができなかつた。専制はこの悲惨な出来事を中国や国際的な世論の眼から隠し、問題の解決を阻害するのに役立っただけだ。インド訪問時にはこれらのことを何も知らなかつたが、知っていれば議論の重要な論点にな

第13章 全体像の完成（一九七六年―一九八〇年）

——「不足」をめぐって

一九七六年初秋にストックホルムに着いた。アーサー・リンドベックの招聘で、客員教授として、大学付属の国際経済研究所に長期滞在することになった。ここでの生活は小さな不便の連続から始まった。適当な住宅が見つからず、かなりの間、ホテル住まいを強いられた。長年の研究文献メモを綴じた分厚いファイルを、地下鉄に置き忘れてしまった。秋のスカンジナビアの天候は憂鬱なものだった。ある雨風が強い朝、大学へ向かう途中で、「ストックホルムに留まらないで、家に帰ろうか」という思いが湧いてきた。

帰らないでよかった。^{*} 研究所秘書のビルギッタ・エリアソンは、労を惜しまず家探しをしてくれ、適当な住居を見つけてくれた。置き忘れたメモも、ちゃんと戻ってきた。こうして、ストックホルムの理想的な環境条件が整い、私の研究歴の中でもっとも生産的な（私の主観的な判断だが）時期が始まった。ここで、『不足』と題する著書が生まれた。

^{*} もしここでハンガリーに戻っていたとしたら、娘がスウェーデンで結婚することもなかったし、スウェーデン・ハンガリーの混血の孫ジョーフィアとアンナが生まれることもなかった。

刺激的な環境

科学研究をどうファイナンスするかは、議論の分かれるところである。国家あるいは国際機関が資金分配する場合、これに応募する研究者は「プロジェクト案」を準備し、正確に何を行い、期限を守り、期限内に「成果」を提出することが義務づけられる。近年では、公的私的を問わず、各種財団も同じような条件を課すようになっていく。

ストックホルムでの私の研究をこのプロクルステースの寝床に合わせようとしていたら、確実に失敗していただろう。ストックホルムに来る前は、プロジェクトのテーマを正確に決めか

ねていた。「反均衡——再考」というような一般的なテーマが浮かんでいた。テーマをさらに明瞭にするために、もう少し落ち着いた時間とストックホルムでの環境の安定が必要だった。幸い、私の招聘者たちは官僚と違い、大目に見ていてくれた。

もつとも、何かひとつの「プロジェクト」の実現のために招聘されたのではなく、好きなことをやって良いということだった。懸命に仕事した。それも自宅で。研究所に行くのは事務手続きに行くか、面白そうな講演がある時だけだった。当初は一二ヶ月の招聘だったが、三ヶ月の延長を願ったら、即座に許可された。

自宅の完全に隔離された仕事を補完してくれたのは、優れた知的環境だった。^{*}秀れた同僚研究者たちと会話したり、大学で社会主義経済の講義も担当したりした。学部生、大学院生に混じって教員も参加していて、私の考えにどう反応するかを確かめる初めての実際的な講義になった。講義が終わる度に私の周りに集まってきて、コメントや提案をしてくれた。

^{*} 前章で指摘したように、アメリカの公的生活を観察することが私にとって民主主義の学校になった。それが今度はスウェーデンで続くことになった。オロフ・パルメ首相がテレビ画面に出てきた時の表情を忘れることができない。社会民主党の四四歳の首相が、初めて敗北を喫したのだ。彼にとってシヨッキングな出来事

だっただろうが、動揺を見せることなく、微笑みすら浮かべて敗北を認め、淡々と勝利者への政権譲渡を宣言した。民主主義とは、このように文明的な方法で政権を変えることができる、深い権力委譲なのだと認識させてくれた。

後に、私の著書の「前書き」からストックホルムで書かれたことを知った読者が、「不足経済や社会主義経済を記述している時に、東欧の環境や個人的な出来事が欠如していて不自由だったのではないか」と質問してきた。それは違う。ストックホルムに着いた時には、もう十分すぎるほど、体験が蓄積されていた。執筆時に本当に必要なものは安寧であり、実生活の摩擦、毎日続く小さな奮闘、あちこちへの奔走、日々のニュースへの一喜一憂から隔離されることが重要だったのだ。

前章では、読書や討議、個人的経験など、多くの出来事を記したが、それらすべてが著書の準備的資料になった。加えて、博士候補論文が社会主義経済の問題に捧げていることを考えれば、私の思考の歴史を通して、不足経済への関心ははるかに深いものであることが分かる。二〇年の歳月を通して、繰り返し、さまざまな側面から、この問題に迫っていた。これらの長い歳月の仕事はばらばらに成果を生み、私の頭脳に蓄積されてきた。今、スウェーデンの静かな生活の中で、このモザイク状の断片から全体像が作り上げられたのだ。

著書の執筆に取りかかってから、かなりのスピードで執筆が捗った。ほとんど毎週、ひとつの章を書き上げた。^{*}すべてのものが頭の中にあつたのだから、それをただ書き下すことでよかった。書き進む中で、同じ経験が出てくる場合には、多くの問題に関係する記述の中で、それらがどのように関係しているのかが明瞭になつていった。

^{*} 一章を書き終える毎に、妻はスウェーデンの美味しいプーリンを一瓶プレゼントしてくれた（この時はまだコレステロールの制限をしていなかった）。これが執筆のテンポを上げてくれたかもしれない。

社会主義経済で経験できる不足現象問題については、すでに多くの経済学者が扱っていた。この問題について、論文の数節、著書の一章を捧げているのがふつうである。これに対して、著書全体をこのテーマに捧げたのが、『不足』である。著書の構成を練っている時に、先行的な著作として、私の著作の中で触れることができるものを探した。先行的な理論と思われるものは、通例に従い、それに注意を喚起する注釈を付し、著書に含めた。同様に、ヒントを与えてくれた著書、研究を準備するのを助けてくれた著書を列挙し、謝辞を記した。^{*}したがって、著書で展開されたすべての思考を私が考案し、私が最初に記した

とは言わない。しかし、基本的に、このテーマに関する先行著者の推論が私にインスピレーションを与えたのではないと、はっきり断言できる。『不足』が誰かの作品を受け継いだ続編であると言えるような著作を、ひとつとして上げることはできない。もちろん、『不足』の叙述に間接的に大きな影響を与えた作品があるというのは、また別問題である。たとえば、マルクス、ケインズ、ハーシュマン他の作品がそうである。^{**}これらの影響については前章で触れた通りだが、これらの作品は社会主義制度における慢性的な不足を扱ったものではない。

^{*} 著書には二つの数学的付録が付いている。これはユルゲン・ヴァイブルとシモノヴィッチ・アンドラーシュが共同で記したものである。

^{**} 『資本論』から獲得したインスピレーションをとくに記しておきたい。マルクスは失業現象を、誤った市場適応や間違つた経済政策の結果としてではなく、資本主義制度に特有な特質とみなしている。マルクスは経済・社会・政治制度に固有な独自の機能不全を認識・説明する手法を開拓した大学者の一人である。この点でマルクスは私の模範として生きている。この尊敬の念と、世界観や政治プログラムとしてのマルクス主義から決別したことは、何の矛盾もない。

著書の執筆時に大きな影響を与えたのは、一九五五年以後の

研究から獲得した理論的知識、ハンガリーでの実証的研究、個人的会話、講演の聴講、会議の討論、外国滞在の経験から我が物にした知識である。「過度集権化」を書き上げたのが現実を素直に見つめたナイーヴな研究者だったとすれば、『不足』を書き上げたのはプロの経済学者で、その専門分野で経験を積み、文献資料や自らの経験にもとづいて、経済・社会・政治の世界を見渡せる専門家だと言える。

ここで少しだけ、本章の冒頭に記したことに触れたい。ストックホルムには数キログラムにもなる読書メモを持参した。本当のことを言えば、著書執筆の際にはこれらのメモにほとんど眼を通していない。同じことは、別の仕事についても言える。文献から得た思考は記憶のちようどその位置に蓄えられていて、必要な瞬間にこれをうまく引き出すことができるのだ。反対に、オリジナルの源泉やそのメモを探そうと資料を掻き分け始めると、執筆の邪魔になる。自分の頭で考える代わりに、頼りすぎる場合、このようになる。通常、最初の概念構成が出来上がって、文献リストを正確にしたい時に、メモ類を引き出すことが役に立つ。

著書のメッセージ

二つの目的を設定した。一方で社会主義制度の機能について

包括的な描写を行うことであり、他方で慢性的な不足経済現象、その原因と結果を方法論的に示すことであった。このような二面的な表現よりは、「個人的で部分的な現象の原因や影響より、もっと大きくて深い不足経済について描きたかった」と言った方が良いかもしれない。不足経済は部分現象であっても、それを通して全体を示すことができる。不足現象は社会主義国の市民が毎日経験していることだから、「自分たちのこと、自分たちの生活が問題になっている」と感じることだろう。著書のタイトルそのものがすでに挑発的なもので、やがて事の本質に迫るぞという意味があった。とにかく、日常生活の経験を一般化して、包括的な理論水準にまで高めることが、私の意図であった。

この意図を簡単に実現するためには、消費分野から現象の記述を始めることで十分だった。というのは、すべての人は例外なく、消費者としての役割機能を果たしているからである。しかし、これは論理展開から見て、正しくなかっただろう。問題の根源は生産に求めることができるからだ。それゆえ、著書では生産に必要な投入財の入手という企業分野の記述から始めている（ここでは、集合住宅建設に必要な資材の入手という新しい体験が役に立った）。

不足現象はすべての経済で起こりうる。最後の一枚の切符が売り切れれば、旅行に出かけることができない。封切りの映画

を見るのに行列しなければならぬ。これらは断片的で、短時間で終わる、とくに重大な出来事ではない。不足経済を語るこ
とができるのは、不足現象がすべて（ほとんどすべて）の分野
で生じる場合である。企業セクターでも家計セクターでも、生
産物・サービスでも、労働力分配でも、経常消費でも、投資で
も。不足は一時的なものでなく、慢性的なのだ。供給不足が僅
かなものではなく、非常に大きい。別言すれば、不足の強度が
まことに強いのだ。

一言で言えば、経済全体を包括する慢性的で強い不足が、不
足経済を特徴づけている。この経済では、市場は需給の均衡点
の周辺を動くことはない。以前に「ワルラス均衡」と名付けた
ものから、持続的に乖離している。慢性的不足はここでは特別
な現象ではなく、この制度の「正常状態」なのである。

不足（以後、「包括的、慢性的、強度の」という形容詞を付
さない）は、重大な帰結をもたらす。

不足の結果、買い手は当初の意図とは違う物を買うことを余
儀なくされる。この強制代替は、消費者の喜びを半減させる。
不足財の入手は苦勞の多い探索を伴う。行列待機は人々の時間
を奪う。不足経済で消費者が、市場経済で生活するのと同じ量
の消費を得たとしても、その厚生はより小さいものとなる。

資材、半製品、部品の不足補填、労働力不足は生産摩擦や障
害を引き起こし、労働生産性を損なう。^{*}

^{*} 体制転換以後、製品の選択肢が広がり、労働生産性と技術革新
が急上昇したが、それには多くの要因が作用している。統計的分
析にもとづく多くの研究が証明しているように、もつとも重要な
要因は消費者をめぐる生産者の競争である。カーリン他の二〇〇
一年の研究やジャンコフとマラルの二〇〇二年の研究を見ると、
ポスト社会主義転換による生産の成果は、「不足」のひとつの基
本問題を支持している。

不足経済では生産者は生産物を売するのに何の問題もない。買
い手が飢餓状態でそれを待っているからだ。買い手を求めて売
り手同士が競争することはない。こうして、不足経済は技術革
新のもつとも重要な刺激力のひとつを奪ってしまう。これが社
会主義経済における技術停滞の基本的原因のひとつである。

ここに列挙したのは、狭義の不足によって引き起こされた損
失である。人々の感性に与える影響も、これに劣らず重要であ
る。^{*} 生産者・売り手優位は人間関係の上下関係を伴う。生産者
や売り手に買い手が媚びを売することは、多くの場合、屈辱的な
状況を生み出す。一定の生産物やサービスについて、何らかの
配給や行政的分配を導入することも、解決にはならない。これ
はこれで、人の上に立つ権力強化に資する手段を官僚に与える
ことになる。

^{*} 外国の学生（今日のハンガリーの若い人々）には、不足がどの

ような苦痛を生み出すか、理解できないだろう。講義で住宅不足の帰結を視覚的に説明するために、離婚した夫婦が、離婚の後も同じ住居で生活せざるを得ない事例を上げた。別かれた前の妻と新しい妻が、住宅不足のために、台所と風呂場を共用しなければならぬ。この話が佳境に達したところで、聴衆からはため息が漏れてきた。憂鬱で屈辱的な状態を実感するのに、それほど時間はかからなかった。

この最後の命題から、権力的関心から不足を意識的に創り出すと推定することもできる。しかし、そうではない。確かに、売り手は不足から利点を引き出すことができる。買い手は選ぶことができず、商品を買戻すことはできない。確かにそうだが、しかし売り手はまた買い手でもあり、多種の生産物やサービスの利用者であり、この役割機能において彼もまた弱い屈辱的な立場に加わる。官僚の多くは、特権享受のグループに入っていないければ、自分自身もまた不足経済に苦しむ。実際に誰も望んでいないのに、それでも存在する。もし誰かが不足をなくしたいと思えば、市場の力関係の変化に訴えなければならぬだろう。しかし、これは数名の人々の願望で実現することではなく、体制そのものによって生み出されるものである。参加者が望むと望まざるとにかかわらず、慢性的な不足が存在し、それが継続的に再生産される。

不足の存在と再生産を十分に説明する要因をひとつだけ上げ

ることはできない。多数の要因から成る複雑な因果メカニズムを理解することで、完全な説明に到達することができる。因果関係の重要な説明の環が、『不足』執筆に際して「ソフトな予算制約」と名付けた現象である。この概念およびこれに関連した理論は大きな反響を呼び、それが一人歩きして、『不足』の領域を超えてしまった。それゆえ、独立した章を割いて、これを扱うことにした。

因果関係の最後の環は、社会主義経済の機関組織体制である。著書の最後の頁から、「終わりに」を引用しておこう。「一定の社会関係、所与の機関組織は、一定の行動様式、経済の規則性、ノルムを生み出す。国家の決定によって、これらを無効にすることはできない。投資緊張、慢性的労働力不足、価格引上げ傾向等々は、政府の決定や国家計画が規定しているものではない。これらを生み出す環境が維持され、この現象が持続的に再生産されている限り、どんな政府決定や国家計画も、この現象を消滅させることはできない⁽⁹⁾」。不足経済は社会主義体制に内在する、制度に固有な特性である。改革はこの問題を緩和することができても、それを消滅させることはできない。

これが『不足』と題する著書のメッセージであった。

自己検閲

著書は重要な真実を表現するものだった。すべての言葉を書き記すにあたって、常に真実を、真実だけを記述することに努めた。もちろん、著書が完全な真実を含むものでないことは、はつきりと意識していた。

ストックホルム郊外のリディングーという湾内の島に住んでいた。沿岸の森を散策しながら、何を著書に含め何を著書から外すべきかを、妻と繰り返し議論した。

その出発点は、第一に、著書はハンガリーの読者へのメッセージであり、スウェーデンの滞在が終わればハンガリーに戻ることだった。^{*} まずハンガリーで出版し、合法的な印刷物として合法的に配布できるとすれば、どこまで書き込めるのだろうか。それから、他の社会主義国でこの著書の運命はどうなるのだろうかとも考えた。そもそも、出版可能だろうか。「敵対」作品に登録され、これを手にした者は処罰されるだろうか。

^{*} これらの問題を妻と詳細にわたって話し合った。常に共通見解に達することができた。しかし、著者として、著書が出版されることに完全な個人的責任を負っており、以下の叙述においてもこの決断のプロセスに至る思考を、私個人の名前で記している。

スウェーデンに来る直前に、コヴァーチ・アンドラーシユの映画 *Falak* (壁) を見た。暗い部屋で剣をもって決闘している二人がテーマになっている。二人は壁とぶつからないかと案じているが、どこに壁があるのか分からないという設定だ。だから、常に部屋の真ん中を動き回ろうとする。^{*} コヴァーチ・アンドラーシユが何を考えているかを、観客は良く分かっている。

^{*} 脚本 (Kovacs 1968, 37 p.) から引用する。太文字が脚本のト書きで、主役の一人のベンクーが、事件を解説している。

「二人の決闘士が相互に相手をさがしている。
ベンクー…見てみる、壁を怖がっているぞ。でも、二人とも壁からかなり離れている。

相互に接近して闘っているが、部屋の真ん中を動いているだけだ。

ベンクー…部屋はかなり広い。彼らはそれを使い切っていない。実際よりも不器用に見える。」

私は壁が存在することだけでなく、どこに存在するかも知っていた。当時のハンガリーはルーミアニアやアルバニアと比べて、はるかに出版の許容範囲は広がったが、それでも合法的出版には政治的な限界があった。

一九七〇年代後半には国際的な名声とプレスティージュを獲得していたから、それがあがる程度まで私を防御してくれると考え

た。私の表現を規制する壁が、その分だけ外に押し広げられる。さらに言えば、「自分の」壁の限界まで行くだけでなく、これを越えようと思った。この著書によって壁によって囲まれた許容範囲を押し広げ、この限界をさらに遠くに押しやれば、私の事例で他の人の許容範囲も広がる。

これらすべてを計算しても、「一定の許容範囲はあるが、このテーマについて考えていることをすべて合法的な著書に記すことはできない」と言えた。

三つの問題を避けるようにした。ひとつは、明示的にソ連について語らない、ソ連圏諸国のソ連との関係、相互の外国貿易やその他の対外経済関係について語らない。二つは、社会主義経済における共産党の役割を記述しない。三つは、国家所有に代えて私的所有が入り込んだ時に、どのような変化が生じるかを記さない。

これらの問題は社会主義体制理解において二次的なものではなく、基本的なものである。これらについて中途半端なことを言いたくなかったし、まして自分が考えていないことを記すのは以ての外だった。これらの問題については、聞き手に回る方が良いと考えた。

敏感な読者のために、間接的に、この問題へ注意を喚起したかった。だから、著書の「前書き」で、著書が何を扱っていないかを強調した。そのうちのひとつが、党の役割である。さら

に、国有企業のみを対象とし、「第二経済」や「非合法セクタ」は分析対象から外れることを明示した。

これらの目的より重要なのは、説明の展開が読者を捉え、読者が著書の論理を我が物にすれば、読者は自らの精神力によって、さらに推論することが可能になることである。著書は二二章で終わっている。長い間、考え抜いた結果、現在ある地点でちょうど終わるようにした。その次に来る、書かれていない第二三章は、読者の頭の中で自然に構成されるはずだ。著書には書かれていないが、普遍的で慢性的な強い不足経済の原因は共産主義体制であり、したがってその最終的な消滅の条件が体制転換である。著書には書かれていないが、体制の基本的特質を考えれば、体制を改革することはできない。そのことは、多くの読者が明瞭に読み取った事実である。^{*}

* 最近になって、当時の読者で、政治・経済問題に関心を持って
いる物理学者が、次のように語ってくれた。「当時、『不足』を
読んだことはどれほど大きな体験だったか測り知れない。体制転換
が必要だという著書のメッセージに揺さぶられた」と。彼は四
半世紀前のことを振り返って、「そのことは著書に書かれていた
と断言した。文字としてこのメッセージが著書に印刷されてい
ないことを彼に示すまで、こう主張し続けた。」

ここでは「不足」の概念構成時における自己検閲の事実を記述した。本章末で、これに関連する政治的・倫理的ディレンマに立ち戻る。

校 閲

共産主義体制のことを知らない西側の人々は、独立した検閲組織が存在しているものと考えている。確かに、社会主義体制の初期には、いくつかの国で存在していた。しかし、体制が固まってからは、そのようなものが必要なくなった。この検閲機能は、印刷された（テレビやラジオで発言された）言葉に責任をもつ人々に委譲された。雑誌や新聞の編集局長、出版社の社長、テレビやラジオの社長が、発せられた言葉に責任をもつ。

この検閲責任を部下に下ろしたとしても、最終的な責任から逃れることはできない。担当者は上司に対して、報告する義務を負っている（たとえば、国营出版社の社長は教育・文化省の出版局の監督下にある）。最終的には、すべての国家機関の指導者は、共産党に対して責任を負っている。もし党（事実上、すべての党指導者、党中央機構の担当部局）に気に入らない情報があれば、事前にそれに介入するか、事後的な制裁を下すのである。

手綱を締めていた厳しい時代があった。提出された原稿に少

しでも問題があれば、たとえば必要以上に厳しく批判していたり、別種の「逸脱」があったりすると、担当の編集責任者は検閲権限を行使して、これをつつ返した。自信がない場合には、党中央に送付し、意見を求める。自分で責任をとることはなかった。それが元で政治的スキャンダルが勃発すれば、重大な報復に見舞われるからである。

著書が出来上がった頃は、カードル体制もかなり弛んだ時代だった。著書の公的な「検閲」がどう進んだのか、順を追って見てみよう。

出版社の社長は出版を妨げたくなかった。編集長のフィボー・ラースローは著書に感激し、出版のためにあらゆる手だてを尽くしてくれた。西側の学術出版であれば、著者との相談なしに、出版社は客観的な意見を寄せてくれる校閲者を指名する。否定的な意見が出た場合でも、著者が校閲者に「敵意」を抱かないように、校閲者は匿名にされる。これに対して、社会主義国では校閲者の名前が表紙裏に掲示されて、著書に対する専門的な責任と、これよりはるかに「きつい」政治的な責任を公に請け負う。この著書の出版では、いつも行われる訳ではないが、かといってそれほど稀でもないことが行われた。校閲者を誰にしようかと、編集者が私に相談したのである。すべての必要ない要件が一人の人に備わっていることはない。だから、専門的に高い評価を受けている人と、適切な政治的な重責にある人にし

ようということになった。

この話し合いにもとづき、前者の役割を引き受けてもらうように、出版社は経済研究所のプロローディ・アンドラーシュに依頼した⁽¹⁰⁾。当時、彼は国内だけでなく、国外でも名を知られた学者だったから、誰も文句は付けられなかった。プロローディとは一時、密接な友情関係にあったが、後にこの関係が疎遠になった。それまでの私の研究の中に気に入らないものがあつたのを知っている。それをひっくりかえして、プロローディは政治的リスクを引き受け、全面的に出版に賛同してくれた。非常に寛大な校閲見解を寄せてくれた。「アダム・スミスが資本主義を描いたように、『不足』は社会主義を描いている」と。今でも、プロローディが寄せた信頼と支援を嬉しく思っている。

もう一人の校閲者として、出版社は当時の大蔵大臣のファルヴェーギ・ライオシユに依頼した⁽¹¹⁾（後にさらに高いポストに就き、国家計画庁長官になった）。経済の専門家で党の官僚ではなかったが、党の最高指導部は彼を高く評価し、その判断を尊重していた。熱心な改革派に属していた。今、初めて、ファルヴェーギの校閲報告の歴史を話すのだが、これを記すのにやや躊躇^{ためら}いがあつた。私の親しい友人、デアーク・アンドレアは、フルヴェーギ大臣の信頼厚い部下だった。政府高官の場合にしばしばあることだが、その名前で出される出版物や講演の原稿の多くは、彼ら自身が記したのではなく、部下が準備したも

のだ。「不足」の著書に対する校閲者の見解をまとめる仕事が大蔵からデアーク・アンドレアに委任された。そして、その文章はアンドレアではなく、私が書いた。その最初の経緯がどうだったか、もう覚えていない。彼女が依頼したのか、私が提案したのか。とにかく、私の方が著書を良く知っている訳だから、校閲見解を書くのに何の問題もなかった。実際、それを書き終えたが、慎重なトーンで、出版の意義を（褒めすぎないように）認めた。ただし、著書から引き出される結論については、一言も触れなかった。

これはすべて秘密裏に行われた。出版社も他の第三者の誰も、校閲見解の真の執筆者を知らなかった。それは本質的なことでもない。アンドレアは上司に見解を渡した時点で、その文章の責任を請け負ったのだ。問題が起これば、ファルヴェーギは彼女の責任を問うだろう。さらに本質的なことは、署名する前に著書に眼を通したであろうはずのファルヴェーギは、党の最高指導部から叱責を受けることがあれば、その責任を負わなければならない。

こうして、出版社は出版を支持する二つの校閲者見解を得た。ハンガリーの「検閲」を通過したのである。編集者も校閲（検閲）者も、著書の変更を要求しなかった。壁がどこにあるか、うまく測ることができた。自己の思考を切断して最後まで引きずって行くのではなく、予防的に、事前に自分でそれを実行し

たのである。

* 著書の表紙を選ぶ時に、出版社のグラフィック・デザイナーは微笑みながら、二つの案を見せた。ひとつは、文字だけあるもので、実際にその文字が著書に取められた。もうひとつはカラーの絵で、裸体の人物が鏡の前に立っているものである。裸の王様だ。この絵は今も、研究所の壁に掛けられている。

妻は私に内緒で、グラフィック画家のカシユ・ヤノシユに対して、『不足』に関するセミナーを開いた。彼は著書からインスピレーションを得て、一連の素晴らしいグラフィック画を制作した。妻は私の誕生日のプレゼントとして、その画を贈ってくれた。家の壁に掛かっている。カシユはその後も不足をテーマにした絵の制作を続け、ハンガリーや日本で出版された論文集のイラストに利用された。

最初の反応

あの喜びの瞬間を覚えている。一九八〇年、エジエテム広場の書店のウィンドウに並べられている書物を、妻と一緒に見た瞬間のことを。第一版は瞬く間に売り切れた。Elete & Iró auton 紙はこれを、『不足』が不足⁽¹⁵⁾と伝えた。ハンガリー語版は、第三版まで出版された。

ハンガリー語版とほぼ同時に、英語版も出版された。North-

Holland 社の編集者は積極的に、ハンガリー語版が何らかの理由で出版できない場合でも、英語版を出版することで合意していた。

後に、フランス語版とポーランド語版、さらには中国語版が出版された。この中国語版の出版部数は一〇万部に達し、出版の翌年には非文芸部門の「年間ベストセラー」賞を獲得した。チェコスロヴァキアでも印刷されたが、商業流通には載せられなくて、研究者の手から手へと渡るのみだった。ロシア語訳は初め「サミズダート」(非合法出版物)として流通したが、合法出版物となるにはゴルバチョフ時代の終わりまで待たなければならなかった。出版と同時に、七万冊が売れた。

一九七八年の国際計量経済学会で、会長として著書の主要な命題をまとめた講演を行ったことや、それがEconometricaに⁽¹⁶⁾掲載されたことが、著書の思考の流布に役立ったと思う。

西側世界の多くの経済学雑誌に掲載されたが、そのどれもが賞賛を含むものだった。社会主義国での認知は、体制の「ハードさ」・「ソフトさ」に依存していた。とくに重要だと感じたのは、ソ連でも経済学者のR・G・カラゲドフが勇気をもって『不足』を詳細に紹介したことである。⁽¹⁷⁾彼の紹介がサミズダートの流通を容易にしたと言える。

西側でも東側でも、『不足』は経済学者の著作に頻繁に引用される文献になり、大学の講義でも使われ始めた。ライク・コ

レギウムで毎年、「不足セミナー」が開かれ、一章毎に私の著書が議論されていることを知って、たいへん嬉しかった。経済大学に呼ばれて講義をするのはこれが初めてで、大勢の学生の前に「不足」の連続講義を行った（それまでは、小さなグループ相手のセミナーを開いただけだった）。大教室は、毎週、学生と外部の聴講者で溢れかえっていた*。

* 最初の講義で、強制適応、人間の服従、従順さを特徴づけるために、人気作曲家で歌手であるステパノヴィツィ・ゾラーンの歌詞を引用した。「ビールは温いが、俺たちにはこれで良い」。これは受けた。

「不均衡」学派との討論

著書が成功の道を突き進んだかのような印象を与えたくはない。著書にしかめ面をした人もいれば、テーマ自体が適切でないと感じた人もいた。ハンガリーでも外国でも、それなりの数の留保が聞かれたし、厳しい批判的見解も記された。これらの反対意見を示すために、本章では二つの論争を紹介する（後の章では、「不足」の理解をめぐってハンガリー経済改革の支持者と反対者で闘わされた論争を、詳しく取り上げる）。

二人のアメリカ人経済学者、ロバート・J・パローとヘルシ

エル・I・グロスマンは、一九七〇年代初めに、ワルラス的均衡が存在しない、超過需要が超過供給の状態にある市場を研究するための新しいモデルを構成した⁽¹⁵⁾。これらは「不均衡モデル」と名付けられている。初めに「反均衡」が扱い、後により完成した形で「不足」が扱ったものと類似した問題提起である。後に、イギリスの経済学者リチャード・ポルテスがバロー・グロスマン・モデルの理論構造を我が物にし、これを計量計算に使用した。当時、彼は社会主義経済の研究に力を注いでいて、同僚たちとともに種々の社会主義経済の不均衡モデル⁽¹⁶⁾を作成し、ポルテス学派とも呼べるグループを形成していた。

リチャードは一九五〇年代末にブダペストで大学院生として計量化を研究していて、その時に知り合った。以後も時々会う機会があったし、経済学的话题の多くについて同じような見解を有していた。しかし、今度は我々の間で鋭い論争が起こった。

バロー・グロスマン、そしてポルテス他が消費市場をマクロ集計で記述する手法を、私は拒否した。この独特なモデルが掲げる、歪んだ鏡に映された市場は、ある時は一般的な超過需要、またある時は一般的な超過供給の状態にあって、二つの不均衡状態の間を移動することができる。たとえば、ポーランドのように厳しい不足経済に苦しんでいる国について、短期的であれば、「一般的な超過供給状態にある」とどうして言えるのだろうか。計量計算がこれを証明したとすれば、モデル構築で間

違つた前提や定義から出発しているからだろう。

著書で強調したように、不足は集計指標で特徴づけられるようなものではない。まさに社会主義経済に特徴的なのは、不足と余剰が並存することである。不適応のために、この二つの状態は相互に排除するものではないのだ。特定の商品・サービスが強度の不足にあるにもかかわらず、他方で売れない在庫商品が蓄積されて無駄にされ、生産稼働能力が利用されないまま休止しているのである。

そもそも、ポルテス等の計算が依拠している通常の統計指標では、不足を測ることができない。実際の購入が必要と一致するのであれば、購入・販売データは需要を反映していると言える。ところが、買い手が購入意図を実現できずにいたとしたら、充足されなかった本来の真の需要を誰が知ることができようか。買い手が不足に反応して、本来の意図とは別の物を買うことが頻発すれば、ますます本来の真の需要を知ることができなくなる。強制代替が超過需要を吸い込んでしまうこともある。さらに、ポルテス等のモデルはもっぱら消費市場を記述しており、それを投資市場から隔離していることも、私が批判した点である。問題の焦点は投資分野における緊張である。ここでは経済管理や企業経営者側に飽くことのない「投資飢餓」や拡張主義がはびこり、投資財市場は需要が常に資材供給を上回る状態にあるのだ。

ポルテス等は誰もが入手可能な統計データを使って計算できたことが、私との論争で大きな優位点だった。数学的統計的計算を実行して見せることで、すべての人を納得させたに違いはない。これに対して、私は同僚たちの直感（言うなれば、常識）に訴えることしかできず、数量化されたポルテス・モデルに対抗できるコルナイ・モデルを数量化できなかった*。

* 有望な初期的成果があった。ハンガリーでは私の同僚と教え子たちが、「不足」の理論的視角から、実証研究を開始した。同じ視角に立つ外国の研究もあった。このうち、特筆すべきは、ジェラルド・ロランドの一九八七年および一九九〇年に出版された論文である。

不足現象を測定しようとするれば、新しい手法が必要だった。この良い事例が、チカーン・アッティラが作成した測定指標で、同僚たちとともにハンガリーのデータを使ってその数値を決定した。不足経済では産出面で見た企業の在庫は枯渇している。というのも、買い手は入手できるものをすべて買おうとするからである。他方、資材利用の面でみた企業の在庫は膨れあがっている。というのは、「積み上げ」習慣があるからである。企業は将来の不足を案じて、ハムスターのように資材や半製品を集めるのである。このように見ると、産出財在庫と投入財在庫

の比率が、不足の指標のひとつになる。この指標が小さくなれば不足の強度が増し、逆に大きくなれば不足が緩和している。

この他の不足指標の観察や手法の開発も行われた（たとえば、商品やサービス毎の行列待機時間、強制代替の分布や頻度）。

この作業が成熟期を迎えるまで五年あるいは一〇年の時間が必要だっただろう。データを使って計量モデルを構造化しようとするれば、長期の時系列データが必要だからだ。この課題に取り組み始めた時に、不足経済が消滅してしまった。何と言おうか、とにかくこうなると、我々の論争は永遠に決定不能になった。

私自身は私の論理展開を堅持しているが、別の説得的な計算でポルテス等の計算を否定することができなかった（今となってはもうできない）。

ハンガリーでこの種の論争を行うと、論争当事者の人間関係がまざるくることが多い。幸いにも、ポルテスとの関係はこうならなかった。論争前と同様に、緊密な関係が続いている。

「ソ連正統派経済学者」との討論

もうひとつの論争は一九八一年の国際経済学連合のラウンドテーブルで展開された。議長はジョン・ヒックス卿だった。私は出版されたばかりの著書の主要な思考をまとめ、不足が社会主義体制に固有な問題であることを強調した。討論にはソ連経

済学会会長のハチャトウロフ教授が立ち、私の見解を厳しく退けた。「不足現象が生じうる」ことは否定しなかった（生じうる？ 当時のハンガリーはソ連よりはるかに物が豊富な国だったが、それでも深刻な住宅不足があったばかりか、基本的な食料品や衣料品でさえ定期的に不足していた）。彼によれば、不足現象は計画化の誤りから生じるもので、計画化の水準を上げれば、問題は解決されるということだった。

会議にはその数年前にノーベル経済学賞を受賞した線型計画理論の開発者で、偉大な数理経済学者のレオニード・カントロヴィッチも同席していた。彼は聴いているだけだった。

ヒックスは会議のまとめの中で、同意する調子で私の講演に触れたが、社会主義国から来た二人の経済学者の論争に巻き込まれるのはまずいと感じたようだった。^{*}

* この会議で、後に中国改革の中心人物の一人となった吳敬連 (Wu Jinglian) 教授と初めて会った。私の議論の方が説得的だと述べた。中国でもこのような思考が広がり、中国の発展に影響を与えたいという希望を表明した。以後、何度も会うことになったが、彼こそ私の著作の中国語訳出版に奔走した一人である。

ハチャトウロフの言葉や口調の激しさから、『不足』で語られた言葉が政治的内容を持つものであることを、改めて確信し

た。

体制腐食化への貢献

ここまで、著書出版の経緯や影響を見てきた。これら「手にとつて見られる」影響よりもっと重要なのは、社会主義体制に生きる知識人にどのような影響を与えたかである。

出版から何年も経って、私は新しい居住区の地区医師（居住地区の診療所）を訪ねた。その医師はあたかも古い友人に会ったかのように、私に挨拶した。出版当時、「不足」を読んだという。彼が言うには、「あの著書が世界観を変えたといつても誇張ではない。あれから、社会主義経済を見る眼が変わった」。それから少ししてクラコフへ旅行した時に、あるポーランドの社会学者が、まったくこれと同じことを述べた。

個人的な会話だけでなく、印刷物になったものを見てみよう。ここでは、ロシアの経済学者を回顧するのに留めておく。^{*} ダニエル・イエルギンとヨゼフ・スタニスラフが体制転換について著した一九九八年に出版された著書の中で、首相を務めたイエゴール・ガイダルとの会話が記されている。著者はガイダールの見解を次のようにまとめている。「共産主義体制に生きる知識人の一世代すべての思考様式に影響を与えたと見えるような現存する経済学者は、コルナイである。彼はこの体制の可能

なヴァリアントである市場社会主義の不可能性を証明したのだ」。さらに、ガイダル自身の言葉によれば、「一九八〇年代の誰もが、彼から最大の影響を受けた。不足経済に関する分析は一九八〇年代初めに、すべての人に大きな影響を与えた。彼是我々の問題を直視していた。我々は彼のすべての著作を知っていた⁽⁵⁷⁾」という。

^{*} チカーン・アッティラは二〇〇四年に出版された論文で、ハンガリーでの反響を振り返っている。また、これに関連して、統計的なデータを取り上げておきたい。二人のハンガリー人研究者、スッフ・ジョルジュとトート・イシュトヴァーンは、一九八九年に「科学計量」研究を発表し、ハンガリーの経済学文献の中で、誰がどのような頻度で引用されているかを明らかにした。ひとつの表(1207 p.)に、五年ごとの著者引用ランキングが掲載されている。一九六三年から一九七二年の期間では、マルクスが一位を占めている。一九七三年から一九七八年の期間では、一位がマルクス、二位がレーニン、三位がコルナイである。一九七八年から一九八三年にはこの順序が逆転して、私の引用が第一位を占めた。一九八三年から一九八八年の順位には変動がなく、この期間にハンガリーの経済学者が出版した論文の中で私が引用された回数、マルクスのその二倍だった。

Washington Post の元モスクワ特派員デイヴィッド・E・ホフマンは数年前に *The Oligarchs* と題する書物を著している。

ガイドールやチュバイスの周辺に集まった若いソ連の経済学者を回顧している。「この時、あるインスピレーションが雷鳴のように突然やってきた。ハンガリーの経済学者コルナイが出版した二巻六三〇頁になる著書が、深遠なインスピレーションを与えた。『不足』と題するこの著書は、他のどんな書物よりも明快に、ソ連社会主義の失敗を見通すものだった」。ホフマンはこの経済学者グループの一人の言葉を引用している。「著書はまずレニングラードに到着した。それからコピイ市場に密輸され、すぐにこれが〈聖書〉になった。我々も独自の思考を有していたが、この著書はある種のカタルシスだった。そして、我々の思考を前に押し進めてくれた。誰かと会うと、ヘコルナイを読んだか。まだかい〜というのが、挨拶代わりになった」。

私の人生の中で、どれが一番誇れる実績かと問われれば、これだと答えるだろう。私の著書に触れたことが、知識人、経済学者を揺るがしただけでなく、違う専門家をも揺るがし、社会主義体制を見る眼を変えることに役立ったとすれば、これほど嬉しいことはない。

ベルリンの壁崩壊の後、これに先行する諸事件について、種々の理論が発表された。さまざまな政治勢力が、かつての鉄のカーテンから東側に向かつて、あるいは西側に向かつて、論功を主張した。レーガンの強権的な軍事圧力に原因を求める者や、ゴルバチョフの賢い判断にそれを求める者がいた。ある者

は反抗者や亡命者（サハロフ、ハヴェル、ミフニク等）の役割をもっとも重要な要因と考え、またある者は「改革派共産主義者」の役割を第一義的なものと考えた。私はこのような問題提起は誤っていると思う。一九八九―一九九〇年の転換が突然にそれも急激に展開したとしても、それには長期にわたる社会主義体制の弱体化プロセスが先行している。例外なく、大きな歴史の変動にはすべてのものが作用しており、その腐食化は多くの要因によって説明される。「一元的な」因果関係ですべてを説明するというのは、きわめて怪しい考えだ。それは複雑な歴史過程を極端に単純化するものだ。このような一面的な説明からは、政治的意図や自己宣伝が透けて見える。

それが絶対的で主要な原因という訳ではないが、社会主義体制の政治的・経済的・文化的指導層の思考において漸次的に行する深い転換が、ひとつの重要な説明要因として、その準備的役割を果たしたと言える。いかなる権力、いかなる専制政治であろうと、そのレジームのレジティマシーと生存可能性を信じる追随者たちがいなければ、存続不可能である。諸困難を一時的なものともみなし、メシア的殉教者へと駆り立てる共産主義者がいることが、社会主義体制の上部構造を支える土台である。ヒットラー一派が抑圧と軍事力だけで戦争を続けられたのではない。最後の最後まで、それを信じる者がいたからである。信念や体制への信頼が崩れたことが、社会主義体制の墓掘役を演

じたのである。社会主義への共感の輪が空洞化し、内部の指導者が確信を失い、別の道を探し始めたのである。

これらの腐食を促進したのは、経済的諸困難、アフガン戦争の敗北、住民の不満増大などの直接的経験である。そして、この時期に政治的に先鋭化した知識人が手にした著作が、この崩壊を速め、その出来事の理解を助けたのである。そのような著作を多く上げることができる。何よりもまずセンセーションを巻き起こしたソルジェニツインの『収容所群島』を上げなければならぬ。オーウェルやケストラーの作品が数十年のタイムラグを経て、多くの人の手に渡ったのもこの時期だ。これらの作品に比べて、『不足』は共産主義の構図に独自の色彩を与えたと言える。上述した三名の作家の作品は皆、抑圧の残虐さや狡猾さを描いたものであり、レジームの虚飾の非人間性を暴いたものである。私の著書の静かで客観的なトーンは読者の思考や感性の別の層を掻き立てるものだった。社会主義を「人間の顔」にすれば十分で、それで社会主義の歴史的使命が達成されると考えるナイーヴな考えを揺るがした。レーニンには正当にも「資本主義の生産性を凌駕すれば社会主義は勝利する」と主張した。『不足』を読んだ人は、「この優位性はけっして達成されない」ことを理解できた。

政治に関心をもつ知識人のどれほどが私の著書に触れることができたのか、そして、その影響を受けなかった人がどの程度

の割合でいるのか分からない。このような調査ができるとは思わない。ただ、著書を手にしたことはないが、出版から数ヶ月は「ブーム」になっていたので、「サロンの」話題として著書のことを知っていた人たちがいることは間違いない。だから、著書の影響を過大評価する訳にはいかないだろう。とはいえ、影響範囲や影響力を少なく見積もっても、「この著書の影響は大きかった」と言えるだろう。

* ハンガリーの著名な作家カリンティ・フェレンツの作品に、読書体験をまとめた日記がある。個人的にも知っているので、この質問をぶつけてみた。カリンティは『不足』を読んでおらず、友人たちの会話でもこれが話題になることはなかったという。

出版の政治的・倫理的ディレンマ再論

カードナル・レジームと対峙した知識人運動の指導者の一人であるドナート・フェレンツについては、これまで何度も触れたが、ストックホルムから戻った後、マートラ山の科学アカデミー保養所で彼と会うことになった。『不足』の最終章をここで執筆していた。一緒に昼食をとり、何度も森を散策して、学問・政治・経済について親密に語り合った。

散歩の終わりに、ビボー・イシュトヴァーンの記念論文集を

出したいとドナートが切り出した。すでに多くの著名人が寄稿を約束したという。^{*} 私にも書かないかということだった。即座に断った。ドナートは合法・非合法出版についての私の考えを良く知っているし、今やっていることもその企画に合わないことを知っていた。とくに説得することもなく、私の答えを受け止めた。

^{*} もともとケネディ・ヤーンシュが、ビボー七〇歳の誕生日の *Festschrift* として企画したものだ。実際の編集は彼の死後に始まった。ドナート・フェレンツが編集委員会の長を引き受け、ベントウ・ジョルジュ、キシユ・ヤーンシュ、スューチ・イェヌーが編集委員になった。記念号の出版は、合法出版物として、Condolat社に提案された。出版社は党の指導部の意見をもとに出版を断つたために、一九八一年に「サミズダート」として流通することになった。体制転換の後、リーズ・パールの監修のもと、Szazadvég社から出版された。

その時の言葉や後の言動からも、気分を害したようには感じなかった。以後も度々会って、個人的な会話を続けた。一九八三年夏、ミュンヘンに滞在した折、病氣療養中の彼を見舞った。さらに後になって、ブダペストの病院に彼を訪ねた時に、いつものような皮肉を込めた微笑みで、氣丈にも死に際の苦痛に耐える顔を見て驚いた。我々は正反対の人生戦略を生きてきたが、

それが相互の友情と敬愛の妨げにはならなかった。

ドナート・フェレンツに限らず、ハンガリーの非合法・半合法組織に参加していた人々で、私と知己にあった友人たちは皆、理解をもって私の人生選択を見守ってくれた。自らが選択した道を尊重し、私の業績を評価してくれた。

第5章と第7章を再読していただければ、一九五五―一九五六年頃から抱き始め、一九五七年に再び強固になった決意が読み取れる。「非合法的な出版によって、種々の出来事に影響を与えることはしない」。この時、「プロの経済学者として、西側の専門世界の一員になり、合法的出版で影響力を行使したい」と考えるようになった。これは最初から、一定の譲歩を要するものだった。良心の呵責を引き起こすものでない限り、譲歩する用意があった。

この人生戦略を貫き通すことに努め、「不足」を記した時も、またビボー記念論文集への寄稿を断つた時も、その意思を貫いた。

自己検閲は苦い犠牲を伴う。社会学者や作家あるいは詩人の中には、言葉の行間に隠されたメッセージを忍ばせ、これだけで政治的な検閲を通すだけでなく、快感を得る人もいるだろう。しかし、私の場合は何の喜びも見いだせなかった。常に、概念構成が曇りなく明瞭なものであることに、最大限の力を注いだ。「私が記述していないことを探さない」と読者に強制しなけ

ればならないとしたら、自らを切り刻むような苦痛を感じる。自己検閲は屈辱的なプロセスだ。体制転換で新たな解放感を得たのも、この苦い痛みから救われたからだろう。

非合法で執筆する人々は、けつしてペンを折らないという気持ちを含めていられるだろう。自らが正しいと思うことをすべて書くことができる。このような可能性をもっていることを羨ましく思った*。

* マルクス主義から決別してから数年経って、マルクスの思考に閃く私見が形を成してきた。論争的な著作にしたかった。しかし、これを合法的に出版できるはずがなかった。最終的に、この研究は私の中に閉じこめられてしまった。

政治目的に関して同じ波長をもっている友人に拒否回答を与えることは、辛くて苦しい出来事だった。共に闘う仲間を見捨てるようなものだ。このような状況に、何度となく遭遇した。非合法出版への論文寄稿や抗議文への署名が求められた。私は一貫して、これらの要請を拒否し続けた。

二種類の人生戦略をあちらこちらへと切り替えたくなかった。種々の「沈黙」、つまり出版の禁止を回避しただけではない。西側への旅行という特権的な権利を失いたくなかった。言うまでもなく旅行者としての体験を得ようとしたのではなく、西

側の同僚たちと定期的に会い、少しでも長い時間を西側の学問世界の要塞で過ごし、最新の知識をその第一次的源泉から仕入れて初めて、経済学の世界で同等の立場で専門家として認知を受けることが分かったからである。東欧の精神生活の世界から一歩も外に出なければ、その思考は周辺のなものに留まってしまうだろう。体制転換の後に国際的な科学研究の場に足を踏み入れた私と同世代の仲間は、どれほど遅れた地点から出発しなければならぬかを体験できただろう。

人は事後的に自らの選択が唯一可能なもので、倫理的にも確証できる唯一の決定だったと、自らの人生を証明したがるものだ。譲歩が必要な瞬間には、若干の許容範囲があると思う。より急進的に振舞えば、「逆上^のせた頭」と「無思慮」が得るものより多くを失うことになる。逆に、権力に譲歩しすぎれば、「妥協的」で「権力に屈する」ことになる。

他人の行動については、より寛容に自らの倫理的判断を下す。ただし、際限のない倫理的相対主義は受け容れない。私の眼に裏切りと映るような大きすぎる譲歩がある。あちらこちらへと飛躍することが、それほど深刻なことだと考えない浅薄な者もいる。私がつりわけ軽蔑するのは政治的カメレオンである。下着を取り替えるように世界観を変えたり、政治権力や金に目が眩んで自らの原理を簡単に放棄したりする連中である。

倫理的に受容可能な人生戦略はひとつに限られず、多数存在

すると思う。尊敬に値する人生戦略もまた、ひとつに限らず、多数存在しよう。民主主義や人権擁護のために、安定した職場や自由、時には命まで犠牲にして、非合法で闘う人々に心から尊敬の念を抱く。

私の選択問題に限定してみよう。「サミズグートは高々数百部のもので、国境を越えることもできないのに対し、合法的に出版（自己検閲）された『不足』は国境を越え、世界の国々で数十万の人の手に渡った」と私が主張するのは一方的に過ぎよう。これは間違いないことだが、サミズグートは私が目的としたことをラディカルに宣言することができた。この二つの出版手段は、専制政治の環境下で、相互に競合するものでなく、お互いに補完し合うものと考えた。非合法の新聞を編集・配布した自己犠牲的で勇敢な人々がいたことを心の底から尊敬する。ハンガリーの民主主義を望むものとして、このような同時代人がいたことを誇りに思う。彼らの著作と私の仕事が相互に相乗し合ったと考えて、今私は心安らかに生きている。

第14章 突破（一九七九年）

——「予算制約のソフト化」をめぐる

本章の執筆に取り掛かる数日前に、エリック・マスキンとジエラルド・ロランドの共同研究が、*Journal of Economic Literature* に掲載された。「ソフトな予算制約」をテーマにした文献を渉猟したものだ。

この概念は一九七九年に初めて印刷物で使用したが、それ以後、二五年間にこの思考は広範に利用されることになった。

概念の意味と意義

「予算制約」という表現は、言うまでもなく、家計のミクロ経済理論から取ったものである。家計が予算を作成するものとして、収入から支出を賄えるように計画するが、以前の貯蓄から補充することでこの制限を押し広げることができる。家計が処分できるすべての金銭的源泉が予算制約であり、家計の支出はこれを超えることはできない。

次に、社会主義体制の枠組みで機能している国営企業の経営を考えてみよう。すべてがうまく行けば、収入が支出を賄い、かつ利益も形成される。もし支出が収入を超え、資金的準備も枯渇したとすれば、どうなるだろうか。二つのことが考えられる。ひとつは、企業をそのまま放っておく。予算制約はハードで、企業が継続的に損失を続ければ、いずれ倒産する。もうひとつは、上部機関が助けに駆けつけ、企業を救済する。この後者の場合、予算制約はソフトで、支出を制約することはない。長期にわたって支出が収入と資金予備を超えても、損失企業が生き延びることができる。

社会主義体制の経営を知っている人には、このことは周知のことだった。ハンガリーのように手探りで改革へ進みだし、企業経営者の利害関心を利潤増加へ向けさせようとしているところでは、これがとくに大きな問題だった。利潤の重要性が声高に叫ばれたが、それを誘導する刺激力が欠けていた。企業が収

益的であれば問題ない。損失的でも、何とか救済されるから、大きな問題ではない。ここに虚偽の市場と真の市場の違いがはっきり見られる。後者の競争には勝者だけでなく、敗者も存在するのだ。

ソフトな予算制約は重大な弊害を引き起こす。価格が合理的な場合でも、企業は価格、費用、利潤のシグナルに十分に感応的でなくなる。ハードな予算制約は市場で地位を確保できないものに自動的に重い罰則を課し、それが損失となって現れる。ソフトな予算制約はこの罰則から免除し、低い生産性を容認する。生産者は無責任な発注（非現実的な需要）を行うようになる。彼自身は支払えないが、いずれ救済者とその請求書を受けてくれるからである。これが過大な投資計画を説明する要因のひとつである。常に投資は低い支出計画で始まるが、途方もない予算超過で終わるのである。

結局のところ、予算制約のハード（ソフト）さは、経営者が何に関心を払うべきかの情報を与えるといえる。制約がハードであれば、生産性や収益性に配慮しなければならない。これに対して、制約がソフトであれば、企業の経営者にとって、資金援助や救済が期待できる「上部機関」との関係を良好に保つことが重要になる。工場の現場より、権力者や上部機関とのロビー活動が重要になる。

この思考が大きなセンセーションを巻き起こし、広範に広が

っていったのは何故だろうか。何よりもまず、誰の目にも明らかな現象を適切に捕捉していたからだろう。明解で説明可能な原因、規則性、結果を伴うシンドロームであり、それが生み出す帰結の重大性は何人も否定できないからである。最初から強調していたように、この現象は社会主義にはびこっているが、私的所有にもとづく市場経済に見られないものではない。当初は企業行動を捉えるものとして、ソフトな予算制約の存在を表現したが、同時に、保健・教育機関、非営利団体、地方自治体経営にも同じような問題があることに注意を喚起した。さらに、一国の金融制度が崩壊し、国際的な金融機関や世界組織が救済するようなことになれば、国民経済全体にかかわるシンドロームになる。

この思考が普及したのは現実的に説明可能な事象があったからだけではない。その理論的構造が経済学的主流派の思考に適合していたという幸運な事情もある。ミクロ経済学を勉強したことのある人であれば誰でも、最初の数時間の講義で予算制約概念を学ぶ。すでに周知の概念の意味を広げかつ精緻化する思考過程は、分かりやすい。前の章で自律的制御の思考が普及しなかったのは、いくつかの基本点で、主流派経済学者のルーティン的思考の中に適合しなかったからだと結論した。この概念の場合、幸いにも事情が逆転した。この「刻印されている概念」、すべての人に周知の「予算制約」に依拠する理論は、簡

単に親近感や関心を引き起こすことになった。

先行事情

ソフトな予算制約理論に至る先行思考は、かなり長い時間を遡る。本書の第7章で指摘したように、ハンガリーで利潤関心が導入され始めた時に、企業は即座に損失補填を要求するようになった。これに関連して、一九五八年に「利潤分配を修正しなければならぬか」という論文を執筆した。この問題は以後も解決されないままに残り、常に重要な現象と対峙していると感じていた。

一九七二年に、アンドレアス・パパンドレウが *Paternalistic Capitalism* と題する著書を贈ってくれた。当時はギリシアの首相ではなく、カナダの大学教授だった。この著書はきわめて重要な社会現象に目を開かせてくれた。種々の社会に、現在もなお、温情（父子）主義的な特質が観察される。もちろん、私は社会主義体制に現れる現象に関心があった。

野蛮な抑圧時代にも、血塗られた独裁者が「民が愛する父」の役割を果たしたこともある。ハンガリーの専制政治が緩み始めた時には、父の役割は強面から柔らかなものに変わった。政治構造から見た温情主義は、個人、家族、小共同体、最下位組織（たとえば企業）の手にあるべき決定権が中央権力の手中に

あることを意味する。古い時代の家族生活でも決定権限は父親にあったが、それは同時に、家族を扶養する義務を伴っていた。温情主義的社会はその成員をほとんど幼児のようにみなす。成員が自立することを期待せず、すべての困難に対して「上から」救済を待っていると考えるのである。

私の頭の中で、温情主義の現象と企業の救済を結び付ける思考が広がってきた。そして、一九七五年、オスロー大学の講義で初めてこれを表現してみた。国家と企業の関係の叙述に、家族と子供の養育の図式を使った。第四段階から始まり第〇段階で終わる、温情主義の五段階を区別した。第四段階は「現物支給の受身的受容」である。これは誕生の環境に特徴的なもので、すべてのものは両親から与えられ、自らはまだ要求することもできない。第三段階は「現物支給の能動的欲求」である。子供が大きくなっても、依然としてすべてのものを両親から獲得するが、すでに話すことができるので、自分の欲求を伝えることができる。厳格な中央集権化経済における国营企業の状態が、この段階に類似している。中央で生産計画が立てられ、必要な資材が割り当てられる。専制の度合いが強ければ、企業に問い合わせることもない（第四度）。手綱が緩めば、計画交渉を行うことも可能になる（第三度）。

第二度は「金銭授与」と名付けられた。アメリカの大学生のように、子供が家から出て行くが、未だ稼ぐことはできない。

両親はお金を渡し、生活を支える。お金がなくなれば、親に頼む。親は送金するし、それが繰り返される。これに類似した経済状態は、企業が投資プロジェクトの資金枠を与えられる場合である。これを自己管理しなければならぬが、資金が枯渇すれば、国が代わって支払うことになる。

第一度は「自立・自主支援」、第二度は「完全自立・無援」と名付けられた。子供は成長する。自給できる程度のものを稼ぐ。しかし、もし金銭的困難に陥ったらどうする。家族が助ける（第一度）。あるいは、自己責任にまかせる。成長した家族成員自らが解決すべきものと考え（第二度）。この家族のアナロジーから企業の生活様式に戻ると、第一度は市場志向の半ば改革された社会主義経済環境を反映しており、企業は自立しているが、継続的な損失が救済される場合である。第二度は温情主義がなく、厳しい市場環境にある場合である。倒産しても、それは自己責任。誰かが損を肩代わりしてくれるなどと考え（第三度）ということになる。

この温情主義の度合いを例証した記述、つまり家族と社会のアナロジーは、後に著書『不足』の中に収めた。オスローではまだソフト・ハードな予算制約という表現を使っていなかった。しかし、著書ではこの新しい用語を温情主義モデルの中に組み入れた。温情主義の第二度あるいは第一度の現象はソフトな予算制約と名付けたものに対応し、第三度はハードな予算制約に

対応する。

このような命名は、最初に予算制約の役割を頭に描いて、それを彫琢するというプロセスから生まれたものではない。まず初めに現実の経済現象があり、その実際の観察が出发点になっている。命名そのものはいわば偶然に浮かんできたものだ。ストックホルム大学の講義シリーズで、第一二回目の講義録を準備していた。企業機能モデルで産出の下限と利用可能な資材の上限を数学的不等式で描こうと考えていた。完全を期すために、資金的制約も考慮する必要があった。利潤最大化を図る標準的なミクロ経済モデルでは予算制約を明示的に扱うことはしないが、私はこれをモデルの中に入れてみた。ところが、すぐに分かったことは、これが有効な制約にならないのだ。企業は資材の制約を破ることはできないが、問題があれば上部機関が救済してくれることを知っているから、予算制約がソフトなのだ。講義では「ソフトな予算制約」という表現を使った。良く覚えていたが、講義を聴講していた二人のアメリカ人経済学者ベングト・クリスター・イザンダーとハーヴウェイ・ラペムと、一人の学生ラルシュ・スヴェンソン（後に良く知られた経済学者になった）が、講義の後にやって来て、予算制約のソフト化に関する思考がとても気に入ったと話してくれた。この言葉に勇気づけられて、この表現を再考し、さらに関連する理論問題に取り組みることになった。

これ以後、不足経済や社会主義経済に関する講義や論文において、この体制の機能不全を特徴づけるものとして、ソフトな予算制約の記述や分析が重要な役割を果たすことになった。

理論認識の歴史をみると、ほとんど成熟した形で新しい理論が突然に生まれることがある。私の場合、このようなことはけっしてなかった。先に触れた一九五八年の論文から二〇〇三年の論文 (*Journal of Economic Literature*) までの期間に区切ってみると、基本的な思考は初めから最後まで変わっていないが、この四五年間の記述方法、因果的説明や帰結の表示は大きく変化している。現在の私の立場は、この二〇〇三年の論文と一九九二年に出版された総括的著書 *The Socialist System* (『社会主義システム』) に表現されている (この著書については後に詳しく扱う)。狭い専門的視点にこだわっていないかった以前の思考と異なる、現在の思考展開の到達点について、二つのことを以下に指摘しておきたい。

ソフトな予算制約の原因を説明する際に、当初の出版物では国家の温情主義的な役割が強調されていた。国家は「自分の子供」、自らが創設した国営企業を放っておく訳にはいかない。その存続に責任があるし、そこで働く人々の生存条件を確保しなければならぬ。これを読んだ読者の多くは、ここで私の因果関係分析が終わったと考えている。しかし、そうではない。当時においても、私は「社会主義体制の国家は何故このように

振舞うのか」という問題を自分自身に提起していた。「養育的」役割の請負が、権力の要求、より正確には分割不能な権力の要求とどのように結び付いているのだろうか。あるいは、体制の政治的構造や公的イデオロギーとどのように適合しているのだろうか。これは温情主義を記した『不足』の第二章に続くべきものである。著書に記されなかった部分は、まさにこれらの連関を扱うもので、前章でも既述したように、この部分の叙述は自己検閲として著書から省かれた。前章でも触れた通り、幸運なことに、多くの読者が『不足』の思考過程に続くべきものを読み取ってくれた。しかし、すべての人が後に続く思考を読み取ってくれた訳ではない。それらの人々はこの問題について、私が答えていないと考えた。^{*} 私が社会主義を温情主義と考えているだけで、この体制の中で共産党が果たしている専制的役割やその政治権力的関係が国家と企業の関係、ヒエラルキーの上級と下級の間を規定していることを考慮していないと考えた。行間に込めた意味を読み取ってもらえなかった。著書の最終頁で、一般的な表現で、「制度的体制」の役割を指摘したが、想像力に欠けた読者には十分な表現ではなかった。

* 数十年の出来事を振り返ってみると、西側の同僚の中には、私が共産主義国家の市民であり、検閲や自己検閲によって制約されていることを考えもすらしなかった人々がいる。繰り返しようし

た態度に出会う度に、驚いたものだ。

『不足』や他の著作の合法的出版のために、私が払った苦しい代価については前章で述べた。不足の因果関係を温情主義の記述で断ち切った私の決断が、多くの読者に誤解を生んだ。これこそ、合法出版の「代価」のひとつだったと考えている。The *Socialist System* の著作でようやく、ソフトな予算制約の説明にかかわる思考のすべてを叙述することができた。

二つ目の変化について記しておきたい。以前も、そして今でも、予算制約と不足との間に因果関係があると考えているが、それを繋ぐ力については別様に考えている。

一国経済全体を覆う慢性的な不足経済現象は、生産の大部分で企業の予算制約がソフトになっていることを必要条件としている。必要条件ではあるが、十分条件ではない。別の要因、たとえば自由な起業の禁止、輸入競争の行政的制限、価格体系の歪曲等々が必要である。『不足』では一面的に予算制約のソフトさを強調した。これは自己検閲で説明されるものではない。合法的出版のために因果関係の分析を打ち切ったのではない。この問題の分析が十分に完成されたものでなかったことから説明される。

この一面性はソフトな予算制約の帰結の表現にも現れている。不足は著書の主要なテーマだったから、このシンドロームが需

要の「殺到」にどのような影響するのかが一番の関心だった。この影響力は重要だが、これよりさらに重要なのは、ソフトな予算制約が生産性、競争力、刺激誘因に与える有害な効果だった。そのことはこの問題を扱ったすべての著者たちが最大の注意を払ったところでもある。『不足』はそれを示してはいたが、現在では、この有害な効果に第一義的な重要性を与える必要があると考えている。

経験による証明

理論の認知が経験的にも証明できることが重要だと考える。

経済大学の若い教員であるマティッチ・アグネシュとともに、ハンガリーの国営企業の主要な金銭的データを、長期に亘ってデータベース化する仕事を始めた。当時のコンピュータで一三〇万件のデータを集めた。アグネシュたちはこのデータを処理可能な形にまとめ、種々の計量分析を行った。その分析から、種々の複雑な経路を辿って、企業利潤が何度も再分配されることが明らかになった。恣意的な官僚的再分配の結果、「最終利潤」の項目として現れるものが当初の利潤あるいは損失とどれほど乖離しているのか、知る術もないのだ。ただ、はつきりしていることは、計算から証明できることだが、官僚的再分配の結果、本来は収益的な企業から利潤のかなりの部分が控除

され、本来は損失的な企業へ移転されていることである。収益企業はこのような形で「罰を受け」、損失企業が報酬を受けるのだ。こうして、ソフトな予算制約の目に見える証拠を手にした。これらの計算結果は、マティツチ・アーグネシユとの共著 *A vállalatok nyereségének hirokritikus újraelosztása* (企業利潤の官僚的再分配) として、出版された。

体制転換前には、他の著者によるソフトな予算制約の実証研究も行われたが、散発的なものだった。時間は先に飛ぶことになるが、一九九〇年代にこの研究がひとつのブームを迎えた。思考の突破が生じた。というのは、ポスト社会主義国の西側の経済顧問たちが、ソフトな予算制約こそ前体制から継承した経済の癌であることを認識し出したからである。ここから、制約のハード化が経済改革のひとつの最重要課題であることを理解し始めた。統計データの収集や計量分析にもとづく研究が始まった。基礎研究だけでなく、世銀やヨーロッパ復興開発銀行の社会主義やポスト社会主義経済の報告も、企業の予算制約のハード化を抜きにしては語れなくなつた。

現象の数学モデル化

ソフトな予算制約の実証的な検証のみならず、その数学的モデル化でも、私がそれに着手しなければならなかつた。幸いに

も、有能な助っ人が現れた。ユルゲン・ヴァイブル^{*}である。ユルゲンはソフトな予算制約という表現を嫌っていたが、温情主義という思考は気に入っていた。ひとつの数学モデルを構成することに成功した。そのモデルは、「温情主義で損失企業を助けると、企業セクターは発注における慎重さを失い、あたかも競争においてすべての企業が地位を確保できるかのように、需要が膨れあがる⁽¹⁰⁾」ことを証明した。

* ユルゲンとの出会いは運命的なもので、スウェーデンのセミナーに参加する学生として知り合ったが、ユルゲンは二つの論文の共著者というだけでなく、娘の夫であり二人の孫の父にもなった。温情主義に関する研究は一九八〇年代初めに出来上がった。ユルゲンのブダペスト訪問を機会に開始し、後にストックホルムとブダペストの間で手紙をやり取りしながら完成した。

プリンストンでも興味深いモデル化が行われた。以前、プリンストンで世話になつたりチャード・クウォントが、ソフトな予算制約に知的興味を持ち始めた。クウォントたちはこのテーマに関する一連の研究を開始し、ソフトな予算制約と企業の投入財需要の増加との間に存在する理論的連関を証明した⁽¹¹⁾。彼らはこれを「コルナイ効果」と名付けた。

ハーヴァード大学教授エリック・マスキンとPhD生(当時)

マティアス・デヴァトリポンの理論モデル^(四)の誕生は、この理論史の転換をもたらした。当時、私はハーヴァード大学で教鞭をとっており、エリックとは社会主義経済について語り合っており、とくに予算制約のソフト化問題についても議論していた。

彼はデヴァトリポンとともに、ゲーム理論のいわゆる「コミットメント」問題を研究していた。もしゲームのプレーヤーの一方が事前に定めた戦略を守る、あるいはその逆に約束を違えて事後的に戦略を変更する場合、「ゲームのプレーヤー」(所与の状態において協力的あるいは敵対的な関係にある当事者)の関係が別様に形成される。時間の進行に伴って、その行動は首尾一貫したものであるか、それとも首尾一貫していないか。彼らは、「ソフトな予算制約は独特な首尾一貫性を欠く現象である」と結論した。

ひとつの簡単な事例で見てみよう。ある大銀行がある企業の投資を金融する。銀行は当初の融資契約厳守の約定をとる。何が起こりようとも、投資プロジェクトを実現する企業に任せ、自らの足で自立することを期待する。ところが、その企業が資金の困難に陥り、当初の融資条件を遵守できない。そこで、銀行は事前の約定にもかかわらず、金融的支援を行うために融資契約を修正し、新たな融資を行う。

このモデル分析が示しているように、銀行は自らの金融的関心からも、「救済」の立場をとりうる。いったん投資金融を始

めると、「カネを追いかける」ことが合理的になりうるのである。

デヴァトリポン・マスキン・モデルは、二つの理由でとくに興味深く重要である。ひとつは、因果関係分析を深めた点にある。この因果関係を、政治的・経済的・社会的視点が損失企業を救済する組織を動かす場合に限定する必要はない。単純に利潤志向の銀行の自己関心そのものも、救済(損失組織の補填)へと向かわせるのである。このことは実際にも観察される場所であり、大銀行が一時的にせよ、業績の良くない顧客を救済することは周知の事実である。債務の帳消しより、この救済が損失を小さくすることもあり得る。

デヴァトリポン・マスキン・モデルのもうひとつの利点は、問題が数学的なゲーム理論の枠組みの中で処理可能になる点である。一九九〇年代はゲーム理論に専門家の関心が向けられ、多くの研究者がこの手法を利用した。アメリカの専門家が使うジャーゴンでは、これが「ホット」な研究方向になった。ゲーム理論を使い、その形式美を備えた柔軟な手法を理解する者は、良く解釈されたモデルでソフトな予算制約シンドロームを記述することができる。

デヴァトリポン・マスキン・モデル以後、このヴァリエーションが次から次へと作成されてきた。そのどれもが、それぞれの側面から、問題の多様な特徴を明らかにし、シンドローム

の出現原因とその影響を説明している。

最初の総括論文のこと

再び、時間を戻そう。論文や『不足』でソフトな予算制約を扱った後のことだが、一九八四年にこのテーマについて、総括的な論文を書く時期が来たと考えた。ソ連学者や東欧研究者だけでなく、もつと幅広い読者を得たいと考えた。もつと多くの専門家が未だ知られていないこの思考を知りようになれば、彼らも市場経済への応用を考えるようになると確信したからだ。この論文は数学モデルを含んでおらず、最初から最後まで散文で書かれたものだった。例証的にいくつかの表を掲示したが、その解釈は読者に任せた。データの数学的統計的分析を示すことなく、計量的分析で命題を裏付けることはしなかった。

この論文を *American Economic Review* 誌に提出した。数ヶ月経って、編集者から手紙をもらった。三名の閲読者が論文を読んだ。そのうちの一人は若干の修正で掲載を提案したが、他の二人は厳しく批判した。編集長はこの二人の批判のトーンがあまりに粗野であるという注釈を付した。これらすべてを勘案して、編集長はサーヴェイ論文として、この雑誌ではなく、*Journal of Economic Literature* 誌に掲載することを勧めた。

後者の雑誌がすでにそのような論文掲載で私と合意しているこ

とを知つてのことだった。⁽¹⁸⁾

この懇懇な提案は誤解にもとづいていた。確かに、この雑誌への掲載のために論文を作成していたが、別のテーマだった。「ハンガリー経済改革の包括的な展望と評価」(これについては次の章で扱う)だった。この二つの論文はほとんど重なり合うところがない。

端的に言えば、*American Economic Review* 誌は私の論文の掲載を拒否したのである。それゆえ、この論文を *Kyklos* 誌に送ったが、編集者はこれを受理し、修正なしで掲載した。⁽¹⁹⁾ この論文は私の著作の中でも、もつとも引用度の高いもののひとつになった。

他の大学者も同じような拒否に会うことが、少しの慰めになった。かなり後になって、二人のアメリカ人研究者、ヨシユア・S・ガンツとジョージ・B・シエパードが、このような体験について多くの経済学者の聴き取り調査を行った。^{*} 近代成長理論の開拓者であるロイ・ハロッドから始まりミルトン・フリードマンやサムエルソンに至るまで、同じような体験をしている。専門雑誌のどれかが彼らの論文掲載を拒否したのだが、そのうちの多くのものが後に経済理論史の「古典」とみなされている作品なのだ。この出来事が例外的なものでないことを知つて、水に流すことができた。

* 私も聴き取り対象になったが、その時はこの件について何も語らなかつた。今 *Journal of Economic Literature* 誌と *Közgazdasági Szemle* 誌にソフトな予算制約思考の普及に関する総括論文を発表する段になって、このエピソードを公表する時期が来たと判断した。この出来事が起きたコンテキストを完全に記すという意味で、自伝の枠組みがもつとも適切だと判断した。

この出来事には興味深い続編がある。数年経って、インイー・チェン（当時はハーヴァード大学院生で、現在はカリフォルニア大学教授）が同じ *American Economic Review* 誌に論文を送付した。そのテーマは、「社会主義体制における不足と予算制約ソフト化は如何に関連するか」⁽¹⁶⁾ だった。この関連を数学的モデルで、上述したデヴァトリポン・マスキン・モデルの修正ヴァリアントで検討したものである。この雑誌の他の論文と同様に、精確で、数学的形式で定式化された理論定理が、厳密な証明によつて定立されていた。

この論文は、私の『不足』や *Kylos* の論文のほかに、デヴァトリポン・マスキンの研究を参照文献として上げている。インイー・チェンの論文は PhD 論文の主要な部分を構成していたもので、エリック・マスキンと私が論文アドヴァイザードだった。二人とも草稿を何度も読み直し、アドヴァイザーに期待されている通り、何点かのアドヴァイスを与えた。論文にはア

ドヴァイザーへの謝辞も書かれている。

インイー・チェンの論文は適切な問題を提起し、このテーマに関する文献に独創的な思考を付加したものと評価できる。その表現は模範のように精確かつ明瞭だった。私は年老いた者が若者に感じる嫉妬とは無縁だったと言える。インイーとは学生時代から友人関係にあり、この論文掲載でさらに友情が深まった。私は常に彼の道が開けるように努めたし、私もまた彼から種々の助けを受け、優しさに溢れた配慮を受けた。^{*} もつとも勝れた優しい弟子の一人の研究が、第一級の研究誌に掲載されたことを嬉しく思った。

* 中国への二度目の旅行の際に、インイーは休暇を犠牲にして、中国におけるコミュニケーションを助けるために、わざわざアメリカから中国に戻った。通訳に不自由していたから、彼が多くの場所を通訳を買って出た。彼は三つの言葉を話せると冗談を言っていた。中国語、英語、そしてコルナイ語である。

にもかかわらず、何故に最初の論文を拒否し、第二の論文を掲載したのかを考える必要がある。この問題は私の論文を拒否するという不快な出来事に関連しているが、この個人的な出来事を一般的な問題として考えてみたい。掲載決定権限を持つ人々は、いかなる基準で決めるのだろうか。出版と研究者とし

てのキャリアはどう関連しているのだろうか。さらに、より深刻な問題だが、今日の出版と昇進の慣行が研究者にどのような行動様式を促しているのだろうか。

そして、出来事の教訓

これらの問題に答える前に、一言断っておきたい。これらはそれ自体が大きな問題で、本書のような自伝が完全な回答を与えるような課題ではない。以下での因果関係は部分的なもので、私の個人的な歴史に関係しているものではない。^{*}出版において適用される選択基準、その有用あるいは有害な影響の多く（それらはきわめて重要かつ本質的なものかもしれないが）をここで扱うことができない。たとえば、雑誌の編集者や閲読者が掲載される論文に求めている専門的要件が、どのような好ましい影響を与えるのかを扱っていない（そのことは重要だと考えるが）。

^{*} 私の推論はあくまで社会科学の問題に限定されている。私は自然科学研究者の研究手法や発見への創造的過程を知らない。

第一級の専門雑誌がどの論文を掲載するかという決定過程には、偶然の要素が含まれている。自明なことだが、二つの典型

的な間違いが起る。掲載に値する論文が拒否される場合と、値しない論文が掲載される場合である。人間が決定することだから、誰も無謬でありえない。問題は、この過程にシステムティックな間違いがあるかどうか、受理・拒否の決定に何らかの方法的な歪曲が存在するかどうかである。多くの人は種々の歪曲傾向があると信じているが、ここではひとつの現象グループだけを詳細に扱っておきたい。

社会科学の本当に重要で新しい思考が、完全に正確で誤りない構成で陽の目を見ることは稀である。ほとんどの場合、その長期にわたる認知・理解のプロセスが始まるまで、ぼんやりとした推論か、あるいは半分ほど明瞭になった推論の形で現れるものだ。間違いであっても、思考を覚醒するような命題は、検証の範囲を広げさせることになり、却下された思考実験が真理への接近をもたらすことがある。

^{*} もちろん、例外もある。アローの「不可能性定理」はおそらくこのような例外である。最初から精確な数学的定式化によって、天才的で独創的な発見がなされた。

数学が経済学の手段になってからは、研究において重要な役割を果たすことになった。にもかかわらず、もつとも大きなセンセーションを巻き起こした新しい発見は、数学的モデルによ

つてではなく、パイオニア的研究者が散文で概念化している。

最初にアダム・スミスの見えざる手の「散文」があつて、それを後にワルラスが数学的に記述した（現在から見ると、不正確な数学的方程式体系ではあつたが）。さらに後になつて、アローとドブリューによる完全精緻化が達成された。また、利子と流動性選好に関する（多少とも不正確な）ケインズの思考が初めにあつて、それがヒックスのLMモデルを生んだ。また、公正に関するロールズの理論が初めにあつて、アローはこの定理のひとつを形式化した。シュンペーターは数学的分析なして企業家の役割を記述したが、数十年後になつてフィリップ・アギオン他の経済学者が、コンパクトな形で、厳密な数学的モデルでシュンペーターの理念を構成した。

敢えて強い単純化を行つて、経済学研究の三つの（新しい）認識が登場し、それがさらに生き延びていく）段階を分離してみよう。第一段階は、問題の認識と概念化である。これと同時に、「謎に包まれた」問題に対する最初の推論が形成される。第二段階は、思考過程の「明晰化」、概念構成の正確化、命題の正確な概念化、命題の証明を可能にする処理、仮説の明瞭化と定式化、定理の論理証明である。最後の第三段階は、結論を引き出すことである。これが時には別の問題提起を導くこともあるし、そこから実践的な経済政策の教訓が得られることもある。

最初の段階では直感、問題認識力、空想力、観察と命題の新

たな組合せなどが、大きな役割を果たす。数学モデルを使った分析は、主として第二段階に現れる。これはとくに重要な手段であり、特定のテーマには不可欠のものである。第三段階の理論的結論では、最初の段階と良く似た認識過程が進行する。実践的な結論を引き出す場合、現実の深い知識や、理論定理と実践の応用の比較に必要な批判的な感性が必要になる。

私の経験によれば、数理経済学の巨匠たちは、自らの役割分担を明瞭に意識している。アローやクープマンズが未だ不正確だが新しい認識をもたらす思考やその創造者に対して、不躰にコメントする態度をこれまで見たことがない。^{*}イギリスの経済学者ウイルドン・カールの表現は、とても機知に富んでいる。

It is better to be vaguely right than precisely wrong.

^{*} これと正反対の出来事を良く覚えていた。中堅の数理経済学者がハーシュマンの *Faith, Voice and Loyalty* について口汚くけなした。この小冊子は新しい仕方ですっきりとした思考を展開するものだが、当該の経済学者は、「冗長で不正確な概念でいっぱいだ」と見下した。彼によれば、このような単純なテーマについて、長々書くのは有害以外の何物でもないということだった。

さて、ここで専門雑誌の選択基準に戻ろう。新しい価値ある思考だが、未だ完成半ばのものはどこに発表できるだろうか。

最終的に思考が熟し、精確な作品になるまで、第一級の雑誌には発表できないのだろうか。著作が間違っていないことが完全に証明されるまで、このような権威ある機関は論文を掲載してはならないのだろうか*。

* すでに定評のある理論やモデルの新たなヴァリエーションが正しいか否かを判断するのに（つまり、既存の理論があり、そのモデルがすでに存在していれば）、編集者や閲読者にそれほど能力は要らない。本当に眼力が必要なのは、半製品的な理論や推論の中から、理論としての完成が有望なものを、無価値で攪乱的なものから識別する能力である。前者を積極的に救い、後者を棄却するだけでよい。

先に、いわば「二番手」の専門雑誌に触れた。確かに、将来性のある半製品の作品を出すことに積極的な雑誌があるのは幸運なことだ。ただ、研究者の採用や昇進の場合、これらの雑誌論文の評価はかなり下る。この点で、第一級の専門雑誌と第一級の大学の選考基準という二つの基準が、絡み合っている。あるスウェーデンの研究者が半分皮肉を込めて半分真顔で話したことに驚いたのを覚えている。「スウェーデンでは教授指名に *Economica* の論文二本あれば十分だ」と。これがまったく正しいとは言えないまでも、かなり真実に近いだろう。PhD

を持つ若い研究者が西側世界でアカデミック・キャリアを速く積みたければ、革命的でまだ生の状態の思考を扱ってはならない。大発見に頭を悩ましてはいけないのだ。確実な道は、すでに周知の、その分野で受容された理論や、良く知られた数学モデルを扱うことである。これを少しだけ修正して、すべての定義を正確にし、すべての定理の証明を誤りなくやればよい。そうすれば、第一級の雑誌に掲載されるだろう*。このような基準にもとづいて編集される「トップ」の雑誌になるべく多くの論文を掲載することが、キャリアを上げるスプリング・ボードなのだ。

* 大きな新しいテーマを扱うのは、冗長にならざるをえないというだけで、もう扱う価値がない。というのも、第一級の雑誌は短いコンパクトな論文を好むからである。

上述したような選択のプロセスは、有害なものだと考える。有能な人々が挑戦する気持ちを萎えさせるものだ。失敗のリスクが大きすぎるのだ。しかし、多くの失敗した挑戦の中から、本当のものを「発見」できる。研究者に勇気を与えるのではなく、研究者を壁に寄りかからせてしまう。スイスの経済学者ブルーノ・フェイは二〇〇三年の論文で、衝撃的なパワーで問題の深刻さを読者に喚起した。そのタイトル自体 (*Publishing*

as Prostitution? Choosing between One's Own Ideas and Academic Success) が、その内容を語っている。

若い研究者に翼を試す機会すら与えない。即座に既述したような枠組みの中に押し込めるのである。そして、これは自己拡張的なプロセスなのだ。多くの専門雑誌が、「ミニ」American Economic Review 誌のようになってしまい、その編集方針を模倣している。二流三流の大学までがトップファイヴやトップテンの真似事をして、助手候補には論文ミシン器で頭脳の細胞をすべて絞り切つて、出版の観点から見ても「リスクのある」思考を一片の細胞に至るまで排除する。このような形で選ばれた若者から代表的専門雑誌の閲読者が選ばれ、自分のスタイルと類似の著作を選好するのである。所与の趣向が保持されていく。論文スタイル、内容、形式、議論の構造、採用された手法が、ほとんど統一規格化されてしまうのである。

他の国の経済学部や専門雑誌も、この一面的なアメリカの事例に追随する傾向にある。アメリカではこの経済学の悪い事例を他の社会科学、とりわけ社会学や政治学に移植し始めていることの方が、より深刻である。研究対象の現象をモデル化することのように要求する、さもなくば価値がないとみなすような学問分野が、すでに存在している。経済学はもちろんだが、他の多くの社会科学でも数学的手法の使用が著作に権威を与えている。日常用語で説明した方が簡単な思考ですら、複雑な数学的形式

を介在して表現する方が目的に適っているのである。そのような方法が理解を難しくする場合ですら、学問的な装いを与えるのである。多くの場合、図式や方程式は衣服の装飾のように議論に括り付けられるが、本当の説明機能を果たすことはなく、印象的に見えると信じているから挿入されるのである。

ここに展開した批判は理論の形式化や数学的技術の利用に対する批判ではない。私自身、この手法の信奉者であり拙い利用者であつたし、これからもそうである。私の批判は一面的で歪曲された利用に対する批判であり、いかなる手法であろうとも、それを唯一の手法として強引に押し付けるやり方を批判するものである。そして、一番重要だと思ふことは、挑戦、思考実験、革新、独創性がより大きな信頼性を獲得することであり、より大きな評価を受けることである。

人生を平穩なアメリカの学界で過ごせなかったのは残念だという思いが、時として湧いてくることがある。多分、そこでも助手から始まって、教授まで辿り着けたらとうとう確信がある。そうすれば、多くの回り道や袋小路に入ることなく、一直線に進めたのと思う。ところが、こうやって生きてきたことが良かったと思う時もある。研究者としての道に入つて以降、外からの教義で自分を縛るようなことはけつしてしなかった。機械的に「模範を踏襲する」ことより、アウトサイダーでいることを選んだ。このために、何度も足を滑らしたり、苦い経験

をしたりしたが、自らの思考の自立性を維持することだけではきたと思う。

近年、代表的専門雑誌の選考基準やそれが経済学の発展に及ぼす影響について、幅広い議論が国際的に展開されている。^{*}ここで展開した私見が、この議論に資するものと期待している。このように多くの紙幅をとって議論したのは、同様な経験をしている多くの著者の不満を知り、私の論文に起きた出来事が個人的なものではなく、一般化できる現象として私見を述べる機会だと考えたからである。

^{*} 国際的な議論を主導している論客の一人であるグレン・エリソンは、近年まで *Economica* の編集者を務めていた。彼は現在の出版慣行について、厳しい批判を提起している。

数章前に、一九六九年にブダペストの経済研究所で改革提案を提起したことを記した。そこで強調したのは、招聘や昇進の決定プロセスで、著作出版の基準を重視すべきだという主張である。東欧の研究者も、定評ある国際的雑誌で自らを測るべきだと主張した。現在と同じような歪曲が西側の経済学雑誌にあることを、三五年前には分かっていた。だが、このような歪曲があるとしても、当時の主張を撤回するつもりはない。今もなお、東欧の研究者は国際的雑誌に論文を掲載するように

努力すべきだと思う。第11章で述べた喩えをさらに敷衍してみたい。ハンガリー（あるいは一般化して言えば、東欧）の製品の品質改善のためには、水準の高い西側市場で自らを測って見ることが必要だ。市場が完全でなく、理想的な市場に比較して種々の歪曲要因（独占、巨大企業の支配、知名度の低い製品に対する消費者の偏見等々）がある場合でも、それをやるべきだ。国内市場で得られた成果で満足してもいけない。それはいずれ、怠惰や品質の劣化を帰結するからである。

したがって、国際的な慣行に対する批判はそれとして、ハンガリーにおける研究者の昇進、教授指名、あるいはアカデミー会員選出では、出版にかかわる私の提案を今もなお、堅持し強調したい。

第15章 友情溢れる批評と距離を置く批判（一九六八年―一九八九年）

——「ハンガリーの改革プロセス…展望・希望・現実」をめぐって

ユーゴスラヴィアはすでに一九四九年にソ連圏から離脱する

ことを決め、スターリン型経済管理を止め、独自の「自主管理」モデルを生み出した。ソ連圏の中ではハンガリーが共産主義政治体制と市場経済との結合を実現しようとした最初の国である。

それにしたがって、一九六八年に「指令経済」を放棄した。国营企業の生産量を決めたり、資材やエネルギー、雇用人員や賃金総額の配分を決めたりする中央指令を廃止したのだ。「古典的な」スターリン・モデルに代わる新しいシステムは、「新経済メカニズム」と呼ばれた。

鼻肩目なしに、ハンガリーの改革プロセスは国境を越えた重要性をもっていたと言える。指令経済で歪曲され硬直化していた諸国ではどこでも、新たな期待を込めてこの改革を見守った。この時期、ハンガリーは多くの人々にとってひとつのモデル的事例だった。ハンガリーの改革は中国の改革やソ連や東欧の経済学者の思考に影響を与え、共産主義経済を専門とする西側の

経済学者の関心を引き起こした。

半ば実現し、半ば消滅した希望

一九六八年の大転換以後の二〇年は、平坦なものではなかった。政治勢力の力関係によって、改革過程は停滞と前進を繰り返し、時には改革反対派の影響で後戻りしたこともあった。全体として、前進する力が強く、一九六八年に比べ一九八〇年代末には、ハンガリー経済ははるかに市場経済の特徴が強い様相を見せていた。とはいえ、体制転換が始まるまで、いわばハイブリッド状態を脱することができず、官僚主義と市場との矛盾した結合状態を超えるものではなかった。

ハンガリーの国营セクターに形成されたものには、何か人工的で擬制的なものが「作用」していた。確かに細かな計画指令がなくなり、企業長にその権限が移された。ただ、党委員会や

省庁が企業長を選任し、彼らの手に任命と解任の権限が残されたままで、如何なる自立性を語ることができようか。真の市場では売り手と買い手の同意が価格を決める。ところが、ここでは買い手と売り手が決めるのではなく、依然として中央価格庁が価格を決めていた。最善の場合には需要と供給の関係を「スイミュレート」し、最悪の場合には市場価格の「スイミュレーション」すら行うことなく、当該製品や当該企業が赤字になる価格を前もって設定し、他方で別の企業には利潤が出るように価格を設定した。利潤の役割は大きくなった。以前と比べて、企業管理ははるかに収益性に導かれるものになった。ただ、この収益性関心も本物でなかった。上に述べたように価格そのものが歪曲されていることに加え、利潤が官僚的に再分配されたからである。ひとつの企業の利潤が「多すぎる」と、これを控除して損失企業に移転したのである。これはいわば勝者はいるが、敗者がいない競争のようなものだった。別言すれば、予算制約はソフトなままだった。

市場メカニズムの支配を期待した人々は、半分の満足しか得られなかった。また、部分的な分権化を行っても、最重要の決定は中央権力に残したいと考えていた人々は、達成感と失望感が半ばしていた。この後者の人々の構想は、以前の直接的な規制や計画指令を、間接的なものに変えることにあった。貨幣・財政手段、利率率、為替平価、租税率、国家補助に中央経済管

理の意図を込めて、生産者と消費者に伝えることを意図していた。^{*}

これは無駄な期待だった。^{*}一九八二年の論文に、私はこう記している。「私はあたかも近代工場の司令室にでも踏み込んだかのような錯覚を起こした。そこにはさまざまな「制御装置」が、つまり数百のボタンやスイッチや点滅灯があり、司令官たちはボタンを押ししたり、レバーを引いたり、忙しくしている。次に工場に入る。そこでは原材料が手押し車で運ばれ、職長が何やら叫んでいる。確かに生産は行われている。が、司令室でいつどのボタンを押ししたかとは関係なく、である。司令室と現場を結ぶネットワークがないのだから、驚くことはない」⁽ⁱⁱ⁾。結合するラインが欠如しているのだ。企業がこれまで通り価格や費用に不感応であれば、利子や為替平価は何を計算するというのだろう。利潤が官僚的に再分配されるため、収益性が企業の生死にかかわらないことが、この感応性を鈍らせた。経営者のキャリアもまた、市場での成功より、上部機関との関係に依存していた。

* Antal Laszlo (1982) は、この現象を「制御の幻想」と名付けている。言いで得て妙である。

緩めた手綱で経済管理者を操ろうとしたのである。もちろん、

それには利点もあった。企業のイニシアティブを発揮する余地が生まれたし、上から下ろされてくる市場のインパクトの影響も感じ取られた。多くの商品やサービスの不足は消滅したが、基本的な重要性をもつ領域、たとえば輸入品の流通、賃貸住宅、電話サービス、保健サービスの分野は、依然として、不足経済のままだった。

マイクロレベルでの分権化の進行は、マクロ経済的な規律をも緩めることになった。この地域は体制転換の入口に到達しており、分権化改革を行っている諸国、とくにハンガリーやポーランドではインフレが加速し、賃金抑制のメカニズムが緩み、対外債務累積のスパイラルが始まった。もはやスターリン主義的な古い行政的管理には好ましくないマクロ経済傾向を押しとどめる力はなかったが、かといって真の利潤関心、真の競争、真の市場効果が経済プレーヤーの行動を規制できる力をもっている訳でもなかった。これらの主要な経済指標を見る限り、このような中途半端な改革を行っている諸国の経済実績は、共產主義的独裁を続けているチェコスロヴァキアやルーマニアのそれに比べて、見劣りがするものだった。というのも、後者の諸国では住民の生活水準を犠牲にして、經常収支の安定化や固定的な賃金・価格を堅持していたからである。

一九六八年改革は国家セクターに新経済メカニズムを創出することを主眼としていた。非国家的所有になる生産・サービス

が広がったことは、改革プロセスの副産物であった。いわば異質な要素から成る集合のようなものだった。それまで多少とも自立していた小協同組合は、党和国家が管理者を指名する協同組合とは別物だったが、その地歩を広げた。私的所有にもとづく小工業者や小売業者、あるいは他のサービス事業者の認可条件が緩和された。国营企業内に小さな孤島を作るような、企業内の労働共同体が容認された。それから、さまざまな形態の「第二経済」が広がり、それに従事する人々は数万人、あるいは数十万人とも言われた。彼らは正規の職場を確保しつつ、いわば「第一経済」で（要領良く短時間あるいは正規の時間）働きたがら、「第二経済」の活動にも従事した。ハンガリーの改革過程のもっとも重要な特質のひとつは、それを意図していた訳ではないだろうが、古典的社会主義からの離脱を促進するもっとも重要な現象を意図的に見逃した点にある。それは国家所有が依然として大きなウェイトを占めていたとはいえ、国家所有の独占状態が解消されたことである。

ナイーヴな改革者から批判的分析家へ

これまでの叙述では、ハンガリーの改革過程に特徴的な複雑な諸連関について、詳細に記すことを省いた。ここまで、私が考えた（今も考える）「新経済メカニズム」のもっとも特徴的

な性格を一瞥しただけである。ここまでの短い叙述は改革過程の動態を追跡することなく、一九八〇年代に特徴的だったハンガリーの経済メカニズムを「静止画像」のように捉えただけである。本書で改革を扱う場合、社会主義体制の革新過程に対して私がどのような態度をとったかを説明しなければならぬだろう。それについてどのように考え、どのように行動したかを。

本章のタイトルは一九六八年を開始年としている。それはこの年に指令経済の解消が決定され、「新経済メカニズム」が公式に開始されたからである。とはいえ、これよりはるか前に改革が始まっている。以前の諸章でこのテーマについて触れたが、あえて重複を覚悟して、この先行事情と自らの役割について簡単に触れておきたい。

一九五四年から私は社会主義経済の革新的思考に、確信をもって、本格的に取り組み始めた。テーマ自体は古いメカニズムの実証的な分析を行ったものだが、「過度集権化」に関する私の著書はこの確信を貫いた分析だった。革命初日にナジ・イムレの経済プログラムを構想した時も、改革社会主義の世界観に導かれていた。

しかし、この確信は革命の敗北とその過程で展開された残酷な報復によって、粉々に砕けてしまった。これで私の人生の中で、「ナイーヴな改革者」の時代が終わった。以前の信条が再び私を支配することはなかった。これを契機に、共産党の指導

下では人間的自由と両立する経済は機能し得ないと考えるようになった。政治と倫理という思想は、「市場社会主義」の東欧版に失望してしまったのだ。この東欧版こそ、一方で共産党の権力保持を望み（少なくとも権力維持に安心感を持ち）、他方で効率性改善の関心から、資本主義国でうまく機能している市場調整を結合しようとするものだった。

* *Journal of Economic Literature* に掲載された一九八六年の論文 (1986c) において、この表現を最初に使った。本章のサブタイトルはその論文の題名からとられた。その論文の中で、ハンガリーの改革思想の開拓者ピーテル・ジョルジュ、ポーランドの改革派の代表的知識人ヴォジミェン・ブルス、それからブラハの春の経済学者オタ・シクを、「ナイーヴな改革者」と名付けた。この中に、ゴルバチョフも入れた。多くの経済学者がこの「ナイーヴな改革者」の段階を経ている。その時期は各自まちまちだが（最後までナイーヴな考えを捨てなかった人もいる）。

一九五七年に党中央から設立される改革委員会への招聘を受けた時に、返答するのに悩むことなど何もなかった。ソ連の戦車に守られて戻って来て、友人たちを監獄に押し込め、報復に飢えていた人々と、委員会ごっこなどしたくなかった。

この深い嫌悪感はいつまでも私の中に残存し、一九六〇年代に党中央によって組織された委員会からも自らを遠ざけた。某

月某日の議論で、経済問題担当の党指導者X同志が限界原理にもとづく為替平価に賛同するか、あるいは引き続き平均費用原理に拘泥するかを、耳情報で私が確かめることなど考えるところとする。このような妥協的な委員会提案（最後には党の議論にかけられ、権威づけられる）を準備する作業に参加しなかった。

カール時代には、多くの代表的知識人がいろいろなフォーラムを通して、アーツェル・ジョルジュ（党の文化担当責任者）と個人的な関係を取り結んだ。ここでアーツェルの仕事を評価したいとも思わないし、何時どんな有益あるいは有害な役割を果たしたかを秤にかけたいとも思わない。いつも（たまに）彼と食事したり、何かの特権を得るために彼に諂（こゝろ）ったり、あるいは利他的に獄中の友を助けるために口利きを依頼したりした人々を断罪するつもりはない。ただ、アーツェルの助けを求めなかった数少ない「代表的知識人」*の中に私も含まれることが、象徴的な重要性をもつことを記しておきたい。

* 一九八〇年秋、アーツェルは計画庁長官のファルヴェーギを通して、私にメッセージを寄越した。社会主義倫理と効率性に関する私の論文に関連して、不同意の意思を送ったものである（すぐに後に触れるように、この論文を批判したのは彼一人ではなかった）。彼のメッセージを最後まで聞き、「どうも意見が一致しない

ようですね」とだけ答えた。後に、批判メモを書面で、ファルヴェーギから受け取った。

この面で私の行動が完全に首尾一貫していなかったことを認めなければならぬ。広い意味で、アーツェルの仲間に入ったからだ。すでに触れたように、ニエルシュ・レジュエに電話の取り付けの口利きを依頼した。そのことを恥じている訳ではないが、ニエルシュが党の最高指導部から外されて、経済研究所長に降格されたが、中央委員の地位に留まっていたからだ。党中央に設置された「作業委員会」などには参加しなかったが、職場の党指導部員や党書記だった同僚と友人関係を結ぶのに何の躊躇もなかった。黨員か否かで人々を区別していた訳ではないからだ。とはいえ、何となく首尾一貫しないものを感じた。だが、何よりも党指導部に組織的に関係している改革作業から身を遠ざけた。党中央の周辺知識人から構成される「一団」の環に位置づけられると感じたからである*。

* 経済学のアカデミー会員を元気づけるために、科学アカデミー総裁のセントアーゴタイ・ヤノシュが、皮肉を込めてこう言った。「どうして君はそれほど引つ込み思案なのか。君の綺麗なトーガ（正服）が泥で汚れると恐れているのかね」と。

既述した要因以上に、一九五六年以後の私の行動様式や課題領域の性格に深く関連しているのは、政治的要因である。私は二つの可能な役割を厳しく（時には、あまりに厳しく）峻別した。ひとつは政治的決定を行う、あるいはそれに影響を与える「活動家」*の役割であり、もうひとつは学問的研究者のそれである。この二種類の役割機能には異なる能力が必要であり、このどちらかの機能に身を捧げるとすれば、異なる行動様式が形成される。「活動家」は要領が良く、戦術家でマヌーヴアーに長けていて、成功がそれを要求すれば柔軟かつ妥協的でなければならぬ。政治分野では自らの言動を堅固に信じる者が、「オーラ」を強めることができる。これに対して、学問研究者は客観的でなければならない。信条ではなく、意見と反論を理性的に推し量り、自ら受容した定理に対しても、常に一定の疑念を保持していなければならない。救世主的な使命感に満ちたヴィジョンで社会を造りたいと考える人は、学者に期待されるような性格を保持するのは難しい。

* この表現を選択するのを躊躇^{ため}ったが、最終的にアメリカの政治的用語でもある *activist* を用いることに決めた。この役割領域は政治家のそれとかなりの部分重なっているが、主たる職業として政治に携わっている人々という意味で政治家を使いたい（たとえば、党あるいは政治運動の指導者、議員や政府の高級官僚）。「活

動家」と名付ける人々は、何らかの市民的な職業をもち、そこから生活の糧を得ながら、そのエネルギーのかなりの（もつとも活動的な）部分を政治的事件への影響力の行使に振り向ける。

何かを中途半端にやるのは好きではない。頭と心の半分を政治的活動家に同化させ、もう半分を学問研究の役割機能に同化させることはできない。それを出来る人がいるかもしれないが、私には出来ない。それをやれば、両方とも失敗すると思うのである。

このようなディレンマを繰り返し記述することを、許していただきたい。しかし、本書の以後の部分で、もうこの問題に立ち戻らないと約束することはできない。このディレンマは私の生涯を通して、引きずっているものだからだ。相互に異なる歴史状況、別々の具体的選択問題において、政治的役割の分担が学問的仕事への集中かは、常に難しいディレンマを引き起こした。だから、自伝でもひとつの主動機として、不可避的に繰り返し現れるのである。

人生の「ナイーヴな改革者」の時期を越えて、私は最終的に社会主義経済改革の批判的な分析家になった。この問題に背を向けたということではない。この問題について一行も書かない時期でも、常にこの問題を考えていた。書物や論文を読む度に、「社会主義に関連して何が引き出せるか」を繰り返し考えた。

この特別な関心は学習の時だけ湧き起こったものではない。実際の経済管理にどのような変化が生じているかについて、いつも目を凝らして注意を払っていた。

数年経て、改革問題が研究の主要課題になってきた。すでに『反均衡』でも多くの諸点でこのテーマに触れていた。『不足』執筆時には、社会主義経済にもっとも特徴的な機能不全が社会主義の基本的な特質から説明できること、そして体制内の部分的改革はそれを緩和することができても消滅させることはできないという思考を提起しようとした。そして、とくに半ば改革され利潤志向に見えるハンガリー経済の研究が、「ソフトな予算制約」現象に注意を喚起させることになった。

後になって、改革の状況や分析を主テーマにした論文を多く書いた。したがって、これらの論文はテーマ対象に関する限り、いわゆる「改革派経済学者」と名付けられた人々の著作と類似するものだった。同じハンガリーの雑誌にも掲載された。ハンガリーや国際的なフォーラムでも、共に発言する機会もあった。私の著作でも講演でも、改革思想への共鳴を明瞭に表現している。「何でも反対」であったことはなく、逆に少しでも改革が前進することを喜んだ。改革状態を批判したことに特別な意味はなく、いわゆる「改革派経済学者」は私より厳しい言葉を使って批判していた。とはいえ、彼らと私との間には、本質的な違いがあった。改革を信じている経済学者の常套語は、「未

だ……」だった。価格制度は未だ十分に機能していない。国家官僚は企業の経営から未だ十分に距離をとっていない。資本市場は未だ機能していない。「未だ」は一時的なもので、最後には完全になるという含意があった。

これに対して、私はこの楽観的な脚本を信じていなかった。「ユーロ懐疑者」という用語をもじって言えば、当時の私の予感「改革懐疑者」と名付けられよう。友人のラキ・ミハイは彼自身や私、それから同じように考えている人々を、うまく表現で「改革洗面者」と名付けた。改革から作為的で虚偽なもの、「人工的なもの」、作り物を感じ、そこから距離を置いたのである。これは本当の市場経済ではない、これでは本物に変われない、と。

一九七〇年代と一九八〇年代を回顧している。政治的・倫理的カタルシスが社会主義革新に抱いていた確信を打ち砕いてから、すでに長い時間が経過していた。この間、西側の文献を学ぶ、西側先進国を知り、公的所有、私的所有、官僚制と市場との間の連関を批判的に繰り返し熟考することで、経済学者として社会研究者として、こう確信することになった。「公的所有が支配的な経済は、経済過程の調整で市場が主たる役割を果たすことと両立しない」。市場経済のあれこれの特質が「未だ」貫徹しないことが問題なのではない。資本主義経済だけが真の（虚偽の人工的でない）市場経済であり得るといえるのが、真実

なのだ。

* マルクス経済理論は市場に対する不信感を内包している。したがって、市場改革の信奉者を「反マルクス主義」的視角を担う者と批判したマルクス・レーニン主義者は正しい。私は著作の中でこの表現を意識的に使わなかった。自らをマルクス主義者と自認する改革者に無用な不快感を与えたくなかったからだ。

この確信が熱心な改革者の諸提案との関係をアンビヴァレントなものにした。それらの提案が真の市場経済実現にどれほど接近できるのだろうか。間違った幻想を引き起こさないだろうか。社会主義に半信半疑になっていく多くのナイーブで善意の人々に誤った期待を与えないだろうか。マルクス・レーニン主義原理が喧伝する「反資本主義」イデオロギーを体现する政治構造の存続、支配的な国家所有が、市場と共存し得るといふ幻想的期待を与えないだろうか。もう少し精力的な改革を行えば、社会主義でもあり、社会主義でもない市場経済の「第三の道」（資本主義になることなく、その醜い特質を抱え込むことなく）に入り込むことができるかと考えてしまう。まさにここに、市場社会主義が実現可能だと信じる改革派経済学者との理論的な違いがある。

種々の論争に入り込んだ。個人的な対話があったし、また私

の視角や行動を対象にした論争に間接的に巻き込まれることもあった。いろいろな方面から矢が飛んできた。以下にいくつかの特徴的なエピソードを記す。こうすることによって、読者は、当時の私の立場を一番良く分かると思う。

「何を為すべきかを言う代わりに」

改革の伝説的な人物として、リシュカ・ティボールがいる。

何度も激しい議論を闘わせたが、今でもそのカリスマ的で情熱に満ちた話しぶりを思い出すし、安直な戦術を嫌い、原理に忠実だった彼の精神力や言葉遣いに敬意を表する。リシュカは独特な社会主義的資本主義あるいは資本主義的社会主義の予言者だった。彼の構想によれば、すべての人民は集積的資産の一部を獲得し、これを初期資本として市場原理で機能している経済で事業を行う*。リシュカはこの構想のいくつかの点を詳細かつ丁寧^{*}に描いているが、その他の重要な諸点についてはほとんど曖昧な叙述に留めている。彼の思想には、機会均等の倫理的公準に対する明確な信念と資本主義の企業家精神への敬意が混ざっており、いかなるユートピアも実現可能だが、それを強く望むことが必要なのだという確信に貫かれている。^{**}

* リシュカを信奉するグループの一員が、体制転換以後の国家資

産の無償分配である「クローポン民営化」導入のために闘ったのは理解できよう。

* * * たびたび引用されるリシユカの著作 *Okmoszlat* は、一九〇六年に執筆された。しかし、以後二二年間はサミズダートとして人々の手を渡ってきた。カードール体制最後の年一九〇八年に、印刷物となって出版された。ただ、リシユカは改革提案をコンパクトな形にまとめることはしなかった。リシユカの思想に関する最良の案内として、F・リシユカ・ティポールが一九〇八年に著した論文を読者に勧めたい。

リシユカはいわば「教祖」のような存在で、その周りに熱狂的な信奉者を集めた。彼はセミナーを主宰していて、そこに厳密な議論を展開している経済学者を招聘していた。リシユカはボクシングのような戦鬪的議論で彼らを打ち負かし、ノックアウトするのが常であった。私も一度、この精神的なボクシングに呼び出された。いつもの調子で講演し、改革半ばのハンガリーの経済状態を客観的に秤量し、リシユカの思想の優位点と欠陥を指摘し、さらに社会的変革の現実的可能性と限界について述べた⁽¹²⁾。リシユカは頭に血が上った。彼の言葉をそのまま引用したいのだが、そのメモがない。だから、ここでは私のメモではなく、彼が回顧して当時のことを再構成しているものを引用しよう。「このコルナイの講演は、肥溜めの糞がどの水準にあるか、どんな性質の糞なのかを見るような知見で、どうやった

らそこから這い上がることができるかを考えるものではない。肥溜めを分析したい者が、首まで溜まっているのか、もう流れ出しているのか、眼に流れ込んでいるのか、それを食らうのかを推し量ろうとする態度は、糞の水準などどうでも良いから早く抜け出なければと考える態度とは、本質的な違いがある⁽¹³⁾」。

当時の論議で何か気の利いた大意即妙で受け答えができていれば良かったのだが、この種の決闘では私はいつも分が悪かった。ただ、熱狂する聴衆の頭を冷ますように、落ち着き乾いた議論で、学問の課題は現実の観察と理解にあると反論をまとめることができた。混乱させるような夢想的構想をハンガリーの経済学者に注入するのではなく、ハンガリーの現実と真の市場経済の現実を良く理解し、状況の好転への現実的選択肢を知ることが必要なのだ。

金融研究所の Antal・ラースローは、ハンガリーの改革派経済学者の傑出した人物だった。リシユカとは違って予言者ではなく、鋭い批判的観察者であり、ハンガリー経済を熟知する一人で、現実的な思考と優れた判断力をもつ分析家である。私と違い、完全な「活動家」タイプで、決定過程へ参加することが彼の情熱的で現実的な生活様式だった（今もそうだと思う）。彼にとって著作を出版するより、実際の決定権を握っている人々に背後から良いアドヴァイスを与えることが、より重要なことだった。まして、外国で自らの思考を知らしめるようなこ

とに、何の重要性も見出していなかった。一九八三年に、*Field's Irredom* 誌に彼のインタヴュー記事が載った。聞き手のセーナシ・シャーンドルが次のように質問している。「貴方は改革派経済学者と呼ばれるのを好みますか。これは〈平均的〉専門家と比べて、どこに特徴があるのでしょうか」。アンタルの回答は以下の通りである。

「違いを挙げなければならないとしたら、こう言えると思います。経済学者の中には観察しそれを記述するだけの役割を担う人々がいます。倫理的なリスクを負わない立場から分析するが、提案をしないのです。こうした姿勢を理解することはできませんが、私を苛立たせるような態度です。私は積極的に意思決定に影響力を行使できるように努めています」⁽¹⁷⁾。

この批判は具体的な人物を念頭に置いたものだろう。この当時すでに、このアンタルの注釈を私への批評として受け取ったアンタルだけでなく、他の改革派経済学者が改革に関連した私への態度を同じように批判していると考えていた。

ここで、以前の章で「非合法活動者」について説明した考えを再度、記しておきたい。私自身、自らの行動様式が他人を「苛立たせる」としても、それが倫理的に許容される唯一の態度だとは思っていない。倫理的に判断して明確に軽蔑すべき行動もあるが、倫理的に受容できる態度はひとつに限らず、多種存在すると思う。亡命して、活動的な政治活動を行うのも良し。

国内で非合法的闘いのリスクを負って活動するのも良し。「改革者」として、自らの言葉で社会主義経済の計画者を善い方向に誘導しようとするのも良し。学問的な検証で体制の真の特質を解明しようとする客観的な分析者がいても良し。最終的に、これらの行動様式や生活態度が意味ある分業を形成できるなら、それも良い。

「改革派経済学者」が権力者と結んだ妥協に声を上げたい時もあったが、この感情を押しとどめ、それを公にすることはなかった。譲歩がもたらす損害よりも、彼らの行動が大きな益を生むと見たからである。この姿勢に対する返礼が、「改革派経済学者」からあつたようには思えないが（言動や記された著作を見る限り）。彼らの精神の奥底を知る由もない。

行動様式に関する議論で、もうひとつだけ付け加えておきたい。これまで展開した叙述において、自らが選択した道を擁護するために、私は社会主義体制の学問的な分析の有用性という議論を展開した。先の章でも強調したが、ここでも理論的な批判が共産主義制度の基礎を弱体化させ、最終的に制度の崩壊へ導く道具になったことを強調したい。ただ、それが重要な役割を果たしたからといって、社会科学の役割を政治的用具としての有用性という狭い意味に限定したくない。認識することそれ自体にも価値があると考ええる。認識や理解それ自体に喜びを感じる人がいる。学問的な仕事を天職だと考える人々がいる限り、

これは真実だと思う。

効率性と社会主義倫理

一九七九年、アイルランドの著名な経済学者で統計学者R・C・ギアリーを記念した冠講演である「ギアリー講演」に招聘された。そこで、インドで講義した最初の構想を、完成した状態で伝えることにした。^{*}

^{*} 私の人生の中で、事前に書き記した原稿を読み上げたことは一度もない。可能な限り、生きた形で議論を展開することに努めた。聴衆の反応を見ながら、講演から講演へと議論を修正して行き、議論を完成するように努めた。議論が十分に完成したと感じた時に、文章に書き留めるようにした。

二種類の価値体系が相互に対立すると考えた。ひとつは、経済活動の効率性の向上に市場メカニズムを利用する時の要件である。もうひとつは、社会主義倫理の要件である。議論の結論は、二つの要件を一度に完全に満たすことは出来ないということだった。この「不可能性定理」を厳密な数学的モデルで証明することができなかった（残念ながら、今日にいたるまで、誰もこの問題を扱っていない）。推論を使って議論を展開し、例

証としてハンガリー改革の諸結果を使った。たとえば、連帯や弱者救済の義務が経済競争と対立し、競争によって弱者は不利な立場に陥り、苦痛を伴う損失を被る、と。このメッセージは、社会主義の堅持と市場改革の支持がいとも簡単に両立すると（この共生があらゆるデイレンマから免れているかのよう）に考えてしまう人々に向けられたものである。

講演が終わり、ギアリー教授が発言を求め、私に質問した。共産主義に失業がなく、労働力不足ですらあるという指摘はいへん気に入った。他方、西側世界ではすべてのものが取得可能で、不足を知らないのは良いことだ。この二つの体制の欠陥を除いて、利点だけを統一することはできないだろうか。

これに対して、私は一九八〇年に出版した論文の最後に記したことを述べて、回答に代えた。これは「最適経済制度」を構築するという思想に関してまとめたものである。「このような最適システムの構築に努力する者は、大きなスーパーマーケットを訪問する調子で考えている。棚の上にはさまざまなメカニズムのエレメント、いろいろな制度の長所の体現物が並んでいる。一番目の棚には東欧で実現されている完全雇用がある。二番目の棚には西ドイツやスイスにみられる高い組織性や規律がある。三番目の棚には景気後退のない成長が、第四のそれには価格安定が、第五のそれには国外市場の要請に素早く適応する国内生産がある。システム・デザイナーは買い物ワゴンを押し

ながらこれらの最適（エレメント）を選び集め、やがて家に帰って、それらのエレメントから「最適システム」を組み立てるだけなのだ。だが、これはナイーブな夢想でしかない。好みに応じて選り好みできるこの種のスーパーマーケットなど、人類の歴史が用意してくれることなどあり得ない。どのようなシステムに利点があるかを明確にしたい人は、高々、さまざまな形で事前に詰め合わされた「抱き合わせ」パッケージから選択できるにすぎないのだ⁽¹⁵⁾。

この研究は一九八〇年に *Vistas* 誌に発表された（以後、多くの国で翻訳出版された）。調和的に機能する「社会主義市場経済」ヴィジョンに対抗するものとして、大きな注目を集めた。

ここで少しだけ回り道をしたい。この論文に関連したあるエピソードを紹介する。ちょうどこの頃に、ハンガリーの論壇にレンジェル・ラーズローが登場してきた。彼の批判を退けたベレンド・T・イヴァンやラーンキ・ジョルジュを切り捨て、今度はボルガール・ミクローシュと共著で、私の上記の論文に切り込んできた。彼らは二つの議論を展開した。ひとつはすべての倫理的観念の背後には一定の集団的価値が隠されていること、二つは改革の問題を論文で扱ったような矛盾に求めるのは間違っていることである。

ひとつ目の極端に俗流化されたマルクス主義的主張は簡単に

あしらうことで済ませることもできたが、二番目の主張は反論なしで済ませたくなかった。非常に厳しい調子で回答し、著者たちに論争の礼儀を守るよう求めた。私の論文はその巻頭で「因果関係の分析を行うものではない」と断っている。二種類の価値体系の対立という図式で、ハンガリー経済の問題や改革の困難を説明しようとしたものではない。彼らの批判はその他の点でも私の論文の文言を歪曲したものであった。

私に対する批判的なコメントは数多く書かれているが、私は一々それらに反論していない。批判に同意できなければ、ほとんどすべての場合、議論なしで課題としてとっておくし、批判が射ていると思った時は、後の著作の内容からそれを読みとることができる。ただ、レンジェルとボルガールの共著になる著作を受け容れたいと感じたのは、論争のエチケットが破られていたからだ^{*}。

* カーターの圧政的イデオログたちが決めつけ的批判を行った時も、非常に傷ついた。政治的にも知的にも私はその批判を受け容れることができないと感じたが、倫理的な怒りは感じなかった。いわば精神的パレードの向こう側に立っていて、私の思考を歪めて批判することはなかった。実際に私が主張し考えていることを断罪したのである。

レンジェル・ラースローはハンキシユ・エレミールが行った自伝的インタヴューの中で、このことを回想している。こう話している。「我々の議論のスタイルは、無慈悲であざ笑ひ、そしてけなすようなマルクスの手法、というより学問的不作法さから派生していた。……私は一九七〇年代にコルナイやペレンドやラーンキをけなすように攻撃した。多くの点で私は正しかったが、個人攻撃をしたことを認める⁽¹⁷⁶⁾」。率直な自己批判は評価して良いだろう。しかし、彼は一時の無作法だけを論じているから、もう一度このエピソードに立ち戻る必要がある。批判のスタイルだけが問題だったのではない。倫理的に許されない手法を使ったことが問題なのだ。レンジェルは私と行った論争を間違つて記憶し、「多くの点で正しかった」と自らの主張を擁護している。当時の論争を再度読み返してみたが、彼の批判の内容に真実はない。私の議論を歪曲して勝手に作り替え、その主張を私のものとして、それを論じているのだ。この古い論争に立ち戻るのは、この種の「論争技術」が現在もなお健在であり、より広範な広がりを見せているからである。ハンガリーの論壇、メディア、あるいは精神的な産物の世界で、敵対者の文言をけなし、さらに作り替えた主張を拒否し排除するのは、許し難いことである。

所有権の重要性

一九八三年、社会・経済学者のセグー・アンドレアは *Vilag* 誌の改革論争のコラムに意見を寄せた⁽¹⁷⁷⁾。スターリン型の復権ではなく、近代的な手段を用いた強い集権化を支持するものだった。「左」から改革を批判し、同時に著書『不足』にも言及していた。彼女が著書から読み取ったメッセージは、公的所^{*}有が不足経済を生み出す、つまり需要ではなく資源が生産を制約するような現象をもたらすことである。したがって、公的所^{*}有が大きなウェイトを占めている限り、改革が社会主義システムの基本的性格を変えることはできない。公的所^{*}有は、市場メカニズムよりは集権化された制御に順応している。

* セグー・アンドレアは一九九一年に「カレツキ的」視角から、『不足』を批判し、私の理論と一線を画した。

ほどなく、セグー・アンドレアは改革派経済学者たちと論争に入った。このうち、たいへん興味深いのは、バーチカイ・タマーシユとテルターク・エレミール・ジョルジュの共著になる一九八三年の論文である。彼らは私の思考の「左翼的」解釈を退け、私を擁護し、私の仕事は改革を支援するものだ^{*}と強調し

たのである。^{*}

* この共著者も読者も、そして私も、熱心な改革者であるバーチカイ・タマーシユが、第9章で記述したように、長期にわたって秘密警察の諜報部員だったなど想像もしなかった。一九六〇年に私がマルクス主義から決別したことを政治警察に通報することが重要だと考えた同じバーチカイ・タマーシユが、今度は私を「擁護」したのだ。

この論争を読んで、奇妙な感覚に襲われた。もちろん、心から改革が少しでも成功することを望んでいる。どんな形であれ、「左翼的」な復権は有害である。この意味では私は改革者の側に立っている。ところが、セグー・アンドレアは私の理論の基本的思考を理解しているのに対し、私を擁護した人たちは理解していない。市場を望むなら、私的所有も要求しなければならぬ。反対に、公的所有にこだわるなら、官僚的規制が繰り返し強化されることに驚いてはならない。公有と市場調整を結合しようという発案が、スムーズに機能することはない。後の著作で詳細に展開したように、私的所有と市場調整との間、公有と官僚的調整との間には、自然な親和力が存在する。⁽¹⁰⁾もし公有と市場との強制結婚を実現しようとすれば、自然的親和力を人工的に作られた規則で補完しなければならない。

一九八一年と一九八六―一九八七年に出版された著作で、私はハンガリーの改革過程を総括的に評価し、多様で活動的な非国家セクターの出現と成長がとくに重要であることを読者に伝えている。ここにこそ、現実の市場が存在するのである。

一九八〇年代、急進的改革派は「所有改革」をテーマに取り上げた。⁽¹¹⁾改革派経済学者の指導的人物の一人であるタルドシュ・マールトン⁽¹²⁾は、近代資本主義の結合形態のひとつである「持株会社」の創設を提案した。企業は省庁の管理ではなく、持株会社の管理に入る。彼の構想によれば、持株会社の管理者が「所有者の利害関心」を代表する。

ここまで来ると、真の資本主義の「模造品」はグロテスクの極致にまで行き着く。考えてみれば良い。上級官僚が別の官僚を任命し、「君は所有者である」とく振舞え」と送り出すのだ。改革社会主義ヴィジジョンを現実と対峙させた私の論文で、問題を次のように提起している。「人工的に創出された組織体に所有者の利害関心を模倣させることができるだろうか。〈所有者〉としての社会を代表するように権威を（誰によって、官僚によって？）与えられた組織体⁽¹³⁾が」。

これ以後、体制転換時にも、「市場社会主義」理念に関する議論が続けた。このテーマが過去のものになることはなかった。中国でもヴェトナムでも、あるいはキューバでも、社会は新しい道や政治と経済の再構築を模索しており、市場社会主義は常

に魅力あるヴィジョンになっているからである。

ランゲ・モデルとハンガリー改革の現実

ハンガリーのみならず、西側でもハンガリー改革が議論された。我が国の議論に参加した人々は皆、程度の差はあるが、現実の状況を知っている。違いがあるとすれば、改革から何が期待されるか、どのような展望が開けるのかという考え方である。

これに対して、外国では表面的で教科書的な知識に出会うことが多い。たとえば、比較経済体制論でもっとも読まれている教科書で、一九八〇年に出版されたポール・R・グレゴリーとロバート・C・スチュアートの作品は、ハンガリーの経済管理改革について、「全体的にみると、新経済メカニズムはランゲ・モデルに非常に類似している」と記している。これはほとんどもない間違いである。以前の章で、オスカー・ランゲの社会主義理論について記したことを思い出していたきたい。彼はすべての企業が公有にある経済を描いている。中央計画当局はただひとつの手段で企業に影響を及ぼす。つまり、超過需要や超過供給に反応して、価格を上げ下げする。

ハンガリーの実際はまったく異なる。ランゲ・モデルに類似した制御は経済調整過程の比較的狭い領域で使われただけで、そこでは集権的に規定された価格を固持するのではなく、頻繁

に変更していた。価格のほとんどは別様に形成されていたのである。加えて、国家官僚は数百種類の手段を使って、経済過程に介入していた。予算制約のソフト化によって企業活動が歪められていたため、企業間には本当の競争が展開されなかった。そして、ランゲ・モデルとの最大の乖離は、公有だけが支配する世界に、(幸いにも)私的セクターが現れ、模倣でない現実の市場が現れたことである。

残念ながら、概念の混乱は大きかったし、それは今でも続いている。これを明瞭化することは、ほとんど救いようがないほど期待できない。オスカー・ランゲの構想にしたがって、公有と市場調整が結合された経済を「市場社会主義」と名付けるなら、一九六八―一九八九年のハンガリー経済は市場社会主義ではなかった。とはいえ、「市場社会主義」はランゲの意味においてだけ使用が許可されるようなブランド名ではない。この命名プロセスを逆転してみよう。今、共産党が権力を握り、自らを公式に社会主義と名付けている体制があるとしよう。この体制の内部に、限定された領域で多種の官僚的規制によって歪曲された市場調整のエレメントが現れる。こうして出来上がったハイブリッド状態を、当該のイデオログたちが「市場社会主義」と名付けることを禁ずることはできない。この命名が気に入らなければ、言葉を入れ替えて、「社会主義的市場経済」と命名できるだろう。どんなレジームであろうと、この命名権

を否定することはできない。なによりも重要なことは（そして、それは私が著作で努力していることであるが）、講義で経済思想史を教授する際に、理論モデルと現実を混同しないことである。

回り道…もうひとつのハンガリーの現実

前節のタイトルに「ハンガリーの現実」を掲げた。そうであるなら、高次元な理論的推論の陽の当たる世界だけに留まる必要はない。現実のどこかで、奥深く暗い世界が存在していた。ハンガリー・アメリカ・セミナーやニューヨークの講演で、市場社会主義やハンガリー改革に関する私の考えを披露した。どの参加者も熱心に聴講していた。

この自伝の準備のために資料を収集し、当時の秘密警察のアルヒーフを検索した。私が入手した資料から分かったことだが、これらの講演の報告が政治警察の国外エージェントから届いていた。

（¹⁸）そのひとつの報告は、一九八一年二月一〇日の「日報情報」に入っていた。この日報は膨大なエージェント網と政治警察組織の数万の諜報部員から寄せられる情報をまとめたものである。一番上の宛先は、政治警察のヒエラルキーを統括する内務大臣である。そのコピーが内務・秘密警察機構の上級管理

者に渡され、その概要が共産党と政府の指導者に送付される。さて、二月一〇日の報告の第六点は、ブダペストで開催された「ハンガリー・アメリカ・セミナー」を報告したものである。「著名なハンガリーの専門家であるコルナイ・ヤーノシユは、アメリカ人に対して、コメコン内部の状況、ソ連経済の困難、我が国と他の社会主義国との経済関係の問題点について、機密情報を詳細に報告した。コルナイは我が国経済の困難や問題を詳細に分析した。ブダペスト到着前に、アメリカ人経済学者はポーランドを訪問した。そこで取得した情報の真偽を、コルナイの助けを借りて確認しようとし、情報提供者によれば、彼らはこれに成功した」⁽¹⁸⁾。

即座に捜査が開始された。もちろん、そのことを私が知る由もない。最終的に、国家機密を漏らした事実がないことが確認され、告発に至らなかった（いかなる講演であろうと会話であろうと、機密情報を使わないというのが私の原則だった。情報の秘匿が馬鹿げていると思うような場合でも、その原則を守った）。

もうひとつ、一九八五年四月二六日付けの「日報」を目にすることができた。⁽¹⁸⁾その第七点で、私がニューヨークのある研究所で講演したことが報告されている。彼らによれば、この研究所は「CIAの庇護下」で活動しているという。Y・Yという政治警察の局長が即時の捜査を命令した。もちろん、そのこ

とについて私は何も知らなかった。命令には、「III/II-1課がコルナイを調べよ」とあった。「調べよ」とは、再度、私のファイルを追調査することを意味している。最初のファイルから次のファイル、それから第三のファイルへと、私に関するファイルを調べることである。どんな順番でファイルを手にしたのか分からないが、一九八一年の事件の報告を再び手にしたようだ。私に関する総括ファイルには、手書きで私の主要なデータが書かれている。「コルナイ・ヤノシュ、ハンガリーの経済学者、ハンガリー科学アカデミー経済研究所所員、大学名誉教授（組織化に失敗）」とある。この後に、私に関する情報が含まれているファイルの番号が列挙されている。そして、この最後には、「III/II-20・85客員教授アメリカ。CIA edへ招待^{***}」と手書きメモが読み取れる。

* 「何を電話で話したかを調べる／何時、何故、誰に。／私が夢見たことをファイルに書き留め／それを誰が理解するかも。／何時になったら、終わりになるのか知る由もない／ファイルをめくり／私の権利をないがしろにして」（一九三八年に記されたヨージェフ・アッティラの詩 *Levegőfűs*。Jozsef Attila, 2003, 434-435, p.)

** 「e. a」とは講演の略語だと推定する。一九八五年の「CIA講演」という事実を記したのであろう。

改革過程が進行していた政治・社会構造がどのようなものだったかを事後的に評価する場合、これらの出来事を再構成してみることに意味があると考ええる。こういう壁の前で、ハンガリーと西側の知識人が交流し、オスカー・ランゲや価格について真面目に議論していたのだ。そして、その壁の後ろでは、諜報、詮索、裏切りが行われていたのである。

今から回顧してみれば

経済改革の世界に戻ろう。ハンガリーの経済改革に関する私自身の著作を読み返してみても、当時記したことが現在の視点からも支持できると確認できた。もしこれらの著作を再出版するとすれば、自己検閲で表現を抑えた箇所について若干の補足や脚注を付すだけで十分である。私の著作が改革過程の奇妙な状況に注意を喚起し、誤った期待を解消することに努めたのは完全に正しかった。状況の実証的記述と分析に関する限り、これを確認することができる。他方、その評価は別問題である。改革の実績には、現在の時点でより高い評価を与えることができる。もちろん、後知恵ということもある。しかし、ここで対象にしている現象は、後の展開過程を知って初めて公正な評価が可能なのなのである。

もしソ連圏の崩壊がなく、東欧が党国家として存続していた

と仮定してみよう。部分的な成果によって中途半端な改革が独特な幻想を生み出し、誤ったイデオロギーがカードル体制の固定化を助けたかもしれない。改革者が強いられた妥協によって、真の急進的な変化が先延ばしされたかもしれない*。

* 現在の中国改革が二重の効果（一定程度、共産党権力が安定化し、正当化される）を伴っていることに、類似していると言えるかもしれない。

幸いにも、現実はこのように展開しなかった。体制転換が進行してしまえば、現在の時点から振り返って、半市場のハイブリッドな改革でも予備校のようなものだったと評価することができる。改革社会主義の経済指導者層や経済エリートの有能で専門的訓練を受けた層は、当時でも市場機能に適応し、費用・価格・利潤への配慮や私的契約の重要性を理解していた。改革時代の私的セクターで、多くの人が起業家の意味するところを学ぶことができた。「改革派」のお陰で、この面で、ハンガリーは他のポスト社会主義経済に比べて、有利な状況から出発することができた。

残念ながら、それから一五年の歳月が過ぎて、この優位性のほとんどが雲散してしまった。これは個人のキャリアにおける学歴と良く似ている。高い学歴をもっている者は、良いスター

トをきることができるといえる。低い学歴の者が一生懸命に頑張り、運も付いてきて、高い学歴の者に追いつき、さらには追い越すことがある。同じことが、一国の経済の再建にも起きている。一九六八年の改革に失敗したチェコスロヴァキアは、もつとも厳しい専制と強度な集権経済が支配していた。さらに、体制転換後ほどなく、この国は二つに分裂した。しかし、この国の市場経済制度への同化や機能が、今現在、社会主義改革の先頭に立っていたハンガリーより悪いとは言えない。

ここに来て、評価の重要な問題のひとつに辿り着く。実際問題として、「評価」は何に与えるのだろうか。二〇年という歳月の将来視点から、一九七〇年代あるいは一九八〇年代の出来事を評価することなのだろうか。あるいは、百年単位の視角から、思想家や集権主義者の哲学の評価を下すのであろうか。ただ、すべての人間には一回切りの人生しかない。もし今の私の考えや感覚で、ハンガリー人とチェコ人が過ごした一九六八年と一九八八年の二〇年間を比較すれば、ハンガリーの方が生活しやすかったと言える。より自由な雰囲気があり、旅行するのも容易だったし、西側から多くの商品や文化が流れ込み、生活がしやすかった*。平凡な常識だが、ハンガリーがチェコスロヴァキア、ルーマニア、東ドイツに比べて、よほど陽気なラゲリのバラックだったことは真実だ。スターリン時代の厳しさと硬直さが弛んだのも、経済改革の進行と関係している。今か

らこれを顧みると、当時私を感じた時よりも、経済改革はより大きな価値ある成果だったと評価することができる。

* 支配体制と思想的に対立していた親、あるいはもつとも厳しい抑圧時代に青年期の子供を抱えていた親は、難しいディレンマに立たされていた。家庭内ですべてを率直に話せば、まだ分別のつかない子供は余計な所で、親の見解を喋ってしまうかもしれない。逆に、慎重なあまりに家庭内で率直に話す習慣がなければ、必要不可欠な政治的啓蒙を怠ることになり、新聞やプロパガンダあるいは学校の誤った影響を中和することができない。

幸い、我々の家庭にはこの問題はなかった。難しい政治問題も、率直に話し合うことができた。波長が合っていた。多くの家庭で親と子供にみられた政治と倫理の基本的問題の世代間対立は、我が家では無縁であった。子供が政治・社会問題に関心を寄せ始めた頃には、社会の締付けの雰囲気は緩み、家庭内でも家庭外でもより開放的になったことが、相互理解の形成を容易にしたと言える。本文で、「生活がしやすかった」と記したのも、こうした事情がある。

第16章 ハーヴァード（一九八四年―二〇〇二年）

一九八三年秋、プリンストン高等研究所の土手を散策していた。向こう側からワイシャツ姿、素足にサンダルのアインシュタインがやってきた。我が眼を疑った。顔、縮れた白髪、風貌や身なりが、何から何までそっくりなのだ。

もちろん、これは歴史の舞台で映画を制作していたのだ。アメリカ到着から、アインシュタインはこの研究所で働き、この土手を散歩し、思索にふけた。

我々はすでに数週間、このアインシュタイン・ドライブ四五番地に生活していた。わが同胞プロイアー・マーツェルが設計した住宅地の小さな家に。

プリンストン高等研究所

アインシュタインの伝説は今なおプリンストンに生きており、ここを訪れる人に精神的な鼓舞を与えてくれる。個人的な事柄

を記す前に、プリンストンの研究所を少しばかり紹介しておきたい。アメリカでは大学の枠組みの外で機能している研究所は稀だ。ほとんどすべての学者は、その多くの時間を授業に割いている。授業から免除（禁止）されているソ連や東欧のアカデミー研究所員を、アメリカの同僚たちは羨ましがったものだ。

アインシュタインのアメリカ到着に際し、彼を受け容れた人々は、学生への教授で煩わせるのは止めようと考えた。そこで、アインシュタインが研究だけにすべてのエネルギーを向けられるような研究所を創設した。第二第三のアインシュタインを見つけることは不可能でも、何人かの傑出した学者は必要で、常勤の研究者として研究所に招聘しなければならなかった。後は、アインシュタインの精神的なオーラによって、世界の各地から有能な客員研究者を招聘し、一年ずつ滞在してもらえばよい。大学や研究所から離れ、授業や管理的業務から解放された研究者が、すべてのエネルギーを自由に選んだテーマの研究に注ぐ

ことができる。

金持ちで寛大なスポンサーの資金で財団が作られ、ほどなく研究所が開設された。当初は、理論物理学者と数学者だけが招聘された。ハンガリー人の天才数学者ノイマンはそのアメリカ生活を、最後までこの研究所で過ごした（彼の名前にちなんだノイマン・ドライヴは住宅地のもうひとつ別の通りになっている）。⁽⁹⁾ ここには論理学の巨匠ゲーデルが招聘されたし、原子力委員会を追放された後、一九四六一―一九六六年の間、オツペンハイマーが研究所長を務めた。

一九六九年に社会科学「部門」が設置された。この *School of Social Science* では、ひとつの学問領域を一人の教授が代表する。私が滞在した年には、アルバート・ハーシュマンが経済学を、マイケル・ウォルツァーが政治学を、クリフォード・ギアツが文化人類学を代表する常勤研究者で、三人ともそれぞれの領域で傑出した学者である。

研究所の所帯は年々増え続けているが、基本的な構造は維持されている。少人数の常勤研究者の周りに、その五、六倍の常勤研究者によって選考された客員研究員がいる。設立から今日に至るまで、種々の学問分野の専門家が集められ、学際的な研究がこの研究所の主要な魅力のひとつになっている。

研究所への招聘を大きな名誉として受け止めた。ここで過ごした一年は、私の人生の中でもっとも充実した年のひとつに

数えられる。学者があの世界でパラダイスを作りたいなら、このプリンストンの研究所を模範にしなければならぬ。建物群を大きな公園が囲み、その中心に小さな湖がある。そこから少し進むと、研究所の森に辿り着く。小川が横切り、繁った木々の間に小径が連なる。私のように自然の中を歩きながら思考を深めたい者にとって、ここは絶好の隠れ家だ。

研究者との交流を望む者は、昼食（これがまた美味）時に同僚たちと会うことができる。研究所への招聘は、応募と常勤研究者の評価にもとづいて選考される。アルバート・ハーシュマンが一九八三―一九八四年のアカデミック年に招聘したのは、新古典派の主流から外れ、重要な諸点で新古典派のドグマから距離を置いている経済学者である。非常に興味深い仲間が集まった。ケインズ再評価で知られるスウェーデン⁽¹⁰⁾アメリカ人経済学者のアクセル・レイヨンフーヴツド、それからジョージ・アカロフがいた。彼とは良く会話したが、「レモン」（中古車を意味するアメリカのスラング）に関する機知に富んだ論文で非対称的情報理論の創始者となり、この仕事で後にノーベル経済学賞を受賞した。ドン・マクロスキーは、吃った口調ながら、いつも新鮮で興味深い話で同僚たちを引きつけていた。彼の経済学の「レトリック」に関する作品がセンセーションを巻き起こした（極端に単純化して論じると、その時点で流行しかつ受容されている手法で同僚を説得することができれば、それ

が、そしてそれだけが、社会科学における「真理」とみなされる。^{*}

* スポーツ選手のような体格のドンが、この数年後に性転換手術を受けるなど、想像することもできなかった。それ以後も、ディアドラ・マクロスキーとして、輝かしい研究者のキャリアを積んでいる。信じた難しい決断を下したマクロスキーの勇氣に敬意を表する。

本当のことを言えば、この時期、私は「創作の危機」に陥っていた。『不足』に関連して私が書きたかったものは書き終えたが、何を次の課題にするかを決めあぐねていた。進むべき道をもぐつて格闘していたのだ。

「通常」の年であれば、私の読書は具体的な研究プロセスと結び付いていた。しかし、この時は、プリンストンのパラダイスのような自由を、一般的な情報収集や学習に使った。民主主義や「ポリアリーキー」に関するダールやリンドブルム⁽¹⁸⁷⁾の作品、公正に関するロールズの理論、戦略に関するシェリング⁽¹⁸⁸⁾の興味深い思考、それからもちろん、研究所の同僚（レイヨンフーヴッド、アカロフ、マクロスキー）の作品、研究所を訪問しセミナーで講演した学者（アマーティア・センやオリヴァー・ウィリアムズ）の著作など。これらの作品に触れることで、この年

は大きな精神的な刺激を受けた。^{*}

* この読書リストから分かるように、当時、私は『不足』のテーマを越えて、政治構造、イデオロギ、社会関係の問題を、分析の中に取り込もうとしていた。

この間、次第に、ある考えがまとまってきた。社会主義体制の長年の研究から認識したことや学んだことを、ひとつの大きな著作にまとめようと考えようになった。プリンストンでこの最初の構想をまとめ、それがほぼ一〇年の歳月を経て、*The Socialist System* というタイトルで陽の目をみることになった。

この高等研究所タイプの機関が学問研究に提供している寛大な組織的資金的な枠組みは、素晴らしいものだ。私の場合、研究所に到着した時にはまだ、何をやりたいのかはつきりしていなかった。そこで次第に長期の研究目標が定まり、プリンストン滞在中に最初の構想にまで辿り着いた。プリンストンで着想された最初の思考が完全に熟成し、著書の形に仕上がるまで、さらに八―一〇年の時間が必要だった。公的財団であれ私的財団であれ、研究者が補助を求めるときには、何を行うのか前もって具体的に伝えることが必要だ。しかし、前もって硬直的な条件を課さない形式があつて然るべきだし、その必要性は大き

*。もちろん、プリンストンの研究所に招聘される者も何を研究するかを明示するが、期限までに予告された研究を仕上げる法的義務がある訳でもないし、官僚的な「労働契約書」のようなものもない。招聘機関は寛大にも、手に取ることができような成果が生まれまいというリスクも請け負っているのだ。うまく招聘者を選抜できれば、その学者が熱心に研究に勤しみ、自由が供与する可能性を活かし、時間を有効に使うだろうという保証があるだけなのだ。***

* 私の人生の中で、西側の招聘の多くがこのような自由な研究の可能性を与えてくれたのは、幸運なことだった。第13章に触れたように、ストックホルム大学国際経済研究所も同様に、何のオリゲーションも課さなかった。

** プリンストンの研究所を詳しく叙述したのは、これを模範として、東欧最初の研究所として、コレギウム・ブダペストを創設したからである。私はこの創設からの常勤所員である。

プリンストンの研究所にいたある日、電話が鳴った。ハーヴァード大学の経済学科長マイケル・スペンサーが公開講演への招聘を伝えた。^{*}ハーシユマン（プリンストンに来る前はハーヴァード大学教授だった）にこの電話のことを触れたら、意味ありげな笑いを浮かべていた。その時は、彼が何を考えているの

か分からなかった。ともかくこの招待を快く引き受け、数週間経て、講演を行った。

* ハーヴァード大学を含めアメリカの大学の構成は、ヨーロッパ大陸の大学（ハンガリーの大学も）とは異なっており、したがってその構成単位の名称も異なっている。ハンガリーでは *kar* と呼んでいるものは、ハーヴァードでは *school* とか *faculty* と呼ばれている。その長が *dean*（ハンガリーでは *dékan*）である。たとえば、経済学教育は *Faculty of Arts and Sciences* に属しており、ここにはすべての社会科学と自然科学が一緒に含まれている。School の中のより狭い単位が *department*（ハンガリー語では *osztály*）である。これはハンガリーで *tanszék*（^{*}学科）と呼ばれているものより、はるかに大きな包括的な単位である。この長が *chairman*（ハンガリー語では *elnök*）である。Department の教育活動と行政的な仕事の調整に責任をもつが、教授陣の「上司」ではない。平等な人々の第一番目という意味しかない。助手すら *chairman* の部下ではなく、助手は自立した教育者であり研究者なのだ。ここがドイツの *Lehrstuhl* やハンガリーの *tanszék* との本質的な違いであり、これらの単位では垂直的な上下関係が存在している。

これら内容的な違いはあるが、ハンガリーでは馴染みのない *school*, *department*, *chairman* に対応するハンガリー語を使わず、本書（訳注：ハンガリー語版）では *kar*（学部）、*tanszék*（学科）、*tanszékvezető*（学科長）という用語を使っている。大学のトップはアメリカでは *president*（*elnök*）と呼び、ハ

ンガリー他の諸国では rector (rektor) と呼んでいる。この仕事の領域に触れている箇所では、ハンガリー語の enök を使っている。

ハーヴァード大学教授招聘事情

私の招聘事情を記述する前に、少し時間を先へ飛ばしたい。まず、ハーヴァード大学の教授招聘プロセスがどのようなものであるかを記してみたい。これは自分自身の経験として、後に学科のメンバーとして別の候補の選抜に参加したことにもとづいている。ここで断っておくが、アメリカ合衆国では大学教授任命に統一的な規則がある訳ではなく、以下に述べることはあくまでハーヴァード大学の慣行である。

アメリカの「正教授」(Full professor)の地位は、テニユア(終身在職権)と呼ばれる独特な非対称的な労働契約で保証されている。テニユアを持つ教授は職場が気に入らなかつたり、別の可能性があつたりすれば、何時でも辞任できる。これに対して、雇い主である大学は教授の実績に満足できなくても、解雇することができない。^{**}

* ハーヴァードやその他いくつかの大学では、テニユアの権利を行使できるのは正教授だけだが、準教授からこの権利を与えてい

る大学もある。

** もちろん、常識的な条件にしたがうことで、教授が犯罪を犯したような場合は、この限りでない。

こうした法的関係の是非について議論はあるが、学問研究の自由を完全に保証する担保として、広く支持されている。政治的見解や学問的視角を理由に、生存条件を脅かされることはない。よくマッカーシー時代のことが取り上げられるが、当時、アメリカの大学人を政治的な魔女狩りから守つたのが、このテニユアなのである。

これほど大学教授の地位が強いものであれば、その指名にあたっては、慎重の上に慎重を期するのは当然だろう。アメリカではすべての大学に有効な統一的な法的規則がないので、ハーヴァードの慣行を記そう。私自身の経験に加えて、ヘンリー・ロシヨフスキの著書 (*The University: An Owner's Manual*) を使う。著者は長年、Faculty of Arts and Sciences の学部長 (dean) を務めた。もし大学生活の魔女の台所を見た者がいたとしたら、彼以外にいない。

ひとつの仮定的な事例を使って行こう。経済学科(学部)が企業金融論の教授を必要としている。最初の選考過程は正教授の組織体の権限に属しており、それ以外の教員は参加しない。通常の月一度の教授会で、招聘のアイデアが議論される。本

当に招聘が必要かどうかをこの組織体が決める。もし必要だという判断が下されれば、調査委員会 (search committee) が設置される。この小さな委員会はここから何ヶ月も、この問題に専念することになる。委員はこの分野の新しい文献を渉猟して情報を集め、議論を重ねて一人の候補を立てる。このハードルは可能な限り高く掲げられる。この選考基準をまとめているロシヨフスキーを引用しておこう。「誰が一番賢く、一番興味深く、そして一番将来性があるか。当該の課題領域に適合している者の中で、世界で一番は誰か。世界的に見て、このテーマの「最高の専門家」は誰か」。さらに、候補から期待されることを次のようにまとめている。「それ以前の学問研究の様相を一変させるような影響をその専門分野に与えた業績をもつ者」。

調査委員会は名前を出すだけでなく、その推薦理由を付す。委員長は候補の業績について、規定の報告を行う。推薦した者が高い基準をクリアしていることを、学科の他の教授に納得させなければならぬ。委員会の委員全員が自らの意見を述べる。それから討議が始まる。候補を個人的に知る者やその業績を読んだこともある者は、自らの見解を表明する。調査委員会が判断を下したように、研究業績はパイオニア的で優れたものなのか。反対意見がある者はそれを述べ、留保を表明する。候補の個人的な事柄に話が及ぶこともある。候補者を知っている者が、教員としての資質や学生への態度を述べ、それも考量される。

しかし、これは私の予想に反して、決定的な基準とはみなされない。真の基準は、学問的業績と将来の研究の「ポテンシャルティ」である。

長い議論が続けられるが、それで決定という訳ではない。その前に、学科長がこの分野 (今の事例では、企業金融論) の著名な専門家の多くに手紙を送る。その手紙には複数の名前が列挙されていて、調査委員会が指名した候補の名前も含まれている。しかし、誰が候補であるかは伏せられている。この手紙の受取人に対して、この名前のリストをランク付けし、その理由を記すように依頼する。ハーヴァードが選考した人物は伏せられているのだから、その回答は「隠し状」(blind letter) と呼ばれる。いわばこの専門分野の最高の専門家たちへの世論調査が行われるようなものだ。

候補の履歴、出版リスト、二、三の研究業績が教授に配布され、残りの作品も教授陣が入手できるようになっている。候補の作品を直に知ることが、教授の宿題になる。数ヶ月経て、提案が教授会にかけられ、再び意見が交わされる。大方、二度目の意見交換で意見の一致がみられる。そうでなければ、さらに議論が続けられる。最終的に意見がまとまれば、公開投票にかけられ、各自の投票が議事録に記される。候補が過半数の支持を得れば、選考ドラマの第一幕が終わる。ここで初めて、学科長が公式に候補者に招聘の諾否を尋ねる。このポストに応募す

することはできない。^{*}ハーヴァードの正教授職へは、教授陣が適切だと判断した人物を招聘するのだ。もちろん、当人は招聘を感謝するが、現在の職場や家族の関係で招聘を辞退することが起こり得る。こうなった場合、すべてが振り出しに戻り、新たな調査委員会が設置される。

^{*}新しい正教授のポストは外部招聘によって埋められることが多い。内部の昇格の場合には、ややプロセスが異なる。准教授が「テニユア・レビュー」の手続きに応募するかどうかは、自分で決める。これはリスクのある決断で、多くの場合、テニユアが拒否され、それが精神的なショックを引き起こす。多くはこれに先だって、昇進が約束されている、あるいはより高いポストが約束されている大学へ移っていく。

候補者が招聘を受諾するとしよう。これは原理的な受諾を意味し、さらにこの後、第二ラウンド、第三ラウンドが待っている。次のステップは、指名候補者が学科長と招聘条件を交渉する段である。この段階では学科はもう何も介入することはできない。給与は完全にプライベートな事項になっている。学科の同僚は、もともと学科長ですら、同僚たちの給与を知らない。これは学科長と候補者との間の事柄なのだ。経済学者は比較的「安価」である。給与だけを払えば良いのだから。高々、他の

都市から引越す場合の住宅費用がかかる程度だ。^{*}数百万ドルのラボや研究助手を必要とする物理学者や化学者は、かなりの投資になる。正教授職にある教員の場合、新規採用者の給与を決める基準が前もって存在している訳ではない。給与やその他の条件は、学科長と当該の候補者との個別交渉で決められる。

^{*}給与面だけを見れば、経済学者がアカデミーの世界で相対的に高い給与所得者であるというのは、また別問題である。優れた経済学者には政府や経済界からの需要があり、これがこの労働市場の需要を大きくし、給与水準を押し上げるからである。

さて、学科長と候補者が条件面で折り合いがつけば、学科長は大学学長に任命提案を行う。学科のすべてのメンバーが学科長に対して自らの投票（賛成あるいは反対）の理由を手紙に記す。学長は学科構成員の見解と「隠し状」を受け取る。

学科の過半の賛成投票と候補者との交渉合意が、任命の必要条件である。必要条件ではあるが、十分条件ではない。学科の中で特定の学問的・世界的・政治的・友人的な派閥が出来上がって、相互扶助的な関係ができないかどうか。大学がこれをチェックするために、新たな中立的な検証が必要になる。この目的のために、学長はいわゆるアドホック委員会を設置する。委員の一人にはハーヴァード大学教授で、大学の別の組織（た

たとえば、経済学者であれば、ビジネス・スクールで教えている教授)に属しているが、当該テーマに明るい人物が指名される。その他に、他大学から二名の専門家が指名される。国外から指名される場合もある。アドホック委員会のメンバーは候補者の多くの業績に眼を通さなければならない。

この後、学長、学部長、アドホック委員会のメンバーが、機密保持を守りつつ、学長事務局に集まる(私自身、別の学科の任命手続きで、アドホック委員会のメンバーになったことがあり、この手続きを注視することができた)。ここでは「証人」の聴聞が行われる。学科長はこの会議に出席せず、彼が最初の「証人」として、学科の多数意見を総括する。会議のメンバーが質問を行い、やがて証人は退席する。次に別の「証人」が呼ばれるが、大概がその分野の専門家である。招聘に反対した人々の「証言」も聴聞される。会議の出席者は反対意見の議論をとくに慎重に聴聞する。証言が一通り終わると、学長はアドホック委員会のメンバーに見解を求め、それぞれの賛成・反対の理由を聞く。ここでは投票は行われない。この委員会は決定権をもたないのである。この後、学長は委員会のメンバーを昼食に誘い、これですべての会合が終了する。

ここから、学長決定という最終局面を迎える。^{*}ほとんどの場合、学科長や学部長の提案が受け容れられるが、これを拒否することも起こり得る。その場合には、大きなセンセーションを巻き起こすことになる。

* 厳密に言えば、学長の提案にもとづき、大学の最高意思決定機関が形式的な決定を行う。これはあくまで形式的なもので、最終的な決定権は学長にある。

招聘ポストの決定から最終的な任命に至る期間は、一、二年である。このプロセスを知ったことは、私にとって大きな驚きだった。私は祖国での「人事問題」の歪んだ取り扱いに慣れていた。もちろん、専門的な基準が我が国でも重視されるが、一番頼りになるのが昇進の個人的関係である。どのような勢力が誰を支持あるいは反対するのか。政治的な視点はどうか。個人的な忠誠の見返りとしてか、それともたんなる友情関係か、すでに取得したあるいは後に獲得するであろう便宜の直接・間接の見返りとしてか。ハーヴァード大学の基準が第一級の学問業績であることに、深い感銘を受けた。教授たちは心から大学のプレステイジと同化させ、ハーヴァード大学がNo.1の地位を維持できるように選考しようとしているのだ。多くの人々が多くの時間を費やし、多くの会合を経て、選考が良いものであることを願っている。大学の教授陣も、これが決定事項の中でも最も重要なものと自覚している。教授陣が良ければ、すべて良し。もしそうでなければ、大学の教育水準は救いようのないほ

ど落ち込んでしまいうだろう。

* アメリカの世論は伝統的に、ハーヴァードを最高の学府だとみなしている。現在では多くの機関が、多様な手法を使って大学ランキングを作成している。ここではその中からひとつ、*The Times Higher Education Supplement* を使ってみよう。ここでは多くの基準が使われており、広範な学者の世論調査、教授陣の論文引用頻度、教授对学生比などを総合的に勘案して、世界の大学のランキングを作成している。二〇〇四年の測定ではハーヴァードは評価点一〇〇点で第一位に位置づけられ、第二位が八八点、第三位が七九点を獲得している。

もちろん、伝統的に形成された教授選考プロセスが完全に機能していると主張している人はいない。間違いも起きている。

事後的に、期待された業績を残していない人がある。逆に、招聘しなかったが、後に華々しいキャリアを歩んでいる人もいる。なかでも、ポール・サムエルソンの出来事は伝説的な語り草になっている。シュンペーターの下、ハーヴァードで学んだサムエルソンは、*PhD*論文として、古典的な作品になった *Foundation of Economic Analysis* を提出した^(四)。経済学の分野がまだ一般的に数学を要件としていない時代に、彼は優れた数学者として経済学者になった。にもかかわらず、ハーヴァードは彼に地位を提供しなかった。ケンブリッジの工科大学であるMI

TIに職を見つけ、そこで経済学部を創設した。サムエルソンはノーベル経済学賞を受賞した最初のアメリカ人である。

* どうしてだろうか。反ユダヤ主義でこれを解説する人がいる。また別の人は、数学を理解できない古いタイプの教授が、サムエルソンの鋭い切り口や批判的な言動を恐れたのだと考えている。

外部者は選考の異常に高いハーバードが「ハーヴァードの傲慢」を助長していると考えられるのも、故なしとも言えない。この種のことは伝統や実績を誇っている組織体に起こりがちなことだが、ハーヴァードの教授陣は鼻を高くしているとは自分で感じていないだろう。だが、傍から見ると、皮肉ってみたくもなり、悪口を言いたくもなる。

教授任命プロセスに影の部分はあるだろうが、私がそこに参加している間は、誠心誠意、事を見守り、役に立てるようにしてきた。

ケンブリッジへの引越

ここから、私自身の教授指名の出来事を記したい。この自伝を書きながら、ある考えが浮かんだ。もう長い時間が経過しているから、私の教授選考プロセスの書類や議事録、それから

「隠し状」にアクセスできないか、と。経験ある同僚にアドヴァイスを求めたら、即座に断念するように説得された。もちろん、私もそれを知っていたが、秘匿こそこの手続きの原理であるとの注意を喚起してくれた。候補選考について意見を述べる人は、どんな事情があれば、その意見が当該個人に届かないという信頼にもとづいている。だからこそ、余計な配慮なしに、否定的な見解を述べることもできる。こうした条件があるからこそ、将来、同じ職場で働き、共通の会議に出席しても、同僚としての関係を損なうことはない。この秘匿原理を犯してはならない。私が学科の同僚に何か思い出すことがあれば教えて欲しいと尋ねれば、このようなアドヴァイスを受けるだろう。

一般的な選考プロセスの諸局面の知識を得た段階では、私の選考がどのように展開されたのか、その大筋を描くことができ。一九八三―一九八四年のどこかの時点で、ハーヴァード大学経済学科が、共産主義経済の研究を専門にしている人物が必要になった。とりわけ、アメリカのソ連学の権威であり、かつ厚生経済学理論史の厚生関数にその名を残したアブラム・バーグソンの退職が迫っていることが、この選考を眉間の課題にした。調査過程のどこかで、私の名前がでた。アメリカの多くの大学に友人と呼べる経済学者はいたが、ハーヴァード大学には近い関係にある人物がいなかった。どこかですれ違ったことがあるくらいだった。だから、彼らも私のことをもっと知り

たかったようだ。

最初に講演に招待し、次いで夕食に招かれ、ディナーを囲んで専門的な話が進んだ。その次のステップが、一年の客員教授への招聘だった。一九八四―一九八五年の「タウスイッグ記念客員教授」への名譽な招聘をもらった。学科が住宅を世話するから、そこに引越して、ひとつだけコースを引き受けてくれれば、後の時間は研究に割いて良いというものだった。この招聘を快諾し、プリンストンからケンブリッジへ引越した。初めて、講義シリーズを担当した。この講義録が毎年改訂され、拡張されて、最終的に *The Socialist System* という著書に結実した。この滞在中でハーヴァードを知り、ハーヴァードの経済学者も私を知ることになった。客員教授招聘の際に、もう履歴書、出版著作物の提出が要請された。推測するに、この資料が調査委員会の手に入った。

最終的に、既述した通り、選考の第一幕が終わる日が来た。

ハーヴァード大学経済学科長のジェリー・グリーン教授が、「経済学科は貴方を教授として招聘することを決定した」と私に伝えた。私と諸条件について交渉する用意があるとも伝えた。それから二〇年経過して、書状でジェリー・グリーンに、この件で覚えていることがあったら教えてくれと書いた。彼から次のような返答が届いた。「委員会に著作を読み、報告するよう依頼した。その結果は疑いのないものであった。教授会は

全員一致で任命を決めた。これだけ時間が経っているから、この程度のことを伝えても誰も異論を唱えないと思う^(四)。

事がここに至る頃には、私の所に他に三つの招聘が届いていた。ひとつは私が最初に訪問した西側の大学であるロンドン経済大学、二つはカリフォルニア州立大学ロスアンジェルス校、そして三つはハーヴァードの招聘と競ったスタンフォード大学であった。この最後の大学はすでに学科の投票を終え、提案を準備しているところだった。ハーヴァード大学の学科長と会い、次いで妻と一緒に可能性を確認するためにスタンフォードに向かった。私の選択は、ハーヴァードかスタンフォードの二つに絞られた。

いろいろな意味でスタンフォードの方が魅力的だった。ハーヴァードには知人はいないが、スタンフォードには多くの友人がいる。ケネス・アロー、シトフスキー・テイボール、アラン・マン、青木昌彦の面々とは、一九六八年の最初の訪問以来、親しい関係にあった。素晴らしい仲間が集まっていて、ハーヴァードやMITとも主要な学問分野で競争関係にあった。もちろん、その自然、カリフォルニアの美しさ、その海と森、そしてサンフランシスコも魅力的だった。選択肢がこれほど魅力的なら、決断は簡単はずがない。

どう決断するか、その緊張で本当に病になった。スタンフォードの学科長が海辺の別荘を貸してくれるというので、驚嘆す

るような景観の中で、素晴らしいニュースとこれからの可能性に胸を膨らませながら、そこで時を過ごした。ところが、突然、もの凄い腰痛に襲われ、身動きできなくなった。ストレスが痙攣を引き起こしたのだ。妻も感染から熱を出し、シトフスキーが車で迎えに来てくれて、スタンフォードに戻った。

いろいろなことがあつて、最終的にハーヴァードに決めた。これを後押しする説得的な意見があつた。MITやボストン周辺の他の大学まで含めれば、ハーヴァードの立地は研究に集中できる環境を約束しているというのだ。私の専門分野でもそのことが言える。ハーヴァードや周辺の研究機関では、ソ連・東欧・中国の研究や、経済体制比較を行っている研究者が、スタンフォードよりはるかに多かつた。

カリフォルニアに惹かれたが、すでにボストンも良く知っているし、アメリカの都市の中で、もっともイギリス的でヨーロッパ的なボストンの町を好きになった。ここでは自分の家にいる感じがした。もうひとつ重要なポイントがあつた。双方の大学に、アメリカ滞在は半年という条件を出していた。後の半年は給与なしの休暇を取り、ハンガリーで仕事をする。双方の大学とも、本来なら全エネルギーを在籍する大学で費やして欲しいところだが、私の条件を飲んでくれた。もしこのように移動すると決めたなら、ハーヴァードの方が大陸に近い。ヨーロッパからサンフランシスコへ飛ぶより、ボストンに行く方が。

学科長と住居と家具の手配の件で合意し、年に一度のブダペスト・ボストン間の航空券二枚分を、給与とは別に支給することも約束された。ただ、これはまだ提案段階で、最終決済を得なければならぬということだった。

それから、緊張した数週間が過ぎた（この間、アドホック委員会が開かれていた）。そして、最終決定が下り、ハーヴァード大学教授に任命された。

住宅探しを始め、完成間近のマンションを選んだ。アングロサクソンの習わしにしたがい、我々が住むことになる住宅地は、ユニヴァーシティ・グリーンと名付けられた大学キャンパスとハーヴァード・スクウェアに近い、マウント・アーバーン通りの一角にあった。ハーヴァード・スクウェアはケンブリッジの生活の中心で、一方が大学の建物群の心臓部と境界を成し、その境界の中には大学のもっとも古い講義室、主要な事務管理棟や学生寮などを囲む公園、ハーヴァード・ヤードがある。もう一方には、オフィスビル、レストラン、銀行、商店などが立ち並び、夜遅くまで開いている大きな書店もある。土日になると、ハーヴァード・スクウェアには街頭音楽家や芸術家が繰り出し、露天が並んでバザールのような賑わいになる。

一九八五―一九八六年の学年歴にハンガリーに戻った。一九八六年秋に再びケンブリッジに戻ったが、初めの数日は大学のクラブに宿泊した。もうこれ以上、新しい住居に移るのを待

てなかった。マンションは完成していたが、中は空っぽだった。友人から二枚のマットレスを借りて、家具を買い揃えるまで、そのマットレスで寝起きした。

講義の喜びと難しさ

他の教員たちがすでに数十年のルーティンとして、ほとんど難しい準備なしに行っている講義を、ようやくこの歳になって職業として開始するという運命になった。

私が置かれた状況を、ハーヴァードのミクロ経済学を教えている同僚と比べてみたい。この専門教科の内容はすでに学生時代に習得されている。すでに大学を卒業している訳だから、教員が講義でどのように教えるかも良く分かっている。彼が助手に採用されたのは三〇歳に満たない頃だ。今五〇代半ばなら、もう三〇年近くも同じことを講義していることになる。毎年、教授するに相応しい新しい思考があればそれを付加し、授業で使う統計データを更新する程度の修正で済む。自らの研究成果を講義に組み込むのは難しくない。定評のある教科書を使った、種々の教科書を「まとめ」たりして、自分のアイディアを補足しながら講義シリーズを組み立てることができる。

五六歳の私はこれらすべてを最初から始めなければならなかった。私の主要な講義は、「社会主義体制の政治経済学」とい

うタイトルが付けられていた。マスターコースとPhDコースの大学院生だけを対象とする講義である。これに関連する西側の教科書は存在したし、ひとつひとつの講義の区切りには参考文献リストも配った。しかし、私は自分流に、このテーマを展望しなかった。このテーマで他の教授が行った講義に参加した経験はなかったから、他の人がどのように講義しているのかわかる術がなかった。もちろん、膨大な専門文献を使ったが、言いたいこと、使いたい資料は、最初から最後まで、自分で仕上げることがあった。

さらに言えば、標準的なミクロ経済学やマクロ経済学のように、この分野は出来上がった専門分野ではない。これらの分野では理論によって描かれた現実は十分に安定しており、日々変化するようなものではない。ところが、社会主義経済について語るのは、あたかも動動的を射るようなものだ。ハーヴァードで教鞭を取り始めたのは一九八〇年代半ばである。ちょうどこの頃、世界の共産主義陣営が揺れ始め、世界的な重要性をもつ事件が相次いで起きた時期である。最初にソ連のグラスノスチとペレストロイカが始まり、北京では天安門広場の事件が起きた*。そして、最後には大転換が起き、ベルリンの壁が崩壊した。これにしたがって、私のコースのタイトルも、「社会主義体制とポスト社会主義過渡期の政治経済学」と変更しなければならなくなった。もちろん、体制転換前に講義した共産主

義経済や体制内の改革については、依然として有効なものとして学生に講義できる。しかし、この部分を短縮して、第二の部分、つまりポスト社会主義の過渡期問題の説明により多くの時間を割かなければならなくなった。情報不足はない。新しいニュースが大量に入ってくる。しかし、大学の教壇から新聞の速報解説を行う訳にはいかない。深い体系的な分析を加えなければならぬのだ。

* 天安門事件の一部始終は、妻と一緒に、テレビ画面に釘付けになって見た。学生運動の勃発と、それに続く弾圧を「ライブ」で見ることになった。ハンガリーの一九五六年を経験した者にとつて、あの光景は良く似たものだった。中国の学生たちへの深い共感をもって、事件を見守った。

経済学科の同僚は、私が格闘していた困難を感じとることはできなかったと思う。一方で多くの教授たちが持っている西側の大学で習得した知識や経験のハンディを埋めなければならず、他方でこのテーマがもっている難しさと取り組まなければならなかった。ハーヴァードの学生の前に立つ前に、多くの内的葛藤や疑念、それから専門的な劣等感を一度ならず克服する必要があった。厳しい選抜過程をくぐってきた優秀な若者たち、すべての講義を批判的な精神で聴講することに慣れている学生た

ちが相手なのだ。

何度もへまなことをした。修正不能なハンガリー・アクセントも、学生にはさぞかし耳障りだっただろう。こうしたことにもかわらず、学生の注目や尊敬を集めることに成功したと言えるだろう。必須科目でない大学院コースとしては、少なくとも参加者があった。最初の出席者が先細りすることなく、逆に増えていくのが常だった。^{*}多分、世界の政治的事件が共産主義の問題を全面に押し出したからだろう。私の講義の評判が広がったことも、一役買っていることは間違いない。

^{*} いつも学期の始まりには、コースに何人登録するかを妻と賭けた。数字を書いた紙を封筒に入れ、実際の数に近かった方が勝つ。私の予想は常に妻のそれより悲観的で、いつも妻が勝った。勝った方が祝いの夕食をとるレストランを選んだ。

ハーヴァードでは教師が学生を評価するだけでない。学期の終わりにには、アンケートが学生に配られ、匿名で教師の仕事を評価し、その用紙を学科に提出する。今でもこの評価用紙を誇りに思って保存している。必読文献や推薦図書のリストに対する不満が見られた。私の方は、図式を描いたり、数学モデルを与えたりしなかったことが不満を生むのではないかと恐れていた。確かに、そうした技法について満足しない意見はあったが、

この批判は非常に稀なものだった。それより、逆の評価が多かった。多くが私の講義に集まったのは、その「散文的」スタイルの講義が清涼剤になったからのようだ。度々、講義の中に、私の個人的な体験や観察を織り込んだ。映画や小説に言及しながら、共産主義制度の特質について、学生たちが感性的な構図を描けるようにした。学生たちはこの幅広い水平的なアプローチを評価したようだ。彼らからほど遠い世界の報告を、信用できるものに変えたからだ。いろいろな質問（多くは個人的問題や関心・興味の問題）に率直に答えたことも、講義の説得力を増したと思う。

私の講義や教材として使った著作が依拠する哲学や方法論は、多くの点で、ほとんどのコースで学生に教授しているものとは異なる。それで学生が萎縮することはなく、逆に私の講義の隠された魅力になっていた。多くのアンケートがとくに評価していたのは、私の授業が狭い意味での経済学ではなく、社会主義体制の政治構造、イデオロギー、社会関係の分析を含むことだった。かつて統合社会科学の傑出した人物の一人であるシュンペーターがこの学科で教鞭を取っていた。しかし、半世紀経た現在、学生が学際的な視角に出会う機会がほとんどなくなっているのだ。

アンケートから読み取られる評価を過大評価したくない。ハーヴァードのPhD生全員の評価ではなく、いわば世論調査か

ら自分で選んだ標本を語っているだけなのだ。私のコースは必須科目ではなく、学生が自発的に選択する。ただ、いったん登録すれば、最後まで授業に出席して、試験を受けなければならぬ。したがって、このテーマに関心のある者や前年の受講生から何が期待できるかを知った者が登録する。だから、私のアプローチがハーヴァードの学生に魅力的だったと主張しているのではない。もつと控え目な結論が引き出されるだけだ。多くの葛藤や精神的高揚を経て、年々、落ち着き感を感じることができた。私の講義から精神的な喜びを得た学生は少なくなく、また講義や著作から思考を覚醒するような回答を得た学生も少ない。

多様性と寛容

私の講義の精神が多くの他の講義と異なるものだったとしても、それは何も例外的な現象ではない。アメリカの他の高等教育機関と同様に、ハーヴァードではとくに多様性に努めている。異なる精神的潮流、哲学、学派の中から、学生が選べるのが大切なのだ。

アマーティア・センが経済学科と哲学科との間で講義時間を分割していたことがある。長年、ロバート・ノズニックと一緒
に、哲学セミナーを開いていた。ノズニックが *Anarchy, State*

and Utopia という作品で哲学界にデビューした時に、リベラリアン世界観の輝く新星だとみなされたものだ。^{*} センの政治的スペクトラムはその正反対に位置し、貧困、飢餓の問題を研究し、無条件で国家に再分配の役割分担を要求する。彼らの世界観の違いは彼らが親しい友人になることを妨げなかったし、だからこそ共同セミナーが素晴らしく刺激的なものになった。

* ノズニックは後になって、若い時期の急進的なりベルタリアンの視角を修正した。残念ながら、この大胆な思想家であり、傑出した作家でもある温かいユーモアに満ちた優しい人間は、その精神の壮年期である二〇〇二年にこの世を去った。

我々の学科の中でも、異なる経済学の潮流が存在したし、相互に異なるというより、相互に競い合う政治的視角の代表者も存在していた。急進的左派経済学者のステイヴ・マーズグリンや古いタイプのケインジアンも何人かいた。同時に、開拓者のな理論研究を行っていたロバート・バローは、日々の経済政策問題について、もつとも保守的な日刊紙である *Wall Street Journal* に寄稿していた。何人かの教授は長期あるいは短期の政府の仕事を請け負い、それが終われば大学に戻ってきた。ガ
ルブレイスは私が経済学科に加わった時にはすでに八〇歳を超えていて、年金生活に入っていたが、時々大学にやってきた

(水泳プールではいつも脚の長い長身の体格に魅せられたものだ)。彼は著作で名を知られていただけでなく、ケネディ大統領とジョンソン大統領の周辺グループに属していて、インド大使に任命された。学部学生の経済学教育という難しい課題を一手に引き受けていたのは、マルティ・フェルドスタインである。彼の政治的立場は正反対で、レーガン大統領の首席顧問を務めた。公務に就いていない間だけ同僚だったラリー・サマーズ、世銀の副総裁、次いでクリントン大統領の財務副長官、そして最後に財務長官を歴任した。クリントン大統領が任期切れになって、ハーヴァード大学に戻ってきた。しかし、経済学科のメンバーとしては名目だけで、すぐに学長になった。哲学科と同様に、経済学科でも保守派ロバート・バローとリベラル派ジョージ・マニクフの共同セミナーのように、相互に対立する視角をもつものが学生の前で対決している。

授業や講演、公的な仕事で厳しい論争を展開しているから、教授がどの政治的スペクトラムに親近感を抱いているかは周知の事実であるが、教授会では政治的見解や世界観の違いによる論争が起きることはない。論争や視角の違いが、実り多い協力関係を阻害することはない。皆が当然だと思っていることを、私だけが驚いているのかもしれない。

我々の友人の中にある夫婦がいる。夫が共和党員で、夫人が民主党員である。友人仲間が集まった時には、夫の保守的観念

をからかって、座を盛り上げている。これでも数十年の「平和的共存」が保たれている。これを思い出す度に、ハンガリーの友人のことが頭に浮かんでくる。体制転換以後、若夫婦が互いの政治的見解の違いに不寛容なので、この子供夫婦と一緒に家族で食事をとることができないとこぼしていた。

倫理的厳格さ

ハーヴァード大学では仕事に関する倫理的要請の遵守に大きな重要性が付与されている。これは私にとって、とくに印象深かった。アメリカの大学で女子学生への性的ハラスメントに断固とした措置をとるようになり、教え子にこの種の意図をもつて接近することを厳しく禁じるようになってから、何か大きな変化が起きているだろうか。直接的な体験を集めたことはないし、そのようなスキヤングルを聞いたこともなかった。この極端が過ぎた時期には、男性教員は女性の同僚に対してマナーにおいても距離をとることが、politically correctな行動だとみなされた。女性であることを意識してはならないのである。しかし、私はブダペストと同様に、ハーヴァードでも、何の躊躇ためらいもなく新しい衣服や髪型を褒めるし、あまり気に入らなければ、辛口の批評をする。それがpolitically correctかどうかなど、考えたこともない。同僚女性も、偽善的な慰撫さより、人

間的な声を心から歓迎するようだ。

* ガルブレイスは学生新聞に懺悔の手紙を送った。若き助手時代に、この罪を犯したと告白したのだ。その接近した女子学生をほとんどなく妻に聚り、今日まで一緒に生活している。

ここでは、このテーマを詳細に扱うのではなく、教育や研究にかかわる倫理的な諸問題を考えてみたい。

今日では、理論的基礎研究、実践的な応用を目的とした研究、研究成果のビジネスへの利用が、密接に係わり合っている。純粋な学問的関心で利他的に行われる科学研究がどこで終わり、物的利益を動機とする仕事はどこから始まるのか。ハーヴァード大学はこの問題を曖昧に回避しようとはしない*。ビジネス界から獲得される委託研究は、研究活動の重要な資金源泉になっている。したがって、現実的に明瞭な規則を取り決め、法的に許容されるあるいは禁止される行為を線引きして、倫理的に容認できるものが何で、容認できないものが何かを明確にしなければならぬ。

* 教授から構成される委員会が設置され、ハーヴァード大学の高級管理者が委員長を務め、問題について詳細な報告を準備し、大学とビジネス界との関係、協力関係の整備、起り得る利益相反

の解決原理について、具体的な提案を行う。

大学では二種類の対立状態が区別される。利益の相反 (conflict of interest) と委任の相反 (conflict of commitment) である。大学教員あるいは大学によって委任された職員は、大学の物的利益を守る倫理的な義務がある (私企業のために金銭的な報酬を受け取って行う研究で、大学への見返りサービスがないものは、大学の実験室の設備を利用してはならない)。並行的に二種類の課題を請け負った場合 (たとえば、大学の業務の他に、私的契約で私企業のために仕事を行う)、大学の義務を犠牲にしてはならない。

アメリカの諜報機関や特務機関が、大学人に研究を委託することがある。映画のようなスパイが事務所に忍び込み、軍事機密を盗むというのではない。経済学者の事例で言えば、CIA がソ連のGDPの推計をアメリカの専門家に委託していることは周知の事実である。ソ連の統計が信頼性に欠けるからである。これは真面目な学問的課題であり、自国のために政治的な義務感を感じるアメリカの経済学者なら、この種の委託を引き受けることに何の問題も感じないだろう。他方、大学の同僚が諜報機関のために活動するなら、大学の独立性や政治的中立性はどうなるのだろうか。はたして、大学人はその研究成果に対して、軍や諜報機関から秘密の資金的援助を得ることが許容されるの

だろうか。このような行為が、国内外でどのような政治的攻撃に晒されるのだろうか。

大学はこの問題を分析し、次のような規則を定めた。大学のキャンパス内では、「秘密」とみなされる研究を行ってはならない。コンサルタントとして行う仕事については、それぞれが自己の良心に従って、自らの名前でやっている研究に軍や諜報機関の資金的援助を受けるか否かを決める。そして、これを公表することが義務である。たとえば、研究成果が出版される場合、その仕事は国防省やCIAの資金援助にもつづくものであることを明記しなければならない。

どんなにバランスに配慮し、慎重に考慮し、かつ規定や規則を細かくしても、正否の境界には必ず穴がある。このために、ハーヴァード大学は種々の倫理委員会を設置している。ハーヴァードの教員や職員は自発的に委員会から意見を求めることができる。あるいは、より簡単に、委員の意見を求めることができる。^{*}倫理的観点から問題があると判断したケースがあれば、委員会は調査を開始することができる。

^{*} 一度だけ、私が意見を求めたことがある。ある学生からプレゼントをもらったが、それを受け取ってよいか自信がなかった。プレゼントはシンボリックなもので、物的な価値も大きくなく、さらに学生の試験は済んでいるので、返却して学生の感情を逆なで

するより、そのまま受け取ってよいということだった。

インサイダー情報によれば、ハーヴァード（他の有名大学）でも倫理的観点から問題のあるケースがあったようだ。研究や教育の倫理的純粋性を守る制度的仕組みに問題がないとは言わない。まだやるべきこともある。ただ、はっきり言えることは、何か疑念を抱かせる事件があれば、私が関係していた大学人たちは、それを曖昧なまま不問にすることはない。公開の席や私的な会話で何度も聞かされたことだが、ハーヴァード大学ではすべての同僚が倫理的に振舞うことが、無条件で期待されている。

第17章 ハンガリーの内と外（一九八五年）

ハーヴァード大学の教授指名に際しては、当然のことながら、すべてのエネルギーを大学に注ぐことが前提されていた。私が就任した後も、繰り返しこの希望が述べられた。アメリカの国籍を取得したいなら、大学はそれを全面的に支持することが表明されたし、そこまで望まないなら、少なくとも「グリーン・カード」を取得するように求められた。しかし、この双方とも断った。すでに指摘したように、私の時間の半分をハンガリーで過ごすことが、交渉でもっともこだわった点だった。

どうしてだろうか。そのことを記したい。

ハンガリーに繋げるもの

すでに本書で何度か約束したように、ここで亡命・移住の問題に立ち戻る。一九五六年革命の弾圧に続く亡命の波の中で、私は祖国に残った。ケンブリッジ大学とプリンストン大学から

の招聘も、国を去ることを意味したので断った。そして、一九八五年にハーヴァード大学（や招聘を提案してくれたいくつかの大学）と交渉した折、移民の可能性には否定的に回答した（本章のサブタイトルが一九八五年になっているのは、この問題が切迫した決断を要するものとして日程に上ったからである）。家族の問題を理由にすることはできなかった。すでに三名の子供は自立しており、一人がハンガリー、もう一人がスウェーデン、三人目がアメリカに住んでいた*。彼らの子供（我々の孫）七名も、三つの違う国に住んでいる。どちらかの子供や家族の近くに住めば、他の家族から離れることになる。我々の選択を決めたのは別の要因である。

* 息子のガールは経済学を学んだが、実際には大学よりも、実社会に出て会社設立や会社経営を学んだと言える。情報関連会社を経営しながら、自由な時間にペーチ大学で経営学を教えている。

娘のユディットはブダペストの経済大学を卒業し、現在、ストックホルム経済大学ビジネス・スクールのプログラム・マネージャーとして、社会人教育に従事している。息子のアンドラーシュだけが完全に経済の世界から離れている。数学と言語学の PhD を取得し、アメリカでインターネット関連の開発研究を行っている。ブダペストに戻った時は、教員として工科大学の PhD 生を指導している。三人の子供すべてがしっかりと働き、自立していることが、親としての誇りであり、喜びでもある。

この決断を何度も妻と話し合った。最終的な結論だけでなく、それに至る過程で意見の一致を図った。しかし、本書では一人称複数形ではなく、私個人の決断として叙述する。私自身の思考や内的世界に生じた出来事として、これを伝えたいからだ。

数え切れない感性の糸で祖国と結び付いている。外国から戻り、鎖橋やエリザベート橋を車で渡り、ブダペストの光景を目にする時、言いようのない感情に襲われる。アラニー・ヤーノシュ、ヨーゼフ・アッティラ等の詩人の著作やカリンテイの作品は二セットずつあって、一冊をブダペスト、もう一冊をアメリカにおいていた。ハーヴァードの研究室の壁には、バルトークの肖像を掛けていた。

ハンガリー語で考える。英語の講演では文章を読み上げずに、自由に話すようにしている。英語で概念化することは難しくないが、ハンガリー語で書く方が良い。著作の出版前には、プロ

の翻訳家にハンガリー語からの翻訳を依頼する。ハンガリー語で数え、ハンガリー語で夢を見る。もつとも、夢を思い出すのは難しいが。

ハンガリー民族が好きだと言うのは意味がない。自らの哲学や感性からして、いかなる人間集団に対しても、どんな形であれ一般的な見解を述べるのは空恐ろしいことだ。ハンガリー人の中にも私が好きな人もいれば、とくに何も感じない中立的な人もいる。あるいは、軽蔑したり、腹を立てたり、その罪を許したいと思う人もいる。アメリカ人に対しても、ドイツ人、イスラエル人に対しても、これは同じである。ハンガリーにも外国にも、親しい友人がいる。ただ、「暗黙の了解」で過去のすべてを語れる友人は、ハンガリーにしかない。

ハンガリーの国の命運そのものが、私にとって興味深い。他国のそれより、ハンガリーの歴史を良く知っている。物事を意識するようになって以来、この国に起きていることが私を興奮させた。アメリカに丸一年滞在している時でも、この国に起きていることを「外から」(共感をもって)注視していた。もちろん、アメリカにもハンガリーの新聞が届いていたし、インターネットが使えるようになってからは、継続的にハンガリーのニュースを追っていた。まさに、ハンガリーに起きていることが、「内部から」見られるようになった。

どんなタイプであれ、民族的優位性を語ることは、私にとつ

て異質なものだ。だが、サボー・イシュトヴァーンの映画がオスカー賞を受賞したり、ハンガリーのスポーツ選手がオリンピックのメダルを取ったり、ネーメット・ラーソロの戯曲「ガリレオ」について私が友人に語る事ができたり、ノイマン、ヴィグナー、フェルナーが学んだ学校の話が話題になったり、*New York Times* にエニエディ・イルディコの映画「私の二〇世紀」(My 20th Century) やシフ・アンドラーシユのコンサートなどの批評が載ったりする度に、特別な快い感情が湧いてくる。また、アメリカであれ中国であれ、あるいはソ連であれ、社会主義に関する国際会議でハンガリーの経済学者のパイオニア的役割が讃えられる時には、悪い気がしない。

「ここで生き、ここで死ななければならない」というようなウェットで大時代的な意識はない。経済学者のドライな表現で言えば、自分に課した要件に対する首尾一貫性なのである。この点については、別の文脈の中ですでに触れた。何年間も旅行が許可されず、旅行しようとする度に出国許可の「窓」を申請しなければならなかった時も、ハンガリーのパスポートを保持することに決めた。旅行が簡単になった時代に、パスポートを変える必要などあるだろうか。ハンガリー国籍に伴う不利な差別を承知の上で、自由を制限された抑圧の時代にハンガリーに留まることを選択した。古い体制が緩み、ほどなく崩壊するという時に、国を出る必要があるだろうか。

私の決断を説明する理由のうち、感性的な紐帯が一番強いと言える。しかし、専門的な熟慮が亡命を否定する決断を支持したことも、付け加えておく必要がある。社会主義体制やポスト社会主義的過渡期の研究を専門にしてきた。西側でも多くの研究者がこのテーマを扱っている。私の著作が特別な信頼性を与えているとすれば、それは最初の著書から最後の論文に至るまで、そこに生き、自らの眼で見て、そこで起きた事件に身を委ねた人物の著作だということである。私の研究の多くは、一般的なテーマを扱っているが、常にハンガリーの事例に依拠している。多くの論文のタイトルも、これを表現している。主タイトルで研究の一般的対象を掲げ、サブタイトルで「ハンガリーの経験をもとにして」という表現を使っている。このことで、私の分析が部分的で地方的なものとみなされたことはない。適切な比較対照可能な事実発見と広範な知識をもとに、部分的観察を基礎に一般的なものを獲得することが、私に課せられた課題だと考えてきた。

どこで生きるかは、個人の主権が決めるものだ。私の価値体系では、ハンガリーに生まれた人が人生の過程で移住を決断することは、倫理的に受容できるものだ。種々の理由があると思う。迫害からの亡命、社会環境への失望、あるいは単純に他の国でより幸せになれると考える。

政治問題にかかわった知識人の場合であれば、亡命は政治的

な抗議を表現している。コシュート・ライオシュ、カーロイ・ミハイ、ヤースイ・オスカル、バルトック・ペーラ、さらには一九四五年以後の多くの民主主義者が、政治的に亡命した。これは多くの犠牲を伴うもので、彼らの英雄的な意思表示でもあった。これらの生き方が、国内に留まる決断よりも、倫理的に低いものだと思わないし、より高いものだとも思わない。抑圧的なレジームと対峙している者は、出国することだけがその意思を表現できる道だと考えるだろうか。この思考に従えば、国内に留まることそれ自身が、臆病を証明することになる。私はこのような見方を受け容れない。亡命することが身を隠し、国内に残ることが背筋を伸ばして生きることになる場合もある。もし人の人生の選択に倫理的評価を加えようというなら、生きる国の選択で評価するという単純な方法を取るのではなく、実際の行動を吟味する必要がある。

日常生活の比較…ケンブリッジとブダペスト

半年をここで、半年をあそこという往来生活は、恒常的な比較対照を強いるものである。あそこはここより何が良くて何が悪い、あるいは単純に違うものは何だろうか、と。「アメリカ」を「ハンガリー」あるいは「東欧」と比較対照したのではない。この二種類の世界の巨大な現象の集合から、私が体験し

たものはその一片に過ぎない。ここで二つの体制や二種類の文化を比較しようというのではない。多くの著書がこれを扱っているし、私もいくつか記している。ここでは、いくつかの個人的な記憶や印象を伝えておきたい。ある集まりで、アメリカで気に入らない現象を三つ、気に入った現象を三つ述べよという機会があった。これがちょうど良い枠組みだろうか。

アメリカ人の顔には微笑があった。何か強制的な keep smiling というのではなく、多くの場合、心から湧き出る快活さなのだ。大学教授や学生、店員やウェイター、朝のテレビ番組のレポーターやインタヴューアの笑顔が自然なのだ。彼らにもいろいろな問題があるだろうが、会った人に不快なことを植え付けられないようにしている。私の最初のアメリカ人秘書だったマゼリン・ラヴァソールは、初めは重病の母を抱え、後には死と闘う夫を看病する自己犠牲を払っていた。簡単な人生ではなかった。にもかかわらず、私が部屋に入ると、いつも笑顔で迎えた。にもかかわらず、私が部屋に入ると、いつも笑顔で迎えた。不満の様子が顔に表れなかった。別の学科の秘書は若い美人だったが、癌の手術を終え、術後の治療で髪が抜け落ちていた。いつも冗談を言い、鬢かみや新しい帽子を笑いながら見せて、顔色に似合うかしらなどと尋ねていた。

外国から戻る度に、いつも不平・不満が襲ってきた。どれももつともなのだが、このような場合、事の深刻さが問題なのではなく、それにどう向き合うかが大切なのだ。まだ往来旅行を

始めて間もない頃だ。ブダペストに戻り、「どう元気かい」という問いかけに、笑顔で「良いよ」と答えた。「本当かい。そうだよな、アメリカで生活しているから、君は楽だよな」と聞き返してきたものだ。それからは、慎重に答えるようになった。いくつか不満を並べることにした。そうしたら、すぐに波長が合った。

我々と付き合いのあった人々は、誠実で潔白だった。ここで、社会や国の権力の不正や腐敗、あるいは政治的虚偽の頻度を比較しようというのではない。生活の些細なことを考えている。店で支払いをしたら、お釣りをきちんと返してくれるか。業者が水曜日の朝九時に来ると約束したら、本当に水曜日の朝九時に現れるか。電話の番号案内が正確な電話番号を伝えてくれるか。留守番電話にコールバックのメッセージを入れたら、本当に電話がかかってくるか。人々の正確さや言葉の信用性は、ブダペストよりケンブリッジの方がはるかに高かった。

東欧よりも狭い領域だとは言え、アメリカにも「灰色」経済がある。それに会った時も、ブダペストよりも、はるかに「真つ当」なルールで機能している。引越した時に、いわゆる「便利屋」が必要になった。壁に穴を空けたり、コネクターの位置を変えたり、本棚を組み立てたりするために。ステイヴが仕事を終えてやってきて、カーテンの取り付け以外の仕事をすべてこなしてくれた。彼は昼間、カーテンを作る会社で働

いているので、自分の会社の仕事を「灰色経済」活動で行うことは正しくないと感じたようだ。

人々のプロ意識や労働意識はきわめて印象的だった。どのような活動領域であろうと、またどのレベルの人とコンタクトを取ろうと、自らの仕事を理解し、良心的に仕事を実行するという姿勢を感じ取らせる態度で接してくれた。それは Primary Care Physician (ハンガリーの地区医師に相当) のように、日々の学問的進歩を追跡し、処方や医薬に関する定見の変化を注視しているような高学歴の専門家だけのことではない。ピデオカメラの修理技術者、自動車修理工、塗装工なども、少なくとも我々の印象では、ハンガリーよりもはるかに技術力があり、労働への集中度も高かった。職場でのお喋りや息抜きもハンガリーより少ない。だから、我々には「働きのアメリカ人」というイメージが作られた。もちろん、アメリカにもこのようなタイプに入らない人もいるし、ハンガリーにも有能な働き者がいる。その数も増えている。だが、アメリカの方が多いと言っても間違っているとは思わない。これこそ、アメリカの成長、高い生産性の重要な源泉のひとつだと思う。

さて、これから三つの否定的な経験を記してみよう。まず、多くの問題にぶつかった言葉のことから始めよう。もちろん、感嘆するような英語表現ができる訳ではない。非英語圏で育ち成人した者にとって、発音や豊富な語彙を習得するのは不可能

なことだ。明らかに、私の語学力に問題があった。最初の年に犯した過ちを二つだけ記したい。ボストンの運転免許取得の法令試験で、いろいろな標識が示され、その意味を言わなければならなかった。No hitchhikingの標識を即座にNo hijackingと言ってしまった。担当警官は大笑いしたのだが、免許はもらえた。ある講義で在庫の話をしていた。warehouseを三度もwhorehouse(売春宿)とやったので、さすがに学生から笑いが漏れた。後になって言葉の能力も向上したが、日本人学生や中国人学生の変な英語を推量したり、電話の早口の情報を理解したりするのに、滞在の最後の日まで苦労した。

二番目はこれより深刻な問題だ。独特な偏狭(辺境)主義が公衆の思考を貫いているのが気になった。もちろん、巨大な「辺境」、アメリカのことである。アメリカ合衆国が世界の政治・経済・科学で果たしている役割に比して、アメリカ人は非常に内向きなのだ。この現象を説明するのにちょうど良い手段は、世論形成に大きな影響力をもっている三大テレビネットワークが放映する夕方のニュースの分析である。まず、アメリカに関係しないニュースが流されることは稀である。特派員が外国の出来事を報告する場合も、きまってアメリカとの関係があつてのことだ。ヨーロッパや小国ははるかに外の世界に開かれている。

最後に、もうひとつ特徴的な現象だが、アメリカ人は根っか

らの楽観主義と行動に対する確信をもっている。これは私にとって、ややアンビヴァレントな感情を抱かせる。自然災害がある地域を襲い、人々の注意を喚起する場合、多くの人は大騒ぎしないし、国の介入や支援を要求しない。それとは反対に、「いずれ何とか克服するよ。……いずれ解決するさ。……最初からやり直せば良い」という声を聞く。しかも、何を為すべきかを語り始める。「自助努力」型の態度は、問題に向き合う態度で、見習うべきものだと思う。

ただ、この行動主義はナイーブさや複雑な状況の過小評価を伴うことが多い。アメリカ人が問題を見つけると、まずそれが解決可能だと考える。解決方法がないような問題の存在を、考えることができないのだ。問題を処理する提案をすぐに要求する。残念ながら、このような提案は状況の過度な単純化にもとづいていて、プリミティブな解決法になつているのだ。

この急進行動主義は驚嘆を生むことがある。ヨーロッパのハムレットやオプロモフが躊躇したり、不変性に安住したりするところで、アメリカ人が軍事力を行使する。他方、不意の思慮に欠けた行動が、誤った道に導くことがある。共産主義制度が崩壊した後、アメリカ人顧問たちは即座に何を為すべきかを理解し、すべての地域に同じ解決方法を提示したのを思い出す。それが良かった所もあれば、破滅的な結果をもたらした所もある。

世界文化のひとつの中心

ハンガリーの俗流的な知識人が、アメリカ人の幼稚さや文化的後進性を蔑んで語るのには、大きな誤解だと感じる。もちろん、教養のない粗野なアメリカ人はいる。それはハンガリーやヨーロッパでも同じことだ。ただ幸運にも、私が加わった社会は、世界の学問と文化の中心のひとつになっている町だ。ボストンとその郊外には七つの大学がある。ひとつの通り、マサチューセッツ・アヴェニューには世界を代表する二つの大学、ハーヴァード大学とそこから徒歩で一〇分ほど離れたMITがある。世界の多くの場所で偉大な研究者と出会うことができるだろう。だが、このボストンこそ、思考や能力、文化的教養の比類ないセンターだと言っても間違いではないだろう。

ゴッホ、ゴッギャン、ベックマン、クリムトやハンガリー人画家のモホイ・ナジの絵があるような美術館があれば、我々が望むところだ。ところが、ボストンの美術館に行かなくても、ハーヴァードの美術館でこれらの絵画が見られるのだ。

地下鉄に乗って数分行けば、スインプォニー・ホールへ到着する。そこでは、世界のオーケストラのひとつ、ボストン交響楽団を聴くことができる。素晴らしい演奏を何度聴いたか分からない。アメリカに來た音楽家がボストンへ招かれることが、

ひとつのプレステイジを意味する。このほかに、我々が利用した二つのコンサートホールがある。壁を木材で囲んだ柔らかい響きのするジョーダンホール、それからハーヴァードの大教室であるサンダースホールがそれである。ブダペストのリスト音楽院大ホールのように、何年も足繁く通うと、聴衆の中に知り合いの顔が増えてくる。

映画も良く観た。ビデオレンタルの選択肢が大きいとは言っても、これで映画鑑賞を代替することはできない（封切り映画を即座に観られることが嬉しかった。今ではブダペストでもほぼ同時に新作を観られるようになった）。ブダペストでは上映されるのがなかった映画で、大きな感動を与えたものがある。ひとつはチェーホフの「ワーニャ伯父」を魔術的に仕上げた *Vanya on 42nd Street*（日本公開タイトル「四十二目のワーニャ」）で、もうひとつがピアノの天才を扱った *Thirty Two Short Films about Glenn Gould*（日本公開タイトル「グレン・グールドをめぐる三二章」）である。

そして、書物だ。我が家から数分のハーヴァード・スクウェアに、三軒の大きな書店がある。無数の書物が並んでいる。いつも学生と外からやって来た人でいっぱいだ。夜中も開いている。スウェーデンの孫たちがここにやって来た時など、この書店に駆け込んだものだ。新刊が出ると、批評が載っている裏表紙を返して手にする。もっと信頼できる案内が欲しければ、

New York Times 紙の日曜別冊を待ち、その書評欄を見る。さらに、世界の書評誌として定評のある New York Review of Books もある。これらの書評で評価されたものがあれば、書店に向かった。

ボストンが提供するもので足りなければ、それほど遠くないニューヨークやワシントンがある。半年の滞在中、このどちらかの都市には必ず足を運んだものだ。ボストンに加えて、この二つの都市が提供する音楽会、オペラ、劇場、美術館を考慮すれば、その選択は無限になる。だから、いつも何かを見損なっていた、聞き損なったと感じたものだ。

友人たち

友情は私の生存条件でもある。感情の度合い、率直さの程度、会う頻度によって、種々の友人関係が形成される。こうやって、友人と知人の境界線を引くこともできる。いかなる関係であっても、周辺に近しい人々がいるのは楽しいことだ。

何度も触れたことだが、同僚たちと友人関係になることが、職場の環境を明るくする。この面で、ハーヴァードの環境は非常に恵まれていた。私の秘書たちは、皆、明るく優しかった。最初の秘書のマデリンについてはすでに触れた。ケート・ピルソンとはその日の仕事を話し合うだけでなく、政治的な事件、

映画、文学作品などについても会話した。ローレン・ラローズは自分の詩歌をまとめた小冊子を手渡ししてくれた。信頼感の現れだと感じた。もう何年も会っていないが、三人に手紙を書いて、電話してみようと思う。

私は上司という立場に立ったことはないが、いろいろなところで「研究助手」が仕事を助けてくれた。とくに感謝しているのが、一九八五―一九九七年の期間、私を助けてくれたコヴァーチ・マリアである。ライク・コレギウム生としてブダペストの経済大学を卒業し、フルタイムで私の所で働いてくれた。データ収集、手書き原稿の整理、手紙、渉外的事項、著作の管理など、すべてにおいて私を助けてくれた。私の仕事を隅々まで熟知していて、何をすべきかいつも分かっていたから、指示する必要もなかった。ハーヴァードの仕事が始まってから、マリアは私と一緒に往來することを引き受けてくれた。アメリカへ行くときは、彼女も我々と一緒だった。

マリアに代わって初めはベネディクト・アグネシュが、次にはヴァルガ・ヤーノシュがアグネシュを引き継いだ。彼らもマリアと同じく、ブダペストとハーヴァードを往來した。最初の約束では二年ずつということだったが、それぞれ自発的に一年ずつ延長してくれた。

これら三名の若者は私の部下ではなく、優しい友人であり、妻と共に自分たちの子供や孫のように思ったものだ（年関係で

言えば、子供と孫の中間)。何か問題があれば、喜んで手助けし、大学の外でもしばしば会って、妻のジュジャの手料理をご馳走した。

PU生だった学生だけでなく、助手として私の研究や著作の手助けをしてくれた教え子たちとは、教師・学生の関係が友人関係に変わった。セレーニィ・アンナ、インイー・チェン、チェンガン・シュー、カーラ・クルーガー、ジェーン・プロコプ、アレクサンダー・ヴァクロフ、カレン・エゲルソン、ジョン・マクヘールの面々は、著作の謝辞や共同執筆者として名前を載せているだけではない。私の記憶の中に収められている。大学を離れて、家族としても顔を合わせていた。彼らも私もハーヴァードを離れてから、ほとんど会わない人や、頻繁に会っている人などいろいろだが、彼らとの関係は今も生きている。家事の手伝いが必要だった。立ち木に貼り付けられていた広告を見て電話した。しばらく経って、一人の清楚な女性、スーザン・リュアン・ヴォルマーが現れた。カレッジを卒業して間がなく、小さな記事や詩を書いているという。作家になる野望があり、家事労働で生活の糧を稼いでいる。条件が折り合い、それから我が家に来ることになった。仲良くなった頃には、「学業を止めないで、もう一度大学へ通つたらどうか」と説得したものだ。実際にそうなった。上級の新聞記者養成コースに参加し、後に小さな新聞社で職を得て、次にポストンの大手の

新聞社に移り、今はその編集次長になっている。

我が家に通ってしばらく経たある日、友人と一緒に家事の仕事をして良いかと尋ねてきた。それからは、小さな住まいを二人の女性が清掃することになった。スーザンの共同生活者リンダ・クロトーは中学校の先生である。彼らの忠誠心は最後まで続いた。スーザンのキャリアが上つても、またリンダの仕事の都合がつかなくなった時も、我々を助けようという友情的精神で家事を手伝ってくれた。二人とも良く働き、正確で効率的だった。^{*}休憩時には、政治の新しい事件や最近読んだ書物などを話し合った。私は英語の概念化や表現が難しい時には、スーザンやリンダに修正の手助けを求めた。スーザンに子供ができたと報告してきた時には、家族のように嬉しかった。アメリカを離れてから、電話で二人目の子供ができたことを知った。

^{*} ハーヴァード大学が退職を記念するディナーを用意してくれた時に、スーザンとリンダを招待した。大きな丸テーブルに参加者が座り、お互いに隣の席の人と紹介し合った。スーザンの両隣には大学教授が座った。職業を紹介する段になって、彼女たちは「私たちはコルナイ・ヤーン・シュの掃除婦です」と答えた。いかにリベラルなハーヴァードといえども、掃除婦が教授の記念ディナーに出席することはないので、隣の教授に少なからぬ驚きを与えた。もつとも、そのすぐ後に、教授の両隣が編集者と教師であることが分かったのだが。

水泳プールでのことだが、妻のジュジャが白髪でスポーツ選手の体形をもった美しい女性と会話するようになった。最初は何気ないその場限りの知人だったが、やがて友人関係を結ぶようになった。ミミ・ベルリンはハーヴァードの夜間大学でロシア史を教えており、ゲリー・ベルリンは第一級の弁護士で、アマチュアのクラリネット奏者でもあり、かつて人権闘争に加わった経歴をもつ。この夫婦が親しい友人になった。ヨーロッパからケンブリッジに到着した最初の夜は、彼らの所で夕食を取るのが慣例になった。ヨーロッパへ発つ時も、最後の夜は彼らの所で過ごした。ミミはいつも美味なご馳走でケンブリッジからの送別会を開いてくれた。嬉しいことに、我々がアメリカを離れた後も、ブダペストで会うことができた。

ロバートとボビー・ソローとは数え切れない素晴らしい夜を過ごした。何度も一緒に音楽会に出かけた。経済学者なら、ソローの経済学が何であるか誰でも知っている。彼の講義を聴くのはとても魅力的なことだ。^{*}難しく複雑な思考を、これほど透明に表現出来る人を知らない。無駄な冗長さがなく、輝くような精神性とユーモアで味付けされた講義なのだ。ダイナーのテーブルでも同様に、傑出した知性を享受することができる。それだけでなく、人間的な注意力、関心、友人に向けられた手助けの姿勢も享受できるのである。

^{*} 一九七二年にどの大学に進学しようかと迷っていた娘のユーディットは、最初のアメリカの会議に付いてきて、ロバート・ソローの講演を聴いた。この専門分野がこれほど面白いものならやりがいがあると考え、ブダペストの経済大学に入学した。後になって失望しなければならなかった。経済学の講師陣は、ソローだけで構成されている訳ではない。

友人の多くは大学の同僚たちである。その後、この世を去ってしまったツヴィ・グリリヒェスと夫人のダイアナ、デイルとリンダ・ジョルゲンソン、同胞のフランシス・バートル（バートル・フェリ）、ラエ・ルーズベルト、アマールティア・セン、エンマ・ロスチャイルド、ロバートとナンシー・ドーフマン、フランクとマヒルダ・ホルツマン、ロバート・シュルツマンと夫人のフエイエシユ・ユーディット。まだまだ、列挙することができる。

アメリカで流行している社交の形態に、パーティーがある。多くの人が集まって、長時間立つたまま、コップを片手に、あちこちで会話の花を咲かせる。この立ち話の後に、「テーブルに座る」ダイナーが待っている。皆が順に席に座り、両隣（多くの場合、見知らぬ人）と、一、二時間ほど会話する。隣人に恵まれなければ、詰まらぬ話で最後まで付き合わなければならぬ。

私たちはアメリカ滞在中、一度もこのようなパーティを開かなかったと、誇りをもって言える。この種のパーティに招かれた場合には、可能な限り、失礼にならない範囲で避けるようにした。我々が好むのは、ホストの他に、二、三組の客人がいるような集まりだ。そこにはただひとつの会話のグループが出来る。五分ごとにひとつのテーマから別のテーマに話がるのではなく、何かが話題になり、それが真面目な議論になれば、それを集中的に話し合う。

私には「お喋り」というのが、気に障る。誰かがこう説明したことがある。アメリカの知識人社会では、社交の場で専門的な問題を会話することが場に合わない。専門家でない出席者に失礼にあたるからというのだ。ある時に、三組の夫婦が我が家の客人になった。そのうちの二人は著名な経済学者、もう一人も著名な政治学者だった。彼らに招待された返礼に、この場を設けた。これほど傑出した人物を迎えることが嬉しかった。ところが、皆、専門的な問題を避けてしまったので、取り留めのない会話が最後まで続くことになった。ここから教訓を学んで、以後は会話を誘導するように、適時的な話題や主張を交えて、知的に高揚できて、何かを学べるような会話が成立するように努めた。それからは、友人たちも我々が求めている社交の意味を感じ取り、我々の要求を尊重してくれた。パーティからは遠ざかったが、その代わりに小人数で親密な会話が楽しめる集ま

りに、我々を招待してくれるようになった。ケンブリッジで我々がもっとも享受したもののランキングを作らなければならぬとしたら、輝くような精神的な喜びを与えてくれた多彩で多方面な、多様で幅広い友人関係が第一位になるだろう。

我が家に来ると美味しいものにありつけるので、客人は皆、勇んで来た。ジュジャが作ったケーキの噂はケンブリッジに広がり、遠い知人までが何時になったら招待を受けるのか尋ねたものだ。彼らもアーモンドケーキにありつきたいというのだ。

ハーヴァード・フアカルティ・クラブも、落ち着く所のひとつだった。毎週一、二度は、同僚か訪問者と一緒に昼食をとった。西側の大学世界で一生を過ごした者なら、そのことはとくに珍しいものではないだろう。しかし、私はそこで初めて、このような会合の形に慣れ親しむことになった。デイナー・テーブルで親密な知的な会話を交わす。最初は共通の専門の問題について話し、それからあらゆることに話題が広がっていく。政治や文化、それから個人的な事柄にまで。

新しいアメリカの友人たちと緊密な関係を築いてもなお、この関係には何か欠けていた。それは共通の過去だ。時が経つにつれ、ハンガリーの友人たちとの関係が狭まった。我々から遠のいた者、我々が距離をとった者など、我々が精神的に遠ざかった故に、あるいは我々の思考が別の方向に向かい、別の生活行動が始まった故かもしれない。友人関係は、試験紙を通過

した。歴史は、誠実・忠誠・人格の厳しい試験官だ。この試験紙を通り越した友人関係は、強いものに鍛えられた。この強さというのは、後になって結ばれた友人たちの感性的な強さとは比較にならないほど強いのだ。

アメリカの集まりで、共産主義の抑圧がどんなものかが話題になった時に、友人たちはマツカカーシー時代を取り上げた。このような時にいつも考える。ラーコシ時代の抑圧で何百人もの人が虐待され職場を追われた。一九五七—一九五八年には容赦ない拷問が加えられ、革命の一〇日間を理由にこの小国で二二九名が死刑判決を受けて殺され、数千の人が獄中に繋がれた。これらのことを比較できるのだろうか。全体主義体制がどのようなものか、分かっているのだろうか。自由に慣れ親しんだ社会にとつて、その権利の組織的な剝奪が何を意味するのかわかを感じ取ることができないことは、彼らも分かっている。彼らも我々も、合理的な思考や歴史の知識をもとに、他者がどう感じ取るかを把握しようとする。しかし、そうやっても、個々人が自らの皮膚を通して生き延び、彼にとつて抑圧が何を意味し、彼の周りで生きた人々にとつて抑圧が何を意味したかを理解することはできない。

同じことはホロコーストについても言える。ユダヤ人であろうと非ユダヤ人であろうと、すべての友人は地獄のような恐怖を感じ取れるし、断罪できる。でも、誰一人として、自らの衣

服に黄色のリボンを付けたことがないのだ。多くのアメリカ人がユダヤ人の運命について、我々よりも多くのことを扱っている。ここでも、感情移入、倫理的責任感や連帯は、個人的に体験してきたトラウマとは別物なのである。

困難な運命の共通の体験。これはハンガリーの友人たちとだけに取り結ぶことができる紐帯のようなものだ。長い留守の後、ハンガリーに戻ってくると、友人たちの声を聞きたくてむずむずする。目まぐるしく展開した諸事件をくぐり抜け、後のカール体制の弱体化とソ連圏崩壊の前兆を、喜怒哀楽を共にして生き延びてきた。ケンブリッジだけでなく、ブダペストでもパーティが流行し、「知識人サロン」が開かれてきた。ここでも狭いグループの集まりで、信頼できる仲間内で交わされる知的な会話が好きだ。ハナーク・ピーテルとカティ、リュウチエイ・パールとケンデ・エヴァ、ナジ・アンドラーシュとロシオンツイ・アーングネシュ。彼らが集まってきて、長い会話が交わされる。^{*} リトヴァーンたちとは我が家で会うだけでなく、ノルマファと一緒に散策したりする。かつての同僚や教え子たちとも一緒にいるのが楽しい。ラキ・ミハイ、フアルカシユ・カティ、パウエル・タマーシュ、ガーチ・ヤーノシュ、ラツコー・マリア、シモノヴィツチ・アンドラーシュ、カピターニイ・ジュジャたちである。ケンブリッジのクラブの昼食に做つて、ブダペストのレストランで、*Sabud Nép* 紙編集局時

代に知り合ったチャトー・エーヴァや『不足』の翻訳者だったルカーチ・イロナ、あるいはソフトな予算制約の実証研究を一緒に行ったマティツチ・アーギと会う。彼女たちとは仕事を通して知り合ったが、以後、友人関係が続いている。ここハンガリーの友人仲間から、アメリカの友人関係で埋め合わせる事ができないものを獲得できる。

* ケンデ・ピーテルと夫人のケンデ・B・ハンナと会うのは、いつも特別な出会いになる。ピーテルは体制転換まで、ブダペストに戻る事ができなかったため、私の外国旅行の機会を捉えて、なんとか会えるように工夫した。

ヨーロッパと世界の経済学者の共同体

一九八三年のプリンストン滞在から勘定して、生活の半分をアメリカで過ごしたことになる。しかし、私は半分もアメリカ的になっていない。世界の他の地域とも結ばれているし、他の国の人々とも結ばれている。

国境を越えた責任感を認識したのはかなり以前のことになる。一九七二年、ティンバーゲンの提案で、国連開発計画委員会の副議長に任命された。一九七七年までこの仕事をこなした。インド、メキシコ、フランス、ソ連、オランダ、ポーランドの経

済学者と一緒に、発展途上国の経済政策にどのような提案ができるか、国連のほかの機関に対してどのような提案を提出できるかを考えた。

この後、数理経済学の国際的組織である国際計量経済学会の仕事を引き受けた。最初は執行委員会のメンバーに選出され、次いで一九七八年に会長に任命された*。会長として、一般的課題の遂行とともに、社会主義国の経済学者が会議に出席し、西側の経済学の潮流と関係を取り結ぶことができるようにすることが、私の特別な課題だと考えた。

* 国際計量経済学会では二段階で選出される。まず、多くの候補の中から、「将来の会長」とある *President Elect* を選出する。この肩書きで一年間積極的に学会の活動に加わり、学会の課題を知る。次の年に、唯一の会長候補として投票用紙に名前が掲載される。

この学会以外でも、国際会議への参加や客員研究員あるいは客員教授に、ハンガリーやソ連、東欧の同僚たちを推薦することを心がけた。

ハーフヴァード時代に、ヨーロッパ経済学会の活動に加わることになった。ベルギーの教授ジャック・ドゥワーズは学問業績のみならず、その社会的活動で知られている人だが、この学会

の設立を呼びかけ、私もそれに加わり、設立メンバーの一人になった。これはまだEU加盟以前の鉄のカーテンが存在する一九八六年のことだ。ドウレーズを初代会長として学会が創設された。二年目の会長に、フランク・ハーンと私の二名が候補に指名された。ハーンとは一九六三年のケンブリッジの会議で知り合った。彼は「我らが不満の冬」(第10章参照)と題して、『反均衡』に厳しい批判を加えた人物である。友人関係にあり、リプターク・タマーシュが亡命する時に、彼の処遇を頼んだことがある。そこで会長選挙だが、通例として候補者に候補を受諾するか否かの打診がある。双方とも受諾し、選挙で私が過半数を獲得した。

国際計量経済学会と同様、ここでも社会主義国の同僚たちが参加できるように努めた。学会の最初の年次総会がウィーンで開催され、そこには未だ西側世界で名を知られていない有望な研究者が多く参加した。当時まだ若かったポーランドの経済学者レスシエク・バルツェロヴィッチは、その後、ポーランドの体制転換の指導的人物になった。社会学者のタチアナ・ザスラフスカヤはソ連の体制の批判的な分析で名を知られるようになり、ヴラジーミル・ドロヒー・ジュニアは体制転換後のチェコの政党指導者になり、大臣を歴任した。

一九八七年の会長報告では、とくに次の点を強調した。「私は社会主義国の市民である。したがって、この学会に東欧の経

済学者が参加することをとくに重要だと考えていることは、理解していただけたと思う」。東欧諸国民がまだ苦闘している独自の問題を列挙し、学会の西側会員の支援を求めた。「東の会員が直面している諸困難を知らないことは、きわめて幸運なことである。西側の知識人がヨーロッパを西欧と同一視していることに、東欧の人々は苦い思いを抱いている。すべての参加者に訴えたい。大陸の境界線をエルベ河で引いてはならない。我々もヨーロッパ人であることを、忘れないで欲しい」。

会長の特権と責任は、年次総会の共通テーマを設定することにある。会長講演と二名の特別講演は、この主要テーマに焦点が当てられる。私は当時、「自由」について語ることが、焦眉の課題だと考えた。私の講演のタイトルは、「個人的自由と社会主義経済の改革」⁽¹⁹⁾であった。記念講演者の一人として招待したアマーティア・センは、「選択の自由とその概念と内容」⁽²⁰⁾をテーマに選び、もう一人の講演者アースー・リンドベックは、「個人的自由と福祉国家政策」⁽²¹⁾を選んだ。

私の講演では、ハンガリーの事例に光を当てながら、分権化、私的所有の拡大、不足現象の軽減、労働市場への官僚的規制の緩和が、経済効率の向上に資するだけでなく、個人的自由や選択の可能性をも広げるものと論じた。そして、社会主義が「最大国家」状態から、国家の役割を削減し、個人的自由を拡大する方向に向かっていることを重要な成果として指摘した。

中国への旅行

一九八五年夏、中国の社会科学院と世界銀行の招待で、妻とともに四週間、中国に滞在した。最初に北京で会議に参加し、そこで国营企業の問題を討議した。これも教訓的だったが、本当に特別な体験はそこから始まった。さまざまな会議に出席したが、ここで経験したことは今までと比較できないものだった。

中国側は七名の外国の経済学者を招待し、中国の現在と将来に対する提案を求めた。ここに参加したのは、イェール大学教授でマクロ経済学の泰斗ジェームズ・トーピン（後にノーベル経済学賞受賞）、ドイツ連銀総裁オトマー・エミンゲル、フランス計画委員会委員長ミッシェル・アルベル、イギリス政府の経済政策を指揮したイギリス労働党経済顧問アレクサンダー・ケアンクロス卿、ユーゴスラヴィアの労働者自主管理の専門家アレクサンダー・バイト、韓国の計画化について著書を著したアメリカの教授レロイ・ジョーンズ、それに私である*。

* 東西の経済学者の会合を組織したのは、当時、世銀の中国代表だったエド・リムである。社会主義国の変革に西側のアドヴァイザーたちが有効な提案を行えるように、いろいろ配慮されていた。中国国内をなんとか説得するために、何か既製の処方を用意

しようということではなかった。さまざまな可能性があることを知らしめようということだった。参加者リストから分かるように、西側や東南アジアの経験だけでなく、東欧改革の思考を知りたかったようだ。

趙紫陽首相がこれら七名の経済学者と同行の中国人経済学者と面会し、二時間にわたって会談が行われた*。どんな問題を抱えているか、招待した外国の学者からどのような回答を期待しているかを述べた。

* 趙紫陽は改革のパイオニアの一人だった。鄧小平は改革の最高指導者だったが、最初の基本改革構想を練り、組織したのは趙紫陽だと考えられている。趙紫陽は一九八九年の天安門広場の学生デモ時に、指導者としてただ一人抗議する群衆の中に入り、学生指導者と会談した。この抗議が弾圧された後、趙紫陽は首相の座を追われ、軟禁状態におかれた。この状態のまま、二〇〇五年一月にその生涯を終えた。

次の日、招待者と中国の経済学者の一団は、飛行機で重慶へ移動させられた。そこで全員が船に乗り、長江下流に向かって、快いテンポで下り始めた。旅行者を感嘆させるような景観の中に入り込み、レストランでは美味な中国料理が振舞われ、甲板ではプールも使えた。もともと、休息やレクリエーションには

あまり時間が使えなかった。

ホストは我々をしつかり働かせるようにした。一人一人の外国からの客人には、半日の時間が割り当てられた。まず、招待者が講演し、次いで中国の専門家が質問する。この座長は国家評議会のメンバーで、中国経済の指導者の一人である張勁夫が担当した。最後まで座に残り、メモを取っていたが、発言した者にはその機会を与え、最後の一言まで発言させていた。何人かの指導的経済学者は何度も専門的な質問をしたが、何か見解を述べる訳ではなく、議論するのでもなく、学びに来たという態度だった。若い人々は質問することを控えたようだ。外国人が帰った後に、相互に議論し、どんな結論が引き出されるかを議論したのだと思う。

当時、中国は改革の第一段階を過ぎていた。彼らは党のラインに従って別の概念を用いて説明するのだろうが、実際問題として、社会主義農業（なかでも、中国が創った「人民公社」）を解体し、農民の抵抗を一掃する運動の成果として、私的所有にもとづく農業の再建を行っていた。そして、生活が一変したのだ。現実が花を咲かせ、食料不足が解消された。農業に関する限り、ハンガリーが達成した地点をはるかに越えていた。生命力のある中国と発展能力のない萎えたソ連のコルホーズとの違いは、誰の目にも明瞭だった。農業改革が成功した今、経済の他の部分で何を為すべきかが、中国の課題だった。

アメリカでこの講演の準備をしていた時に、中国の状況について良く知ることに努めた。とくに、中国がハンガリーに似ているものが何で、似ていないものが何かを明瞭にする必要があった。十億を越える人口の中国と一千万のハンガリーという自明のことだけでなく、中国とハンガリー（東欧）の歴史的背景の違いを明確にする必要があった。私から期待されたものは、ハンガリーの改革から何が学べるか、何を移植する価値があるのか、何を避ける必要があるのかという分析であった。要するに、ハンガリーと中国の改革の状況と可能性における類似性と差異を分析するのが、私の課題だった。

すでに最初の北京の会議で、またその後の中国の経済学者や経済指導者との話し合いで、歴史文化の違いや地理的な距離を超えて、何かハンガリーで議論しているような気分になった。話題になった現象、困難や問題は皆、周知のものばかりだった。我々ハンガリー人が苦勞している同じ問題に取り組んでいた。確かに、アメリカの専門家やドイツの中央銀行指導者からマクロ経済のことについて、興味深いことを学んだと思うが、我々東欧人が彼らの思考の世界をもっと良く理解できたと思う。ハンガリーは一九六八年に中央計画にもとづく指令経済を清算した。にもかかわらず、圧倒的な国家所有にもとづく、共産党が指導する経済制度が機能してきた。官僚メカニズムと市場メカニズムは、大きな摩擦を抱えながら共存できたのだ。この

中途半端な改革を批判的な眼で見ながら、こう考えた。「中国にとつて、指令経済の清算それ自体が、改革過程を推し進める大きな一歩になるだろう」。これは中国の指導者にとくに強調したい教訓だった。これに加え、ハンガリー経済改革の不十分性、「ソフトな予算制約」、価格体系の歪曲などの問題と危険に注意を喚起しなければならなかった。この時期、中国は非常に野心的な長期的成長計画を準備していた。急速な成長のリスク、つまりインフレや経済部門間の不均等な発展を指摘した。中国の思想や文化では調和の精神が重要な役割を果たしていると、中国の参加者に注意を促した。したがって、強制的な急成長より、調和的な成長に努めるべきだと主張した。

通常のヨーロッパやアメリカの経済学会議では、会議室の雰囲気、聴衆の顔や発言を通して、講演が良かったかどうかを推し量ることができる。ところが、この船上会議ではそれができない。座長や参加者の顔からは、何も読めない。成功だったのか、失敗だったのかは、別の指標でしか分からない。休憩時間になって、若い経済学者が多数、私の周りにやって来た。英語はうまくないが、自分たちを分かちせようと、懸命に質問を提起した。さらに、私の著作を出版したいと交渉し出した。このことは後に触れることにして、まだこの船上会議の話が続けよう。

時折、半日の休憩のために、船が停まった。ある河沿いの町

の市場に出かけた。この眼で農業改革の成果を見ることができた。色彩豊かな物資の供給、綺麗な果物、野菜、魚や蟹、亀、肉類の豊富さなどを確認することができた。また、別の日には三峽、中国のもっとも有名な観光コースのひとつへ案内された。ボートに乗って、この自然の景観を堪能した。計画されている巨大な水力発電所の建設で、この地方が水に沈んでしまう。三峽も水面下に沈むということだった。実際、数年後に発電所が建設され、この景観はもう見られなくなった。我々の旅程は武漢で終わり、その大学でひとつ講義をした。

後で分かったことだが、この「船上会議」は中国語で巴山輪（中国のメディアはこう名付けていた）と呼ばれ、中国の経済学者の思考に大きな影響を与えた。中国の経済学者たちは参加者から得たアドヴァイスに度々言及するようになり、今日に至るまで、この船上会議を特別な出来事として記憶している。

この一年後の一九八六年に、『不足』の中国語訳が刊行され、一九九八年にその第二版が出版された。中国で指令経済を廃止した時に、この著書が理論的な背景の役割を果たした。経済学を教えているところでは、これを教科書として使っている。それからかなり経て中国を再訪した時、大学教員、市長、企業長などから、「私は貴方の教え子です」と言われて、不思議な気持ちになったのを覚えている。

どこが我が家

私の第一の家はいつもハンガリーだったし、今もそうである。

同時に、ケンブリッジに来るときは、一時的な滞在感覚でないようにしようと努力した。だから、ケンブリッジの住居をブダペストと同じように飾り付けた。絵画や個人的な記念品を持ち込んだ。そこでも、友人たちと親しんだが、それは狭い意味ではなく、家の管理人から散髪屋さんに至るまで、医者からプールの監視員に至るまで、日常生活で出会う人々と皆、仲良くあった。ハーヴァードでも、ケンブリッジでも、ボストンでも、アメリカでも、我々は我が家にいる心地だった。

ここからは再び、第一人称複数形で記述したい。多くの旅や何ヶ月もの外国滞在に、妻と共に一喜一憂するのではなく、ある時を境に、それが生活の様式になった。どこへ行こうとも、そこで自分の家のように感じていたい。技術的かつ資金的に可能であれば、我々の周りの物理的社会的環境をできるだけ個人的なものに変えたい。アカデミーの世界に属している我々には、これは比較的容易だと思う。国民文化や歴史の遺産の差異は大きい。にもかかわらず、インドであれ日本であれ、あるいはメキシコであれ、経済学の教授や学生と会えば、相互に理解し合うことは難しくないし、生活様式や興味関心に多くの共通点を

見出すことができる。

多くの国に一、二名の友人がいる。彼らは自発的に「著作エージェント」の役割を果たして、出版社と関係を結び、私の著作の翻訳や編集を引き受けている。フランスのマリー・ラヴィーニユ、ベルナル・シャヴァンス、メルダ・ヴァハビ、中国のキアオメング・ペング、ヴェトナムのニュエン・クワアン・A、日本の盛田常夫、チェコのカレル・コウパ、ポーランドのタデウシ・コヴァリクとグジェゴシュ・コウトコが献身的に途方もない時間とエネルギーを費やして、私の著作が読者に届くようにしている。

「グローバル化」されたアカデミーの世界で、我々はどこにいても、自分の家にいるように感じている。もちろん、この感覚を一面的に強調したくはない。ハンガリーとアメリカとの往来、世界の各地への頻繁な旅行は、どこでも我が家のように感じるとはいえず、それぞれの所で異邦人と感じないわけにはいかない。完全に心安まることはない。次の目的地への出発の合図があるからだ。ブダペストへ戻る時には、いつも心の痛みを感じた。アメリカの友人に別れを告げ、学生と会えなくなり、予告されている音楽会にも行けないと思うと、心が痛む。ひとつの所にいれば、もうひとつの所の出来事を失ってしまう。いつも別離が待っている。長い留守からブダペスト（ケンブリッジ）に戻り、そこにもう数ヶ月も滞在しているのに、知人が驚

いたようにこう言うのだ。「え、ここにいるのか。向こうにいると思つたから、君を探さなかつたよ」。

一九七〇年代と一九八〇年にブダペストで良く引用されたジョークがあつた。年老いたコーンがアメリカを放浪する。一時、そこに生活するが、居心地が良くないので、ブダペストに戻つた。ここでも居着くことができず、また出かけ、そしてまた戻つてきた。再び出国パスポートを申請したところ、こう聞かれた。^{*}「コーン小父さん、貴方はいつたいたいところが好きなの」。こう答えた。「道中だよ」。

^{*} このジョークは出国の可能性を牧歌的に描いたものだ。実際、この頃には出国禁止にある者以外の外国旅行は、それほど難しくなくなつていた。外国に残ることを前もって伝える必要はなかったので、実際にそれができた。もつとも、アメリカでも長期の滞在許可が簡単に下りないことは自明のことだつた。

あちらでも、こちらでも、何かの理由で居づらく感じると、このジョークが引用される。やや悪意をもつて、我々の「往來」を皮肉つた人もいる。「どうも、道中にいるのが好きらしいな」と。しかし、これは頻繁な旅行の精神状態を分かたないない。旅行は疲れを伴うから、やはりここ（あそこ）の家に居るのが一番好きだ。

移動の度に衣類、メモ、書物をまとめ、次の場所へ送るのが疲れを伴うだけでない。出国に際しては、査証申請やその他の行政的手続きが必要で、それが皆旅行の準備のうちに入っている。時差の解消にも我々はいつても悩まされた。^{*}

^{*} 時間の都合がつけば、ケンブリッジからヨーロッパへの帰途、ストックホルムに降り立ち、娘や孫たちと数日の時間を過ごした。ユーディットは私の好物の料理でもてなし、細やかに世話を焼いて、「時差水位」の調整を助けてくれた。夕食の最中に寝ていないか、そつと見ていた。時差の調整がなかなかできないのだ。話が尽きないまま、休めた体で再びブダペストに向かつた。

年を取るにつれて肉体的な疲れが溜まるだけが、旅行の疲れではない。場所を変えることそれ自身が、我々の二重生活の負担を大きくした。ハンガリーで行っている活動やハンガリーと結ぶ糸は、同時に、アメリカでも生じてくる。ここにも家があるし、あそこにもある。ここにも車があるし、あそこにもある。^{*} ここでも車両税と保険料を払うし、あそこでも払う。ここでもあそこでも、個人所得税の申告をする。ここでもあそこでも、銀行口座を開設する。ここでもあそこでも、膨大なメモファイルが積み上げられている。まだまだ続けることができる。常に一箇所からだけ給与をもらい、他方の職場は無給休暇をとつた。^{**}

しかし、だからといって、一方の職場のことを忘れて良いということにはならない。いつも遠方の職場の問題や責任を抱えて出かけ、eメール、手紙、FAXや電話で遠方の職場の仕事进行处理していた。だから、これは五〇%十五〇%の負担ではなく、一〇〇%を越える負担なのだ。

* 一九八〇年製造の中古のフォルクスワーゲン・ゴルフを買った。

二〇〇二年までこれを使い続けた。

** 私の周辺の人々は、同時に二つの職場から給与を得ていると思っていたらしい。

妻のジュジャは恒常的な往来にもかかわらず、自らの研究テーマであるハンガリーの住宅分配や住宅政策の検証を持続したケンブリッジ滞在中は西側の知識の習得と国際比較に努め、アメリカでもハンガリーのテーマを研究し続けることができた。

この独特な二重生活は大きなエネルギーを必要とした。定期的な往来に加えて、世界の他の地域への旅行もあった。しかし、その価値はあった。直に西側の生活の成果を手にすることができた。経済学の前線を歩み、その学問共同体の一員となりながら、祖国に根を下ろしたままでいることができた。

* 双方の職場で、私が居る時も留守する時も、常に私を助けてく

れる同僚たちが待っていてくれたことが、大きな助力になった。アメリカの秘書たちや助手たちのことは述べた。ブダペストではファゼカシユ・イツァ、次いでサボー・カティが私の仕事を助けてくれた。バルテイ・ユリアナは私の手稿の整理や保存を、そして夫君のブライアン・マククリーンはハンガリー語の原稿を英語に訳してくれた。ほとんど電報のように私の指示を送ったが、私のことを良く知っており、私が留守の間も、私の仕事の遂行を容易にするように取り計らってくれた。秘書や友人仲間の助力について言えば、西側の経済学の同僚たちに比べ、はるかに恵まれた羨望される状態にいたと言える。

ハンガリーでも、それ以外の国でも「頭脳流出」が語られている。世界でもっとも豊かな国々、なかでもアメリカは人々の能力を引きつけ、それが流出した祖国の頭脳力を弱めることになる。私がハーヴァードの任命受諾の条件にした生活様式が、「頭脳流出」防御のひとつの解決策になり得る。片足だけをアメリカに置き、もう片足を生まれ育った地に残す可能性も残されている*。

* ここで、この選択に伴う物的条件の制約については、立ち入らないでおこう。あくまで、アメリカの大学の職を得たハンガリーの学問研究者の場合に限定したい。アメリカでフルタイムの職を得て、それに伴う移住を選択した場合（多くのハンガリーの研究者がそうしているように）、ハンガリーに残った同僚に比べて、

現役時代も年金生活時代もかなり多額の金銭的余剰を獲得することになる。私が選んだ道を辿れば、その余剰は半分が減る。この半々の解決を選択する者は、祖国に残るために余剰のかんりの部分を犠牲にすることになる。もちろん、この場合でも、ハンガリーの研究者所得だけで生活するよりは、はるかに良い経済状態を維持できる。

アメリカの友人たちから何度も聞かされた。我々の生活様式は、*Enjoying the best of both world* という表現で特徴づけられると。確かにそうだ。ハーヴァード、ケンブリッジ、ボストンは「アメリカ」ではなく、アメリカが学問と文化に飢えた知識人に与えた最良のもの（あるいはこれを「ハーヴァードの誇り」と言うなら、さらにへりくだって「最良の中の最高のひとつ」と言うこともできる）だということは分かっている。そして、もうひとつの世界であるハンガリーは、「ラーゲリのもつとも陽気なバラック」だった。さらに言えば、ハンガリーの中でも学問研究者には、共産主義国のほとんどの市民が享受したもののより、はるかに面白くかつ美しい生活の可能性が開かれていた。この可能性を実現できた私の運命に、感謝している。

第18章 統合（一九八八年―一九九三年）

——「社会主義システム」をめぐるって

一九八三年のプリンストン滞在時に、社会主義体制の総括的な著書をまとめようという決意が固まった。そこで最初の構想が出来上がった。

ハーヴァード大学で教鞭をとることになって、この仕事は新しい動機付けを与えられた。最初の一九八四年には、社会主義の政治経済学に関する総括的な展望を行うコースを担当した。

一九八六年の講義では増刷りのメモを学生に配り、これがこの著書の最初の草稿になった。

講義にはいろいろな国の学生が参加していた。その一人は毛沢東時代に農村に下放されたチャンガン・シュー（現在、ロンドン経済大学教員）、もう一人は計画経済を内部から知っているポーランドの若い経済学者で、その他の学生は社会主義制度の機能についてほとんど何も知らない者たちだった。先鋭な反共産主義の確信に満ちた学生もいたが、アメリカやドイツのいわゆる「新左翼」もいて、彼らはナイーヴな信念で理念にしが

みつき、全体主義の本当の性格について何も知らなかった。このコースを毎年繰り返し、その度に内容を拡充していった。質問や議論は、多様な学生（後には多様な読者）を相手に、私の文言をより明瞭にする必要性を教えてくれた。関心のある学生を相手に講義することは、何物にも代えがたい著書（教科書としても利用可能な）の準備プロセスである。

著書執筆の経緯

一九八八年春、著書の構想、章編成がまとまった。それからほどなく、仕事に専念できる願ってもない提案をもらった。WIDER（国連大学開発経済世界研究所）と呼ばれる経済研究所がヘルシンキにある。その後亡くなったが、研究所長ラル・ヤヤヴァルディナが、研究所で仕事を完成しないと声をかけてくれた。一九八八年五月にそこに移り、九ヶ月間を過ごした。

あらゆる可能な支援、快適で住みやすい住宅や完璧な研究条件を得た。

研究所の周辺は理想的な安寧で満ちていた。ヘルシンキの夏は寒いが、この夏は快適な暑さで、オリンピックプールだけでなく、バルト海でも泳ぐことができた。我々のような海を知らない者にとつて、海辺の近くで過ごした日々は格別なものだった。夕焼けの景色を忘れることができない。長い研究時間の後も、夜一〇時まで昼間のような明るさの中を海辺や人工島や湾岸を散歩し、妻とその日や次の日の執筆テーマについて語り合った。根を詰めた仕事の合間に、いろいろな息抜きを見つけた。市場の傍の港に停泊する船から新鮮な魚を分けてもらったり、フィンランドニア宮殿や岩山寺院の音楽会に出かけたり、魔法のようなフィンランドの湖に遠足したりした。

WIDERには世界各地から経済学者がやってくる。友人たちもやってきて、我々を訪問してくれた。ジャック・ドゥレーズは大航海の旅をここで打ち切った。ハーヴァードの友人ではステイーヴ・マーグリンやアマールティア・センが我が家を訪れ、また別の機会には初期の著作の助言者だったエドモンド・マランヴオーが我が家で夕食をとった。ここでもインドの経済学者スクハモイ・チャクラヴァルティやスウェーデンの友人ベングークリスター・イザンダーとも会うことができた。^{*}フィンランドの同僚、研究所長や研究所員とも、多くの興味深い会話が

交わされた。

^{*} チャクラヴァルティとイザンダーの出会いはこれが最後になった。二人とも創造力の絶頂期でこの世を去った。

この上ない安寧、思索を鼓舞する精神的・自然的環境によつて、仕事のテンポが速まり、スウェーデンで『不足』を書き上げたようなスピードで執筆が進んだ。ほとんど毎週、一章分を書き進めた。^{*} 外的環境だけでなく、もうひとつ別の要因もこの速いテンポを後押ししてくれた。この著書は三二年間にわたる研究生生活の成果を総括したものである。この準備にかけた時間だけでも、すでに五年が過ぎていた。ヘルシンキの机のコンピュータに向かった時には、ほとんど休みなくキーを打てた。書きたいことはすでに頭の中に出来上がっていたからだ。

^{*} もちろん、これほど速く仕上げたとしても、これはまだ第一次草稿でしかない。『不足』の最初の構想も、何段階もの修正を経ている。私が依頼した同僚に草稿を読んでもらい、意見が付され、修正の過程でその多くを利用することができた。

著書には長年温めた思考が表現されているだけではない。文書の理解を助ける図表、統計データ、文献注釈、引用、文献一覧

が付されている。幸運なことに、これを仕上げるのにひとつのグループが手助けしてくれた。そのメンバーはハンガリーとアメリカの教え子からリクルートされた。その中には狭い意味での教え子だけでなく、コルナイの弟子を自称する若い大学生も含まれていた。精神的な意味での距離が近かったので、私の滞在先がどこであろうと、私の要求に素早く柔軟に対応してくれた。

ハンガリーからは体制崩壊や知的・政治的な抵抗のニュースが届いた。ヘルシンキにいる間は、いわば前線から遠く離れて砲弾の音を聞くような感じがした。ブダペストとの電話の会話が仕事を遮り、社会主義体制の瞬間的な状況や東欧レジームの死滅、住民の苦渋や政治的闘いが目を覚ましてくれた。私はこれらの事柄から意識的に自分の思考を引きだそうとした。この時期、私は著書の叙述に全力を注いでいた。「仕事は順調に進んでいる、何が起きててもこの仕事を続けることが大切だ」という意識に満ちていた。あの時もそうだったが、あれから一五年以上経た今でも、ヘルシンキで過ごした数ヶ月は人生でも一番喜びに満ちていた時期のひとつだったと思ひ出される。大工であれ彫刻家であれ、職業に喜びを感じる人であれば誰もが、創作に成功することに喜びを感じるだろう。幸いにも、私はこのような至福の状態を何度も感じることができたが、一九八八年夏のヘルシンキで得たほどの大きな至福は、他になかったと思

う。

一九八八年秋にブダペストに戻った。もう砲弾の音は遠くからではなく、すぐ近くから聞こえてきた。著書の過半を終えていたが、先はまだ長かった。ここからの執筆は間断の多いものとなり、ブダペストの後、一九八九年の最初の半年はケンブリッジで執筆を続けることになった。一九八九年後半は完全に執筆を止めた。体制転換の問題について発言する必要があると感じたからだ。実践的な経済政策を提案する時が来たと考え、『経済的過渡期問題に関する感情的ピラ』（以下『感情的ピラ』と略称）と題する著作を記した。これは次章のテーマであるが、ここで触れたのは、この時期、二つのことを並行的に行っていたからである。ひとつは、『感情的ピラ』とその外国語出版や修正版の執筆、それから体制転換課題に関する研究と講演である。もうひとつは、『社会主義システム』の諸章の執筆である。もつと正確に言えば、「並行的」という代わりに、別の表現が状況をよりうまく現してくれる。私は時間と能力が許す限り、（ハーヴァードの授業をやりながら）興奮し苛立ちながら、これらの問題に手を付けていた。一時的に時事的なテーマに取り組んでいる時は、大きな仕事を残したままにしているという思いで胸が痛んだ。逆に、『社会主義システム』の執筆に戻った時は、日々の経済政策問題を十分に手がけていないという良心の痛みを感じた。この二種類の義務と格闘しながら、ブダペス

トやケンブリッジで数日あるいは数週間の時間を割き、さらに一九九一年夏には丸二ヶ月の時間を著書執筆に充てることができた。現実への注視と取組みの手を休め、そこまで書き上げた原稿を取り出して読む度に、私の記述が十分に歴史の時間に耐えるものであり、「遅しい」ものだと確信できた。一九八九年から一九九一年にかけて、ソ連と東欧における社会主義体制が崩壊した。非常に多くの専門家が、このテーマについて述べてきたことを修正する必要があると考えた。そこまでほぼ過半を仕上げていた著書について言えば、一行の変更の必要もなかったと断言できる。著書の叙述と分析は最初の歴史の試練に耐えた。改革に関する著書の後半の半分については多くの修正を必要とし、新しい時代で補足しなければならなかった。当初の構想は中途半端な改革の不可能性を展望するものだったが、「不可能性」が実現してしまった時点で、状況が変わった。

最終的に、三年経過した一九九一年に執筆を終えた。草稿はハンガリー語だったが、ほどなく英語の翻訳が出来上がった。最初に英語訳が出版され、それから少し遅れてハンガリー語版が出版された私の著作のひとつがこれだった。

総括を意図する

第一の目的は、自らの研究の主要な成果をまとめることだっ

た。数十年の研究を通して、多様なテーマに取り組み、常に新しい問題に応え、経済学の種々の問題を涉猟してきた。相互に別々に取り組んだこれらの仕事はお互いに補充し合っていて、重要な部分で重なっている。さらに、同じテーマに何度も立ち戻り（たとえば、不均衡現象）、それぞれがさらに洗練された形（私自身の判断だが）に仕上がって行った。誤解を恐れずに言えば、一連の部分的仕事はあるひとつの「糸」を形成していた。ここまで別々に定立された部分命題を論理的に整理するよ
うな分析の枠組みを作りたかった*。

* 以前の学問研究をまとめるだけでなく、直接的に体験した経験もまとめてみたかった。ここまで自伝を読み終えた読者なら、そのことを説明するまでもないだろう。私は書物から知識を得ただけでなく、個人的な体験からも多くのインスピレーションを獲得した。たとえば、権力の集中、全体主義の性格、不足現象、社会主義理念への信奉の腐食、その他多くの現象について叙述したこと
の多くは、個人的な体験にもついている。

と同時に、私自身の著作だけに限定して展望することは避け
たかった。他の人が仕上げ、私が重要だと感じた命題や思考を
すべて、これから準備する枠組みの中に収めたかった。他の人
の成果については、相互に対立し合う、時には相互に相容れな

い代替的な見解を、バランスをとってまとめるような理論史を描こうとは考えなかった。私が同意できるものだけを、総括の中に位置づけようと考えた。それらのすべての命題や結論は、私のスクリーンを通してゐる。以上が、著者から見たこの著書のテーマ、「社会主義システム」分析の意図である。

著書『不足』を発刊した際に、その「前書き」で、この著書は社会主義の政治経済学のすべてではなく、その一部を扱うものに過ぎないことを強調した。このことは数値でも例証し、「社会主義の経済の包括的な著作を一〇〇%とすると、『不足』はそのおよそ三〇%を扱うものに過ぎない」と記した。そして今、完全を期す時がきた。一〇〇%を記した著書を仕上げようと考えたのである。もちろん、著作のすべての部分において完全を期すという意味ではない。これは不可能であるだけでなく、コンパクトで一般性を目指した学問研究の目的にはなり得ない。*分析が完全であるというのは、社会主義体制のすべての本質的な特質を取り上げるといふ意味である。したがって、著書が扱う特質とは、政治的・社会的・経済的組織体が存在・機能して、それが社会主義体制と名付けられるものになるのに必要かつ十分な特質である。

* 『不足』の「前書き」で、視覚的に示すために、「逆計算」を行った。もし六〇〇頁の著書が真の包括的分析の三〇%を含むとす

れば、包括的分析の実行には二〇〇頁の著作が必要になる。この完全を期した著作の執筆に際して、圧縮度の高いコンパクトさに努めた。あたかも二〇〇頁が必要な包括的著書を、六〇〇頁にまとめるようにした。その結果、『不足』との重複分は、三〇%以下になった。『不足』が詳細に扱った思考部分は、二四章から構成される『社会主義システム』の二、三章に圧縮された。

『不足』は体制の政治構造やイデオロギーを扱っていない。これに対して、『社会主義システム』は、導入の諸章の後に、これらのテーマの分析を開始している。体制の総括的理解を指した多くの「経済体制比較理論」と違ふところは、中央計画化から始まるのではなく、さらに国家所有から始まるのでもなく、政治的分野のもっとも特徴的な特質から、つまり共産党の一党支配から出発していることである。本書の『不足』を扱った章で述べたように、当時の政治的環境とその影響を考慮した自己検閲によって、このテーマを著書から除外した。しかし、一九八三年にこの新しい著作の構想に取りかかった時に、この制約を超えようと決めた。一九八四年から始まったハーヴァードの講義では、内的な制約なしで、共産党、政治構造、公式イデオロギーの役割について見解を表明してきた。一九八六年に学生に配布した講義メモは、後の印刷された文章と同様に、共産党の役割の説明から思考の展開を図っている。ようやく、真

の政治経済学を叙述できたのである。

経済学と政治学に関係する部分や相互に重なり合うテーマを分析に組み入れるだけでなく、他の社会科学分野、とくに社会学、社会心理学、政治哲学の視点をも考慮した。この著書がたんに経済学の著作としてだけでなく、すべての専門分野を統合した社会科学の作品としてみなされるように努めた。

社会主義経済を扱ったほとんどの著作は部分的分析を行っている。体制の明瞭に分離可能な分野あるいは特徴的な特質を検討している。私が目指したものは、いかにして部分から全体が構成されるかを明瞭にすることだった。政治、経済、社会関係、イデオロギーとの間には密接な相互作用があり、それが一緒になって、種々の集団や社会的役割領域の行動の規則性を形作っていく。このアプローチを「システム・パラダイム」と名付けてよい。^{*}このパラダイムの応用には長い歴史があり、その最初の偉人がマルクスである。彼は多くの部分的研究を記したが、主作品である『資本論』は体制としての資本主義を明らかにしようとしたものである。その時代の種々の社会関係が相互にどのように関連し合い、相互の存在を決定しているのかを扱っている。『社会主義システム』の「前書き」で、マルクスが私の思考にどれほど大きな影響を与えたかを特筆している（この「前書き」は一九九一年に書かれた。まさにマルクスに言及することが流行遅れになった年である。それまで頻繁にマルクス

を引用していた人々も、一度にそれを止めるようになった。マルクスが私に与えた影響は、なによりも体制理論の応用に現れている。

^{*} 日常語として種々曖昧な意味で使われるために、「パラダイム」の言葉が地に落ちてしまった。この概念は、一九六二年に出版された天才的な著書で、クーンが近代科学理論に導入したものだ。私は彼の意味で、この表現を使っている。パラダイムと名付けられるものは、特徴的な手法、視角、方法論、分析用具、議論の方法のことで、研究者のあるグループが共通して、あるいは相互に類似した形で、応用するものを言う。

「前書き」では、マルクスのほかに、シュンペーターとハイエクの名を上げた。シュンペーターの『資本主義、社会主義および民主主義』やハイエクの『隷従への道』はシステム・パラダイムの模範例であり、この面で私の思考に大きな影響を与えた。^{*}

^{*} 「前書き」ではケインズも私に精神的な影響を与えた人物として上げている。実際、マクロ経済学や不均衡問題を再考するのに計り知れない知恵を与えてくれた。しかし、システム・パラダイムと名付けている手法はケインズの著作を貰っていない。それゆえ、ここでは彼に触れていない。

包括的な著作を仕上げるにあたって、社会理論のどれかの潮流に「加わる」という単純なことで満足する訳にはいかなかった。「社会主義システム」を何か既存の分類箱に収めようとするれば、途方にくれることになろう。これはマルクスのでも、新古典派的でも、ケインズのでも、ハイエクスのでもない著作なのだ。

私の著書は具体的なテーマ、つまり社会主義体制にかかわる諸命題をまとめただけではない。体制を分析することによって、私が使った学問的手法、接近法をも明らかにしている。

実証分析と諸価値

著書執筆においては、規範的な接近法をとらないようにした。「どんな社会が良いか」というような問題提起を行わないし、マルクス、レーニンあるいはその後継者が描いた社会主義の設計図が「より良い社会」の実現に相応しいものであるかというような問題も扱っていない。この種の問題を避け、実証的な接近に努めた。長期にわたって共産党が唯一の支配者である一群の国が存在する。一九八〇年代半ばには二六カ国がこのグループに属しており、地球人口の三分の一がここに生活していた。私が描こうとしたのは、社会主義の信奉者が考える理想ではなく、この一群の国の政治・社会・経済生活の現実を特徴づける

ものである。

何か「判定」を下すことも、著書の目的ではなかった。ベルリンの壁崩壊の後では、それは何も難しいことではなかったが、「前書き」でも記したように、「大仰な判決的表現を避けて、学問的な客観的態度で社会主義体制を記すことは、今日では少し勇気のいることだ」。

客観的な実証分析は、私の世界像の根本原理を創っている諸価値にもとづいて、社会主義制度の主要な特質を叙述することを排除するものではない。私にとって、自由、人権、人間の尊厳、個人の主権の価値はどれも、特別に大きいものである。客観的な概念構成に努める場合でも、これら諸価値の侵犯に対して厳しい言葉を使用していることは正しいと考えている。

私自身の価値体系の中で一段低い、それでも高い価値を付与しているものは、経済実績である。これは通常の経済基準で評価した。住民の福祉、成長率、技術発展の速度、経済的革新の能力と応用力がそれである。最終的に、レーニンが社会主義確立に際して設定した基準を応用した。まさにレーニンの言葉通り、「社会主義と資本主義の競争では、生産性の高い方が勝利する」。著書ではこのレーニンの基準にもとづいて、何故に社会主義体制の敗北が不可避だったのかを示した。

社会主義体制とすべきか、それとも共産主義体制とすべきか、著書のタイトル表記で迷った。西側世界の政治文献では「共産

主義」という用語が使われている。これに対して、権力にある共産党は、マルクスの概念使用にしたがって、「共産主義」という名称を「必要に応じた分配」が支配するユートピア的体制を意味するものに使っている。それに比べてはるかに少ないものを約束している「社会主義」を、現在の体制の呼称として使っている。二つの名称から選択しなければならない場合、企業、教会、政党、国家が自らの名称を決めることができるのであれば、これより大きな存在物に対しても、社会主義体制という命名権を否定することはできない。この体制を自らが（あるいは指導層が指導する体制を）社会主義と名付けるなら、それで構わない。理想として規範的理念、「真の」社会主義のためにこの名称の使用を留保し、二六カ国の現実的世界からその名称を取り上げる理由はない。この二六カ国は「現存する社会主義」であり、それ故にこのように命名する。

一般理論

比較経済体制論はソ連に焦点を当てるのが常である。一九一七年の革命前史から始まり、ソ連体制の確立、安定・発展・崩壊と続く。これを補足するのが、ソ連圏に加わった諸国の発展史である。「ソ連型経済」という用語が頻繁に使用される。そして、その重要な特殊ケースとして、中国が特別の検討対象に

なる。

それぞれの国に独自の、他の国とは異なる歴史的發展に注目する手法は、それ自体、ひとつの存在価値をもつものであり、社会主義体制の理解に資するものである。だが、私の総括的な分析では、これとは異なる手法をとっている。二六カ国の種々の相違を捨象し、それらに共通のものを「蒸留」させる。これらの諸国を世界の他の部分から区別させるような共通する本質的な特質を見つけることができる。とすれば、これらをまとめて独特な体制として語ることができる。とすれば、この本質的な（そして、本質的なものだけ）特質を取り上げ得ることが課題になる。一般モデルの記述においては、詳細な叙述を与えることが目的ではない。だから、著書ではソ連、東欧、中国あるいはヴェトナムの歴史やそれぞれの興味深い特質などに触れていない。それとは逆に、ソ連やアルバニアやモンゴルの政治・経済の機能に共通するものだけを叙述している。一般理論モデルの創造はいわばどれほど節約に成功するかという「芸術」で、主要な特質の選択において「節約的」でなければならぬ*。主要な特質はなるべく少なく、しかしその性格を説明するのに、「ちょうど十分な」ものでなければならぬのだ。

* ここでの「節約的 (parsimonious)」とは理論構造の原理のこととで、「オッカムの剃刀」(William of Occam)で知られる一四世

紀の論理哲学者に由来」と命名された周知の思考過程に関するものである。これによれば、理論は可能な限り少ない仮説によって構築されなければならない。これを別言すれば、節約して仮説を立てなければならぬことになる。

一般的な枠組みの中で、社会主義体制の歴史を三つの期間に分けた。第一の時期は、資本主義から成熟した社会主義への過渡期である。この時期はソ連では農業の集団化と党内反対派への最初の弾圧（一九三六—一九三八年）で終わる。ソ連ではよそ二十年続いた過程である（社会主義から資本主義への過渡期の逆の道と同様に）。東欧ではソ連軍の占領によって、この第一の時期はソ連に比べてはるかに短かった。

第二の時期の体制を、著書では「古典的社会主義」と名付けている。この時期には体制のすべての主要な特質が安定的に貫徹している。読者によっては、「古典的」という言葉が気になるかもしれない。これには何の価値判断も含まれていないが、何か賞賛的な感覚を与えるものかもしれない。しかし、これはたまたまそれまでまだ流動的な状態にあったものが固まり、それとともにすべての特徴的な特質が見えてきたことを示すだけなのだ。また、社会主義という言葉自体に感情的なわだかまりがあり、不快を感じる人もいるだろう。弾圧、処刑、あるいは大量の流刑や監獄が、古典的時代の始まりを特徴づけている。

第三の時期は、社会主義国が古典的状态から動く時期である。この変動は社会主義体制内の改革として、さまざまな方向が存在する。組織の再編成や近代的なコンピュータを使って中央計画の「完全化」を目指す国がある。ユーゴスラヴィアでは自主管理が実験された。そこでも、またハンガリーでも、後には他の社会主義国でも、国家所有と共産党の権力独占の維持を前提した市場メカニズムの導入が図られた。これらの変動は政治的抑圧の緩和を伴っている。体制の崩壊は改革の随伴現象である。

著書ではこれら三つの時期区分で、歴史の次元を区切っている。しかし、これはあくまでモデル上のことであって、それぞれの具体的な歴史を語るものではなく、体制の生存史なのである。

社会主義体制の確立において、マルクス、レーニン、スターリン、毛沢東などの思想家が大きな影響を与えている。著書では、社会主義が低い生産性で機能してきた責任からマルクスを免責する人々に議論を挑んでいる。「マルクスはこう考えた訳ではない。その思想を誤って実現したに過ぎない」。しかし、マルクスによって提起されたプログラムのひとつも重要な要素は、私的所有と市場を一扫して、公有と官僚的調整に代えることである。結局のところ、マルクスのプログラムの実現によって、社会主義が崩壊したのである。したがって、これを救世主

的なプログラムとして喧伝した者は、歴史に対する知的責任がある。

さらに、出現した体制は理念のみにもとづいて形成され、社会主義の予言者や指導者が計画した通りに実現したものであるという見方にも与しない。自生的な進化による発展も、大きな役割を果たしている。「社会主義システム」で展開した思考は、「権力に就いた共産党は、私的所有と市場の一扫を含む計画の実現に着手した」という点に尽きる。これはいわば「遺伝子コード」のようなもので、規定のプロセスを開始し、制御する。

ここから、制度の自然淘汰も機能し始めた。国家建設や経済管理の種々の形態を試し、所与の関係の中で存続能力のないものはやがて消滅し、体制の機能に良く合うものが体制に組み込まれた。マルクスやエンゲルスは詳細な図面を描いた訳でも、義務的な物的計画指標制度を指示した訳でもなく、さらにすべての組織の人事部が政治警察と関係をとるように指示した訳でもない。これは社会主義制度の構築の過程で形成され、事の成り行きで出てきたものである。

著書の基本的思考のひとつは、「古典的社会主義制度の種々の要素間には、制度の自然淘汰や自生的発展の結果として、親和力が存在する」と考える。歯車のように、専制制度にうまく噛み合うようになっていく。全体主義的な古典的社会主義は粗暴な抑圧を行使するが、それが全体の結合力を生み出す。

改革過程はこの結合力を解体する。抑圧が緩和され、集権化が弛む。それによって生活しやすくなるが、制度の根本を浸食していく。プラハの春のスローガンだった「人間の顔をした社会主義」は希望に過ぎない。人間の顔に近づけば近づくほど、制度が機能しなくなるのである。

共産主義者であろうとする人々の盲信が消滅すれば、制度は支えを失う。「政治改革」が進み、イデオロギー、信条、政治的代表者を選ぶ可能性が現実のものになれば、人々の多くはそれまでの支配的的制度を選択しなくなる。

『社会主義システム』の後半部分はこの思考を詳細に展開しており、種々の改革の潮流を順に扱い、それらがぶつかった袋小路を明らかにしている。

遅すぎた？ それとも、早すぎた？

『社会主義システム』のハンガリー語版出版の後、カルシャイ・ガールがインタヴューし、週刊誌 *Figyelő* 上に著書の批評を掲載した。インタヴューの中で、「この著書の出版が遅すぎたのではないか」と質問された。核心をついた質問に感謝したい。彼の批評は次のようなものだった。「もしコルナイが四、五年前に完成し、もちろんハンガリー語でもこの著書を出版していれば、『不足』と同様に、経済学のベストセラーになった

だろう。自らを教養あるとみなす知識人が貪り読むような書物であり、体制転換を望む当時の活動的陣営がその学問的基礎とみなすような書物である」。これに先立つ数行は、こうなっている。「今この時期に、過去のことを記した七〇〇頁近くになる専門書を誰が読むのだろうか」と。

『社会主義システム』の「前書き」で、サイモン・シャーマのフランス革命に関する面白い歴史書から引用した。「中国の首相、周恩来が、フランス革命の意義をどう考えるかと質問された時に、〈それを言うのは早すぎる〉と答えたという。二百年経ってもまだ早すぎる（遅すぎる）かもしれない」。ここまでは、シャーマの引用である。私は「前書き」で、これに付け加えた。「まさにこのシャーマの皮肉った二重の意味をもつコメントに、私もコメントしたい。大事件について社会研究者が二百年後に発言するとすれば、まだ早すぎるかもしれないし、すでに遅すぎるかもしれない。ただはつきりしていることは、筆者はそれだけ待ちたくないということだ。事件に近いことのリスクや不利のすべてを引き受ける」。

これより早く仕上げることはできなかったし、これより遅く発刊しなくなかった。非常に野心的な試みだったので、長い準備が必要だった。繰り返し、統合体系の再構築に取り組まなければならなかった。一九九〇年代の初めにはこのテーマに関する大量の著作が現れ、それぞれの著者たちは共産主義について、

真の定理あるいは半分真の定理を述べるのに忙しかった。しかし、私は十分に練られた著作を出したかったので、すべての議論を熟考しかつ厳密な論理に仕上げ、すべての参照文献を正確にし、説得できるデータで例証したかった。

急がなければならないと感じたことは事実である。良く覚えているが、ハーヴァードのフアカルティ・クラブでブダペストから来訪した著名な社会学者で、民主的反対派の人物と昼食をとった時である。何をしているかと聞くので、「社会主義体制を総括する著書を書いている」と答えた。その時の驚いた様子を忘れることができない。何も言わなかったが、その顔から読み取れた。「気が狂ったのではないか。そんなことに時間を使っているのか。今この時期に」。その皮肉った視線は理解できた。既述したように、一九八九―一九九〇年の後、時事的な問題の扱いで、著書の執筆の時間が奪われた。もしこの時期に自らを強いて、どんなことがあっても著書を仕上げるという気がなければ、執筆不能になっていただろう。最後の図表や文献一覧が挿入され、著書が最終的に完成し、印刷所に引き渡されるためには、自己規律や内部から湧き起こる職業意識が必要だった。

この仕事を止めなくて良かった。いずれ他の著者がこの時代のことについて記すだろう。周恩来が求めたように数世紀の展望の中で、我々よりもはるかに客観的に見解を述べる人が出て

くるだろう。その彼らも、我々の著作に依拠せざるを得ないはずだ。我々が歴史の証人なのだから。ここに特別な重要性がある。少なくとも東欧の我が世代の歴史証言は重要だと思う。観察者として、活動的な参加者として、最初から終わりまでそこにいたのだから。

東と西からの評価

著書は大きな反響を呼んだ。四〇を越える書評が出た。少なくともそれだけは私の手許に届いた。ドイツ語とフランス語に翻訳され、続いてかつての（あるいは現在もなお）社会主義国（ブルガリア、ロシア、ヴェトナム）で発刊された。とくにこの後者の事実は興味深い。現在もなお共産党の政治独占状態にある国で、この政治構造が社会・経済のさまざまな領域にいかなる機能不全をもたらすかを扱った著書が出版されたのである。「改革社会主義」が党の公式路線になっている国で、改革過程の中途半端な性格を強調する著書が発刊されるのである*。

* 中国でも発刊が準備されている。翻訳は出来上がっている。しかし、出版社が発刊の許可を得られるかどうか、いまだ不明である。

書評の大部分は賞賛するものだった。ここでは二つだけ引用しておこう。イギリスのソ連研究の第一人者（残念ながら、その後死去）であるアレック・ノーフはこう記している。「コルナイの著書は疑いなく注目に値する業績である。東側の人間にも西側の人間にも、経済学や政治学に関心を抱く者にも、共産主義の専門家やこれから学習を始める者にも、一様に教訓的な書物である。この作品は対象の優れた知識に裏打ちされ、かつ良く構想されたもので、明晰な表現の模範と言える。著者は（東の）制度的機能から獲得した貴重な知識を、経済学理論の羨むような包括的知識で⁽²⁰⁾鑄造している」。そして、この書評はこう結んでいる。「社会主義体制の本質的な特質や改革実験の失敗について、非常に高い水準の叙述と説明を与えており、それに対して我々関係者や多くの読者は感謝⁽²⁰⁾したい」。ニューヨークのコロンビア大学教授リチャード・エリクソンは、次のように述べている。「これは本当に、生涯をかけた思考をまとめた記念碑的作品である。知恵と慧眼に満ちた傑作である」⁽²⁰⁾。

そして、右と左からの批判

批判的な書評にも、当然のことながら、批判者の専門的な見解が含まれている。こうした批判をはるかに超え、私のすべて

の文言を否定する批判もあつた。賞賛の批評と同様に、否定的批判の二つを紹介しよう。

ヴァーツラフ・クラウスとドゥサン・トゥリスカは私の著書に対して、長文の書評を書いた。当時、クラウスはチェコ政府の大蔵大臣であり、自らが率いる政党の党首であつた。その後、さらに高い地位に昇進し、首相を務めた後、現在はチェコ大統領の地位にある。トゥリスカは執筆当時、民営化大臣を務めていた。

著書について一言たりとも褒め言葉がなく、概念体系や方法論が経済学の主流派から不合理なまでに乖離している点が、主要な否定的批判となつている。そして、この否定は『社会主義システム』のみならず、私のすべての著作に及んでいる。彼らの見解によれば、このような著作はまったく無意味なもので、共産主義制度の特質を通常の手法で、つまり最適モデルやミクロ・マクロ経済学の用具で分析できないものはひとつもないという。

批判のトーンでとくに苛立っているのは、共産党に関する分析の部分である。彼らによれば、政治的分野の役割はすでに共同選択理論で完全に説明されており、一般的な有効性をもつ命題として、政治家は権力と物的関心を最大化する行動をとるといふ。これに高々独占に関する経済理論で補完する必要があるだけで、共産党についてもこれを適用することができるという。

つまり、すべての独占者と同様に、共産党は政治市場への自由参入を阻止するという。

この書評に耳を貸せば、大学の政治科学部門をすぐに解体し、研究者は自らを新古典派経済学者に転身させなければならぬ。私は書評に反論する習慣はないし、まして自伝で専門的な議論を展開するのは適切ではない。その代わりに問題をひとつだけ、経済学のそれではなく、心理学の問題を提起したい。それは、この権力の頂点に立つた二名の政治家、それも重要な国家的課題や政党の仕事で追われている政治家が、詳細にわたつて学問的著作への個人攻撃的な書評を書いた動機は何だろうか。

もうひとつの激しい批判は、政治スペクトラムの別の極からやつてきた。ハンガリーの歴史学者クラウス・タマーシュのペアンからだ。^{*}多くの批判のうち、もつとも重要な点は、私の著作が歴史的接近法を蔑ろにしているということだろう。「具体的な歴史状態を捨象した不毛なモデル」を批判する。別の箇所では、次のように主張している。「歴史的観点から見れば、コルナイの著作のもつとも基本的な方法論的欠陥は、その技術的性格ではなく、世界経済を構造的な統一的全体として見ないことにある。世界経済は歴史的に形成された構造的決定要因によつて支配されているのだ（たとえば、中心、半周辺、周辺の国々は相互に結ばれた関係制度、労働分業構造、排除と搾取の関係、不平等交換や不平等な政治支配関係等）」。もうひとつだけ、引

用しない訳にはいかない。⁽²⁶⁾「この作品には、あたかも世界で二つの基本原理が闘争するように、〈良い〉世界と〈悪い〉世界が出てくる。一方の世界には経済的合理性と純粋な市場論理が、他方の世界には不合理な国家の搾取がある」。

* クラウス・タマーシュの仕事を急進派社会主義の諸グループの中に位置づけるのが本書の仕事ではない。ただ、私の著書に対する視角は、西側の用語でいう「新左翼」と呼ばれる理念と多くの点で類似しているを見た。

** 何度も自分の著書をめくって、国家の不合理性と搾取的性格に関する言及を探してみたが、どこにも見つからなかった。

クラウスとトゥリスカの眼には私の著書が新古典派主流の思考世界や分析用具に忠実でないことが問題であり、クラウス・タマーシュの眼には私が「リベラル派経済学のハンガリーの主唱者 (coryphaeus)⁽²⁷⁾」であることが問題なのだ。

すべての人に気に入られることはできない。自らの精神像を持つ者や明確に概念化された見解を有する者は、その仕事が同意や認知を得られないことを、予め覚悟していなければならぬ。だから、『社会主義システム』がヴァーツラフ・クラウスにもクラウス・タマーシュにも気に入らなかつたことに驚く必要はなく、逆に完全に理解できるものだ。私にとって、それは

悲しいものではなく、納得できるものである。

ある不快なエピソード

一九八八年末だった。「社会主義ハンガリーのために」と命名された叙勲の知らせが届いた。社会主義体制を拒否する著書を懸命に執筆しているときに、「社会主義ハンガリーのために」顕彰されることに、大きな違和感を抱いた。

科学アカデミーの幹部の一人に電話し、顕彰を受けたくない由を伝えた。このプロセスに介入して、顕彰リストから外してもらうのが最善の方法である。議論になった。彼はこう質問した。「それなら、どうして今まで国家表彰を受けたのか」。それに対して、こう返答した。「それは学問世界での認知を意味していると考えたからだ。今回の顕彰は政府が政治的目的をもって行おうとしていることが明白だ」。急いで私の見解を認め、アカデミーの他の幹部に送付した。

介入は成功しなかつた。アカデミーの幹部は顕彰のプロセスに介入できなかつたか、あるいは介入したくなかつたのだろう。そして、国家評議会議長で、アカデミーの同僚でもあるシュトラウプ・F・ブルーノから、叙勲の知らせが届いた。この件は、「ハンガリー公報」にも掲載された。国家評議会議長宛に、次のような書状を送付した。「謹んでお知らせします。私は叙勲

を辞退します。顕彰は政治的性格と政治的効果をもちます。政府のプログラム、その一般的政策と経済政策に同意できません。数十年の間、この決意を反対者のな運動形態で表現してきました。これに反する行動をとりたいとは思いません。国家の顕彰を受諾することは、暗黙のうちに、政府への同意を表現するものと考えます⁽²⁸⁾」。

「社会主義ハンガリーのために」の顕彰を拒否し、私のこれまでの著作を統合する著書を記すことで、私の人生の出来事に、そして社会主義体制に別れを告げた。

第19章 運命の転換（一九八九年―一九九二年）

——「感情的ピラ」をめぐる

一九八九年一月一〇日、ベルリンの壁が崩れ始めた。多くの人が、このことを予測できたかと尋ねた。ソ連や東欧の社会主義体制の崩壊を、事前に予測できたかという質問である。

一九八九年一月に、『経済的過渡期の問題に関する感情的ピラ』と題する私の著書が書店に平積みされた。「一冊の書物は数日で完成するものではない」と答えることで、回答に代えることができるだろう。「崩壊を予想していた、それもこれらが起こるはるか前に」と自信をもって言える。しかし、現実の歴史はこれよりはるかに複雑である。率直に語ってみたい。

予測の限界

体制崩壊を事前に予測したか。イエスでもあり、ノーでもある。イエス。『社会主義システム』は数百頁を費やして、内部改

革は体制を救済することができず、反対に体制の基礎を崩すものであるという命題を証明している。抑圧が和らげば和らぐほど、また官僚的な強制規律が弛めば弛むほど、古い権力関係が維持できなくなる。

ノー。私の著書のみならず、社会主義体制を検討している他のどんな学問的著作も、何時それが終焉を迎えるかについて何も語らない（語ることはできない）。

ここで、我々は重要な科学哲学の問題に辿り着く。ここでそれを少しだけ扱っておきたい。アインシュタインの相対性理論を実証する方法として、「太陽が星の光を曲げる」という予想から理論の正否を判断することが考えられた。一九一九年五月二十九日の日食時において、この理論の命題を検証し、宇宙物理学者がそれを確認した²⁰。この予想が寸分違わず実現したことで、全世界がアインシュタインを祝った。ただ、数百万千万人の社会の歴史的動きに比べて、星の運行は比較にならないほど単純

な規則に従っている。「科学的理論にもとづいて、何時何処で革命や戦争が起きるかを予想できる」と主張する社会学者がいるとすれば、それは傲慢というものだろう。

イエス。社会主義体制を内部から知っている者は、一九八六年あるいは一九八七年辺りから、崩壊の予兆を感じていた。経済的問題が危機を感じさせたというのではない。たとえば、ヒットラーの軍隊がソ連の西側に侵攻した時には、ソ連の経済状態ははるかに悪かった。より重要な予兆は人間である。とくに、政治・経済・軍のエリートたちの、旧体制に対する不満が増大していた。

* レーニンの言葉 (1964 [1920], 96 p.) を引用している人がいた。「搾取されている大衆が古い方法ではもう生きることができず、変化を要求するだけでは、革命の十分条件にならない。搾取する者が生き長らえることができず、古い方法で支配することができないことも、革命に必要なのだ」。

事後的に世論が新しい歴史時代の始まりの日とみなすベルリンの壁崩壊が近づく頃には、すでに古いレジームの終焉を告げるプロセスが進行していた。ポーランドでは政権側と野党側で国会選挙問題が話し合わせ、ハンガリーでは円卓会議が始まっていた。

ハンガリーやポーランドで起きていることは体制の分解にそれなりの役割を果たしているとはいえず、大崩壊の視点から見れば最重要なものではない。ソ連で進出したことが、決定的なものだった。一九八〇年代の後半に導入された改革は、ゴルバチョフその他の指導者が期待したものを生み出さず、社会主義の革新にもソ連の強化にも役立たなかったが、その影響は世界的な重要性を証明した。社会の空気が自由になった。体制が「ソフト化」した。それとともに、ソ連の外交政策と軍事ドクトリンに大きな転換が生じた。以前には、ハンガリー、チェコスロヴァキア、アフガニスタンへソ連の戦車を送り込んだ。この帝国が崩壊する数年前には、国境線の内側外側を問わず、同じ介入を行う能力を失っているように見えた。学問的基礎にもとづく正確な予測ではなく、まさにこの「予兆感覚」である。もちろん、このような予見には体制の正確な知識が必要であり、それなしでは種々の現象の報告を評価することはできない。そして、それに加えて、優れた直感も必要になる。事態がどのように進行しているか、さらに危機に向かって突進していることを予測した人々の中に、私も入ると思う。

もうひとつのノー。事態の進行の速さを実感していたとしても、実際問題として、急激にそれが加速化することなど、誰一人として予見できなかった。事後的に賢くなるのは簡単だし、数学的モデルすら描くことができる。いわゆるカオス理論はパ

ラメーターが安定的な状態にある複雑システムを記述する。このパラメーターのいくつかに相対的に小さな変化が起こるだけで、システム全体が平衡状態から乖離する。このようなことが生じたのだ。

皆はただ予想しているだけなのだ。共産主義の専門家で、著作や講演を通して、「崩壊の期日をはるか前に予測していた」と証明できると主張する人もいるだろう。しかし、これは世界史上これまでなかった出来事で、一回限りの事件が、何時どのようにして生じるかを正確に予想したというのではない。何百分の一の確率しかないLotto籤で当たりが出るのと同じ程度の予測にすぎない。

諸事件の加速化は、私のもっとも大胆な予想すら超えてしまった。それを告白して恥じることはない。

決 断

根本的な変化が生じていることに対し、知的な準備に努めた。ラテン・アメリカの軍事独裁から民主主義へ向かった経験を扱った書物を入手した。再度、マクロ経済学の教科書を手にとり、既存の知識を活性化した。歴史家と会話を交わし、どのように大帝国の崩壊が生じたのかを質問した*。

* ある会話を良く覚えていた。一九八七年の友人との集まりで、二名の優れたハンガリーの歴史家にこの質問をぶつけた。驚いたように私を見つめていた。彼らは活動的な人物だが、この類推にはまだ思考が及んでいなかった。

急進的な変革の可能性について、ハーヴァード大学同僚のジエフリー・サックスと何度も意見を交わした。彼と夫人のソニア（チェコ出身）は、親しい友人だった。ケンブリッジに初めて到着した時に、いろいろ世話を焼いてくれ、ボストンの街を案内してくれた。サックスはボリビアのインフレ抑制への助言で名声を得た。ワレサや彼の経済アドバイザーがサックスの名声を聞き、まだ野党にあつた連帯の経済顧問として彼を招聘した。この頃から、サックスは東欧に関心を寄せ始め、他方で私はマクロ経済安定に関心をもちだした。だから、話し合えるテーマは多かった。

専門的な準備よりも重要だったのは、「政治的な転換が生じた場合、どのような行動をとるべきか」を再考することだった。第7章で、一九五六年以後の「人生戦略」をどのように決めたかを記した。一九八九年に至るまで、それほど大きくない逸脱を無視すれば、その時に自分に課した原則にしたがって行動してきたと言える。しかし、今、新しい時代が到来した。

ここまで、私が生きてきた政治的レジームと、合理性、道徳

性、感性のすべてにおいて対峙してきた。そして今、民主主義が生まれ、受容できる政治・経済制度が生まれる期待が出てきた。したがって、ここで将来の「人生戦略」を再考することは合理的で時宜に適うものだと考えた。何らかの経路の本質的修正を行うべきだろうか。

急ぎたくはなかった。強いられた場合に、これまで常に良い決断ができたとは言いがたい。他方、どのような状況が生まれてくるかを、大概うまく予測することができた。だから、具体的な決定を下せるような一般的な選択基準を、予め設定しておきたかった。

妻のジュジャと良く散歩した場所のひとつが、ケンブリッジの川向こうにあるハーヴァード・ビジネス・スクールの公園である。一九八九年春、ここを散歩しながら、繰り返しこのディレンマを反芻した。ブダペストの生活を（そして、我々の精神をも）掻き立てるようなニュースが飛び込んできた。五月二二日に反対派円卓会議が結成されたのだ。六月一〇日には社会主義労働者党と三者協議の開始を合意し、そこには権力にある党、政治的反対派、「第三勢力」として非政府組織の代表者が参加することになった。それから、私にとって一番ショッキングだった行事が続いた。ほんの瞬間だけ、アメリカのテレビ画面を通して見た、六月一六日である。ナジ・イムレと殉教者の埋葬式である。その殉教者の中に、私の記憶の中に生き続けている

ギメシユ・ミクローシユがいた。

学期が終わり、ハンガリーに戻った。もう毎日、重要なニュースが降ってきた。ひとつだけ触れておけば、八月一日、ハンガリー政府は西側の国境を開放した。ハンガリーを經由して西側に行こうとする東ドイツの人々が、大挙して、ハンガリー・オーストリア国境に押し寄せた。彼らは大勢でハンガリーに流れ込み、最終的にハンガリー政府が鉄のカーテンを開放するという大きな決断を下すまで、何週間もここに滞留していた。

ブダペストのゲレルト丘に、気に入った散歩道がある。感性と倫理の難しいディレンマに直面していた（これについては後に触れる）。この散歩の中で、妻とともに、我々のもつとも重要な決断が形成された。もちろん、何よりもまず、それは私の社会的な役割にかかわることであった。

もつとも重要な決断とはこうである。「本質的な経路の修正を行わない」。「政治家か、それとも学者か」という選択は、すでに三二年間を通して、後者の役割を選択することで貫いてきたし、これからもそれは変わらない。

一九五六年に共産党から決別し、三二年間にわたって、政治運動に加わってこなかった。これからもこの道を進む。どの政党にも、どのような運動にも加わらない。

私の経済政策理解、政治理念、価値体系、世界観は成熟している。これらを変更する理由がない。これまでの見解に忠実に

ありたい。

私の原則がこれまでの人生経路を支配してきたのだが、それは何か頑固さとか、変更能力の不足からではない。前にもこれについて記述したが、運命的転換の時期に下した決断を説明するためにも、再度ここで叙述してみたい。というのも、これは私の人生を導いてきた思考であるからだ。これは以下のようにまとめられることができる。自らの諸判断において、自分自身についてであろうと、他人についてであろうと意見をもちたなら、その首尾一貫性に特別な価値がある。もつとも高い倫理的試練にも耐える人が、人生の基本的な問題について形成された見解や価値体系を変えなければならぬと感じる状況は生じ得る。私が忌み嫌うことは、人々が権力や富のために簡単に世界観を変えることだ。

一党制から自由選挙と複数政党制にもとづく議会民主主義への転換は、ただひとつの本質的变化を要求する。国の経済の立直しと市場経済への移行を助けるための諸提案を行うことに、心を開くことである。これまで、実証的研究にのみ専念してきた。これからは、規範的なアプローチ、経済政策の提案にそれなりの力を注がなければならない。

「感情的ピラ」出版の経緯

一九八九年八月初め、わが国が抱える経済的課題に関する考え方を述べるよう招待を受けた。KOPINT（景気循環・市場研究所）の大会議室は人で溢れた。聴衆を構成したのは、当時、形成過程にあるか、すでに一定の活動を開始した反対派政党と政治的運動の指導者、経済専門家、政治的な機能を果たすようになった研究者たちであった。

講演のテーマについて、長い時間をかけて考えた。専門家が政党指導者にどのような考えが形成されているのか、どのような経済構想が政党プログラムに含まれているのか。これらのことを考え抜いてみた。

丁寧に講演の準備をした。精神的に非常に緊張し、興奮した状態で出かけたが、外見や声の調子からはそれは感じられなかっただろう。聴衆の多くは会合を渡り歩いている人々で、彼らにとって私の講演はそのうちのひとつに過ぎなかった。これに対して、この行事は私にとって特別なものであった。三三年前、一九五六年夏に、若い改革者として包括的な提案を経済研究所に提出した。その数週間後に、ナジ・イムレ側近の委任で、革命政府が国会に提案するはずの経済プログラムを作成した。結局、それは最後まで完成することなく、陽の目を見ることはな

かった。それ以後、包括的なプログラム提案を行ったことはなかった。個人の研究者としての経路の中で、この講演は新たな時代を開くものだったから、深い心の動揺を抱えながらこの瞬間を過ごしていた。

一時間の講演の後、活発な議論が行われ、同意する意見、反対する意見、質問と回答が続いた。

それから二日経って、背中の下の部分物が物凄い痛みを伴う痙攣に襲われた。ハンガリーで「ルンバークー」(ぎっくり腰)と呼んでいるものだ。ドイツ語で *Henschuss* つまり「魔女の祟り」と呼んでいるものだ。このような時、ほんの少し動くこともできないように感じる。ようやくベッドに辿り着き、それから一〇週間もベッドで、うつ伏せになって過ごした。脊椎骨の間に神経が入り込み、これが物凄い痛みを起こし、なかなかその痛みが引かないのだ。いろいろな治療を受けた。注射、強い薬、後になってリハビリや水泳が痙攣を和らげてくれた。

時間を先に進めるが、一九九〇年にニューヨークでジョン・サルノ教授を訪ねた。サルノ教授はリニューマチ学の主流派(この専門分野にも主流派が存在する)から外れ、精神的な緊張やストレス状態が、運動組織の痙攣や機能不全を導くという理論を研究していた。有用なアドヴァイスを受けた。私が学んだことから言えることは、一九八九年夏に起きたのはまさにこれに間違いはない。今こそ国の経済再建に意見を述べることができる

(内的な強制から、そうしなければならぬと感じた)という大きな責任感情に嵌ってしまったのだ。私の議論に反論がなかったとしても、この腰痛の経験そのものが政治的な役割を請け負うことに反対する有力な根拠になり得る。政治家が重要な役割を負う度に病に陥ってしまうのではどうしようもない。

痛みが和らいできると、仕事がしたくなる。最初は講演をもとに論文を書くことに準備した。しかし、概念化を始めた途端、論文ではなく、著書になることが分かった。すべての研究や著書は自分の手で書いた。以前はタイプを、後になってパソコンを使いながら執筆した。しかし、その時には選択の余地がなかった。今までにない、口述筆記を選択する以外になかった。私の同僚がこの難しい仕事を引き受けてくれ、ベッドで口述した文章から印刷所に回される原稿が仕上がった。この仕事は数週間続いた。

病床時に私の周りで世話を焼いてくれた人々を、感謝の気持ちで思い出す。医師で友人のバーリント・ゲーザは度々ベッドにやってきて、私の気持ちを和らげてくれた。立ち歩きができるようになってからは、リハビリ師の友人ドラシユコツィ・エステルが面倒を見てくれた。入院当初は付き添いが必要で妻が傍にいられない時には、従姉妹のディツカー・マリアや友人の誰かが傍にいてくれた。多くの見舞い客がやってきた。手稿が進んだところで、多くの人々にそれを見せ、意見を聞いた。

政治的グループで活動している経済学者も相談にやってきた。新聞記者も現れた。忘れられないのは、初対面のボサーニー・カティが気軽にベッドの端に座り、私にマイクを向けたまま、長時間のインタヴューを行ったことだ。

病床に臥して六週間目の終わり、一〇月一日に『感情的ピラ』が出来上がった。この著書を担当したエリーニイ・アークネシユのようなエネルギーで人間的な編集者に出会ったことがない。当時のことを考えれば、奇跡に近い速さで、一月中旬にはもう書店に出回った。

最初の反応

発刊からほどなく、ハンガリーの日刊紙、週刊誌、雑誌に最初の反響が現れた。タマーシユ・ガシユパール・ミクローシユは、「コルナイ爆弾」というタイトルで、短評を寄せた。すでに経済危機への対処や再建について多くの議論が展開されていたが、『感情的ピラ』はこれらの議論に爆弾を落とすことになった。

担当医師の一人が背中を聴診し、注射を打つ間、「今は蛇口からコルナイが流れ出ているようだ」とコメントしたものだ。数週間のうちに、この著書に関連して、五〇以上の記事が現れた。種々の批評が見られた。多くは私の議論を正当なものとも

なしたが、「賛否両論」の見解を表明したものもあった。さらに、私の提案に対して、強く反対する議論もあった。批判の多くは文明的な手法で表現されたが、個人攻撃的な粗野な批判もあった。ここでも、先に本書で触れたような「論争技術」に出くわした。「論争相手の言葉を取り出し、本質的な点をひとつ取り出し、それを文脈から剝がす。そして、この命題を議論する」。

著書はベストセラーになり、版を重ねた。三ヶ月で議論が頂点に達し、その後、次第に沈静化した。そして、メディアは別のテーマに移って行った。

一九八九年九月には学期が始まるのでアメリカに戻る必要があった。しかし、病のために出発できなかった。ようやく、学期の終わり頃にケンブリッジに戻り、そこから議論が沈静化するのを見守ることになった。この間に、著書の英訳が出来上がった。

英語版の著書には、ハンガリー語版とは別のタイトルが付けられた。*The road to a Free Economy, Shifting from a Socialist System: The Example of Hungary.* この主タイトルはハイエクの『隷従への道』(*The Road to Serfdom*)から借りたもので、読者にこれを想起させる意図があった。英語版の「前書き」で、この著書がハンガリーへの提案を行うものだが、他の諸国の経済再建にも適用できるような一般的教訓を引き出そう

とされていることに、読者の注意を喚起した。英語版に続いて、相次いで各国語版が出版された。ロシア語（二つの出版社から）、チェコ語、スロヴァキア語、フランス語、イタリア語、スペイン後、ポーランド語、ウクライナ語、エストニア語、日本語、セルビア語、タミル語、シンガリーズ語（この二つはスリランカで使用されている言語）、中国語（最初に中華人民共和国で、次いで別の出版社が台湾で）、そして最後にヴェトナム語である*。

* 合計で一七カ国の言語で出版された。私の知る限り、ハンガリーの社会科学書で一番多くの外国語に翻訳された作品である。

出版された諸国で、大きな反響を引き起こした。主要日刊紙でこの著書を取り上げたのは、*New York Times*、*Le Monde*、*Neue Zürcher Zeitung*、*Financial Times* である。⁽²⁰⁾ 外国での受け止め方は、ハンガリーと同様に、さまざまだった。絶賛するものから半ば賞賛するもの、半ば留保する見解から完全な否定的批判に至るまで、実に多種多様だった。とくに、かつての社会主義地域に共産主義でも資本主義でもないものを期待する人々には不評だった。

英語版の出版にあたっては、ハンガリー語の原文を修正した。ハンガリー語版への評価を勘案して、一定の修正と補足を行っ

た。この変更については、ハンガリーの専門雑誌 *Közgazdasági Szemle* ⁽²¹⁾ が公開した。他の外国語出版はすべて、この修正された英語版をもとにしている。

この当時、多くの場所で『感情的ピラ』に関連した講演を行った。著書の内容のポイントを詳細に展開したり補足したりし、これらを雑誌にも掲載した。

一九九〇年にオランダのティンバーゲン記念の年次講演に呼ばれた。体は弱っていたが、精神的な新鮮さを失わない教授を再び目にする事ができた。前にも触れたとおり、ティンバーゲン教授は私が研究者の道を歩み始めた頃の恩師の一人である。記念講演の趣旨にそって、民営化の原理に関する私見を展開した。⁽²²⁾

アメリカ経済学会から一九九二年年次総会のエリー・レクチャーへの招聘を受けた。ここでは、ポスト社会主義過渡期における国家の役割について話した。⁽²³⁾ この講演の中で、「社会主義体制は未熟児として誕生した福祉国家を創出した」と述べたが、以後、この文言が多くの批判を受けた。しかし、この見解は今でも正しいと考えている。

ストックホルムでは偉大なスウェーデンの経済学者グンナール・ミューラー記念の年次講演を行った。一九九二年のミューラー記念講演である。金融規律の強化と予算制約のハード化について話した。⁽²⁴⁾

以下では『感情的ピラ』の内容を扱うが、これら講演の内容も含めている。本章の対象期間の終わりを一九九二年としたのは、この理由による。

以下の節では著書とそれに関連した最重要な提案、ならびにそれに関連した反応を簡単にまとめた。現在の視角から見た評価を添えて、これを補足したい。

スイミュレーションはもう沢山だった

『感情的ピラ』は改革社会主義の最後の段階において提起された所有関係に関する思考を強く批判するものだった。これはいわば「木材から鉄の輪」を作ろうとするものだ。本当の私的資本なしで資本市場を作ろう、国营企業のクロス所有を通して別の国营企業の所有者になろう、国家官僚によって管理される「持株会社」が所有者機能を果たすべきだ、ユーゴスラヴィアと同様な自主管理が必要だ、等々。著書ではやや苛立ったトーンで次のように記述している。「もうスイミュレーションは沢山だ。もういろいろなスイミュレーションをやってきたではないか。国营企業が利潤最大化を図る企業を真似る。官僚的へ構造変革政策で競争を真似る。価格庁が市場の価格決定を真似る。さらに、擬似的株式会社、擬似的資本市場、擬似的相場がこれに加えられる。これではプラステイックで造ったウォー

ル・ストリートだ。これは本当の銀行でも、株式会社でも、資本市場でもない。ただのモノポリー・ゲームではないか。それもプラステイックのお金で遊ぶゲームでなく、大人が公金で遊ぶゲームだ」⁽²⁵⁾。

この批判は、経済界や党指導部の開明派で、変化に積極的な人々と協力して、社会主義経済の改革を前に進めようとするハンガリーの経済学者に向けられたものだ。この中には、活動的な人々、変革者、さらにはイデオログが参加していた。以前の章で、彼らの行動を私がどう評価したかや、このグループが私の仕事とどのように関係しているのかを詳細に記した。今、出版当時から一五年を経て、再び彼らの批判を読んでみると、当時の指導的な「改革派経済学者」ほど、私の提案を断固として拒否しているのを確認できた（そのうちの何人かは知的な論争に相応しくない、粗野で個人攻撃的なトーンで）。

セグヴァーリ・イヴァーンは、次のように記した。「コルナイの著書は、我が国の経済学界に、これまででない驚きや不快感、知的消化不良を引き起こした。なによりも、コルナイがハンガリーの改革経済学の多くの公理に疑義を唱えていることが、この消化不良の原因である。これは過去に遡っても、また将来にわたっても、きわめて不快なことである。過去に遡ってというのは、真実、つまり真の改革の内容は周知のもので、これをへただ、行政や改革の内外の勢力がサポータージュしているとい

う、あまりに安易な主張と直面することになるからである」⁽²⁶⁾。

シムイエン・アンドラーシュは、感情的な反応に社会心理的現象、つまり経済学者の世界における認知的不協和の低減を見た。コルナイの著書は、「王様は裸で、国家所有をどんな仮装で装うとも、私的所有とはほど遠いことを述べている。だから、szocpg (szocializmus politikai gazdaságtana 社会主義政治経済学) を忘れ去るだけでは十分ではない。その影響を受けた改革派経済的思考の多くの「成果」から明らかなように、不要な装いはもう沢山で、一刻も早くその思考から解放されなければならぬ」⁽²⁷⁾。

著書で唱えた主張をランク付けすれば、一番重要なのは、「社会主義体制を繕うのは諦めろ」である。第三の道など存在しない。ハンガリー語のテキストは、この見解を断言したものになっている。英語版ではこのメッセージをタイトルに込めた。意図して、一目瞭然なタイトル *The Road (A Road)* ではなく) を選んだ。最初から、「第三の道」などないことを明瞭にしたかった。社会主義体制から決別したのなら、歩むべき道は資本主義制度しかないということだ*。

* 一九九一年にスタンフォード大学のタナー記念講演に招聘される榮譽を受けた。タナー記念講演を行った歴代の講演者は、次の通りである。レイモンド・アロン、ケネス・アロー、サウル・ペ

ロー、ヨシフ・ブロスキー、ミッチェル・フーコート、ユルゲン・ハーバーマス、ヴァツラフ・ハヴェル、ロバート・ノズイック、カール・ポパー、ジョン・ロールズ、ロバート・リーティ、ヘルムート・シュミットである。私の演題は、「市場社会主義再考」であった。「感情的ピラ」で簡単にまとめた「オスカー・ランダゲの理論的ヴィジョンの実現を阻む社会的・政治的要因」を詳細に展開した。

この問題は一時、論争テーマから外れてしまったようだ。実際、「第三の道」のヴィジョンは生き残っており、今再び陽の目を見ようとしている。資本主義が不正に満たされることは不可避であり、人間の尊厳が傷つけられる。経済的問題があると、人々は現存する諸関係に怒りを向ける。古い制度には戻りたくないが、新しい道を拒否する思考に親近感を抱くようになる。いろいろな思考が混ざって、どこかで出会った古いヴィジョンが現れる。ロマン的で「人民的」な反資本主義、ナチ的な反銀行主義、金権主義や弱肉強食資本に対する扇動、多国籍企業やグローバルイゼーションを悪魔視する新左翼的ヴィジョン。その具体的な経済学的内容よりは、分析の不明瞭さや概念の混乱で批判されるべき見解も存在する。国家と経済との関係の穏やかな改革を提案する穏健派社会民主主義者の提案がこれなのだ、それを「第三の道」と名付けると、聞こえが良いのである。

現在の眼で見ても、東欧の経済学的思考が訳の分からない概念や理念に満ちていたその歴史的瞬間に、単純かつ明瞭な言葉で真実を語ったことが、『感情的ピラ』のメリットだったと考えている。明瞭であること。それは今日でも適時的な要件である。

民間セクターの健全な発展のために

著書では所有関係の再編成を経済体制転換の最重要な課題とみなしている。『社会主義システム』で展開した思考を敷衍した。ここでは、所有関係が調整形態（市場メカニズムや官僚メカニズムの相対的ウェイト）より、体制を構成するはるかに深い層であることを明らかにしている。社会主義市場経済でなく、「修飾語なし」の市場経済を創出しなければならぬだけでなく（当時、こういう表現が流行していた）、肯定的な「修飾語」をもつ資本主義的市場経済を創出しなければならない。そこで私の所有が支配的な役割をもっているのだ。

ここで、著書で示した見解を国際的な論争の場に引き上げてみたい。経済学者は二種類の代替案を提案していた。そのひとつの戦略は、『感情的ピラ』が提案した民間セクターの有機的发展の支援である。民間の起業の前に立ちはだかる障害を取り払い、生産への参入の自由化を図ることである。新しい民間の

起業家創出を促進し、そのために国家的支援も必要である。国营企業の所有権を叩き売りしてはならず、適正な価格で販売しなければならぬ。国家の所有権を無償で分配してはならない。国营企業が存続不能であれば、速やかに清算しなければならぬ。これらすべてが予算制約のハード化を伴わなければならない。

このような所有関係の転換は急速なテンポで起こり得るはずがなく、徐々に進行する。西側の論争では、これを「漸進主義」戦略と名付けていた。

これに対抗する提案は、国家所有の速やかな解体を強調する。古い国营企業の売却が短期には進まないで、買い手待っている時間はない。国家所有を解体して、配給券（クーポンやヴァウチャー）の形で国民に分配しなければならない。すべての国民は国家資産の一定部分を取得できる。配給券は（投資ファンドを介して）株式会社化された国营企業の所有株券に交換できる。この戦略を推進した人々は、もちろん私的な起業家の創出に反対しないが、政治家も経済専門家も官僚もそれに注意を向けずに、クーポンの民営化のみに関心を奪われてしまった。『感情的ピラ』は無償分配を厳しく批判した。「私見によれば、これはグロテスクな思考だ。これはあたかもすべての父であった国家が急死した状況を想起させる。孤児になった子供が遺産を平等に分け合うようなものだ。分配することに重点を置くの

ではなく、より良い経営者に所有権が渡ることに重点を置くべきなのだ⁽²⁸⁾。

民営化のテンポについて、アメリカ経済学界の二人の巨匠であるミルトン・フリードマンとポール・サムエルソンの見解を知ることができた。^{*}フリードマンは意見を書面に認めた。私の著作に敬意を表し、提案の多くの点で同意できるとしたが、民営化に関する漸進的な見解は正しくないと述べた。^{**}「この面ではコルナイ氏は十分にラディカルではないと思う。ショック療法が必要である。詳細については言えば、外国人に国家所有を叩き売りするのは好ましくない点では同意できるが、国家によって管理されている企業の民営化を緩やかなテンポで行うことは同意できない」。

^{*} 『感情的ピラ』の翻訳原稿に対して、ケネス・アロー、マーティン・フェルドスタイン、ロバート・マスグレイヴ、ジェフリ・サックスが意見を寄せてくれた。紙幅の関係で、彼らのコメントに触れることができない。

^{**} フリードマンはもうひとつの点で、私と見解を異にした。転換期において為替平価を固定する提案を断固として排した。市場経済の要件と両立しないという理由である。この見解を受け容れることは出来なかった。他の経済学者と共に、過渡期の混乱期には固定平価が必要であるという点を確信していた。この「アンカー」が新しい価格体系の形成と安定化をもたらした。

返信では民営化に関する自らの見解を再論しただけでなく、別の問題に関連したことも認めた。「我々の見解の相違には共通の原因があります。それは我々が議論している地域との距離です。この地域では私は内部から、ブダペスト、ワルシャワ、ブラハから観察しており、所与の出発点を現実的に前提する必要があります。同時に、これらの諸国をはるか遠くから観察する人は、その地域の人が内部深くに入りすぎて見過ごしてしまう重要な問題に気が付くことがあります。それゆえ、頂いた批判的コメントに感謝し、それらを再考したいと考えます⁽²⁹⁾」。

サムエルソンは初め、MITフアカルティ・クラブの昼食時の会話で意見を述べ、それから数週間経て、日刊紙に論文を寄稿した。^{*}この論文の前半は中国の改革を扱い、後半で私の著書に言及している。「ほんの今、この著書の英語訳を手にしたが、これを推奨する」。著書のいくつかの提案に同意しつつ、とくに民間セクターの発展に関する部分を取り上げている。「コルナイは、住民が民間セクターに対して〈社会的敬意〉を払うように勧めている。妬みや、利潤を求める実業家を詐欺師や略奪する鮫と同一視するのは、百害あって一利もない。ハンガリーには新しい中間階級が必要だ。ナポレオンはイギリスを商人国家として蔑んだ。しかし、コルナイはナポレオンではない⁽²⁰⁾」。

^{*} このタイトル ("For Plan to Reform Socialism, listen to

(Janos Kornat) はやや誇張に過ぎるものであった。

民間セクター形成の二つの戦略に戻るが、この選択肢の背後には価値の選択も隠されている。有機的な発展を唱える者は、社会的階層の再編成、市民階層化、新中間階級、新しい所有者・起業家層の形成を重要なものと考えている。これに対して、無償の配分を唱える者は、速度を盲信している。『社会主義システム』の書評論文で、クラウスとトゥリスカは、「速度を絶対的な本質と考えた。したがって、速やかな成果を生み出さない戦略を実現可能なものとはみなさなかつた」と記している。

当時の西側の議論、たとえばワシントンの国際金融機関、政治家たち、著名な大学教授たちの議論では、「加速化」見解が支配的だった。何人かは私と同じように考え、漸進的な戦略を正しいと考えていたが、これは西側の議論では少数派だった。ポスト社会主義過渡期の問題処理で当該諸国の政府に影響力を行使した西側の経済顧問たちは、ほとんどが民営化の加速化を推奨した。

実際の事態の進行は国によって異なっている。無償の国家資産分配が大きい国もあれば、小さいか、あるいははまったくない国もあった。民営化が急がれた典型例がロシアであった。この戦略が富の分配における信じられない集権化をもたらし、一部の新興実業家「オリガーク」による支配を導いたように、世界

史的に見ても重大で、逆転不能かつ不幸な結果を生み出すのに大きな役割を果たした。

ハンガリーでも資産分配方式の提唱者がいた。国会にもこれに関する法案が提出された。結局のところ、我が国では民営化の加速化戦略は実現せず、実際の事態の進行は『感情的ピラ』の提唱に近いものになった。しかし、私の著書がこの点でどのような役割を果たしたのか、誰も何も語っていない。

一五年を経た現在、ほとんどの専門家は、漸次主義的見解の提唱者が正しかつたと考えている。^{*}

* ジェフリー・サックスとは初期の段階で意見の一致を見ていたが、後に「加速主義」の提唱者に加わった。相互に意見を戦わせて説得する会話を何度ももつたが、成功しなかつた。それからかなり後に、ロシアの事態が明らかになつた段階で、この論争は私の方が正しかつたと認めた。

『感情的ピラ』における所有に関する推論で、ひとつ誤りを犯したことに触れておきたい。私の提案は外国資本の流入を排除するものでなく、直接投資の有用性を指摘するものだった。しかし、これに適切な重要性を付与しなかつた。直接投資がハンガリー経済、とりわけ新しい民間セクターのもつとも重要な動力であり、輸出と技術発展に基幹的な役割を果たすことを前

もって予測することができなかつた。

公的資金に対する責任

民間セクターの割合が一挙に増えるのではなく、徐々に増大するならば、国家セクターは一瞬のうちに消滅することはない。かなりの期間、国家所有と民間所有が並存することになる。

『感情的ヒラ』では、私がどれほど国家所有に対して不信感を抱いているかが表現されている。国営企業の経営者が自らを実業家とみなし、実績を要求される私的所有者のように自立性と経済的自由を享受することに対して、異議を申し立てた。国の資金で経営している者は企業家ではない。とくに、従業員への資産譲渡、実際には経営者への譲渡が起きることを恐れた。

「国営企業の経営者は自らの姿勢を正さなければならぬ」という条件を課した。後の経験はこの呼びかけの正しさを証明している。ただ残念なことに、正しい思考を実際の法的規制の文言に概念化することができなかった（たとえば、国家セクターに対する基本的な割当枠を国会で承認するように提案した）。市場社会主義的改革で国営企業の経営者に大きな権力を与えようと闘ってきた人々は、私があたかもスターリン型の計画指令制度を再構築したいかのように皮肉ってこれを読んだ。残念ながら、『感情的ヒラ』の警告は人々の耳を素通りした。

減少傾向にはあつたが、依然として国営企業や民営化にはかなりの職権濫用や腐敗が見られた。政府や政治家の監視は十分でなく、民営化手続きも透明でなく、新聞や社会的組織もこれを追及する能力がなかつた。もちろん、これはハンガリーに固有の問題ではなく、この地域の諸国における民営化の随伴現象であつた。

著書ではこれよりはるかに一般的な問題に注意を喚起しようとした。それは民主的なプロセスを借りて、公金の利用を公開監視しようという提案である。国営企業の監査は、重要な問題ではあるが、このひとつの部分問題である。ひとつの焦眉の問題を使って、公金に関するメッセージを伝えた。

「ハンガリーでは万博開催の是非をめぐって議論が続いている。この問題は国会に提起される。そこで、次のことを提案したい。

この提案を国会に提出する政府の責任者、委員会メンバー、政務委員は提案の担保として、それぞれの個人資産（住宅資産、別荘、車、美術品）を提供すべきである。これらの資産総額は予想される投資額に比して大きいものである必要はない。その僅かな割合で十分である。とはいえ、この提案を提出する個人がそれまでに蓄積した資産のかなりの部分を担保に含めるべきである。万博法案は、万博が約束された通りの収益をもたらせば、これを報奨金として万博の提案者に分けることを予め規定

してよい。同時に、万博が損失をもたらした場合の担保の取用を、明瞭に規定しなければならぬ。失敗の場合を想定して、提案者が移転できる住宅を保証する必要がある。このような方法によって、自らの資産でリスクを負うことの意味が、提案者に明瞭になると考へる⁽²²⁾。

国会ではこの「感情的ピラ」の譬え話が何度も引用された。しかし、この事例が示した「公金使用を決定する者は、首尾一貫した個人的責任を負うべき」という基準に、少しでも近づいたとは言ひ難い。

安定化のための手術

マクロ経済の章では、現在の視点から再考してみると、正しい思考と誤った思考を展開していた。

著書がインフレ抑制に力点を置いたのは間違っていないが、ポスト社会主義の地域ではインフレの加速化が現実的問題になり、多くの諸国では転換以後の数年にわたり、危機的な状況を迎えた。ハンガリーでは転換前の時期から年々インフレが進⁽²³⁾行し、「感情的ピラ」執筆年には一七％であった*。同様の理由で、財政均衡の復位も緊急を要する課題であった。「感情的ピラ」出版時には、これらの問題について、コンセンサスがなかった。多くの人は高いインフレ率と大きな財政赤字は体制転換

に付随するもので、これを阻止することも、これに対処することもできないと考へていた。財政・金融規律の強化はけつして自明のことではなかった。

* 政府は著書が強調した諸提案を受け容れなかった。インフレはさらに加速化し、一九九一年の消費者物価上昇率は三五％になった。

マクロ経済プログラムの提案において、重要な条件設定で誤りを犯した。それは生産が縮小しないという前提であった。この時期、専門家の中には、国内の構造転換、東の市場の狭隘化、輸入自由化によって、国外から流れ込む商品との競争で、国内生産への需要が減少し、したがって供給が減少し始め、さらにまた需要を減少させると言うように、需要と供給の相互縮小パイラルが不況を導くと予測していた人がいた。

『感情的ピラ』が大きな論議を呼んだのは、所有関係の漸次的改編とは逆に、マクロ的安定や価格自由化で速やかな実行を提案したことだった。ハンガリー経済の治療に、安定化手術を提案した。用語の解説から始めよう。国際的論争ではショック療法が幅を効かせていた。二つの理由で、この表現を避けたかった。これを戦略として提案する人々は、民営化もマクロ均衡の復位も、非常に速いスピードで実行することを主張していた。

これに対して、私は所有関係の面では「漸進主義」をとり、マクロ的安定では急進的で速やかな対応を正しいものと考えた。

それゆえ、命名が「安定化」という表現を含んでいることが大切だと考えた。二つ目の理由は、シヨック療法という言葉に纏わる嫌悪感である。当時、ハンガリーではケン・キージーの小説『カッコウの巣の上で』が知られていた。それから素晴らしい映画が製作された。映画ではジャック・ニコルソンが扮する反逆する勇敢な主人公に、シヨック療法を加え、精神的ダメージを与える。精神医学ではシヨック療法の有用性が議論されているが、この類推自体が恐ろしい想念を引き起こすことは間違いない。さらに、誤解すら招くものである。経済安定化が必要な時に、「シヨック」に治療効果はない。予想される良好な最終効果を得るために、場合によっては試しても良いような副次的な処方かもしれないが。

一九八九―一九九〇年の安定化手術提案に関する論争に戻ろう。ハンガリーでは私は非常に孤立していた。経済学界も政治勢力も、私の提案を受け容れなかった。他国では（ポーランド、チェコスロヴァキア、ロシア）、この急進的な解決策を選択した。最初の二つの国では、これは疑いなく成功したと言える。『感情的ピラ』の批判者は、安定化手術に失敗宣告を与えていたが、^{*}ロシアに関しては、急激で多くの犠牲を伴う安定化が必要だったのか、それともそれを避けるべきだったのか、

国の将来にとって有用だったのか、それとも有害だったのかで、国内外の専門家の意見が現在でも分かれている。

* 「安定化手術」という表現は、批判者のブラック・ユーモアに格好の機会を与えた。「手術は成功したが、患者は死んだ」というような。もうひとつのジョークに、「先生、手術しましょうか、それとも解剖しましょうか」というのもある。多くの国の歴史が明瞭に証明しているように、安定化政策の加速化はメリットもデメリットも伴っており、その最終帳尻がプラスであることもマイナスであることもあり得る。しかし、それが「死」の破壊的結果を導くものではない。これらのジョークは誤解を招くものである。

読者はお分かりのように、私は自己批判的な眼で、一九八九年の著書を再検討している。この問題について、以前の見解を再検討することにやぶさかではない。ただ、率直に言えば、明瞭な見解を形成できないのだ。ハンガリーでは一九八九年以後も、グヤーシュ共産主義のポピュリスティックな経済政策が横行されてきた。政府は交代したが、マクロ的均衡の復位を引き延ばしてきた。痛みの伴う不人気な行政措置を伴うからである。ポピュリスティックな経済政策は最終的に、一九九五年にハンガリーを危機の崖っぷちに立たせることになった（これについては次章で触れる）。この時になって、政治家や経済学者は一九九〇年に『感情的ピラ』の提案を受け止め、マクロ的均衡回復に必要な

な政策パッケージを実現しておくべきだったと認めた。一九九〇年であれ一九九一年であれ、それは苦痛を伴うものであっただろうが、五年後より住民への負担は軽いものだっただろう。加えて言えば、体制転換のユーフォリアの中で、安定化のために犠牲を求めることが、抵抗が大きくなった後年の時期より、容易だったはずである。

仮定法による問題提起は、歴史分析の視点からは面白いだろうが、最終的には実現しなかったものである。事実は安定化手術に必要な政治的意欲が欠如していたことであり、事態の深刻さが政治的意欲を実現させるほどに、ハンガリーの状況は深刻ではなかったということだ。

収支バランス

運命の転換を迎えていた時期の著書執筆を振り返って見ると、自分の中で疑念が湧いてくる。当時、自分に課せられた課題をうまく振り分けしていたか、力を分散し過ぎなかったか。『社会主義システム』の執筆を急ぎ、発刊を急いだ方が良かったか、ではないか。『感情的ピラ』の発刊を待つべきではなかったか、これをさらに彫琢すべきではなかったか。

* 一九九九年、世銀の招聘で、ワシントンで講演した。そのタイ

トルは、『感情的ピラ』出版から一〇年。著者の自己評価（Kornai, 2001）であった。当時の提案のいくつかに触れ、その後運命と現在の視点からそれをどう見るかを評価したものである。事後的にも再確認した点もあるが、一〇年経て批判的に考えている見解もある。ここでも私はナイーブだった。転換から一〇年を経て、当時の意思決定責任者や事態の形成に大きな影響を与えた顧問たちが、自らの思考を自己批判的に検証するものだと考えていた。残念ながら、私一人だけが自己点検を行ったドン・キホーテだった。

この疑念の最初の部分は、すでに前章で答えた。否定的な回答を与えたのは、『社会主義システム』では焦眉の課題に提言することができないからだ。大袈裟に聞こえるかもしれないが、この著書は過去の時代に関するもので、社会主義体制の一人の証人が可能な限り正確に報告しようと思図したものである。証言は正確でなければならぬ。この総括的な著書ではすべての文言や修飾語に重要性を付与している。だから、僅かたりとも拙速を避けたかった。

これに対して、『感情的ピラ』は将来、それも近未来のポスト社会主義過渡期の緊急的課題への提言である。すでに頭の中に文言が収まっていたから、その分、他の人より一歩前に進んでいると考えた。だから、これをなるべく早く公表することが、義務だと感じた。著書の「個人的後書き」で、「この研究を急

いで文章にまとめるようにした。もちろん、それはあり得る誤りの言い訳にはならない。ともかく、今回はより厳密な研究が要求する概念の再構成を行わなかった⁽²⁴⁾。このリスクが大きいことは分かっていた。急いだために、簡単な文章の間違いも残ってしまった。後でこの問題にかかわった人は、最初の論争から学ぶことができた。多くの著者が一、二年後に提案を提起し始めたが、それらはよりバランスのとれたものになっているはずである（もつとも、的を射ているかは別問題だが）。

不正確さや不自然な誇張を避ける上で、共同作業は役に立つすでに円卓会議の場でも経済政策問題は取り上げられたが、体制再編の政治的・憲法的な問題に焦点が当てられていた⁽²⁵⁾。私が一人でベッドの上で著書を書き急いでいた頃は、政治勢力や政治組織の経済政策は完成しているか、完成途上であった⁽²⁶⁾。当時、ブダペストでは二つの権威ある委員会が機能していて、慣例的な手法で提案をまとめていた⁽²⁷⁾。討議材料を準備し、これを委員会にかけ、議論し、合意する。そして、最終的に提案が公表される。多くの点で私と同じような結論に達していたが、私のものに比べて、鋭利さに欠けていた。「挑発的」でなかったため、大きな議論を引き起こさなかった。

法律、政令、大きな行動プログラムの怠りない準備には、集団的な討議、チームワーク、委員会の合意が不可欠であることは、重々承知している。委員会の仕事に時間とエネルギーを犠

牲にしている同僚をたいへん尊敬している。率直に言えば、私は常にこのようなタイプの仕事を敬遠してきた。私は自らの見解を明瞭に維持したい。だから、コンセンサス形成のために譲歩をしなければならぬような仕事を嫌う。それも必要だと分かっているが、この仕事を他の人に渡したい。もつと柔軟で、外交的センスがあり、コンセンサスが強制されても苛立たない人々に。意思決定を準備する民主主義のプロセスでは、未だ彫琢が加えられる前の粗野な形で、代替案が構成される。この後に、議論と決議提案の仕上げが来る。この点について言えば、私はこのような社会的分業の賛同者であるが、自分の役割に關して言えば、できれば最初の部分に限定したいのだ。この段階であれば、誰かと合意を図る必要がなく、自発的なイニシアティブと鋭利な概念化に伴うリスクを請け負うだけで良い。

この面でも、反響が分かれた。ある者は、一人で国の経済政策を仕上げたことを「例のない精神的営為」とみなしたが、他方で「孤独な足掻き」と悪口を言う者もいた。

著書や論争材料を今読み返して、いろいろな感情が湧き上がってくる。国外の反響は特別な感情なしに、専門的な関心だけで読み通すことができた。しかし、ハンガリーの論争は、感情的に掻き乱される。当時ほどの深い感情ではないが、それでも歴史的な瞬間の雰囲気を感じられる。すべての世代にとつても運命的な転換を経験することは非常に稀なことだろう。個人の

人生にはなおさら例外中の例外であり、人生に一度の経験だと
言える。

『感情的ピラ』執筆時に、この歴史的事象の中にいられたこ
とを嬉しく思う。私の提案が正しかったとしても、あるいは誤
っていたとしても、それが受容されたとしても、されなかった
としても。とにかく、人々の思考に影響を与えたことだけは断
言できる。私が記したすべての問題は、皆、ハンガリーの空気
の中に存在していたものだ。種々の政治的グループがそれにつ
いて議論していたし、形成途上にある政党のプログラムの概要
も読むことができた。しかし、それらは単発的で思考の厳密さ
を欠くものだった。『感情的ピラ』の重要性は、まさにいまだ
確定していない論議に構造を持ち込んだ点にある。問題のプラ
イオリティを与えた。日常用語で言えば、^{*}討議の課題日程
(naprend)を決めたということになるか。ハンガリーの論
争の中で爆発してからは、何について議論しているのか分から
なくなるほど、まったく論議不能になってしまった。私が書い
たものを不快感から拒否し、彼が話していることと、私が著書
で記したことが同じことであることすら気付かせなくするほど
の影響を与えた。

* 政治分析家や新聞記者が使う今様の言葉を使えば、『感情的ピ
ラ』は一時、経済プログラムをめぐる論争を「取り仕切った」

(tematizálta)と表現できる。“tematizálás”と“naprend”は
流行語に属する。この種の流行語は忘れられるのも早い。後年の
読者はもうこの表現を知らないかもしれない。

著書とハンガリーの論争を読む中で、快い記憶だけでなく、
不快な記憶も蘇ってくる。今もなお、友情に欠けた、ほとんど
敵対的なトーンに胸が痛む。とくに以前には親しい関係にあつ
た人々から届いたものであれば、なおさらその痛みが薄い皮膚
に浸み透る。これもまた、私が政治家タイプでないことを証
明している。今では日常茶飯になってしまったが、当時の論争
でいくつかの粗野な雑言はどのようなトーンだっただろうか。
私の文言をねじ曲げた(日常化した現代のスタイルに比べれば、
まだ真つ当だといえるが)不正な論文が闊歩している時に、
私に向けられた罵詈雑言を飲み込み、平静に講演することがで
きようか。

時間の経過とともに、多くの苦い経験を乗り越え、何年もそ
れを意識することはなかった。フロイトの無意識の典型例である。
言うまでもなく、意識の奥底にあり、回顧が合理的な再評価を
開始させるだけでなく、当時の感性的な反応をも再生させるの
である。

まだ著書が書店の書棚に並ぶ前に、*Heti Világosság* 誌の
編集者の一人であるレーティ・パールが私のインタビューを行

った。その質問のひとつに次のようなものだった。「このプログラムが〈政党の頭ごなし〉ではなく、どこかの政党のものだったら、もっと容易に受け容れられるのではないか」。

この著書は第一回自由選挙が行われる前に執筆し出版された。将来の国家と民主主義のプロセスの結果として成立する政府に向けられたものだった。まだ、どのような政府ができるか、知る由もない時期だった。この編集記者に次のように答えた。「何か政党を超えた専門家組織が依頼を受け、私の提案を聞き、次いで実現するというようなことは考えられない。国会の多数の信任を得た政党がこれを自らのものにし、国会外にこれを阻害する反対勢力が存在しない場合に、この課題が解決可能になる」。さらに、次のような質問が続いた。「将来、顧問になったり、政治家の役割を果たしたりする意思があるかどうか」。私の回答はこうだった。「基本的に私は学問研究者のままでいたい。大臣にも議員にも顧問にもなりたくはない」⁽²⁸⁾。これに一言だけ付け加えておきたい。もし新しい政府のメンバーが私の意見を知りたい場合には、喜んで話すだろう。

これは次章のテーマである。

第20章 学問と政治の境界領域（一九九〇年）

——模索、苦悩と希望、医療改革をめぐつて

一九九〇年初頭に戻ろう。三月にジェフリー・サックスとともに会議を組織した。体制転換諸国の経済学者で、大学や研究所で経済政策に携わっている人々を招聘した。会議はヘルシンのWIDER研究所で開催した（かつて『社会主義システム』の執筆を始めた所だ）。安定化、民営化、過渡期の政策選択肢について、議論が展開された。二日目の会議が終わりに近づいた時のことだ。参加者の一人であるチェコの経済学者が、

会議の終わりまで留まっていることはできない、急いで国に帰らなければならないと告げた。半ば冗談のように、半ば真剣に「ヴァーツラフ広場に参集していない者は、大臣になれないのだ」と話した。

急いだ甲斐があった。間もなく彼は大臣に任命された。今、このヘルシンの会議の参加名簿を眺めて見ると、たいへん興味深い。かつての研究者の多くが、時間の長短はあれ、一九九〇年代に大臣、中央銀行総裁、議員、他の高い地位に就いてい

る*。

* 状況はハンガリーでも同じで、政治分野で目立つ人物や政治闘争の種々の場面で活動している人物は、多くが科学アカデミーや大学にいた人々だ。

私について言えば、ハンガリーのヴァーツラフ広場に急がなかった。いろいろな政治勢力が打診にきた。初期の頃だけでなく、後になっても、政治的役割を担う意思がないか尋ねてきた。種々の地位が提案された。大臣、党の首席顧問、議員。一度だけ、新聞に私が中央銀行総裁になるという憶測が流れた。私は非公式の話し合いの段階で、この提案を丁寧に断った。私は政治権力に近づこうという誘惑に駆られたことはないと言言できる。

どんなポストにも任命されることがないし、だから解任され

たこともない。他の人々のように、突然に権力の階段の高みに立ち、そこにしがみつきたくないし、その天辺から急に引き降ろされたくもない。前に記したような決意として誓ったことを実践している。「基本的に学問研究と教育の世界に留まる」とはいえ、今ではもう私の原理と対立する勢力が国の権力にあることを、自分には異質なことと感じなくなつた。民主主義ではすべての市民が、社会の出来事に責任をもつ。研究者や教育者としても新しい状況に入つたと認識せざるを得ない。これからは、学問と政治の境界領域で活動する。

ハンガリーのマクロ経済政策に対する見解

政治的な権力の地位を排除することが、ハンガリーの政治的出来事に中立的態度をとることを意味しない。それとは反対に、ブダペストにいがケンブリッジにいが、ポスト社会主義の過渡期に何が生じているのかを観察し理解することに努め、適時的な問題について意見を公表してきた。それらのうちからいくつかの問題を列挙してみよう。民営化がどのような原理にもとづいて行われているか。金融的規律の強化や予算制約のハード化のために何を為すべきか。国家の役割をどのような方向に転換しなければならぬか。年金制度や医療保険制度の改革に、どのような価値を貫徹させなければならないか。

これらの問題分析に先立つ研究は、集中的な勉強に裏付けられている。マクロ・ミクロ経済学の新しい成果を習得することで、以前に学んだものを再生・補足した。若い時には道案内を頼める人を探したりしなかった。しかし、幸運なことに、経済学の世界センターのひとつで、時間の半分を過ごしていた。何かアドヴァイスが必要になつたら、最良の専門家に尋ねることができた。

私の著作は専門雑誌に掲載された。私の仕事を自らの価値体系にしたがつて位置づけると、ここまで扱ってきた著書に次いで、専門家向けに記した研究論文を当該期間の本質的に重要な研究だと位置づけている。理論的研究成果のみならず、経済政策の形成に寄与するものについても同じように考えている。もちろん、どのような機会がより幅広い人々に私の思考を伝えることになるのかを勘案することにも、やぶさかではない。

多くの知識人は見解や提言をできるだけ早く、なるべく頻繁に、より広範な読者に伝えようとして、新聞のコラムを利用する。テレビでもあらゆる機会を捉えて出演する。問題を知らしめるために、キャンペーンを張ることが有用であることは理解している。私は自分の思考を「エリート的」あるいは「貴族的」な仕方では議論するのが好まないだけでなく、これらメディアを使った方法を避けている。他の問題と同様に、この問題でもリベラルな立場をとっている。大衆の情報フォーラム（水準

の高いものであることが前提だが、への出席を引き受ける人に敬意を払うが、このような役割を演じない人の行動も、同じように敬意に値すると考えている。私自身について言えば、この種の活動は緊張を要する難しい仕事で、この種の集まりに参加しようと思ったことはない。多くのことに意見をもつが、それをすぐに表明しないようにしている。^{*}数秒間に物わかり良くコンパクトに見解を表明するには、有能な政治家的資質が必要だ。私にはこのような意見表明の形式は相応しくない。議論を展開するか、議論を聞くのは良いが。

^{*} アメリカでも、新しい出来事に素早く端的に答えるテレビや新聞インタヴューが何度も申し込まれたが、若干の例外を除き、断った。

テレビ画面で私の顔が知られていないので、通りで質問されることはない。テレビや新聞で全国的な知名度を高めた専門家や学者を羨ましく思う瞬間もあるが、すぐにその羨望は消え、空しさが支配する。だから、著作に携わっていることで満足している。

私の一般原則から外れた例外があることを記した。とくに、ハンガリーの経済問題について広範な読者に訴えたことが、このような例外となっている。^{*}一九九二年、*Magyar Hirtel*紙

に、時宜的なマクロ経済問題に関する長い論文を書いた。⁽²⁸⁾ 経済停滞と慎重な調整政策が重いものを感じられたので、実経済の成長を強調する「半転換」(félfordulat)を提案した。この論文によって、「半転換」という概念が国内の通用語になった。この表現の運命を考えると、ひとつの思考ないし機知のある表現を政治的場面に「投げ入れる」ことが、いかにリスクの多いものであるかを証明している。正確に概念化しても、そこに含まれる内容の慎重な適用を注意しても、無駄なのだ。政治勢力の都合に合わせて、政争の道具として使われることを誰も止めることができない。

^{*} たとえば、著書出版の際のインタヴューとか、還暦のインタヴューのような個人的な理由による報道のケースがある。このような場合は、メディアの要請に応じている。

一九九四年に再び、マクロ経済状況の悪化が懸念された。一方では均衡状況の悪化、とくに經常収支の悪化が、他方で厳しい緊縮政策による経済成長の停止が懸念された。他の経済学者も警鐘を鳴らしていたが、私はしばらく悩んでいた。そして、最終的に決断が熟してきた。物凄いテンポで雑誌論文ほどの長さの著作を書き上げた。「もつとも重要なもの、それは持続的成長。マクロ経済的緊張と政府の経済政策について」と題する

ものだ。いつも手助けしてくれるボシャーニイ・カティの励ましもあって、この著作を *Nepiszabadság* 紙に掲載することに⁽²⁰⁾した。短い記事を好む新聞が、一面全部を使った著作の掲載を提案するのは異例のことだ。これだけの紙面をもらったことで、心おきなく詳細に議論を展開することができた。

論文連載は一九九四年八月末に始まった。多くの点で、この論文は後の調整・安定化プログラムの先駆となるもので、その思索的背景を準備したと考える。投資を犠牲にした消費が増え、消費対投資比が悪化することを深刻なものと考えた。賃金上昇と財政支出の急増が経済均衡を悪化（ますます悪化）させ、それが経常収支を危機的な水準に陥らせている。それゆえ、論文では人気のない苦痛を伴う経済政策を提案しただけでなく、それが不可避であることを説明した。同時に、通常の安定化政策が随伴するような劇的なリセッションを避ける調整が必要であることを強調した。

以前の意見表明と同様に、反応はさまざまだった。正しいと考える者がいた一方で、私の提案が十分に急進的でないと考える者もいた。例によって、私の見解をねじ曲げたり、曲解して説明したりする者もいた。かなり後になって、ハンガリーの政争から遠く離れている専門家がこの論文を高く評価してくれたことで、十分な満足感を感じることができた。私の七〇歳の誕生日を記念して、マクロ経済学の泰斗であるロバート・ソロー

が、この私の著作に対する詳細なコメントを記念論文 (*Festschrift*) として贈ってくれた。私の議論に同意を示しつつ、「第一に、節約に努める場合、成長がはるかに重要になる。第二に、GDPの縮小は他の安定化課題の解決をはるかに難しいものにする。第三に、長期にわたって停滞や減退が続けば、成長への転換が（その時期が到来しても）より難しくなる⁽²¹⁾」。ソローによれば、私の著作の哲学はハンガリーの瞬間的な状況を超えるものであり、その一般性は後年にも残るし、ハンガリー以外の諸国にも適用可能だという。

一九九五年三月にボクロシユ・ライオシユが政府の調整・安定化プログラムを発表した時には、全面的に彼を支持する立場をとった。私の方からアプローチして、私のテレビ・インタビューを放映させた。ここでは、苦痛と犠牲を伴う調整がなぜ必要なのかを分かりやすく説明することに努めた。この対話は、印刷物 (*Menedék* *tit*) としても出版された⁽²²⁾。

前MDF (ハンガリー民主フォーラム) 政府の大蔵大臣を務めたサポー・イシュトヴァーンとの話し合いも、私から求めた。このドラステイックな緊縮政策がなぜ不可避なのかを説明し、この調整プログラムに反対しないように、国会の野党席に座る議員諸君を説得すべきだと提案した。私の印象では、私の議論を理解して聞いていたように思う。少なくとも、反論はなかった。ただ、この僅かばかりの私の介入は役に立たなかったよう

だ。当時の野党は最大限の力で、調整政策に対抗した。

調整プログラムの一部が、憲法違反として最高裁判所に持ち込まれた。私は最高裁判所長官のショーヨム・ラースローを訪ねた。これは秘密のロビー活動ではない。合法的な行為として、問題に直接的な利害関係のない市民が、「法廷顧問」(amicus curiae)として、判決が下される前に意見を述べることができ。長官に対して、詳細な専門的解説を行い、なにゆえに速やかでラディカルな措置が必要かを説明した。直前にはメキシコ危機が勃発し、国家的危機を引き起こしていた。このような危機をなんとしても避けなければならない。このような緊急事態においては、事前の通告なしで、ドラステイックな法改正を行うことは憲法精神に反しない。調整パッケージの重要な部分を無効にした判決から、私の議論が、ここでも理解を得られなかったことが分かった。

それから後の一九九六年、あれから時間も経て統計的なデータで調整プログラムの成果を確認することができた。そこで、『リセションなしの調整政策』という文書をハンガリーで発刊し、OECDのパリの会議でもこれを発表した。国際的統計が示しているように、生産の縮小や失業の急増なしに苦痛を伴う手術が実行できたのは大きな成果だと報告した。中南米の金融危機における調整政策とは違う結果をもたらしたのである。

専門家のほとんどは私の評価に同意したが、これとは違う見

解も存在した。マトルチ・ジョルジュは私の見解を否定した。その論文のタイトル自体が、それを教えてくれる。「リセションを伴った調整政策」。私のマクロ経済的著作では、全体を概観することの重要性を強調した。持続的な成長の観点から、持続的で均衡のとれた成長経路へ向かわせ、そこに経済を留まらせる政策か否かという視点から、政策措置を吟味する必要がある。マトルチの著作には、後に経済大臣として実行した政策的視角が反映されている。強制された成長からの回帰すら考慮しない視角である。後の政策実行が示したように、過度で根拠のない財政刺激政策の実行は持続可能な成長経路から経済を逸脱させ、均衡の攪乱をもたらすのである。

調整・安定政策プログラム前後のインタヴュー記事や新聞・雑誌に掲載された論文は、一九九六年に書物にまとめられた。この著書は、『苦悩と希望』(Vergilids és remény)と題された。このタイトルは出来事への私の感性的反応を映したものであり、我が国の精神的状況を表現するものでもあった。

調整プログラムをめぐる論争期に、私は自らの強さと弱さを実感した。著作や講演で示した私の分析結果は、問題を明瞭化し、犠牲を伴う措置の受け容れを容易にするのに役立つたと思う。ケインズのような人物(経済学の領域から選ぶとすれば)なら、もっとたくさんの方が達成できただろう。真実を説き、動揺している人々や反対派を説得できただろうし、多くの人に、

それぞれの言葉で話しかけるタフネスがあったと思う。私はというと、著作の言葉で、著書や論文が十分な影響をもつと考え、自らの提案のために「ロビー活動」をすることがほとんどない。自分でもこれはナイーブすぎると思っている。調整政策に先行して、危機管理を要する状況が私を駆り立て、これが私に不慣れた役割を課すことになった。

調整・安定化プログラムは難しい犠牲を強いて、ラディカルな調整を実行した。一年から一年半のタイムラグを伴って、目覚ましい成果が現れてきた。均衡が回復し、成長が加速するようになった。しかし、一九九〇年代半ばに表面化した難しいデレンマは一挙に解決することはできない。数年も経たないうちに、ほとんどすべてが最初に戻った。「グヤーシユ共産主義」の人氣にあやかたり、賃金を簡単に引き上げたり、国家資金を分け合ったりする習性は、カーグル時代が崩壊しても消滅した訳ではない。この習性は以後も生き続け、繰り返し顔を出してくる。左翼の社会党政府でも右翼の保守的・民族主義的政府でも、ポピュリストの経済政策を実行している。これが昔から繰り返されてきた、経済に有害な問題を引き起こす原因になっている。

二〇〇三年にハンガリーの金融界は再び、困難に直面した。新聞には政府の金融・財政政策を批判し、緊急措置を求める経済学者の提言が相次いだ。この中で、私は *Népszabadság* 紙に

インタヴュー記事を載せた。私のマクロ経済哲学は一九九四年の論文シリーズから変わっておらず、それを強調するために、私の希望に沿って、記事のタイトルも「主目標は持続的成長」となった。⁽²³⁾

残念ながら、多くの経済学者の提言とともに、私のインタヴュー記事が指摘していた忠告に耳を傾けられるまで、一年以上の時間が必要だった。我々は財政支出の削減、無責任な方向に進んだ住宅融資プログラムの引締め、生産性の上昇を上回る賃金引上げの抑制を求めた。遅れと逡巡によって、持続的成長経路からの乖離が再び始まってしまった。

医療改革について

ポスト社会主義の過渡期の初期に、一九九二年のアメリカ経済学会の招待講演で、経済再建の財政問題について話した。その中で、福祉国家の改革問題を述べた。私はカーグル・レジオームを「未熟児として誕生した福祉国家」と図式化した。一国の経済資源に分不相応な、負いきれない国家的義務を背負ったからである。この講演を境に、研究仲間の何人かは不快感と嫌悪感をあからさまにし、現実存在する不均等を縮小するのはなく、私に対抗して社会主義体制の社会的成果を守ることが大切だと確信するようになった。友人の中には、それから口を

きかなくなつた者もいる。この同じ「福祉グループ」は、これ以降、私が提起するすべての考えを初めから拒否し、私の議論を考へてみることもせず、私の文言を文脈から切り離し、私のメッセージを歪めて引用するようになった。

一九九二年に提起した問題は消滅するどころか、ますます深刻になつていった。後で分かつたが、それは東欧に固有の問題ではなかつた。福祉国家の危機は、何も未熟児だけの問題ではなく、「正常分娩」の西欧・北欧でも同じだつた。我々の時代は重大な内部矛盾に直面している。一方からみれば、確かに福祉国家は二〇世紀の大きな成果のひとつであり、人々の生活を安定させた。それに手を付ければ、人々は悲鳴を上げ、安全が脅かされると感じる（それは理解できるが）。他方からみれば、人口動態やコストのかかる技術に支えられた発展を前提にすれば、これまでの形態や給付、これまでの財政形態では、福祉国家を維持することができない。ハンガリーやポーランドの改革反対者だけでなく、比較的穏やかでそれほど大胆でないドイツやフランスの改革実験が政治問題になり、デモや抗議に見舞われていることも、この矛盾の深刻さを教えている。左派の政府であるドイツやポーランドであれ、右派の政府であるフランスであれ、すべての政権はこれを一国の将来にかかわる問題として捉え、福祉国家的支出を引き締める措置を余儀なくされている。

この問題に接近し始めてから、この問題領域が私を捕らえた。さまざまな方向からこのテーマにアプローチしようとした。アイルランド出身の教え子で、今はカナダで教鞭をとっているジョン・マックヘイルと一緒に、計量的手法を使った国際比較を行った。⁽²⁴⁾ハンガリーの世論調査会社TARKIと共同で、アントシユ・ラースロー（夭逝した有能な青年）とトート・イシユトイヴァーン・ジョルジュと一緒に、住民が種々の改革案のどれを受け容れるかの世論調査も行った。⁽²⁵⁾別のグループとは、医者と患者のインタヴューを行い、そのデータをまとめて医者謝礼金受取り状況と社会の受け止め方を調べた。⁽²⁶⁾

一九九七年に医療改革の小冊子を執筆した。その賛否は分かれた。ある人は私の提案に同意し、実現可能だと判断した。他方で、怒り出す人もいた。どこかの政党のスピーカーか、利潤を追求し患者を蔑ろにする私的資本の代弁者だと非難した。これらの感情的な批判者は、私が急激な変化を起こす措置ではなく、フランスのとれた慎重な提案をおこなっていることに耳を傾けることもなかつた。私の提案は相互に矛盾する諸要請の妥協を試みるものだったのだが*。

* 当時の厚生大臣は私の提案を議論するのではなく、ジョークで応えた。私の提案をどのように利用するかというテレビ・レポーターの質問に、「書物の厚さが、ガタつく机の足に噛ませるのに

「ちようど良い」と答えた。

私の提案が無条件で制限のない市場競争を推奨したと考えるのはとんでもない間違いだ。もちろん、その反対も有害だ。この分野が国家サービスと国庫から賄われる独占で維持されることや、年金・医療保険・その他の福祉サービスに関する決定が温情主義的な政治家と官僚の手に委ねられていることに安住すべきではない。

医療経済学者や政治家の多くは、改革の必要性や可能性を検討する際に、このセクターの特殊性や課題あるいは資金問題から出発する。その倫理的側面には副次的に触れるか、まったく触れない。倫理的含意に関心をもつ者は、改革構想の背後にどのような倫理原則が隠されているかを探り出そうとする（何らかの原理性が提案の中に隠されていると仮定して）。私の著書はこれと正反対の思考を辿った。私が認めた価値体系から、その倫理原則から出発して、そこから為すべきことを引き出そうとした。

二つの倫理原則を打ち出した。ひとつは、個人的主権の原理である。福祉サービス領域における国家の決定権限を狭め、個人のそれを広げる。これは個人の決定権を含むのみならず、個人が自己の人生に責任をもつという要件を含むものである。温情主義的な国家が個人に代わって面倒を見るという考え方から

脱却する必要がある。

もうひとつの原則は、連帯の原理である。苦しんでいる人々、不利な状況に置かれていた人々を救済しなければならない。国家の役割を最小限に限定するリベタリアンの考え方とは違い、国家の再分配的活動を必要で容認できるものと考え（本当に必要な人に補助が行き渡るという前提で）。

医療改革に関連した私の研究が、ハーヴァード大学の教育活動の中で、新たな地歩を築いたことを指摘しておきたい。ジョン・マックヘイルと共にセミナーを組織し、福祉国家改革の国際的な経験を検証した。それぞれのテーマの専門家が講義すると同時に、学生も発表を行った。テーマとして取り上げたのは、アメリカの年金制度改革（マルティン・フェルドスタインとピーター・ダイアモンド）、東欧の年金改革に対する世銀提案、中国における医療セクターの改革、失業率削減のための諸手段（フェルプス教授）、世界の諸地域における所得分配の動向等々である。このセミナーには学生だけでなく、教員も参加し、幅広い国際的な展望を与える豊富な材料から、思索に富む教訓を引き出すことができた。

医療改革に関する一九九八年の著作に戻るが、討論や書評（それほどでなかった）、それから個人的な会話から、著書には十分に議論を尽くしていない問題があることが明らかになった。ハーヴァード大学学生で医療経済学を専門にしているカレン・

エッゲストンと著書を再検討した時に、これが明らかになった。これを修正し拡張した著作を、二〇〇一年に英語で出版した。これが *Welfare, Choice and Solidarity in Transition* である。²⁸⁾

この新版も前のハンガリー語版と同じ原理に立脚しており、同じ主要な改革方向を提案している。同時に、原書版を越えて、はるかに広範な国際的文献に依拠し、他国の医療制度やその変化から導き出される積極的な教訓や否定的な教訓を批判的に分析した。原書版に比べて、詳細かつ正確に改革試案を描き、医療セクターの独自性を丁寧に推し量った。この分野を純粹に商業的に組織した場合、いかなる問題やリスクが生じるかを明らかにした。これらを警告しただけではなく、どのような介入、規制、再分配的メカニズムでこれを阻止できるかも記した。種々の刺激誘因の利点と欠陥内容を、客観的に推し量った。

英語版の反響はたいへん良かった。嬉しいことに、ポーランド語、中国語、ヴェトナム語でも出版された。この新版のハンガリー語版は、この自伝が出版される頃に来上がる。ちょうど、医療改革が激しい議論になっている頃に、読者はこれを手にするようになる。敵対的で不快な政治的論戦は、専門的な意見交換を難しくする。自らを世論の代表者だと自認するが、実際のところは狭いグループの利害しか代表していない人々や組織が、テレビを使って繰り返し強引な宣伝を行っている。ソフトで客観的な我々の著書に耳を傾けるかどうか、誰にも分から

ない。

マクロ経済への政策提言や最初の医療関連書に対する反応を考えてみると、ある一般化された問題に行き着く。「はたして、経済政策の最終決定を行う人々は、私の言葉に耳を傾けるのだろうか」。

「質問に来るか、君の意見を聞くか？」

国内外の友人たちが何度となく私に尋ねた質問が、これだ。簡潔明瞭に答えたいのだが、それができない。この質問はいろいろな意味に解釈できる。字義通りにとれば、「ハンガリーの経済指導者たちは直接の会話を通して、私の意見を知ろうとするだろうか」ということになる。

体制転換以後の最初の大蔵大臣だったラバール・フェレンツとは「二水準計画化」を扱っていた一九六〇年代からの知り合いで、私が依頼して大きなチームで一緒に仕事をした仲間だ。その後も、ウィーン近郊のラクセンブルグの国際研究所や国家計画庁で彼が仕事をしていた時に会っている。一九九〇年の夏休みにハンガリーに戻った時に、ラバールから会いたいというので、大蔵省に向いた。会議机の横に座ろうとしたら、笑顔で「君はここに座らなくちゃ駄目だよ」と、自分の席を指さした。「感情的ピラ」の提案を歓迎すると、活き活きとして喋っ

た。それから後も何度も会ったが、いつも私の提案を注意深く聞いていた。

その後任になったクパ・ミハイは、MDFの意向で大臣になった人物だが、広範で多様な顧問のグループを組織していた。そこには、計画庁副長官で、後に大蔵大臣をも務めた経験豊富で優れた経済学者ヘティニー・イシュトヴァーンが参加していた。アンタル首相の個人的アドヴァイザーだったオシュヴァート・ジョルジュもメンバーにいた。SZDSZ（自由民主連合）に近い者も、FIDESZ（青年民主連合）に近い者もいた。クパ・ミハイが私にも声を掛けた。少し迷ったが、参加することにした。クパは常にグループのメンバーの意見を傾聴していた。個人的に会話することもあった。私の考えを披露できることは嬉しかったが、多くの点で政府の政策に反対したり保留したりするところがあったので、この関係があたかも政府の政策に同調していると誤解されるのではないかと懸念した。クパが更迭されてこの懸念も雲散した。政治分析家は、政府の構想に比して経済再建とマクロ経済規律の遵守が行き過ぎて、更迭されたと見ていた。

彼の大任在任期間の経験から得た教訓は、自らに課した当初の原則を引き続き守り続けるということだった。民主的に選ばれた政府のメンバーからケースバイケースで意見を求められれば、快くそれに応える。しかし、その背後に政治勢力がある場

合には、正式な政府顧問の役割を引き受けないし、公的に任命される顧問組織のメンバーも引き受けない。さらに、意見表明が政権政党との政治的合意を意味するようなものは、極力避ける。公式の政府顧問に任命されると、政府に対する忠誠、とくにあり得る批判や異論を公表しないことが要請される。私は自らの意見表明の完全な自由を保持しておきたいのだ。

民主的国会一五年の間に、全部で一〇名の大蔵大臣が就任した。私自身から大臣室に出向いたことはない（解任後に、以前から友人だった人物を訪ねたことはある。大臣室にいようと、そこから追い出されようと、友人関係は変わらないことを示すために）。経済状況や為すべき課題について私がどう考えているかを知ることがあった大臣もいれば、関心のない大臣もいた。大臣だけでなく、政治や国家組織の指導者たちとも時折会って、意見を交換したり、意見を記したものを渡したりした。

一九九一年、SZDSZの党首キシユ・ヤーノシュが、党の顧問組織の会議に、常任の客員顧問として出席するように求めた。少し長くなるが、一九九一年四月一四日付けの手紙を引用する。「貴方と国の問題について、いつでも議論します。しかし、SZDSZの政治顧問組織に常時出席する件の依頼は、受けられません。この否定的な回答を説明するのをご容赦ください。私の政治的専門的行動や具体的な行動の決定において、最大限の独立性と政治的かつ精神的な自己決定を維持することが、

特別な意味をもっていきます。一九五六年に共産党と決別して以来、将来においてどの政党にも、またどのような政治的運動にも加わらないと決断したことが、このような決意を導くものになりました。もちろん、顧問組織に参加することが暗黙の黨員を意味するものでないことは分かっています。それでも、これは党と結び付いたグループであり、したがってそれと常に協力関係にあることは、上述した私の原則に合致しないのです。意見の聴取に重要性を感じている党の指導者や経済専門家に個人的見解を述べることは、上述した原則に合致します。ケースバイケースで、当該政治家、意見を求める個人、テーマの性格に対する主観的な価値評価にもとづいて、そのような話し合いに応じるか否かを決めます。ここに示した原則が、政治的倫理の観点から受容されるものと確信します。もちろん、これだけが受容可能な行動だと主張しているわけではありません。党の中で活動する政治家の必要性は高いと考えています。政党の競争にもとづく議会民主主義を否定する者とは協力しません。党の仕事に奉仕し、他の仕事で達成できるものを擲^{つぎ}つて政治の職業を選んだ人々を、心から尊敬しています⁽²⁸⁾」。

もうひとつ、長くなるが、書状から引用したい。FIDES Zの経済プログラムへの意見を求められた。一九九二年一〇月二四日、アメリカからオルバン・ウィクトル宛に、私の意見を送付した。以下は、手紙の一部である。

「基本原理の概念構成が十分に明瞭化されていないように感じます。

——「ヘリベリズム」の言葉の使用は良いとしても、その内容が不明確です。なによりも、自由と言及し、個人の生存、営業の自由、国家による抑制の排除等々をもっと強調すべきだと考えます。

——ほとんどの人々にとって、「プラグマティズム」という表現は曖昧なものだと思います。硬直的な教義に反対し、原理への忠実さに柔軟性を加味したい、現実的な妥協を図る用意があることを記す必要があります。

——列挙された理念のうちで、私が基本的に重要だと考えるものが三つ欠けています。以下に表題だけ記しますが、それらをさらに彫琢する必要があります。

a 近代化。近代的技術、近代的生活様式、近代的倫理、社会関係。〈古いもの〉を復位させる必要はない。

b 透明性と合法性。これはビジネスと政治におけるそれ。虚偽、詐欺、腐敗、結託、倫理的相反、法の軽視に対する闘い。

c 安全性と信頼性。政府は約束を守る。言明したことが、信頼できる〈credibile〉ものでなければならぬ⁽²⁹⁾」。

さらに、経済政策に関連して、次のことを記した。「最も重要なことは、進むべき道を明確に示すことです。イン

フレの加速化なしに、国を立ち上げ、新しい成長経路に再誘導し、職を創出することです。金融的な操作でこれをやつてはいけません。外国資本に対してもっと開放的であることを強調しなければなりません。排外主義や民族主義が有害であることを明らかにしなければなりません。医療や福祉プログラムの分権化や民営化で何をやろうとしているでしょうか。一般に、福祉プログラムに関しては、ポピュリスティックな公約が要求されるのではなく、なによりもまず将来の姿が計算できるものであることが重要⁽²⁰⁾です。

今でも、私は一二年前の手紙に記した原理を主張する。

意見聴取の真剣さは、会話や書状の交換という事実だけでは分らない。これは相手側の問題だ。私の言つたことに注意を払い、私の議論を再考し、他の見解と対比しつつ、自らの結論を引き出すパートナーもいる。他方、たんに関心がある素振りだけをみせるパートナーがいることも事実だ。会話しても、自分のことだけに関心のある人もいる。時には、すでに出来上がった政治決定を前提に、会話や書状の意見交換は「意見拝聴」という名目だけで、自らの選択を確認したいだけの人もいる。もし私が本当にある人に同意したとすれば、そのことは他の人との会話でも当然に触れられることになる。私がその見解を受け容れなければ、彼は別の「アドヴァイス」を聞き、見解の一致がみられるまで専門家を選別していくことになるだろう。率

直に言えば、この手続きが不可避な場合でも、この種の意見交換を忌み嫌う。指導的な政治家と非公式に意見交換する人は、このような虚しい助言要請の可能性を最初から念頭におく必要がある。

何度も経験したことだが、何かの集まりや祝いの席で、政治家や政府の役人と会うことがある。私を見ると、驚いたように「やあ、ここにいたのか。てっきりアメリカにいたかと思つていたよ。絶対に君と話し合わなくっちゃ。後から電話するから」と決まり文句を言う。こうして数週間が過ぎても、何の連絡もない。この種の会話を何度繰り返したか分らない。多分、その瞬間は私の意見を知ることにも有用だと感じるのだろう。その後は、毎日の仕事に追われてしまうのだろうが、他の仕事を少し脇に置いて、学問研究者と落ち着いて語り合つてみることに、それほどエネルギーが必要な訳でもないだろう。

それから、絶対に受け容れられないのは、政治家のPRのために、専門家との意見交換を利用する場合だ。聴衆を前に、どんな研究者や経済専門家が助言したかを喧伝する政治家がいる。まだ不慣れな頃には、この種のプロパガンダに何度か参加した。しかし、それからはこの種のものに防御反応が起きるようになり、慎重になった。だから、前もって、本当にこの政治家は意見交換を望んでいるのかをはっきりさせる。たとえば、会見の場に新聞記者やテレビを呼んでいないか。そのような場合は、

会見を回避した。政治家と話し合うことを隠そうというのではない。私の意見を聞く以外に何の意図もないという招聘であれば、光榮に思う。私の意見に本当に関心がある人には、喜んで述べる用意がある。しかし、PRの仕事はしたくない。

これまで述べたことから分かるように、私の中でいろいろ葛藤があった。政治的な役割と社会的責任・義務としての研究者の役割に、どこかで境界線が引かれるはずだ。後者の役割を引き受けるが、前者のそれは引き受けたくない。何度か、自分が決めた境界線をどこかで踏み越したような気がした。別の時には、境界線にまで辿り着くことさえしなかったとも感じた。いったいどこに境界線が正確に引けるのだろうか。

多分、これらすべては精神的行動抑制への回帰を引き起こすのだと思う。不本意に政治的な嵐に巻き込まれたくないという抑制が働くのだと思う。研究者の生活に戻るのには本望で、ここに落ち着きを感じる。経済学の言葉で言えば、私の「比較優位」がここには貫徹しているからだ。

実際の効果

ここまで、前節のタイトルにある二つの問いのうち、最初のもの（「君に質問するか」）に答えてきた。二番目の問いは、「君の意見を聞くか」であった。

この質問に答える場合、個人的で狭い範囲で喋ったこと、あるいは個人的な私信で見解や批判、提案を記したことに限定したくない。本当に重要だと思ふのは、公開の場で喋ったこと、著書や研究あるいは他の出版形態で述べたものである。これらが一緒になって、いろいろな出来事に影響を及ぼしたか否か。それを考えてみたい。

注目に値する統計から、始めてみたい。⁽²⁾一九九〇年から二〇〇三年の期間に、国会では合計四六回にわたって、私の名前あるいは著作に言及された。今日ではすべての学問分野で文献引用調査が行われている。どの文献がどれほど引用されるかで、研究者たちが競い合っている。このような場合、通常、専門雑誌における引用回数計算される。もちろん、私もこの数字には関心をもっているが、今は別の競争分野の話である。ハンガリー国会の討論で議員が私の著作を引用するのを知って、悪い気はしない。日常の政治闘争から意識的に身を引いている著者を引用しているのだから。

ほとんどすべての議員が、自らの意見を裏付けるものとして、私の著作に触れている。三分の二が現在の与党(MSZP・ハンガリー社会党とSZDSZ・自由民主連合)の議員、三分の一が現在の野党(FIDESZ・青年民主連合、MDF・ハンガリー民主フォーラム、MDN・ハンガリー民主人民党、FK・独立小地主党)の議員で、私のどれかの著作に触れている。一番多いのは「感

情的ピラ』であるが、『不足』、『苦悩と希望』、『医療改革』も取り上げている。頻度から見ると、一九九五年の調整・安定期が頂点になる。学問研究・著作者の虚栄心をくすぐることが良く分かる。国会記録を読んでもみると、二人の議員が私の著作を議論している箇所があり、一方が私の著作を良く理解し、他方が誤って理解している。

国会の引用回数は、それなりの成功だと考えられるが、しかしそれだけでは経済再建に実際の影響を及ぼしたかどうかについて、何も語っていない。これについては確実な回答を与えることができない。方法的には、私は常に多因果関係分析に立脚している。複雑な現象の因果説明を探る場合、稀なケースを除き、現象の出現を単一の原因に求めることはできない。多量の要因が影響を及ぼしている場合、その相対的なウェイトを確定するのは難しい。

ハンガリーでも他のポスト社会主義国でも私の著作が提唱した方向に進んでいるが、それだけでは私の著作がこの方向性に影響を与えたとは言えない。これは偶然の一致なのかもしれないし、別の力が働いているとも考えられる*。さらに、私の著作の影響もあるが、他の要因の方がはるかに強い影響を与えていることもあり得る。私から派生した思考が、間接的な形で意思決定者の思考形成に本質的な影響を与えている可能性も排除できない。

* カリンティの著作のひとつに (2001 [1914], 157 p.)、無垢な狂人が環状通りの交通量の多い交差点で、指揮者の指揮棒のようなものを振る作品がある。すべての出来事は彼とは無関係に生じているが、あたかも彼がすべての出来事を指示しているかのよう²⁰にその事象を体験している。「二台の車が今方向を変えた。……それでよろしい。……向こう側の電車は停止しなければならぬ。こりゃ、何だ。今ここに兵隊が来なくちゃならないが。……ああ、もうここにいる。あそこから来る。……」。カリンティの指揮棒を振る人物になぞらえてもらいたくないものだ。

ハンガリーでは予算制約を広範にハード化する方策がもつとも早く導入された。比較体制論の教科書として知られている口セたちの作品²⁰によれば、これには私の著作の知的影響があるという*。すべてのポスト社会主義地域において、予算制約のハード化を叫んできたのは、他ならぬ私だったことは否定できない。これに関する私の著作が大きな反響を呼んだのは間違いない。

* 著書は次のように記している。「社会主義国だったすべての国の中で、ハンガリーがもつともハードな予算制約を実現した。コルナイ・ヤノシユの経済政策的な影響が自国で実現したと主張しても間違いないだろう」。

別の一般的・包括的問題については、コーラス全体として提

案したもので、私は高々コーラスの一員か、時にはその代表者だったに過ぎない。漸次的な民営化や「第三の道」の否定については、多くの人と同様に、私も提起した。同様に、同じ考えを持つ知的共同体の一員として、マクロ経済均衡と成長の要請をとともに追求すべきことを明瞭に提起した。これらの諸過程に私の声が意味ある影響を与えたかどうか確証できないが、その仮説は維持できるのではないかと感じる。

政治家や経済政策決定者への影響とともに、もうひとつの現象を検証しなければならぬ。それは公衆の思考、つまり権力の外にある人々、とりわけ経済活動の従事者や知識人の意見形成に影響を及ぼしたか否かである。測定にもとづく回答を与えることはできない。「不足」に関連して指摘したように、散発的なフイードバックは存在した。クリニツクの医師、隣人、あるいは保養所で会った歴史家は、どの著作を読んだとか、どれが説得的だったかなどを喋ってくれた。公的な見解より私の論文の方が、問題や課題を理解するのに容易だったと何度も褒められた。私の著作が読者を誘導する助けになったことが分かるだけでも、研究者にとっては成果である。この種の認知を聞いたとしても、それがどれほどの範囲を代表しているものか、それを知ることは不可能である。

金融政策決定への参加

一九九五年、ハンガリー国立銀行総裁シュラーニイ・ジョルジュから、金融政策を決定する最高会議への参加を要請された。考える時間をもらった。この評議会の法的権限や政治的状况を知りたかったからである。^{*}中央銀行の独立性が法によって保証されていることが、要請を受ける決定的な視点だった。法律によれば、この評議會は政府からも政党からも独立していた。このメンバーの任命は、国立銀行総裁との協議にもとづいて首相が提案し、国会の承認を得なければならない。それが通れば、大統領が任命することになる。

^{*}二〇〇一年に金融政策管理に関する新しい法律が発効した。本書の記述は、私が評議会委員を務めていた時に有効だった、以前の法律にもとづく叙述である。

最初の三年の任期はホルン・ジュラ首相が、次の三年の任期はオルバン・ヴィクトル首相が任命提案した。両方とも、国会の担当委員会である経済・予算委員会が、与野党ともに私の任命を支持した。委員会の審査では、政治的な感情抜きに専門的な質問が出され、私は客観的な回答に努めた。広範な合意によ

つて支えられているという安心感があつた。私の中に政治的世
界とは独立した思考の持ち主を見てもらい、政府との政治的な
関係によつて縛られているのではなく、専門的で倫理的な良心
によつて行動していることを見てもらえるように努めた。この
努力の結果、相互に激しく闘い合う勢力が、一致して私の任命
を支持してくれた。

この金融評議会にほぼ六年参加した。常に怠りなく会議に備
え、多くの場合、「勤勉さの証明」として、事前に私見を書面
で提出した。常に新しいデータや時宜的な情報を知ろうとした
だけでなく、議題に上ったテーマの専門文献を渉猟し、以前の
同じ状況下の経験を知ることにも努めた。閉じられた扉の向こう
で、静かに仕事するのがこの会議だった。この評議会は短期・
中期の金融政策、とくに利子率政策を決定する。政府と協調し
ながら、為替平価の変動幅を決める制度的な枠組みを構築しな
ければならない。^{*}ハンガリーの金融政策は、この時期、世界的
に認知され、国際金融界では他の諸国の模範とされていた。謙
遜抜きで言えば、私の仕事もこの成果に寄与している。

^{*} 専門用語で、「為替平価レジーム」と呼ばれるものだ。たとえ
ば、平価を固定するか、変動させるかを選択しなければならぬ。
場合によつては、市場の影響力に曝さなければならぬが、前も
つて変動の限界を決める。この場合、平価変動の幅をどれほどと

るかを決めることになる。

この仕事から学ぶものは多かつた。最高のレベルで経済政策
形成がどのように行われるのかを良く見ることができた。難し
い決定の準備作業は、大きな専門的な期待を感じさせるものだ
つた。国立銀行をめぐる政治的な風が襲う前だったこともあつ
て、落ち着いた雰囲気でも議論できたのは心強かつた。議論に対
して感情ではなく、議論で答えなければならなかつた。評議会
の雰囲気は、友好的で相互信頼に満ちたものだった。

二〇〇一年八月、任期を数週間残して、大統領宛の公開書簡
で、金融評議会からの辞任を表明した。当時、新たに採択され
た中央銀行法によつて、評議委員の法的地位が変わつた。法律
が発効すれば、金融評議会のすべての委員は国立銀行（最終的
に銀行総裁）と雇用契約関係に入ることになった。雇用関係に
入れば、制度的に、評議会の「外部委員」の独立性を侵すこと
になる。^{*}この新しい状況は、私が自らに課した原理と相容れな
い。

^{*} 金融評議会の一部の委員は国立銀行の上級管理者から指名され
（内部委員）、一部は学界から指名される（外部委員）。外部委員
は大学あるいは研究所の地位を主たる職場として維持し、副次的
活動として金融政策を決める評議会に参加していた。この「外部

性」が個人の完全な独立性を保証していた。

他国の体制転換

後に金融政策が犯した過ちを、当時は正確に見抜くことができなかった。とはいえ、予想される問題が影を落としていた。以前は、評議会の資料が秘匿事項で、公衆は委員の見解を知ることができないことに、何の問題も感じていなかった。しかし、この時になって、自らの見解が常に少数派に留まるのではないかと危惧するようになった。望むと望まざるとにかかわらず、私が合意できない金融政策を支えなければならぬ。自らの見解を経済学者や公衆に訴えることもできずに。

政治的な策略に長けている人で、私より要領が良い「外交官」であれば、新しい状況でも有用に活動できるだろう。成功するかどうかは別として、自らの主張を打ち出して、別の評議会委員の誤った思考を打ち消す役割を果たすこともできるだろう。しかし、私にはそのような意欲も能力もない。

金融政策管理の仕事に参加できた六年間を爽快に振り返ることができる。また、二〇〇二年以後、評議員に伴う意見表明の制限から解放されて、新聞や専門的な対話で自由に金融政策の誤りを批判できるようになったことも爽快である。

一九八九―一九九〇年の政治的変動で、ポスト社会主義国では外国人顧問への需要が沸騰した。一般的な判定を下すつもりはない。その地域を丁寧に勉強し、派遣された地で課せられた課題に誠実に応え、思慮深い提案を行った顧問たちを知っている。しかし、残念なことに、これとは別のタイプの顧問もいた。その地域の知識がほとんどないのに、過剰なほどの自信をもって、自らの構想を押し付けようとした経済学者もいる。

私にも種々の方面から、あれこれのポスト社会主義国の過渡期計画化への参加を要請してきた。社会主義レジームに精神的に対峙していた頃に知り合った友人たちは、専門的意見の交換のために、それぞれ自国に呼ばれて行った。

これまで叙述したことから結論されるように、私はほとんどの要請を断った。ほとんどであって、いつもそうした訳ではない。自らの思考を抱えて国々を回り、他の意見でなく私の意見を取り入れるように説得することなどしたくない。ただ、すべての招聘を断るのも正しくないと感じた。私の知識によって当該国の進むべき道の模索が容易になることがあるかもしれないし、旅行から得られる経験から学ぶことも多くあるはずだ。こうして、ロシアや東欧諸国を訪問し、講演をしたり、当該国の

経済学者や経済政策家と長時間の意見交換を行ったりした。世銀やIMFの招聘で、何度もワシントンにも出かけた。そこでも講演したり、自由な意見交換を行ったりした。また、長年にわたって、ロンドンにあるEBRD（ヨーロッパ復興開発銀行）の学術顧問を務めた。

人が自らを判定できるとするならば、私は知的傲慢の罪を犯さなかったと断言できる。他の強引な同僚たちの口から私の耳が直接聞いたようなこと、つまり顧問たちが提案した道が唯一の道であるというようなことは、一度も言ったことがない。私は常に、我々外国人が決めるのではなく、状況を熟知し、選択の責任を担っているそれぞれの国の人々が決めることだと強調してきた。我々ができることは、高々、他国の経験を伝えたり、理論から引き出せる結論を伝えたりすることに過ぎない。外国人顧問が慎重で謙讓であればあるほど、聞き手の受け取り方は真剣になる。

とりわけ忘れがたい体験だったのは、一九九九年と二〇〇五年の中国訪問、それから二〇〇一年に初めて知ったヴェトナム訪問である。この両国では、東欧のポスト社会主義国再建の処方をも勧めたとしたら、大きな誤りだったと思う。この二国を何かに準（よ）えるとすれば、一九九〇年代の東欧ではなく、一九八〇年代の後期カードル時代である。経済改革、とくに市場経済と私的所有の広がりをはるかに進んでいて、多くの領域で一九

八〇年代のハンガリーよりかなり先を行っていた。他方、政治改革はほとんど進んでいなかった。共産党の権力独裁が維持され、マルクス・レーニン主義のイデオロギーやスローガンを疑問視することは許されず、反対勢力を組織する者には拷問が待っていた。ここにやって来た外国人専門家には、どこに来たのかを自覚することが要請されていた。講演者は、現存状況の急進的な反対物を提案してはならないだけでなく、政治改革を半分しか受け容れていない人々を刺激してもいけないのだ。

私にとって中国とヴェトナムが特別な出来事だったのは、この世界にいと、ハンガリーにいるような気がしたからである。中国語もヴェトナム語も理解できる訳ではないが、彼らの語ることが良く理解できる。自分自身の経験から、社会主義の信条に失望し、新たな道を求めているが、依然として躊躇する改革思想の中に生きていることが良く理解できるのだ。非常に率直で友好的な雰囲気の中で、何人かはアメリカやフランス、あるいはドイツの経済学者より私の方が、話し相手として受け容れやすいと話した。私も彼らと同じような発展過程を辿ってきたことを感じたようだ。だから、私の言葉を信用できると感じたのだ。

この両国で私の著書や論文が相次いで発刊されたのは嬉しいことだ。将来の改革過程を準備し基礎づける知的な啓蒙に、これらの著作が役立つと思う。これら二つの遠い、しかし私にと

つては身近な国に民主主義が発展する時まで、生きていたい。
それには二つのことが必要だ。私が長生きして、彼らが急ぐこ
とだ*。

* フロリダ大学の研究所の依頼で、二〇〇四年に、キューバが将
来、民主主義と市場経済に向かって進む場合に、東欧の再建から
どのような教訓が得られるかについて研究をまとめた。中国やヴ
ェトナムの問題を考えた時と同じように、意欲をもってこの課題
に取り組んだ。

第21章 ただ持続あるのみ（一九九〇年）

——体制転換が意味するもの、意味しないもの

私の活動のもうひとつの部分、もつとも重要で、本当の天職と感ずる仕事である研究と教育に立ち戻ろう。

体制転換の解釈

体制転換は私の人生に再び新しい時代を開いてくれた。一九九〇年から、ハンガリーや他の転換諸国に実践的な経済政策を提案するという「規範的な」アプローチを、再び自らの課題にすることになった。しかし、このことは所与の状況を客観的に理解し、叙述し、因果関係を分析し、これを理論的な仕事に結び付けるという「実証的な」アプローチに重要性を置かなくなつたということではない。

私の学問的研究の中心的テーマは、常に、体制概念の理解にあった。数十年にわたって、並存する体制を比較対照することによって、相互に継起して現れる体制をどの

ように理解するか、それを観察し解釈できる絶好の機会に遭遇した。誰もが「体制転換」を語るが、いったいこれが何を意味するかについて、共通の理解がある訳ではない。それどころか、その概念の解釈で相互に鋭く対立していることが、政治的な討議においても混乱を引き起こしている。

私自身は著書『社会主義システム』において、この問題を明瞭に展開している。著書のタイトルが示しているように、この作品の中心的なテーマのひとつが「体制」であった。この点については本書でもすでに触れたが、再度ここで、まとめておきたい。私の概念把握にしたがえば、「大きな」体制は三つの主要な特徴によって区別することができる。第一は、政治構造とそれにかかわる支配的政治イデオロギーである。第二は、所有関係である。第三は、調整メカニズム（市場的调整、官僚的调整、相対的な重要性をもつ他のメカニズム）である。この順序は恣意的なものではなく、これら主要な三つの決定要因の役割

順序を示している。これら三つの特性が与えられれば、体制の他の重要な特徴（行動の規則性、市場の継続的な力関係など）が決まる。

古典的な社会主義体制の特質は、私的所有と市場を敵視する共産党の権力独占、公的所有、官僚的調整の支配的役割である。資本主義体制の特質は、私的所有と市場に友好的な政治的レジーム、私的所有と市場的調整の支配的役割である。社会主義体制に代わる新しい体制が資本主義の特質を保有する段階になって、初めて体制転換を語ることができる。

ここまで、可能な限りコンパクトかつ最小限の規準で、二つの体制と体制転換の特徴を概念化してみた。こうすることによって、私の体制転換解釈にもとづけば、何が体制転換に属し、何が属さないかを読者に明瞭に示すことができる。

ここには何の価値判断も付け加えていない。価値判断を避けようとしているのではない。これについてはすぐ後に触れる。この概念そのものは実証的で記述的な価値判断を含まない表現である。私は体制転換を歓迎するが、他の人は別様に判断するだろう。にもかかわらず、この言葉の意味について意見の一致をみることは可能である。とにかく、新しい体制の実証的な定義と、「良き社会」への期待を混同することは、誤解を招くことになろう。社会主義体制は悪の帝国ではないし、資本主義体制は調和的かつ公正で自由な社会を体現するものでもない。二

つの歴史的に現実として出現したものの一般的モデルを語っているのである。

体制転換は構造、制度、社会関係、結合性、典型的相互作用の根底的な変化を意味するのであって、個人あるいは個人・人間集団間の監視関係の変化を意味するのではない。もちろん、前者（構造・制度）と後者（諸個人の役割と地位）の変化に相関関係があることは言うまでもない。前者の変化が一定のタイムラグを伴って、後者の変化をもたらす。あくまで、前者が決定的影響をもち、後者はその随伴現象である。

もうひとつ、注意を喚起しておきたい。第一の決定要因である政治的構造について言えば、新しい統治制度が民主主義ではなく、何らかの専制的、独裁的レジームあるいは軍事独裁であっても、体制転換が進行し得る。私の定義に従えば、資本主義経済の特質である私的所有と市場に対して「友好的」で、それが支配的になることを妨げず、それを促進することが、体制転換の要件になる。社会主義体制の政治構造を変えるものが、ピノチエツト型の軍事的恐怖政治であってもよいし、かつてのノームンクラトゥーラ出身の家族的権力であってもよいし（多くの中央アジア諸国）、自らマルクス・レーニン主義党を名乗る集団が長期に権力を握っている場合でもよい（中国やヴェトナムが歩んでいる方向）。東欧では計り知れない歴史的幸運に恵まれて体制転換が進行し、独裁の政治構造が民主主義的な政治

制度に置き換えられた。

資本主義経済は民主主義なしでも存在し得る。多くの歴史的事例がこれを証明している。しかし、この命題を逆転することはできない。民主主義は資本主義制度なしでは存在し得ない*。

この命題は論理的推論によって証明可能で、これまでの歴史的経験を支持するものである。

* この命題にある限定を付しておきたい。我々はここで近代工業社会の民主主義について語っているのであり、古代ギリシアの民主主義について語っているのではない。

「社会主義から資本主義への転換が意味するもの、意味しないもの」。これは二〇〇〇年にアメリカの経済学雑誌 *Journal of Economic Perspectives* に掲載された論文*の表題でもある。この論文は社会経済変動を理論的レベルで概観したもののだが、政治的なメッセージをも含んでいる。「まだ体制転換は起きていない」というデマゴーグ・ポピュリスティックな言動が聞かれる。このような見くびったような言動を弄する者は、体制や体制転換が何を意味するのかをまったく理解しない者である。

* これ以前に、長文のものをイギリスで出版した。世紀の転換を記念して、特別号を出版するというので、その縮約版を作成した

ものがこの論文である。この論文は一九九七年にハンガリー語でも出版され (*Mit jelent es nem jelent a rendszervaltas*)、その後各国語版が出版された。

「大きな」体制間の転換が生じたこと、つまり資本主義が社会主義にとって代わったことはたんなる事実であって、多くの問題が残されている。資本主義も多種多様である。国家の役割が大きいものや小さいものがある。権力や法が強いものや弱いもの、資産や所得の分布の不平等が大きいものや小さいものがある。体制転換が生じたか否かではなく、転換過程において新しい体制がどのような種類の制度を体現する方向に向かっているかが真の論争テーマである。これに関連する規範的問題が、「いかなる方向に進みたいか」である。ここで価値判断の問題に辿り着くことになる。

期待と失望、悲観主義と楽観主義

ハンガリーや東欧諸国で、多くの人が失望を感じている。体制転換によって、もつと別のものを、もつと多くのものを、もつと良いものを期待していた。転換の敗北者、つまり職を失った者、所得を失った者、特権を失った者だけを考えているのではない。多くの知識人が失望している。なかには、経済状態が

悪くなるどころか、良くなった者、個人的には何も被害を受けていない者、逆に新たに名声を得た者までが、失望を表明している。これらの人々に苦い思いをさせているのは、多くの不透明な行為、虚偽、国家資産の散逸である。政治生活に広がった不毛な言葉の争い、不正の横行、措置を伴わない不正解明、不正解明の放置、ビジネスと政治の結託に、嫌気を感じているのである。憎しみ合うような言い合いに嫌気を感じている。これ見よがしの金持ちと惨めな貧乏人の並存は、公正観念をあざ笑うかのようなものである。

私も同時代の知識人たちと、この苦い怒りの感覚を共有する。しかし、少なくともここに列挙した現象に関しては、私自身は失望していない。多くを望んでいけば、失望しただろう。体制転換が希望を実現しなかったと感じている友人・知人に比べて、私の期待ははるかに抑制されたものだった。

以前の章で触れた一九八〇年に出版された著作を再度、引用してみたい。ここでは、歴史を便利なスーパーマーケットのように描く人々を皮肉って描いた。買い物籠の中に、さまざまな体制の特質の中から気に入るものだけを入れ、自分の好みに合うものを家に持ち帰る。しかし、歴史は「パッケージ」を提供する。既述したような体制に固有な問題を随伴した「現存」資本主義も、そのパッケージのひとつなのである。

一九八三年に『諸国民の健康』(The Health of Nations)と

題する著作を出版した⁽²⁸⁾。七つの病を列挙して、簡単な病理学的分析を行った。インフレ、失業、不足、対外累積債務の膨張、成長の阻害、有害な不平等、官僚化がそれである。もちろん、このリストにさらに付け加えることもできる。これらを列挙した後、「完全に健康な社会―経済制度は存在しない」と言明するリスクをとった。我々は高々、病を選べるだけなのだ。もしこれらの病のうち、二つか三つで済ませることができれば、最悪の度を構築できれば、それだけで喜ばなければならない。最悪の場合、四つあるいは五つの病が、我々を襲うのである。

社会主義から資本主義への転換過程で大量の失業が生じて、私は驚かない。それを最小限にするために手を尽くすことはあっても、それを完全に消滅させることは不可能である。所得の不平等が急激に大きくなったことにも、私は驚かない。急進的な平等主義を実現することはできない。もちろん、貧困に喘ぐ人々に手を差し伸べ、すべての人に人間らしい生活に必要な条件を保障することに努めなければならない。

私の予想が他の友人知識人のそれよりも現実的であることには、多くの要因が働いている。何よりも、私自身は体制比較を専門とする「プロ」である。数十年の時間を通じた研究の中心は、社会主義と資本主義の特性を認識することであり、それらと比較することであった。それも、たんに書物や短期の旅行から先進資本主義国のイメージを獲得しただけでなく、そこに長

期にわたって生活した日常経験からも多くのことを学んでいる。私の人生には、専門文献の命題を自分自身の目で見た現実と照らし合わせる可能性が与えられていた。私には資本主義に対する幻想はないと断言できる*。倫理的観点から眉を顰めるような特質を知った上で、もつとも陽気な社会主義のバラックで生きるより、資本主義制度に生きることを選んだのである。

* 二種類の幻想が類似していることを指摘しておきたい。「新左翼」は社会主義ユートピアを夢見て、実現した社会主義に失望し決別した。体制転換前には、多くの知識人が「西側」、つまりそこに機能する民主主義や市場について、歪曲された幻想的イメージを描いていた。実現した資本主義に対峙する段になって、失望することになった。現実的な期待と比較するのではなく、自らのユートピアと比較したからである。

私の場合、体制転換が何故に失望を引き起こさなかったかを説明するものとして、もうひとつのことを付け加えなければならぬ。ひとつの現象の実証的アプローチと規範的アプローチを峻別することが、私の分析手法に深く刻み込まれている。夢を描くことはすべての人に許された権利である。とりわけ、詩人がそれを止めれば悲しいことだ。しかし、自らを社会科学の専門家と自認する者が、ユートピアを現実的可能性と混同する

ことは腹立たしいことだ。さらに、この理念の混乱を正当化することになればさらに始末が悪くなる。薔薇色の夢の実現可能性について説明を求めても、まず答えられないのである。

もしかして、体制転換自体を物凄い成果だと考えているのは、同類の知識人仲間の中で、私一人ということもあり得る。一九八九―一九九〇年のユーフォリアの中で、幸運な歴史的転換の大事件に遭遇していると感じたが、それから一五年経た今も、同じように考えている。

かつて、我が国で入手できない不足財を西側からトランクに詰めて持ち帰ろうとしたものだ。今ではブダペストの商品選択肢はポストンよりも豊富である。当時は、電話を取り付けるのにもコネを使って頼み込まなければならなかった。今では電話会社が競争して売り込んでくる。もしかして、『不足』の著者である私だけが、慢性的不足の解消に大きな意義を認めているのかもしれない。当時は不足のためにあれほど不満を言っていた年配者までが、もうそのことに思いが及ばないようだ。

かつて、旅券に「窓」(出国許可)を開けてもらうために、党書記や人事部長の認可を求めた必要があった。今では好きな時に、列車や飛行機に乗り込むことができる。かつて、誰かが批判的な見解を印刷物に忍び込ませた時には、互いに目配せして確認し合ったものだ。今では、政治家に対する批判的な見解を新聞やテレビで述べることは自由だ。私にとって、ここまで

到達できたことは、けっして自明なことではない。友人たちにこれを説明し始めると、誰もが同意する。「確かにそうだ。君が正しい。だが、……」となり、すぐに日常生活の話題に戻り、不平不満や腹立たしい現象を列挙し始めるのが常だ。

もちろん、まったく失望を感じていないと言っているのではない。考えてもいなかったような問題が生じたり、問題が生じることは予想できたが、これほど大きな力で生じるとは思いもしなかったりしたものがあつた。これは自己批判でもある。事前に予想できなかったもので、それほど有害で不快でなかった現象について、以下に記そう。どのような変化が予想されるかについて、もつと深く完全を期して考えていれば、予想できたものである。

たとえば、国会の機能に関してナイーブな幻想があつた。このことは、著書『感情的ビラ』に見られる。権力の分立について、あまりに多くのことを期待しすぎた。立法府が行政権力を有効に監視する、つまり国会が政府を監視すると期待した。多分、アメリカ民主主義史の最良の瞬間に目の当たりにした大統領と議会との関係が影響していた。ウォーターゲート事件で、上院や下院の議員が、ニクソンの共和党の議員までが調査義務を完全に果たし、大統領の辞任で終結を迎えた。上院や下院の委員会をテレビで視聴し、立法府が多くの場合、自らの党の利害を超えて、行政府を監視しようとする光景を見たからかもし

れない。「多くの場合」と限定したように、アメリカでもこれが常に行われている訳ではない。^{*}良く機能している民主主義においても、それを期待するのは幻想である。それは誰かが議員に選ばれ、当該議員が倫理的高みから、自らの党や自らが支持する政府と対峙してまで、選挙区や国の利害を守るのはそれほど簡単なことではないという事実から説明される。正常な状況の中で、政府と国会の多数がどのように協同するのかを冷静に分析する必要があつた。ハンガリーや東欧の新しい民主主義の事例から学び、そこから教訓を得る必要があつた。

^{*} アメリカ国内の民主主義信奉者や国外のアメリカ民主主義の賛美者はともに、テロの危険を避けるためと称して、人権を制限する規制が導入されたことに危機感を抱いている。これまで繰り返されてきたように、今回もまたアメリカの民主主義勢力が民主主義の成果を防御できることを期待している。

かつての社会主義世界に勃興した民族主義やそれに類似した現象について、十分に考慮することができなかった。幾分か予想できたが、政治や知的生活、人々の諸関係をこれほど強く支配するとは予想できなかった。

民族的に異質な構成を持つ連邦だったソ連やユーゴスラヴィアが解体した。かつてのユーゴスラヴィアでは内戦が勃発した。

ソ連でもアゼルバイジャンとアルメニアとの間の戦争が続き、今日に至るまでチェチェン人との戦いが続いている。軍事的対立が起きなかつたところでも、抑制されていた民族自立の感情が爆発している。チェコスロヴァキアは二つの国家に分裂した。緊張の程度は違ふとはいえ、東欧の各地では少数民族の状況をめぐって、隣国間に緊張が高まっている。それぞれが少数民族の権利を主張している。かつての多数民族（たとえばロシア人）が突然に少数民族（それも抑圧された少数民族）に転化する事例もある。

民族レベルの国際紛争に伴って、それぞれの国内では同じ精神的波長の有害で不快な現象が生起している。排外主義、隣国に対する侮蔑、ローマ人への虐待、反ユダヤ主義の精神などが、最初は散発的だったものが、次第に力を得て、「有力な」勢力へと転化する。

ユダヤ人として生まれたことが、子供時代や大人の生活を始めた時期に何を意味したかについては、本書の第1章と第2章で既述した。もちろん、半世紀にわたる私の人生の中でそのことを忘れたことはなかつたが、私にとってそれは重要なことではなかつた。マルクスがユダヤ人でスターリンがそうでないこととは、私にとってどうでも良いことだった。最初は二人を信じ、後に二人に背を向けた。ラーコシがユダヤ人でカーダールがそうでないことも、私にとってどうでも良いことだった。最初は

二人を信じ、後に二人と対峙することになった。私の著作に影響を与えた人々、私の著作を攻撃した人々、私の著作を出版した人々のうち、誰がユダヤ人だったかは私にとってどうでも良いことだった。私は人種差別主義者ではない。ニュルンベルグ法や黄色の星の着用を義務付けたハンガリーの法令が誰をユダヤ人とみなしているかは、私にとってどうでも良いことだ。ユダヤ人であったことを再び意識させたのは、チョオリー・シヤンドールの詩が現れた時だ。それはこう宣言している。「アウシユヴィッツの後では、もうハンガリーに生きるユダヤ人が本当のハンガリー人になれる見込みはない」*。彼の眼には、私は十分なハンガリー人ではないのだろうか。

* 「社会主義共和国、ホルテイ時代、とくに虐殺の時代によって、知的・精神的な融和の可能性は失われた。……自由な原理で行動するハンガリーのユダヤ人は、そのスタイルと思考様式において、ハンガリー人に同化しようとする。これを実現するために、今まで成功しなかつた国会への橋渡しを構築することに成功した」。

(Csorfi, 1990, 5, p.)

私は反ユダヤ主義者や人種差別主義者のように、人を人種や宗教で区分したくない。この点について、私の見解を概念化する

れば、次のようになる。「自己防衛と人間の尊厳を守る点で、私はユダヤ人である。もし君が反ユダヤ主義者なら、私は顔を上げて、自らがユダヤ人であることを告げる。そうでなければ、非倫理的で不快に人間を差別することにかかわることはない。」ひとつだけ付け加えておけば、「ユダヤ人問題」が陽の目を見るような日々を再び過ごすことになるとは思わなかった。この点で、体制転換後の時代は私を失望させた。

ここまで、理不尽な現象や私自身にかかわる問題について、やや詳細に語ってきた。現実が生じている変化に対する無批判な観察者であるかのように、読者に見せたくはないからだ。我々が生きている社会は沸騰状態にある。良い物や悪い物、美しい物や醜い物が混ざり合っている。その割合を量る客観的な規則は存在しない。人々はそれぞれの混合物の中を主観的に生きていくのである。

私の交友関係にある人々の多くは、悲観主義者である。「これをどう思う」というのが友人たちの決まり文句で、最新の不快な事件に触れるのだ。どう思うかって？ 私が体制転換のプラス面や将来の発展から期待できる成果を描き始めようとすれば、「国庫的楽観主義 (kinestari optimismus)」(根拠のない楽観主義) やかつての人民教育や農村組織者の無内容な情宣を思い出させることになるだろう。だから、この自伝の枠組みの中では、自らの悲観主義と楽観主義を語ることに限定した

い。

体制転換前は悲観主義に傾いていた。それも独特な悲観主義だ。「悲観主義は行動を抑制しない」と、一九八三年に出版した『諸国民の健康』の中で記した。ここでは、カミュの『ペスト』を引用した。英雄的な医師リウーと、友人でペストとの闘いで彼を助けているタルーとの会話である。「はい、とタルーは答えた。理解できます。でも、貴方の勝利は常に一時的なものです。それだけです。リウーの顔が曇った。そのことは、いつも分かっている。だが、それが闘いを止める口実にはならない」。

一九八六年にアメリカで *Contradiction and Dilemmas* を出版し、その「前書き」で次のように記した。「読者に注意を喚起する。これは楽観主義の著作ではない。しかし、悲観主義のそれでもない。ハンガリーには世紀の伝統がある。お前はもう諦めている。苦渋と怒り、物事の行く末の不確かさと実現不能。それでも、より良き運命のために勤勉に誠実に働くのだ。ハンガリーの戯曲や詩歌の古典を読んだことのある人やバルトークの音楽を聴いたことのある人なら、この矛盾した感情を正確に理解するだろう。多分、これは経済学を専門とする者もこの伝統を引き継ぐことができるような、灰色で非哲学的な技能なのだ」。

私自身の感情について言えば、体制転換後に悲観主義と楽観

主義の混合物の構成が、楽観主義の方向へ移動した。我が国と世界に生じた変化の好ましい特徴と好ましくない特徴を数行で記すのは、不真面目なことだろう。一冊の著書でも十分には描ききれないだろう。だから、いくつかの現象を取り上げて、私の生活感覚の形成にどのような影響を及ぼしたかを描いてみたい。私は問題が生じていることを否定しないし、それを正確に捉えている。ポスト社会主義地域の数億人の前に自由の可能性が開かれて以来、将来を別様に見るようになった。民主主義へ向かう以前の動きに、新しい大きな民主主義の潮流が加わった。歴史的な規準でグローバルに測れば、専制的支配の領域が狭まり、多少とも民主主義的制度が機能している領域が広がった。このプロセスが停滞したり、場合によっては逆転したりすることがあっても、それは一時的なものだと確信している。私自身も怯えながらテロリズムの行動を注視し、テロリストの手に大量破壊兵器が渡った時の結末に不安を抱いている。こうした不安はあるが、民主主義の伝播が歴史的過程であり、歴史的長期を考えれば、将来も持続されていくものだと考える。

確かに不均等ではあるが、すべてのところで生産が伸び、技術が発展し、これに伴って人間の消費に利用できる資源の量も増えている。もちろん、常に新しい問題が次から次へと起きてくることも理解している。それでも、「消費社会」を嘆いたり、社会の高齢化やコンピュータ普及に伴う問題を悲しんだりし

ない。村々に電気が灯り、下水道が敷かれ、伝染病が予防され、寿命が延び、情報技術やコミュニケーションが人々をより良く結び付けるようになれば、それは私の眼には進歩である。私は問題を見据え、それを手助けしようという楽観主義者になった。

コレギウム・ブダペスト

体制転換によって、ブダペストにおける私の研究環境に本質的な変化が生じた。一九五五年以降、私はハンガリー科学アカデミー経済研究所の所員であった。研究所を追放されて、別の職場で働いていた九年間を除けば。一九九二年に、新たに創設されたコレギウム・ブダペストの仕事に加わるように招聘を受けた。この招聘を受け入れ、コレギウムの創設メンバーの一人になった。ここから、ブダペストでの活動拠点が、経済研究所からこの新しい仕事場に移った。すべての別れがそうであるように、この移動にも耐え難い感情が伴った。経済研究所とは多くの感情的な糸で結ばれており、友情や思い出が詰まっている。もちろん、多くの同僚たちとは今でも緊密な関係を持ち続けている*。

* 第11章で研究所の生活を記した。午前十一時半に皆で一緒に昼食をとる習慣ができた。長期にわたった研究所での私の貢献が、

跡形もなく消え去ることはない。かつてのコルナイ・グループは今でも一時半に昼食をとる。私が時折訪問する時だけでなく、そうでない時も、この習慣を続けている。

コレギウムの創設は、ベルリンの Wissenschaftskolleg の所長であるヴォルフ・レペニス教授の発案によるものである。このベルリンの研究所はプリンストン高等研究所を模範にして創られた。既述したように、この研究所では招聘された研究者が長期にわたって、教育と行政の仕事から免除されて、何の義務もなしに自らの思索、著作、研究、学習に時間を充てることができる。ヴォルフ・レペニイと彼の側近でベルリンの研究所の秘書であるヨアヒム・ネットテルベックは、東欧にも高等研究所を創設する時代が来たと考えたのである。ポーランドやチェコの可能性を押し量りながら、最終的にその姉妹研究所を創設する地にハンガリーを選んだ。彼らが研究所への資金提供者の一団（西欧の政府と財団）を取りまとめた。

レペニイ教授は交渉の初めから協力を要請した。所長の役は引き受けなかった。ハーヴァード大学で時間の半分を割いていることからそれはできなかった。他方、常勤のフェローとして、コレギウムを指揮する少人数の指導陣に加わることを引き受けた。

コレギウムの活動を助けるために、大きなエネルギーを使う

のを惜しまなかった。毎年、招聘する客員研究員やフェローの選抜に加わった。コレギウムはハンガリーで機能している国際的研究所である。適切な比率でハンガリー人（国内だけでなく、国外のハンガリー人も）と外国人、「東」と「西」の研究者が仕事をするように努力している。

コレギウムは学際的な研究所である。これはこの独特な研究所の魅力のひとつでもある。昼食時には、音楽史の研究者や遺伝子研究者、哲学者や歴史家が顔を合わせ、興味深い話題で会話することができる。すべてのフェローは自らの研究について、セミナーを開いて他の研究者に報告することが義務付けられていて、他の専門の同僚が理解できるように話すことが要求されている。招聘者の選抜にあたっては、種々の専門領域が適切な割合になるように配慮しなければならない。

客員研究者の一部は一人で、自らの研究領域で仕事する。他の研究者はグループを組織する。その時々、異なるテーマでグループを作る。私自身も三度にわたってこの種の研究グループを組織した。一番最近では、イェール大学のスーザン・ローズ・アッカーマンと共に、「ポスト社会主義過渡期における透明性と信頼」というテーマで研究を組織した。この研究には経済学者、社会学者、政治学者、文化人類学者、哲学者、法学者が参加した。研究者の国籍は一四カ国に上った。四〇以上の研究が出来上がり、そこから選択した論文を二巻本にして、二〇

○四年に出版した。⁽²⁶⁾

この仕事で感じたことだが、社会科学の種々の分野がいかに高い壁によって分離されているかが分かった。このグループの内部セミナーで相互に研究を周知させるのだが、それぞれの専門用語だけを解し、それぞれの専門分野の概念体系を使い、それぞれの手法を使い慣れていることが明らかになった。自らの専門の古典的文献や最新の流行理論などを、自明の知識とみなしているのだ。他方、他の専門の用語や文献、手法については、ほとんど知識がない。我々のような小さなグループの中でも、ある専門分野の研究者が他の専門の研究者に伝える必要がある場合には、彼らが理解できるように説明するという慣れない思想的配慮を要求することになった。経済学者には自明のことでも、別の公理や手法に慣れた社会学者や法学者には明瞭でないことや、その逆の場合が、繰り返し経験された。具体的な知識の取得や研究成果以上に、学際的な共同がすべての参加者に強烈な知的経験として、大きな影響を与えたに違いない。

コレギウムの運営において、何度も難しい決定を下さざるを得なかった。ハンガリーで唯一のこの独特な研究所がもつ統合性、知的・政治的自立性、自治を守るために、多くの犠牲を払わなければならなかった。簡単なことではなかったが、介入の試みや政治的圧力を断固として排除することができた。これに関連した私の仕事は公に行われたものではないし、何らかの認

知を受ける種類のものでもないが、私の人生の中でも、成功物語の中に数えられるものである。

創設から研究所員になっているメンバーは、今では私一人になってしまった。すでに「永年名誉フェロー」の称号を得て、行政的義務から解放されて、研究だけでコレギウムに貢献できる立場になった。調和美と尊厳に満ちた研究所の建物に初めて足を踏み入れた日のように、今でもこの環境は知的で美的な至福をもたらしてくれる。夕刻に建物の門を一步出ると、ライトアップされたマーチャーシュ教会の尖塔が一瞥され、城砦の通りや広場の魔法のような雰囲気が纏わりつく。この光景に浸る度に、このような素晴らしい環境の中で、このような安寧の環境の中で仕事ができる特権に恵まれたことを意識している。

人生のインターメゾ…七〇歳の誕生日

前節は仕事のことを語ったものだが、この節も仕事の話になる。ある個人的なエピソードで、コレギウム・ブダペストで起こったことも、この中に含まれると思う。

妻のジュジャが最高の機密を凝らして、私の七〇歳の誕生日祝いを準備した。後から知ったことだが、当時の所長のクラニツアイ・ガールが、研究所の施設をこの祝いの場に使えるように取り計らってくれた。

祝いの当日、ジュジャは夕食に連れて行くからと、正装するように求めた。ネクタイも締めた。車に乗り込んで、コレギウムに向かった。そこで分かったのだが、誕生日のパーティが用意されていた。ジュジャは五二名の参加者を招待した。国内外に居るすべての家族成員と身近な友人たちを集めた。この場所に於て初めて、人々が参集している理由が分かった。

全員が到着したところで、会議室に一同が会した。ジュジャが壇上に上り、この催しの準備に携わった人々に謝辞を述べ始めた。最初に最愛の友人であるハナーク・ピーテルに触れた。初期の準備に加わったが、祝いの日を待たずに、この世を去ってしまった。さらに話を続けるはずだったが、喉がつまり、眼が潤み、言葉が続かなかった。大きな拍手の中、ジュジャは壇上を後にした。

このシーンに続いて、私の好きな作曲家であるモーツァルトの弦楽四重奏が始まった。コレギウムの初代所長で音楽愛好家のヴェーカース・ライオシュが、この日のために、アウエル弦楽四重奏団を招いてくれた。

楽しい話題が続いた。友人たちが昔のエピソードを披露した。ケンデ・ピーテルは小学校時代の出来事を回想した。彼の両親が息子の誕生日の集まりに、私を呼ぶことを提案したのだが、これを拒否したというのだ。「嫌だ。だって、彼は喧嘩早いから」。私は耳を疑った。私が喧嘩早かったって？ この後に、

リトヴァーン・ジョルジュが続き、さらにナジ・タマーシュが研究所の生活のことを話した。私のことを身近で知っている者は皆、ワイシャツや背広を汚さないで私が食事を終えたことがないことを知っている。まだ研究所が設立されて間もない頃に、これが起こった。それも新調の背広に。友人たちが即座に汚れを落としてくれるクリーニンングにズボンを持って行った。下着で部屋に閉じこもっていたところに電話が鳴り、クリーニンング屋から翌日にならないと仕上がらないと連絡があったという。すぐに取り戻しに行ってくれて、無事、ズボンが戻ってきた。

ラキ・ミハイも、私との面白いエピソードを紹介した。マートラハーズの保養所に彼らが滞在していた時のことだ。私もそこに居て、仕事に没頭していた。それでも、彼らの誘いに乗って、散歩に加わった。出かける前に時計を見やって、大方、「散歩に一時間使える」と言ったようだ。これは十分に信頼できる情報だ。ミハイがこの出来事を話してからは、これが我が家の口癖になった。散歩に出かける時にはいつも、時計に眼をやり、「ラキの時間」がどれほどかを言うのである。

会食が始まり、息子のアンドラーシュは子供たちを代表してユーモアに満ちた話をし、次いでスウェーデンのジョーフィアが孫たちを代表して立派なハンガリー語で優しい言葉をかけてくれ、最後にリムレル・ユトカが友人たちを代表して祝辞を述べた。

べた。そして、この時のために製作した額を渡してくれた。「大犬勲章」(Nagy Kutya Rendel)とあった。これはとくに大きな敬意を表してのことだ。というのは、ユトカにとつて、犬こそ最高の価値なのだから。

会食のテーブルを嬉々として見回した。三人の子供とすべての孫を含め、家族全員がブダペストで一堂に会したのは、これが最初だった。彼らと並んで多くの友人たちがいた。これはいつもの友人仲間とは違っていた。お互いを知っている者もいれば、初めて会う者もいた。私に祝辞を述べるといふ糸に結ばれて、この夕べが初めて彼らを互いに結び付けることになったのだ。

別の機会にも、祝いの席に参加している。家族の習慣として、誕生日は祝いを述べたり、プレゼントしたりするだけのものではなく、行事のシリーズになっている。一度ならず、公的な祝賀行事に参加できたことも誇りに思っている。種々の大学から名誉博士号を得たり、ブダペストのフランス大使が勲章授与に際して私の友人たちを祝賀パーティに招待したり、コレギウムと同僚たちが七〇歳と七五歳の誕生日を祝ってくれたりした。七〇歳の誕生日を記念して、ガーチ・ヤーノシユとケルー・ヤーノシユ、エリック・マスキンとシモノヴィッチ・アンドラーシュがそれぞれブダペストとケンブリッジで、記念論文集である *Festschrift* を編集して渡してくれた。⁽²⁴⁾ これらの集いのどれ

も皆、私に大きな喜びを与えてくれた。それでも、ジュジャが組織してくれた七〇歳の誕生日記念の祝賀は、特別なものだった。最高の温度に包まれた愛情と優しさが、この催し物を人生のものとも美しい喜びに満ちた瞬間にしてくれた。

ハーヴァード大学…講義と別離

体制転換以後も、ブダペストとアメリカの「往復生活」を続けた。しかし、ハーヴァードとも、一九八九—一九九〇年に自分自身に課した新しい要件を履行しなければならぬ時がきた。

ハーヴァード大学は伝統的に、西側世界におけるソ連や共産主義制度を研究する知的なセンターのひとつであった。ここに至るまで、多くの先行要因が働いている。ソ連を去った経済史の古典的研究者ガーシエンクローン、ノーベル経済学賞を受賞したレオンティエフとクズネツが、ここで研究を続けた。世界の東の半分で起きている事件に、彼ら三名とも関心を失わなかった。共産主義制度や東欧に関心のある者は皆、遅かれ早かれ、この名高いロシア研究センター (*Russian Research Institute*) を訪れたものだ。大学にはこの他に、極東研究センターがあり、名高い中国専門家がここに加わっている。ハーヴァード時代にはこれらの研究所と密接な関係を結び、多くの研

究者と交流し、数多くの講演を行った。

ベルリンの壁崩壊は流動的狀態を創り出した。かつてのソ連の領域に生まれた新しい国家や東欧に対して、興味を抱かない教員はほとんどいなかった(少なくとも一時的に)。同僚の一部は何度か短期の訪問を行ったり、国際会議に出席したりするのに時間とエネルギーを割っていた。優れた能力をもつ同僚の中には、ポスト社会主義の再建を手助けするために、数年にわたって全力を注いだ者もいた。

何度も私の電話が鳴り響いた。ブダペストや旧社会主義國を訪問するので、状況についてのブリーフィングを受けたいという同僚からの依頼である。種々のハーヴァード・セミナーへの講演が、次から次へと舞い込んだ。一度、千人を越える学部学生を相手に概論講義をすることになり、わずか一回の講義で社会主義制度のメカニズムと現在の轉換を説明しなければならなかった。通常は音楽会に使われる木目張りのホールであるサンダーズ劇場で、この講義が行われた。

体制轉換に続く数年、ファカルティ・クラブでは「夕食セミナー」が組織され、何らかの形でポスト社会主義の研究や教育あるいはアドヴァイザーの仕事に従事している教員が招かれた。定期的集まり、誰かが自らの体験を報告し、興味深い討議が続く。相互の見解が激しく対立することも度々だった。

教員だけでなく、学生たちも新しい状況に関心を高めた。社

会主義制度に関する私のコースは大学院の自由選択科目であるが、登録学生を越える参加者が出席していた。以前に比べて、聴講生の数は何倍にも膨れ上がった。一九九〇年代にはかつての社会主義諸國、ロシア、ウクライナ、ルーマニア、ブルガリア、ウズベキスタンからの学生が増えた、以前からいた中国人学生も増えた。多数のハンガリー人学生を迎えることができたことも、嬉しかった。

講義は常に多くの準備を要したが、それがますます難しい仕事になった。政治的轉換や体制轉換は、比較経済体制論や「ソ連学」あるいは東欧の専門研究者に、大きな課題と期待を与えることになった。これまで取得した知識が将来の役に立たないと感じて、この専門領域から撤退した同僚もいる。そのほかの研究者は、私を含め、腕を捲り上げてこの仕事に取り組もうとしたのである。

社会主義体制については、十分に成熟した知識があった。それは数十年にわたる研究と文献渉猟に裏付けられている。これに対して、ポスト社会主義地域の制度、政治・経済構造、法制度は、常に流動的狀態にあった(今もなお)。私は学生に対しても率直に、未だ熟成加工できていない知識材料を提供することを告げた。そうすることが有用だと考えた。

「過渡期(移行)論研究者」は、明らかに一時的な専門職である。その用語が示しているように、過渡期が終われば、この

独特な専門領域も終わりになる。しかし、この二度とないチャンスをうまく利用すれば、多くのほかの目的に利用できる計り知れない価値ある経験を獲得できるはずだ。歴史は現実の実験室を提供しており、世界的時間で測れば非常に短い時間で大転換が進行していることを、自らの眼で観察できる。私を含めて何人かが過渡期（移行）論に携わってきたことを、今から振り返っても、悔いることはない。かえって、経済学者（社会科学者）総体を考えれば、この素晴らしい興奮に満ちた、多くの教訓を得られる研究の可能性を十分に利用していないことを残念に思う。

過渡期論の講義を始めた時に、私一人では適切な概観を与えることができないと考えた。そこで、講義シリーズを組織し、このテーマの「専門家」を呼ぶことにした。この講義には多くの学生が参加し、興味深い質問を提起した。にもかかわらず、個人的な会話を含めて学生たちから何度も聞かされたことだが、全体的な構図が描けないという。すべての講演者は自らの視角、研究方法、既成観念にもとづいて講義する（それはそれで良い）。ところが、学生にしてみれば、これらを統一的に理解することができない。そこで、過渡期の様相が見え始めた時に、統一的な構造と明瞭な思考で、このテーマの講義を私一人でやって見ることにした。学生たちはこちらの方をうまく受け容れてくれた。だが、一〇年前に行つたような、講義から著書をま

とめ上げる仕事を行わなかった。過渡期をテーマにした総括的な著作が必要だと思うが、この課題は研究者の若い世代に任せたい。

歳月が経ち、その時が近づいてきた。これからどうするかを考え始める時がきた。これからの話を始める前に、アメリカの年金生活の条件について、少しばかり記しておかなければならない。アメリカの法律は「年齢による差別」を禁止している。雇用主は労働力が不要になれば解雇できる。従業員が三〇歳であろうと、七〇歳であろうとそれは可能である。しかし、一定の年齢に達したから、たとえば「六〇歳あるいは六五歳に達したから年金生活に入らなければならない」と通告することを容認していない。「老齢」を解雇の法的根拠することはできない。この種の保護に加え、テニユアを持つ教授にはさらに特権が付与されている。アメリカの大学教授制度について既述したように、大学はテニユアを持つ教授を解雇することはできない。したがって、この特権のあるカテゴリーに属する人々（私もそこに含まれる）には、年金生活に入る退職義務年齢がない。他方、ヨーロッパにはそのような年齢制限が存在する。このように、大学教授は年金生活を始める時期を自分で決めることができる。体力が続く限り、現役で残ることができるのである。

強制的な社会保険料を払っている国民が受給できる国民年金は存在する。生存水準程度のきわめて僅かなものだ。大学教授

はこれに加えて、現役時代に非営利の私的年金基金に保険料を納める。年金生活に入る教授はこの基金の成果を得ることになる。保障された額はなく、最終的な成果は種々の要因に依存している。第一に、教授期間と俸給水準に依存する。次に、保険料の運用にどのようなポートフォリオを選ぶかに依存する。さらに、保険料支払い期間の運用益に依存する。

さて、アメリカの大学教授にとって、年金生活への引退は何を意味するのだろうか。金銭的な所得に関して言えば、幅広い選択肢が存在する。支払った保険料を一括して受け取ってもよいし、残された人生の年金として受け取ってもよいし、死亡した後に寡婦年金を受け取るようにすることもできる。もし四〇年から四五年の間、教員として通常の経路を辿ってきた場合、年金として取得できる所得は現役時代のそれから急激に落ちることはない。だから、無理して教育や行政の仕事をする必要はないのである。もし研究生活を続けたければ、大学はそれを支援してくれる。大学の研究室を使え、大学の知的生活の雰囲気のまま味わえる。図書館や大学のプールに通うこともできるし、フアカルティ・クラブを使うこともできる。大学が組織し、財政的に支援する健康保険サービスを受けることもできる。要するに、アメリカの大学教授は物的にも知的にも、年金生活に入ることであらうものが少なく、逆に義務からの解放で得られるものの方が大きいのである。ほとんどの教授が一定の年

齢に達すると、自ら年金生活へ行くことに、何の不思議もない。

私の場合は、まったく別の要因が働いていた。法律や労働契約が年金生活を義務付けていないことは同じだが、妻とともに常に事前に考慮すべきことは、加齢に従って、何時まで二重生活に耐えることができるかであった。毎年、二度にわたって、大きな荷物を作っては解くという生活をどこまで続けられるか。ブダベストとケンブリッジの生活に必要な多種の行政手続、二つの職場から派生する課題の処理にかかわる余分な仕事に、いつまで耐えることができるのか。突然の病で決断を余儀なくされることだけは避けたかった。だから、まだ余力があるうちに、アメリカでの生活を切り上げることを考えていた。

アメリカの同僚の場合と違って、私の場合は教育課題からの解放という軽減だけでなく、きわめて大きな損失を伴うものだった。引越しすることは、ハーヴァード、ケンブリッジ、ボストンがもつ比類ない知的文化的坩堝から離れることを意味する。自分の研究室や世界でも最大級の研究図書館を使えたり、フアカルティ・クラブで昼食をとって友人たちと会えたりする権利は、すべて行使することができないものになる。

何度も考えた挙句、二〇〇一―二〇〇二年を最後の学年暦にすることに決めた。これを最後に国に戻ることにした。

コースの学生には彼らが最後の学生になることを告げた。最終講義の温かい祝賀や、学科の教員評価アンケートに無記名で

記された優しく温かい言葉が、美しい思い出として残っている。

ブダペストでは多くの人々が、年金生活への引退に際して、上司や同僚による形だけの祝賀で職場を去ったことを悲しげに語っている。私の祝賀会は内容のある友情に満ちたものだった。デイル・ジョルゲンゾンは専門研究と公的な仕事について手短かに紹介してくれたが、敬愛に満ちていただけでなく、ジョルゲンゾンの資質である精確さと専門的配慮が溢れたものだった。

この後にエリック・マスキが続いた。彼はもうハーヴァードではなく、プリンストン高等研究所の経済学者になっており、そこから祝賀に駆けつけてくれた。彼はいろいろなエピソードを織り交ぜ、「ソフトな予算制約」理論でどのように一緒に仕事をしたのか、共通の学生をどのように扱ってきたのか、優れた能力をもつ中国の学生グループとどう付き合ってきたのかを語った。ジェフリー・サククスはこう話した。「自分の著作を彼に見せる時は、常に不安を感じたものだ。というのは、彼は手にしたものを、厳格かつ偏見なしに評価するからだ。彼の仕事に関連してもっとも重要なことは、専制や虚偽が支配している世界で、真実を述べたことだ。この点では、つまり真実に忠実であるという点では、ミフニクやハウエルに匹敵する」。この言明を光栄なものとして受け取った。

三名の経済学者に続いて、ボストンで生活している息子のアンドラーシュが言葉を継いだ。いつものユーモアを交えた語り

口で、自らの家族としての経験にもとづき、私の人生にとって学問とハーヴァードが意味するものを語ってくれた。

最後に、私が少しかけユーモアを込めて挨拶した。どんなに素晴らしい瞬間を生きているのか知らなかったし、また知りたいたとも思わない。散文でこれを語るのは難しい。シューベルトの音楽がこれを感じさせてくれる。人は一度に嬉しくも悲しくもなれる。一八年間にわたってこの知的な共同体で生活し、学びそして教育し、友人たちを獲得できたことは、何物にも代えがたい感情を与えてくれた。すべてをここに残して去らなければならぬという思いは、耐え難いものだ。

祝賀の後には、別れの晚餐が続いた。友人たちに別れを告げた。それから、ボストンの街、歩き慣れた通りや広場を散策した。最後の夜には、ハーヴァード・スクウェアに繰り出した。夜中も開いている本屋にも駆け込んだ。

息子のアンドラーシュと妻のアーギ、それから孫たちに別れを告げた。これからは彼らが国を訪問する時しか会えなくなる。二人の孫の面倒を見るのも、これからは難しくなる。

マウント・アーバーン通りのフラットにある物は皆、苦労して取得して取り付けたものばかりだ。それを取り外し始める。友人たちに贈った物、ブダペストに送った物。木箱やダンボールがいつぱいになる。運送業者がやってきて、コンテナに詰め、そしてブダペストに向かって出発した。

まるで映画のフィルムを巻き戻して、もう一度観るように、マウント・アーバーン通りの住宅で生活し始めた最初の夜が再現された。何日間か、床にマットレスを敷いて寝た。仕事部屋に簡易机と本棚を作り、そこにパソコンと必要なファイルセットした。いつも何かやることや書くことが、最後の瞬間まであるのだ。このような時、妻のジュジャは「不動の鉛の兵隊」と呼ぶ。この可笑しくもあり、心が痛む瞬間をビデオにも収録した。

そして、ヨーロッパに出発する日がきた。いつものように最初はスウェーデンの娘と孫の所で数日を過ごし、それから息子のガーボル一家が待つブダペストへ出発した。これからもケンブリッジを訪問することはあるだろうが、それはもう、数ヶ月のブダペスト滞在の後にアメリカの家に戻ってきた頃のそれとは違う。人生の一時期が、永遠に閉じられた。

我が家のオフィス

二〇〇二年夏にブダペストに到着し、翌年に引越しが待っていた。ドブシナイ通りにある三階建ての住宅に二八年間過ごししてきたが、階段を上るのが辛くなってきた。エレヴェータがある住宅を探す必要があった。最終的に、オーブダに我々が描いていたような住宅が見つかった。過去を回想できるように家の

中をまとめた。ケンブリッジで購入した家具、絵画、書籍と並んで、ブダペストの住居から運んだ家具や装飾品、そして無数の書籍が並べられた。

引越しを経験した人なら分かると思うが、これはたいへんな仕事だ。我々の場合、アメリカとブダペストの二つの住宅を新しい家に統合するのだから、とくに難しかった。物理的な疲労よりはるかに難しいのが、選別だった。何をとっておき、何をあげる、そして何を廃棄する。年老いたアメリカの友人たちが郊外の広い家から街の小さな住居に引っ越し時に、苦労していたのを見ていた。それが今度は自分たちの番になった。使い慣れた家具や書籍や古い書き物に、別れる時がきた。それでも、ちようど良い時機に引っ越したと思う。職人たちとの打ち合わせや喧嘩、道具や家具部品の調達*、書籍やレコード・ビデオの取納場所、その他諸々の引越し要件で、ケンブリッジを去った心の痛みを繰り返し体験するような「ノスタルジー」に耽っている暇がなかった。

* ドブシナイ通りの住宅建設に際して獲得した経験が、著書「不足」を書き上げるインスピレーションになった。一九七四年と二〇〇二年の住宅建設の経験を比較すると、売り手市場から買い手市場、供給制約経済から需要制約経済へと転化したケース・スタディが書けるだろう。当時は、コネを使って、工場から傷のある

バスタブや二級品の煉瓦を取得した。今では、膨大な供給選択肢の中から、嗜好に応じて家具部品や用具を選ぶことができる。

「気でも狂ったのか。アメリカに家も職も素晴らしい環境もありながら、どうしてここに戻って来なければならぬのだ」。一度ならず聞かれたことだ。

確かに、毎日、顔をしかめることや腹の立つことに囲まれている。テレビやラジオのスイッチを入れ、ニュースを聞き始める。すぐにスイッチを切ることが多い。馬鹿げたことが多すぎるし、暴露や虚言を最後まで聞くことができないからだ。気分が悪くなる。空約束や上滑りの情報が多すぎる。

政治的な事柄だけではない。日常生活でも人々の不躰さや度々出会う。運転者が信号待ちの数秒間も辛抱もできなくてクラクションを鳴らす、店の売り子やレストランのウェイターの不注意に不快になることもある。

それでも、この世界が自分たちの居場所だと感じる。悪いことがあっても、それも周知の、自分の世界で起きていることなのだ。それに適応することができる。運転者がどうして辛抱強くないのか、売り子がどうして仕事でなく別のことを考えているのか、推測し理解できる。

古いジョークがある。ハンガリーの代表団が中国を訪問した。毛沢東がハンガリーの人口数を尋ねた。答えを得た後、こうこ

メントしたという。「君たちはなんて幸せなのだろう。そんなに少なければ、皆知り合いだろう」。

アメリカではハーヴァード大学教授にはいろいろな可能性が開かれている。しかし、あの巨大な国では、私は未知の小さな一点に過ぎない。ところが、ここでは違う。もう七七年もここで生きている。皆を知っているとは言わないが、それでもかなりの人を知っている。私は公衆に知られた人物ではないが、それでもかなり多くの人が「私が誰か」を知っている。大臣に意見を具申しようとすれば私を迎えてくれるだろうし、新聞の編集局長に電話する時に長々と自己紹介する必要もない。

物理的な距離から言えば、アメリカにいたアンドラーシュの家族とは遠くなったが、ブダペストのガーボルの家族とは近くなった。スウェーデンにいたユーディットたちとはケンブリッジにいた時より簡単に往来できるし、何よりも同じEUの同胞市民になった。とくに嬉しいのは、孫たちが成長し、高校生や大学生になって、難しいテーマで議論することができるようになったことだ。ブダペストにいる孫のトミーはコンピュータの専門家だから、私のPCの具合を見てもらうこともできる（もちろん、ここでトレードオフを考えるのは意味がない。一方の子供や孫との距離が遠くなるのが、他方の子供や孫との距離が縮まることで補完できる訳ではない）。

今では、短期の旅行を除き、ハンガリーに定住していること

に再び慣れてしまった。もちろん、以前の準備に追われて疲れた日々が懐かしい。「もう少しで飛行機に乗り込むぞ。緊張やハンガリーの問題から解放されて、再びケンブリッジが醸し出す安寧や静寂や美を堪能しよう」という気分が懐かしい。このような郷愁に襲われる時には、また別の考えがこれを補充してくれる。夏の終わりに近づくにつれ、苛立つ必要がもうなくなつた、と。何時から荷物をまとめ始めるか、講義ノートの修正を何時まで仕上げるかで、苛々することはない。一八年間にわたつて、半年あるいは一年のリズムで、我々の時間が刻まれてきた。歳月の経過がこの往来によつて、ばらばらになつていた。今、ようやく、時間が一樣に過ぎていく。

我々は今、我が家にいる。

* もちろん、この安寧や静寂は我々だけのものである。数ヶ月だけそこに旅行するハンガリー人に、その世界が提供するものだ。結局のところ、我々はそこでは部外者でしかあり得ないからだ。当地の政治的紛争に巻き込まれることもないし、アメリカの友人たちを苛立たせる緊張状態を彼らと同等に感じることもないからである。

「何をしている？」

友人たちの集まりに出かけたり、知人と出会つたりすると、いつもこう聞かれる。「何も」と答えることなど、私には考えられない。私は二重の名誉称号を得ている。ハーヴァード大学とコレギウム・ブダペストからである。だから、仕事を手休めする権利がある。仕事を続けることで得られる所得なしでも、ちゃんと生活していくことができる。

確かに、仕事を止める時は来るだろう。しかし、今まだ、この質問に答えることがある（皮算用的に小さな声で言えば）。

国際経済学連合（IEA）会長として、種々の責任がある。この活動の頂点は、その世界大会である。計画によれば、モロッコで開催（二〇〇五年八月）される。千人を超える参加者と二百近い講演が予定されている。もちろん、多くの人がこの開催に携わっているが、会長はこの行事に最終責任を持つている。すでに会長講演の準備を始めている。東欧からの最初の会長として期待されているように、ポスト社会主義の過渡期の問題、あるいはより一般的に言えば、大きな歴史的転換の特質について扱うつもりである。会長職を引き渡した後を含めて、これが将来の私の主要な研究テーマである。

その合間に、他の仕事を傍らに置いて、この回想を記した。

長年にわたって専門著作に従事してきた研究者にとって、これは慣れない作品だった。筆を擱く時がきた。他の仕事が待っている。

訳者後書き

本書はハンガリー語原書にもとづく邦訳書であり、原書の本文すべてを訳出したものである。しかし、原書の巻末に一括して掲載されている一二枚の写真集は、本訳書に収めることができなかつた。そのうちの何葉かを巻末に収録したが、いくつかの理由でその全部の掲載を断念した。割愛された巻末写真集は、訳者のホームページ (<http://morita.tateyama.hu>) で一覧することができる。関心のある読者は参照されたい。写真集の割愛を補完する意味で、原書にない事項・人名索引を付した。なお、巻頭の「凡例」で記したように、巻末参考文献は英語版用に作成されたものを使用した。このため、本文注および「補注」に掲げられたハンガリー語文献の中には、この巻末リストから削除されたものや、刊行年に食い違いが見られるものがある。可能な限りこの食い違いを正したが、ハンガリー語文献の出典を確認されたい読者は、ハンガリー語原本に付された参考文献を参照されたい。これも訳者のホームページで一覧することができる。

本書の著者コルナイその人やその業績について、訳者が付け加えることは何もない。本書にそのすべてが記されている。また、本書がどのような読者を対象としているかも、「著者前書き」から明瞭である。それゆえ、著者には日本語版への序文を求めなかつた。

読者の便宜のために、ひとつだけ情報を提供しておきたい。訳者は一九九〇年初頭にボストン・ケンブリッジのコルナイ宅にて、著者と長時間にわたるインタヴューを行い、生い立ちから現在にいたる人生と著作を語ってもらつた。この記録は、『経済評論』（一九九〇年一〇月号、一一月号、一二月号）に収められている。コルナイ経済学に不案内な読者は、まずこの記録に眼を通されたい。事前の予備知識として、本書を読み進める指針になると考える。残念なことに、その後『経済評論』は休刊になつてしまつたが、このインタヴュー記録は訳者のホームページからダウンロードできる。もつとも、余計な予備知識がない方が良くもしいない。ただ、著者が自らの著作の検討を行

っている諸章を読み通すには、ある程度の予備知識がないと難しい。その手引きになるはずである。

自然科学の学問と同様に、経済学分野もその領域が限りなく分割され、相互理解が非常に難しくなっている。とくに、戦後の数理経済学の興隆によって、数学的手法を使う研究者と、従来の散文的記述を主とする研究者との距離は埋めようもないほど広がっている。それはなによりも研究対象そのものの乖離として現れている。現代の数理経済学は応用数学そのものであり、部分定理を仮説として定立し、それをコンパクトに証明する論文が優れた業績とみなされる。ここでは経済問題は論理証明を与えるひとつの事例材料にすぎず、目的と方法が逆転している。今日、主流派経済学理論の分野で職を得ようとすれば、数学専攻出身の方がはるかに有利な位置を占めている。数理経済学は初期の経済学的内容を失い、完全に応用数学の一分野に変貌してしまった。

こうした経済学理論の世界における変化は理論対象の限りない抽象化をもたらし、その結果として理論を現実総体の分析から遠ざけることになった。経済理論家は現実経済の諸事象を分析し、政策を提起する専門家ではなく、部分的な経済問題を事例とする行動の形式論理学や数理論理学の専門家、あるいはそれを数学的定理として解く応用数学の専門家になった。そのよ

うな研究から有効な国民経済分析を期待するのは難しい。とすれば、そのような研究が「経済学」として存在する意義はどこにあるのか。一般均衡理論をめぐるコルナイの議論は、この問いに答えようとしたものだ。

他方、エスタブリッシュトされた学問分野では、理論の抽象化から術学的な退廃が起きることは良く知られている。経済学の応用数学化は数理経済学がエスタブリッシュトされたことの帰結であるが、その結果、数理経済学は経済学としてのレーゾンドートルを失うという矛盾に直面している。

このような経済学の現代数理科学化への道を開いたのは、ハンガリー人数学者ノイマンに他ならない。ノイマンは常々、経済学者が現代数学に無知であることを鋭く批判していた。一九四〇年代に経済学を学び始めた現代数理経済学の泰斗たちは皆、ノイマンの厳しい批判の洗礼を受けた。その先達者たちが、ノイマンと同じくハンガリー人であるコルナイとリプタークによる「二水準計画化」の数学モデルに注目した。本書の記述の中に、クープマンズとハーヴィッツがケンブリッジの会議開催中にコルナイの部屋を訪ねる場面がある。彼らの著作にノイマンの影を感じたのだろう。しかし、ノイマンとコルナイは多くの点で対照的である。

ノイマンはあらゆるものを数理モデル化しようとした数学者だった。一の事を聞けば即座に十のことを展開できる頭脳を持

ち主であり、物理学から経済学にいたるまで、その知的関心は多岐にわたった。二〇世紀を代表する天才である。他方、コルナイは数理経済学者として国際的にデビューしたが、ノイマンと違つて数学者ではなく、数理モデル化より生きた社会・経済そのものの分析に関心をもつていた。ノイマンが天才だとすれば、コルナイは他を寄せ付けないほどの勉強家であり、現実観察にもとづく粘り強い分析家である。また、ノイマンが他を圧倒する即興的なモデル展開を得意としたのに対し、コルナイは十のことを聞いても即座にそれを判断せず、何度も再考する時間を経て、著作によつて思考を展開する。さらに、ノイマンは理論から政策まで、基礎研究から原子力政策のような現実の政治に至るまで八面六臂の活躍をした希有な天才であるが、コルナイは政治を含めた社会的活動から身を退き、禁欲的に自らの課題を現実分析に限定した学者である。ノイマンが才気煥発的な能力で人を動かしたとすれば、コルナイは現実によく沈潜した視角と鋭い分析力で時代を動かす理論を構築したと言える。

これほど対照的な二人であるが、ひとつだけ共通するものがある。ノイマンが一般均衡解の存在証明のために構築した数理経済モデルは、国民経済の再生産や成長の条件を分析したものと見ることができ、その意味で、国民経済の全体メカニズムを解明しようとする古典派経済学の神髄を備えている。ところが、ノイマン以後の数理経済学は矮小化された部分的事例の研究

究に墮し、古典派経済学から限りなく乖離する道を辿っている。こうした戦後の数理経済学世界の中で、コルナイの存在は一筋の光明であつた。広い意味における数理経済学の専門家の中でもっとも古典派的な経済学者であつたと言えるだろう。現実の個別事象を観察し、そこから因果関係を探つて、社会経済の全体メカニズムを分析する道筋を獲得して、全体理論を構築していく。社会学者が目指すべきひとつの模範を示している。経済学のみならず、社会科学を志す者が是非とも学びたい姿勢である。現実の観察と分析を欠いた理論は、所詮、頭脳の遊戯に過ぎない。

コルナイの著作はすべて、その時々において、大きなセンセーションを巻き起こしてきた。それぞれの著作の執筆の動機や経緯は、本書で詳しく扱われている。訳者個人としてひとつだけ、特筆しておきたいことがある。それは主著のひとつ『不足』（不足の経済学）が果たした現実的かつ歴史的役割である。この著作はハンガリーの国境を越えて社会主義圏の多数の経済学者や知識人に影響を及ぼしたが、なかでもとりわけ大きな影響を与えたのはロシアと中国である。この両国では改革派知識人に社会体制改革の理論的拠り所を与えた。社会経済体制の改革に思想的な確信を与えたとも言える。この著作が果たした役割は、歴史の中に特記されて然るべきものだろう。

この著作は大部かつ難解な書物であるが、旧社会主義圏の体制転換を担った経済学者や知識人は、この著作からひとつのメッセージを引き出した。現存の体制が続く限り、「不足」からの脱却はない。体制の転換以外に方法がないという確信を与えた。ひとつの理論からイデオロギー的含意が引き出され、それが体制転換を担う知識人や活動家に知的確信を与えた。経済学理論の著作がイデオロギーに転化するという希有な現象が生じたのである。ひとつの経済社会理論が社会を動かす力に転化したのは、マルクスの『資本論』以来のことである。コルナイも記しているように、体制が崩壊するためには、体制を支えてきた知識人、官僚、党員が旧体制の継続性への信頼を失い、新たな体制構築への確信を得ることが不可欠である。コルナイ理論はその理論的な確信を与えた。理論は歴史を動かす力をもつ。経済学を志す人々には、是非、本書から理論と現実が切り結ぶ営為を学んで欲しい。

今、世界はひたすら前を向いて走っている。昨日起こったこととですら、もう顧みられることがない。二〇世紀の歴史の半分を形成した社会主義について、もう誰も真剣に語る者がいなくなった。この健忘症にはひどいものがある。体制が崩壊したから研究する必要がなくなったのではない。まさに逆である。二〇世紀に生きてきた者は皆、歴史の証言者として、自らが見たものの経験したものを分析して、語り継がなければならない。人

間社会が一夜にして変わることはない。体制が変わろうとも、そこには旧体制から継続するものや変容をうけたものが、新しいものと並存しながら存続している（拙稿「体制転換にみるアンシャンレジームの継続と変容」、『経済志林』第六七巻第三・四号、二〇〇〇年三月を参照されたい）。旧い社会の分析なしに、新しい社会の分析はできない。その意味でも、社会主義システムの分析と格闘し、それに生涯を捧げてきた著者の生き様を知ることが、社会の有り様と歴史の変化を学ぶ上で貴重な知識や教訓を与えてくれるだろう。

個人的な事柄を少しばかり記したい。訳者がコルナイの存在を知ったのは、一九七〇年代初めの大学院生時代である。一九六六年に国際基督教大学へ入学した訳者は『資本論』を独学しながら、大学の授業では新古典派総合を唱えたサムエルソンの『経済学』（第六版）を英語で読むという学部学生時代を過ごした。ちょうどこの頃に、『経済学』の都留重人訳が出版された。東大教養学部では内田忠夫教授がこれを使って講義され、玉野井芳郎教授は上梓されたばかりの『マルクス経済学と近代経済学』を講義されていた。学部三年時には、当時スタンフォード大学助手だった雨宮健氏（現スタンフォード大学教授）から、アロードブリュー論文の解説講義を受けた。一九六〇年代から一九七〇年代にかけての世界は、未だ、戦後経済学の百家争

鳴の時代であった。

当時、一橋大学杉本栄一門下の種瀬茂教授が、国際基督教大学で『資本論』の講義を担当されていた。その縁もあって、一九七〇年に一橋大学院へ進学することになった。ちょうどこの時期に、二階堂副包教授が一橋大学に移動された。現代経済学のイデオロギー批判を展開されていた関恒義教授とは、戦後の一時期、東大の弥永昌吉ゼミでノイマン・モデルを学んだ間柄だった。数学出身の二階堂教授はノイマン・モデルから出発してアロー・ドブリュー・モデルの別証明を与える道を歩まれ、中山伊知郎門下の関教授は現代経済学批判の急先鋒となった。血気盛んな若者には非常に刺激的な知的環境だった。同じく中山伊知郎門下の倉林義正教授からは、ストーン等が開発した国民経済計算体系の講義を受けた。それが契機となり、後に倉林教授の一言で、ハンガリーに留学するという運命を辿った。また、都留重人教授の薫陶を受ける機会はなかったが、学長を務められていた教授と交渉の席に就いたこともあった。この頃の一橋大学は実に多彩な教授陣を抱えていた。このような環境で学ぶ大学院時代に、出版されて間もないコルナイの『反均衡』（反均衡の経済学）の存在を知った。当時、大学院の仲間でコルナイ・リブターク・モデルを研究していた久保庭真彰氏（一橋大学経済研究所教授）がこの著書を翻訳しようと思ちかけたのが、コルナイの著作との最初の出会いだった。もともと、それ

から間もなくして、岩城博・淳子夫妻による優れた翻訳が出版された。

本書のコルナイの自己研鑽時代を読むと、我々と同じような学習プロセスを踏んできたことが分かり、しばし、大学院時代が懐かしく思い出された。

コルナイとの個人的な出会いは、一九八二年春のブダペストで実現した。法政大学社会学部創設三五周年記念行事への招聘を打診した。一九八三年一月のコルナイ訪日を契機に、著者の均衡理論批判と「不足の経済学」に関する論文の翻訳出版を始めた。これらの著作は社会主義経済分析に新たな理論パラダイムを与えるものとして、我が国の学界に大きなインパクトを与えた。多くの国でもそうであったように、一九八〇年代における社会主義経済研究分野におけるコルナイの著作の引用頻度は、我が国でもトップだったと推定できる。

一つだけ、釈明しなければならないことがある。一九八〇年代から始めた日本の学界に対する訳者のコルナイ理論の紹介は、初めに記したインタビュー記事が最後になった。以後、本書の翻訳に至る一五年間、つまり一九九〇年代を通して今日に至るまで、訳者はこの間に記されたコルナイの著作を紹介してこなかった。訳者が大学の職場を離れたこともあるが、それが主たる理由ではない。率直に言えば、一九九〇年代、もつと厳密に

言え一九八九年に出版された『感情的ピラ』以降の著者の経済政策提案やその姿勢に賛同できなかったからである。本書の当該諸章の翻訳過程で、改めてそのことを強く感じざるを得なかった。しかし、ここはそれを論じる場ではない。拙著『体制転換の経済学』（新世社、一九九四年）で少しだけそのことについて触れたが、コルナイの政策提言の問題については別の機会に詳しく論じたい。以下に、手短に、コルナイの政策提言の紹介を止めた訳者の個人的な思いを記しておきたい。

コルナイはあくまで理論家である。訳者は理論家としてのコルナイを高く評価するが、政策家としてのコルナイに魅力を感じない。しかし、そのことは理論家としての価値を何ら低めるものではない。本書を読み進めながら、理論と政策、理論家と政策家、学者と政治家・活動家との間に存在する深い溝を、改めて感じざるを得なかった。コルナイが自らを理論家として禁欲的に務めたことを正しく思うし、一九九〇年代に政策提言に踏み切った決断も理解できる。しかし、訳者個人は一九九〇年代のコルナイにもっと別のことを期待していた。

どの世界にも万能選手などいない。医学の世界でも、解剖学の権威が、外科手術や内科診療をすべてこなすことなどあり得ない。手術ができないから、解剖学者としての権威が問われるというものではない。社会の解剖学者としてのコルナイが、具体的な政策提言ができなくても誰も責めないだろう。理論家が

政治家になれなくても誰も責めない。コルナイ自身も繰り返し指摘しているように、政策家あるいは政治家には別の能力が必要だからだ。政策家にも社会的活動家に近い能力が必要とされる。

それにしても、コルナイはすべてに気配りが効いている。体制転換の過渡期の理論分析は、若い世代に任せると言い切っている。これだけの政策提言に努めた後に、こう言える理論家は少ないだろう。体制転換の問題を扱っている研究者は、このコルナイの言葉を真剣に受け止めるべきだろう。コルナイの過渡期分析を凌駕することが期待されている。

コルナイの主要な著作はみな大部である。最初の大著『反均衡』は日本経済新聞社から全訳出版された。しかし、次の大著『不足』の全訳が日本で出版できる状況にはなかった。日本における学術出版の状況は、社会が豊かになるにつれて難しくなっている。これほど皮肉な現象はない。『不足』にかかわる論考を何冊かに分けてまとめ上げることでは、コルナイの著作を発売することができなかった。さらに、集大成された大著『社会主義システム』の翻訳は、社会主義体制が崩壊したという事実だけで、もう出版が難しくなった。日本の学術出版の底の浅さを思い知らされる。この面では、アメリカの懐の方が比べものにならないほど深い。日本はまだ学問を育てるほどの余

裕を持たないのだろうか。

それを考えれば、今回の自伝の出版はきわめて例外である。経済学者の自伝が売れる時代でないことは自明のことだ。しかし、コルナイという希代の学者の自伝であれば、いかなる代価を払っても、それを紹介する価値がある。その見識を示していただいた日本評論社、就中、編集部の斎藤博氏の熱意によって本書の刊行が実現した。斎藤氏の熱意と見識がなければこの出版は実現しなかったことを記して、氏に感謝の意を表したい。これによって、「コルナイ自伝」の最初の外国語訳出版が実現することになった。本書の翻訳が終了した時点では、まだ英語版出版の契約は完了していない（その後、プリンストン大学出版局との契約が成立し、二〇〇六年二月に英語版の発刊が予定されている）。

最後に、一言。翻訳の過程で多くの友人に訳文の素読を依頼した。他人の原稿に眼を通すのはたやすい仕事とは言えないが、何人かの専門家には原稿を最後まで読んでもらった。佐藤経明氏（横浜市立大学名誉教授）からは各章ごとに感想をもらい、詳細な校正提案もいただいた。教授はコルナイと同年代であり、一九六〇年代、一九七〇年代にハンガリーを往来され、本書で登場する経済学者たちとも面識がある。私が知るハンガリーは一九七〇年代末からだから、二人合わせると本書のかなりの期

間をカバーすることになる。現在、スウェーデンに留学中で、大学院時代の仲間である浅利一郎氏（静岡大学教授）にも校正をお願いした。久保庭真彰氏、吉井昌彦氏（神戸大学教授）、田中宏氏（立命館大学教授）からは訳文への貴重な助言をいただいた。さらに、富山栄子氏（新潟大学講師）からも意味不明瞭な箇所の指摘をいただいた。これらの友人たちの助力によって、多数のケアレスミスが除去された。それでもなお、訳者の思い込みによる誤訳が残されているだろう。ひとまず、ここまですべての誤訳が協力していただいた友人諸兄に感謝の意を表し、筆を擱きたい。

二〇〇五年九月　ブダペストにて

盛田 常夫

- 226 種々の政党や政治組織の経済プログラムを概観したものが、Laki 1989; 1990である。
- 227 ブルーリボン委員会 (Kék Szalag Bizottság) はハンガリー人と外国人の経済学者、Híd グループはハンガリー人の経済学者だけで構成された政策提言組織である。両方とも、1990年春に提案を公表した。Kék Szalag Bizottság 1990; Híd-csoport 1990を参照のこと。
- 228 Réti 1989, 5p.
- 229 Kornai 1992d.
- 230 Kornai 1994a.
- 231 Solow 2000, 408. p.
- 232 Kornai 1997c, 100-120. pp. このインタビューはサボー・ラースロー・ジョルトと行ったもので、1995年4月9日にドゥナ・テレビ (Duna TV) で放映された。
- 233 Blahó 2003.
- 234 Kornai - McHale 2000.
- 235 Csontos - Kornai - Tóth 1996, 1998.
- 236 Bognár - Gál - Kornai 2000.
- 237 Kornai 1998b.
- 238 Kornai - Eggleston 2001. このハンガリー語版は、Kornai - Eggleston 2004である。
- 239 この書状のコピーは私の資料庫に保管。
- 240 この書状のコピーは私の資料庫に保管。
- 241 国会での質疑記録は CD (Arcanum Kiadó, *Országgyűlési Napló 1990-2002*) あるいはインターネットで閲覧できる。この記録から算出したものを種々の規準に分類した。この算出結果をまとめた諸表は、私の資料庫に保管。
- 242 Rosser - Rosser 2004 [1996], 377-378. p.
- 243 Kornai 1983b.
- 244 Camus 1991 [1948], 128. p.
- 245 Kornai 1986a, ix. p.
- 246 Kornai - Rose-Ackerman 2004a; Kornai - Rothstein - Rose-Ackerman 2004b.
- 247 Gács - Köllő 1998; Maskin - Simonovits 2000.

- 189 Schelling 1980 [1960].
- 190 Rosovsky 1990, 194-195. p.
- 191 Samuelson 1983.
- 192 書状は私の資料庫に保管。
- 193 Szakolczai 2001, 92. p.
- 194 Kornai 1988b, 739. p.
- 195 Kornai 1988a.
- 196 Sen 1988.
- 197 Lindbeck 1988.
- 198 この「船上会議」の資料から論文集が編纂され、1985年に経済日報社から出版された。そのタイトルは、「マクロ経済管理とその改革——国際会議講演選集」であった。この出版物を確認する術がなく、巻末の文献リストに掲載しなかった。この会議に事前に提出された講演者の資料の一部は、私の資料庫に保存されている。
- 199 Kornai 1992c, xxi. p.
- 200 Karsai 1993, 19. p.
- 201 Schama 1989, XIII. p.
- 202 1992c, xix. p.
- 203 Nove 1992, 101. p.
- 204 Nove 1992, 103. p.
- 205 Ericson 1994, 495. és 497. p.
- 206 Krausz 1994, 158. p.
- 207 Krausz 1994, 157. p.
- 208 この書状のコピーは、私の資料庫に保存。
- 209 Coles 1999.
- 210 *New York Times*: Passel 1990; *New York Times Book Review*: Bosworth 1990; *Le Monde*: Salgó 1990; *Neue Zürcher Zeitung*: “Gy” 1991; *Financial Times*: Denton 1990.
- 211 Kornai 1990b.
- 212 Kornai 1992b.
- 213 Kornai 1992a.
- 214 Kornai 1993b.
- 215 Kornai 1989, 34-35. p.
- 216 Szegvári 1990.
- 217 Semjén 1990.
- 218 Kornai 1990c, 82. p.
- 219 この書状のコピーは私の資料庫に保管。
- 220 Samuelson 1990.
- 221 Klaus - Tříška 1994, 482. p.
- 222 Kornai 1990c, 78-79. p.
- 223 データの出所は、Központi Statisztikai Hivatal 1996, 314. p.
- 224 Kornai 1990c, 211. p.
- 225 円卓会議の文書は8巻にまとめられている。重要な経済政策文書を取めているのが第5巻である。Ripp 2000, 15-79. és 571-633. p.

- 151 ファルヴェーギ・ライオシュの校閲見解のコピーは、私の資料庫に保存。
- 152 *Élet és Irodalom* 1980. október 4-i számában, a "Páratlan oldal" című rovatban jelent meg.
- 153 Kornai 1979.
- 154 Karagedov 1982.
- 155 Barro - Grossman 1971.
- 156 A Barro - Grossman - Portes 派の膨大な文献のうち、特徴的なもののひとつは、Portes - Winter 1980である。
- 157 Yergin - Stanislaw 1998, 277. p.
- 158 Hoffman 2002, 89-90. p.
- 159 Kornai - Maskin - Roland 2003. ハンガリー語版は Kornai - Maskin - Roland 2004.
- 160 Kornai - Weibull 1983.
- 161 Goldfeld - Quandt 1988; 1990; 1993.
- 162 Dewatripont - Maskin 1995.
- 163 雑誌編集者と交わした手紙、ならびに閲読者の報告は、私の資料庫に保管。
- 164 Kornai 1986d.
- 165 Qian 1994.
- 166 Hicks 1937.
- 167 Arrow 1973a.
- 168 Schumpeter 1983 [1911].
- 169 Aghion - Howitt 1998.
- 170 ある論文でこの表現に出会った時に、てっきりケインズの言だと錯覚した。実際には、ウィルドン・カールによるものである。Shove 1942, 323. p. を見よ。
- 171 Kornai 1983a, 229. p.
- 172 Kornai 1982.
- 173 この引用は、リシュカ・ティボールがOHA と行ったインタビューから抜粋したものである (39. sz. interjú, 346. p.)
- 174 Szénási 1983, 7. p.
- 175 Kornai 1980, 20. p.
- 176 Lengyel 2002, 157-158. p.
- 177 Szegő 1983.
- 178 Kornai 1984.
- 179 Tardos 1982; 1988a; 1988b.
- 180 Kornai 1986c, 1733-1734. p.
- 181 Gregory - Stuart 1997 [1974]. この引用部分は1980年版の299頁に見られる。後の版ではハンガリーの新経済メカニズムについて正確な記述に変更された。
- 182 日報情報の収集や整理の手法については、Müller 1999, が詳しい。
- 183 ÁBTL NOIJ III/1-218-265/6, 3. p. Keltezősek 1981. december 10.
- 184 ÁBTL NOIJ III/II-80, 5. p. Keltezősek 1985. április 26.
- 185 ÁBTL, kézírásos feljegyzés. Az ÁBTL NOIJ III/II-80A. irathoz csatolva.
- 186 Leijonhufvud 1968.
- 187 Dahl 1979 [1971].
- 188 Lindblom 1977.

にある。

- 114 IH 34-4-797/1965. Keltezés: 1965. április 23.
115 Z. Z. százados jelentése. IH 34-A-1027/1965. Keltezés: 1965. május 26.
116 IH 34-4-797/1965. Keltezés: 1965. április 23. Kézírásos utasítás az 1. oldalon.
117 IH 59/2581-4/1965. Keltezés: 1965. november 22.
118 IH 189-193/66, keltezés 1966. május 18. IH 189-191/66, keltezés: 1966. május 19. IH 189-220/66, keltezés: 1966. június 6.
119 Bolygó 1966.
120 Montias 1976; Kornai 1978.
121 ÁBTL 0004-470-5-MRG, 24. p. Keltezés: 1971. április 1.
122 ÁBTL 0004-470-5-MRG, 47. p. Keltezés: 1989. január 29.
123 Montias 1982; 1989; 2002.
124 Kornai 1967a.
125 Kornai 1968.
126 Neumann 1963 [1955], 100-101. p.
127 Kornai 1991, 367. p. 「数学的結晶」という考えについては、Heisenberg 1967 [1958], 231-232. p.を見よ。
128 Kuhn 1996 [1962].
129 Arrow 1974, 254. p. és Simon 1979, 508. p.
130 Laibson - Zeckhauser 1998.
131 このハイドンの引用は、ある週刊誌で読んだものである。出所を確認することができなかったが、ハイドンの言葉である信頼性が高いと判断して使用した。教訓的な私の考えを支持するものであることから、ここで使用した。
132 Hahn 1973, 330. p.
133 József Attila *Vigas* című, 1933-ban megjelent verséből. József 2003, 390. p.
134 Kornai - Kovács - Schmidt 1969.
135 この書状のコピーは、私の資料庫に保存。
136 私のアカデミー会員選出過程に関する資料の所在に注意を喚起してくれたのは、フサール・ティボールである。MOL M-KS 288. f. 36/1. ő.e. 9. p.
137 MOL M-KS 288. f. 5/675. ő.e. 10. p.
138 MOL M-KS 288. f. 5/675. ő.e. 10. p.
139 MOL M-KS 288. f. 5/682. ő.e. 3. p.
140 MOL M-KS 288. f. 5/682. ő.e. 7. p.
141 Kornai 1972.
142 Kornai 1972, 5. p.
143 Hirschman 1988 [1958] ; Streeten 1959.
144 この招聘状は私の資料庫に保管。
145 Kornai - Martos 1973.
146 Kornai - Martos 1981.
147 Kornai - Martos 1981.
148 Kornai 1974.
149 Kornai 1980, 569. p.
150 プローディ・アンドラーシュの校閲見解のコピーは、私の資料庫に保存。

- 83 Samuelson 1983.
84 Tinbergen 2004 [1954].
85 Hayek 1975 [1935].
86 Bergson 1948.
87 Lange 1968 [1936-1937], 70. p.
88 Kende 1959.
89 Kornai 1959.
90 Kende 1964.
91 Sartre 1990 [1946].
92 Kornai - Lipták 1959.
93 Kornai - Lipták 1962a.
94 Dorfman - Samuelson - Solow 1987 [1958] és Koopmans 1957.
95 Bródy 1970.
96 Samuelson 1983.
97 Kornai - Lipták 1962b.
98 Kornai - Lipták 1971 [1965].
99 Arrow 1971.
100 Malinvaud 1967.
101 Arrow 1973b [1963].
102 Kornai 1967b.
103 Malinvaud - Bacharach 1967.
104 Juhász 1934.
105 ÁBTL M 13417/1. 私に関する報告と評価は35頁目にある。報告によれば、エージェントは1960年6月10日に私と会話を交わしたことになる。この分厚いファイルは1957年6月25日から始まっている。
106 私に関する報告を指示した文書は、IH IV/1-A, keltezése: 1965. április 15. また、R. R. の報告が含まれている文書は、35-634/65, 2/B-530, keltezése: 1965. május 4. これらの文書番号は、情報局 (IH) が2004年6月に私への閲覧のために用意したコピーから引用したものである。このコピーの原本は、IH の前身組織が保有していたもので、内部資料として別の資料番号を付していたものである。その番号を知ることはできない。同じことは、以下の補注で使用する IH のすべての資料に当てはまる。
107 IH 134-216/64. X. X. jelentése rólam. Keltezés: 1964. március 2.
108 IH VI/4-A. Keltezés: 1964. március 26.
109 Kenedi 1996. 438. p. ケネディは脚注の中で、内務省出版局 (BM Kiadó) から1980年に出版された「機密」の国家安全用語解説 (Állambiztonsági Értelmező Szótár) を利用したと記している。これに加え、他の資料も利用されている。
110 この専門家の見解は、出国許可申請に関連して、1966年に作成された。後のファイルでも、この専門家の見解に言及されており、本文の引用はそこから取ったものである。この見解が含まれているファイルは、IH 40-27-245/64, 213-3019, keltezése: 1964. július 12. である。
111 不鮮明なコピーから判読できる資料番号は、IH III/I-1-A. 8153. である。
112 Koopmans - Montias 1971.
113 IH の文書番号はない。IH から取得したモンティアス関連の文書コピー束の18-22頁目

- 52 Vida 1992, 34. p.
- 53 Gimes 1956.
- 54 Halda 2002, 167. p.
- 55 Kornai 1990a [1957], 6. p.
- 56 Esze 1956.
- 57 Péter 1957.
- 58 Ripp 1957, 3. p.
- 59 Molnár 1957, 45. p.
- 60 Gulyás 1957-1958, 31. p.
- 61 Molnár 1957, 45. p.
- 62 Kornai 1994b [1957]. 1957年にハンガリー語の第一版が、1958年に英語版の第一版が出版された。
- 63 R.N.W.O. 署名の記事。a *Financial Times*ban, 1959 és Devons 1959.
- 64 Spulber 1960, 763. p.
- 65 Nove 1960, 389. p.
- 66 MOL M-KS XX-5-h. 50. d. 1. k. 48-54. p. Keltezés 1957. március 20. Továbbá MOL M-KS XX-5-h. 52. d. 1. k. 10-13. p. Keltezés 1958. május 8.
- 67 MOL M-KS XX-5-h. 1. d. 4. k. 57-59. p. 調書からの引用。その2頁目と3頁目にある (Keltezés: 1957. április 16.)。
- 68 MOL M-KS XX-5-h. 86. d. 5. köt. 49-67. p. P. P. の尋問調書。尋問官が引用した会合の参加者についての報告は51頁。ギメシュの新聞発行の意図および実際の発刊に関するものは、調書の51-54頁 (Keltezés: 1957. április 10.)。
- 69 MOL M-KS XX-5-h. 1. d. 4. k. 57-59. p.
- 70 MOL M-KS XX-5-h. 86. d. 4. és 5. k.
- 71 *Hungaricus* のペンネームで記された著作は、小部数だけ謄写刷りされ、狭い範囲に配られた。このハンガリー語の文章が印刷物になったのは、1989年である。
- 72 Fejtő は1957年に “*Hungaricus*” に関する著作を記した。この著作は1959年に、その全文がフランス語に翻訳され、ブリュッセルのナジ・イムレ研究所から出版された。
- 73 ÁBTL V-145-288/3. irat, 482-492. p. J. Vasziliu kihallgatási jegyzőkönyve. Keltezés: 1959. június 11. Lásd továbbá Vasziliu 1999.
- 74 ÁBTL V-145-288/2. irat, 327. p. Fekete Sándor önvallomása, 11. pont. Továbbá ÁBTL V-145-288/3. irat, 482-492. p. J. Vasziliu kihallgatási jegyzőkönyve. Keltezés: 1959. június 11.
- 75 ÁBTL V-145-288/9. irat, 156-160., továbbá 233. p.
- 76 Novobáczky 1956, 1. p.
- 77 ÁBTL V-145-288/3. irat, 482-492. p. J. Vasziliu kihallgatási jegyzőkönyve. Keltezés: 1959. június 11. ÁBTL V-145-288/2. irat. 326. p. Fekete Sándor önvallomása, 7. pont.
- 78 ÁBTL V-145-288/2. irat. 327. p. Fekete Sándor önvallomása, 8. pont.
- 79 Samuelson 1980.
- 80 Arrow 1951.
- 81 Hayek 1975 [1935].
- 82 Hicks 2001.

1960; Kende 1966; Lőcsei 1995; Nagy 1994 és Szalay 1994. 臨時総会の議事録は、MOL M-KS 276. f. 89/206 ő.e. に収録されている。ここには MDP 中央指導部のアジテーション・プロパガンダ部の *Szabad Nép* 関連資料が含まれている。1954年10月22日、23日、25日の臨時総会議事録と決議、および MDF 中央指導部の臨時総会に関する報告が含まれている資料である。

補
注

- 21 Aczél - Méray 1960.
- 22 MOL M-KS 276. f. 89/206. ő.e. 161-219. pp.
- 23 MOL M-KS 276. f. 53/205. ő.e. 1-3, 7-66. pp.
- 24 MOL M-KS 276. f. 53/206. ő.e. 31-51, 73-79. pp.
- 25 Uo. 34. p.
- 26 Uo. 73., 74., 76. p.
- 27 MOL M-KS 276. f. 53/208. ő.e., Tovább 276. f. 53/206. ő.e.
- 28 Magyar Dolgozók Pártja Központi Vezetősége 1955.
- 29 MOL M-KS 276. f. 53/228. ő.e.
- 30 Liska - Máriás 1954.
- 31 Hegedűs 1990.
- 32 Heller 1988.
- 33 Péter 1954; 1956.
- 34 Kornai 1994c.
- 35 Kende 1955. この手稿は著者が所有。
- 36 ÁBTL V-145-288/2. irat, 325-326. p. フェケテ・シャーンドルの自白の第2点と第5点は、1958年12月18日付け。
- 37 Péteri 2001, 51. p., さらに全般的な概観は、Péteri 1997.
- 38 Kornai 1990a [1957], 3-4. p.
- 39 Kornai 1990a [1957], 30. p.
- 40 Kornai 1990a [1957], 99. p.
- 41 Kornai 1990a [1957], 101. p.
- 42 Kornai 1990a [1957], 128. p.
- 43 Kornai 1990a [1957], 185. p.
- 44 Kornai 1990a [1957], 175-177. p.
- 45 MTALt TMB 891/368 (コルナイ・ヤーノシュ博士候補論文討議議事録、1956年9月24日)。さらに、Esze 1956.を見よ。
- 46 MTALt TMB 891/368, 41. p. ピーテル・ジョルジュの言葉は議事録から引用。
- 47 Augusztinovics Mária の当時の名前は Gerő Tamásné で、議事録ではこの名前で記録されている。
- 48 MTALt TMB 891/368, 2-11. p.
- 49 この提案のコピーを一部、私の資料庫に保存している。
- 50 Kornai 1956.
- 51 ÁBTL V-150-352/1. irat. 442. p. Keltezés: 1957. április 16. MOL. XX-5-h. 1. d. 3. k. 92-97. p. Keltezés: 1957. július 13. 政府プログラム準備への参加は、私の「犯罪歴」となった（この犯罪歴文書は、ÁBTL C-R-N 0082-479-2. にあり、私が見たものは、1966年12月21日付けて作成されたコピー版だった。多分、これ以前にも同様の文書が存在していると思う）。

補 注

以下の補注における公文書館の略語は、次の通りである。

ÁBTL: Államibiztonsági Szolgálatok Történeti Levéltára

IH: Információs Hivatal Levéltára

MOL: Magyar Országos Levéltár

MTALt: Magyar Tudományos Akadémia Levéltára

OHA: Oral History Archívum

PIL: Párttörténeti Intézet Levéltára

- 1 リュック・スイラード通りのユダヤ教牧師教習所に囚われたユダヤ人については、Braham 1981, I. kötet, 482-483. p., および Brámer 1997 [1972].
- 2 Főthy 1945. フォーティの著書では名前を特定して父のことに触れている訳ではないが、リュック・スイラード通りからホルティ・リゲットに移され、そこから強制収容所で虐殺された弁護士のこと描かれている。
- 3 Braham 1981, II. kötet, 47. p., Thassy 1996, 372-376., 394-396., 418-419. p.
- 4 Stalin 1975 [1924], 6. p.
- 5 Ady 2004, 724. p.
- 6 Lukács 1973 [1945]; 1978 [1950].
- 7 1920年代初めに語られた評価については、Mádl - Győri 1980, 110. p. を参照。
- 8 ÁBTL V-145-288-a. 514-515. p. (この報告は、1950年6月14日付けになっている。)
- 9 Kornai 1951d, 5. p.
- 10 Kornai 1951c.
- 11 Kornai 1951b, 1. p.
- 12 Kornai 1951a, 1. p.
- 13 1953年以後にカルデリのどの著作を読んだのか、記憶が正確でない。編集者が文献リストに、1945年から1955年にかけて出版されたカルデリの著作（とくに自主管理に関するもの）を加えた(Kardelj 1982)。多分、この中のいくつかを手にしたのだと思う。
- 14 Lange 1968 [1936-1937].
- 15 Kornai 1954b.
- 16 Kornai 1954c.
- 17 Nagy 1954, 169. p.
- 18 Nagy 1954, 132. p.
- 19 Kornai 1954a.
- 20 編集局臨時総会の記憶を呼び起こすために、以下の資料を参照した。Aczél - Méray

C コルナイ邦訳文献一覧（著書に収録された論文を除く）

著書

- 1 岩城博司・岩城淳子訳『反均衡の経済学』日本経済新聞社、1975年。
- 2 久保庭真彰・田畑理一・長谷部勇一訳『統計研究参考資料—非価格制御』（抄訳研究資料）法政大学日本統計研究所、1982年。
- 3 盛田常夫・門脇延行編訳『反均衡と不足の経済学』日本評論社、1983年。
- 4 盛田常夫編訳『「不足」の政治経済学』岩波書店、1984年。
- 5 盛田常夫編訳『経済改革の可能性』岩波書店、1986年。
- 6 佐藤経明訳『資本主義への大転換』日本経済新聞社、1992年。

論文・インタビュー記事（上記編訳書3-5に収録されたものを除く）

- 1 「ハンガリー自動車市場における不足の再生産」（カピターニイ他との共著、盛田常夫訳）、『社会労働研究』1983年3月。
- 2 「温情主義、買い手市場、売り手市場」（ヴァイブルとの共著、盛田常夫訳）、『社会労働研究』1986年3月。
- 3 「ハンガリー改革と市場社会主義」（盛田常夫編訳）、『エコノミスト』1986年11月11日号。
- 4 「〈ソフトな予算制約〉にたいするゴムルカの理解について」（盛田常夫訳）、『経済評論』1988年8月号。
- 5 「個人的自由と社会主義経済の改革」（盛田常夫編訳）、『エコノミスト』65周年記念増刊号、1988年11月号
- 6 「コルナイ・ヤーノシュに聞く——わが思想と経済学」（聞き手：盛田常夫）、『経済評論』日本評論社、1990年10月号、11月号、12月号。

論講演・セミナー記録

- 1 盛田常夫「社会学部創設30周年記念講演会およびセミナーの報告：コルナイ博士を迎えて」、『社会労働研究』1983年12月。
- 2 『研究所報——現代ハンガリーの経済と社会』（社会学部30周年記念セミナー講演記録）、法政大学日本統計研究所、1983年3月。

- The membership meeting at *Szabad Nép*). *Világosság* 35 (10), pp. 48-56.
- Szegő, Andrea 1983. Érdek és gazdasági intézményrendszer (Interest and the economic institutional system). *Valóság* 26 (6), pp. 22-36.
1991. The Logic of a Shortage Economy: A Critique of Kornai from a Kaleckian Macroeconomic Perspective. *Journal of Post Keynesian Economics* 13 (3), pp. 328-36.
- Szegvári, Iván. 1990. Az egységesség mítosza. Vita az „Indulatos röpirat”-ról (The myth of unity. Debate on the “passionate pamphlet”). *Figyelő* February 11, 1990, p. 5.
- Szerb, Antal. 2003a [1934]. *Magyar irodalomtörténet* (The history of the Hungarian literature). Budapest: Magvető.
- 2003b [1941]. *A világirodalom története* (The history of the world literature). Budapest: Magvető.
- Szénási, Sándor. 1983. Pató Pál elvtárs. Interjú Antal Lászlóval (Comrade Pál Pató. Interview with László Antal). *Élet és Irodalom* November 11, 1983, p. 7.
- Tamás, Gáspár Miklós. 1989. A Kornai-bomba (The Kornai bomb). *Heti Világgazdaság* November 11, 1989, p. 66.
- Tardos, Márton. 1982. Program a gazdaságirányítási és szervezeti rendszer fejlesztésére (Program to develop the system of economic management and the system of organization). *Közgazdasági Szemle* 19 (6), pp. 715-29.
- 1988a. A gazdasági szervezetek és a tulajdon (Economic organizations and the property). *Gazdaság* 22 (3), pp. 7-21.
- 1988b. A tulajdon (Property). *Közgazdasági Szemle* 35 (12), pp. 1405-23.
- Thassy, Jenő. 1996. *Veszélyes vidék* (Dangerous place). Budapest: Pesti Szalon.
- Tinbergen, Jan. 2004 [1954]. *Econometrics*. London: Routledge.
- 1981 [1969]. The Use of Models: Experience and Prospects. *American Economic Review* 71 (6), pp. 17-22.
- Vasziliu, Georgiosz. 1999. „Nagyon jó egyetemre jártam, a magyar forradalom egyetemére” Georgiosz Vasziliu elmondja életét Hegedűs B. Andrásnak (I studied at a very good university: the university of the Hungarian revolution. Vassiliou Georgios speaks about his life to András Hegedűs B.). Budapest: 1956-os Intézet.
- Veres, Péter. 1997 [1939]. *Gyepsor. Elbeszélések, versek* (Gyepsor. Stories and poems). Budapest: Szabad Föld.
- Vida, István. 1992. Sajtófogadás 1956. november 3-án. A Nagy Imre-per irataiból (Press conference on November 3, 1956.: From the documents of the Imre Nagy case). *Rubicon* 3 (7), pp. 31-4.
- Yergin, Daniel and Joseph Stanislaw. 1998. *The Commanding Heights. The Battle Between the Government and the Marketplace that is Remaking the Modern World*. New York: Simon and Schuster.

- Schumpeter, Joseph A. 1987 [1942]. *Capitalism, Socialism and Democracy*. 6th ed. London—Boston: Unwin.
- 1983 [1911]. *The Theory of Economic Development*. New Brunswick NJ: Transaction Books.
- Scitovsky, Tibor. 1992 [1976]. *The Joyless Economy*. New York: Oxford University Press.
- Semjén, András. 1990. A műtétet az orvosnak is túl kell élnie (The operation must be survived by the surgeon too). *Figyelő* February 22, 1990, p. 7.
- Sen, Amartya K. 1977. Rational Fools: A Critique of the Behavioural Foundations of Economic Theory. *Philosophy and Public Affairs* 6 (2), pp. 317-44.
- 1997 [1982]. *Choice, Welfare and Measurement*. Cambridge MA: Harvard University Press.
1988. Freedom of Choice. *European Economic Review* 32 (2-3), pp. 269-94.
- Shove, Gerald F. 1942. The Place of Marshall's *Principles* in the Development of Economic Theory. *The Economic Journal* 52 (208), pp. 294-329.
- Simon, Herbert A. 1979. Rational Decision-Making in Business Organization. *American Economic Review* 69 (4), pp. 493-513.
- Simonovits, András. 2003. A magyar szabályozáseméleti iskola (The Hungarian school of regulation theory). *Közgazdasági Szemle* 50 (5), pp. 465-70.
- Solow, Robert. 2000. Stability and Growth: Commentary on a Commentary. In *Planning, Shortage, and Transformation. Essays in honor of János Kornai*, edited by Eric S. Maskin and András Simonovits. Cambridge MA: MIT Press, pp. 407-12.
- Spengler, Oswald. 1991 [1918-22]. *The Decline of the West*. New York: Oxford University Press.
- Spulber, Nicolas. 1960. Overcentralization in Economic Administration—A Critical Analysis Based on Experience in Hungarian Light Industry. *American Economic Review* 50 (4), pp. 763-4.
- Stackelberg, Heinrich von. 1952 [1943]. *The Theory of the Market Economy*. London: William Hodge.
- Stalin, Joseph V. 1949 [1938]. *A dialektikus és a történelmi materializmusról*. Budapest: Szikra.
- 1975 [1924]. Stalin's Speech on the death of Lenin. In: *I. V. Stalin, Works*, vol. 6. London: Red Star Press.
- Streeten, Paul. 1959. Unbalanced Growth. *Oxford Economic Papers*, New Series (11), pp. 167-90.
- Such, György and István János Tóth. 1989. A magyar közgazdaságtudomány a Közgazdasági Szemle tudományometriai vizsgálatának tükrében (Hungarian economic science in the mirror of the sciencemetric analysis of *Közgazdasági Szemle*). *Közgazdasági Szemle* 36 (10), pp. 1163-241.
- Szabó, Zoltán. 1986 [1936]. *A tardi helyzet* (The Tard story). Budapest: Akadémiai Kiadó—Kossuth Könyvkiadó—Magvető.
- Szokolczai, Attila. 2001. *Az 1956-os forradalom és szabadságharc* (The 1956 revolution and war of independence). Budapest: 1956-os Intézet.
- Szalay, László. 1994. Előhang 1954-ből: a Szabad Nép taggyűlése (Overture from 1954:

- annihilation of the workers' class. Interview with Mihály Vajda). *Népszabadság* October 15, 2003, p. 14.
- Portes, Richard and David Winter. 1980. Disequilibrium Estimates for Consumption Goods Markets in Centrally Planned Economies. *Review of Economic Studies* 47 (1), pp. 137-59.
- Qian, Yingyi. 1994. A Theory of Shortage in Socialist Economies based on the "Soft Budget Constraint." *American Economic Review* 84 (1), pp. 145-56.
- Rainer, M. János. 1999. *Nagy Imre — Politikai életrajz* (Imre Nagy. A political biography. Vol. 2., 1953-1958). Budapest: 1956-os Intézet.
- Rawls, John. 1999 [1971]. *A Theory of Justice*. Cambridge MA: Belknap Press.
- Réti, Pál. 1989. Miénk az ország (The country is ours). *Heti Világgazdaság* November 11, 1990, pp. 3-5.
- Révész, Sándor. 1999. *Egyetlen élet. Gimes Miklós története* (One single life. The story of Gimes Miklós). Budapest: 1956-os Magyar Forradalom Történetének Dokumentációs és Kutatóintézete—Sík Kiadó.
- Réz, Pál. 1961. Thomas Mann and Hungary — His Correspondence with Hungarian Friends. *New Hungarian Quarterly* 2 (3), pp. 84-99.
- Ripp, Géza. 1957. Revizionizmus „az új gazdasági mechanizmus” leple alatt (Revisionism under the veil of the “new economic mechanism”). *Népszabadság* July 23, 1957, p. 3.
- Ripp, Zoltán (ed.). 2000. *A rendszerváltás forgatókönyve. Kerekasztal-tárgyalások 1989-ben* (The script of the change of system. The roundtable negotiations in 1989). Vol. 5. Budapest: Új Mandátum.
- R.N.W.O. initial. 1959. Iron Curtain Economy. *Financial Times* December 28, 1959, p. 12.
- Roland, Gérard. 1987. Investment Growth Fluctuations in the Soviet Union: An Econometric Analysis. *Journal of Comparative Economics* 11 (2), pp. 192-206.
1990. On the Meaning of Aggregate Excess Supply and Demand for Consumer Goods in Soviet-Type Economies. *Cambridge Journal of Economics* 14 (1), pp. 49-62.
- Rosovsky, Henry. 1990. *The University. An Owner's Manual*. New York: W. W. Norton.
- Rosser, J. Barkley Jr. and Marina V. Rosser. 2004 [1996]. *Comparative Economics in a Transforming World Economy*. 2nd ed. Cambridge MA: MIT Press.
- Salgó, István. 1990. Les propositions de l'économiste Janos Kornai provoquent un vif débat. *Le Monde* April 20, 1990, p. 3.
- Samuelson, Paul A. 1980 [1948]. *Economics*. 11th ed. New York: McGraw-Hill.
- 1983 [1947]. *Foundations of Economic Analysis*. Enl. ed. Cambridge MA: Harvard University Press.
1990. For Plan to Reform Socialism, Listen to Janos Kornai. *Christian Science Monitor* April 4, 1990, p. 7.
- Sartre, Jean-Paul. 1990 [1946]. *Existentialism and Human Emotions*. New York: Carol Publications.
- Schama, Simon. 1989. *Citizens*. New York: Alfred S. Knopf.
- Schelling, Thomas C. 1980 [1960]. *The Strategy of Conflict*. Cambridge MA: Harvard University Press.
- Schneider, Erich. 1962 [1949]. *Money, Income, and Employment*. New York: Macmillan.

- és Méray Tiborral (Rebellion at *Szabad Nép* 40 years ago. Conversation with Pál Lőcsei and Tibor Mérey). *Kritika* 23 (10), pp. 10-11.
- Nagy, Imre. 1954. *Egy évtized. Válogatott beszédek és írások (1948-1954)* (One decade. Selected speeches and writings 1948-1954). Budapest: Szikra.
- Neumann, John von. 1963 [1955]. The Impact of Recent Developments in Science on the Economy and on Economics. In *Collected Works* Vol. 4. New York: Macmillan Company, pp. 100-1.
- Nove, Alec. 1960. Overcentralization in Economic Administration. *Economica* 27 (108), pp. 389-91.
1992. No third way? *New Statesman and Society* June 19, 1992, p. 23.
- Novobáczky, Sándor. 1956. Különös emberek (Strange People). *Irodalmi Újság* October 6, 1956, p. 1.
- Nozick, Robert. 1998 [1974]. *Anarchy, State and Utopia*. Oxford: Blackwell.
- Nyiri, Sándor. 1994. A Péter György elleni büntetőeljárás (The criminal case against György Péteri). In *Egy reformközgazdász emlékére: Péter György, 1903-1969*, edited by János Árvay and András Hegedűs B. Budapest: Cserépfalvi Könyvkiadó—T-Twins Kiadó, pp. 45-7.
- Ortega y Gasset, José. 1993 [1929]. *The Revolt of the Masses*. New York: W. W. Norton.
- Orwell, George. 2004 [1949]. *Nineteen Eighty Four*. Harmondsworth: Penguin.
- Papandreou, Andreas G. 1972. *Paternalistic Capitalism*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Passel, Peter. 1990. Socialist Eggs, Market Omlet. *New York Times* April 11, 1990, p. 2.
- Péter, György. 1954. A gazdaságosság jelentőségéről és szerepéről a népgazdaság tervszerű irányításában (on the importance and significance of thrift in the plan-based management of the economy). *Közgazdasági Szemle* 1 (3), pp. 300-24.
1956. A gazdaságosság és a jövedelmezőség jelentősége a tervgazdaságban (The importance of thrift and profitability in the planned economy). *Közgazdasági Szemle* 3 (6), pp. 695-711 and (7-8), pp. 851-69.
1957. A gazdasági vezetés túlzott központosítása. Kornai János tanulmányáról (The overcentralization of economic management. On János Kornai's study). *Magyarország* 1 (1), p. 2.
- Péteri, György. 1997. New Course Economics. The Field of Economic Research in Hungary after Stalin, 1953-56. *Contemporary European History* 6 (3), pp. 295-327.
1998. *Academia and State Socialism*. Highland Lakes NJ: Atlantic Research and Publications.
- (ed.) 2001. *Intellectual Life and the First Crisis of State Socialism in East Central Europe, 1953-1956*. Trondheim Studies on East European Cultures and Societies, No. 6.
- Phillips, Albin W. 1958. The Relation between Unemployment and the Rate of Change of Money Wage Rates in the United Kingdom, 1861-1957. *Economica* 25 (2), pp. 283-99.
- Pigou, Arthur C. 2002 [1920]. *The Economics of Welfare*. New Brunswick NJ: Transaction Publishers.
- Pogonyi, Lajos. 2003. A munkásosztály megsemmistése. Interjú Vajda Mihállyal (The

- Liska, Tibor and Antal Máriás. 1954. A gazdaságosság és a nemzetközi munkamegosztás (Economy and the international division of labour). *Közgazdasági Szemle* 1 (1), pp. 75-94.
- Lőcsei, Pál. 1995. „Politikai és lelkiismereti lázadás volt...” (It was a rebellion of politics and conscience). *Respublika* 2 (13), pp. 36-40.
- Lukács, György. 1973 [1945]. On the Responsibility of Intellectuals. *Telos* 2 (1).
1978 [1945]. *Studies in European Realism: A Sociological Survey of the Writings of Balzac, Stendhal, Zola, Tolstoy, Gorki, and others*. London: Merlin Press.
- Magyar Dolgozók Pártja Központi Vezetősége 1955. A Magyar Dolgozók Pártja Központi Vezetőségének határozata a politikai helyzetről és a párt feladatairól (The decision of the Central Committee of the Hungarian Workers' party on the political situation and the party's tasks). *Szabad Nép* March, 9, 1955, pp. 1-2.
- Malinvaud, Edmond. 1967. Decentralized Procedures for Planning. In *Activity Analysis in the Theory of Growth and Planning*, edited by Edmond Malinvaud and M. O. L. Bacharach. London—New York: Macmillan—St. Martin's Press, pp. 170-208.
- Malinvaud, Edmond and M. O. L. Bacharach (eds.). 1967. *Activity Analysis in the Theory of Growth and Planning*. London—New York: Macmillan—St. Martin's Press.
- Marx, Karl. 1992 [I. Vol. 1867, II. Vol. 1885, III. Vol. 1896]. *Capital. A Critique of Political Economy*. London: Penguin Books.
- Marx, Karl and Friedrich Engels. 2002 [1848]. *The Communist Manifesto*. London—New York: Penguin Books.
- Maskin, Eric S. and András Simonovits (eds.). 2000. *Planning, Shortage, and Transformation. Essays in honor of János Kornai*. Cambridge MA: MIT Press.
- Matolcsy, György. 1997. Kiigazítás recesszióval. Kemény költségvetési és puha piaci korlát (Adjustment with recession. Soft budget constraint and hard market constraint). *Közgazdasági Szemle* 44 (9), pp. 782-98.
- McCloskey, Donald N. 1982. *The Rhetoric of Economics*. Canberra: Australian National University.
- Molnár, Endre. 1957. Revizionista nézetek a szocialista állam gazdasági szerepéről (Revisionist views on the economic role of the socialist state). *Társadalmi Szemle* 12 (2), pp. 44-59.
- Montias, John M. 1976. *The Structure of Economic Systems*. New Haven: Yale University Press.
1982. *Arts and Artisans in Delft: A Socio-Economic Study of the Seventeenth Century*. Princeton NJ: Princeton University Press.
1989. *Vermeer and His Milieu: A Web of Social History*. Princeton NJ: Princeton University Press.
2002. *Art at Auction in 17th Century Amsterdam*. Amsterdam: Amsterdam University Press.
- Müller, Rolf. 1999. Napi operatív információs jelentések, 1979-1989 (The daily operative information reports). In *A Történeti Hivatal Évkönyve 1999*, edited by György Gyarmati. Budapest: Történeti Hivatal, pp. 251-84.
- Nagy, Csaba. 1994. Lázadás a Szabad Népnél 40 évvel ezelőtt. Beszélgetés Lőcsei Pállal

- Koopmans, Tjalling C. and John M. Montias. 1971. On the Description and Comparison of Economic Systems. In *Comparison of Economic Systems*, edited by Alexander Eckstein. Berkeley: University of California Press, pp. 27-78.
- Kovács, András. 1968. Falak (Walls). *Új Írás* 8 (3), pp. 28-48.
- Kovács, Imre. 1989 [1937]. *A néma forradalom* (The silent revolution). Budapest: Cserépfalvi—Gondolat—Tevan.
- Központi Statisztikai Hivatal 1996. *Magyar Statisztikai Évkönyv, 1995* (Hungary's Statistical Yearbook, 1995). Budapest: Központi Statisztikai Hivatal.
- Krausz, Tamás. 1994. A történetietlen politikai gazdaságtan (An nonhistorical political economy). *Eszmélet* 6 (24), pp. 157-78.
- Kuhn, Thomas S. 1996 [1962]. *The Structure of Scientific Revolutions*. Chicago: University of Chicago Press.
- Laibson, David and Richard Zeckhauser. 1998. Amos Tversky and the Ascent of Behavioral Economics. *Journal of Risk and Uncertainty* 16 (1), pp. 7-47.
- Laczik, Erika. 2005. Egy besúgó tisztikereszttel (An informer with an Officer's Cross). *Magyar Nemzet* January 29, 2005, pp. 1. and 5.
- Laki, Mihály. 1989. Az új politikai szervezetek a gazdaságpolitikáról és a gazdaságirányításról (The new political organizations about the economic policy and economic management). *Tervgazdasági Fórum* 5 (4), pp. 1-16.
1990. *Rendszerváltás küszöbén. Az ellenzéki pártok gazdaságpolitikai programjai* (On the threshold of the change of system. the economic policy program of the opposition parties). Mimeographed. Budapest: Közgazdasági Információs Szolgálat.
- Lange, Oscar. 1968 [1936-37]. On the Economic Theory of Socialism. In *On the Economic Theory of Socialism*, edited by Benjamin E. Lippincott. New York—Toronto—London: McGraw Hill, pp. 57-143.
- Leijonhufvud, Axel. 1968. *On Keynesian Economics and the Economics of Keynes. A Study in Monetary Theory*. New York: Oxford University Press.
- Lengyel, László. 2002. *A távol közelében. Kérdez: Hankiss Elemér* (Near to far away. The interviewer: Elemér Hankiss). Budapest: Helikon Kiadó.
- Lengyel, László and Miklós Polgár. 1980. Gazdasági elvek, etikai elvek — és a valóság (Economic principles, ethical principles and the reality). *Valóság* 23 (9), pp. 101-7.
- Lenin, Vladimir I. 1964 [1920]. Left-Wing Communism: An Infantile Disorder in *Collected Works*, Vol. 31. Moscow: Progress Publishers.
- Lerner, Abba P. 1975 [1944]. *Economics of Control. Principles of Welfare Economics*. New York: A. M. Kelley.
- Lindbeck, Assar. 1977 [1971]. *The Political Economy of the New Left: An Outsider's View*. New York: Harper and Row.
1988. Individual Freedom and Welfare State Policy. *European Economic Review* 32 (2-3), pp. 295-318.
- Lindblom, Charles E. 1977. *Politics and Markets*. New York: Basic Books.
- Liska, Tibor. 1988 [1966]. *Ökonosztát: Felkészülés a mechanizmusreformra* (Econostat. Preparation for reforming the mechanism). Budapest: Közgazdasági és Jogi Könyvkiadó.

- Huizinga, Johan. 1996 [1919]. *The Autumn of the Middle Ages*. Chicago: University of Chicago Press.
- “Hungaricus” (Sándor Fekete). 1959 [1956–1957]. *Quelques enseignements de la révolution nationale et démocratique hongroise*. Brüsszel, Nagy Imre Intézet.
- 1989 [1956–1957]. *Az 1956-os felkelés okairól és tanulságairól* (On the causes and lessons of the 1956 uprising). Budapest: Kossuth Könyvkiadó.
- József, Attila. 2003. *Összes versei* (Complete poems). Budapest: Osiris.
- Juhász, Andor. 1934. *Halló, itt London!* (Hallo! It's London). Budapest: Révai.
- Kalecki, Michal. 1965 [1954]. *Theory of Economic Dynamics: An Essay on Cyclical and Long-Run Changes in Capitalist Economy*. 2nd ed. London: Allen and Unwin.
- Karagedov, Rajmond G. 1982. Mechanizm funkcionirovaniya socialisticheskoy ekonomiki. *Isvestija Sibirskava Otdeleniya Akademij Nauk SSSR* 3 (11), pp. 115–28.
- Kardelj, Edvard. 1982. *Reminiscences*. London: Blond and Briggs—Summefield Press.
- Karinthy, Ferenc. 1994. *Napló* (Diary). Budapest: Littoria.
- Karinthy, Frigyes. 2001 [1914]. A felelős ember (The man in charge). In *Humoreszkek*, Vol. 2. Budapest: Akkord, pp. 155–7.
- Karsai, Gábor. 1993. A szocializmus genetikai programja (The genetic program of socialism). *Figyelő* 37, November 11, 1993, pp. 17–9.
- Kék Szalag Bizottság. 1990. [A Bizottság] *Gazdasági Programjavaslata* (Recommendations for an economic program). Budapest: Kék Szalag Bizottság.
- Kende, Péter. 1955. *Kritikai jegyzetek a marxizmus gazdasági tanaihoz* (Critical remarks on the economic theories of Marxism). Manuscript.
1959. L'intérêt personnel dans le système d'économie socialiste. *Revue Economique* 10 (3), pp. 340–64.
1964. *Logique de l'Économie Centralisée. Un exemple: la Hongrie*. Paris: Société d'Éducation d'Enseignement Supérieure.
1966. *A Szabad Nép szerkesztőségében. Tanulmányok a magyar forradalomról* (In the editorial offices of Szabad Nép. Studies on the Hungarian revolution). München: Auróra.
- Kenedi, János. 1981. „Tiéd az ország, magadnak építed” (Yours is the country, you build for yourself). Párizsi Magyar Füzetek Könyvei.
1996. *Kis állambiztonsági olvasókönyv. Október 23.—március 15.—június 16* (Small state security reader. October 23—March 15—June 16). Vols 1–2. Budapest: Magvető.
- Keynes, John M. 1997 [1936]. *The General Theory of Employment, Interest, and Money*. Arnhorst: Prometheus Books.
- Klaniczay, Gábor. 2003. *Ellenkultúra a hetvenes-nyolcvanas években* (Counter-culture in the 70s and 80s). Budapest: Noran.
- Klaus, Václav and Dušan Tříška. 1997 [1994]. Review of János Kornai's *The Socialist System: The Political Economy of Communism*. In *Renaissance: The Rebirth of Liberty in the Heart of Europe*, by Václav Klaus. Cato Institute: Washington, pp. 163–9.
- Koopmans, Tjalling C. 1957. *Three Essays on the State of Economic Science*. New York: MacGraw-Hill.

- Firm under Central Planning. *Journal of Comparative Economics* 12 (4), pp. 502-20.
1990. Output Targets, the Soft Budget Constraint and the Firm under Central Planning. *Journal of Economic Behavior and Organization* 14 (2), pp. 205-22.
1993. Uncertainty, Bailouts, and the Kornai Effect. *Economics Letters* 41 (2), pp. 113-9.
- Gregory, Paul R. and Robert C. Stuart. 1997 [1974]. *Comparative Economic Systems*. 6th ed. Boston: Houghton Mifflin.
- Grossfeld, Irena. 1989. Disequilibrium Models of Investment. In *Models of Disequilibrium and Shortage in Centrally Planned Economies*, edited by Christopher Davis and Wojciech W. Charemza. New York: Chapman and Hall, pp. 361-74.
- Gulyás, Emil. 1957-1958. *Az ártermelés, értéktörvény és pénz a szocializmusban* (Production, the theory of value and money in socialism). Manuscript.
- „Gy” initiale. 1991. Skizze eines Reformprogramms am Beispiel Ungarns. *Neue Zürcher Zeitung* Fernausgabe, 212, 30 June/1 July 1991, p. 7.
- Haberler, Gottfried von. 1963 [1937]. *Prosperity and Depression. A Theoretical Analysis of Cyclical Movements*. 4th ed. New York: Atheneum.
- Hahn, Frank. 1973. The Winter of Our Discontent. *Economica* 40 (159), pp. 322-30.
- Halda, Alíz. 2002. *Magánügy. Dokumentum/regény* (Private affair. Documentary/novel). Budapest: Noran.
- Hašek, Jaroslav. 2002 [1920-1923]. *Svejk: egy derék katona kalandjai a világháborúban*. Vol. 1-2. Budapest: Ciceró. ((Attention: reference in Hungarian language will be replaced by reference in English.))
- Hayek, Friedrich A. von (ed.). 1975 [1935]. *Collectivist Economic Planning. Critical Studies on the Possibilities of Socialism*. Clifton NJ: A. M. Kelly.
- 2001 [1944]. *The Road to Serfdom*. London: Routledge.
- Hegedűs, András. 1990. A bolsevik grand-seigneur tragédiája (The tragedy of the Bolshevik grand-seigneur). *Pesti Hírlap* November 3, 1990, p. 8.
- Heisenberg, Werner. 1967 [1958]. *Fizika és filozófia*. In: Heisenberg, Werner. *Válogatott tanulmányok*. Budapest: Gondolat, pp. 71-197.
- Heller, Farkas. 1988. *Közgazdaságtan* (Economics). Vol.s 1-2. 5th ed. Budapest: Közgazdasági és Jogi Könyvkiadó.
- Hicks, John R. 1937. Mr. Keynes and the Classics: A Suggested Interpretation. *Econometrica* 5 (2), pp. 147-59.
- 2001 [1939]. *Value and Capital. An Inquiry into Some Fundamental Principles of Economic Theory*. New York: Oxford University Press.
- Híd-csoport 1990. Híd a közeli jövőbe (Bridge to the near future). *Közgazdasági Szemle* 37 (4), pp. 442-58.
- Hirschman, Albert O. 1988 [1958]. *The Strategy of Economic Development*. Boulder: Westview Press.
1970. *Exit, Voice, and Loyalty*. Cambridge MA: Harvard University Press.
- Hoffman, David E. 2002. *The Oligarchs. Wealth and Power in the New Russia*. New York: Public Affairs.

- Press.
- Devons, Ely. 1959. A Study in Central Planning. Evidence from Inside. *The Guardian* October 22, 1959, pp. 10-11.
- Dewatripont, Mathias, and Eric S. Maskin. 1995. Credit and Efficiency in Centralized and Decentralized Economies. *Review of Economic Studies* 62 (4), pp. 541-55.
- Djankov, Simeon D. and Peter Murrell. 2002. Enterprise Restructuring in Transition Economies: A Quantitative Survey. *Journal of Economic Literature* 40 (3), pp. 739-92.
- Donáth, Ferenc (head of the editorial board). 1981. *Bibó-emlékkönyv* (In the Memory of Bibó). Vols 1-2. Samisdat ed. Printed edition 1991, edited by Pál Réz. Budapest: Századvég.
- Dorfman, Robert, Paul A. Samuelson, and Robert M. Solow. 1987 [1958]. *Linear Programming and Economic Analysis*. New York: Dover Publications.
- Draaisma, Douwe. 2004. *Why Life Speeds Up When You Get Older: How Memory Shapes Our Past*. Cambridge—New York: Cambridge University Press.
- Durant, Will. 1991 [1926]. *Story of Philosophy*. New York: Simon and Schuster.
- Ericson, Richard E. 1994. Book Review. *Journal of Comparative Economics* 18 (3), pp. 495-97.
- Esterházy, Péter. 2003. Mik vagyunk. 1. könyv. (What are we. Book 1). *Élet és Irodalom*, May 9, 2003, p. 3.
- Esze, Zsuzsa. 1956. Egy kandidátusi értekezés vitája (The debate of defending a candidacy). *Közgazdasági Szemle* 3 (11-12), pp. 1483-95.
- Eucken, Walter. 1951 [1940]. *The Foundations of Economics*. Chicago: University of Chicago Press.
- F. Liska, Tibor. 1998. A Liska-modell (The Liska Model). *Közgazdasági Szemle* 45 (10), pp. 940-53.
- Fejtő, Ferenc. 1957. La Première Autocritique des „Communistes Nationaux“ Hongrois. *France Observateur*, 8, 31 January 1957, p. 6.
- Fóthy, János. 1945. *Horthyliget — A magyar ördögziget* (Horthy-liget — The Hungarian devil's island). Budapest: Müller Károly Könyvkiadóvállalat.
- Frey, Bruno S. 2003. Publishing as Prostitution? Choosing between One's Own Ideas and Academic Success. *Public Choice* 116 (1-2), pp. 205-23.
- Friss, István. 1957. Népgazdaságunk vezetésének néhány gyakorlati és elméleti kérdéséről (Some empirical and theoretical questions of managing the economy). *Népszabadság* October 2, 1957, pp. 3-4.
- Gans, Joshua S. and George B. Shepherd. 1994. How Are the Mighty Fallen: Rejected Articles by Leading Economists. *Journal of Economic Perspectives* 8 (1), pp. 165-79.
- Gács, János and János Köllő (eds.). 1998. *A „túlzott központositástól” az átmenet stratégiájáig: Tanulmányok Kornai Jánosnak* (From “overcentralization” to the strategy of transition. Studies for János Kornai). Budapest: Közgazdasági és Jogi Könyvkiadó.
- Gáll, Ernő. 2003. *Napló* (Diary). Vol. 1. Budapest: Polis Könyvkiadó.
- Gimes, Miklós. 1956. Magyar Szabadság (Hungarian Freedom). *Magyar Szabadság* October 29, 1956, p. 1.
- Goldfeld, Stephen M. and Richard E. Quandt. 1988. Budget Constraints, Bailouts and the

- Blahó, Miklós. 2003. A fő cél a tartós növekedés. Interjú Kornai Jánossal (The main aim is lasting growth. Interview with János Kornai). *Népszabadság* January 25, 2003, pp. 23. and 27.
- Blanchard, Olivier. 1999. An Interview with János Kornai. *Macroeconomic Dynamics* 3 (3), pp. 427–50.
- Bolygó, János. 1966. Mit kutatott professzor Montias Magyarországon? (What did Professor Montias research for in Hungary?) *Magyar Nemzet* July 3, 1966, p. 7.
- Bosworth, Barry P. 1990. Which Way to the Market? *New York Times Book Review* May 27, 1990, p. 17.
- Boulding, Kenneth E. 1966 [1941]. *Economic Analysis*. 4th ed. New York: Harper and Row.
- Böhm-Bawerk, Eugen von. 1975 [1896]. *Karl Marx and the Close of His System*. Clifton NJ: A. M. Kelley.
- Braham, Randolp L. 1981. *The Politics of Genocide: The Holocaust in Hungary*. Vol.s 1–2. New York: Columbia University Press.
- Brámer, Frigyes. 1997 [1972]. Koncentrációs tábor a Rabbiképző épületében (Concentration camp in the rabbi training centre). In *Évkönyv*, edited by Sándor Scheiber. Budapest: Magyar Izraeliták Országos Képviselőlete, pp. 219–28.
- Bródy, András. 1956. A hóvégi hajrá és gazdasági mechanizmusunk (End of month rush and our economic mechanism). *Közgazdasági Szemle* 3 (7–8), pp. 870–83.
1970. *Proportions, Prices, and Planning: A Mathematical Restatement of the Labor Theory of Value*. Budapest: Akadémiai Kiadó.
- Camus, Albert. 1991 [1948]. *The Plague*. Translated by Stuart Gilbert (1948). New York: Vintage International.
- Carlin, Wendy, Steven Fries, Mark E. Schaffer, and Paul Seabright. 2001. Competition and Enterprise Performance in Transition Economies: Evidence from a Cross-Country Survey. *EBRD Working Paper* Nr. 62. London: EBRD.
- Chikán, Attila. (ed.) 1989. *Készletek, ciklusok, gazdaságirányítás. A magyar gazdaság készletalakulása és befolyásoló tényezői, 1960–1986* (Stocks, cycles, economic management. The position of the Hungarian economy's stocks and the factors influencing it, 1960–1986). Budapest: Közgazdasági és Jogi Könyvkiadó.
2004. A hiány szerepe az átmenet szellemi előkészítésében (The role of Shortage Economy in the intellectual preparation for the change of system). *Magyar Tudomány* 49 (7), pp. 698–707.
- Coles, Peter. 1999. *Einstein and the Total Eclipse*. Cambridge: Icon Books.
- Csoóri, Sándor. 1990. Nappali hold. II. rész (Daytime Moon, Part 2). *Hírel* 3 (18), September 5, p. 5.
- Dahl, Robert A. 1979 [1971]. *Polyarchy*. New Haven—London: Yale University Press.
- Debreu, Gerard. 1965 [1959]. *Theory of Value. An Axiomatic Analysis of Economic Equilibrium*. New York: Wiley J.
- Denton, Nicholas. 1990. On the Brink of Transformation. *Financial Times* September 17, 1990, p. II.
- Deutscher, Isaac. 1968 [1949]. *Stalin: A Political Biography*. Oxford: Oxford University

- Kornai, János and John McHale. 2000. Is post-communist health spending unusual? A comparison with established market economies. *The Economics of Transition* 8 (2), pp. 369-99.
- Kornai, János and Susan Rose-Ackerman (eds.). 2004a. *Building a Trustworthy State in Post-Socialist Transition*. New York: Palgrave Macmillan.
- Kornai, János, Bo Rothstein, and Susan Rose-Ackerman (eds.). 2004b. *Creating Social Trust in Post-Socialist Transition*. New York: Palgrave Macmillan.
- Kornai, János and Jörgen W. Weibull. 1983. Paternalism, Buyers' and Sellers' Market. *Mathematical Social Sciences* 6 (2), pp. 153-69.

B 他の著者の著作 ([] は初版出版年)

- Aczél, Tamás and Tibor Méray. 1960. *The Revolt of the Mind. A Case History of Intellectual Resistance behind the Iron Curtain*. New York: Praeger.
- Ady, Endre 2004. *Ady Endre összes versei* (The Complete Poems of Endre Ady). Budapest: Osiris.
- Aghion, Philippe and Peter Howitt (eds.). 1998. *Endogenous Growth Theory*. Cambridge MA: MIT Press.
- Akerlof, George A. 1970. The Market for "Lemons." Quality Uncertainty and the Market Mechanism. *Quarterly Journal of Economics* 84 (3), pp. 488-500.
- Antal, László. 1982. Fejlődés kitérővel — A magyar gazdasági mechanizmus a 70-es években (Development with a detour. The Hungarian economic mechanism in the 1970s). *Gazdaság* 14 (2), pp. 28-56.
- Arrow, Kenneth J. 1951. Alternative Approaches to the Theory of Choice in Risk-Taking Situations. *Econometrica* 19 (4), pp. 404-37.
- (ed.). 1971. *Selected Readings in Economic Theory from Econometrica*. Cambridge MA: MIT Press.
- 1973a. Rawls's Principle of Just Saving. *Scandinavian Journal of Economics* 75 (4), pp. 323-35.
- 1973b [1963]. *Social Choice and Individual Values*. 2nd ed. New Haven: Yale University Press.
1974. General Economic Equilibrium: Purpose, Analytic Techniques, Collective Choice. *American Economic Review* 64 (3), pp. 253-72.
- Arrow, Kenneth J., Samuel Karlin, and Herbert E. Scarf. 1958. *Studies in the Mathematical Theory of Inventory and Production*. Stanford: Stanford University Press.
- Babits, Mihály. 1998 [1936]. *Az európai irodalom története* (The History of European Literature). Budapest: Merényi.
- Baráth, Magdolna. 1999. Az MDP vezetése és a rehabilitáció (The leadership of the MDP and the rehabilitation). *Múltunk* 44 (4), pp. 40-97.
- Barro, Robert J. and Herschel I. Grossman. 1971. A General Disequilibrium Model of Income and Employment. *American Economic Review* 61 (1), pp. 82-93.
- Bergson, Abram. 1948. Socialist Economics. In *A Survey of Contemporary Economics*, edited by Howard S. Ellis. Philadelphia: Blakiston, pp. 412-48.

- Bognár, Géza, Róbert Gál, and János Kornai. 2000. Hálapénz a magyar egészségügyben (Gratuity Money in the Hungarian Healthcare System). *Közgazdasági Szemle* 47 (4), pp. 293–320.
- Csontos, László, János Kornai, and István György Tóth. 1996. Adótudatosság, fiskális illúziók és a jóléti rendszer reformja: egy empirikus vizsgálat első eredményei (Tax Awareness, Fiscal Illusions and Reform of the Welfare System: Initial Results of an Empirical Survey). In *Társadalmi Riport*, edited by Rudolf Andorka, Tamás Kolosi, and György Vukovich. Budapest: TÁRKI, pp. 238–71.
1998. Tax Awareness and Reform of the Welfare State: Hungarian Survey Results. *Economics of Transition* 6 (2), pp. 287–312.
- Kornai, János, Zsuzsa Dániel, Anna Jónás, and Béla Martos. 1971. Plan Sounding. *Economics of Planning* 11 (1–2), pp. 31–58.
- Kornai, János, and Karen Eggleston. 2001. *Welfare, Choice and Solidarity in Transition: Reforming the Health Sector in Eastern Europe*. Cambridge UK: Cambridge University Press.
2004. *Egyéni választás és szolidaritás. Az egészségügy intézményi mechanizmusának reformja Kelet-Európában* (Welfare, choice and solidarity in transition: Reforming the health sector in Eastern Europe). Budapest: Nemzeti Tankönyvkiadó.
- Kornai, János, János Kovács, and Ádám Schmidt. 1969. *Észrevételek Intézetünk munkájához: Munkastílus, irányítás, nevelés, szervezet* (Comments on the work of our institute: Working style, administration, education, and organization). Mimeographed. Budapest: MTA Közgazdaságtudományi Intézet.
- Kornai, János and Tamás Lipták. 1959. *A nyereségérdekeltség matematikai vizsgálata* (The mathematical analysis of profit incentives). Mimeographed. Budapest: Közgazdasági és Jogi Könyvkiadó.
- 1962a. A Mathematical Investigation of Some Economic Effects of Profit Sharing in Socialist Firms. *Econometrica* 30 (1), pp. 140–61.
- 1962b. Kétszintű tervezés: Játékelméleti modell és iteratív számítási eljárás népgazdasági távlati tervezési feladatok megoldására (Two-Level Planning: A Game-Theoretical Model and Iterative Computing Procedure for Solving Long-Term Planning Problems of the National Economy). *MTA Matematikai Kutató Intézetének Közleményei* 7/B (4), pp. 577–621.
- 1971 [1965]. Two-Level Planning. In *Selected Readings in Economic Theory from Econometrica*, edited by Kenneth J. Arrow. Cambridge MA—London: MIT Press, pp. 412–40.
- Kornai, János and Béla Martos. 1973. Autonomous Control of the Economic System. *Econometrica* 41 (3), pp. 509–28.
- (eds.). 1981. *Non-Price Control*. Amsterdam: North-Holland.
- Kornai, János, Eric S. Maskin, and Gérard Roland. 2003. Understanding the Soft Budget Constraint. *Journal of Economic Literature* 41 (4), pp. 1095–136.
- Kornai, János and Ágnes Matits. 1987. *A vállalatok nyereségének bürokratikus újraelosztása* (The Bureaucratic Redistribution of Firm's Profit). Budapest: Közgazdasági és Jogi Könyvkiadó.

- Oxford: Princeton University Press—Oxford University Press.
- 1992d. Visszaesés, veszteglés vagy fellendülés (Recession, Idling or Prosperity). *Magyar Hírlap* December 24, 1992, pp. 12-3.
- 1993a. Market Socialism Revisited. In *The Tanner Lectures on Human Values*, edited by Grethe B. Peterson. Salt Lake City: University of Utah Press, pp. 3-41.
- 1993b. The Evolution of Financial Discipline under the Postsocialist System. *Kyklos* 46 (3), pp. 315-36.
- 1994a. A legfontosabb: A tartós növekedés (Lasting Growth as the Top Priority). (series of 5 articles) *Népszabadság* August 29, p. 11.; August 30, p. 11.; August 31, p. 11.; September 1, p. 11.; September 2, p. 11.
- 1994b [1957]. *Overcentralization in Economic Administration*. Oxford: Oxford University Press.
- 1994c. Péter György, a reformközgazdász (György Péter, the Reform Economist). In *Egy reformközgazdász emlékére: Péter György, 1903-1969*, edited by János Árvay and András Hegedűs B. Budapest: Cserépfalvi Könyvkiadó—T-Twins Kiadó, pp. 75-89.
1995. *Highway and Byways. Studies on Socialist Reform and Postsocialist Transition*. Cambridge MA: MIT Press.
- 1997a. Adjustment without Recession: A Case Study of Hungarian Stabilization. In *Lessons from the Economic Transition. Central and Eastern Europe in the 1990s*, edited by Salvatore Zecchini. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, OECD, pp. 123-52.
- 1997b [1994]. Lasting Growth as the Top Priority: Macroeconomic Tensions and Government Economic Policy in Hungary. In *Economic Reforms, Liberalization and Structural Change: India and Hungary*, edited by R. R. Sharma and Imre Levai. New Delhi: Gyan Publishing House.
- 1997c. *Struggle and Hope. Essays on Stabilization and Reform in a Post-Socialist Economy*. Chaltenham UK: Edward Elgar.
- 1998a. From Socialism to Capitalism. What is Meant by the “Change of System”? London: Centre for Post-Collectivist Studies.
- 1998b. *Az egészségügy reformjáról* (On the reform of the Health System). Budapest: Közgazdasági és Jogi Könyvkiadó.
- 2000a. Hidden in an Envelope: Gratuity Payments to Medical Doctors in Hungary. In *The Paradoxes of Unintended Consequences*, edited by Lord Dahrendorf and Yehuda Elkana. Budapest: CEU Press.
- 2000b. What the Change of the System from Socialism to Capitalism Does and Does Not Mean. *Journal of Economic Perspectives* 14 (1), pp. 27-42.
2001. Ten Years After the Road to a Free Economy: The Author’s Self Evaluation. In *Annual Bank Conference on Development Economics 2000*, edited by Boris Pleskovich and Nicholas Stern. Washington DC: The World Bank, pp. 49-66.
2004. *What Can Countries Embarking on Post-Socialist Transformation Learn from the Experiences So Far?* Cuba Transition Project. Institute for Cuban and Cuban-American Studies, University of Miami.

- Academy of Sciences.
1972. *Rush versus Harmonic Growth*. Amsterdam: North-Holland.
1974. *Az adaptáció csikorgó gépezete* (The Creaking Mechanism of Adaptation). Mimeographed. Budapest: MTA Közgazdaságtudományi Intézet.
- 1975 [1965]. *Mathematical Planning of Structural Decisions*. With contributions by Tamás Lipták and Péter Wellisch. 2. enl. ed. Amsterdam—Budapest: North—Holland—Akadémiai Kiadó.
1978. John Michael Montias: The Structure of Economic Systems. *Journal of Comparative Economics* 2 (2), pp. 277-92.
1979. Resource-Constrained Versus Demand-Constrained Systems. *Econometrica* 47 (4), pp. 801-19.
1980. *Economics of Shortage*. Amsterdam: North-Holland.
1982. Comments on Tibor Liska's Concept of Entrepreneurship. *Acta Oeconomica* 28 (3-4), pp. 455-60.
- 1983a. Comments on the Present State and Prospects of the Hungarian Economic Reform. *Journal of Comparative Economics* 7 (3), pp. 225-52.
- 1983b. The Health of Nations: Reflections on the Analogy between the Medical Sciences and Economics. *Kyklos* 36 (2), pp. 191-212.
1984. Bureaucratic and Market Coordination. *Osteuropa Wirtschaft* 29 (4), pp. 306-19.
- 1986a. *Contradictions and Dilemmas*. Cambridge MA: MIT Press.
- 1986b [1980]. Efficiency and the Principles of Socialist Ethics. In *Contradictions and Dilemmas*. Cambridge MA—London: MIT Press, pp. 124-38.
- 1986c. The Hungarian Reform Process: Visions, Hopes and Reality. *Journal of Economic Literature* 24 (4), pp. 1687-737.
- 1986d. The Soft Budget Constraint. *Kyklos* 39 (1), pp. 3-30.
- 1988a. Individual Freedom and the Reform of the Socialist Economy. *European Economic Review* 32 (2-3), pp. 233-67.
- 1988b. Report from the President to the Members of the European Economic Association. *European Economic Review* 32 (2-3), pp. 737-39.
1989. *Indulatos röpirat a gazdasági átmenet ügyében* (Passionate Pamphlet in the Cause of Economic Transformation). Budapest: HVG Kiadó.
- 1990a [1957]. *A gazdasági vezetés túlzott központosítása* (Overcentralization of Economic Management). Budapest: Közgazdasági és Jogi Könyvkiadó.
- 1990b. Kiegészítések a "Röpirathoz" (Completions to the "Pamphlet"). *Közgazdasági Szemle* 37 (7-8), pp. 769-93.
- 1990c. *The Road to a Free Economy. Shifting from a Socialist System: The Example of Hungary*. New York: W. W. Norton.
- 1991 [1971]. *Anti-Equilibrium*. 3rd ed. Amsterdam: North-Holland.
- 1992a. The Postsocialist Transition and the State: Reflections in the Light of Hungarian Fiscal Problems. *American Economic Review* 82 (2), pp. 1-20.
- 1992b. The Principles of Privatization in Eastern Europe. *De Economist* 142 (2), pp. 153-76.
- 1992c. The Socialist System. *The Political Economy of Communism*. Princeton NJ—

参考文献

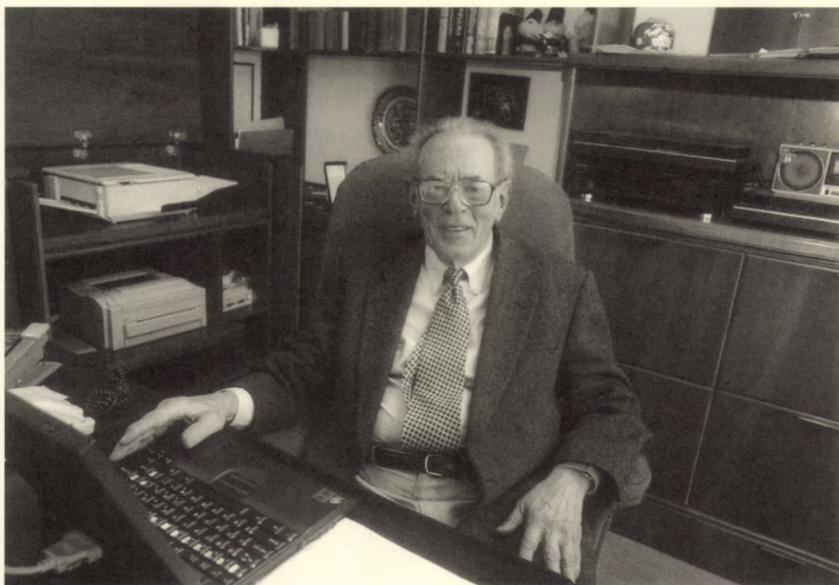
A コルナイ・ヤーノシュの著作

- Kornai, János. 1948. Marx Tőké-je magyarul (Marx's *Capital* in Hungarian). *Társadalmi Szemle* 3 (8-9), pp. 615-9.
- 1951a. A megnövekedett feladatok terve (Plan for increased tasks). *Szabad Nép* January 9, 1951, p. 1.
- 1951b. A munkaidő jobb kihasználásáért (For the better utilization of working hours). *Szabad Nép* July 4, 1951, p. 1.
- 1951c. A takarékoság — a munkaverseny egyik központi feladata (Thrift — one of the central tasks of work contest). *Szabad Nép* March 18, 1951, p. 1.
- 1951d. Kövessük a csepeli példát (Let's follow the example of Csepel). *Szabad Nép* April 7, 1951, p. 5.
- 1954a. A Központi Vezetőség iránymutatásával tovább a júniusi úton (Further on the June road with the direction of the Central Committee). *Szabad Nép* October 11, 1954, p. 3.
- 1954b. A villamosenergia kérdése (The question of the electric power). *Szabad Nép* February 11, 1954, p. 1.
- 1954c. „Egy évtized” Nagy Imre elvtárs válogatott beszédei és frásai (“One decade”. The selected speeches and writings of Comrade Imre Nagy) *Szabad Nép* October 6, 1954, pp. 2-3.
1956. Gyökerestül irtsuk ki a bürokráciát (Uproot democracy once and for all). *Szabad Nép* October 14, 1956, pp. 3-4.
1958. Kell-e korrigálni a nyereségrészesedést? (Should the practice of profit sharing be corrected?) *Közgazdasági Szemle*, 5 (7), pp. 720-34.
1959. „Mennyiségi szemlélet” és „gazdaságossági szemlélet” (The “Quantitative Outlook” and the “Economic Outlook”). *Közgazdasági Szemle* 6 (10), pp. 1083-91.
- 1967a. *Anti-Equilibrium. Esszé a gazdasági mechanizmus elméleteiről és a kutatás feladatairól* (Anti-Equilibrium. Essay on the Theory of Economic Mechanism and on the Tasks of Research). Mimeographed. Budapest: MTA Közgazdaságtudományi Intézet.
- 1967b. Mathematical Programming of Long-Term Plans in Hungary. In *Activity Analysis in the Theory of Growth and Planning*, edited by Edmond Malinvaud and M. O. L. Bacharach. London—New York: Macmillan—St. Martin's Press, pp. 211-31.
1968. *Anti-Equilibrium*. Mimeographed. Budapest: Institute of Economics, Hungarian

16



17



16. ハーヴァード大学の歓送パーティに出席したジェフリー・ウィリアムソン（後ろ左）とジェフリー・サックス（後ろ右）。手前はサックス夫人ソニアとエリック・マスキン（2002年）。

18

17. ブダペストの新居の書斎で（2003年）。

13



14



15

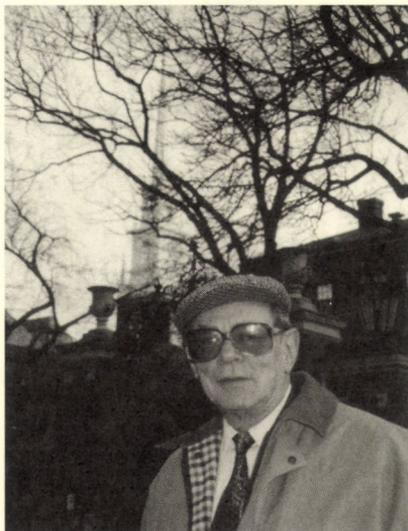


13. コレギウム・ブダペストで開かれた75歳の誕生日パーティ。左が所長のコンドル・イムレ、右が秘書のサポー・カティ。後ろに立っている白髭の紳士が20年間にわたって私の著作の英訳を担当してくれたブライアン・マクレーン（2003年）。

14. ハーヴァードの最終講義を終えて（2002年）。

15. ハーヴァード大学の歓送パーティに出席したガルブレイス夫妻（2002年）。

10



11



12



10. ハーヴァードの尖塔を背景に（1996年）。
11. 一番好きな写真の一つ。フランスの国家勲章を授与されて（1997年）。
12. ブラチスラヴァでスロバキア語の論文集の出版記念会を前にして。右が編集者のイヴァン・ミクローシュで、数年後に副首相、大蔵大臣を務めた（1998年）。

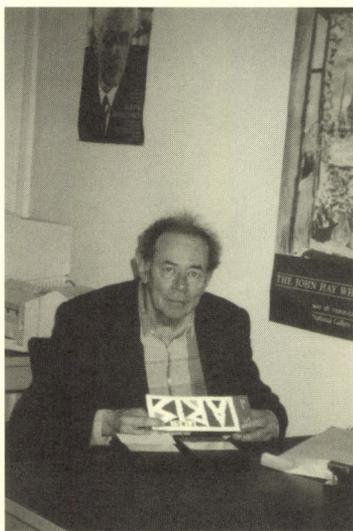
7



8



9



7. 後列中央がケネス・アロー。彼の招聘で1968年にスタンフォード大学へ。前列の右端がアロー夫人のセルマ。中央が妻のジュジャ。もう一組の夫婦は、アラン・マン夫妻。2002年にアメリカを離れる時に、カリフォルニアを訪問した時の一コマ。

8. 妻ジュジャと (1972年)。

9. ハーヴァード大学の研究室で。壁にバルトークのポスター。

3



4



5



6



3. 少年時代のポートレ。
4. 共産党にたいする確信に満ちていた時代 (1948年頃)。
5. リプターク・タマーシュと。共同論文「二水準計画化」から30年の歳月を経て、イギリス・ケンブリッジにて (1992年)。
6. *Econometrica* の編集者として、またケンブリッジ円卓会議の組織者として、私の最初の助言者となったエドモンド・マランヴォーと (2001年)。

付録 写真集

* 訳者・盛田常夫のホームページ (http://morita.tateyama.hu/kornai/photo_01.htm) で、原書に掲載されている写真をすべて見るすることができます。訳書では、一部のみ、掲載しています。

1



2



1. 両親と姉に囲まれて (1930年)。
2. ドイツ帝国学校一年生。最前列右端が筆者で、その隣がケンデ・ピーテル。ピーテルの後ろの女の子が五輪水泳金メダリストのスィーケイ・エーヴァ (1933年)。

ホルティ体制 25
 ホロコースト 13, 326

ま 行

マッカーシー時代 326
 魔法使いの台所 158
 マルクス主義からの決別 77
 マルクス理論 183
 マルクス-レーニン主義 33, 42
 慢性的不足 247, 394

未熟児として誕生した福祉国家 376

三つのK (特権) 44
 民営化の加速化 363
 民族主義 395

夢遊病者 43

命令的計画 159

モンテアス事件 176, 179

や 行

矢十字党 16, 17

ユダヤ人 4, 24, 326, 396-397
 ——アイデンティティ 27
 ——問題 26, 397

ヨーロッパ経済学会 327
 予算制約 263
 ——のハード化 361, 384

ら 行

ラーコシ時代 326
 ——のテロ 42
 ライク・コレギウム 216, 253, 322
 ラチェット効果 88
 楽観主義 397-398
 ラディカルな経済学者 229
 ランゲ・モデル 146, 292
 ランゲ-ハイエク論争 126
 ランゲ-マランヴォー・モデル 146, 156

利益の相反 313
 リベルトリアン世界観 311
 リューチェイ・パール案件 118
 倫理原則 378

レオンティエフ・モデル 143

労働キャンプ 12
 ロシア研究センター 402
 ロシア兵 26
 ロンドン経済大学 (LSE, London School
 of Economics) 162, 165

わ 行

ワルラス・モデル 184, 186, 188
 ワルラス-アロー-ドブリュー・モデル
 185, 187-189, 199
 ワルラス-アロー-ドブリュー理論 194
 ワルラス均衡 247

課報機関 168
 課報部員 167, 170
 ティンバーゲン記念講演 358
 デヴァトリボン-マスキン・モデル 270,
 272
 テニユア 301, 404
 ドイツ帝国学校 8
 動的均衡概念 196
 投入財在庫 255
 投入産出分析 143

な 行

ナードル通り 110
 ナイーヴな改革者 92, 206, 281
 ナイーヴな実証主義 84
 ナジ・イムレ広場 106
 ナジ・イムレ復党 93
 二水準計画 145-146
 二水準計画化アルゴリズム 147
 二水準計画化モデル 186-187
 認知的不協和
 —の低減 26, 360
 —理論 50
 農村研究 83
 ノーベル経済学賞 109, 163, 181, 183, 192,
 224-225, 256, 298, 305, 329, 402
 ノルム 248
 —による制御 235

は 行

ハードな予算制約 264, 266
 配給券 361
 博士候補 (candidate) 70
 パラダイム 341
 パレート最適解 131
 パロー-グロスマン・モデル 254
 ハンガリー共産党 22

半転換 373
 反復決定 190
 反復不能 191
 反ユダヤ主義 396
 反ユダヤ主義者 397
 非価格のシグナル 234
 比較可能な決定 190-191
 比較経済体制論 343
 比較不能な決定 190-191
 悲観主義 397
 非対称性 194, 231
 非対称的情報理論 298
 非反復決定 190
 秘密警察 167, 169, 176

不可能性定理 150
 不完全競争理論 164
 不均衡成長理論 224
 不均衡モデル 254
 福祉国家の危機 377
 不足 89, 247
 —の強度 247, 256
 —の再生産 248
 —の存在 248
 不足経済 240, 246-248, 280
 不足現象 246
 不足指標 256
 プライステイカー (price-taker) 231
 プライスメーカー (price-maker) 231
 プラハの春 345
 フランス革命 346
 プリンストン高等研究所 297, 399
 分解アルゴリズム 144

ペトウーフィ・サークル 97
 ベルリンの壁崩壊 352
 偏狭 (辺境) 主義 320
 星の宿 15
 ポスト社会主義 398, 403
 —国 387
 ポピュリスト 376

産出財在庫 255
 強いられた成長 224
 刺激誘因 87,136,141,185
 自己検閲 249,251,260,267,340
 指示的計画 159
 自主管理 61,278
 市場社会主義 100,146,285,292
 市場調整 291
 システム・パラダイム 341
 実証的アプローチ 342,390,394
 『資本論』(マルクス) 30,245
 社会科学院 329
 社会主義体制 342
 —の崩壊 351
 社会主義倫理 288
 10月革命 98
 集計指標 255
 修正主義 107
 自由な人民 (Szabad Nép) 39,103
 「自由な人民」紙編集局の反乱 66
 需要制約 226
 少数民族 396
 ショック療法 362,365-366
 ジョルシュコチ通り 105,119,121-122,
 131
 自立的制御 234,235
 指令経済 278
 新経済メカニズム 205,278,280,292
 新古典派 189,197,200
 —経済学 143
 —モデル 190-191
 —理論 183-184,195
 —理論批判 181
 新時代 56
 垂直的関係 89
 水平的関係 89
 数学的結晶 197
 数学的手法 136
 スターリン主義的共産党 227
 スターリンの死 56
 スターリン批判報告 94

スタンフォード大学 181,307
 スパイ排除機関 171
 制御の幻想 279
 清算の嵐 65,94
 政治局 218,219
 正常状態 247
 節約的 343
 1956年のトラウマ 211
 1968年改革 280
 線型計画法 142,156,183
 線型計画モデル 142
 選好順序 190-191
 船上会議 331
 漸進主義 361,366
 相対性理論 351
 相対的過剰生産 89
 ソフトな予算制約 248,263-264,266,269-
 270
 ソフトな予算制約シンドローム 132
 ソ連科学アカデミー 221
 ソ連学派 151
 ソ連軍 26
 た 行
 大学の構成 300
 待機時間(行列) 234
 第三の道 360
 体制概念 390
 体制転換 250,278,295,390-394,398
 —のユーフォリア 366
 タナー記念講演 360
 中央計画化 159
 中央計画当局 144
 中央統計局 99
 超過供給 254
 超過需要 254
 調整・安定化プログラム 374,376
 調整プログラム 375
 調整メカニズム 390

- 過渡期(移行)論 404
 完全計画化モデル 147
 カントロヴィッチ学派 196
 官僚的調整 291

 黄色の星(リボン) 14
 機能力 234-235
 規範的アプローチ 342, 390, 394
 吸引 194
 急進行動主義 320
 供給制約 227
 共産主義体制 342
 共産党へ同化するプロセス 23
 強制代替 247, 255
 競争的均衡 194
 共同選択理論 348
 行列待機 247
 許容範囲 235
 均衡概念 193
 均衡状態 185

 クーポン 361
 ——(ヴァウチャー)民営化 361
 グヤーシュ共産主義 366, 376
 グンナー・ミュルダール記念講演 358

 計画吸引 225
 計画経済投機 88
 計画交渉 88
 計画庁 → 国家計画庁
 経済改革 206, 295
 経済学研究所 204
 経済学の主流派 237
 『経済管理の過度集権化』(『過度集権化』)
 85-86, 106
 経済研究所(ハンガリー科学アカデミー)
 70
 経済実績 342
 ゲーム理論 145, 270
 研究計画 197, 200
 研究戦略 200
 現存する社会主義 343

 校閲(者) 251-252
 工場民主主義 100
 厚生関数 149-150
 行動経済学 192
 効用関数 190
 合理性 190
 効率性 288
 合理的意思決定者 189
 合理的選択モデル 134, 192
 合理的な愚人 190
 コールズ委員会 182
 国際経済学連合(IEA, International
 Economic Association) 162, 256,
 409
 国際計量経済学会(Econometric Society)
 173, 327
 国民経済計画 144
 国民経済計算 225
 国連開発計画委員会 327
 ゴスプラン 159
 国家計画庁 149, 152, 156, 159
 国庫的楽観主義 397
 古典的社会主義 344
 コミットメント 270
 コルヴィン出版社 118
 コルナイ・グループ 208-209, 399
 コルナイ語 272
 コルナイ効果 269
 コルナイ爆弾 357
 コルナイ-リプターク・モデル 146, 152,
 156, 185, 188
 コレギウム, ブダペスト 300, 398, 400

 さ 行

 在庫シグナル 233
 再生産表式 143, 196
 最適計画 151
 最適経済制度 288
 最適システム 289
 最適状態 185, 188
 雑草長屋 73
 サミズグード 253

事項索引

欧字

- American Economic Review* 271-272, 276
due process 170
Econometrica 141, 145, 253, 275
MADISZ 24, 29, 38
Magyar Nemzet 102
Magyar Szabadság 103
Népszabadság 105
Október 23 119
Politically correct 312
Szabad Nép → 「自由な人民」
WIDER (国連大学開発経済世界研究所)
336-337, 371

あ行

- アカデミー会員 217-218
アカデミー準会員 217
アカデミー正会員 217
圧力 194
アメリカ科学アカデミー 218
アロードブリュー・モデル 187
アロードブリュー理論 182
安定化手術 366

イギリス・ケンブリッジ 163
一般均衡モデル 147
一般均衡理論 148, 182, 184, 195
——批判 181
イデアール 188
委任の相反 313
依頼人と代理人 141
医療改革 377-378

ヴァーツラフ広場 371

- ヴァウチャー 361
ウォーターゲート事件 232, 395
売り手 247-248
——市場 193-194

エステルハーズィ家 201
エリー・レクチャー 358
円卓会議 352

オッカムの剃刀 343
温情(父子)主義 265, 267

か行

- カーダール
——・レジーム 376
——時代 206, 282
——体制 121, 168, 211, 215, 218
——— ミュニッヒ政府 112
カール・マルクス経済大学 215
改革懐疑者 284
改革共産主義 56
改革派経済学者 284-285, 287, 359
買い手 247-248
——市場 193-194
カオス理論 352
科学アカデミー 204, 217
——会員 220-221
科学理論 166, 190, 197
科学理論的誤り 189
科学理論的出发点 187
影の価格 145
カタストロフィーシグナル 234
活動家 283
活動分析 (activity analysis) 162
過渡期 344

ワ 行

ワルラス, レオン 148, 184, 274

マックヘイル, ジョン 377-378
 マッケンジー, ライオネル 163
 マティッチ, アーグネシュ 268-269, 327
 マトルチ, ジョルジュ 375
 マヨール, イヴァーン 209
 マランヴォー, エドモンド 141, 146, 162, 337
 マリーテル, パール 106
 マルクス 245, 341, 344-345, 396
 マルクス-エンゲルス 196
 マルトシュ, ベーラ 160, 208, 233
 マン, アラン 231, 307
 マン, トーマス 33

ミクサート, カールマーン 202
 ミハーイ, ピーテル 209

ムニョー 5

メーライ, ティボール 64-65

毛沢東 408

盛田常夫 332

モルナール, エンドレ 107, 112

モンティアス, ジョン・マイケル 176, 179

ヤ行

ヤースィ, オスカール 318

ヤサイ, アントニー・ドゥ 109

ヤヤヴァルディナ, ラル 336

ヨージェフ, アッティラ 208, 316

ラ行

ラーコシ, マーチャーシュ 40, 55, 63, 66, 396

ラーズロ, アンタル 286

ラードナー, ロイ 163

ラーナー, アッパ 126

ライク, ラースロー 43

ライブソン, デイヴィッド 199

ライル, ヤコブ 19

ラカトシュ, イムレ 166, 197

ラキ, テレィーズ 44, 212

ラキ, ミハーイ 208, 326

ラツコー, マーリア 208, 326

ラバル, フェレンツ 153, 379

ラヴィーニュ, マリー 332

ラペム, ハーヴェイ 266

ランゲ, オスカー 126, 164, 196, 292

リシュカ, ティボール 285, 286

リップ, ゲーザ 107

リトヴァーン, ジョルジュ 401

リプターク, タマーシュ 137, 145, 160, 328

リムレル, ユーディット 207

リューチェイ, パール 46, 59, 64-65, 102, 326

リリー 6, 99

リンドプロム 299

リンドベック, アーサー 229, 243, 328

ルーズベルト, ラエ 324

ルカーチ, ジョルジュ 32

レイオンフーヴッド, アクセル 298

レーヴァイ, ヨージェフ 34, 40, 60, 107

レーニィ, アルフレッド 137, 139

レーニン 342, 352

レオンティエフ 402

レベニス, ヴォルフ 399

レンジェル, ラースロー 289-290

ローズ・アッカーマン, スーザン 399

ロールズ 274, 299

ロシヨフスキー, ヘンリー 301-302

ロシヨンツィ, ゲーザ 57, 101

ロスチャイルド, エンマ 324

ロセ, J. パークリー Jr 384

ロセ, マリーナ V 384

ロビンソン, ジョーン 164, 225

ロランド, ジェラルド 263

ハ行

ハーイ, ラースロー 112, 215, 218
 ハーヴィッツ, レオニード 163-164
 バーグソン, アブラム 126, 150, 306
 ハーシュマン, アルバート 224, 298
 パーチカイ, タマーシュ 167, 170, 290-291
 パートル, フランシス (フェレンツ) 324
 ハーン, フランク 163, 187, 202, 225, 328
 ハイエク 127, 341
 ハイゼンベルク, ヴェルナー 196
 バイト, アレクサンダー 329
 ハイドン, フランツ・ヨーゼフ 201
 バウエル, タマーシュ 209, 211, 326
 ハシエク, ヤロスラフ 140
 ハチャトゥロフ, V. R 256
 ハトヴァニイ, ヨージェフ 139
 ハナーク, ピーテル 122, 326, 401
 パパンドレウー, アンドレアス 265
 ハラスティ, シャーンドル 57
 バラッシャ, ベーラ 166
 ハルサーニイ (ハルシャーニイ), ヤーノシユ 166
 ハルダ, アリズ 104, 114
 バルツェロヴィッチ, レスシエク 328
 バルトーク, ベーラ 316, 318, 397
 バロー, タマーシュ 166
 バロー, ロバート, J 254, 311
 ハロッド, ロイ 271

 ピーテリ, ジョルジュ 84, 107, 281
 ピーテル, ジョルジュ 73, 75, 91
 ヒックス, ジョン 109, 256, 274
 ヒットラー 3
 ビボー, イシュトヴァーン 259

 ファルヴェーギ, ライオシュ 252, 282
 ファルカシュ, カティ 326
 フィリップス, A. W 165
 フェイ, ブルーノ 275
 フェイトウー, フェレンツ 120

フェケテ, シャーンドル 64, 76, 115-116, 120, 130, 138
 フェヒール, シャーンドル 121
 フェヒール, ライオシュ 64, 67, 105
 フェルドスタイン, マルティ 312, 378
 フェルナー, ヴィルモシュ (ウィリアム) 166, 317
 フォック, イェヌー 112
 ブランシャール, オリヴィエ 198
 フリードマン, ミルトン 271, 362
 フリッシュ, イシュトヴァーン 40, 62, 72, 93, 105, 108-109, 113, 130, 204-205, 218
 フリッシュ, ラグナー 150, 159, 224
 フルシチョフ, ニキータ 94
 ブルス, ヴォジミエン 281
 ブローディ, アンドラーシュ 73, 137, 143, 252

 ヘゲドゥシュ, アンドラーシュ 74
 ペテ, ピーテル 209
 ヘティーニイ, イシュトヴァーン 149, 380
 ベルリナー, ジョゼフ 110

 ボクロシュ, ライオシュ 374
 ホッホ, ロベルト 72, 111
 ホフマン, デイヴィッド, E 257-258
 ホルツマン, フランク 324
 ホルティ総督 16
 ポルテス, リチャード 254
 ホルン, ジュラ 385
 ホローシュ, エルヴィン 34

 マ行
 マーグリッ, スティーヴ 311, 337
 マクロスキー, ディアドラ 298-299
 マクロスキー, ドン→マクロスキー, ディアドラ
 マスキン, エリック 263, 269, 272, 402, 406
 マダラー, アッティラ 209

スタニスラフ, ヨゼフ 257
 スチュアート, ロバート. C 292
 ズッフ, ジョルジュ 257
 ストーン, リチャード 163,225
 ストリーテン, ポール 224
 スペンサー, マイケル 300
 スミス, アダム 274

セグー, アンドレア 290
 セグヴァーリ, イヴァーン 359
 ゼックハウザー, リチャード 199
 セルプ, アンタル 10
 セン, アマーティア 150,190,299,311,
 324,328,337
 セントアーゴダイ, ヤーノシュ 282

ソルジェニツィン 259
 ソロー, ロバート 142,165,324,374

タ行

ダーニエル, ジュジャ 153,212,324-325,
 334,400,402,407
 ダール 299
 ダイアモンド, ピーター 378
 タデウス, コヴァリーク 332
 タマーシュ・ガシュパール, ミクローシュ
 357
 タルドシュ, マールトン 153,207,291
 ダンツイッグ, ジョージ 183

チェン, インイー 272
 チカーン, アッティラ 216,255,257
 チコシュ・ナジ, ベーラ 99
 チャーキ, チャバ 215
 チャクラヴァルティ, スクハモイ 163,
 241,337

張勳夫 330
 趙紫陽 329
 チョオーリ, シャンドール 396
 チョントシュ, ラースロー 377

ツヴェルスキ, アモシュ 192

デイヴィッド, グラニック 110
 ティンバーゲン, ヤン 150,159,164,224,
 327
 デヴァトリボン, マティアス 270
 デヴォンズ, エリー 162, 165
 デルヴィシュ, ケマール 228
 テルターク, エレミール・ジョルジュ
 290

鄧小平 329
 トゥリスカ, ドゥサン 348-349,363
 ドゥレーズ, ジャック 327,337
 トート, イシュトヴァーン・ジョルジュ
 257,377
 トービン, ジェームズ 182,329
 ドーフマン, ロバート 142,163,324
 ドナート, フェレンツ 98,259
 ドブリュー 182,188,274
 ドライスマ, D 238
 ドローヒ・ジュニア, ヴラジーミル 328

ナ行

ナジ, アンドラーシュ 108,111,113,153,
 163,207,326
 ナジ, イムレ 55,63-64,67,99,106,354-
 355
 ナジ, タマーシュ 52,71,93,401
 ナッシュ, ジョン 161

ニエルシュ, レジュー 205,211,221,282
 ニコルソン, ジャック 366

ネーメット, ラースロー 134,317

ノイマン, ジョン (ヤーノシュ) 161,
 193,298,317
 ノヴォヴァーツキー, シャーンドル 64,
 121
 ノーヴ, アレック 110,166,347
 ノズィック, ロバート 311

- ギアツ, クリフォード 298
 ギアリー, R.C 288
 キージー, ケン 366
 キシュ, ヤーノシュ 380
 ギメシュ, ミクロシュ 8, 39, 53, 60, 64,
 72, 96, 98-99, 103, 106, 118, 354
 クウォント, リハルド (リチャード)
 166, 229, 269
 クープマンズ, タイリング 142, 163-164,
 173, 182, 274
 クーン, トーマス 197, 341
 クズネッツ 402
 クパ, ミハイ 380
 グヤーシュ, エミル 107
 クライン, ローレンス 165
 クラウス, ヴァーツラフ 348-349, 363
 クラウス, タマーシュ 348-349
 グリーン, ジェリー 306
 グリリヒェス, ツヴィ 324
 グレゴリー, ポール. R 292
 グロスマン, ヘルシェル. I 254

 ケアंकロス, アレクサンダー卿 329
 ケインズ, メイナード 226, 274
 ゲーデル 298
 ケストラー 259
 ケネディ, ヤーノシュ 172, 240, 260
 ゲルー, エルヌー 40, 47, 62, 138
 ケルー, ヤーノシュ 209, 402
 ケルテシュ, ガーボル 209
 ケンデ, ピーテル 31, 39-40, 64, 67, 75,
 98, 102, 114, 130-131, 327, 401

 コウォトコ, グジェゴシュ 332
 コウバ, カレル 332
 コヴァーチ, アンドラーシュ 249
 コヴァーチ, マーリア 322
 コヴァーチ, ヤーノシュ 212
 ゴーリキー 124
 コシュート, ライオシュ 318
 ゴスフェルド, イレナ 235

 ザードル, イシュトヴァーン 108
 サイモン, ハーバート 197
 ザウバーマン, アルフレッド 166
 ザスラフスカヤ, タチアナ 328
 サックス, ジェフリー 353, 363, 371, 406
 サボー, イシュトヴァーン 317, 374
 サボー, ユーディット 208
 サマーズ, ラリー 312
 サムエルソン, ポール 125, 142, 271, 305,
 362
 サルトル 134
 サルノ, ジョン 356

 シェパード, ジョージ. B 271
 シェムイェン, アンドラーシュ 360
 シェリング 299
 シク, オタ 281
 シトフスキー, ティポール 164, 166, 231,
 307
 シフ, アンドラーシュ 317
 シモノヴィッチ, アンドラーシュ 160,
 208, 233, 245, 326, 402
 シャーマ, サイモン 346
 シャヴァンス, ベルナル 332
 シュー, チャンガン 336
 周恩来 346
 ジュジャ → ダーニエル, ジュジャ
 シュタツケルベルク 125
 シュペングラー 28
 シュミット, アーダム 212
 シュラーニイ, ジョルジュ 385
 シュルツマン, ロバート 324
 シュンペーター 196, 274, 310, 341
 ショオシュ・カーロイ, アッティラ 209
 ショーヨム, ラースロー 375
 ジョーンズ, レロイ 329
 ジョルゲンゾン, デイル 324, 406

 スヴェンソン, ラルシュ 266
 スターリン 23, 30, 55, 396

人名索引

ア行

アーツェル, ジョルジュ 282
 アインシュタイン, アルベルト 297, 351
 アウグスティノヴィッチ, マーリア 92,
 143
 青木昌彦 307
 アカロフ, ジョージ 298
 アギオン, フィリップ 274
 アディ, エンドレ 29
 アラーニィ, ヤーノシュ 316
 アルペール, ミッシェル 329
 アレ, モーリス 163
 アロー, ケネス 145, 150, 181-182, 188,
 197, 231, 274, 307

 イェルギン, ダニエル 257
 イザンダー, ベングト-クリスター 266,
 337

 ヴァーレンベルグ, ラウル 18
 ヴァイブル, ユルゲン 160, 245, 269
 ヴァシュ, ゾルターン 98
 ヴァシリウ, ヨルゴス 120
 ヴァルガ, イシュトヴァーン 93, 112
 ヴィグナー (ウィグナー), イェヌー 317
 ウィリアムズ, オリヴァー 299
 ウォルツァー, マイケル 298

 エセ, ジュジャ 107
 エグゲストン, カレン 378
 エッシャー, M.C 51
 エニエディ, イルディコ 317
 エミンゲル, オトマー 329
 エリクソン, リチャード 347

エリソン, グレン 277
 エルドゥーシュ, ピーテル 72, 81, 111,
 237
 エルマン, マイケル 165
 エンゲルス 345

オイケン 125
 オーウェル, ジョージ 115, 259
 オッペンハイマー 298
 オベルソフスキ, ジュラ 102
 オルバン, ヴィクトル 381, 385

カ行

ガーシェンクローン 402
 カーダール, ヤーノシュ 55, 57, 220, 326,
 396
 ガーチ, ヤーノシュ 208, 326
 カーネマン, ダニエル 192
 カール, ウィルドン 274
 ガール, エルヌー 43
 カーロイ, ミハーイ 318
 ガイダール, イェゴール 257
 カシュ, ヤーノシュ 253
 カツェリ, ルカ 228
 カピターニィ, ジュジャ 208, 326
 カミュ, アルベルト 397
 カラゲドフ, R.G 253
 カリンティ, フェレンツ 259, 316, 384
 カルデリ 61
 カルドア, ミクローシュ(カルドア卿) 2,
 164, 166, 225
 ガルブレイス 311, 313
 ガンツ, ヨシュア. S 271
 カントロヴィッチ, レオニード 90, 151,
 176, 183, 256

●著者紹介

コルナイ・ヤーノシュ (Kornai János)

1928年ブダペスト生まれ。1948年より1954年まで共産党機関紙記者。以後、科学アカデミー経済研究所研究員。1984年よりハーヴァード大学教授。現在、ハンガリー科学アカデミー会員、ハーヴァード大学名誉教授、ブダペスト高等研究所名誉研究員。主著に『反均衡の経済学』(1971年)、『不足の経済学』(1980年)、『社会主義システム』(1992年)など。

●訳者紹介

盛田常夫 (もりた・つねお)

1947年富山県生まれ。国際基督教大学教養学部卒業、一橋大学大学院経済学研究科博士課程修了。法政大学教授、野村総合研究所顧問などを経て、現在、ハンガリー立山研究所社長。主著に『ハンガリー改革史』(日本評論社、1991年)、『体制転換の経済学』(新世社、1994年)など。訳書に、コルナイ『反均衡と不足の経済学』(共編訳、日本評論社、1983年)、同『不足の政治経済学』(編訳、岩波書店、1984年)、同『経済改革の可能性』(編訳、岩波書店、1986年)、マルクス・ジョルジュ『異星人伝説：20世紀を創ったハンガリー人』(編訳、日本評論社、2001年)がある。

コルナイ・ヤーノシュ自伝

思索する力を得て

2006年6月20日 第1版第1刷発行

2006年8月25日 第1版第2刷発行

著者——コルナイ・ヤーノシュ

訳者——盛田常夫

発行者——林 克行

発行所——株式会社日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4

電話 03-3987-8621 (販売), 8595 (編集), 振替 00100-3-16

印刷——精文堂印刷株式会社

製本——牧製本印刷株式会社

装幀——林 健造

検印省略 © Tsuneo Morita 2006

Printed in Japan

ISBN 4-535-55473-0

なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

異星人伝説

20世紀を創ったハンガリー人

マルクス・ジョルジュ [著] 盛田常夫 [編訳]

ハンガリーは20世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。なぜなのか。大きな足跡を残したハンガリー出身の科学者たちの生い立ちからその到達点までを描いた評伝。

目次

第1部 異星人伝説

伝説の誕生／ハリウッドへの軟着陸／異星からの到来／異星人の言葉／時間と空間の交わり／ユダヤとの混交／境界を超えて／未来への予言／世界の救済

第2部 異星人列伝

カルマン、テオドール 流体力学のバイオニア／ヘヴェシ、ジョージ 放射線トレースの発見／スイラード、レオ 平和の科学伝道者／ウィグナー、ユージン 原子炉の設計／テラー、エドワード 水爆の開発／ノイマン、ジョン 二十世紀最高の頭脳／エルデシユ、ポール 放浪の数学者／ランツォシユ、コルネリウス 哲学する物理学者／ケメニイ、ジョン コンピュータ教育の創始者／グローヴ、アンドウリユー INTEL中興の祖／ソロス、ジョージ 現代の錬金術師／ケストラ、アーサー 二十世紀を駆け抜けた夢想家／ハルシャニイ、ジョン 非協力的ゲームの均衡分析／ペーケーシ、ジョージ 聴覚の物理学的解明／バイ、ゾルタン 実験宇宙学の開拓者／セント-ジョルジイ、アルバート ビタミンCの発見／オラー、ジョージ カルボカチオンの化学分析／クルティイ、ニコラス 低温物理学と台所物理学／ガボール、デニス ホログラフィーの開発／セベヘイ、ヴィクター 天体力学のバイオニア

第3部 黄金時代のハンガリー

ハンガリーのギムナジウム／教育の伝統／科学の伝統とエトヴォシユ協会

付録1 ハンガリー出身・関連科学者一覧

付録2 本文に関連する資料



日本評論社

■定価 3045 円 (税込) A 5 判

■ISBN 4-535-78331-4